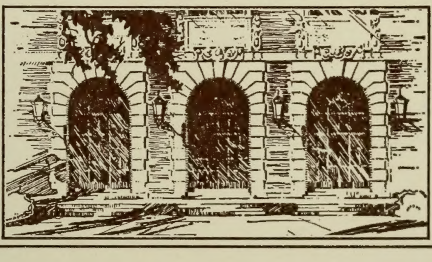
PL
700
.M41
no.4-6
UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 071411745

LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN

PL
700
.M41
no.4-6



明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第四編

緣外緣　蝸牛露伴

落語 媒妁　漣山人

新學士　漁山人

風流新狂言記　眉山人

隅田川の秋　田山花袋

庭のをしへ子　きとゞのゝや主人作

都土産　乙羽菴主人

PL
700
.M41
no.4-6

短篇小説 明治文庫第四編

◉緣外緣

蝸牛露伴

（一）旅に道連の味は知らねど　世は情ある女の事〳〵
但しどこやらに怖い所あり難い所

我元來洒落といふ事を知らず數奇と唱ふる者にもあらで唯ふら〳〵と五尺の殼を負ふ蝸牛の浮れ心止み難く東西南北に這ひまはりて覺束なき角頭の眼に力の及ぶだけの世を見たく、いざゝらば當世江口の君の宿假さず宇治の華族様香煎湯一杯を惜み玉ふとも關はじよ、里遠しいざ露と寐ん草まくらとは一歳陸奥の獨り旅夜更て野末に疲れたる時の吟、それより露伴と戒名して頓て脆くも下枝を落なば、摺附木とありて成佛する大木の蔭小暗き近邊に、何の功をも爲さざる苔の碧みを添へん丈の願ひにて、囈語にはかり滴水とく〳〵試みに浮世そゝがばやと果敢なき僭上是れ無分別なる妄想の置所、我から呆るゝ程定まらぬ魂魄宙宇に彷徨し三十年來、自ら笑ふ一生定力なく行藏多くは業風に吹ると古人の遺されし金句

に、歳の市立つ冬の半夜蝙蝠騒ぐ夏の夕暮などハ膽を冷し骨を焚く感じを起す事もありしが、三日坊主の一時精進、後ハゆつたりのつたりにて、丁度明治二十二年四月の頃ハ、中禪寺の奥、白根が嶽の下湯の湖のほとりの客舎に五目弁べの修業を兼て病痾を養ひ居たりしに有難き温泉の功能、忽ち平愈するや否、丈夫素より存す衝天の氣などといきり出して元來し道を歸るを嫌ひ。御亭主是から先へ行く道ハ無いかと問へば。どうも此處ハ行留りの山の中、見らるゝ通り前ハ前白根奥白根雲の上に頭を出して居る始末、登山ハ夏さへ六かし、其續き横手の方ハ魂精峠と俗に呼ぶ木叢峠、此頂上ハ上野下野兩國の境界山々折り累なりて當方より越る六里の間に暖湯飲むべき家もなし、殊更時候大分違ひて大澤德次良あたりは、野州の名花八汐の眞盛りあれど此近邊はそれもまだ咲かず、況して峠は一面の雪五尺六尺谷間には積り居りて道も碌には知れず、今年になつてから越した人は指の數に足らぬ位、とても遊び半分なぞに行かるべき地にあらず、御客樣是非もなし中禪寺までお戻りあつて足尾とか庚申山とか里近き孫山でも見物致されよとの言葉。おのれ我を都會育ちの柔弱者と侮つたりや、其義ならば旋毛曲りの性根天の邪鬼の意氣地見せつけ呉れんと詰らぬ事に僞勢張り、股引もあき細臑踏みはだけて。其峠何程の事あらん燒飯作れ草鞋買て來よ、少しばかり難義でも同じ道を歸るより面白からんに鼻歌を山の神に聞せて越ん。さて〳〵途方もない事、雪沓ならでハ中々凍ゆべし、强てとならば國境まで案内者傭はるべし、然し名產の肉蓯蓉取つて腎藥にでもせんとの御思召ならば時節惡し、醉興は要らぬ者と昔時よりの敎もあ

るものを。面倒な事愚圖々々せずと我云ふ通りにせよ、案内者は傭ふべし雪沓も買ふべしと罵りて裾其儘にグイと端折り、沓しつかりと穿き締め、身の丈六尺計りの樵夫を案内として心いさましく登りける、四五町ばかり來て見れば成程人は噓つかぬ者一面の雪表面は凍りて下は柔なり、段々と登り行く勾配急になり屢々滑るに少し萎みて、見れば案内者は猪の皮毛の沓はきて鐵雪橇に踏答へ、悠々と歩む憎さ、負じと我も息張りて追付ば其大男ふりかへりて。此通りの雪なれば道も何もある譯でハ無ければ谷を傳はりて行くだけの分、あなた樣若し堪忍強く少時の難澁を忍ばれるなら一層勾配の烈しき代り頂上へ達する近道を行きませうかと尋られ。エーまゝの皮そう仕やうと決斷し、又登る一里あまり樅の木栂の木タモの木ドロの木唐松など生ひ茂りて蔭暗く、此山の本名木叢峠の名は體をあらはして森々と物凄く、梢を渡る風に露はら〳〵と襟首に落ち、顏を撲つ空翠は引く息に伴なつて胸悪し、雪に印せる兎鹿の足痕漸く滅りて、耳に音信し鳥の聲も次第々々に絕え、身は攀ぢ登るの苦しさに汗ばみながら心を掩ひし五慾の塵衣は一枚一枚剝るゝ如く昨日の榮華縱横無盡に神通を逞しくせし第六識魔王は眷屬味方を失ひて薄ら淋しく、何といふ事はなけれど世界よりの落武者となつたる樣に心臆せられて人間老衰の曉五官半死して最期に近よりたらん時此境界に似通ふ者あらば何程なさけなく如何程力弱く如何程賴み少なき者ならん乎とそゞろ悲しく思ふ時岩を透すまで鋭き鳥の聲眞黑の梢より射出されギヨツとして頸を縮むる途端眼にはくら〳〵と湧き亂るゝ唐草樣の者見えしが。是にてお別れ申します此處兩國の境界即

ち頂上あり、是より左り手左り手と谷を傳ひ下らるれば一つの沼あり、其沼の左をまたまた下らるれは片科川の水源是ぞ坂東太郎と後に呼ばるゝそれに傍て行れなば温泉湧き出る小川村といふに着べし、此處より其村までまだ四里餘少しも人家なし、能々氣を注けて迷はぬ樣致されよさらばと案内者の云ふに又一段に淋しさを増し今朝の似非勇氣挫け果て茫然と見下すに曇り空の日の光り力なく常は見ゆると聞し會津の方の山々も雲がくれて見えず、流石に足の爪先佇む間に冷を覺えける。

案内者に別かれて獨り下る覺束なさ、雪沓なれば滑り〳〵薄ら氷に向膕疵つき岩角に頰を擦り雪流に埋められし木の枝に衣を裂き、行けども行けども迷うたりや沼の邊りに出ず、樺の木折りて火を燒き、あたりながら燒飯を取り出して食ふに木屑を嚙む樣にて甘からねど饑を凌ぎたれば色々方角を考へ正して進む、元より時計も持ぬ男なれば時刻分らず頻りと氣をあせる中ほの暗くなつて來たれば、是れ大變なり又々曾て荒山に行き暮したる時の樣になりてハ叶はドと急ぐ程に沼のほとりに來たり、嬉しやと思へば日は冬の沒り易く、雪は最早無けれど沓の底は切れて足は痛し、折ふしプッリと沓の紐きれて悲しやと道の邊に坐りて夫を繕ひ繋がんとするにアッ燈の光り幽に動ぐを見付、嬉しや嬉しやとたどり行けば丸木の掘立柱笹葺の屋根したる小家倘蓄の堅き山櫻の大木の根方に立り、所がらとて時候のかくも變る者ぞと驚かれぬ、萩の垣結ふ丈の事とせずして枝折戸の面倒も嫌へるにや家の横手に幅一間計りの小河流るれば筧して水呼ぶ世話も要らぬと見えたり、此樣にしても世は渡らるゝ者と有り難く倘近く寄て火の

洩る丶戸の際に立ち。中禪寺の湯元より峠越して道に迷ひし者盡く疲れ果殊さら夜にありて難義いたしますが小川村まではまだどれ程の道法でござりますか、且は雪沓を切らして歩み難く困りますに草鞋一足御讓り下さるまいかと云へば。それは〱お氣の毒な事小川まではまう二十町ばかり川に添ふて行かれさへすれば間違なし、お履物をお切らしなされては眞に御難義ならんが生憎草鞋一足もない事恥かしや、然し私しのはき捨の草履にても宜しくば參らせませうと云はアラ不思議なまめかしき女の聲か丶る山中に似合しからず、されど是も獵師か何ぞの娘ならん、唯弱りたるは足の裏痛み惱みて右の小指左りの拇指は生爪まで剝したれば是より二十町到底あるけず、出來る事なら一夜の宿を賴まんと。眞に申し兼たれど小川まで二十町と承はりては疲れたる身の中々に歩み難く、痛み所さへあれば憫然と思し召て一夜の宿りを許したまへ。それは思ひも寄らぬ事、女子許りなればと云ひ乍ら板戸引き開け身體を半分出す女年は二十四五なるべし、後面に燈を負ひて後光さす天女の如く其色の皎さ其眼のぱつちりとしたる、其眉つきの長く柔和なる其口元の小さく締りたる、其髮の今日洗ひたる乎と覺えて結もせず、後に投掛て末の方を引裂きたる白紙にて一寸纏めたる毛のふさ〱としてくねらざる美しさは人にあらずおのれ妖怪かと三足ほど退つて覗へば女も我をつく〱と見て、傷ましやお前樣の風情御足のあちこち怪我なされしか紅き者も見ゆるに御袖も草木に障えられてか、綻び切れ、御顏色もいたく衰へ苦し氣に居らせらる丶に成程是より小川まで僅の道なれど行き惱み玉ふべし、留め難き所なれども世捨人にもあら

ぬ御方に假の宿りに心止むなとも申し難ければ枉て一夜を明させ申すべし、強くお斷絶申すもつらし、いざ爰に御腰かけられよ、御洗足の湯持て參らんと云はれて氣味の惡さ、今さら逃出さんも流石なれば持前のづう〳〵しく腰打掛て。有難しと禮いふ中小桶に熱き湯汲み來りて甲斐〴〵しく洗ひくれんとするを。是は恐れ入り升ナニ自分で濯ぎます。イヱ〳〵御遠慮なしにサア御足をお伸しあそばせと問答する暇に指の股の泥まで奇麗に落て疊の上にあがり丁寧に挨拶すれば、女莞爾と笑ひながら。山中なれば御馳走も出來ねど幸ひ小川村と同じ脈の温泉の背戸の方に湧き居れば一風呂御這入りあつて一日の疲勞をお休めなされ、サア此方へござれ御背中を流しませうか。ハテ狐にでも誑さるゝではないかと內々危ぶみ居る我手を取る樣にして。湯殿へと申しても片庇廂雨露を凌ぐばかり、いぶせけれど湯は天然の靈泉まことに能く暖まりますといふ口上噓らしくなく底まで見え透く清き湯槽大事なかろうと這入れば無類の心持遙に湯元より結構晝間のつらかりしも忘れ悠々と揚つて來るを待ち付て女。御召憎うはござりませうが御着物の綻びを縫ふてあげます間是をと後より引かけて吳れるはぽてつかぬフラチルの浴衣に重ねたる黑出八丈の綿入れ女物なれば丈ありてユキ無く兩手のぬつと出るは可笑けれど親切かたじけなし、餘程ふしぎな取り扱ひどうした運命だろうと怪みながら少し煙にまかれて。ハイハイ是はどうも恐縮。御帶にも岩角の苔が付て居りますれば可笑くとも之をと笑ひながら出すは緋縮緬のしごき。ハイ〳〵と帶にして是も大方藤蔓か知れぬと觀念し座敷へ來て居爐裏の傍に坐る肩へ羽折り吳るゝは八反の鼠小

辨慶のねんねこ。湯覺をなされて若しお風邪でも召ては何處ぞのお方に濟みませぬと味な口きゝ、どん〳〵と柴折くべ自在にかけし鍋の沸き立を取り下して。定めし御空腹でござんしたろう、サア御膳も出來ましたがお氣の毒なは麥飯暖い丈を取り柄に山家の不自由をお許しなされと取り出す蝶足の八寸盛て呉るゝ山獨活の味噌汁香氣椀に溢る、禮云ひながら我は甘く食へば女も。妾も御一所に片付て仕まひましよかと最と無造作に喰ふに膳なく、椀を爐緣に置んとして流石に馴れずやたゆたふを。此膳お用ゐなされと突やれば。そんならおとり膳とやらに、オホヽ、御免なされと顏を赤めず、宵よりの所業一々合點の行ぬ事どものみなり、

さて飯も了りたれば女は我に關はず、手ばしこく膳椀とり片付て火影ゆらぐ行燈の下に坐り、我衣物の綻びを綴くる樣、十年も連添ふたる女房の樣に見榮も色氣もなく仕こなす不思議さ、さりとては何物ならん、世を捨たる女かと見れば黑髮匂やかにして尼にもあらず、世を捨ざる女かと見れば此容色を問ふ人もなき深山の獨り住訝かしく、何にせよ口不調法なる我口惜く問ひ出る詞を知らず樣々考ふる中女は綻び繕ひ了りて其まゝ疊み置き、爐の傍に來て我とさしむかひ笑まし氣に。若き御方の何故の御旅行か知ねど定めし面白き事もござりましたろうにチトお聞せなされと、却つて向ふより切り掛られ。イヤイヤ我等凡夫の癖に山あるきは好なれど歌の一つも讀み得ねば面白き所あつても話し申す言葉拙し、お前樣こそ見受る所御風流の御生活、由緒あるお方とは先程より思ひましたがさりとては盛りの御身を無

殘の山住み、如何なる仔細か御話しなされてよき事ならば。ホヽ中々の事賤の女に何の由緒のありませう、唯妾しは妙と申す氣輕者去歳より此處に移りしばかり、おまへ樣は。露伴と名乘る氣輕者。扨は氣輕と云はるゝか。如何にも。何の上の氣輕。我は何とも知らず山に浮れ水に浮るゝだけの氣輕。おまへ樣は。浮世を厭ふだけの氣輕。ハテ怪しからぬ浮世を眞誠に厭ひ玉ひなば御頭をもゴッソリと剃り丸め玉ひ、墨染の衣に御身をやつされ、朝は山路に花を採り夕は溪川に閼伽を汲て供せられ、看經念佛の勤めあるべきに珠數さへ持ち玉はざる計りか、昔しの人は美しき面に燒鐵當たるさへあるにお前樣は誰に見よとての黑髮油こそ無れしなやかに、友仙の御下着紅こそなけれ仇めかしく色作らせらるゝ事疑はし、世を疎み玉ふとは詐り深く云ひ替せし殿御を恨む筋の有るかなどにて口舌の餘り强玉ふての山籠り、思はせぶりの初紅葉わきくちから濃ふなるといふ色手管、是は失禮圖に乘て饒舌りました。アラ此人の口の憎さや、其樣な浮たる事にはあらず全く世をば避け厭ひて。マザ〳〵とした御戯談さらば世を厭ふとは如何なる譯と押返して問ば。要らぬ事尋ねて可惜夜の更るに御休みなされと身を起して戸棚より出すは綿まづしき痩せ蒲團かと思ひの外、緋緞子の蒲團淺黃綸子の抱卷紅羽二重の裏付て獵虎の襟、驚かるゝ贅澤。サア御寢なれと我を押やりて小屛風立まはすに是非なく話しを中途にして。然らばお先へ御免蒙ると横になれば、蓬萊の夢見さうな雲鶴の錦の丸枕に茶を詰めるやゆかしき香、鼻の頭に立つ不審どうも眠られゝばこそ、ソッと屛風の外を覗けば爐の傍に倘端然と坐して何やらを讀み居る美しさ

人形の樣なり、一時間も經ど我は尙寐られねば又覗くに矢張動かず、二時間も過ぎて又伺ふに女は元の通り、眞夜中頃にも心愈々冴て後先揃はぬ此家の始末を考へながら又覗けば女は頻りと火箸もて灰掻き起し居れど柴木最早盡て爐の暖ならず、木叢峠の麓なれば流石に寒氣を覺えてや、獨り言に溫泉にでも入らんと云ひ捨てゝ湯殿の方へ行けるが少時して歸れば爐の火は全く細々となりしに尙其傍に端然と坐りたる樣子何の用ありとも見えず、全く寐るべき夜具なき故と知れたれば、我男の身として自分ばかり暖まり居をさもしき樣に思ひなし、今眼さめたる振して突と起出ば。御手水かと案內するに連れ、用たして戾りがけ心付たる顏して。お妙さままだおよらずか。ハイ。誰人を待るゝ戀か知らねど大分夜も更けましたろうに。ホヽ御調戲なされずと能うおやすみなされ。イヤ違ひましたら幾重にもお詫をしますが、お獨り住の御樣子其處へ推て一泊を願ひましたれば御臥床を奪ひましたりとも危ぶみます、若し萬一左樣なれば我等こそ男の身野宿の覺もござれば柱に憑れて眠る一夜位苦にもならざれ、お前樣そうして居られては心苦しゝ、寢溫もりの殘りしは氣味あしくも思しめさんがどうかお休みなされと云へば顏少し赤め。御言葉の通り眞に夜具一揃より持ざれどおとめ申したる時より妾しは斯うして夜を明して大事ないと思ひ定めましたれば御搆ひなく。それではどうも。そう仰しやらずと。我らが困ります。妾しが困ります。マアお前樣御臥みなされ。マア〳〵あなた御寢なれ。其では際限なし、露伴男でござる、瘦我慢致して是より御暇申す、女性に難儀さして我心よく眠らば一生の瑕瑾母の手前朋友の手前耻かし

く、夜道まだ〳〵樂な事なり。それ程までに仰せらるゝを背き難し、あなたに夜道歩行せましては妾しの心遣ひ皆空となる事あれば御言葉には從ひませうが、それではあなたに寐床暖めて頂いた樣な者、のめ〳〵と其にくるまつてあなたを火もなき爐の傍に丸寐さしては假令ば妾し夢に戀人に逢うとも面白からず、妙も女でござんす、妾し一生の瑕瑾持佛の手前はづかしく、どうしてもあなたを能うお臥ませ申さでれ。其樣に言葉を廻されてはどうして良いやら譯が分らず、無骨者の我等閉口しますに。ホヽ閉口なされたら温順く妾の云ふ事を聞てお臥みあれ。イヤ〳〵拙者の申す通りになされ。マア頑固に剛情を張られずとも。頑固でも何でも拙者の申す事聞るゝがよい。ハイハイ到底あなたの頑固には叶ひませぬからあなたの申さるゝ通りに致しましよう、ホヽホヽ、まあ怖い顏をして。怖い顏は生れ付です。怒られたの。イエ御厚意に向つて何の怒りませう、唯少し眞面目になつた計り。ホヽ可愛らしい眞面目に。ハイ眞面目に。妾しも眞面目に申しませう、サア露伴樣。何。殿御の仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通らずともよいと思はるゝか。何。御自分の御言葉だけを無理やりに心弱い妾しに承知させて妾しの眞實には露かゝらぬと酷らしうおつしやるか。知らん。知らんとは御卑怯な、サア此方へござれ御一所に臥みませう、妾もあなたの御言葉を立ますればあなたとて妾しの一言を立て下さつたとて御身體の解くるでもあるまい汚るゝでもござるまいに何故そう堅うなつて四角ばつてばかり居らるゝか、エヽ野暮らしいと柔らかな手に我手を取りて瞳も動かさず平氣に引立んとする其美しさ恐ろしさ我膽も凍るば

かり慄然として眼を瞑ぎ唇を咬み切め心の中にて「孽海茫々たり首悪色慾に如くは無く塵寰擾々たり犯し易きは惟邪淫なり抜山蓋世の雄此に坐して身を亡ぼし國を喪ひ、繡口錦心の士茲に因りて節を敗り名を隳す、始は一念の差たり遂に畢世贖ふ莫きを致す何ぞ乃ち淫風日に熾んにして天理淪亡するや當に悲むべく當に憾むべきの行を以て反て計を得たりとなし而して衆怒衆賤の事恬として羞るを知らず。淫詞を刊し麗色を談じ、目は道左の嬌姿に注ぎ腸は簾中の窈窕に斷ゆ、或は貞節、或は淑德、嘉すべく敬すべきを遂に計誘して完行なからしめ、若くは婢女、若くは僕妾憫むべく憐むべきに竟に勢逼して終身を玷すを致し、既に親族をして羞を含ましめ、猶子孫をして垢を蒙らしむ、總て心昏く氣濁り、賢遠ざかり佞親しむに由る、豈知らんや天地容し難く神人震怒し、或は妻女酬償し、或は子孫受報す、絶嗣の墳墓は好色の狂徒にあらざるなく、妓女の祖宗は盡く是れ貪花の浪子なり、富むべき者は玉樓に籍を削られ貴かるべき者も金榜に名を除かる、苔杖徒流大辟、生ては五等の刑に遭ひ地獄餓鬼畜生、沒しては三途の苦を受く從前の恩愛此に至つて空と成り、昔日の風流而も今安にか在る、其後悔以て從ふなからんよりは胡ぞ蚤く思ふて犯す勿らざれ、謹で青年の佳士、黄巻の名流に勸む覺悟の心を發し色魔の障を破らん事を、芙蓉の白面は帶肉の骷髏に過ず、美艶紅粧乃ち是れ殺人の利刀なり、縱ひ花の如く玉の貌に對しても常に姉の如く妹の如くする心を存して未行者は失足を防ぐべく已行者は務めて早く回頭せよ、更に望む、展轉流通し迭に相化導し必らず在々齊しく覺路に歸し人々共に迷津を出しめば首惡既

に除き萬邪自ら消し靈臺滯りなく世榮遠きに垂れん矣」とうろ覺えの文帝遏慾文を唱へける我見地の低さ鄙しさ、其後此美人に罵られける

（二）色仕掛生命危ふき鬼一口と逃てまはりし臆病もの仔細うけたまはれば仔細なき事

年は今色の盛り、春の花咲き亂れたる樣に美しき婦人と一ッ屋の中に居るさへ、我柳下惠に及ぶべくもあらぬ身の氣味惡し。然しながら何千萬人浮世男の口喧しく我を罵り責むるとも、鐵牛角上の蚊ほどにも思はぬ瘦我慢の强ければこそ此家に止まりて此女とさしむかひに食もたべたれ談話も仕たれ。素より人間の批判取沙汰何とも思はざる我も天道の見る前に山中なればとて見ず知らずの女と同衾する事耻かし。否々同衾する事少しも耻かしからぬにせよ、其柔らかき肌近く、僅に衣服幾重かを隔てゝ身の内の温暖みの互に通ふまで密接合ひて我眠らるべきにあらず。共に寐よとの言葉のかけられし丈にてさへ身内顫き慄え、我舌忽ち乾き、我心かきむしらるゝ如く、幾年の修行小しの役にたゝず、もだ〳〵と上氣して今遏慾の文一通り口の中に唱へ了りしまでは思慮分別の湧く間なく、正眞の所は胸の中に一點の主意なくなり、婆子燒庵の公案ひねくりし昔時のやうにはあらざりし。況や此美しき婦人と咎め手の無きかかる山奥の庵中に眠らば中々以て、枯木寒岩に憑る三冬暖氣なしといふ工合に意を斂めて寂然と濟まし

居らるべしとは思へず、美人今夜若し我に約さば枯楊春老て更に稊を生せんとは紫野の大德一休樣さへ白狀されし眞實の所、大俗の我等賢人顏したりとて危い哉〱、婦女の居ぬ山蔭ならば羅漢と均しく悟り切ても居らるべし、白い臑見てハ通を得し仙人でも雲の臺を踏外して落たる話しあり。若も久米殿其女と同衾したら多分は底の無い地獄の奧深く墮落せん事必定なり。我今此美くしく心和しげな女と一つ抱卷掛て枕をならべ、仔細なく一夜を明さんとするとも脊中合せでは肩寒し山里の夜風透間洩りて一しは寒ければと我肩に夜着品よく着せ掛て此方お向なされそれでは兩人の間に風が入りてと云はれては愈々むづかし。あの蕤やかなる鬢の毛我頰を摩で丶、花のやうな顏我鼻の先にありては倘々むづかし。玉の腕何處にか置きなん乳首何處にか去らん、扨は愈々大事なり、女猫抱て寐じと同ド心にて我眠るべきか。叱。若しや夜着の內人の見ぬ所身動きに衣引まくれて肉置程良き女の足先腿後など我毛臑に觸らば是こそ。喝。生死一機に迫る一大事。素より道力堅固ならず、戒行常に破れ居る夫凡の我、あさましき心は起さ丶るにもせよ長閑なる夢は結び難し、且は此女眞實に人間か狐狸か、先程よりの處置一々合點ゆかず。よしや狐狸にもせよ妖怪にもせよ、人間の形をなし、人間の言葉を交ゆる上は人間と見るは至當、其人間と共に眠らん事人間の道理にあるまじき事なり。人間普通の道理にあるまじき事を耻らふ樣子もなく我に逼る女め、妖怪と見るも叉至當なり、妖怪に向つて我何をか言はん小人は謹愼の禮を以て來り惡魔は親切の情を以て誘ふ。扨こそ〱ござんなれ惡魔め、鐵拳は模糊たる人情を存せず眞向

より打て下して露伴が力量の恐ろしきを知らせ呉れんか。噫それも賴み薄し、我不動明王ほどの強き者にもあらねど、魔は却て梵天を攻めし摩醯修羅の力を持るかも知れず、毛を吹き疵を求め草を打て蛇に會ふは拙き上の拙き事ぞかし。如何に答へん何と爲んア、思ひ付たり、昔時は芭蕉も女に袖を捉へられし事あるに彼默然として動かず、女終に去らんとする時芭蕉却つて女の袂を捉へ、こちら向け我も淋しき秋の暮と一句の引導渡せしよし小耳に挾んで聞覺えたり、我又良し〳〵芭蕉をまなんで默然たらん計りと漸く一心を決し、胸中には九想の觀を凝らしながら乾坤を坐斷する勢ひ逞しく兀然と坐着すれば女はもどかしがりて握りし手を倘強く握しめ。サア露伴樣何考へて居らるゝ此方へ〳〵と引立る。引れド〳〵南無三引れてはと滿身力を籠れば此方へ〳〵サア此方へござんせ、さりとては頑固な御方、山に浮れ水に浮れたまふ氣輕には似ず尻の重さと、戲言云ひ倘引立る。大事々々、此妖魔めに一歩を轉ぜられては一歩地獄に近づくと齒を嚙み切り身を堅くするに、倘悠然と女は引く。引れドと張る力弱くよろ〳〵と引立られて最早叶はず、ワッと叫びて手を振はらひ逃出せば女追ひ縋りて我袂をとらへ。ホヽと笑ひながら扨は妾を妖怪變化の者かと思はれて夫程までに厭がらるゝなるべし、ホヽホヽ今少し膽太く心強きお方ならんと存じての親切仇となり却つてお胸を騷がしたる罪深く。眞誠妾は妖怪變化にもあらず、浮世を捨し身のあさましき慾に迷ふにもあらず、兎にも角にも同衾せんとは强て申さド、今より夜道あるかせ申さば亭主振り餘りに拙く惱み限りなし、先づ〳〵坐り玉へと止むるを、我又無下に振り切

るも恐ろしく、爐の向ふに坐れば女は鉈取り出して立上るに我又々ビクリとするを見てホヽと笑ひ草履つゝ掛て戸の外に出で、丁々と響かする木を切る音。

生木なりと燃かんとて薪取りに外へ出しぞと悟れば漸く安堵して我つゞいて外に出で、焚し木を取り玉ふならば男の事我助力致さんと鉈借り受け、そこらの雜木切り倒して一ト抱ゑだけ家の内に投込み、戸口確りと風を遮ぎり對ひ坐れば女は火を搔起して僅に焚し初め頓て漸く焚ゑ立ち暖氣滿るを見て。此通り爐に火もあり、妾は愈ゝ獨り起居る事つらからねばサア露伴樣ゆつくりと御やすみなされ、決して再び不束な妾御一所にとは申さず、ホヽホヽ、膽の小さい御客樣に可惜御氣をもませ申しましたは妾があやまりました、御心配なしに獨りでおやすみなされませ。イヤ先刻も申せし通りおまへ樣おやすみあされ。ホヽホヽ、又剛情を張らるゝか、夫ならば御一所にか。夫は御免蒙りたし、大俗凡夫の我等おまへ樣のやうな美しい方と一所に寐るは、小人罪なし玉を抱て罪ありの金言まのあたり。ヲホヽホヽ、おなぶりなさるゝな、何の妾が厭なればこそ其樣に御逃なさるゝなれ、嫌はれては今更是非もなけれど眞實妾の了見では夜風寒き山中何の御馳走申す風情もなければ、其むかし乳母があなたを抱て寐かして進た時の樣にあなたを堅手と抱て妾の懷中で暖めて進ようばかりの親切、妾も佛菩薩の見玉ふ前に決して淫りがはしき念は露もつにあらず、あなたとて一箇の大丈夫初めて逢て抱て寐た女位に心を動かす樣な弱いお方ではあるまいと存じたに御卑怯千萬未練の御性根今の御一言御戲談ならずば玉を抱かざる前も

小人は小人なる通り妾と同衾し玉はずとも既に罪ある助倍の御方ホヽ、是は失禮。兎も角もあなたの御自由になされ妾は亭主の身で獨り寐る事致し難しといふ。我呆れて明きし口閉ぎ得ず、茫然と此女の言葉を聞き、つく〴〵考ふるに人の世の毀譽褒貶を心に留めさるのみか、眼前の我をさへ、見て三才の小兒の如く取り扱ひ、然も悠々として胸中別に春ある悟り開けし大智識のやうなるに益々不審晴れず。ハテ何物の子ならん何物の變化ならん、尋常の婦女とは思へず、抑々如何なる履歴ありて斯く可惜しき容貌和しき心持ちながら山中には引籠りけん、當世の小督か佛か祇王か祇女か、それとも全く妖魔かとそゞろ恐ろしく。さらばおまへ樣はおまへ樣の御自由我等は我らの自由として我は此爐前に一夜明すつもり。妾も爐の前あなたの向ふ坐に一夜明して苦しからず却つて心安し。と斯に一切談しの埒明けば我大きに安堵して穴のあく程女の頭上より全體を觀るに一點の疵なき玉のやうにて折から燃ゆる火炎の閃めく陰に隱現する女神、とても其氣高さ美しさ人間の繪師まだ是に似た者も書きたる例しあらざるべし。荊棘の中に鹿は置きたく無く、鶴は老松の梢にあらせたし、目さましき者尊きもの可愛きもの美くしき者皆其所を得させたきは我人の情ならんと思ふ我あはれ、駿馬は勇士に伴なはせたく、名花の園の蝴蝶は眠らせたし、或歳我旅せし時旅宿の下司洒掃除の時懷中より日本政記一冊落せしを見て心掛ありながら空しく人に僕仕居る其男の口惜さ如何ならんと涙ぐみたる事ありし、夫にもまして今此女天晴の容貌むざ〳〵と深山の谷間にある埋れ木の花も咲かせず朽果る通り扨も氣の毒。美人所を得ずして榾

火に燻ほり草の屋に終るとはなさけなき天道の爲されかた。男兒時を得ねば滄海に入ると同ドく、既に見識ありて俗情に遠く風流を解して仙境に近づき居る此女、浮世の塵を厭ひて山中に終らん所存か、さりとては又女の癖に男めきたる憎さよ。女の女らしからざる男の男らしからざる、共に天然の道に背きて醜き事の頂上なり、さりながら女の女らしからずして神らしき、男の男らしからずして神らしきは共に尊き頂上ぞかし、今此女の言ふ所最速女らしからず、女の口より初めて逢ひし我を抱て寐んなど中々以て言へた事ならざるに、然も乳母が幼稚りし我を抱て寐し如く我を抱て寐んと云ひし事若し虚誕ならずバ此女は女の男めきたるならで神らしき方に近づきたる方外の女なり。然し我凡夫の眼より見れば此女の斯く尊と氣ならんより、良き配偶を得て市井の間に美しき一家を爲したらんこそ望ましけれと思ふまに〳〵又瞻れば、端然とせし御有樣愈々凡界の女の、戀に病み衣服に苦勞し珊瑚の根掛の玳瑁の櫛のと慾にざわつく儔にあらず、御眼の中の清しさは紛紜たる世事を御胸の中に留め玉はざるをあらはし御顏色のあざやかに艶々しきは充分今の境界に滿足して何の苦しく覺さるゝ事なきを示めして、且は御口元の締りたるにぞ理非を判め玉ふ智惠敏く居玉ふを知られける、不思議不思議。

餘りの不思議に堪へかねて我いと叮嚀に眞實を籠て言葉緩く。先程も伺ひたれど歳若きおまへ樣の尼にもあらでの山籠り、如何にも不思議に存ドらるゝも、一ッは美しき御容貌和しき御心根持玉ひながら無慘や、猪狼の跡多き地所に潜み玉ふを慨かはしく存ずるよりなり、斯く山住し玉ふ其譯若しからずば

一通り御聞せ下されたしと問へば女ホヽと笑ひながら、此頃うるさく世間に流行とか聞し小說にでも書玉はん御了見か、よし小說には書ざるにもせよ、話しの土產と都の人に齎らし歸らん御了見なるべし、恥かしき身の上明て云ふ迄もなけれど、若し人ありて妾の身の上話を聞き、一點あはれと思ふ人あらば嬉しき事の限りなり、いで恥を忘れて恥かしき身の上語り申すべし、緣外の緣に引されて或は泣き或は笑ひし夫も昔の夢の跡、懺悔は戀の終りと悟りて今は何をか匿し申すべきと云ひつゝ榾を添たりけり

（三）　聞けば聞く程筋のわからぬ
　　戀路のはじめと悟りの終り
　　能々考へて見れば皆我が勝手の想

其時お妙は長江を渡る風輕く雲を吹ておぼろにかすむ春の夜の月大空に漂よふ樣に滿面の神彩生々と然も柔しく。藍田を罩むる靄あたゝかに草を蒸してはやりはやりと光り和らぐ玉に陽炎立つ如く兩眼の流光ちらちらと且つ嬉し氣に。聞て玉はれ露伴樣、妾し幼少より東京に生長て父母まづしからず、家計ゆたかなるにまかせて、露を銀薄の頭簪に何ぞと問ひし頃は蝶と愛られ、風を空色縮緬の振袖に厭ひし頃は花といつくしまれ。浮世に樂み長閑なりし年立ち年暮て冬を送り春を迎ふる度每、買つて貰ふ羽子板と共に背丈段々と大きうなりしが十四の秋父樣圖らず卒れ玉ひしより悲しさ遣る方なく、芝居見る外には泣たるためし少なき身もひたすらに淚もろくなり。果敢なき野邊に一條の煙りを觀じて後は三度の御

膳に向ふたびに、父上の平常坐り玉ひし所むなしく明きて完全たる前歯の一本拔けたる如く、しよんぼりと母様ばかり心淋しく、箸持つ力も衰へ玉ひたるやうに召上りながら、我が母様を見て悲しむと同しく母様も我を顧み玉ひて、御胸痞えたるや御飯の量少なく白湯のみいたづらに飲して私かに瞼の潤ひさし玉ふに我口中の者の味いつしか消えて奥歯咬みしめしなりに開く事難かりし。われそれより自然と垂籠り勝に日を費やし、平素好きなる三味の色糸弾き鳴さんともせず、琴の師匠にも忌中に休課たるまゝ遠ざかりて、母様が持玉ひし草紙くさ〴〵に馴れ泥み、有る事無き事かきつらねたる冊子の中に幽なる樂みをなせしが、終に癖となりて彼是見盡せし後は薄雪住吉伊勢竹取或は求め或は借りて三年の中に解らぬながら源氏狹衣にまで讀み至り、其間つく〴〵人情の濃き薄きを考へ世の態の眞實虚妄を覺ゑ、むかしより男といふ者のあさましく、意一時なさけ一時、思ひ込強けれど辛防弱く、逢ふを悅こべと別れを悲しまず、媚めかしく傍らへるをかしき女を好み、戀を榮華のわざくれ三昧、犬猫の色美しさを愛る樣に女の髮容よきを愛る者なるをさとり。我緣もなき男なれど源氏業平の如き戲け者を憎く思ふ事深く、嫉妬するにもあらねど其戲け者に迷ひ焦れし色々の女どもを齒痒き馬鹿と心の中に思ひけるが、十八の年母様もまた老の病危ふくあり玉ひ、兄弟もなき身の氣弱く朝に晩に腹中は泣ながら神佛を賴み御介抱申せし甲斐なく。我亡き後は是を見て一生の身の程を知れと行水に散り浮く花を青貝摺りせし黒漆の小箱を與へられしまゝの御往生、悲しともつらしとも言ふ言葉を知らぬ歎き、漸く御葬式濟して後、彼小

箱を開き見れば何時の間に認め置れしやら一通の御書置、是ほどまでに我を可愛う思しめされしありがたさと先づ涙こぼれながら讀み見れば、其噫時の心持今思ひ出しても慄然とする程、恐しさ口惜さ悲しさ情無さ味氣無さ胸惡さあさましさ心細さ、厭といふ厭な心持一時に込上て氷水全身に打かけられたる如く、又猛火に眉毛燒かるゝ如く冷汗脇の下に湧きて身ふるひ止め得ず、氣も暗く眼も暗くゆら〳〵とゆらぐ玉緒絕果んばかりなりしが夫より愈々浮世を厭ひて。イヤ御話しの中途ですが其黑塗の小箱の中の文に記しありし事如何なればそれほどまでにお前樣を驚ろかせしか。マア御聞なされ其文に、記しありし事をわたくしの口から申すもつらし、扨も我年は十九の春を迎へて空に更行ば親類のやうに親達と交際し誰彼、我を嫁にせん、我婿を世話せんといひ來るを早くもあさましき人情の詐り、盛りは十年の色、用は一時の財貨にひかれての申し込と猜して、一々きびしく家の僕に謝絕せ、ひたすら母を慕ひまゐらせ、あはれ此身の朽よかし靈魂のみとなりて母樣の御傍近く行かんものとあせり、つく〴〵生命も惜からず、世間に何の樂みもなく、讀耽りし數々の草紙も打すて又見ず、男と面を合すさへ忌み嫌ふ樣になりて、蓮葉なる下女共が年若く美しき俳優などの噂まで苦々しく覺えければ、自然と自分は髮に油の香も止めず櫛の齒を入れて鬢の恰好氣にするまでもなし、ましてや前差に鼈甲の斑の詮議根掛に鹿の子の色のよしあしなんど問ひもせず質しもせず、紅脂白粉はまるで忘れつ、帶に苦勞をせしはむかし下駄に鼻緒を苦勞せしもむかし、羽織の色がどうであらうと着物の取合せどうであろうと一切女のたしなみ

を捨て、おもしろからぬ心中常に涙を湛へて天地も薄黒く見え花は咲ても萎れたる我、鳥は歌ふても默然たる我、皎々と澄む月に對つても濁り水の我には影清く宿らず、隱々濛々と寐て起て食ふて少しも何の業をなさず、身をドだらくの吾儘にまかし、神を恨み佛を恨み人を恨み天地を恨みて悶え苦しむ一念增長するばかり遂には神を憤り佛を憤り今世に若し正體在さば針の先で衝てやりたきまで心逼り來りて、道理を見れば何の燈心の繩張り、道理も更に恐ろしからず、人情を察れば高が氷柱に彩色の一時、人情も夢うれしからず、胸中に霜雪寒く殘りて慘らしき觀念絕ゆる間なくありしが或日の事、立派なる朧塗人車我家の門に付きて髯毛うるはしき官員風の男案內を請ふに名刺を見れば何某局長奏任一等の御方當世の利物と評判ある人なれば我後見ともなりて家事萬端取り賄なひし老僕出で丶御用の筋を何そと承たまはるに、唐突の參上甚だ失禮なれど傳手の無きま丶是非なく直に申し入れます、付ぬ事を御聞申すが當家の御主人御年頃なるに未だ何方とも緣談の御約束なきや、實は拙者舊藩主の若殿見ぬ戀にあくがれ玉ひて是非に所望いたされ居る譯、と申した計りにては御分りあるまじきが、今年の春若殿郊外を散步せられし折或る墓地を通りかゝられ、不圖乞食共の話しを聞るれば、今歸つたあの娘、器量美しい計りか孝心のいぢらしさ見えて母親の墓の前に蹲踞りたるま丶動き得ず、淚は雨の絕ざる程泣てく、若い身にも似ず、生命惜からねば早く母樣の御傍に行たしとの述懷、何と今時珍らしい氣立の女ではないかと一人が云ふを又一人がひつとつて、貴樣今日初めて彼娘に氣が付たか、あれは每月の事、去年

の何月ありしか彼娘の母の此處に葬られてから毎月の命日怠る事なく此處に來てあの通りの悲歎、他所で見ても可愛想なありさま、殊更今日なぞは顔も大分痩せて血色も悪し大方家に居ても始終泣てばかり居る事であろうかとの噂、耳に入るより若殿ヅッとし玉ひて誘はれし涙が一滴、是ぞ戀の水上思ひの泉、ゆめ〳〵浮たる御心にあらず、戀が爲せる探索其徑御名前御住所まで何時の間にか聞知り玉ひます〳〵焦れて遂に父上の許しを乞はれ、父君の御依賴によりて兎も角も拙者中にたち周施の勞を取るべく今日態々參上したり、内々承まはれば未だ何方とも御緣談きまりたるにもあらぬよし、何と此話し能々御考ね下さるまいか、媒人口たゝくでハなけれど拙者舊藩主の御嫡子、爵位財産は世間の沙汰でも御存じあるべし、殊に先年獨乙國に留學せられて學位まである若殿、華族間にて行末望みのある方、全く浮たる戯れ言大名氣質の吾儘なる緣談申し入るゝにあらず、四民同等の今日實以て後々は侯爵夫人と我等もあがめ申すべき所存、戀のはじまりの次第を考えられても成るべくハ色よきお返事を玉はりたしとて歸りたる後、老僕は躍り上りて喜び、平常皺びたる顔の其時ハ光りをなし我に向ひて緣組承知せよと說すゝむるに、我一度はやんごとなき人に戀れたりと聞てカッと上氣し、又一度は是も男の例の一時の熱やがては褪める色好みの心鄙しと蔑視み、又一度ハ母の遺書思ひ出して忽に身ぶるひ生じ、厭、々く、々く、く々、緣談など聞く耳もたずと強く云へば老僕は驚き、是ほど結構な緣談いやと云はるゝは片腹痛しと理をせめ言葉を盡して我を諫むれど少しも動かねば是非なく謝絶申して、情知らぬ者どもと蔭言さるゝを

厭はざりし。されども我其時より何となく二心にありて然程むごくは男を嫌はず、むごかりし心いつしか和らぎて髮かたちをも治むるやうになりしが、三月ほど經て又彼何某局長見られ、我後見に向ひて、過し日の話し纒まらぬ以來流石活潑に聰明に渡らせ玉ひし若殿御動靜ガラリと變り玉ひ外出もし玉はず書見もし玉はず、花にも月にも嗟嘆の御聲ばかり、望みは絶し此世に絶ぬ玉の緒のあるは悲しき事の限りぞ、あるに甲斐なき生命誰が爲にかながらへんなど、啣ち玉ひて次第々々に三度の御食すゝまず、晝はうと〳〵眠り玉ひて夜は寐難に輾轉玉ふ、あはれとは是なりと思ひて御付の者慰さめまゐらせ、愚とはそれなりとさとして父君叱り玉へど唯々消なば消ぬべし露の身の散りなば人のあはれとや見ん、つれなき人はつれなからでうとまれし我こそうとまし、とく〳〵捨ばや生命と朝夕の獨り言、聞れて母君の堪え玉はず再度拙者を召して此御使ひ、何卒よろしく御推諒ありて、御不足の廉あらば御遠慮なく申さるべし一々御指揮に隨ひ申すべければ此戀成就する樣と情を盡し道理を責めての話し、其時我ふすま越しに聞て思はず泣しが老僕が我に向ひて返事相談する時には又彼母上が殘し玉ひし書置の事思ひ出して唯々つれなく、緣を結ぶは厭なりと云ひ切つて數多の人に憎まれぬるを關はざりし、此度は最早思ひ切て來るまじと思ひしに又一月ほどたち、彼人來りて若殿終に浮世をあぢきなく思はれしあまりうつら〳〵と病ひの床に打臥され其後枕上らず、療治の詮方もなく父君母君今ハ共に最愛の御嫡子に引されて心よわく、共に御心配のありさま餘所に見るさへ痛まし、願はくは思ひ返してよき返事きかせ玉ふやう

とりなし玉はれ、是は若殿御病床の中にて書捨られし反故ながら戀の切なる事あらはれて隠れず、せめては是をだに見せまゐらせて少しはあはれを汲まるたよりともなれかしと持て參りしあり、又是は若殿いまだ御病氣になり玉はざりし前の寫眞なるが是も併せてまゐらすべし、御返事は明日また伺ひに上るべし、且は又其折御返事は如何にもあれ、若殿が生命かけてまで戀れし方の寫眞一枚玉はりたしと云殘して歸りければ老僕又我に色々說諭し、是非に此緣結ばれよ、淺からぬ因緣なるべしなど泣て勸むれど我剛情に承知せねば少しは怒りて立去しあとに殘せし寫眞、見るに氣高く美しき御顏ばせ、いとしさも生じたるばかりか短冊に筆も歩み健ならずして

燈し火も暗うなりゆく夜半の床に
こゝろきぬ〳〵君をしぞ思ふ

と調も覺束なく記されたるを見て吾魂魄もゆら〳〵とありしが母君の遺書思ひ出して又かゝる貴人に近づくべきにもあらずと翌日も酷く返事させ寫眞も送らず、かくて十日程過て吾家の門に慌たゞしく車を寄せて彼官員轉ぶ如く走せ入り眼付さへ常とは變りて涙ぐみながらつれなき此所の戀れ人め、今日は是非々々兎角の返事に及ばず邸第まで來られよ若殿生命今宵を過さずと醫師の鑑定、父君母君我等までの歎き察しても玉はれ殊に今朝若殿の口ずさまれし一首

厭はれし身はうきものと知りながら

倘捨てがたき………

と後の一句を殘して血を吐かれし御ありさま、肺病もつまりは戀故よしや女は鬼なりと箇程まで思はれてまだつらく當るべきやと半分は恨み半分は怒りて我を引立行んとするに、我は又身を切らるゝより切なけれど愈々剛情に行ドといふ折しも亦車の音して御付の人を後になし、容儀繕ろひ玉ふこともなく馳せ入られし上品の夫人、氣も半亂に、お妙さまとはあなたか、我子が今臨終の際、一目おまへ樣を見たしと利かぬ舌を無理に動かしての望み、此通り手を合はして願ひます是非に來てと侯爵夫人ともいはるる尊き人に拜まれて、心は洪水に漂よはされたるごとく、うろ〳〵するを無理に引立られ、車の上も夢路をたどるやうにて立派なる御邸の中に入れば人々聲を限りに呼ぶ響き、早や切々と悲み泣く女の聲も聞ゆるに、夫人は慌てゝ幾間か通り過玉へば我も煙にまかれ其跡に跟て病室に入りける、見るに瘦枯れ玉ひたる御ありさま今とりつめて危かりしを呼び生られて母君の顏見玉ひさめ〴〵と泣かるゝ痛はしさ是も誰故、我故と思へば勿體なく消も入りたきを夫人に推し出されて若殿の御側近く參り、我を忘れて淚つゝみ切れず御手を取りしまゝ何の理由とは知らず泣伏せば若殿も淚ながら我を見玉ひて御言葉はなく、握られし手に微弱き力を籠めて我身に幽玄なる働きを與へられたり、其儘我は絕入て夢の如くなりしが其後呼生されたれど若殿は遂に蘇生らせ玉はず、我は身も世にあられず立歸りてより後其人をのみ思ひてなまドゐに生殘りしを口惜く、ます〳〵天地を恨み憤りて狂亂となり、七日の夜獨り吾家の持佛

の前に看經したる時朦朧とあらはれ玉ひし御姿のあとを慕て脱出で、何處ともしらず迷ひあるく眼には幻影をのみ見て實在の物を見ず、あさましく狂ふて此山中に我しらず來りしが圖らず道徳高き法師に遇ひ奉り一念發起して、坐禪の庵りを此處に引むすびしばかり、溪の水嵩増して春を知り峯の木の葉の飜つて冬を悟る住居、閑寂の中に群妙を觀じて頭を廻らし浮世を見れば皆おもしろき人さま〴〵、慘酷りし昔時の胸の氷砕けて東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身もおもしろく、佛も可愛く凡夫も可愛くお前樣も眞に可愛し、天地に一つも憎きもののなく樹の間に巣くふ鳥も可愛く土に穴する狐も可愛し、心華開發して十方世界薫ばしくおもしろき唯識の妙理味ひ更に濃く、泥水相分れて清淨に澄めば天上の月宿る瓔珞經のおもむきを得て愈々面白し、我をあはれと人が云ふもおもしろく我を厭よといふもおかし、お前樣を可愛と思ひたればこそ抱て寐てといひしに厭がられしは愈々おかし、昔時は我死ぬほど人に戀はれてもつらくあたり今は我死ぬほど人に厭がられても可愛し、一心の變化同じ天地を恨みもし樂みもするこそおかしけれと長々しく語りつくせど更に我其故を悟らず。もし〳〵お妙さま其話しの中の骨となりし行水に散り浮く花の青貝摺せし黒塗の小箱の中の書置は何事なりしか、其を聞かでは話し分らず。ハテ野暮らしい其を聞ようでは貴君もまだ人情しらず、其書置讀て後慘くありしといへば云はずと知れし事、世を捨てよといふ敎訓、浮世を捨ねばならぬ譯をかきしるせしに極つた事。怪しからぬ事浮世を捨ねばならぬ譯なし。イヤ〳〵妾等一類の人間是非とも浮世を捨ねばあらず、浮世を捨ねば安心

の道おぼつかなし、さればこそ初は神をも佛をも恨みし也。扨も分らぬ話し。イエ〳〵能く分つた話し深山の中にのたれ死せずばならぬ妾等の身の上、浮世の人は眼くらく種々のあはれを悟りながら、情なき妾等の身の上には月日も全く暗く花鳥も全くおもしろからぬを知らず、されば彼若殿に我身を早く任せざりしも若殿の子孫をして我如くあさましからしめざらんとの眞實の心其時の苦しさ推量したまへと沈みたる調子に答へながら又急に語氣を變て、ホヽホヽおもしろからぬ長話し最早やめに致しませう、言もうるさく語るも盡ぬ戀と恨みは隣り同志、これまで〳〵これまでありや繰言もと云さして又帽を添ゆる容貌の美麗さ、水晶屈原の醒たる色ならで瑪瑙淵明の醉るがごときありさまなり。頓て又かすかに我を見て、あら本意なき夜の短うて可惜明放れなば假初ながらの緣も是まで、君は片科川に浮く花、香は急流に伴つて十里を飛ぶ遄やかに、我は其川の岸に立つ柳、影は水底に沈むで一歩を動ぎ難し、逢ての喜び別離のつらさ戲けし戀の後朝ばかりにはあらずといふ時しもあれ朝日紅々とさし登りて家も人も雲霧と消え、枯れ殘りたる去歳の萱薄の中に雪沓の紐續ぎかけしまヽ我たヾ一人にして足下に白髑髏一つ

さても昨夜は法外の想像を野宿の伽として面白かりし、假令言葉は無くとも吾伽を爲せし髑髏是故にこそ淋しからざりし、是も亦有緣の亡者、形ちの小さきは必らず女なるべし、女の身にて此處にのたれ死吊ふ人さへ無きはあはれ深しと其髑髏を埋め納め、合掌して南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、お蔭さまで昨

夜は面白うござりましたと禮をのべ、段々川邊を下り小川村に來り溫泉宿に入りて此山奥に入りしまゝ出て來ざりし人なかりしやと問へば亭主けゞん顔して暫く考へ。不思議の事を問はるゝものかな、ォ、去年の事なりしが乞食の女あさましく狂ひ〳〵て山深くの方へ入りし事ありしが日光の方へは行ざりしよし、何所へ行しかと今に其噂あり、それを尋ねらるゝかと云ふに。それ〳〵、其女の樣子知るだけ詳しく語れと逼れば老父苦い顔して我をヂロヂロ見ながら。年は大凡二十七八何處の者とも分らず色目も見えぬほど汚れ垢付たる襤褸を纏ゐ、破れ笠を負ひ掛け足には履物もなく竹の杖によわ〳〵とすがり談すさへ忌はしきありさま總身の色薄黑赤く、處々に紫がゝりて怪しく光りあり、手足の指生姜の根のやうに屈みて筋もあきまで膨れ、殊更左の足の指は僅に三本たけ殘り其一本の太さ常の人の二本ぶりありて其續きむつくりと甲までふくだみ、右の足は拇指の失し痕かすかに見ゑ、右の手の小指骨もなき如く柔らかそうに縮みあがち水を持て氣味あしく大きある蠶のやうなり、左の手は指あらかた落て拳頭づんぐりと丸く、顔は愈々恐ろしく銅の獅子半ば熔ろけたるに似て眉の毛盡く脱け額一體に凸く張り出して處々凹みたる穴あり、其穴の所の色は褪めたる紫の上に溝泥を薄くなすり付たるよりまだ〳〵汚なく、黃色を帯て鼠色に牡蠣の腐りて流るゝ如き膿汁ヂク〳〵と溢れ、其膿汁に掩はれぬ所は赤子の舌の如き紅き肉酷らしく露はれ、鼻柱欠け落て其處にも膿汁をしたゝか堪ゑ、上唇とろけ去りて粗ある齒の黃ばみたると痩せ白みたる齒齦と互に照り合ひてすさまじく暴露れ、口の右の方段々と爛れ流れたるより

頰の半まで引さけて奧齒人を睨まゆる樣に見え透き、髮の毛都て亡ければ朱塗の賓都盧幾年か擦り摩られて減りたる如き妙に光りを放ち、今にも潰え破れんとする熟柿の如く艶やかなるそれさへ見るにいぶせきに右の眼腐り捨りて是にも膿汁尙乾かず、左の眼の下瞼まくれて血の筋あり〳〵と紅く見ゆる程裏がへり、白眼黃色く灰色に曇り黑眼は薄鳶色にどんよりとして眼球なかば飛び出で、人をも神をも佛をも逆目に睨む瞳子急には動かさず時々ホッとつく息に滿腔の毒を吐くかと覺えて犬も鳥も逃避ける、まして人間は一目見るより胸あしくあり、其あしき臭を飯食ふ折に思ひ出しては味噌汁を甘くは吸ひ得ず、膿汁、思ひ出しては珍重せし鹽辛を捨ける、されば誰も彼も握り飯與ふるだけの慈悲もせず其女の爲すまゝに任せしに彼呂律たしかならぬ歌のようある者あはれに唸るを聞ば世に捨られて世を捨てゝ叱々と覺束なく細々と繰り返しては息だはしく、ハッタと空を睨みて竹杖ふりあげ道傍の石とも云はず樹とも云はず打たゝきてハ狂まわり、狂ひ躍てハ打たゝき瞋恚の炎に心を燒き、狂ひ狂ひて行方しれず(をはり)

○

緣外緣の後に記す

莊子が記せし髑髏は太平樂をぬかせば韓湘が歎せし髑髏は端唄に歌はれけるそれは可笑きに、小町のしやれかうべは眼の療治を公家樣に賴み天狗の骸骨は鼻で奇人の鑑定に逢ひたる是も洒落たり、我一夜の伽にせし髑髏はおかしからず洒落ず、無理におかしく洒落させて不幸者を相手に獨り茶番、とにもかく

にも枯骨に向つて劒欄を撫する嘲りはまぬかれざるべし

落語 媒介人

蓮山人

（上）

一夫一婦、一生一身を打委しあふ者の互ひに心の底を見せず、常に氣の合はぬ樣なヿで、人間と生まれた甲斐が何處にあらうぞ。しんぞく〳〵、しんから可愛く、最惜しく、大切に思ひあふてこそ、はじめて夫婦が夫婦らしく、一家も圓滑く治まつて、風も波も立つヿでないに。氣に入らぬ亭主持たされ、心に染まぬ女房押付られて、一生面白くなく送る苦しさ、共白髮も氣が氣でもあるまい。その位なら一生寡獨でおし通し、犬でも飼つて居た方が、どれ程樂しみか知れはせぬ。さればこそ夫婦ハ人の大倫で、當初是を定めるヿが第一番に大切だ。人間一生の幸と不幸と、等しく此時に初まるのであるから、蓬萊の島臺を振出しにして、一蓮托生の上りまで、ならば好い目を出したいものト、誰も願はぬ者はあるまい。これほど大切な夫婦の緣、中々以て人委かせにしては居られぬ筈なのを、それほどにも思はぬか、皮相の儀式にばかり流れ、媒者獨りに一切をまかせて、さて輿入まですまして後、聟が氣に入らぬの、姑がやかましいのと、今更の樣に苦情三昧——抑も馬鹿の度が知れぬワ。

文學士保利仙三、正七位と云ふ肩出いかめしく、さる省の參事官を務めて、月給の百圓近くも取り、牛込の高臺に小瀟洒した借家かりて、年寄つた老母を養なつて居るが。今年卅になつて、まだ定まつた妻

がない。それに引かへて、自分と同時卒業した朋友は、皆それぞれ妻を迎へて、内證は知らぬが皮相はむつましさうに、何所へ出るにも呂途の人力車二臺つゞけて走らせるのが、此頃羨ましくてたまらず。且は身寄りの者から、色々と勸められるので、いよいよ求婚の熱高まつて來たが。西洋風に自由結婚と洒落やうにも、生憎此仙三は、學校に居た頃から至極の武骨者で、交際の席などへは、一切出たことなく。隨て婦人に近付たことが無いから、さしづめ候補者が見當らず。こんなことと知たなら、書生の時分から心掛て、圖書館へ行く時間をへらしても、英語會や園遊會へ出て置たものをと、今更悔むでも死んだ子の年、追付いた話ではない。さて又親類朋友の家を見渡した處が、似合はしい娘も見當らずト、茲にいよいよ當惑して、心ならずも人手を頼む仕末となり、出入の者や親類朋友、逢ふ人毎に、心當りがあつたらばと、殊勝にも頼で居た。

斯うなると妙なもので、今迄は隨分ぢゝむさかつた男が、そろそろ身だしなみを覺え。髪も一月めに吃度刈らせ、顔剃は一週毎に欠したことなく。高帽子も毎朝ブラッシかけて、カフスも眞白なのをはめ、ズボンは流行の縞に、チト價段の張るのも厭はず。肩で切る風にホワイトローズ(香水の名)プーンと匂はせ、目鏡も金縁にすると云ふ騷ぎ。急に變つた仙三の樣子、役所中の評判と成た、が。瓦はなんぼ磨いても矢張り瓦。生まれ付て底い鼻は、引張つても高くはならず。色は青黒くて、口無作法に大きく前齒三四本黒く朽ちて居る、其上にみそほらしい鬚、いつそ剃た方がト、入らぬ心配を人にかけ。脊が低く

て其割に肉太く。隨分をかしな風付き。まだ其他に腋臭があると云ふのだから、とても取り得のある男振りでない。シテ學士はト云ふに、それすら同じ學士中間で、あんまり出來のよい方ではなく、性來偏屈な質だから、朋友の受けもよくはない。斯う數へて見ると、何處に一ッ頼もしい處はないが。それでも知らぬ者には、そのぼろは分らず。文學士で高等官、何よりも是が呼び物であつた。

（中）

上野博覽會の中門を這入て、美術館の方へ行かうとする處の木の影のベンチに休で居る、洋服出たちの二人の男。年はいづれも廿七八、一人は縞の荒い薄羅紗の夏服に、まだ新らしいヘルメットを冠り、口髯少しはやして、時々仔細らしくひねつて居る。今一人は少し太り宍で、紺シエルの背廣に、白リン子ルのチヨッキ。これもヘルメットをかぶり、金縁の目鏡をかけて、マニラをふかしながら話をして居るのを聞けば、

「君、保利がワイフをもらふと云ふのは事實か。

「ウン事實とも、而も今日が見合ひだ。

「見合ひとは頗る時代だナ。何處で。

「たしか矢張り博覽會の中でだと云ふとだ。大方今に來るだらう。

「イヤ、そいつは近頃珍説だ。そして相手は一體何處の何者だ。

「先は僕の同國の者で、第一國立銀行へ出る、星川と云ふ者の孃で、おときと云ふ女だ、隨分美人だヮ。
「然しあの保利の樣な奴に、よく先方で許したナ。
「サ、何處に魂胆があるのサ。所謂る媒者口の働きで、保利の家へ出入る本屋の善助と云ふ奴の世話ださうだがあんでも早川の處で、非常にほめたのと見へる。そこで寫眞を取り替ると云ふ段になつて、早川からおときの寫眞をやり、保利の寫眞も取て見た處が、彼奴寫眞師に賄賂をつかつたと見へて、決して眞正の保利仙三ではない、どうして、僕も見たが、非常に繕つたと見へて、まるで別人に成て、無論好男子のとだから、早川でも承知し、おときも是ならばト云ふので、相談はまとまつたが、兎も角も一度當人同士會はしておかうト、そこで昔し風に見合と云ふことになつたのだ。
「イヤ彼奴卑劣な手段を施しやがる。然しそれぢや其のおときさんが可愛そうぢやあいか。
「さうとも、一體あれの姉にするといゝのだ。丁度よい似合だ。
「フーン、姉があるのか。
「おとしと云ふ姉があるのだが、器量が悪し其上に少し鈍いと來て居るから、兎角縁が遠くて、つまり厄介ものなんだ。
「さうだね、それなら實に好對だ、君さう注告したらよからう。
「然し僕は同國でもあまり心易くないから、不意に行て注告すると云ふ譯にもいかんのサ。

「然しあんな奴のワイフになる女は、よく〳〵因果だぜ。それは可愛さうだヨ。
「君近頃保利に會ふたか。
「イヤ暫時く會わん。
「さうか。今度會つたらそれは驚くぞ。あの不潔家が。此頃わ非常にめかして居るぜ。
「さうか。あんな不潔家もなかつたヨ。學校に居る時分同室に成て弱つたからチ。然しあの面でめかしたつて格別榮もしまい。
「でもめかさうと云ふ了簡がをかしいヨ。
「やゝ美術心が起つたと見へる。
「美術心と云へば。どうだい美術館を一廻して見やう。
「よからう…………。
云ひながら二人は、徐かに立上つて美術館の方へ行た、今までは無言で、隣りのベンチから、二人の話に耳をそばだてゝ居た、商人風の一人の男、
此時急に立上つて、二人の行方を見送つて、頻りに何か考へて居たが、其儘急ぎ足で中門の方へ……スタ〳〵出口をさして行た。

（(下)）

今日はいよ〳〵見合の當日、仙三は前の晩から魂も身に添はず、お時の寫眞を出して見ては、にこ〳〵して、明日はこれを正身で見るのかと嬉れしがり。さて自分の寫眞を出して見ては、眉をひそめて、これは自分ながら自分とは思へぬ位。此實物を見せたなら、愛想を盡かされはしまいかと心配し。終夜くだらない蜃氣樓を、かいては消し消してはかき、目もろく〳〵合へばこそ。今朝は一番鳥から目をさまして、鳥の鳴くのを待ち遠がり。起るとすぐに風呂を立てさせて、磨いたも〳〵、頬の皮のすりむけるほど磨きたて。鏡に一時間も向つて、髪をかいたり髯をひねつたりハンドコロン半瓶ほどふりたて、香水を浴びるやうにかけ、出來るだけの力を盡してめかしこみ、約束の時刻を待ち兼ねて、少し早めに家を出た。

さて上野へ着いて、博覽會へ這入ても、出品には目も呉れず。往來の人に突當つて、叱られても斷り云ふ間も惜しく。急ぎに急いで中門を這入り、參考館の側を、やつと萬代軒——約束の場所へ着いた。約束の場所へは來たが、約束の時刻はまだ來ないから、先方の連中はまだ見へない。仙三はそれを待合せる間も尻が据らず、庭へ出て見たり、窓からのぞいたり、また時計を出して見たり。傍で見て居たら、さぞおかしなとであつたらう。でも當人は一生懸命胸騒ぎ頻りにして、心臓の皷動鼻息に現はれ、只もう半ばは狂亂の體約束の時刻は來ても、約束の人は來ない。仙三はいよ〳〵焦思つて居る處へ、表に人音がして誰か來た樣子。ソレコソと仙三は飛立つばかり、襟飾を直し、エヘンと一ツ咳ばらひして、待

て居る、やがて這入て來た人影、見れば善助只一人。仙三は不審に思つて、
「チイ、善助まだか。
「へイ、アノ旦那樣、誠にお氣の毒樣でございますが、私がお斷りに上りましたので。
「ナニ斷り、今となつて、斷りとは情ないぢやあないか。
仙三は目を丸くして問ひ返すと、善助は手拭で汗をふきながら、
「イエ、お急き遊ばすな、今日の處だけお斷り申しますので……。實はお孃樣が昨晩からお惡いさうで、今朝までは御出での心算でございましたが、お醫者樣が他出はよくないと仰しやりますので、急に私がお斷りに出ました樣なわけで。へイ、もう御緣談の方は、先方樣でも大層お急ぎで、もう見合には及ばんから、お孃樣の御全快次第、早速御輿入と、斯樣なお話で。よろしく申上げてくれと、おつしやつてゞございました。
「ウン、さうか、それはまァ御苦勞。さぞ暑かつたらう。――コレボーイ、ラムチでも速く……
待つ甲斐もなく、折角樂んで居た、肝腎の本尊樣を拜むとが出來ないので、少し手持無沙汰に成たが。緣談の都合はます〳〵好く、明日にも病氣の癒り次第、輿入をさせやうと云ふので、心は一層勇み立ち、其日は機嫌直して歸てしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其から一週間ほどの間に、結納のやり取りもすみ、いよ〳〵輿入の日となつて、はじめて嫁の顔を見て――びつくり。寫眞で見たとは大した違で。まづ色は黒し肉は太し。目鼻立ちも醜くて、寫眞とは、似ても似付かず。その上額際に、――白粉でも隱されぬ程の痣が一か所。あまりの事に興さめて、手に取た杯の酒も咽へは通らず。四海波靜と謠はれても、胸には逆巻く涙、さては善助めに一杯喰はされたかト、腹は立ても其場で騷ぎもならず。夜一夜我慢して芋虫と添寢の心持ち。翌朝急いで善助の宅へ押しかけ、前に取替へた寫眞つきつけて、威猛高に談じつけても　善助一向驚かず、

「へゝゝこの寫眞も寫眞師で直しましたのでございましやう。

『あとで樣子を聞けば、星川でも初めは、妹のお時をやる了簡で、寫眞も取り替はし、見合の日までも其心算であつたを、出入の者が急かの注進。只今上野の博覽會で、こんな話を聞いて參りましたと、信切に云ふて呉れたので、きわどい處を一ト先づ見合せとなり。早速善助呼び付けられて、嚴しく談じ込まれ、善助大きに面目を失つたが、誠に申譯のない事を致しました、其の代り私が、今一智恵絞りまして、惡い樣には致しませぬと、又候一策を奉り、姉娘のおとしとすりかへ、萬事私が呑込みましたと、茲に善助返り忠をして、上句の果が斯の仕末。――淺ましや、淺ましや』

◉新學士　　漁山人

八疊の一ト間、さして汚くもない、さして奇麗でもない、床の間にかけてあるは、僧清狂の七絕一篇、その右に積みあげた書籍二ッ三ッ、その左方にノートブック堆くなッてゐる、夜はまだ初更にや丶早い時分、なれど この頃の日和癖の惡さ、けふも夕景から烈しく降ッてゐる雨、その爲めに夏の夜だけれど、暑くないから散霧の內に入るを恐れて、雨戶建て切ッてある、障子の硝子越に緣側を見れば、此室の主人と見えるは、年頃二十三四、色淺黑く、中肉中丈、漸ッとこの頃延ばした樣な短い髭、鼻の下に生へてゐる、ランプの傍に机の前に、坐ッて煙艸燻らしてゐた、そして無言、四邊は靜に、只聞ゆるは雨の降る音、庭前に芭蕉でもあるか、雨聲殊に高く聞える、此靜閑、此雨聲、そして此涼氣、宛然秋の夜の思がする、驚かし易いは、歸鄕の夢、起こし易いは、感慨の心、主人 ポンと吹殼はたき、

(ア、實に書生の境界は長かッたナ、自分で倦々したばかりぢやない、故園からさへ……そう〱いつだッたけ――ウン此處にある筈だ、(机の下の手文庫の蓋をあけて、上を下へ下を中へと、搔きまわして、取りだした書狀一通サッと拔いて口のうちで、讀ンだ文言の上半)

これだ、これだ、ヱ、と日附は……先月一日だ、何時まで書生をしてゐる覺悟、西洋人の樣に一生涯學生で了る了見かッて、酷なとを家君ハいふヨ、だが考へて見ると、無理でない、長いとだからナ、ヱ、

と書生になり初め――小學校へ入學したヽ……………忘れた、久いもんだから、これでも書生の年期の長くわかなかッた好適例、まてヨ、たしか七歳の春だッたナ―ウンそんなものだ―その時分の小學校は、今の小學校から比べて見ると、開けなかッた、單語の懸圖や、單語篇や、日本國盡、世界國盡、地理初歩、日本地誌要略、日本略誌位な者が、その課程だッた、そう〳〵何級の時分だッたけか……六級……五級のときだッたけか單語篇を諳誦して行かなくッて、何に今日は聞かれるもんかッて――あの時分かられは、才はド氣ものだッたナ――そうすると、聞かれた、答へか出來なかッた、先生に大層叱られて、罰にあてるッて、水桶を――水入器に入れる爲めの――二時間チャンと兩手で持せられた、疲勞れて少しでも手がさがると、先生に一層叱られる、が大人でも持されたものぢやない、それをわれ顏もしかめずに、美事持ッてゐたら、先生が――金田は辛抱強い子だといたッけ――彼の時分からわれは、耐忍力が強かッたと見える、一體あの敎師は意地が惡かッたヨ、ウン二級のときだ、何かして――隣席の小林の磨ッてすッて、骨を折ッて濃くした墨を一ト附とッて、それを小林が先生告ひつけたのか知らん、それとも修身の談話のとき、机の下で板附してゐて、われ負たかどうかして、われの墨片落ちて、その音で板附してゐたとが知れたときか、何でも些細な事だッたまた――罰を食はせた、此回は閉口した、今でもよく覺えてゐる位だもの、日本史略を五枚、同ト所を三通り寫せ一字でも誤謬があるか、脱漏てヾもゐるとその誤の數だけ、紙數を書かせるッて命ト、彼ンな閉口したとはなかッた、その時だッたナ、

わが親愛なるお米孃──可哀的だから、助けてあげましやう──といッたのは、そのときのわが嬉サ、何ともいひなかッた、困却してゐるときだもんだから──子供だナ──手跡の異ッてゐるにも氣がつかずに、先生のとこへ持ッて行ッたら、一層お目玉を食ッた──惡いヿをしましたネ、堪忍してヨ──さも氣の毒そうな、お米孃のいッたときの目元の愛嬌……ウンこゝにある筈、

といひながら、手紙を膝の前に置て、また手文庫の中を、彼處此處探して、見つけた寫眞一二葉、これ……ぢやアない、ハテナ　オットこれ、これ、今でも目元に愛嬌があるが」、これより小供の時の方が一層好……われを助けて呉れたから、愛顧眼かも知れネいけれど……われ、その時分の愛や戀を知らぬ、無心の、清淨のわれ──何に貴孃が惡いのぢやない──と思はず抱きついて、皆んなに嘶し立てられた、それから抗はれて、敎場のボールドや、雪隱の壁、門の黒板塀にまで相合傘の中に二人で立つてゐる樣になつた、そも是が二人の戀の初だ、その時分から見ると、この寫眞は一體に大人びて來た、小林はどうしたらう、このヿからだつたけか、何でもお米孃のヿに就て、呉越の中になつたが、今では却つて幼馴染が戀ひしくなつて來た、妙なものサ、お米孃と浮名が立つてからハ──これが眞の浮名サ、何も二人とも、末には夫妻にならうと云ふ樣な心は、微塵もなかつたから──嫉妬……でもあるまいが、皆ンなが一處に遊んで呉れない、お米孃も亦同運だから、仕方なくツイ二人でばかり遊ぶ樣になつたから、交際も一層親密になつて、終には兄弟同樣になつて、互に親からもらつた菓子を常に二人

で分けて食ふ、それからわれお米嬢と共に小學校を卒業して、われは中學校に入つた、お米嬢は伯母さんのところへ、裁縫の稽古にいつた、かく離れても、依然互に往來して、遂には泊まることも泊めることもあつた、かう親密になると我儘が出て來て、すねたり、ぢれたり、果は泣いたりして、喧嘩もしたが妙サ、直にいつた仲が直つて、元の如く嬉々として遊び戯れてゐた、われ東京へ來るとき、訣別に行ッたとき、われ——お米さん、僕の立派になッて歸つて來るまで、何處へも行かずに、お嫁にも行かずに待ッてゐるかェ——と子供心にも生別の悲哀に、眼を赤くして泣いてゐたお米嬢にいッたら、彼の愛らしい眼を衣服の袂でこすり／＼——アヽ何十年でも待ッていますから、立派になッて歸ッていらッしやい、だけれど成るたけ早くヨ——と嫣然笑ッたその顔、早曉の蓮花、悲哀の露でおよ／＼してゐる顔色、雨後の月、涙で一層清く洗ッた眼の光——アレ今でも目前にちらついて、アヽ逢ひたい、見たい語りたい——そのときのわが嬉サ、かくまでわれを愛するかと思へば、哀サ、この愛らしき友と生別の涙を拭きあふかと思へば、そのときわれ十五、お米嬢は十三、それから東京へ來て、中學校へ入學しやうと、願書を出したとき、府縣の中學校と東京の中學校とは、學課の程度が異なるから、とても元級へ入れるとは出來ないと、幹事の奴め言ッたときは、業腹だッた、何も府縣だッて、東京だッて、均く中學校だもの、差はない、課程に高低はない筈と憤ッた——今でさへ地方の人文ハ東京の樣に開けてない者、その時分少しも無理でなかッた、幹事の言は——それでは中學をヌキにして、大學に入學しやう、それ

には豫備門へ先づ入學しなければならぬ、それには英語を學ばなければならぬ、それには私立の塾舍の善を撰んで、そこで勉强するが捷徑また順序だと思ッて、入學したは成立學舍―今川小路にあッた時分だッた―この時分はまだ東京慣れぬから、日がな一日本ばかり讀ンでゐたから、進歩も早かッた、この位餘念なく勉强してゐた時でも、暗愁を催ふしたハ―お米孃のこと、せめてもの遣悶になッたは鯉魚、それが來るのが待遠であッた、幾度となく卷舒してゐた、次の鴻書が來ると、以前のは仕舞ッておいて、こんど來たのばかりを讀ンでゐた、文庫から入れたり、出したりして、チ、文庫といへばこの文庫だ、上京のとき家萱からもらッて來た、家萱の手文庫、紋の金は摺り切れ、漆も大分禿げて來た、今では八九年になるから、それから二年立ッて首尾よくし―思ひだしても愉快だ―豫備門の入學試驗に及第して、控所の掲示に姓名を見つけたときは、落第ぢやァないかと、非常に心痛した―算術の試驗は難問題であッたから―その反動で非常に嬉しかッた、そうそう、こン時だ、同窓の友人を誘ひだして、牛肉店に始めてあがッたのは、それでも極りが惡いから、酒とは容易にいへないかッたが、友人が命じて呉れた一合で、二人とも大醉して、行歩蹣跚と塾へ歸ッて來て、門で友人に逢ッたら―イヤ奢ッて來たナ、ウンお目出度仲間だッたナ―いはれたとき、われ思はずニッコリ笑ッたばかりで何もいはなかッた、このニッコリ一時評判になッた、眼を据えてニッコリだもの、もの凄いッて、家君のところとお米孃のとこへ、これを報知したら、お米孃は―昨日鵲喜の兆あり、今日此吉報に接しい、

まことに目出度きことと喜びをりやんす——いってよこしたに、家君は何も祝すべき、賀すべきことでもない、當然だ、東京まで遊びに出しておくのぢやないから、それに小供の癖に——小供ッて十八、ぎり〳〵に精算しても十七だ、女なら子の一人や二人はある歳だのに、親はいつまでも小供と思ッてゐるは、千古の人情だナ——牛肉店などへ、飲食に行く、生意氣だッて、非常に怒ッて來た、一體われ喜の餘り、委細に書いてやッたからだ、豫備門へ入學するとが出來たら、一度歸鄉しやうと思ッてゐたから、このとき故國へ旅費を送ッて呉れろといッてやッたら、あの淸狂の詩篇をよく讀め——これだこの軸の、男兒立志出鄉關、學若無成死不還、埋骨豈期墳墓地、人間到處有靑山——われ亦學若し成るなければ死すとも還らずといッたハ。僅か一昨年それに歸鄉したしなンて、優柔不斷な卑怯未練な心が起つた奴は、成業覺束なし、早く歸つて來い、一生百姓させるからッて、怒ッて來たッけ、われ怨めしくもあり、口惜くもあり、腹立たしくもあッたが、此激烈の語が成業の道の指南車となッた、これも子を思ふ情の至極至切だからのと、だが當時は實にわれ激して、當分音信しなかッた、家萱から音信のないは病氣ぢやないかッて、心配した書信の來たまでは、お米孃のとこへは、それでも無音にしなかッた、今考へても殘念だッたは、もう今年は豫備門卒業と思ッてゐたら、また第一高等中學校となッてそして一年ましたときサ——大學の方で一年減ッたから朝三暮四だけれど心持がちがふ——これに激せられて、日本には完全な學令がないから、こうなるのだ、これを補ふは後進のわれ等の任だよし〳〵法學士になつて一番や

ッてやらうと決心したそれまで化學は面白い愉快な學問だと思ッて、理學士になるつもりだッたが——大學へ入學したときは、先に懲りて家へ默してゐたら、今年は大學へ入る頃だが、まだか、落第したかつて、家君からいつてよこした、これ世に出る方便の道だから、その道の何處を今行歩いてゐるも、一一報知するにも、及ばないと思つてたからといつてやつたら、老親の心配を知らんかとまた一本打ち込れたッけ、ア丶どうしても長い物には卷かれるナ、ウンその頃だ、われ家へ送る序に、米孃のとこにも、寫眞を贈ッたら大層嬉ンで先方からも送ッてよこしたは、これこの寫眞だ、その翌年即ち去年の七月末だ家萱から家君が病氣だから歸ッて來い、丁度今は夏期休業だらうから好都合といッてよこした、われお米孃に小供のとき別れたから、そのときの姿ばかり眼に寫ッてゐて、これほど大人にならうとは思ッてゐない——自分の大人に成ッたは、燈臺の下暗くして見えずに——寫眞のこの姿を見て、一度逢ひたくなつたときだから、早速仕度した、明日は久し振で故園に行かれる、彼の門の傍の梅はさぞ大きく成ッたらう、美い花を咲かせ、美い實を結ぶだらう——われも一年で花さく時が來る、彼の池にわれ畔で捕へて來て放した鯉は、大きくなッたらう、昇天の勢になッたらう——われも今年は昇る瀧口に達する、ア丶待遠だナア、書生は飽たナ、この時始めて卒業が待遠にあッた、一日も早く一刻も速に、歲月が流れ丶ば好いと思ッた、それまでゝ學生の境界は愉快だ、一生學生でゐたいと思ッてゐたに、彼の白狗——叔父さんところからもらッて來た尨はどうしたらう、大きくなッたらうがわれを忘れて吠えつ

くだらう、兩親も卒業が待遠しくなッたらう、ア、卒業したくなッた、萬感千思、胸に頭に積ッて來て、五體を押しつけ、その夜は少も眠られなかッた、サア出立となッて、二階を、こゝの二階を降りやうとしたら、故園から手紙が來た、（また更に手紙を文庫から出して）ウンこの手紙だ、親の病氣位に動かされて、始に誓ッた語を、反古にする樣な奴は、子でない、わが子でない、いまが大任、その大任を打捨て、歸ッて來ることはならぬいッて、これにわれ氣脱けがして、思はずドッかと階子段に腰をかけて茫然、餘り業腹だッたから、大磯へ行ッて、しまッたッけ、が、これは今考へても、家君の言理がないヨ、子として親の病氣ときけば、誰しも行く、行ッて行かれぬ所でなければ、そして今年マア首尾よく卒業、握ッた此卒業證書、（机の上の卷いた紙、ちよいとあけて見て、また机の上におき、煙艸一燻）けれど斯學に志した時分と今と、大に時が異ッて來てなか〳〵、滿足した位地はない、官省の試補、それも其得意の學術で、月給でも呉れば誰も得意の所へゆけば——可なりだけれど、卒業の點數で呉れるから恐れる、代言人も面白くない一生喧嘩やその仲裁で、飯を食ふと思へば、そうかといッて、裁判官も詰らん、碌に法律を知らぬ判事殿の下風に立つのだもの、マアなッて見たいは國會——議會の書記官だナ、何しろ初期だから、創業の功臣となれるから、けれど試補といふ官制がないと思ッて、新設になッたと知らずにゐたらうに空地がなくなッた、いッそ大學院へ入ッて、研究しやうとわれ思へば、家君からは一生書生する氣かッて、いッてよこした、意地の惡いも太甚しけれど、此寫眞の樣子では無理もなし、（文庫

から更にだした寫眞一葉）この春寫されたのだが、家君も家萱も額による年波が明かに算へられて來た、オヽ頭髪も大分胡麻鹽になられた樣だ、家萱ハまだそれほどでもあるまいが、家君の腰には、昔取られた梓弓の面影が現はれて來た、東京へおいでなさいといへば、恩給の田地田畑を手離すは厭だと、昔堅氣をいはれるし、困るナ、お米孃からも、今度は兎も角も一度歸れといッて來た、恐くは婚……公式を擧げる積だらう、（またその寫眞とりわけ暫し眺めて、無言）この楚々たる風姿、この雅々たる態度、この愛嬌で丸めた顏、この涼やかな目元、この優やかな口元、この鼻筋の通ッて、威ならず、猛ならず、額際淡ならず濃ならず、眉太からず細からず、和氣、喜氣、嬌氣、愛氣、藹然、淡粧も佳、濃抹も亦宜からう、色は――寫眞ぢや知れないけれど、小供のときから白かッたから、今も白からう、この笑ひそうナ、この語りそうナ顏つき、顏が見たい聲が聞きたい、（しばし眺めて餘念なかッた、恍然）兎も角も一度歸省して來やう、兩親は思ふほど老衰しちやゐられないかも知れぬ、また相談のしやうもあらう、そして第一お米孃にも逢はれるから、けれど、二人の兩親が得心しなかッたら……今の處では、これが最近の希望だが……まさか、行ッて見たら、案じたよりも易からう、歸鄕と決心しやう、かうと（身邊見まわし）、こゝはこの儘そッくり、こゝの家へ預けて行かう、ウンそれがいゝ、それがいゝ、オットこの卒業證書是非持ッてゆかう、何だか明朝が待遠になッた、サア早く寢やう眠れば速に夜が明けるから、（手を拍つ、二聲）オイ今日洗ッて吳れた寢衣を持ッて來て吳れ

◉風流狂言記

眉山人

《上》

日本人竹河隆三、親も無し、子も無し、定まる妻も無く、これといふ厄介も無し。浮世にたつた一人の男、此頃學生の梯子を登りつめて、直さま雲の上にさる省の高等官となりすまし、二三の屬官を目の下に、撿印の急がしき身上なり。うつれば變る川の瀬哉、昨日までは度々の剃刀うるさくて、しやう事なしに延ばした髯も、今更役に立つて髯油に樣子を賣り、短艇競漕に逞ましき櫂を握つた手も、護謨製新形の花車な洋杖を持つやうになり、六尺肥滿の大兵にフロックコートの着工合立派に、呂塗の手車を走らする時は、葉卷の煙高帽子をかすめて製造所の煙筒の如し。神田駿河臺に手廣の邸を構へて、門内は小松の綠を張らし、二間長四疊の玄關、敷臺の前の小砂利は車の齒と嚙合ふと日に幾度か知れず。家内は小間使一人、取次の書生一人、日に一度麁相する下女一人、喧嘩好の車夫一人、主人公を合せて都合五人の暮し、これだけが竹河一家の事務を始末して、朝の奥の間靜かに、宵の臺所賑なり。夕暮の風雲の峯を崩して、八日の月松の梢に涼しく、庭の草木も打水の化粧をすまして、葉末をチヤンと立直す頃、主人隆三風呂より上りて、白地の浴衣に着更へ、居間の緣先に拱手して、團扇つかひながら庭を眺めて居られしが、やがてランプの傍近く來て、煙草を相手に、新着のコスモポリタン（雜誌）を讀初め

たり、隆三今年二十四歳、色は黑けれど顏立醜からず。眉は長く濃く一の字を引き、目は丸くして少し釣れたり。口は大きけれど、唇厚からず。鼻準く、額廣く、笑ふ時頰に深き片笑靨入りて、白く細かき齒に愛くるしき處あり、長く延ばしたる髮は縮れて飽迄黑し。隆三今は蚊を拂ふとも忘れ、暫く讀物に氣を取られて、垣近き蟲の音、鬢のほとりに騷く風、うと〳〵覺えながら二三枚心よく讀かけし時、隔の襖の開く音に首を上ぐれは、柱の蔭より顯はれ出たる此家の奏者大沼貞行君、面鞄滿面を粧つて筋骨逞しき大丈夫、行丈短き薩摩ガスリを着て、天竺木綿の帶を十重二十重に卷付けたる好の出立、座敷へ這入る時腕まくりの袖を直し、まだ主人公に馴染薄き爲か、恭くお辭義して、

「只今此方がお目に掛りたいと云ッてお出になりました。」

いひながら差出す面積の廣い名刺表に三號活字で堀井春雄と大きく讀まれたり。主人は一目見るより吹出し、

「こゝへ通して吳れ。」

程なく入來る名刺のぬし。プラチナ緣の鼻目鏡かけたる丸顏の男、主人を見てうなづくやうに目禮しながら

「ヤ。大さう暑いトやないか。」

至極簡端な挨拶振、遠慮もなくどつかと座つて、直に羽織を脫ぐ、主人は笑ひながら、

「何だつて名刺なんぞ出して改まつた事をするのだ。そして又こけ威の、大きな名刺トやないか」。

「ハヽヽヽナニ取次のものが新參で、僕の顏を知らないと見えて非常に丁寧に、御上使のお入のやうに取扱つたから、一寸容體ぶつて見たのさ。外に仔細はなし。」

口輕く言切つて扇取出し、大手を振つて扇き立てる、此人主人と同縣の生れにて、同じ經歷を過ごして來た當世男これと云ふ主義は無けれど、浮世は面白く渡るべしと、始終心掛る人物なり。隆三は勢よく煙草の烟を吐出し、

「役所は隙だナア。兼ての豫想とは全く反對して居る。日數は淺いけれど、今日迄これと云ふ仕事はやらんではないか。」

「然し此儘では過ぎない。今に參考取調といふやうな事を言付かる。さうすると試驗前の復習よりは中々急がしいぞ。」

「そんな事でもないと腕を試すとが出來ない。」

「それほど腕が試したくば羅生門へ行くがいゝ。」

「ハヽヽ先そんなものかナ……………何うだ一昨日の改正案──は僕の意見は中々手酷かつたらう。」

「ムヽ餘程過激な攻擊だつた。然し餘り理論に過ぎて、あれではとても實地に行はれん。君は學校の討論會の氣組でやつてのけたのだらう」。

「イヽヤ隨分實着にやつた積だが………まだ書生風が脱けないかナ。」
此摸樣の對話長く續いて、舞臺の廻るまでに、小作の小間使顯はれ、黑檀の丸卓あらはれ、それと共に大瓶の白葡萄酒、腹にたまらぬ肴二ッ三ッ出でゝ、臺付のコップ主客の唇にしきゝりなく飲物を運べば、客は先に紅くなり、目の中少しとろけしが、主人はなる口と見えて、顏の色少し艶を出したれど、黑光りの玉山崩れず、だが前よりは笑ふと多きばかり、隆三は膝を建直して、
「君に向つて云ふ事がある。」
「何事だ。」
一段聲を張上げて、眞直に居住居を直せば、主人は笑つて、
「そんな大きな聲をする程の大事件でもないが、僕は此頃大に感じた事がある。」
「謹聽!」
「外でもない、細〳〵した家政の整理に僕自ら當るのが面倒で堪らんのだ。これが第一の不自由で、それから僕が先外へ出て百般の事務に當つて來る、そこで家へ歸つてからその勞働を慰め、氣力を勵まして吳れるものがない、ツマリ家内の快樂に乏しいと云ふのが第二の點で、第三には………」
耳を傾けて聞いて居た春雄こゝで口を差出して、
「跡はモウいゝ。言をかへて云へば妻君が欲いと云ふんだらう。」

「君が女房を探がすやうになるとは、實に有爲轉變の世の中だ。」

「さう云はれゝば大きにさうだ。寄宿舍の中堂で、獨身論を主張した時分の考へとは全で變つた。然しこれは僕が望んだ譯でない、社會が僕を餘義なくしたのだ。」

「質屋の番頭が品物を改めはしまいし、そんなにひねくッて見なくッてもいゝじやないか、ハヽヽヽ」

といひながらコップを取上げる、主人は眞面目になり、目を下に注いで、

「イヤ冗談ではない。何うも妻がないと浮世が兎角圓滑に行かないよ。それに困るのは、云ふとがそれの價直だけ篤實に聞えないのだ。假令ばある議論を提出しても、一般に若氣に逸つていふやうに思はれるのが大に不服だ。」

「そこもあり蓋もある、さういふ事ならやるべしく。僕も共々盡力しやう。」

「サアそこで適當の者が無いには實に閉口だ。」

「して見ると君も隨分探したと見えるナ、油斷のならない。」

「イヤさうではないが、少しは當つて見た。」

「小當りにか。」

「左樣だ。」

「君も近頃社會的の人物になつた。昔の竹河隆三でない。

「そんな浮いた沙汰ではない。極く眞面目にさ。」
「なぜゝ容體ぶつて言ふ內が殊勝だ。ナーニ其人と爲りを知るには情遊も必要だ。」
「それも企てゝ見やうと思ふ。そんな知識も得て置くはうがいゝ。」
客の言葉は稍輕く、主人の言葉は稍重く、一張一弛、井戸替の綱のやうな話の內に、コップの水おひおひにかえほして、替目の瓶も半分はどになれば、客は全く醉ひ、主人は少し醉ひ、客は腕を捲り上げ、主人は胸を廣げて手荒く團扇を使ふ。雙方共に胡座かいて、容體は今消えた螢と共に行方しれず。四角なものは椀の中の豆腐ばかり、それもやがて箸に崩れては、月も丸く窓も丸く、客の頭も丸く、主人の肩も丸し、此處さすがに書生の名殘ありて、親指の股にペン蛸のあらはれ時なり。客はハンケチを取出して口を曲げながら顏の汗を拭き、鼻目鏡をはづして臺の上に置いて、
「そこでどういふ妻君がいゝのだ。」
「さうだナ……まづ梅山夫人のやうなのが欲しい。」
「年が四十一で額に大佛のやうな黒子のあるのをか。」
「皮肉な男だ、そんな處に目をつけなくともいゝ。」
「では何ういふ處へ目をつけのるだ。脊中へつければ鰈の中子、頭へつければ蜻蛉の親類。」
「アゝ度しがたい、止みなん〳〵」。

「やみなん〳〵夕立の空、跡よりはるゝ蚤の疵、とこまかせのよいとこさ。」
「ハヽヽ手がつけられない。」
「梅山といへば此土曜日に新築の座敷開をやるッて案内狀をよこした。君の處へも來たらう。」
「ムヽ來た。例の華美好の事だから賑な事をやるだろう。」
「その日には未來の妻君が澤山來るぞ。何うだその内で撰んで見てハ——お望なら審査の勞を取らう。」
「君の審査は眞平だ。此毎の日曜に、三河伯の夜會での失策は未だに忘れられない。」
「アレハ陶器の審査僕の長所ではない。人類の鑑定なら恐らく何處へ行つたッて引を取らない積だ。」
「何うだか當になッたものでない。」
「イヤ決してさうでない。今度は一ッ手際を見せやう。」
「モウ澤山だ。此上は何んな目に逢うか知れない。」
「さう信用が薄くなつては仕樣がない。堀井春雄君の名譽も地に落ちた。」
「地に落たッて犬も喰はない。」
「それトやア僕の名譽は夫婦喧嘩と御親類だ。」
「ハヽヽヽ」
此時片隅にかしこまつて居た小間使の兼、團扇を額に當てたまゝ居眠をするを、客は見て管煙で指さし

ながら、

「見たまへ兼が初めた。おも梶とり梶、どつこい〳〵兩國も過ぎたナ、それ當ります。」

言葉終らぬ内、兼の體は前にこけかゝれば、兩人揃つて、

「アハヽヽヽヽ」

聲に驚いたか、兼は大きな目をパッチリ明いて、キョロ〳〵兩人を眺める。堀井は又笑直して、

「イヤ兼ばかりでない、僕も眠くなつた。ドレ行かうかナ。」

立つて帶を締め直す。此時月は南の空に高く。遠き隣の軒より、砂糖水にあやなされたる鈴虫の聲微かに響く。風は若竹の葉を洩れて床の間の掛物にそよぎ、耳をすませば、四面しんとして去る程に小供の聲もなし、輕く辭義して堀井は歸れば、跡片附に急がしき小間使を殘して、主人は座敷を捨てゝ庭先に出で、月を上に、影法師は一處に止まらず。庭下駄は飛石を離れて、裏手の植込に近く、こゝは若葉に遮ぎられて少しほの暗き小天地、月にめだつは主人の浴衣ばかり、隆三はそこに足をとゞめて、ヂッと月を眺めしが、其顏次第に打向いて、團扇を胸に――沈む心の内は何？暫くして、

「ア、女房？」

思はず聲を出せば、足下の蟲の音とまりて、首筋に抱きつく蚊一ッあり。

（中）

下谷西黒門町に、黒塀高く角地面を折廻はして、いかめしき門構の邸あり。玄關への大道直うして砥の如く勝手への小路曲がつて鋏に似たり。家は總檜木普請、四階の家の棟に、風見の烏ニコライと淺草の塔に背くらべして立つ。近き頃まで纏半天の男二十人ほど日毎に入込んで、鐵槌の音鉋の響一日も絶間はなかりしが、見る内に此家出來上りて、今日十五日座敷開の披露あり、主人梅山貞一とて紳士仲間に顔を知られたる男。富沃の鑛山三ッの所得を肥ッた手の内に握り、これだけの收入で、浮世の大道に馬車を走らして人も怪まず。新會社の創立委員に名前だけを貸せば、天下安心して株主直に集るほどの人物、ア、金は權力なりと、程近き下宿屋の二階に、中國訛の書生の話なり。午後三時過より、來客渡鳥の塒のごとくばら〳〵と集りて、門内は目瞬く内に車の立場となり、玄關にお辭義の數しげく、奥の間は笑聲の波を打寄せ遙に遠き臺所に陶器の壞れる音二三度あり。日は夕暮に程近き頃、竹河隆三堀井春雄、兩人打連れて、手車二輛勢よく走らせ、土砂を蹴立つて門内に乘込んだり。

「お出遊ばせ。」

丁寧に頭を下げし仲働の女に案内されて、堀井を先に竹河と三人、足並不揃に木臭き長廊下を通る時こなたを指して來る人あり。年は四十ばかり、丈は中丈にして、肥りきつたる體に薩摩上布を着流し、其上に黒絽の羽織を着て腹を突出してのつし〳〵と近づきしが、兩人を見るより少し急足になり、丸く下膨の顔を又丸くして、

「ヤお揃で……能うこう。サ、何うぞこちらへ。」

これが今日の主人なり。春雄はスッと前に進んで、

「大きに遲刻しました。少々役所の方で手間取つたもんですから、」

「アー左樣で……今一足お早いと、貴郎のお好な河東をお聞に入れましたッけ。」

「それは惜い事を致しました。道理で虫が知らせたと見えて耳の穴がむづ〳〵しました。」

「きつい合鏡ですね。……鏡と云へば竹河さん先日は有難う御座りました。」

「イエつまらんものを……お禮でいたみ入ます。」

春雄は口を動かしかけしが、此時早く拍手の聲耳元に押寄せて、忽ち三十疊敷ばかりの廣間に出たり。電氣燈ぱつと夜を隱して、御召の裾長く、島田の鬢すいたる美形二十人、袖をつらねて今手踊を始めた處地方の聲うつくしく、囃の鼓面白し。來客は總勢五六十人、髯黒々といかめしきお方、金緣の眼鏡かけた若紳士、ブラッシで髮をいぢめた公達、腦天に艶布巾かけた老人、束髮の姫樣、文金の孃樣、白の丸髷、黑の丸髷、洋裝和粧とりまぜて、綺羅〳〵しき明治の風俗こゝに集めて洩らす處なし。盃は其間を廻燈籠、或は巴の字或は網の目、蜘手かくなわ十文字、八方四面にめぐり〳〵て、止る處何處か知れず。主人は設の席に兩人をつかして、又座敷の外に立出たり。

「竹河、右から三番目のは中〳〵巧者にこなすぢやないか。」

小聲に囁く春雄、隆三は笑ひかけて、

「相かはらず其方には鋭敏だナ。」

「イヤ藝を譽めたのだ。單に美術心ばかりのものを捕へて……君も中々酷評家だナ。」

いへと答へぬ隆三、不思議と振返りて其顔を見れば、彼はさる方をヂッと見詰めて身動もせず。春雄も同じく其方に目を注げは、東の窓を少し離れて、行儀よく座りたる美しき人あり。芳紀は十七八、今が春の盛なり、色は底白に白く、鼻は彫刻師に見せてこれほどの作はなしと云ふべし。第一我慢がならぬは愛くるしき重瞼、それの一轉をれだけの命を取るか知れず。受口の愛敬は母親の讓物か、父親の筐か此唇一ッで城も國も蜻蛉返りすべし。生際の厂行は横禿の伏勢なければ連を亂さず。三日月形の眉は蜒蚰の雲なければ鮮かに拜まれたり。髪は手際よく夜會結びにして、艶〳〵しき黒髪なか〳〵厭にあらず。三ッ紋黒絽の衣裝に、裾摸樣は觀世水を淡粧とし、練の下重に、同し白襟、そのうちより水際立ちたる首筋水仙の根の如し、春雄はつく〳〵と樣子を見て、又隆三の方を見れば、未だに目を動さず。

「オイ竹河、人の事は云はれないぜ。君は何處を見てゐる。」

いひながらソッと肩を打てば、急がしく振向く隆三、

「エ……何だ。」

「とぼけるナ。外の人が踊の方に注目して居るからいゝやうなものゝ、チッと嗜むがいゝぜ。」

「何を………」
「ごまかしてもいけん。僕は先刻から觀察して居た。」
「悟られたのか。それでは仕方がない。何うだ中々美人だらう。」
「ムー先マアさうだナ。」
「けしからん。君は兎角點が辛い。」
「てんが辛けりやァ舢が甘いだらう。」
「ハヽヽヽ相變らず詰らないことをいふ。」
「此方が罪がなくつて餘程いゝ。」
踊こゝに終を告けて、拍手の聲又再び沸出たり。來客の內、新らしく兩人を見付て、矢繼早の聲五六人の口より續けさまに、
「ヤ竹河さん。」
「堀井さん、其後は暫く………」
「堀井さん一ッ獻上」
「竹河さん大分遲いお出ですナ。面白い道草でもありましたか。」
「竹河何うだ一杯、此大杯で………」

兩人は一々挨拶して、獻酬首尾よく盃に波立つ時、主人兩人の前に來て、例の丸き膝を春雄に押向け、
「堀井さんお盃を戴きましやう。」
「只今差上やうと思つて居た處、(猪口を差出して)時に今夜はいろ〳〵御趣向がありさうですな。」
「ありますとも、これからが山です……竹河さん一向上がらんやうですね。」
「イヱ、いつもの通り顏に出ないばかり、腹の中は薦冠で滿たされて居ます。」
「腹ばかりでなく爪先にまで滿たされるやうに願ひます。」
「梅山さん、あちらの窓の右の方に座つて居る束髮の貴婦人は何といふ方です。」
何氣なさゝうに問掛る隆三、主人は向を見、又竹河を見て笑を含み、
「あれですか。あれはゝゝゝ」
言葉を切つて又笑ふ。春雄は口を差出して、
「梅山さん。竹河が先刻から餘程熱心で、踊は餘所にして向ばかり見詰めて居るといふ次第です。」
隆三は春雄を一寸睨んで、餘計な事をといふやうな顏付、梅山は見て笑ひながら、
「あの方は西京の室小路男爵の令孃で、ツイ此間此地へお出になつたのです。一昨日でしたか乳母が來ての話に、昨今結婚の口を求めて居られるさうです。」
「ハヽア成程。」

一寸膝を進めて隆三、春雄は脇目で見ながら、ソッと隆三の背中を突く、主人は得意の快活の音聲で、

「竹河さん、お望なら紹介の勞を取りましやうか。」

「何うぞ、、、お知己になるのは私の光榮で。」

「暫くお待なさい。」

言捨て座を立つ主人、直に美人の傍に近より、耳に口をつけて何事か囁けば、美人は打向いて莞爾、又隆三を見て笑ふ時、人形笑靨今を春邊の頰に寄せて、花の上に露もこぼれるばかり、隆三は慌てゝ打向き、傍の煙草を急に吹かして、烟の中に顏を隱したり。主人は遠くから手招して、

「竹河さん。一寸何卒こちらへ。」

隆三の心臟今更のやうに波を寄せて、暫く立兼るを、春雄は又ソット後を突いて、聲を忍ばし、

「早く行かないか。」

いはれては尙進ます、これではならず、思切つて立上り、心に氣遣なひがら、主人の傍、美人には離れて座り、主人に向つて、

「何ですか。」

「態〳〵お呼立申して恐入ますが、今こゝで貴郎の御話が出た處が、お知己に成りたいと申される方があるので………」

と云ひながら美人に向ひ、

「花子さん、此方が今お話申した竹河隆三君で、當時賣出しの若紳士です。竹河さん、この方は室小路花子さんと仰有る鴨本場の美人でまだ、東京へ來てから一向不案内であるからお引廻を願ひたいとの事です。」

兩人は一樣に義辭して、竹河は繼足して頭を二度下げたり。「御別懇に、」「お心易う、」釣鐘のやうな聲、風鈴のやうな聲、互に入交りて後は、少ししらけし風情なり。座敷は最早亂軍となつて、三々五々、鐵輪となり、井げたとなり、さては百萬遍の圓座を作りて、竹河の居廻りに人氣少く、主人もいつの間にかそこをはづして、兩人差向の疊二疊、こゝぞと隆三の腕は鳴れども心は旗色におびえて氣合を計るばかり、

「いつ頃東京へお出になりました。」

氣を置くやうな調子で問へば、

「ツイ一週間ばかり以前に來りました。」

「モウ大抵御見物になりましたか。」

「イエ、まだ一向存じません。まだ折々方角をも間違へます位で…………」

「ナト御案内を致しましやうか。」

「何うぞお願申します。」
「當地におちかづきの方は餘程お出ですか。」
「今度初めて來りましたので、親戚の者の外は丸でお馴染がありませんですから、何うぞお隙の節はお話にお出下さいまし。」
此時顔を眞紅に染上げた三十恰好の髯男、隆三の傍へよろけながら來て、
「竹河、君でおくつては納まらん事がある、一寸來たまへ。サア、」
「僕は一寸用があるから暫く待ちまたへ。直に跡から行くから、」
「いけん〳〵。君の直と鰻屋の只今はいくら待つても埒が明かん。急用だよ、急用〳〵、珍事急用、早く來ないと消えてなくなる、評判の玉やといふ用事だ。コレ云ふ事を聞けといふに…………。」
兩手でかゝえて、無理に抱上ぐれば、
「仕方がない、行くよ。放せ。」
「イヤいつかな放さない、放生會の時までは放すとはならん。」
無念ながら、竹河は花子に目禮して抱かれて行く。これからが話の目算無二無三に崩され、後髪我心に引かれて、未練帶際に取付き。足袋の裏に執着の膏藥、疊に吸ひつきたき思なり。
「サア連れて來た〳〵。」

どつかと下ろされた處は、五六人一座の眞中、春雄の笑顔も其中に並びたり。今隆三の姿を見るより。どつと一齊になぶりたて〻、和事師?あやかりもの?てんでに唇の反をかへし、花子を名として降來る猪口、敵は多勢味方は一人、初めは觴の一杯も、末は身の內に眠江の波を打つて、命から〴〵此座を切拔け、足元はよろ〳〵、醉眼とろ〳〵と以前の席を見れば、花子は最早居らず、兎角醉心の苦しく、座敷を出で〻廊下を千鳥に辿り、南の庭を正面に見たる緣先に來れば、樹の間の瀧の音細かに岩を音訪れて、小石の上を流る〻水月に漣をうつし、螢二ッ今葦の葉影より流れて水際を慕ひ行く、夏の夜は凉しきを賞美の筆頭として、松の梢を見れば風松にあり、蘭の葉末を見れば風蘭にあり、これを襟元にそよがして、知らず〳〵暫く肱枕の轉寐せしに、夢か、夢にあらず。耳元に微妙の聲ありて、

「もし貴郎、お風邪を召すといけません。」

微かに目を開けば、傍に花子の姿滿面の美を目に集めて、ヂッと此方を見詰めながら、素直に美しき手を隆三の肩に置いて、靜に搖起して居たり。隆三はヅッとしてはね起き、

「オッこれは……何うも恐入ります。……醉つて餘り苦しいもんですから、ツイ……」

「まだいけませんか。水でも持て來て上げましようか。」

「有難う存じます。イエ、モウ何ともありません。……貴孃わざ〳〵お出下すつたのですか。」

「イエナニ、貴郎がこちらの方へ入らしつたきりお歸がありませんから、何うかなさりはしないかと思

ひまして……實に氣掛で……」
隆三はとゞめを刺されて、何とも答する程の價値ある言葉も知らず。やう〳〵、
「それは何うも……」
「あちらへお出になりませんか。」
「參りましやう。」
身輕さうに立上りしが、足が座はらぬか、ふら〳〵とよろめくを、
「オヤお危なう。」
手早く抱止める時、折か、柏子か、チッと重り合ふ手。……理學でも分からぬ艶電氣……隆三は心の置所を知らず。やう〳〵座敷に着けば、來客は皆歸りし跡、殘るは堀井ばかり、今主人と差向ひて、何事か小聲に囁き居たり。梅山は兩人を見るより、
「や。お出なさい。さうした所は一寸道行と云ふ姿がありますせ。」
「僕が一トくさり獨吟をやりましやうか。」
春雄もすかさず、
「イヤ貴郞には本釣鐘の聲色の方がはまりましやう。」
「ハヽヽ。竹河さん今茶をしたてた所です、一服如何です。」

「結搆、戴きませう。」
間もなく茶筅急がしく、颯と茶碗の中に時雨して、醉後の一服快よく膓を洗ふ折から、梅山は布巾を絞りながら、
「時に皆さん、明日は日曜ではあり、川開ですから、見物かたがた納涼は如何です。堀井さんは無論御同意下さるだらうし、花子さんは珍らしいから是非御覽なされなければならん。竹河さん何うです。」
「尤も望む處です。喜んで御同伴を願います。」
「花子さんもお出なさるでしやう。」
「御邪魔にさへなりませんければ…………」
「それで話は極つた。」
「一ツ〆めましやうか。」
「堀井さんも中々通つたもんですね。」
話す間程なく、夏の夜の月より更けそめ、迎來り花子は歸れは、其外に春はなし、堀井を誘立てゝ續て玄關に立出る隆三、向を見れば、今門を驅出る車上の花子表の瓦斯燈パッと姿を照らして、横顔に鬢のほつれを見せしが、後に隆三の聲に。振返りて見合はす顔笑靨は美人の極印と、隆三此時に悟りぬ。

（下）

月は西の叢雲の中に眠りて、一しきり犬の聲の跡は、萬象死灰の如し。竹河家の周圍は殊更に靜まりかへりて、町の角の立場に客待の提燈も見ゑず。萬世橋のあたりに、夜賣商人の呼聲川水に響く外は、夜廻の拍木時々消えわたるばかり、それの間は輝めく星の影靜かに夜を守りて、涼しき風張合なさゝうに吹く。されど此時、一人うつゝの夢を見る人あり、隆三の部屋はランプ宵のまゝに燃えて、蚊帳の中に團扇の手未だ休まらず、先程梅山の家を出てより、車の上、部屋の中、さては枕元まで、右に左に、花子の姿は拂へども去らず。身は横に、目は塞ぎながら、あり〱面影に取付かれ、耳の底に思の聲ありて、我から求めた夜伽、次第に時計の鳴るをも知らず。或時は雲霧のやうに目前にあらはるゝ梅山の祝宴、春雄も貞一も其内にさまよひしが、それは忽ち花子にけをされて、窓近く倚掛りし時より、歸際の笑顔まで一々洩らさず。――念佛講の六字――同じやうに繰返して、いつを限と知らざりしが、果は我と我を笑つて、

「アヽモウ思ふまい。何の事だ、つまらない、一人で思つた所が何になるものか。一寸遇つたばかりで……少しばかり話をしたゞけで……アヽ我ながら心弱い。結果のない空想は身を刻む斧だ。」

煩惱拂ひのけて、心眼しつかと塞ぎしが、寐られやうか、跡より沸出る淸水、いつか苔の下より、

「然しアノ仕打……あれを消極的に見做すとが出來やうかだが……初對面のものにそんな事が……けれども情と云ふものは不可思議なものだから……何にしても早く親しくなりたいものだが……明日――

明日は全力を盡して一ッ情遊の眞味を味つて見やうか。そして近しく成つて、心が一致したら、梅山に媒介を頼んで、結婚、……さうすれば己の此頃の望も滿たされる。然し男爵が承知をしやうか。己の才器、性質、位置、職分、こんなものは皆調べられるだらう。花子に對して輕重は無いか、ヤ、少し當らんかも知れん。よし〳〵其內に一ッ名を出すとをやつてのけやう……そこで首尾よく貰つたら、其當座は何んな感覺だらう。……ハチームーン。西洋流に旅行がいゝな……。アヽ其日は近くであらうか。又は長い間か。」

想ひつゞけてこゝまで來て、心の駒は又引返し、

「そんな先の事よりも明日の事、アヽ明日は…………。」

まだ見ぬ明日は心の向くまゝに寫出されて、二人は首尾よく思ふ同士となりしが、幻燈又消えて、

「そこで夫としての己は何うしたら一番愉快に行くだらう。」

此研究は闇の夜の鐵砲ほどに終りてさて、立歸る波のよるの事、祝宴となり、情遊となり、川開となり、花子の姿ばかりとなり、果はごた〳〵になる時、夜の神に取つて押えられ、思の夢見に、乘るやゆらり白川夜舩！

不圖目を覺せば、東の障子に朝日目のくらむほどさして、朝貌賣は默つて歸る頃なり。枕元に置かれし二三の新聞紙、平常はこれを讀流して、三服の煙草を床の中の樂とせしが、今日はこれに目もくれず、

夜具はねのけて飛起き、慌たゞしく顔を洗へば、嗽茶碗口につけぬ前に、中の水半分はこぼしたり。これは何事！あきれて立ち、小間使に、

「飯を早く、」

叱るやうにいひつけて、支度部屋に駈込み、直に鏡の前、これは事かはりて長く手間を取る、髪に櫛の齒退屈する程あてゝ、二度頭を分け直し、黒綾のモウニング、白リンネルのチヨッキ、いづれも新調の方を、鏡に相談して身に纏ひ。先月叔父が巴里より送りしダイヤモンドのピン、これ幸と華美に挿して、出立見事に終り、形ばかりの朝飯、直に箸を投げて時計を見る時、例のまめ男堀井春雄早くこゝに音訪れたり。

「ヤ、支度は早いな。今日は君に一大吉報を齎らして來た。」

「何んだ。いきなり、」

「今梅山の家へ寄つて、花子さんの事に付て種〳〵お事を聞いて來た。」

「君も中〳〵思遣りの深い男だ。聞いて呉れたか。」

「おもひやりが深いか、輕い薙刀が淺いか知らないが君の爲と思つて聞いた。」

「そこで話の模様は……」

「花子さんは十分な敎育を受けて、學術の方は繪に書いた痘痕面ではないが點の打處も無い。そこで外

の事は何うかといふに、女の事一ト通といふやうならバッとしたのでは無くつて、婦人の修むべきもの
は極つまらん者まで皆心得て居る。それから最一ッこゝに大聲疾呼特筆大書していゝ事がある。」
「極を云ふナ。聞いて見るとたわいも無いとだらう。」
「イヽヤさうでない、先聞くがいゝ。花子さんは早く母親に別れて、男爵は又放達の性質であつたから、家内の事務は大小となく花子が處置して、十五の年から十八の今日まで、家政學は實驗で天晴奥義を極めて居る。それから花子さんの性質で、少し世智賢い處があるけれど、決して跳返りではない、隨分温順な方だ。さうかと云ッて又内氣でもない、相應に快活で笑ふとが好な替りに、泣く事が大嫌だ。」
「オイ。人を馬鹿にするな。」
「マア聞きたまへ。ソコで僕アいつか君が妻君の事に付いて話したのを思合はせて。これは隨分望ましい良縁だらうと思つて、其事を一寸梅山に話して見た。」
「梅山は何と云つた。」
せはしなく聞けば、春雄は從容いて、
「それは實に似合はしい縁組だ。竹河さんが望むなら充分盡力をしやうと云つた。君何うだその氣はあるかないか。」

竹河の胸今更云ふも管なり。自らもそれと明けてはいはず。

「それは何れ話す折がある。梅山も待つてるだらう、行かうじやないか。」

「イヤ〳〵急ぐナ。まだ時間は早い、」

「でも善は急げだ。」

「椀は跡からか。」

「そんな事を云つてる時ではない。今日の時間は僕には餘程貴重だ。」

「せいては事を仕損ずる。マア僕に任せたまへ。」

ゆう〳〵煙草を燻らす春雄、隆三は堪らず。

「僕は先へ行くぞ。」

立上れば、春雄は手で押えるまねして、

「マア待ちたまへ、三十日には勘定をするから待つて呉れ。」

其時襖颯と開いて、半分體を入れたる大沼貞行君昔ながらの面鞄付の顔を差出し、

「梅山さんがお出にありました。」

續いて入來る梅山貞一、跡に從ふは誰？今隆三をせきてませし花子なり、今日は微塵京風を離れて、髪は江戸前の島田に取上げ、着物はお召の棒縞、帯は本國織、身一ぱい華美に仕出して、觸らば溢れる

ほどの愛敬、世間に魂の融通物あらば、かゝる入物にいれていつまでもとめて置たし、堀井は兩人の挨拶終るを俟つて、
「竹河。これだから待てと云つたのだ。」
「然し君は只待てといふから譯が分らんだ。」
「だが今宵五ッの鐘を相圖にと云ふ程の大業の事でもないから只待てと云つたのだ。」
梅山は兩人を見て、例の布袋顏を差出し。
「飛んだ鐺咎めですナ。こゝは私が眞中へ這入る役だが、それは私より此方のはうが……」
花子の方を指さして云へば、春雄は聲の下より、
「それはモウ慥かな腕ですもの。」
「何う致しまして……正味が知れると吃驚なさいます」
隆三は不思議さうに三人を見廻はし、
「それは何の話です。」
梅山堀井は目を見合はして笑ふ。春雄は靜かに隆三に向ひ、
「君實に室小路男爵の令孃花子といふものが成立つて居ると思ふのか。」
「何故？」

怪有な顔をして花子を見詰れば、これも笑靨を片寄せて、
「アノ昨夜はさる方の云付で飛んだ假面を冠つて居りましたが、實は私は瀬川菊枝と申す未熟な俳優で、此度御當地へ登りまして、來月から改良座へ出勤致します。何うぞ何分御贔負の上、御引立下さるやうにお願申します。
「女役者!」
隆三の目は見張つたきり、暫く其まゝの木偶の坊、身動きもならず。
「何うです、一ッかつがれましたろう。」
梅山堀井二人揃つて又新らしく高笑、これを木の頭として、此舞臺は幕にすべし。笑止やな竹河隆三、夜一夜の思に亂れて、胸をこがした情遊、結婚ハチームーン、さては今日一日の目論見も、殘らず泡のやうに消えて、今更頭痛を記念に、六尺肥滿の大男、二十四歳の戀初めに、只一口で頬を燒きけり。

◉隅田川の秋

田山花袋

（一）

用捨無く人を呑みて、渺茫たる海中に漂はさむとする浮世の波ほど、げに恐ろしきものはあらじ。昔は槍一本の主とて、二州橋上、優かに鹿毛の馬を乗廻したる身分なれど、瓦解後は、兎角思ふやうなる事も無く、果ては九尺間口の裏店住居に、今も變らぬ月影を眺めて、世が世ならばと、暗涙乾く隙なき末路の悲しさ。吉田駿河守光秋とも言はれしものが、活版印刷所の職工とまで零落れて、五十の坂は、とうに越えたる身體にて、一日十二時間の勞働に、服さねばならぬ苦しさも、一人娘を人並に養育てたきばかりの願に、この世に生耻辱かきて居りしものを。不幸とは何處までつゞくものならむ。先月の二十日、誤ッてこのやうに右腕を損じてより、今に治らぬ我身の病氣、いとゞ哀れなる妻や娘に、あられもなき心配懸けてと、あかづきたる蒲團に、つく〳〵も浮世を倦果てしが、正直の頭に神宿るなどゝはあてにはならぬ話ぞかし。夏過ぎ秋去りて、神無月の村時雨、絶間なく軒端に音信るゝ比、朝夕の新寒肌に浸みて、病人の枕日増に重く、有りもせぬ家財、悉く賣盡しての介抱にも、少しの効無く、今はといふ朝、今年十六の娘を枕元に呼寄せて、女の道、武士の道、涙片手恩愛片手に説聞かせて、どのやうに落魄れても、吉田の名を汚すやうなる所業は、仕てくれるなとの遺言を形見に、其夜の引潮と共に、

悲しや彼世へ旅立ちぬ。

跡に殘りたる母子は、いたくも泣崩折れて、今は遺骸を野邊送せむ氣力とても無きを、近所の人々に何彼と勵まされ、餘財も無き身の、入相の鐘しみ〴〵と腸に喰入る夜寒に、人目にかゝらぬ程の葬禮の物淋しさを、亡き靈に嘸や無念に覺さるべしと、昔を知れる母親の述懷に、心無き輿丁までも涙を催しぬ。

されば、力と賴む杖柱を失ひて、食も求むる方法も無く、明日よりは、みす〳〵飢餓に陷らむとする母子を、あはれと思ふ人も少なからされど、皆是路頭の人の、心底より力になりて呉るゝものもなく母子必死となりての賃裁縫も、不景氣の折とて、貧乏神の脚に追付かむこと難く、亡親に御線香上る隙も無しと、娘は常に獨言きぬ。

まして長の月日の看病勞れか、母のお政は、三七日の夕暮より、何となく心地すぐれぬと、枕に着きたるに、死といふ悲哀を知りたる娘の心配は一方ならず、母親に迄、もしもの事ありてはと、おのれの衣服簪等を、惜氣もなく質に入れて、程遠からぬ下谷西黑門町の多田といへる醫師に診察を賴み、朝夕物優しき看病に、一時は快方に趣きたれど、久しき前より胸に碍へたる悲哀に、精魂今ハ名殘なく疲れて、裁縫の針手に取りても、思ふやうある職業も出來ぬを、取なほす氣力も無く、日毎に衰へ行、母の容體の氣つかはしさ。今一度醫師にかけてみたしと、娘は燃立つほど思煩へど、飯櫃すら己に空なる家に、一錢の貯金も無し。

偖かくして四五日は過ぎしが、母の病氣いよ〳〵重く、日頃好み玉ふものを進めても、おもふやうに咽喉へは通らず。枕を着けたるまゝ呼吸の數も今朝はいとゞ烈しき樣子を、性質孝行なる娘は、みるに堪かねて、目的といふも無けれど、二三軒の知人に行きて賴まば、世に情深き人もありて醫師にかけむほどの錢を、貸して下さるやも知れずと、母には一寸其處迄と言殘し、綿薄き古布子に、色あせし袷羽織を引懸けて、家を出てぬ。

本所に從兄あればと、遠きも厭はず尋ぬれば、折惡しや、一昨日全家橫濱に引移りたりと、差配人の話。失望の足を引返して、淺草三筋町に母の知人を訪ひ、これ〳〵の次第なればと、詳しく難義の實況を語りて、合力を賴めば、それはお氣の毒のいたりなれど、今は主人の留守にてと、表面に言葉を飾りて、腹には早く歸れがしの挨拶に、腹立てゝこゝも立去り、淺草下谷の區內に、猶兩三軒立寄りても見たれど、世の中に情ある人はあらぬものか、一錢の合力をも惜む吝嗇ばかり。いつそ家に歸りて、母樣の看病するがましと、足を我家の門前まで戻したるが、思へば、あれ程大病の母樣を、醫師にかけぬとは、子としての不孝此上なし。如何にしても、お金の工面して、假令御生命は無きものなりとも、お藥丈も差上ずは、また碌々御恩報トせぬ、妾の心かすますと思返しこの外に心當りは無きかと、つら〳〵考ふれば、それよ。父樣の時めき玉ひし比、子の樣にお世話なされし、橫井正弘樣とやら。今は尊き官吏になられて、牛込若宮町に住玉ふよし。かつて母樣の御話あれば、其處に行きて賴み申さば、貧からぬお

身柄とて、少しは惠み玉ふても下さるべしと、今朝よりの歩行に、大方は勞果てたる足に路を急ぎて、不圖西の空を見れば、早くも神田明神の林に、冬の日は傾きて、上野の四時の鐘は、まだ午飯も濟ざる娘の腸にひゞきぬ。

神樂坂を左に折れて、番地すら好くは知らざる身の、巡査に問ひ、人力車夫に尋ね、門構いかめしき或屋敷を、二箇ほど過ぐれば、その隣は横井樣と、前長屋のやさしげなる女房は、敎へて呉れけり。このやうなる大家に住む横井樣も、昔は父樣のお世話なされしお人か。父の亡りしときも、九尺間口の裏店を尋ねられては、家の耻あれば、知らせて上げぬと、母樣の仰せられたれば、父樣の亡られしもいまだ御存じなさるまじ。されどまことに、母樣の恥となし玉ひしも道理ぞ。かゝる立派なる家を、私のやうなる見る影も無き女の訪問ぬるは、何となく耻かしけれど、これも母樣の爲めなればと、心を定めて案内を乞へば、十七八の書生出來りて、一目見るから、……何の用事かと、如何にも應風なる尋振。これは、我が賤しき身裝にする虛飾ぞと心を押へ、……淺草の吉田より娘が參りまして、御主人に御意得たしと、しとやかに述ぶれば、そのまゝ奥に入りて、暫時は出來ず。十五分も立ちしと思ふ比、玄關の衝立の陰に、隱るゝは當家の御孃樣達なるべし。二三人して、くつ〳〵と笑ふ聲。我身を笑ひ玉ふかと、娘は羞かしさに堪がたき折しも、前の書生又出來り、……當家には、その樣なる知人は持ぬ筈、宿違ならむと、管無く言捨てゝ立むとするに、……否、宿違は致しませぬ。吉田光秋と申せば、

御主人は御存じと、言懸れば、………持たぬ。主人が持たぬと申したれば、持たぬに相違なし。他を尋ねてみるが好と、以前よりも一層嚴しき言葉に、少き女の身の達てとも言はれず。すご〳〵と門を出る後に、どッと御孃樣達の笑ふ聲きこえぬ。

若しやまことの間違かと、娘は振返りて、今一度門札を見れど、橫井正弘。父樣の子のやうに世話せしと、母よりきゝし橫井に相違なし。あゝ情無き人もあるものかな。態々遠路を尋來しものを、噓言ふて追返すとは、何とも言ひやうの無き人非人。父樣の御恩も忘れて、おのれのみ榮へて居りたりとて、富貴は浮雲のごとしといへば、少しも羨しくはあらねども、母樣の爲めに。あゝ母樣。嘸今頃は私の歸りの遲きを、御心配なされてや御在すらむ。兎角女の身は、甲斐無きものぞ。一日驅廻りても、一錢の工面すら出來ず。只々母樣に御不自由を懸け申せしばかり。最早詮方なし、醫師にはかけずとも、私にても御傍に居らば、せめてもの孝行と、端無く落る淚を、破れかゝれる袂に拭ひ、元來し路を急ぎて歸れば、日は已に名殘なく暮れて、小石川の牛天神の森に、鎌のごとき寒月は上りぬ。

（二）

朔風街に吹荒れて、顏は切らるゝばかりなる寒き夜路を、母親の事、氣に懸ながら、常よりも急ぎて家へ戻り、今朝行きし時、閉めしまゝの大和障子を明けて、………母樣。只今戻りましたといへど、睡り玉へるか、返答無し。されど別段怪みもせず、紙破れたる行燈に火を點し、容體を見むと、枕元に行け

ば、蒲團の外に左の手を投出したり。寒かるべきにと、その腕を握れば、いかゞし玉へる。冷きこと氷のごとくなるを、猶よく〳〵みれば、顔色悉く變り、眼光既にどんよりとにドめるに驚き、……母樣〳〵と二聲三聲呼べば、通ドてか、もづ〳〵と口を動す樣は、今臨終の近けるごとし。……氣を確かにと、耳に口を寄せて、……私が歸りましたれば、氣を確かにと言葉を重ぬれば、閉ぢたる眼をはそ〳〵と開きて、……お初かと、霜を經たる虫の音に髣髴たり。

最早これにて、母樣に別れねばならぬかと思へば、お初は悲しさに堪へがたけれど、かくまでも衰ひ玉ひては、兎ても御全快のほどは、覺束なけれバと覺悟して、求むるまゝに、水などを進めしが、其夜の十時頃、母は枕を擡げてお初を呼び、父樣の御遺言を忘れてさへ呉れずば、この母は言殘すほどの事の無けれど、兩親に別れて、依頼無き其方の身の上は、いかにも心配にて、これのみは冥土への碍。惡き處に陷らぬやうに身を治めて、實意ある人を夫に持ち正直に世を渡ッて呉れよ。母も父樣と、艸塲の蔭にて、喜びて居るべければと、人間一代の悲しき遺言に、お初は身も骨も崩るゝばかりにおぼえて、心に思ふ返答も、涙に碍へらるゝこそ道理なれ。

其後は、次第に呼吸烈しく、容體變りて、曉の霜瓦にみゆる頃、お初はなづかしき母の手より離れて、情無き浮世の荒波に抛出されぬ。

亡母の死顔を、汚れたる手拭に掩ひ、佛壇の線香二三本淋しく薰じ、つら〳〵過去行末を思へば、今迄

の困難辛苦も、一々目前に顯れて、父樣の印刷所へ通勤せし比より、腕を怪我して歸られしときの悲しさ、それからは、母樣と二人必死となりての賃仕事に、辛くも其日を送りし事、父親の遺言の事、昨日は浮世の人の、あれほど我に無情かりし事、今は又只一人情深き母親にまで死別れて、明日よりは、如何にしてこの浮世を渡らむといふ事まで、一も二も小さき胸元に打寄せしが、果ては、海門に堰かれたる潮の、段々に滿來りて、遂にはそれを押破りて、流出したるごとく、そのまゝ其處に泣崩折れぬ。

されど夜は名殘なく明放れて、霜にさゆる車井戸の音、隣近處にて雨戸繰あくる音、いつまでかうしても居られずと、落る涙を拭ひながら、裏の差配人に、母の死を知らすれば、差配人は親切なる男とて、最先に驅付て呉れしが、其夜、おなじ父樣の墳墓に、いとゞ淋しき葬禮を悲みぬ。

纔か五十日ばかりの中に俄に世にも哀れなる孤子となりて、獨り茅家に起臥する、少女の心淋しさやいかゞなるべき。昨日迄は、病床ながらも、白粥を召上り玉ふ母の顏色に、憂さつらさも、いくらかは慰むるよすがのありけるものを。今はその御顏さへ見る事叶はず、一日〳〵と、悲しくのみ暮しけるが、財無き身の甲斐無しや、四十九日の喪すらも守られず。その十一日目に、差配人の世話に任せ、大方は賣盡して、殘少なき家財を、近處隣の貧窮者の土產に殘し、父母の位牌を携へて、鐘淵紡績會社の女工に雇はれぬ。

來て見れば、まことに景色好き所なりき。二年前、父樣に連られて、觀花に來りし向島の長き堤も行過

ぎて、梅若の祠をくるりと廻れば、見るから驚かれぬる錬瓦造の大舘に、數管の烟突雲を突きて、折々鳴る滊笛の音いさぎよく、前には、一帶の寒水白帆を浮べ、後には、疎林霜を帶びて、ちらほらと星のごとく、田家の散在する間を、名も知らぬ水鳥、幾羽となく飛行く景色、さながら畫のごとしと、東京に成長ちし身の、田舍珍らしく、かゝる處に住はゞ、今迄の悲哀も少しは薄らぐべしと、お初は思ひぬ。職工長に逢ひて、在舘中の規則など詳しく尋ね、おのれの執るべき職業も、大方は定りて、今日より住ふべき房に、案内せられぬ。

房は六疊にて、こゝに四人の女工住めり。皆お初とおなし年頃なりき。越後より遙々東京に出でし、お粂といふ少女に、父親の病氣にて、この夏、こゝに入りきといふ三谷堀の娘、其他お秀といふ年増は、夫を棄てゝ母を養ひ、お末と名のる女は、持參金を作るための勞働者のよし。いづれもいづれ、かゝる賤業に身を落すほどのものに、不幸福ならぬはなきに、お初はいとゞ切なる同情を表し、新參の不束者なれど、行末までも御見捨なくと、丁寧に賴入れば、世は情無きものばかりにもあらゞと覺ゆ。四人の少女は、快く承諾ひぬ。

朝は五時に床を出でゝ、六時より定りたる紡績の業に就き、午後五時までは、絶間なく勞働を續けねばならぬ上、少しも知らざりける業とて、始は勞力のほども一方ならざりしが、何事も慣れば、難からぬこそ嬉しけれ。一月とたち、二月と過る中には、同僚のこゝろも知れ、舘内の勝手も分り、自然紡績の

業にも慣れて、始めのやうに、困しくもつらくも無く、おのれの悲哀も、遂に忙しさにまぎれて、思出すことも、日増に少なくなりぬ。

されど兎角勞働社會に、有勝ちの話なれど、近頃社中の風俗、いたく亂れて、少き男女の艶文の取やり、廊下外の出遇、果ては職工長のふしだら等の、ふと物聽きお初の耳に入るに、父母の遺言を忘れぬ身のこれはど、心安からず。油斷しては、不覺の基と心を占めて、猶よく探れば、かなしや、母樣の豫めの玉ひし惡所とは、かゝる處か、御初は同席の少女すらも、悉く潔白なるものにあらざるを認めぬ。或夜、洋燈を吹消して後、綿薄き搔卷をかつぎながら、お初つら〳〵身の前後を考ふれば、かく迄汚れたる濁流に交りて、果して好きものにや、惡しきものにや。

朱に交れば、赤くなるとの諺もあること、長き月日には、いかなる惡魔に誘はれて、不知〳〵吉田家の名を汚すやうある不運に、陷ること無しとも言はれず。この頃は、折角職業にも慣れ、同女工にも心置かれぬやうになりたれど、父樣や母樣の末期まで心にかけられたる御遺言に、そむく行爲ありては、少しばかりの金錢を殘したりとて、御位牌に對して濟まざる譯。されど又翻ッて、この身の行處を思へば、前後の考無しに、一圖にこゝを出でゝも、世話する人無き身の、路頭に迷ふやうなることあらむには、臍をかみても及ばざる、不幸に陷るべしと、小さき胸は、暫し二途の思に迷ひぬ。

それに就ても、我身はこれより、如何なる生活を送るやらむと、靜かに寐返り打ちて、我はいつまでも、

獨して世を渡らむ覺悟なれど、母樣の遺言には、實ある夫を持ちて、正直に世を渡れとの事、實ある夫とは?、世中に親切にして、情ある人はあらじとおもふに、實ある人も、廣き世界に、一人や二人はあることか、もしまことに、實ある人ありて、夫に持ッはうれしけれど、首を傾け、いやく持ッまじ。持ッまじ男とはおそろしきものに相違無かるべし。れ秀樣も、男にはこりくと、いつも物語りし玉へば、夫は難義苦勞せむ爲めに、持ッやうなるものならむ。それよりは、淋しくとも、獨立にて世を渡らば、何の心配も無くてと、十六歳の少女に似合ぬお初の心中、これも幼稚きころよりの困難に、曲りたる想なるべし。

《三》

一夕、お初はいつものごとく職業を終りたれば、夕飯までに、汗附きたるシャッを、一寸灑がむものと、裏の井戸に行けば、河風枯れたる柳を吹鳴し、夕霜薄き錦入に透りて、吹さらしの寒氣、堪へがたきを、見れば、我より先に、これも二三枚の襦袢を洗へる、一人の老婆あり。館内にては、をりく出逢ふ事あれば、萬更知らぬ顏にもあらねど、さりとて、一度と言葉を交したることもなき身の、會釋して傍へ寄れば、老婆はお初の顏を眺めて、曲り勞れたる腰を伸し、………御寒い晩ですねと言葉を懸けられ、………この寒さにては、御洗濯に御難義なるべしと挨拶すれば、………本當に手が冷龜で成りませぬと、言懸けて、亦も洗濯の手をつゞけぬ。

霜に氷る釣瓶繩たぐりながら、靜かに老婆の體度を見れば、年頃五十二三にもなりぬらん。腰も梓弓のいくらかは曲り勝に、疎なる髮半は霜と變り、圓滿なる世にあらば、樂隱居とも言はるべき年なるに、かゝる所に雇はれて、この寒天に洗濯するほどの困難を凌ぎ玉ふは、如何なる不幸福ゆゑの落魄かは知らざれど、嘸や悲しく、味氣なく、思玉ふならむ。まして今迄の難義のしるしは、顏色にも顯れて、いたはしき限と、お初はおのれの水を汲む次手に、二三杯汲上げてやれば、老婆はいたく喜びて、幾度か禮を述ぶるを、年若き身の水汲位は、何の事に無ければ、御禮には及びませぬと言へば、老婆は、言葉も無く、つく／＼とお初の顏を眺めぬ。心中には、親切なる少女と思へるなるべし。

やがて洗濯も終りたれど、寒中の水仕業に、手足名殘なく凍へて、五本の指も、ほと／＼感覺無きばかりなるに、幸ひ厨には、活火起りて居れば、少し暖めて行き玉はずやとの、老婆の言葉に、お初はすなほに從ひ行きぬ。

一椀の粗茶に咽喉を濕し、燃上る炭火に手足を煖めつゝ、問はるゝまゝ、こゝに入りたる履歴の、一伍一什を詳しく語れば、お可愛想にと、時々挿む言葉の末に、老婆も同情の涙を流しぬ。

わが身の履歴に、かくまでの同情を表するは、必ずおのれにも、難義せし覺えある故と、お初は何となく、老婆なつかしく、世に棄てられたる孤子の身を、不憫とおぼさば、行末までの力ともなつて下され。何故かは存しませねど、妾も御婆樣を、初より他人とは思ひませぬにと、餘意なく賴めば、……親も

無く、御親類も無くては、さぞ〳〵御心細くおぼすらむ。私とて、不幸福の生れ、御力になるほどのものにもあらねど、及ぶ丈は、御話相手にもなりて進ずべしと、老婆もこの夜、おのれの不運をお初に語りぬ。

昔は中國地方の士族なるよし。連添ひたる夫の在世中は、苦勞といふ苦勞も無く、世を渡りたるが、西南の役に、自から好みて官軍に從ひ、人吉の戰に戰死してより、跡は限ある公債に、限無き年月を暮さむこと難く、其時七歳の一人息子を連れて、一先東京に出でしかど、士族の職業とても無き世に、息子の生長ばかりを頼りにして、兎角おもしろからぬ浮世を過しぬ。

然るに、息子の年頃になれる頃には、財産も次第に減じて、いとど心細き矢先に、二年前開きし淺草藏前の煙草店を、喜六といへる番頭によき事され、加之、二三百圓の借財まで、我名義にて作られし始末に、右にも左にも、詮方無き女の無念さ。そのまゝ家を疊みて、それからの難義は、この紡績會社に住込み、息子も怨を呑みて、砲兵工塲の職工に雇れたるが、今の私の樂みは、只その息子ばかり。今年は最早廿三になれども、惡所遊び一つせず。今迄力盡して、養育て上げし甲斐ありと、それもはるゝ孝行もの。共〳〵に家を持つときの快樂を思へば、これしきの難義は、ものゝ數ならずと、冷えたる茶を、一口に呑乾し、………されど、不運は據無きことなり。此夏砲兵工塲に人減しありしとき、息子も共に雇を解かれ、其後あちこちと口を探したれど、今迄は思ふやうなる所も無く、困りたる折から、

こゝの職工長を御勤めなさるゝ、吉岡樣の御世話にて、空職あるまゝ、こゝの二等工に雇はるゝ事に定り、これにて私も安心致しました。………それでは、最早こゝに住み玉へるかと、お初尋ぬれば、……否、明日か明後日は來る筈。參らば、亦御世話に成るべしといふ。

この時、夕飯の拆聲滿堂にひゞきわたれるに、遲くなりてはと、暇を告ぐれば、さらば、いつにても遠慮無く、御遊びに御出なさるべし。亦御心配のことにてもあらば、腹藏無く御話なされ。及ばずながら、御力にもなりて進じましようよ。………何卒と言さして、少女は戶外に出でぬ。

いと寒き夕なりき。半輪の弦月早くも西天にかゝりて、隅田川の水一帶前に白く、枯れたる蘆の葉を吹わたる風、がさ〳〵と寒けく、微かにひゞく金龍山の鐘の音、物淋しきを、世の中にはさま〴〵なるひともあるものと、お初は老婆の身の上を思やりつゝ、靜かに食堂の方へ志しぬ。

廣き世の中に、依賴になる親類一人とて無き少女の身にして、思ひかけぬ老婆の情は、いかなる感謝をその胸に起さしめしやらむ。今迄は、我身の履歷語りても、淚一滴こぼして吳るゝ人も無かりしに、あの老婆は、まことに情ある人なるべし。何一事つゝまず隱さず、心にありのまゝを語出でゝ、心配あらば、いつにても力になりて吳るゝべしとの事。かくては、このまゝこゝに勤めたりとて、我身すら堅く持たば、心配なる事もあらじと、日頃悲哀にのみ沈み勝なる少女は、かゝる事も際立ちて、うれしう思はれぬ。

されば、一日に幾度と無く、顏を合する老婆に、我より優しき心底を寄すれば、情に脆き老婆も、万斛の不憫を心に催し、世にも氣の毒なる孤子を、世話してやるも、昔より定りたる緣なるべく、且又限ある老後の功德になりもやせむ。昔ならば、旗本の御孃樣とて、乳母腰元と、時めき玉ふ身分なるを、紡績會社の女工とまで零落れし心の中の悲しさは、思やるだに哀れなればと、心を置かずに親切を盡せば、馴染むとは早きものかな。纔か二三日の中に、十年も昔よりの知己のごとき間柄になりて、お初は鬼無き世の中てふ諺も思出さるべし。

翌々日の夕暮、同席の女工達の、何處ともなく出行きたる跡の徒然に堪かね、老婆の室を訪ばやと、捷道を拔けて、裏窓より窺へば、角火鉢を回みて、樂げに物語する一人の男あり。これや一昨日の話にきゝし息子ならむと、推しながら、………賢母樣〳〵と小聲に呼へば、………誰？と、內より問返されぬ。………私。御邪魔ですかと言へば、………あゝ。お初樣ですかと老婆起上り、………否、氣遣な人ではありませぬと障子を開き、………御這入なされと案內されて、座の一隅に就き、………皆樣が他に出て、私一人淋しさに堪がたければ、また御話を伺ひに、御邪魔致しましたと、しとやかに挨拶すれば、其處は端近にて、寒氣甚しきに、今少し火鉢の傍に寄り玉へと老婆はいふ。お初はこの時、一種世の常ならぬ羞しさを心に覺えぬ。

やがて、これが息子と紹介されても、海綿の如くなる心の、何となくすくみ勝に、滿足なる挨拶も出來

ぬに、羞しさいよ〳〵增り、暫時は低頭きつゝ、樂しげなる二人の對話をきゝながら、折よくも老婆の陰に座りたる身の、黯所にあるを機會、擧ぐるとも無く頭を擧げて、さり氣無く男を見れば、瓜實の薄肉顏は細けれど、兩頰ふくやかに骨立なく、目付涼しく潔きに、口元ゆかしき威嚴を含み、加之、笑ふ度に笑靨あらはるゝ若姿、一目みし少女は、この顏、誰やらに似たりとおもひぬ。

さて、用事の物語、一通り濟みて後、老婆は萬古燒の茶瓶に茶を點じ、少年が袂より出す一袋の菓子を皿に盛り、いざ食し玉へと勸められて、お初はこの親子團欒の樂み羨ましく、我身の不幸と、今更のごとく骨身におぼえぬ。せめて母樣なりと、生きて居玉はゞ、かゝる快樂に逢ふときも、めぐり來る事あるべけれど、天にも地にも、兄弟すら、伯父伯母すら持たぬ我身の哀しさと、茶椀片手に取りつゝ、思はずそゝぎし一滴の淚を、快樂に餘念無き二人は、露ほども知らざりけり。

かくて其夜に九時少し過ぎたる頃、お初はさま〴〵の感動を心に擔ひて、おのれの室に戾り、例のごとくランプを吹消して、枕を着けしが、一瞥に似たりとおもひし少年の顏、あり〳〵と目前に現れぬ。思出せば、我家いまださほど落魄れぬほどの事なりき。父樣の內務省に勤玉ふころの住居は麴町上六番町にありて、妾が身裝もさして醜からぬ御孃樣育ち、隣近所に好き朋友多く、小學校より歸りて後は、種々の遊戲に日を暮すを例としけるが、妾の家より二軒先に、同歲の朋友ありて、其兄樣に猛雄樣といふは、優しく男らしく、お雪樣は、ほんに好き兄樣持ち玉ひしと、小供心に羨しかりしが、その猛雄

様に、よくも似かよひ玉へる容貌のなつかしさ。杖とも柱とも頼まるべき息子を、持てる老婆は、いかに心強くやおぼすらむと、胸裏の想像糸のごとく亂れて、十一時の大時計を聞きても、容易に睡られぬに困ド果、最早思ふまじ〳〵と眼を閉げば、空中に金輪いくつと無く沸きて、中には少年の姿あり〳〵。

《四》

慣れし松賣の聲も聞かで、田舎淋しき年を送り、明くれば、新年七日の休暇、一年手足を縛られたる鳥の、自由を得たるごとく、親、兄弟、伯父、伯母なぞを尋ねむと、數多き職工どもの、思ひ〳〵に舘を立去りたる跡靜かに、お初は行くべき處、歸るべき處無ければ、兎角老婆の室にのみ音信れて、やがては、骨肉の伯母なりとも、かくまで優しく、情深くはあるまじとおもふほど、遠慮無くなれば、文一と呼ばれたる息子にも、心置のかど〳〵次第にとれて、一座團欒の物語睦まじく、蜜柑二箇を賭けての花戰に、たわひなく一日を笑興すその樂しさ。不幸といふ塊のうちにも、快樂てふ種子はこもれりとおぼし。

されど、今年は新年早々より、一種烈性なる感冒流行し、東京市中には、二三人侵されぬ家は無きほどと、日々の新聞見る度に、何となく氣味惡くおぼへしも、幸 舘内には、その病流行せず。こゝまでは、さる惡病も入込むまじと、心強く思ひしに、六日頃より、追々歸來れる職工の、折惡くも其病を負ひ來りしより、甲乙丙丁、君も我もと、やがて一時の大流行に、抱醫師は、目のまはるばかりの忙しさ。勢

を得たる病は、早くもお初の同席までも進入して、越後の少女最先に枕に着き、翌日はお榮頭痛甚しとて、職業をやすみぬ。……お初のこゝろぼそさ、言はむかたなし。

然るに、其日は一度も逢はぬ老婆を、いかゞせしと心にかゝるまゝ、をりしも行逢へる、隣席の女工に問へば、婆様は、午過ぎより頭痛烈しとて、枕に着き給ひぬ。大方は風邪なるべしといふ。さてはと胸轟き、その足にて、急ぎて室を訪へば、伸べたる床に鉢巻せる老婆の、すや〳〵と眠れる傍に、心配顏して座れるは、文一なり。

會釋して座敷に入り、容體を問へば、……お初樣、困ッたことが出來ました。私は惹かぬやうに〳〵と、注意して居りましたれば、何の事もなけれど、思もかけぬ母親に病はれてと、いかにも困り果てたる顏色。……それに、この度の風邪は、惡性にて、老人などの病付ては、容易に全快せぬよしなれば、猶更心配にてと言かけて、蒲團の隅々を、寒からぬやうにたゝきぬ。……餘程御苦みなされませしかと、小聲に問へば、……否、別段苦みはいたしませぬ。私が職業から歸りし比は、最早床を取りて、寝て居らるゝに魂消、どうか爲されませしかと尋ぬれば、頭痛の烈しさ堪がたく、吉岡樣に話して、寝んだといふを、そのまゝにもなしおきがたく、早速病室に連れて行けば、相變らぬ流行感冒なれば、注意して看護すべしとのこと。これから藥貰ひに行かねばならねど、今少し後にと言葉を續けていふ。……熱はありませぬかと、少女膝を進めて、老婆の額に手を當てゝ見。隨分御座りますねといふ時、老

婆はそ〴〵と目を開きぬ。……お初樣ですか。私もとう〳〵やられましたよ。……賢母樣と、やさしく呼懸けて、……御氣分は？と悲し氣に顏打守れば、……難有う御座います。只流感行冒と申しますれば、別段たいした事も御座るまじけれど、如何にも頭痛が烈しくてと、顳顬の邊を右の手に押へ、……今は痛みも少しは薄ぎたれど、先程の痛さといふものは、この年になりても、はじめての苦痛、このやうに烈しき風邪を、惹た覺はありませぬと、苦しさか、嘆息を洩しぬ。

折から、鳥渡と立上る文一を、少女は惹留め、……藥取ならば、私が能く存じて居りますれば、取ッて來て差上ませうと言へば、……否、直そこなれば、譯もなし。……されど、貴樣は淋しからぬやうに、賢母樣の傍に居り玉へ。……男の足の譯も無ければとて、容易に渡さぬ藥瓶を、無理に受取りて戸外に出で、二三間ばた〳〵と驅出して、何故ともなく振返れば、障子を開けたるまゝ、これも我後を見送りたる男に、はッと見廻す顏と顏。電光石火？、お初の沈み勝ある心も、この一瞥に、うれしく羞かしき樣ある感情を、しみ〳〵覺えぬ。

藥取の歸路に裏門を出でゝ、前の水菓子店より、種無しの雲州蜜柑、十ばかり買ひて袂に入れ、そのまま走るやうに、呼吸をきらして、老婆の室に戻りぬ。

座に就きて後、袂よりかの土産を取出して、……賢母樣、少しばかりなれど、召上ッて下されましと、枕元に并ぶれば、二人は難有しとも言はず。かはり〳〵その顏を見詰むるばかり。うれしさ、氣味惡さ、

羞しさに、身の措置なく、火のごとく熱する顔を、壁に向けて、いかゞせむとおもふ時、……このやうある御心配をと、老婆は言ふ。……御氣の毒なと、文一は言ふ。

こゝに話の糸口つゞきて、其夜も十時過まで、隔心なく語りつゞけしが、私の出來まする事ならば、何なりとも心置なく、御用を仰せられましと言置きて、お初は歸りぬ。

歸れば、おのれの室にも、二人の病者。頭痛發熱の苦、みるにつけても、あゝ病氣はいや〳〵。

《五》

翌朝は天地も氷るばかりの寒さ。隅田川より正面に吹付る風、ひう〳〵と梢に鳴り、向はゞ顏に剃刀を當てられたる心地して、華氏の寒暖計も、四十度を下ること四度と、口々に言囃されぬ。それにしても、老婆の病氣はと、何より先にその事の心に懸れど、六時よりは、職業に行く身の意に任せず。手足の凍ゆる冬の日に、汗ばむほどの勞働も、慣れては、さほど勞苦を覺えず。短き日脚、橋場の渡に落ちて、白帆夕霜を帶ふる頃、同僚と共にわが室への戻路、長くつゞける廊下の傍に出でゝ、水寒き小池を繞る時、後より呼ふ人は、誰かと顧れば、男工室との境の籬より、首のみ出せるは、かの文一なりき。

同工の思はくも羞しけれど、呼ばれしものを、まさかに知らぬ振も出來ず。如何せむと、躊躇ふ後に、この度はお初樣〳〵と馴々しき呼聲。それ呼んで居るよと、お末といへる女に、嫌味を言はれ、加之、肩の邊を靜かに小尖かれて、いよ〳〵氣恥しさに堪がたけれど、如何なる用事か、もしや老婆の病氣の

益々重くなり玉ひしにはあらざるかと、心を定めて踵を戻せば、後にくつ〳〵笑ふ女の諸聲。塵に汚れざる少女のこゝろの苦しさはいふばかりなし。

世にも苦しき想して、纔かに籬の傍に近寄れば、文一聲の調子を落し、……今朝の寒氣にて、老母の病氣も餘程重くなりたるよしを語り、就ては醫師の助言に任せ、病室の一間を借りて、療治するに定めたるは好けれど、我もこの朝より熱氣ありて、頭痛も少しは起りたる心地。或は感冒に犯されしやも知れずと、いふ。……それはさぞかし困り玉ふべし。まして病室の一間に、世話する人も無き賢母様の御心細さは、私さへ自由の體ならばと、言懸けて、不圖出過ぎたる言葉に心附。……何にしても貴君は御大事にと、別段用も無き身の、そのまゝ別れぬ。

然るに其夜は思もよらぬ用事出來て、心に懸る老婆を尋ねにも行かざりしかば、翌日は曉の寒も厭はず。人より先に起出でゝ、朝飯前にと、急ぎて病室へ行けば、六疊の一室に、四人の病者、いづれも流行感冒の苦痛甚敷有樣なるに、その狹屈はいかならむと、中に入れば、老婆と枕を並ぶるは文一にて、これも同しく流行感冒にやかゝりけむ。顏色何となく、蒼味を帶ひて、眼付已にどんよりと常ならず。驚きて會釋もせずに、容體を聞けば、……老母の苦痛は少しく衰へたれど、昨夜以來の我が苦しさ。中々一通りに言盡すべきにあらず。今朝は幸に落付たれど、全身の力全く拔けて、職業などは思も寄らず。熱高き頭は、眩みにくらみて、立居さへ難かしければ、友人に賴みて、二三日の休暇を取らむ覺

悟と、たえ〴〵に語らるゝに、少女は氣の毒さに、涙こぼれぬ。さて老婆の枕元に行き、病氣の苦痛を慰めなどして、それとなく邊をみれば、かゝる會社の病室に、完全を望むは無理かは知らねど、あまりといへばこの室の荒涼。

樂書に黒ずめる障子の破れより、棒の如き寒風、鋭く吹透りて、病人の枕元いかに寒からむと、思はるるさへあるに、崩れかゝれる壁の隙間より、朝日の光さびしくさし入りて、破れはてし疊の上を照せば、天井無き屋根裏のすゝけたる樣も、いとゞ物悲しきを、見知りもせぬ二人の他人と、同じ枕に着ける御心のほどはと、かって覺えし困難の數々を、お初は今更のやうに思起しぬ。

思起しては、その頃の我こゝろの辛く悲しかりしに引くらべて、看病する人も無き二方の不便を心底の情に思やり、出來るならば、御看病中上げたしと、おのれの室に戻りて後も、つく〴〵と思案しけるが、兎も角もと職工長に逢ひて、これ〳〵の次第を語り、二三日の休暇を乞へば、別段難くもあらぬ願の、容易く許されけり。

これにて心易く、看病も出來ることゝ、嬉しさに躍る足を戻して、わが室に行き、中にても殊更心易きお秀にその譯を語り、入用なる調度を携へて、再病室を訪へば、一方ならざる少女の新切に、老婆も文一も涙をこぼして謝しぬ。

藥を勸め、頭を叩き、食したきものを尋ね、風寒き障子の破れを繕ひ、寢卷の汚れたるを洗ひ、何彼と

世にも新切なる介抱は、他人とも思はれざるほどなるに、傍に臥したる病者に迄、やさしくのみものせる少女の胸には、果していかなる神のこゝろや宿るらん。少しにても慾ある人の出來まじき所業と、襟冷めたき搔巻を被りながら、文一しみ〴〵と感謝の涙を流し、見るともなしに少女の方をみやれば、我母の寢衣を縫はむとて、針の運に餘念なく見入りたる顏色の美しさ。今迄幾度か出逢たれど、これほどの器量好とは、露ばかりも心付かざりき。可愛らしき口元には、言ふに言はれぬ情愛みち〳〵て、凛と涼しき目元には、千兩の價値あるべし。まして輪廓正しき顏形は、無限の可憐を顯し、新月のやうなる眉は、その性質の温和を示せるに似たるに、世にはこれほど美德備はれる女もあることかと、文一もお初の可愛を心に覺えぬ。

さて、靜かに橫りたる枕を直し、つく〴〵とこの身の行末を思へば、愚痴を滴すは、今更意氣地無き事なれど、我一家の不仕合のほどは、思出しても殘念至極に堪へられぬことぞ。父樣すら御在世ならば、まさかにこのやうある賤しき職工とまで、落魄れずともすむべきものを。杖とも柱とも賴みたる父は、國の爲めに戰死して、跡は力になるべき親類とて無き身の、母樣の慈愛ばかりに、人並勝れて養育されしを。あの喜六奴に、先祖よりの財產を費果されて、其より思ふやうなる修業も出來ず。果ては、母樣一人養ふに事を缺き、五十歲の坂を越えたる身體にて、他人の中に朝夕の難義、嘸々不甲斐無き子息とこそ思召玉ふらめ。されば、一刻も早く、御安樂の身にせさせ申したしと、片時も心に思はぬにはあら

ざれど、智惠持たずに生れたる身の、口惜しさ殘念さ。世にもあられぬほど、思迷ふことはありながら、いつも〳〵ごまめの齒ぎしり同樣の考ばかり、御一所に住はれるやうになるも、あゝ。いつの事やら。思へば〳〵、覺束無の浮世や。

されど、まことに何時迄斯くしても居られねば、來年に爲りて、月給にても增さば、如何なる田舍の假住居なりとも、一軒の家を持たねばならず。さすれば、朝夕炊燒の世話は、誰にか賴まむ。且又母樣一人に、我留守を守らせ申しては、さぞ〳〵心淋しくおぼし玉ふらむ。それには、是非とも、一人御話相手無くては……叶はず。御話相手と、心中に微笑みて、何としても、それまでに、一人持たねばならぬのか。どうせ持たねばならぬものならば、母樣の御氣にも召して、情深く、愛濃かに、丁度あの樣なるをと、思つゞけて、不圖お初を窺へば、これもをり〳〵針をとゞめて、物思に沈める風情、何か心にかかることにてもあるにや。

あの樣なる少女ならば、世の中に多き嫁姑の風波も、決して起らざるべく、月々の經濟にも困るやうなる事も無く、いかばかり樂しき生活を送らるべけれど。

兎角思ふやうにはならぬ世の中の慣ひ、かゝる妄想も、詮無きことかと、文一我不知嘆息を洩せば、少女は驚きたる樣子にて、針の手を留め、靜かに男の枕元に行き、……御苦しう御座りまするかと、やさしき言葉をかけられ、……否、別段苦しくも無しと、わづかに言へば、……嘆息などをおつきな

さる故、私は又どうか爲されませしとかと、吃驚いたしましたよ。………左樣して下されど、男はすなほに答へぬ。

半にて言葉を改め、………最早正午にも近きたれば、御藥を差上ませうかといふに、

をりよく目覺めし老婆共々藥を勸め、口直しにと、豫め用意せし菓子を出して、丁寧に二人に與へぬ。

二人は心中に、辱なしと數滴の涙を流すべし。

かくて二三日も變無く過くれば、藥の功効、看病の志るし、漸次にみえて、老婆は食慾も進み、頭痛も止み、顏色もいくらかはつやよくなりぬ。それに引かへて、文一の病勢、少しも愈えず、熱氣いよ〳〵高まり、身體ます〳〵衰へ行くぞ此上もなき心がゝりなる。

（六）

此回の流行感冒は、今迄に類無き烈性にて、發熱の苦を、一時に肺に受くるが故に、少しく油斷せば、肺炎に變症し易く、變症せし上の療治は、中〳〵に手重なれば、患者一同、無理せざるやうに注意せよと、病室の壁に主治醫の貼札ありしを、二三日前の藥取に見しが、今に治らぬ文一どのは、万一その病氣になり玉ひしにはあらざるか。さらぬだに、不便勝なる母子の、此上さる重病を病ひ玉はゞ、その悲哀はいかゝならん。それのみならず、その樣なる事無き爲めの私の看病なるを、行とゞかぬ故の變症などゝ、醫者樣に言はれなば、老婆への御氣の毒さ、面目無さは、まことに顏も合されぬほどなるべ

し。

妾一代の八幡様！、何卒文一どの丶病を穏かに全快せさせ玉へと、茶斷までして、殊勝に祈る少女の眞心も、病魔勢を得たる時節なりき。悲しや、その翌日、肺炎に變症したりとの診斷を、醫者よりきゝぬ。

日增に食慾は進行けど、いまだ全快せぬ老婆の、息子はいよ〳〵肺炎ときかば、親一人子一人の情愛に、どれほど驚き玉ふやも知れず。その驚愕に、折角治りかけし病の、再發する事などありては、この上無き難義と、可愛や小さき心に秘めて、一言も老婆に告げず。獨りおのれの心を籠めて、一層丁寧なる看護をなしぬ。

一日、老婆全快の披露にとて、おのれの室に戻りたる折から、兎角すや〳〵と眠勝なる文一は、眼を覺し、疲衰へし面を靜かに擧げて、お初樣〳〵と、二聲ほど呼ふを、次の室にありし少女、耳聰く聞付て、枕元に行きしが、累々たる涙を兩眼に含める男の素振に驚き、……何ぞなされましてと、心配顏に尋ぬれば、ます〳〵涙をすゝりあげて、……お初樣！と、男は寢卷の袖に顏を掩ひぬ。……長い間の看病にも、厭な顏一ッせず。骨肉も及び難き實情の歡喜は、五臟に徹へて……徹ふるばかりにてと、聲を呑み、母子枕を弁べても、何一ッの不自由をおぼえず。あれほどの母の病氣すら、餘病も出でさりし全快は、皆厚き御看護の御蔭と、それさへ難有さに堪がたきを、何時まで立ちても治らぬ私ま

で、朝夕傍に附添へられての介抱は、一生忘れずに、御恩報し致すべし。まして幾日か、職業の休暇とも氣にかけぬ、御心の優しくも頼もしきには、これ、このやうに……お初樣……涙がこぼれてと、男泣に泣かれ、……それは他人になさるゝ遠慮といふもの、さる心細き事を御考へなされては、病氣にも、至極宜しく御座りませぬ。私こそ世に親兄弟も無き孤子とて、こゝに參りませし頃より、貴郎の母樣には、どれほど御情を蒙りしか知れませぬに、何のこれしきの事は、今迄の御恩報し。そのやうなる御遠慮なされずに、專一に御養生あそばしまし、屆かぬながら、御看病申しましうよと、口には言へど、悲しき肺炎を思出して、お初は心中に泣きぬ。

かくまで、妾を思ふて下さるに就ても、あの御病氣は、是非共御全快申させ度し、實は今日も心にかゝるまゝ、醫師樣に御聞申せば、肺炎とは、隨分やさしからぬ病なれど、藥石不治の肺病とは事變れば、それ迄の心配は無用にせよ。心を盡して、今一週間も療治せむに、變さへ無くば、大抵は全快すべしとの事。御盡力は、いく重にも難有けれど、まことにそのやうに全快するものにや。兎角醫師は方便の言葉を用ゆるよしなれば、これとても當てにはならぬ事と、思ひながらも、何彼と病人を慰めて、そのまま穩なる眠に就かしめぬ。

二三日と思ひて、乞ひし休暇の、一日〳〵と延び行きて、けふは十日目の夕暮、同席のお秀、病室に尋來りぬ。何か用事かと聞けば、大凡、館の規則として、おのれの身に變あるにあらねば、十日以上の休

暇は取り難きさだめ、明日より出勤せよと、職工長より命令ありたれば、その由傳へんとて來りぬといふ。

まことその規則も知らぬ譯にはあらねど、昨日今日と、ます〳〵重り行病者を見捨てゝ、いかで悠々と職業などのせらるべきことか。これは如何にしても、職工長に嘆願申し、今一週間の休暇をと、お初はお秀と共に事務所に至り、その理由の一伍十什を語りて、許諾を乞へど、外の職工の例も無ければ、それ許は、聞とゞけられぬと、分明言はるゝに心悲しく、せめては今兩三日と、再三の言葉を盡せば、規則に從はぬものは、職を免ずるより他に詮なしと、何處までも意地を張らるゝは、情無しや。

如何せまじ。老婆は大方全快したれば、看護を願ひ申すも、惡きにはあらねど、それには、肺炎といふことを、御話し申さすはならず。御話申さば、その驚愕は?、いや〳〵どうしても、御話し申さねはならぬかと、玄は〳〵と病室への戻路、今しも用達より歸來れる老婆と、小池の汀にて出逢ひぬ。

何處へかと問れて、暫時その答に苦みしが、どうせ話さねばならぬものならばと、心を決め、休暇の日限のきれたる事、今二三日の猶豫を乞ひたれど、許されざりし事など、手短かに語りて、最後に肺炎の二字を語れば、案に違はぬ老婆の驚愕。それは眞實かと、眼底には早涙を含みぬ。

されど、御心配なされぬ樣にと、醫師よりの御話もありたればと、お初は今迄の經歷を殘りなく話し、……實は病後の賢母樣に、御心配かけぬやうにと存して、御話も申上げざりしが、人に雇はれたる身

の、思ふまゝにならぬ悲しさと、瞼を拭ひぬ。かく迄、やさしき少女の情には、老婆も心中に手を合すらし。

翌朝、お初は心配せぬやうに、くれ〴〵も老婆を慰めて、久しく留守にせしわか室に戻れば、おのれの覺ある心に、人の事まで喋々しく語合ふ女どもの姦しさ。御婿樣は御全快かの、十日間はさぞ〳〵御樂みのと、嫌らしきことを散々喚き散らされ、世の中には、かゝる不德の人間多きことかと、眞自目になりて睨付くれば、をや〳〵と言かけて、一同後向になりしが、言合せたるごとく、くつ〳〵笑ひぬ。人の氣も知らぬ同工の薄情に悲哀いとゞ勝りて、手に執る職業も捗々しからず。今日の容體は？別段變りも無くて呉れゝば好けれども、思續けて、五時の滊笛をきくとそのまゝ、驅出して病室を尋ね、さしたる變無きに心を安じて、一日〳〵と過し行年波の脚早く、いつか一月も皆無になりぬ。

二月に入れば、餘寒の風、大方は和ぎて、蘆の葉末におく霜も、朝な〳〵少なくなり行くに、文一の病氣も、段々元氣附きしよし。きくにうれしく、心強く、老婆の顏色も日ましに穩かに見ゆるは、いよ〳〵全快の期近きたるに相違なしと、職業より歸りて後は、いつもこの室に尋來りて、少女は片時も母子の傍を離れざりき。

其後間も無く、文一ハ床を揚げて、庭中の散歩も許されけるが、その月の十日頃には、顏色復り、元氣常の如く、食慾復して、全く無病の人となりけるに、やがては、勞働に服して差支あるまじと、醫師も

言ひぬ。

其夕、母子は倦果てたる病室を去りて、おのれの室に戻りしが、折から訪來れるお初と共に、在院せし日數を數ふれば、偖も不運なる大病にかゝりしものかな。一月の九日より、三十餘日の服藥。されど、かく御全快なされしは、何より結構。肺炎ときゝしとき、妾はどのやうに心配致したか、知れませぬとお初さゝやけば、まことにお初樣の御親切ばかりにて、この樣なる全快、文一御前は、忘れては濟まぬぞと、老婆はいふ。

否、そんなことを。……言懸けて低頭ける少女の顏は、一抹の潮紅を點したるごとし。

《七》

十里の長堤花開きて、おぼろ月夜の影もなつかしく、櫻餅賣る招帘、そよ〳〵わたる春風に搖ぎて、霞に孕む白帆の數、浪穩かなる都鳥の夢、幔幕を櫻の間に引廻したる茶店、幾箇の佳人を載行く船など、隅田川の春の繁華は今なりき。

金龍山の蒲牢、徐ろに水を渡ッて、遊人の影次第に散行く空に、叉一しきりかしましく聞ゆるは、紡績會社の滊笛なり。跡は渡呼ふ人の聲、靜かに夕暮を急ぎて、花の色朦朧とかすけく、夕霞どんよりと、一村に棚引たるうらゝかさ。宛然たる詩境のうちを、夢のごとく幷び行く二人の男女あり。

塵収まりて、いよ〳〵靜かなる堤上を、梅若の方より上りて、路傍に垂下れる花の一枝を、男は手折り

ぬ。やがて何事か少女に私語くかごとし。
少女はにっこりと、片頬を笑ませて、男の與ふる一枝を右手に把り、うつくしきおのが口に其花瓣を接吻せさせつ。さて默してそのまゝ足を進めぬ。
櫻に傍ひて少しく曲れば、雲白き花は、目の及はぬほどつゞきて、何となくのどかなる眺望のおもしろきに、茶店の燈火、二ッ三ッ其間にかゞやきぬ。男は少女の傍に寄りて、好景色〳〵と、さゝやきながら、傍の別莊を出つる琴聲に耳を傾けぬ。
少女も暫時は、櫻の本に足をとゞめて、高低極りなき肉聲に、聞惚れたる樣子なりしが、不圖、男の肩を抑へて、これほど景色好き處に住みて、琴彈し玉ふ樂はいかならむといふ。
さては、御身も琴を學びたる事ありやと、男に問はれて、少女は羞ぢたる色を、おもてに顯しつ。貧き家に生れたる身の、琴彈ずる業などは、少しも知らねど、只おもしろく覺えたればとて、靜かに男の顏を仰見ぬ。笑ふとき、絹のごとき兩頰に、笑靨の星二ッ顯れたる爲め、顏のうつくしさは、いよ〳〵增りぬ。
をりしもあれ、白鬚の森、少し明るくありて、隅田川の水一帶の白布を曳きたらむやうに思はれけるが、やがて楕圓形の春月、朧々と櫻の梢に上りぬ。俄かに一段の白を添へたる花の色は、さなから一幅春江花月の圖を展ふるに髣髴たり。

有るか無きかの花の香は、何處よりとも無く空氣の中に漲りて、あたりの物なつかしさ言はむかたなし。

二人は白鬚の杜を過ぎて、とある一茶店に憩ひぬ。夜なればか、こゝには休ふ人無かりき。只花見客の居殘りとおぼしき人々の、二三の妓を携へて、前なる高樓に、三絃を彈せしむるあるのみ。

茶婢の出せる一椀の茶を味ひつゝ、殆んど二三年振にて、かゝる樂しき花見を仕たりと、男の獨言けば、妾も三年前、父樣に連れられて、こゝにまゐりしばかり、月ある夜の花見は、生れてはじめてと、たえ〲に少女も言ひぬ。

折から、店前喧しき人の聲す。狂詩と吟し狂歌をうたひて、いかにも蹣跚たる一群を、何者かと見れば、紡績會社の職工輩なりき。

何處にて酒をや呑みたりけむ。足元覺束なき男女の、醉顏きよと〲とあたりを見廻して、世にもたわい無き事を囀り散し、今しもこの店前まで歩寄りしが、女工の一人、不圖床机に腰かけたる少女を認め、……お初樣と！大聲に呼懸けて、遠慮も無く茶店に入り、傍にある少年を横目に見て、御樂みと、少女の背を思ふさま叩きぬ。

少女は迷惑なる顏色して、……貴姉は何處まで行き玉ひしとわづかに問へば、……私！私よりか、まあ、あなたはと、前の榻に倒るゝやうに腰を懸けぬ。伴へる一群も、滿ちたる潮の海門に入込寄する

ごとく、どさ〳〵とこの茶店に入込みけり。
お初樣、好い御月樣ですねと、女工は言葉を續ぎ、餘りうかれて、遲くなるといけませぬよ。けれど月と花ばかりでも、妾などはこのやうにうかれますものを。御二人では。……ね、御道理ですよと、唾をはきて、………けれど、門が閉てられない中に、御歸なさらないと、職工長に御目玉を頂戴しますよ、と喚けば、傍の肥肉の二十七八の男、これお末樣、そんな逃口上を言ふもので無し。わしと御前は……と、得意らしき都々逸をうなれば、ほんに、この子は意氣で可愛いよと、人目も憚からず、しがみ付きぬ。
かゝるぶしだらを見かねてか、衝と立上る少年に、少女もそのまゝ從へば、お初樣もう逃るの。私が來たッて、さう逃げなくッても好いては無いかへと、袂を捕へられ、嫌ですよと睨付けて、無理に振ほどき、一散に逃出せば、跡には、どッと笑ふ聲聞えぬ。
殺風景なる店を、月にまかせて、二人の姿はなつかしき櫻の陰に隱れぬ。

《八》

紡績會社の風儀の惡弊は、日ましにつのり行きて、いやらしき噂絶ゆること無し、第二室の女工の一人は、門前の水菓子店の子息と驅落し、第六室の大阪の少女は、戀に思せまりて、隅田川に身を投し、ある職工長は、今迄契れる女工を、他の女工と見替へて、その少女を發狂せしめ、二等技師は、舘中第一

とたゝへられたる美色を、無理に妾となせし、事より果ては毎夜籬をこえて、女工室に入込む男工の數ほど〳〵三十人に近しとの事迄、何人言ふとも無く、言囃さるゝに、お初は、この會社おそろしきやうなる心地して、もしもさる不幸の、わが身の上に落來らむときは、いかゞすべきと、女に持前の取越苦勞して、遞莫老婆に語りて、好き智慧借らむと思立ッ時もあれど、さる事を尋ぬるは、少女の身に取りて、羞かしく、且又彼人に居玉へばとて思止りし事幾度ならむ。

されどこゝに心懸りあるは、同席の女工なり。入社の中は、氣の毒の人々と、お初は同情を表したれど、長き月日には、その性根一々あらはれて、いつれも汚れたる望、卑劣なる慾の持主なるを發見し、たのもしからぬ女どもと、心に少しも油斷せさりしが、濁流に鮎ほどの魚は、住まれぬものなり。この春、老婆の看病に餘念無かりしころより、そろ〳〵と惡推量を言はるゝ辛さを、お初は覺えぬ。さりながら、かく汚れたる女を、相手にせむもあまり分別の無き話と、腹立を押へて、見ず聞かず語らずの庚申流を守りけるが、味方と頼める御秀の、三月の末退社してより、ます〳〵烈しき邪推を言はれて、自分ながらほど〳〵堪がたきこともありき。

ましてや、近頃は御末といへる女の、毎夜、一人の男工を引づり込むといふさわぎ、傍にて、その猥褻を見せ付けらるゝ心地惡さ。風儀を亂す恐あればと、お初はをり〳〵、諫めてもさらに甲斐だにあらさりき。

いよ〳〵傍観に堪かねて、お初はその縁由を、堅督の老婆に告くれば、それは容易ならぬ事と、口には言へど、腹には賄賂取りて、見ぬ振せむとの目算。この告口は、まもなく御末の耳にきこえて、お初はいよ〳〵この室の憎まれものになりぬ。

毒蛇の火焔を吹くやうなる御末の嘲罵、表に柔和をみせて、裏に針を含む御榮の口角、眞綿に首をしめる御政の邪推、まことに三方より隙間なく攻付らるゝ苦しさに、お初は緩りと氣をやすむることも出來ぬばかりなれど、幼稚き頃よりの困難に、忍耐力を養はれたる身の堪へに堪へて、寢食丈は同じうすれども、如何で、口惜しからぬ事やあるべき。あはれなる少女は、世の中の苦みを、又も心に思出しぬ。それに就ても、老婆親子の親切は、つく〳〵骨身に浸みて、お初は常に、女工どもの毒舌を、老婆の室に避くるを、例となしぬ。

一夕、あまりの残念さに、おのれの羞しさも忘れて、しか〴〵と老婆に語り、………　私は口惜くてと涙を流せば、傍に坐れる文一も、言葉を挿みて、………　先日向島にて逢ッた女かと問ひぬ。返事はせずに、點頭けば、………　困ッた女どもだと、獨言きながら、吉岡様に話してみやうかといふ。

其親切はうれしけれど、吉岡様に話せし事が、知れますると、又私がいぢめられますればと、首を擧くれば、何そのやうなる、氣遣は無かるべし。今鳥渡、行ッて來て上げやうよと、立上らむとするを、否明朝でも宜しう御座りまするると、無理にとゞめぬ。

其夜は、あまり遲く迄物語して、歸路の戸扉を閉切られたれば、しようごと無しに、老婆の室に一宿し翌朝、起抜けに吾室に戻れば、規則に背きたりとて、職業の外は、五日間の禁足を監督より命ぜられぬ。これも御末の告口と思へば、口惜しさ堪へがたし。

五日間は、恰好籠中の鳥の身の上、行きたくて〳〵、身内熱するまで行きたき老婆の室にも、行くこと叶はず。いとゞ辛き室内に、さま〴〵の惡口雜言を嘲り散らされ、口惜しさ殘念さに涙滴れて、時には室を逃出さむと思ふほどなりしが、その三日目の夕暮、厠に行かむと、廊下を過ぐる薄暗に、小手招するは、其人と、ぞく〴〵と心うれしく、急ぎて其傍に走寄れば、………お初樣と、いつものごとく優しき聲にて呼懸られ、かくまで情ある人にあるものをと、押へきれぬうれし涙を、片袖に拭ひつゝ、ひし〳〵と男の傍に寄添ひ、………文樣と聲は曇りぬ。………何ぞおされましたかと、少女の素振を怪みて、文一問返せば、………文樣、あの晩泊りましたばかりにて、私は五日間の禁足と、少女はおのが身の悲哀を、訴ふるがごとし。………禁足！と男は驚きて、………誰が吩附てと、低頭けるお初の顔を覗けば、私はどうしても、世の中の憎まれものと、涙に言切れぬ言葉あはれなり。………そのやうなる事は、無き筈なるに、それはあの監督のおてつ婆の一了見か。………御末樣が婆樣にたのんで、私を苦める手段、文樣、口惜しう御座りまする。加之、妾を捕へて、種々の惡口。ありもせぬ事をとやかくと囃立てゝ、自分達の不品行を、知らぬ振するその顔惡さ。私は、賢母樣の處へ、逃げて參うと存じましたのも、幾

度か知れませぬとて、溢出づる涙を拭ひぬ。

されど、世は悲しき事ばかりにてもあるまじければ、出來る堪忍ならば、何處迄も堪忍し玉へ。我もかの夜、一伍一什吉岡に話して、その取締方を頼みたれど、それは監督の職分とて、尋常の事には、口を挿みがたしと、言はるゝに詮方なく、然らば他の氣のあへる女工室へ、移す譯には行かぬかと問へば、それは出來ぬこととも無けれど、今は他に隙無ければとて、斷られぬ。いたく失望せる趣を、そのまゝ母に語れば、母も種々心配して、左や右と助言して呉れたれど、別段これと言ふ好智惠も無く、困りに困りたる上、一日に逢はぬ事無き御身が、二日三日と來ぬは、何か變りたる事あればと、我も母も心にかゝるまゝ、今しもお身の室を訪へば、お初樣は逢はせられぬ譯ありと、かの越後の少女の言葉、怪みながらも、歸路の途中、こゝより後姿を見かけて、と半より言葉を改め、………五日の禁足は、嘸々口惜しかるへけれど、これも浮世と呆め玉ふべし。且又、そのやうなる女には、何言はれたりとて、少しもおのれの恥辱にも成らねば、きかぬ振して濟し玉へ。今にこれみよがしの幸福の、湧出でゝ、彼奴等に思ふさま、鼻あかしてやる時あらむと、半は慰め、半は諌むる文一の情を、お初はつく〴〵と骨身におぼえぬ。

世に頼り無き身の、日頃そのやうなる覺悟は致して居らぬにもあらねど、文樣妾も女。口惜き事は、口惜うて。それと知りながら、遂々かゝる事を申上げし心のはしたなさ。たとへ羞知らぬ女と御見下げな

さるとも、不憫ものと、おもふてくだされと、餘念なく泣入れば、………春以來、御身の御世話の程は心に浸みて忘れがたし。されどそれは、口に出して言はずとも、心にゑみ〴〵承知して居れば、今更さる事は申すまじ。只此後も、可成短氣を出さぬやうに。

文樣、屹度その言葉を忘れては下さりますなと、お初は文一の手を袂の陰に固く握りぬ。

我も忘るまじければ、御身も忘れずにと握返されて、少女は今更のやうに羞かしく、低頭き勝に、暫時は無言の寂寥を、靜かなる人の足音に破られて、二人は不思飛退きつ。名殘惜し氣に別るゝ時、廊下に顯れたるは、何の！手水場の瓦斯燈燃ける男なりき。

其夜、お初は枕を着けて後、さま〴〵の考胸に集り、うれしさ、樂しさ、羞かしさ。はてはこれ迄識らざりし、一種異樣の感情の萌えけるが、さながら靴を隔てし痒氣の、搔くにかゝれぬもどかしさのごとし。

《九》

夜あけて、同席の女工に接すれど、何故か、昨日ほどの不快を感ぜず。只待遠しさに堪へがたきは、殘る二日の禁足を、一刻も早く許されむことのみ。

廊下にての男の言葉を思へば、少女は世にもあられぬうれしき心地す。行末まで忘れぬとは、つく〳〵も嬉しけれど、我身のやうなる恍惚者を、一生大事の妻となしては、下さるまじ。まことに、行末までの

妻にして下されずは、甲斐無き身の下婢になりてなりと、朝夕御傍を離れずに奉行すべし。賢母様も優しく、情ある御方なれば、よもや、世の中の人のやうなる無情はあるまじく、一生をいつそ安樂の獨暮、亡き母様の遺言に背きて、御位牌には重〻濟まざる譯なれど、身の不束ゆゑとてこれも、詮方無き事とあきらめてくだされ。されど、もし、私を。私のやうなる不束者を、幾重にも我慢なされて、一生の妻に持ッて下さるならば、あの賢母様を、母様と呼はねばならず。その時は、まことにその時は、如何にうれしからむこゝまで、思つゞくる程に、一種の情お初の胸を襲ひて、身内ぞく〳〵と熱しぬ。

それに就ても、今一度、逢ふて、話して、文様の心も詳しう聞いてと、羽あらば飛びても行き度ばかり、思煩へど、折悪くも、あのいぢ悪奴がと、思へば思ふほど、禁足を命したる監督の顔憎く、その憎さにつけて、行きたさは猶募りぬ。

職工場に在る間も、絶ず思ひつゞけて心も空なる身の、職業も思ふやうには手につかず、平日の半分も出來ぬを、職工長にとやかくとやかましく罵られ、いよ〳〵其人の戀しさに、涙まで滴れけるが、長きためしの四月の日影も、いつか硝子窓に斜にさし入りて、隅田川の縁なる水に、尖々たる金波を碎けば、やがて一聲の滊笛滿堂にひゞきわたりて、今日の課業の終を告げぬ。

芋を洗ふやうなる群集を、我先に飛出し、呼吸をきらして、室に戻り、最早五日目の禁足許を乞はむとすれば、生憎や、監督の老婆は、一寸梅若迄、用達に出でたるよし。

躍りに躍る心を靜めて、さり氣無く歸るを待てば、追々戻る女工どもの、益にもたゝぬ事喋々しく囀散し、果てはいつも變らぬ惡口雜言、意氣地無し、あなたの耳はきくらげ?聾、御多福、馬鹿尼などと、傍にてすら、默ッて聞きては居られぬほどの口惜さを、お初は耳を塞ぎて耐へぬ。

夕飯も仕舞ひて點燈頃、やうやう歸來れる監督に、將來を戒められて、お初が五日の禁足は、釋されぬ同工どもに知られては、惡口の基なれば、可成は知られぬやうにと、厠に行く振して、廊下を傍道へ曲らむとするとき、端なくも御榮に見付られて、……性もこりも無く、亦御婿樣へ?、どんなに行きたいものやら、澤山御樂みと、散々になぶり散され今更詮方無き少女は、其儘一散に驅出しけり。

驅出しては、後をも見ず。瓦斯燈明るき長廊下をまたゝくひまに行盡して、はづみたる呼吸を暫時やすませつゝ、女工室七箇ほど過ぐれば、厨近くに水の音かすけく、人氣絶えたる奥の一室は、それなり。餘りに靜かなれば、不在にやと疑ひながら、いよいよそれに近けば、行燈ほの暗き障子に、二箇の人影のうつれるを見ぬ。

それと知りては、うれしく、羞かしく、急げる足を次第に靜めて、何をか語り玉ふらむと、きくとも無しに耳を欹れば、不圖、………あの子は親切にてと、老婆の聲す。お初は足をとゝめて、佇立みつ。……あの子は親切にて、私の氣にも叶ひど、中にては言葉をつぎ、………まして幼稚き頃より、難義の中に育ちたれば、萬事つましく、情深く、一家を任せても、ゑだらなる不始末はあるまじ。且又、家系

も昔なれは旗本の御孃樣、御前はあの子を貰ふ氣は無いか。

一箇の影は低頭きたるまゝ答も無し。……… されど嫁は御前の嫁、御前の氣にも入らぬものを、如何に私ばかり氣に入りたりとて、詮方無きやうなるものなれども、言懸けたる老婆の言葉を遮りて、………

否、其樣なる事は御座りませぬ。母樣の御氣に入りさへすれば、私も別にと、さながら絶ゆるごとき少年の聲。

戸外に佇立める少女は、この言葉をきゝて、一度足を元來し方へ戻しけるが、やがて又靜かに來りて、耳を欹てぬ。

御前も承知ならば。私は安心、あの子には、明日にも好く話してみよ。

返答はなさずに、只輕く點頭きたる少年の影畵は、立上りぬ。見出されむことを恐れてか、お初もそのまゝ影を隱しぬ。

行度し逢度しと、二日間思つめたるこゝろの熱は、あはれいつくにか消失せけむ。

嬉しさにそは〳〵せる少女は、何處とも無く足を進めて、紡績會社の廣庭に出でぬ。

折しも上れる春の夜の月は、朦朧たる光を櫻の梢に包み、花の香ゑみ〳〵と袖の上にかをり來て、物やはらかなる風物のうつくしさ、新緑や、茂行く松の間を、茫々と春靄棚引たりて、ところ〴〵に叢生せる罌子、山吹、蒲公英などの類もかすかに見ゆ。中庭には、五間四方ばかりの養魚池ありて、折々躍

る鯉魚の音、其度毎に、金波弓の如く搖ぎて、一痕白き水の上を、むぐりとやらむ鳥の、水艸がくれ浮沈みつゝ、怪しげに鳴わたるさへあるを、むかひの森を隔てたる養牛場よりは、女牛のゆたかなる長吼聞えぬ、

絶ず耳に入る水聲に振返れば、一帆の影長く月を帶びて、長江の晩潮、半は新蘆を沒し、伊軋たる柔艫、浪に交りて、溶々茫々たる間に、隱見する燈火は、橋場の渡なるべし。

前なる大舘には、烟突泰然と空に聳えて、數多き職工室よりは、笑ふ聲をり〳〵洩れてきこゆ。

櫻花落積れる榻を、拂ひもせすに腰を休めて、お初はつく〴〵も今宵のことを思續けたり。まことにかの人は、心より妾を嫌ひ玉ふにはあらざる可か。否妾のごとき不束者をも、嫌ひ玉はで、一生の妻にすべしとの玉ひき。あのやうに、親切なる夫を持つべき妾は、廣き世の中にも、二人とはあるまじき仕合ならむやがてかの、人と共に暮さむときの樂は。かく思つゞけて、お初は頭を上げぬ。

それにしても、亡られし父樣母樣、せめて、一人も御在世なされなば、この幸福をお話申して、喜び玉ふ御顏に接し、碌々孝行もせぬ身の、少しは御恩報も出來しものを、今はこの天地に、私の幸福を喜びて下さる人は、一人も無きこそつく〴〵と悲しきことの限なれ。されど、靈あらば父樣母樣、艸場の陰からなりと、この身の幸福を喜んで下されと、何故ともなくその事を思やれば、寒き風一陣、少女の胸にぞ吹入りたる。

種々と思果てゝ後、遲くなりて、又先日のごとく、禁足に逢ふてはと、南の廊下を急足の歸路、今しも御身の不在を尋ねたりといふ文一に、はたと出逢ひぬ。

羞かしさに堪へられぬ、胸の轟を押へて、うぢ〳〵と男の言葉を待てば、今日は御身に取りて、喜ばしき報をといふ。何の事かと、重き頭を擧ぐれば、昨日、女工の第三室に隙ありときゝて、早速、吉岡に賴みてみしに、何の六ッかしき事も無く話定り、明日よりは、移りてもよしとの事。我はその足にて、第三室を訪ひ、同席の女工に呉〳〵も賴みて來たれば、それ知らせて、御身を喜ばせむと思ひて來りしに、不在にて本意無かりしを、こゝにて逢へるは仕合と、いふにさても我か爲親切なる御世話と、難有さ、辱無さに淚を流して謝すれば、何の。これしきと言消して、明日の夜は、早くより遊びに來玉へと、言葉を續ぎしが、其聲は、何處やらむ少し震へて、風無きに竹の戰ぐかごとし。

御初も心ある身の、答はなさず　點頭きぬ。

翌朝、從來の室を去りて、第三室に籍を移したる少女は、毒婦どもの惡舌を逃れたる身を、これも彼人ゆゑと、心底よりうれしく思ひぬ。

（十）

あはれ其夜の一座は、いかに樂しく、いかに羞かしき物語にてありしやらむ。金龍山の十時の鐘、徐ろに水を渡ッて、夜を護る擊柝の聲、もの淋しくきこゆる比まで、三箇の影は、行燈の光薄闇き老婆の室へ

の障子にうつりぬ。

人知れぬ間に増長せる二人か戀は、今しも老婆の許を得て、ます〳〵熱しぬ。諸共に一家を成すときの樂を、今より互に思やれば、二人はうれしさに手足も躍るべし。

老婆は語りぬ。秋になりて、文一の月俸、少しにても增さば、この隅田村の近傍に家を貸りて、たとひ十分なる生活ならずとも、少しは安樂なる世を渡らむ。その時こそと。

其時こそと、文一と御初も心に誓ひぬ。

さて、ゆく〳〵は、いよ〳〵夫婦と定まれば、不思議や、其間に言ふに言はれぬ感情やおこりけん。今迄のやうなる無遠慮も、互に謹みて、老婆の室への往來も、大凡一日隔になしたり。されど、心の愛は日ましに深くなりまさりぬ。

百花園の牡丹半は凋みて、水神の森若葉に暗く、絶間なく降つゞく五月雨もの淋しく、前なる川も水嵩いとゞ増して蘆葉沒し、浮萍動き、櫓勢亂れ、橋場の渡、今日はとまりぬといふ比、いつか過ぎ、田子の植わたす早苗の新綠、朝日にかゝやき、夢とうたふに似たる子守歌、穩かに夕暮を急けば、一聲鳴過く待乳山の杜鵑、珍らしとて耳を欹つる人は多かるべし。やがてきら〳〵と暑氣廻りて、職工の尤も苦しきときといふなる夏は來りぬ。

されどこの苦しき夏も、秋に近く道路の境と思へば、二人はつらしとも思はざるのみか。いとゞ樂しき

月日を送りぬ。
夕涼にと來れる少女を携へて、隅田川より吹わたる涼風を、兩袖に孕ませつゝ、二三枚の蘆を折敷きて、汀に寄する漣を掬へば、折から上れる月の白玉は、涼くも掬べる水に碎け、岸近く泳よる鴎の數、二ッ三ッ珍らしく、夏の暑さも知らずに、餘念なく夜を更すこともあれば、折には、亦出てられぬ規則の裏門を、コッソリ拔出、稻葉風にそよげる田畝道を、はる〳〵と傳ひ行き、夕立の水溜に買立の下駄を汚したりと、獨言く少女を救けなどして、二人は全然浮世の波の苦しきを忘れぬ。
かくて、穩なる月日は間も無く立ちぬ。物哀れなる秋の風、そよ〳〵と空の碧を吹きて、柳にかゝる鎌月の影も、何となくさえ〳〵しき光を放ち、華氏の寒暖計は、少くも四五度を減少したるよし。待かねたる秋も近寄りぬ。御初の戀もいよ〳〵募りぬ。
職工の月俸昇進は、毎年九月の末なれば、尙ほどありとは言ながら、最早四十日不足の日數、今迄に比ぶれば、何の譯も無し、只此上は、滿足に御昇進なされて、轉宅、結婚、萬事意通りありなむことこそ、かへす〳〵も願はしけれ。妾もこれよりは賢母樣の行末長く、孝行を申上げ、妾も亦他に賴りなき一生の、杖とも柱とも賴み申す可し。
絶えず思つゞけて、九月十日の夕暮、昨日も行かざりし老婆の室を、今宵はと思立てる折しも、戶外に慌しき足音聞ゆ。

誰ならむと、首を擧くれば、懐かしや、文樣。　お初樣と、忙はし氣に先より呼ばれて、そは〳〵しく少女立上れば、……　お初樣、今日は喜んで下されといふ。喜ばしき事とは？と、急ぎて問返せば、これ見なされ、私は今日から、書記掛に命ぜられましたと、震へ勝なる手より、文一は辭令めきたる一通を渡しぬ。

明治廿五年九月十日より、本社書記掛に命じて、月俸十二圓を給すといへる意味の辭令を、少女は忙しく默して讀下し、さてつく〴〵と男の顏を仰見てありしが、文樣。御目出度御座りました。うれし涙に碍へられて、跡の言葉は出でず。

暫時たちて後、其一通を今一度丁寧に讀終りて、賢母樣も嘸御喜びなされてと、少女私語けば、今辭令を受取りしばかりにて、母にはまだ話さねど、一刻も早く御身を喜ばせむ爲め、その足にてといふ。かくまで妾を思ッて下さるかと、お初は亦新らしき涙をこぼしぬ。

（十一）

思ひしよりも早き昇進に、最早一家を持ちても、差支あるまじと、母も言ひ、おのれも亦しか思ひて、あくる月の十六日の朝、住ふにほど好き家を、この隅田村に尋ねむと、心を決めたるが、お初樣も一所に連れてとの母の言葉に從ひ、今日一日の休暇を得たる乙女諸共、文一は、嬉々しく紡績會社の門を出でぬ。

梅若の角より左に折れて、稲葉色付ける田畝道を、驀直と行けば、女郎花、苅萱等の咲亂れたる艸むらを、靜かに流行く星川の水、銀蛇のやうにちよろ〳〵と私語きて、末は朝日の光、うつくしく金を碎きぬ。汀に傍へる竹藪の間よりは、白頭翁とかいへる小鳥の、幾疋と無く囀れば、をとりにとて里の童が、向ひの松の小枝に懸けたる籠の中に、これら玲瓏たる鳥の啼聲。この間を、拾うやうにして、二人は小松原一ッ過ぎぬ。

田に向へる一長屋、南の隅の一軒は塞りたれど、餘はいづれも貸家札を貼りて、紡績會社の職工の需要といはぬばかりの家造、六疊一間、臺所にては、如何に屋賃ばかり低くとも、とても話にならぬと、そのまゝ行過ぎ銘も打ぬ板橋を渡ッて、小路づたいに右に折れ、左に曲り、少なからぬ貸家札を尋ねたれど、兎角思ふやうなる家は無し。間數有れば、押入少く、押入あれば間數少く、押入、間數、都合好しと思へば、如何にも陰氣なる住居、或は庭狹く、鼻先つかへ、或は家古く疊破れ、或は座敷廣過ぎて、價高く、さはどせまくもあらぬ隅田村を、十時頃迄に、大方は尋ね盡しゝが、二人は氣に入りたる住居無きにあぐみぬ。

餘りに勞れたれば、あの小丘の芝草にて、一休憩すべしとの男の言葉に、御初は異義無く從行きぬ。

山門寂しき村寺の傍を廻り、葉は枯れたる芋畑を過ぎ、袖にかゝる篠竹の藪を、一ッ拔ければ、朱は殘なく剝げて、苔青き一帶の華表あり。題額をみれば、御嶽神社の四字、纔かに讀まれぬ。御嶽神社かと、

文一は呟きながら、あれたる廟に禮拜し、はた〳〵と急ぎて小丘へ登る。後れまじと、急ぎて續けるお初は、うつくしき芝艸の上に、腰を休めたる男の傍に立ちて、はヅみたる呼吸をほッと洩し、…………アヽ呼吸がきれてと、いひかけしが、これも同じく文一の傍に憩ひぬ。………そんなに息がきれてかと、笑ながらやさしく問へば、………え？と、猶呼吸つかび荒く、貴郎が餘御急ぎなさいますれば、まけぬ氣を出して、と、微笑みて、可愛らしき笑靨の星を、桃色絹のやうなる兩　頰にあらはしぬ。

やがて二人ハ首を擧げて、あたりの風景を見やりぬ。あはれかゝる田舍に、これ程の處ありとは、今迄少しも知らざりき。前には、一望千里の席田をはる〳〵見渡して、黄雲十里と、詩人の讀みけむ風情も思出さる。其間を、兩々たる農夫が、鋤荷ひて仕事に出行けば、程近き森陰に、戯戰を講ずる兒童の紙旗、秋風に飜り、折々揚ぐる叫聲まで、手にとるばかり聞え來れり。好景色と思ながら、後を顧れば、これは又一段の美景、一道の長流、西より來りて、溶々東南に折れ、一々の白帆、風を孕んで歸れば、蘆花蕭々として殘無く汀を包み、浪に出沒する水鳥の數も見ゆるに、我が紡績會社は、片雲無き碧落ハ、勢よく突立ちて、三本の烟突より、古綿を發したるやうなる黒烟、もう〳〵と漲出てヽ、機關のひゞきの遙にきこゆる心地好さ。言葉も出でず、文一茫然と佇立しが、………好い景色ですこと、と少女に先鞭を着けられけり。………まことに、このやうなる處があるとは、少しも知らざりし。此處等は、夏の

頃、幾度も散歩したることも有りながら、何故、知らなかッたかと、文一は獨言きぬ。さうですねと、少女は優しく挨拶し、………あの三叉のあたりの好きことをと、綾瀬川の隅田川に合する邊の、長汀曲浦を指しぬ。

指さゝれて男は點頭き、………向島の中にても、あの三叉あたりは、絶景の處とて、詩歌誹徊を好む人は、月に、雪に、舟を浮ぶるほどの名所なればわれも一度、舟遊を仕てみたしと思へど、よきをりも無くてと語りぬ。　貴郎は、舟を御漕ぎなされし事は御座りまするか。………昔は、随分上手に漕ぎて、學校に居る頃は、いつも日曜に、大抵この川に舟を浮べ、打綱、ぼらつりなどを仕た事もありしが、今にその樂は忘れられず。………左様で御座りませうとも、舟は大層面白う御座りますれば。………それでは、お前も舟を好か、………えと笑ながら、大好なりとの事なり。………これは面白し。それでは、何時か暇のある時、舟遊を仕やうかと文一はいふ、………何卒とお初は言懸けて、言ふに言はれぬ喜悦、少女のおもてに顯れぬ。

をりから十一時を告る淺草寺の鐘、たえ〳〵に村をわたるに、十二時迄には、歸らねはならぬ身の、いつ迄斯うしても居られまドとて割愛し、この麓を今一廻り探して、思はしき家無くば、今日は一先歸館と、語合ながら、二人はそのまゝ小丘を下り、猶五六町も探しけるが、養牛場の奥深く、生垣竹垣の細道、蜘手にたどりゆく處に、表よりの見懸は、萬更ならぬ貸家あり。

柳の古枝おもしろく作なしたる柴門に、雨に黑める貸家札を讀めば、六疊一間、四疊半二間、物置一箇とあり。見逃されぬ住家と、程近き差配を呼びて、鍵を外させ、二人はとつかはと内に入れば、家作もさほど古くはあらず。

《十二》

玄關は、一疊ばかりの板敷、右に日當好き椽側長く續き、茶の間に用ゆべき四疊半は、臺所近く接し、六疊は客座敷とて、檜木一面の床の間あり。其奥の四疊半の一室、此處には昔如何なる風流男や住ひけむ。月形の小窓にはる〳〵と裏田畝を見わたして、加之、前には數竿の箭竹こんもりと繁りて、月出てむ折、雪ふらむ時は、いかばかり宜しからむと思はれぬ。柴折戸を開きて、庭に出れば、岩石の位置頗る面白く、ところ〳〵に、女郎花、苅萱等の咲亂れたる風情、我等の住居には立派過ぎたり。

不圖思出しけん。………押入は。有るかと、文一振廻りて問ひぬ。お初は流石、さる所には早くより注意したりとおぼしく、………三箇御座りますれば澤山と、口に應じて答へつ。

三箇、それでは十分、この位の住居ならば、人に來られても、羞かしき事もあるまし。左樣ですとも、これならば少しも申分はありませねど、あまり結搆過ぎは至しませぬかと、少女はいふ。

まことにお初の言へるごとく、紡績會社の書記掛の分際に、相當せぬ家搆には相違なけれど、家賃もその割に高くもあらず。假令一年なりと、かゝる家に、少女諸共住みたらむには、その樂はいかならむと、

文一はおもしろき希望を胸におこしぬ。
いづれ母とも相談してと、やがて二人はこゝを出でぬ。
歸路、文一はその望を逐一お初に語りて、………かの奥の四疊半を、其方の座敷にすべしと笑へば、………私は座敷などは不用ませぬ。それよりか、貴郎の御書齋になさりませ。………勿論、紅や白粉だらけにされても困るけれど。
あれまあ！そのやうな悪まれ口をと、男の顔を横目に睨めて、少女はすた〳〵と驅出しぬ。
文一も驅出して、其樣に怒らずとも、好では無いかと、後より袂を捕へ、何をそのやうに怒るのか。まあ御待ちよ、一所に行くべしと又笑へば、文樣は。餘程御人か悪くッてと、心のうれしさは面にみえぬ。何故と繋がりて、二歩ほど歩み、え、何故人は悪いえと詰寄れは、知りませぬと、少女は顔を掩くしけり。
人氣無き田畝道を、戯談言ひ〳〵わが室に戻れば、待兼ねたる母親迎出でゝ、………好いのが有ッたかと問ふ。………有りましたと、文一座に就きて、これ〳〵と詳しく語れば、………それは大層都合が好かッたと、老婆はいかにも喜ばしき顔色。更に又お初に向ひて、井戸の遠近、押入の有無、日當の善悪、はては其樣事と思ふやうなる事まで、綿密に尋ね、………晝飯を濟ませて後、私も行きてみて來べしと、言葉を續ぎぬ。

午後、老婆は二人が見て來りし家を、我自から檢分して、氣に叶はゞ、明日にも移轉し、老てはいとゞ面倒なる他人交際を、一刻も早く免れたく、且又、二人は世にも珍らしき仲好なれば、夫婦になりて後も、世の中に有勝なる風波も起らざるべく、さすれば一先は安心も出來、亡られし夫の位牌に對しても、幾らかの重荷を卸す道理と、うれしき想像に、行く道も常よりは捗取るべし。

室には、殘されたる二人がやくも無き物語す。………母樣の氣に入らずば、如何すべきと、文一の尋ぬれば、………大方は御氣に入り玉ふべけれど、あまり結搆過ぎると、の玉ふやも知れず、と少女はいふ。………さうかね、と男は首を低れしが、やがて又思返して、………何、大概は承知して下さるやうに願ふよ。………左樣なされまし。其にしても、もう御歸りなさる時刻と、お初窓より首を出せは、まだ見えぬか。………見えませぬ。………行ッてから一時間にもなれば、最早歸りさうなもの。あゝ、あれは、賢母樣らしい。………見えたか。………見えましたと笑へば、………本當かと文一立上りて顏を出す時。………あれ、違ひました、あッちに曲ッて仕舞ました。何だ！人を立せて。………オほゝ、それでも間違なれば、仕方がありませぬ。………何だか知れるものか、人を。オヤそんな邪推。………邪推でも何でも好ければ、まあ此處に座らぬかと、裾を捕へられ、………本當に酷い人かなと、お初は膝をつきぬ。

待〳〵て四時過、歸來る老婆の周圍に、二人は詰寄りて、………母樣いけませぬか、………賢母樣どう

で御座りましたと、呼吸つく間も無く問懸られ、……大層結搆なる住居、あの家にて、あの家賃は低價過ぎるほどと、呼吸を洩し、其上井戸に、押入に、日當も、何一ッ申分は無く、こゝに通ふにも至極都合好ければ、早速移轉ませうよ。二人はいかにうれしかりけむ。……それに就ては、私とお初樣の退籍の事を、今日にも決めて貰はずはならず、御前鳥渡、今吉岡樣に話して來ては呉れぬか。且、家の方も不殘きめて來しにもあらねば、今一度行ッて好くきめて來て呉れよ。さすれば、家を持ッ道具は、淺艸の親類より取寄せて、明日にも移轉は出來るべしといふ。

文一は快く承諾して出行きしが、まだ一時間も經ぬに、萬事整へて歸來りつ。いづれも都合好く定りましたれば、その悦喜に、母樣よき茶を煎れて、御馳走して下され。私も菓子を前から購めて參りましたと、歡聲洋々たる團欒の樂しさ。

《十三》

退舘の滊笛長鳴して、夕陽橋場の渡に落ち、晩潮、靜かに汀の蘆を洗へば、秋風蕭々として、白帆を吹落し、隅田村の森影も、一ッ、暗くなり行きぬ。折も好し、今日は舊曆の八月望日、かゝり勝なる雲も、夕暮の風に、名殘なく吹拂はれて、眼界一點の蔭影無く、さながら青絹を熨したらむやうなる空に、一輪の大月、皎々と輾上りぬ。

暮色を帶びたる森、林、家、里川、一時に明かになりて、いつの間に下りけむと思はるゝ露の白玉、光

く々と艸の上に輝渡り、野生の尾花、苅萱等も、風に吹かれながら、月に點頭きて、心ある人を招くに似たり。

一聲高く鳴わたる哀雁の影は、地に横り、蘆花を蹴立て丶飛出したる白鷺の聲は、遙かに水上に沒し、渡呼ふ人の影は、さえ〳〵たる月にしろし。

鐘淵秋月と、十二景の一に數へられたる風景を、今宵見されば、又何時かは見らるべきと、文一は夕飯を濟ませて、戸外に出てぬ。母は明後日の移轉に、入用なる道具類を運ばむ爲めに、淺艸聖天町の親類に行きて、いまだ歸らず。お初は荷物整へむとて、暫時おのれの室に戻りたれば、外に伴も無き身の、足にまかせて、來るとも無しに、隅田川の汀に來りぬ。

顧れは、まことに好き景色なり。浮艸のそよ〳〵と風に搖く先に、一帶の長流白く、折〳〵過ぐる柔艫の音、漾細き水にひゞけば、夢を結べる數羽の水禽、驚きて飛起ち行く。詩境とは、か丶る處ぞと、文一はあたりの眺望に餘念無かりき。

折から、一箇の人影地に落ちて、徐々と我方に歩よれるものあるは不審と、文一月の光にすかしみれば、其影二歩三歩後戻りして、くつ〳〵笑ひぬ。

誰かと思ひなから、猶よく〳〵瞳を凝す時、………文様、私で御座りますよと、聲は玉を轉ばすかごとし。

……御初樣か、默ッて立ッてゐるゆゑ、誰かと思ッたと、少女の傍に寄添、……もう荷物は悉皆片附きしやととふ。……え、大抵は片附きましたと、少女は口に應して答へぬ。あまり好い月に、遂うかれてと、今迄月を眺居たる文一は、飜ッて少女の顏を打見やりつ。まことにおのれの愛する少女を、月の夜に見るほど、美しく見ゆる時はあらざるべし。輪廓正しき顏を、斜にさしたる月の光に、いとゞ色白き肌は、いよ〳〵白く、微笑を含める口元、目元のいつくしさ。あの家に住みてかゝる少女を我妻となす折の樂はと、思つゞけて、猶見れば、いつの間に結直しけむ。見るから格好よき高島田、一抜の簪を挿したる邊より、二三本の後髮、右の顏に亂れかゝられる風情さへあるを、一寸は分らぬほどの薄化粧して、口唇には紅をさしたり。

……さてはと、文一心に可笑しく、……お初樣大層御つくりが出來たねと、無殘にも短刀直入の言葉を放てば、え！と、お初は大に度を失ひたる樣子。白粉をつけてと、堪かねて笑出せば、白粉！嘘ばかりと、言かけて、羞かしきか、顏を掩ひぬ。

しほらしき素振に、男はその可愛さを、しみ〴〵と心におぼえぬ。

今少し川の傍にと、二人は手を取らぬばかりにして、足を進めしが、やがて紡績會社の舟繫場の邊に來ぬ。

見れば、其處に一艘の田船繫ぎてあり。櫓も、竿も、殘無く整ひて、漕手さへあらば、今にても乘出さ

るへきを、目早く認めたる文一は、雅興俄かに勃然と起り、今朝小山にての少女の詞を思起し、この月を、舟より見ば、その趣いかによろしからむと、思立てるまゝを少女に語れば、少女も點頭きて、いかにおもしろかるべきといふ。………されど、櫓を使ひ玉ふ術詳しく知り玉ふやと、思返して、問ひぬ。………海にすら出でたる事あるを、これしきの川、いかで漕げぬ事あるべきとて、文一は早くも其船へ飛移れば、螺旋をなして、動搖したる波は、きら〳〵と月に碎けぬ。

本當に。大丈夫ですかと、お初今一度念を押せば、大丈夫も何もあるものかと、男は危きを露疑はぬ樣なり。生質舟を好める少女は、かくして其舟に乘移りしが、喜悦の色眉間に顯れぬ。

兩岸より生茂れる蘆荻を、袖に分けて、船は靜かに漕出でぬ。危しとも思はぬ男は、流石に船漕ぐ術をば知りたりけむ、竿を使ふ手振なども、さして不慣にはあらざりき。

蒲、小菅、川柳の間を纔かに過ぐれば、一望溶々たる水の色。恐いやうですねと、少女私語けば、何のと、悠然と振向きながら、竿を捨て、艫を小腰に押はじめぬ。

猶二間程、舟を進めて、文一不圖手をとゞめ、水神の森の方に行かうか、三叉の方かと問ふ。左樣ですねと、少女も暫時考ふる樣子なりしが、三叉の方が、景色は好くはありませぬか。それでは三叉にと、櫓を急ぎぬ。

月はいよ〳〵澄渡りて、一顆の白玉を磨ぎすましたるごとし。蘆荻の風に靡く樣、櫓痕の月を碎く樣な

ども、陸に有りて見しときの美とは、又格別にて、何とも口には言はれざるべし。顧れば、水神の森、橋場の渡、水上どんよりと闇を作り、遙かにきこゆる三絃の聲は、月見舟をうかべし人の調ならむ。舟進めば、景亦變り、前岸後水、長汀曲浦、凡そ目に入ると入るもの、皆自然の美ならざる無きに、二人はうき世忘れて、さながら夢のごとき心地やすらむ。

やがて、船は三叉の高潮を難無く乘越えて、綾瀬の細流に入りぬ。こゝは浪も靜かにて、水も淺く、眺望も又あしからねば、向岸を縁どれる蘆荻の間に、船さし入れて、文一は少しく勞れたる艫の手を休めんとす。

不意に名も知らぬ水鳥、足元より、烈しき羽音して、中天高く飛去るに、お初はいたく驚きて、聲を立てしが、これも同しく振返れる男と、顏見合せて微笑みぬ。

跡は、千畦の蘆洲に風の戰げる音のみ。頃は最早秋の末近く、水氣蕭々と肌に寒く、堤上遠く村犬の吠ゆる聲も、それとなく耳に浸入る心地せられぬ。昔の人の月にむかひて、悲き涙ばかり灑ぎけむも、無理ならぬ秋の寂しさ。月見する都人の船も、こゝまでは來るもの無くて、折々過ぐる帆懸船の、伊軋たる櫓聲も、夜の更行まゝに、いよ〳〵少なく、月も次第に半天近く登りて、影はます〳〵小さく見えぬ。

……最早夜も更けたればと、兩三度少女に促されて、文一はやう〳〵に點頭きつ。……あまり好き景色に、遂うかれてと、立上りて又月を眺め、……このやうに愉快なる月見は、最早出來まじと呟く

を、又來年と、お初は蘆の花を手折りつゝ言ふ。……されど餘り遲くなりては、母樣の御心配と、其まゝ割愛し、竿を蘆の根に突懸けて、一推推せば、折伏したる蘆、する〳〵と起きて、舟は輕く水に浮びぬ。さて二三間漕出して、艫臍を濕し、……もう直歸らうかといふ時。紡績會社の十時の撃柝、丁々と水にひゞきぬ。……あれは十時、最早歸りませうとの少女の言葉に、立上りて艫を押始むれば、來る時より潮勢高くなりぬとおほし。船の重き事、遲き事。

三叉の急流を、文一豫め心に知れば、可成は岸に沿ふてと、思ひながら、靜かに進行けば、お初は玉子をむきしやうなる手を、腕まで出して、舷を叩く漣を、餘念なく翫びぬ。

舟は次第に進みて、動搖更に烈しく、船底に當る浪も、思ひしより強きに文一は驚き、益々氣を占めて、油斷無く漕げど、何にしても田舟の悲しさ。寸進尺退、少しく浪に逆はゞ、轉覆せむ恐もあれば、今少し岸に近けむと楫を曲ぐるとき、千住の方より曲來れる急浪に、名殘なく舷を洗はれて、おそろしき中流に、押出されけり。

これはとあせれど、今更詮方無し。只此上は、浪に逆はぬやうに舟を進めてと、文一自から分別して、一層心を落付つゝ、曲勝なる船頭を押直し〳〵、あらむ限りの力を盡して、纔かに十間程の激浪を漕抜け、まづ一安心と嘆息を洩せば、先程より汗を流しての男の盡力に、少なからず心配せしお初は、浪が荒う御座りまするかと問ふ。

答ふる暇も無き身の、輕く點頭きしばかり。又も高まる浪を、右によけ左に拔けしが、あゝ何等の不運ぞ。この急所にて、俄然、艫臍の外れたるにあはてたる、折も折とて、三面より寄來る浪に、あまり烈しくや逆ひけむ。あッと言ふ間に、舟は覆りて、二人は水に。

* *

尾花散りぬ。女郎花みだれぬ。野分の風いたく吹荒れて、隅田村の暮秋の悲しさ。

養牛塲の奥なる家は、今に猶住人無き儘の、貸家札を貼られて、岸石の庭も、月形の窓も、あたら雨風の叩くにまかせけるが、哀れなる浮世の浪に沈果てゝ、涙眼乾く隙無き老婆一人、紡績會社の一室に、淋しく殘りぬ。

（完）

◉庭のをしへ子

嵯峨のや主人作

世に愛らしき者天野雪子にまさるはなかるべし、年はやう〳〵六歳なるが今年の春父親に別れて今は母親一人の手にて養はるゝなり、雪子の母親は性質やさしき人なるが、都は人の心虎狼より恐ろしく、狐狸より狡猾しければ寧故郷に家をしつらひて其所へ引移るこそ宜からめ、と先つ頃より其事に取かゝらせしが、今は事皆整ひたれば、其一人子を伴ひて、故郷の旅へと趣くなり。雪子の母親は其名を露子となん呼ばれて、今年三十四歳なるが、未亡人の事とて装もじみに作りたるに、夫に別れし悲みの忘られねば花の顔も何となく憂を帯びて、秋野の萩の露重くしほ〳〵とした姿なり、殊には年頃住馴し家邸をも賣拂ひ、一ッ穴にと契を込めし忘れぬ人の墳墓にも遠かりて、海の者とも川の者とも附かぬ此おさなきを伴て故郷の天　草深き田舎に身をかくすなれば、胸には種々の思のゆきかひて、涙ひまなき有様、いとゞ哀にも見ゆめり、されど無心なるおさな子は母の心に如何斗悲のあるやをも知らず、又其身の上に如何なる大なる變化の生じつゝ有やをも知らず、遊びに餘念なきこそ哀あれ、母はせめて慰む方もやと我子の方を打見やれば、其姿世に又類なく目出たく、我子ながら見とるゝ計なり、緑の髪はとりあげず延たる儘を後に垂れて肩のまはりにふり亂したる、つや〳〵として美しく、顔容もよく揃ひて、得も言へず嬋妍なるに、眉のかゝりの匂やかにして、ほゝと打笑む笑凹の泉には愛の露を湛て、こ

ども〳〵した其愛敬は、造化が此子にのみ與へしかとも思はれて、言はん方なく愛らし、其に男の兒の着る樣な華美なる黄八丈の袷、裾短に着なして、緋縮緬のへコ帶ついぐる〳〵と卷て後に結び下げ、赤き毛糸編の靴足袋膝までなるを穿き、ゴム靴こと〳〵と言はせて遊びに餘念なく、小さき京人形腰掛に飾立て、其前に二つ三つの翫具を並べて姉樣事する姿、宛然糸萩の露にゆらめく計なれば、母は見る程に氣も晴々となりて暫時は憂を忘るゝなるべし

此間滊車は暫らくの猶豫もなく西より東へと走るなり、漸やく遠かるは都の天、漸やく近づくは故郷の天、野越へ、山越へ、河越へて、早日も西に入日の里、點燈頃となりにけり、其時雪子は遊び飽きけん翫具を仕舞ひてよと下女に言ひつけ、唯人形のみを抱きかゝへて母の膝に倚りかゝり、愛らしき貌ふり擧て淸やかなる眼に笑を含ませ、

母樣、先きのお菓子下さいな

あいよ、あげませうね、よくお遊びで有たから。

袋より菓子四ッ五ッ取出してやれば、其を紅葉の樣な手に受て一ッ食ふ、ふと傍を見て俄に思ひつきたる樣、

淸お前にも一ッあげやう歟?、おいしいよ

一ッやりて下女と貌を見合せ、嬉しさうにほゝと打笑ひしが、又抱へて居る人形の貌を見て、

おや、坊もほしいの、あげやうかへ？

さも愛らしげに顔をかしげて問ひ、小やかなる指して端の方をかき、蕾の様な口へ入れてやりて、おやす様な調子で

おいしいかへ？　ホヽ、母様御覧なさい、おいしいものだから莞爾々々笑ッて、ね、笑ッて居ませう？

ほんにねへ、可愛らしい貌をして笑ッて居るねへ。

無心なる我子の機嫌に釣出されて、母も何時し歟無心になり、覺えずホヽと打笑へハ目も輝きて顔も花やぐ計なり、可愛き子よといとほしげに膝の上へかき乗せて、玉の様な顔打守りながら、柔かなる緑の髪かい撫やりて、

今に雪さんにも髪を結ふてあげやうね、何が宜へ、蝶々髷かへ、お煙草盆かへ、束髪かへ、銀杏返かへ、島田かへ？

と言へばおさな子は嬉しげに

私蝶々髷、蝶々蝶々菜の葉にとまれ、菜の葉にあいたら櫻にとまれ、櫻の花の榮ゆるみよに、とまれよ遊べ、あそべよ止まれ。

何故ともなく高く澄たる聲にて唱歌を歌ふ、母ハ其調子に聞ほれつゝよく歌へましたと賞れば、雪子ハ自身も面白き様子にてまた、

一ッとや人と生れて忠孝を〱かきてハ皇國の人でなし〱
二ッとや二親兄弟打そろい〱たのしく暮すも君の恩〱

三ッとやみな〱……

歌ひかけて其先出でず、頭をかしげて

何だッけねへ母様なんだッけ

母はほゝゑみながら、

三ッとやみな〱日々につれだちて〱うれしく學ぶも親の恩〱

歌ひて聞かすれば、廻ハらぬ舌にて愛度氣なく、後をつゞける愛らしさ、尙風車の歌、學べや學べの歌、あふぎ見よの歌、國旗ハ門なみヒーラヒラの歌など節面白く歌ふ。暫くして歌にも又遊び飽きしか、母の膝すべり下て窓より貌をさし出し、物珍らしき四下の有様に頭を右左に動して注意を凝す。

母様御覧なさいよ、此様廣い田、是ハ皆お米?

あゝ、是ハお米になるの、田にあるのは稲と云ふのです、ね、あの稲の先きの方に粒が有ませう?彼が皆お米になるの、あの穂を稲こきといふ櫛の歯の様な物でこいて、其から其粉を臼でペンたらこと搗の、さうすると奇麗なお米になります。

言ひ聞かする母の言葉を注意して始終聞居りしが、やがて又、

此お米皆お百姓が作るのですね、甚兵衛爺の様なお百姓がね、

あゝお百姓が作るのだよ。

やあ母様、彼樣所をお馬に木をおんぶさせて。

さうねへ、おんぶさせて來たね、あれはそだといふて田舍では皆あれを焚の、お山から切出してお馬に附させて來たの。

あら〳〵小兒が彼樣に藁の上へ登て、あら突落しッこして、危ないわ、あら一人突落されて、けがをするわ、ねへ

と下女の方ふり向て言ひしが、又ふり向て貌をさし出す時は、汽車は野をも、村をも、小兒をも後にして、早何れ歟の停車場へ近づきしと覺しく、見ゆるは人家の家根のみなり、雪子ドつと見詰て居しが、不思議そうな貌して母に向ひ、

母樣、此處ば何處？　彼樣に瓦家根だの、時計臺だの、又東京へ來たのです歟？

母親は下女と貌を見合せて莞爾、

否、東京へは來はしませんやね、東京から出たのだもの、此處は高崎といふ所さ。

さう、だけれど東京見た樣な所ですねへ。

言ふ中に汽車は忽ち停車場へ着く。驛夫聲高く高崎々々と呼んでゆく、又一人中仙道へゆくお方は此處に

て乗替になりますとふれ廻はる、又一人客車の家根みしくと踏みて、家根裏へランプを下げまはる、又物賣の男幾人歟來て、菓子は宜しう、酢ハ如何、茶は入ませぬ歟、お辨當はと呼びゆく、其他乘る人、おりる人、茶を呼ぶ人、菓子を買ふ人、わいくとした混雜なり、雪子ハ是等の事珍らしければ、窓より貌をさし出して面白さうに眺むるなるべし。

元來此客車上等室の事とて、本莊以東乘合の人もなかりしが、此處にて男女の二人連入來りて、此一行の向ひに坐る、暫くして驛夫相圖のうそをふけば、汽車は煙を立てゝ前橋の方へと向ふ、母はおさな子に、

雪さん、今度はもうおりるのだよ、降て宿屋へお泊りするの。

宿屋へ、面白いなあ、早くおりたいなあ、ねへ、淸、面白いねへ

と雪子は最も元氣なり、日暮ては四下糢糊として目に入るものも無れば、雪子ハ母の傍にのみ居る、背を母の膝に押付、足にて惡戯をしながら、家根裏のランプ見詰て居りしが、ふと又母を見かへりて、

ねへ母樣、此ランプ面白い事よ、逆病の人見た樣に震へて居ますよ、何故でせうね、車がごとくいふからですかねへ?

あゝさうだよ、汽車のふるへが傳はるから。

雪子は又前ある人の貌を見詰て居りしが、男は目のぎよろくとして風俗おそろしき人なれば、氣味わ

るげな貌して腰掛の上へ匍のり、母の耳へ口當て、

彼人ハ怖い貌の人ですね

と囁やく、母ハ其人に聞えやせんと氣づかひ、其樣な事はいふものでない、おとなしくしないと他の叔母樣がおわらいなさいますと言まぎらせば、先へは其事の聞えざりしと見えて、同伴の女が、おとなでいらッしやいますねと挨拶するもおかし。

そら〳〵外の叔母樣がお賞になる、雪さんハおとなしいと言ッて

言はれて雪子は耻しげに貌を母の膝へおしかくしてありしが、終には膝の上へ這のりて、手持無沙汰といふ樣子にて可愛き手懷へさし入れ、乳をば靜捻りかくるにぞ、母は笑ひながら、

おや、何をするの、おかしいね、あら叔母樣が笑ふてお居でになる、おゝおかしい〳〵

と言ひてさも愛らしげに抱き占め、つや〳〵とした髪に柔かな頬を押當つれば、雪子ハ尻目に竊女の貌を打見やり、又母の貌を見舉て、少し甘へる樣に笑ひながら、尚も深く貌を母の懷へかくす、女も笑ひながら、

まだお乳をおあがりです歟?

否、もう呑ハしないのですが、時々彼樣事をします、甘へて不可ません、さあ善子だね、おりてお居で。

抱きおろされて雪子ハ其儘母の膝へ俯伏しが晝の疲に眠くなりしもの歟、忽ちすや〳〵と睡かくるにぞ、

此處で眠られては都合わるしと、母はおさな子の頭かい撫ながら、

こら、雪さん、如何したの、ほら〳〵御人形様が落ますよ、お人形が一人で寂しいと言て泣て居ますよ。

お人形といふ聲におさな見はかすかに目を開て、少し抱へ直す様なりしが、又其まゝに眠りかくるにぞ、母は膝の上へかき乘せて。

眠むいかへ？、眠るのではないよ、もう直おりるのだから、此次のステーションで降るのだから、さあ、起てお居で、こら雪さん。

と言はれて雪子はおとなしく目を覺し、

母様、もう田舎のお家は直？

あゝ、もう直だよ、今夜一晩お泊りをすると明日はもうお家へ往れますよ、車でがら〳〵と往ませうね。

言ふ中に汽車の進行おそくなる、

そらもう前橋だ、あゝ長かッた事、

言ひつゝ裝をかいつくろひ、下女をふり顧て、

清や、お前退屈おしで有ッたらうね、何様忘れない様におしよ、此カバンと蝙蝠傘とはお前持ておく

れ、私ハ此方のカバンを一ッ持から。さあ雪さん今度ハおりるのですよ、お人形はお前抱てお居でよ。

此時汽車ごとんと止まりて、驛夫又前橋と叫びまはる。

さあ雪さん、おろしてあげるよ、おや一人で降るの、危ないよ。

母の注意する中にハ雪子ハ既に飛びおりて車の外にある、稚兒ハ却て母よりもすばやし。斯て三人は停車場を立出づる、兼て聞居たる旅店の名を言ひて車を傭ふ、車ハ瞬く間に旅店の前へ來る店の大勢口々に、

お早いお着さま、おくたびれでございませう?、若衆様御苦勞様奥の何番御案内申しあげな。

と言ふも中々に繁やかなり、雪子ハ是等の様子をも莞爾々々として打見やりつゝ、母に手を引れて案内の坐へ通る、此室は疊八丈斗も敷るゝなるべし、段通敷詰て有て床には得知れぬ山水の軸も懸られ、花瓶には秋の草花つかみざしにされたり、下女やがて茶煙草盆に菓子添へ持來る、雪子の母は茶代幾らかを歟はづむ、亭主受取を持ちてわざ〳〵禮に來る、引かはりて手代住所姓名を附に來る、總て是等の有様をも雪子ハ注意して見て居るなるべし、扨茶を呑み菓子をくひ一休みする中、下女浴衣を持ち來りて、

御都合が宜敷ければお風呂へ召しませ、

といふ、是より湯をあび夕飯をすまして、話の二ッ三ッもして居る中、又も下女入り來りて床を敷のべ

暗燈にランプを替へて、お休みなされませと言ひてすべり出づる、是にて母親はホッと一息を吐なるべし。

あゝ旅は何もしないでも氣くたびれがする、清や、お前嘸くたびれたらうねへ、や、其處に浴衣が來て居るだらう、其を着てお寢、又明日もあるから、さあ雪さんお前も衣服を着改て休みませうねへ。

用意の着改に改めて床へ入れゝば、晝の疲にたわいもなく早すやすやと眠りかくるに、其身も添乳して、神ぞ愛可き子と抱き占めて、佛神に我子の健康を祈る。

翌日は雪子の一行は汽車の便あらざれば車を傭ひて、又故鄕へと赴くなるべし、斯て幾つの村をも越へ、幾つの野をも越へ、幾つの宿をも越て、其日の二時少し下りし頃、故鄕の我家へと着なるべし我家には留守番の老夫婦、兼て今日到着の電報を得たれば、朝より用意して彼等を待つあるべし、斯て車の音轆々として門前に響くや、夫婦は何時も變はらぬ莞爾やかな貌して。走り出て之を迎ふるなるべし。

是はまあよく早くお着になりました、今朝からもう出たり這入たりしてお待申しました。へいお孃樣御機嫌よう、よくお出になりましたね。へい貴君にも。

と清に向ひて。是が老夫婦の挨拶あるべし、

夫人も住み馴れぬとて我家といふ名に心安く、奥へ打通れば俄に旅の疲を感ずるなるべし、

されど山高く水清き此住居、室内の空氣も清らかなれば、心ものび〳〵として疲を休むるには充分なるべし。

抑々雪子が故郷の家といふは、さのみ廣くはあらねど景色を旨として作らせければ、中々に見所多き住居なり、邸の後には清らかなる山川の流あり、左右の岸高く巖苔むして翠の雫自らしたゝり、藤桂這廣かりて倒にかゝる姿おかし、向ひの岸には松杉枝を交へて茂りたるが遠く觀音山の森に連り、黒める頭天によりて美しく、鳩の啼聲物寂たり。左には諏訪山の古城高く、梢の嵐軒に通ひて三昧堂の鐘の音哀なり、前には村々打續きて千頃の稻田、茂る森、藁葺の屋根、槇の垣、小川の流、柳蔭、稻かる農夫の頭のみ見ゆる、犬打童の小徑を走る、あがる雲雀の雲に入る、弓ひく案山子の風にゆらるゝ、孰哀と見えざるは無し、庭は家の前と後と、造らせたるが、後には大なる景色あればさのみは手を入れずも哉と、唯面白き岩の築山をつかせ、其上に岩芝、岩躑躅、石菖などの低きものを這はせ、其下に淺き泉水を掘りて玉石一面に敷つめ、立石巻石など据させて、之に諏訪山より裏の岡へ落來る瀧の水を流しかけたり、水は小さき反橋の下を潜りて、葦の下葉を洗ひ、岩の狹間を打つ、篠竹の根をぬひて前なる山川へ落つれば、雨ふるとも泉水より溢るゝ事なかるべき歟、誠に心ある造なり、此庭人々の居間の方に有るなれば、母なる人の書齋の窓開く時には、山川の流も觀音山の翠も此庭續のものゝ如く見えて、面白き眺なり、又表の方なる庭は春秋を旨として造りしものとて、生垣に添ふては樹木を植え、内部には

四季種々の草花を養ひ育てたり、又家の左手なる後園には諏訪山續の小やかなる岡ありて、杉の一村茂る中には小さなる水神の祠も有るなり、清水のしたゝりの小さき瀧となれるも有るなり、祠の前の稍平なる所には藁葺の東屋しつらはせ、是に葡萄を這はせたるが、其前に鞦韆を造らせたるは是雪子の爲なるべし、岡の下は茶畑にして其間々には梅の古木の幾本となく植られて、有り、又彼方の一隅には古き納屋の頭に枯草青苔を戴けるが、先主人の誕生の日を知れるを以て傲貌に立つも有る、總て長閑なる田舍の眺なり、

雪子の母なる人は今物騒しき塵の都を出て、此靜なる田舍に移りたれば、心には種々の思のゆきかふなるべし、都にて夫の榮て在したりし昔は奴婢あまた使ひ、多くの人出入して花やかに暮しつるが今は萬昔に異りて侘しき鄙の住居となりぬ。家には雪子親子の他に、老たる夫婦の者と都より附來りし一人の下婢と僅に五人居るのみ夕暮の風軒の忍をゆすりて、野寺の鐘の鳴渡る頃は秋も身に染て淋しさも一入なるべし、されど母なる人か其を露斗も憂とは思はざるなり、都に在りて世の人に立交はり、横しまなる人の輕薄を聞き腹黒き人の罵り吠ゆるを聞かんよりは、流るゝ水音に耳をかし、哀なる鐘の音を聞きたらん方、如何斗心には快からん歟、まして都には敎育の傾宜しからず、義勇なる日本氣質の代れりに、卑屈なる拜金宗の家庭に入り來りて、都下の童男童女ハ漸やく之に化し去れなんとしつゝ有れば長く彼地に有たらんにハ白糸の如き清き我子の心にも、爭で此惡習の友より入る事のなかるべきやハと

思へば、佗しき部の住居こそ、結句其心には安かるべしまして、又此地には幼かりし昔の友の四人五人、今は此處彼處に嫁入して子供まうけたるが有なれば、閑ある折は彼方よりも來、此方よりも往て、互に問慰むる事の出來るをや、況て又雨の朝月の夕山水の美しき眺に對して古今の文などくり廣げ、あるは腰折の一ッ二ッ言ひ洩する樂みのあるをや、況て又月にも花にも増りていとほし可愛と思ふ者の膝にまつはり肩に倚りて其身を慕ふをや、嗚呼此子此子、此子こそ母の命なれ、此子こそ母の魂なれ、此子にして無常の鬼に捕へ去られずば、何の所にあるも母の心には光の輝けるなり、貴ぶべし雪子の母は、なる人と此の如く其子を愛したれど、愛に溺れて其子の敎育怠る事はなかりき、然り愛に溺れて子の敎育怠り勝になるは世の女性の弱點なるに、此人はよく其弱點に打勝しなり、なき人の片身なる此子を充分に敎育して、末はよき婿とりて此家を繼がせ、家名を落さゞること亡夫への操なれと思ひて、ひたすら雪子の敎育に心を入れたるは又有がたき心ばへなり、然れば其年の霜月には早此子を學校へ通はせて、文讀み文字書くことを習はせ、又家庭の敎育にも注意して稚子の智慧づき物識り健かに育つ樣と力をつくしける、雪子又怜悧の質にして習ふ事人にまさりて能覺え、家に歸りても廻はらぬ舌にて讀本の一さらふこと怠らず、文字も幼きにはよく書きげる、是を見る母の心は如何計り嬉しかるらん、其につけても夫の在して此樣見ましたらば、如何に喜びたまはんをと又今更の樣に打歎くなるべし、

此敬すべく愛すべきの夫人は自然を好む性質とて、雪子が學校より歸り來る時は、其三四人の友を誘は

せ、其一群を伴ひて、磯野、諏訪山、杉の森などの村々を運動する事毎日ありき、切株のみの殘る稻田大根の葉などの青々とした畑を右左に見、小川の傍なる森蔭の水車民、の家居に焚く煙のしめやかに立昇る、手拭被りたる男女の畑に見えかくるゝを遠近に眺めながら、艶なる有明の月よりも美しき夫人が、くすみたる衣に駒下駄の踵を打せて、蓮歩楚々と歩まする姿、得も言へず哀なり、周圍には七八歳の女の兒四五人、孰も無心なる、愛度氣なき、罪のなき、やさしき、愛らしき、元氣よきが、綠の髮夕暮の風に吹かせて、節面白く、

○庭の千草も、むしの音も。かれてさびしくなりにけり。あゝしらぎく嗚呼白菊。ひとりおくれて、さきにけり。

○露にたわむや、菊の花。霜におごるや、菊の花。あゝあはれ〱あゝ白菊。人のみさをも、かくてこそ。

など、愛らしき聲にて唱歌いろ〱歌へば、聲は遠近の森に木精して、遙なる野の末に消ゆる、稚兒は無心なれど廣々とした此畑中をゆくさへ快きに、聲のある限張上て歌ふ事なれば心も勇み樂しめるなり、夫人は又此靜なる自然の中に有て、稚子の心を心としてゆくなれば、世の中の事總て打忘て秋風に面を吹かるゝも快く、慈ある目元に靜なる微笑を含ませ、やさしき容貌に靜なる樂を現はしつゝゆく、誠に此一群の有樣こそ人間界の人には遠く天界の人に近き樣思はれたり、されば村々皆此噂して夫

人と其稚兒とは忽ち知らぬ人のなくなりしもおかし。
臘月の月にもなりぬれば寒さハ都にも増りて寒かるべし、殊に越の雪とて我國第一の雪國なる越後とハ僅に山一ッの此上野、雪も都にハまさりて深かるべし、ある日の事なりき、昨日よりふり續きたる雪夜の間にふり止みて、東雲の頃にハ天名殘なく晴渡りたれば、雪子の母なる人ハ是より此山川を船にて下り、兩岸の雪の景色を樂しまんとぞ思ひ立ける、先甚兵衛を船場に走らして、船一艘頼みたき由言入させ、其身ハ小やかなる瓢に酒少斗を入させ、菓子を風呂敷に包ませて持ち、雪子を伴ひて趣きける、家より船場まではニ町餘あるなり、雪ハ一尺餘もふり積りてあるべし、雪子ハ綿入の衣温に着、毛糸の肩掛頭より被りて半を襟に巻き、可愛らしく結びし紐靴に雪を蹴立て先に立てば、母ハ高下駄にさく〳〵雪を踏分て之に續くなるべし、やがて船場に來て用意の船に乗るなるべし、東京にハ家根船あれども此處等にハさる洒落たものハなし、唯甚兵衛に持しやりたる筵を敷き、其上にケットを敷き、又坐蒲團を敷てやう〳〵其に坐るなるべし、船頭は四十餘の頑丈のおやぢなりき。二人が船に乗り移りし頃ハ早旭日高くさし昇りて、觀音山の頂の雪きら〳〵としてまばゆき斗なりき。舟子みなれ棹をとりて岸に突立る時船は忽ち中流にあるなるべし常にハ翠を疊む兩岸の巖、今日は一面に白妙の衣を着たるに、流石屏風の如き直立の岸とて、雪も厚くハ積らねば、岩蔭にハ石菖の鬚長く垂るゝもあり青苔の白衣に摸樣を置さへもありて美しき眺なり、此川山川の事なれば幅は廣きも五六間に過ぎず、狹きは三四間に

狹まる、其水源は何の所にやあるらん此下にて刀寧川に注ぐなり、十里を一時に下るの急流なれば兩岸の眺見る間に變はりゆく。船絶壁の下をゆく時、蔦桂にふり積雪の頸に落かゝる冷さには、身を切らるゝの思や有るらん、水帶の如く流れて船北に向ふ時、雪を吹風面を拂ては寒さ骨に徹るべし、仰げば高き大空は琉璃よりも淸く晴渡りて、散雲一片の影だになく、蒼々たる其美、其靜、其大、其高、其潔、其默は稚兒の接吻よりも快し、母なる人は懷より料紙硯を取出し、雪よりも白き手さしのべて、川の水掬びて硯に注ぎ、墨すり流してさら／＼と紙に認むるは是たしなみの歌なるべし、雪子は幼兒の常とて珍らしき事を好めば船に乘る事の面白からんと伴はれて來、始の中こそ四方の白妙を奇麗のものと見て居しが、此處に至りて母樣寒いよと言ひ出しぬ、母親は打笑ひながら、

小兒は風の子といひますよ、强子といふものは寒い位は何とも思はないものです、寒い方が氣が淸んで心持のよいものです、さあ母樣が抱こしてあげるから、此また美しい景色を御覽なさい、

と膝の上へ掻のせて菓子をやり、其身は瓢の酒猪口に二ッ三ッ飲みしが、元よりたしまぬ質なれば忽ち目縁の櫻色になりたるも艶なり、雪子は雪見の面白からねば、母樣もう歸らうと言ひ出しぬ、母は笑ひながら、「雪見ハ寒い斗て面白くないかへ？其では歸りませうね、彼方の船場から、」言ふ中船は諏訪觀音兩山の間をゆき過ぐる此に於て眺又變はる、左右の岸低くなりて兩岸の村々目に入來る、顧みれば二ッの山は綿帽子ひきかつぎて旭日に輝きけり船を此處なる岸に着させ、前なる農家に入りておさな兒を爐

の火に當、其處なる男頼みて車を備ひ、急ぎ我家へと歸りける、老夫婦出迎へて、雪子様には如何も雪見はと打笑へば、夫人も打笑ひて、おはきにしくじりましたといふもおかし、斯て母子二人の者は火鉢を抱へて雪見の話なぞするなるべし、雪子は母の話の終りし時、忽ち問を起してねへ母様、何故雪は彼様に白いの?

さうさねへ、何故だ歟母様も善は知らないが、雪の御話をしてあげやうかへ?

とやさしくも其身の頬を娘の頬に押當て言へば雪子は嬉しげにあゝ、しておくれ。

と少し甘へた調子でいふも可愛し、母はかんで哺める様な調子で

お前は氷といふものを御存かへ、御手桶の水や御盥の水が寒いと氷る、あの氷といふものを。

あゝ、知て居ますよ、天からざあ〳〵ふる。

あ、其雨、彼雨は水だね?

あゝ、水よ。

さう、よくお分りだね、其では雨の水は御手桶や御盥の水と同じかへ違ひますかへ?

稚兒は少し考へる様子ありしが、暫くして、おんあじ。

おんなじ? さう。其ではお分りだらうお手桶やお盥の水が寒いと氷る様に、雨の水も寒いと氷るのが。其氷たのが雪になるの、だから雪は雨の氷つたのが雪、ねへ、分りました歟? 雪は雨の氷。又

不思議の事には雪といふものは皆花の樣な形のものなの。
言ひながら紙へ種々の形を書て見せる。
ねへ、皆六ッに分れて居るの、そうら御覽なさい、此樣な形のも有れば又此樣な形のも有ます、顯微鏡といふ目鏡で見ると其がよく分るのですよ。斯いふ形のが九十六あるの、大層でせう? 奇麗な花の形をして居ませう、玉の樣な、水晶の樣な、分りました歟?
あゝ、分りました、だから雪は奇麗ね、雨の氷だから。
あゝ雨の氷、花の樣な形の雨の氷だから、
言ひさして又言葉をつぎ、
其に雪は又大層役に立つものです、大事のものです、お百姓は雪がふるとお金かふると言て喜びませう? あれは何故です、何故雪ハお金でせう? 奇麗な花の樣なものでは有がお金の樣なものでは有ますまい、其をお百姓がお金がふると言ッて喜ぶのはおかしいでは有ません歟、お百姓は馬鹿なのですかねへ、エ、おかしいでは有ません歟?
と試みる樣に尋ねればおさな子はさかしくも、
如何いふ譯
其はね、雪がふると何かゞ能出來るから、畑に有る麥だの何かゞ寒いと困るでせう、霜などの樣な冷

たいものが降て、其上を寒い風が吹でもすると、凍へて育つ事が出來ないの、其を雪が上から包んで防でやるの、ね、丁度今日お前が母樣寒いよとお言の時、母樣がお前を抱へてお衣で斯圍てあげましたらう？　其でお前温でしたらう？　恰度彼時の樣に雪が麥や何かを抱て温めてやるの、風だの霜だのに弱はらない樣に、ねへ、其だから雪がふると畑のものがよく出來るの、だから雪は奇麗でも有り、又大事のものでも有るのです、ねへ分りました歟、エ、分ッた？　よく分りました感心。

と頭を撫てやれば雪子は嬉しげに打うなづく、總て經驗なき稚兒の爲めには此世界は疑問の集なれば、大人の目には常とし見らるゝものも、幼兒の心には不思議に思はるゝ事あるあり、雪子の母なる人が幼兒の物を尋ぬる時は喜びて其說明をしてやり、又常に心して問を起すやう仕向くる事のあるは感心あり、誰も斯ありたきものにこそ。

扨も日月のゆくは川の水の流るゝよりも早き哉、天野一家が故鄕へ移りてよりは早三月、今年も空しく暮て世は新玉の春とぞなりける年の內に春は來にけり一年を去歲とや言はん今年とや言はんと、歌ひしは昔の事にて今は正月を迎ふるとも、世は冬の只中なるぞ寒き。されど一月は一月なり、元日は元日なり、之を喜び祝はぬ者日本國中にあるべきやは、就中之を喜び祝ふ者はおさな子なり、まだ暮の內より、門の松飾、お備の飾物、切餅の樽詰、おいしい、好もしい類の落さうな砂糖餅の山、お客が來ましたらと、お屠蘇お重詰の用意出來しを見ては、切餅斷ちし端の切屑、是は如何する歟と見れば、三月の、お節句に

豆入の爲めとてあられを今から拵へるを見ては、中にも形大なるは雙六の賽になるとて、硯函取出し、墨ごし〳〵とすりて、一二三四五六と一寸記せば賽の出來るを見ては、如何に其心は波打らん。愈烏三聲を告渡て正月となりては髮を新しく赤い絞の切をかけ、簪の花さし飾りて、貌に白粉を塗り、口に紅をさし立派な美しいゝ衣服を着て、可愛らしい足を小さな駒下駄にのつけて、簪の花はひら〳〵ふり袖ひるがへして、鞠つく、羽子つく、かけ廻はるは其心如何に樂しかるらん、雪子も又其一人なりき。

常は母よりも遲く目覺むる稚兒、今朝は母よりも早く目覺めて、其胸の邊を搖動し、

母樣もう夜が明ましたよ、よう母樣

と呼びさましたるもおかし、母は起あがりて莞爾と微笑、

おや、大壯早く目をお覺しだね

だつてお正月ですもの

さう、嬉しいかへ

あゝ、嬉しいわ、嬉しくッて嬉しくッて、だから私早く目が覺めたのですのよ

と莞爾々々とした貌可愛らし、母が衣を着改させ、湯殿へ伴ゆきて玉の貌洗ひ、緑の髮梳りてやれば、雪子は忽ち母の手の下すりぬけて、昨日寢る時簞笥の上に置し押畫の羽子板の立派なるを取出て其を横抱に下女の淸が餠燒て居る傍へゆき、

清今に羽子を突かうね

言ひて樂しげに其書を眺むる、其風嬉しさのやりばなきが如し、斯て雜煮を祝ひ終て後、母は衣を改めさせ、又下女に送らせて學校へやる、學校にては彼等の朋友大勢身分相應の晴衣を着、喜べる貌をして敎師に導かれ、欄間に懸けたる、兩陛下の聖像を拜し、其より整列して君ゲ代の唱歌を歌ひ、又元旦の祝歌、

一　年立つけうの大空にひかり輝ぐ日の御影、あふがぬ民ハなかりけり、わが君千代に萬世に、

二　としたつ今日の家ごとに祝ひ立たる日の御旗、なびかぬ國ハあかりけり、我國千代に萬世に、

三　年立つけふの喜びにつだふ學びの家の內、われらハ共に祝ふなり、わが師は千代に萬世に、

四　年たつ今日の悦びに集ふ學びの家の內我等も共に祝ふなり、我友千世に萬世に、

と聲張上て歌ひ、歌ひ終りて後拍手して歡を盡す、其より思ひ〳〵に我家へ歸るあり、雪子は二三人の友達を伴て歸て來て、母樣只今と手をつかゆれば、他のおさな兒も手をつかへて、

伯母樣お目出度、

と小さな頭少し斜にさぐるも愛らしければ、母なる人は莞爾やかな顏をして眺めながら、

ハイ、お目出度、よくお出なさつたねへ、おう〳〵皆樣のかんかんの能結た事、如何ですね、お正月で嬉いの

と言ば孰も莞爾々々と微笑てあゝと打點頭く、
どれ、其では善物をあげませうねへ。
と言ひて違ひ棚の戸あけて、九年母に干菓子取出し、紙にくるんで銘々にやれば、孰も嬉しそうな顔、有難うと手に受て直に明て見る正直雪子ハ直にくひかゝれど他の児ハ流石に遠慮して暫たゆたふ、母なる人ハ其様子見ておかしく、
何故皆さんおあがりなさらない、よいからおあがりなさい、
許の出づるや否や、何の見えもなく忽ち食ひ始むるも愛らし、母が又、
さあ、御本を貸してあげるから皆様此方へ來て御覧なさい、
と坐敷の方へ呼べば、孰も急ぎて此處へかけゆき、吾眞中へ坐らんと競ふもおかし、年嵩なるがいきなり上の一冊を取りて打開き、彩色のある口繪を見て、
あゝ奇麗だこと!
年下の活潑なるハ書の白面味まだ分らねば、ついと立あがりて、
誰歟羽子を突かない歟、一寸、
と呼びかくれば皆其方をふり向くを、年上なるが、
今是を見てからよ、ねへ、

と朋友を引とむるも面白し、暫くして繪艸紙見終れば、孰も室内の遊びにや飽きけん、外へ出て遊ばうようと誘ひ合せて裏庭の方へ出てゆく、冬子といふ年上の兒「何をして遊ばうねへ、夏子さん」と言へば「さうねへ、羽子を突てお遊びな」「羽子かへ?、羽子はつまらないぢやない歟、其より何歟もつと面白い事をしてお遊びな、ねへお雪さん、何をしやうねへ、」「さうねへ、此處なる門をおしな、」「あゝ、それしやう」と二人手をつないで高くさし舉げ、

一　此處ある門は誰か門、通らばとほれ此處の門、

二　通れや、通れ此處の門、我等が立しこゝの門、

三　とほれとあらば通らまし、歸るも行も打連て、

四　樂しき歌を歌ひつゝ、おくれず進め友だちよ、

と繰返し〳〵此遊びをして居りしが、暫くして是にも又遊び飽きし歟、年上なるがお山へ往かうと叫ながら驅出せば、他のも續てかけゆきたり、其處には又鞦韆が有りて彼等の來るを待けり、

おさな兒等の一人は鞦韆に乗りて、さあ搖つておくれな、あいよ、強くふッて怖がらしてやらう、ね、など、可愛らしい貌で相應に恐しき企をたくみつゝ、笑ひ興じて遊びに餘念なし、

さあ、今度はね二人一所に向ひ合て乗らう。お雪さん此方を向てお乗りな、私其方を向て乗るから、と冬子といふが雪子を呼びかけて乗りうつれば、春子と夏子の兩人は綱を搖る役を身に引受て、

さあよくッて。

あゝよくッてよ。

二人は肩と肩とに片手片手を懸合せ、片手は、綱を握りつゝ、顔を見合せて莞爾々々と笑ふ、

何だか怖い樣ね、落さうね。

と冬子はいふ、

あゝねへ、だッて片手しきや摑てないのですもの貴君。

と雪子いふ、他の二人は力を入れて、

さあふるよ、よくッて？

注意を促して搖始むれば上の二人は強さふな顔をして莞爾々々と笑ふて居る、暫くして綱は惰力の力に據て動搖忽ち激しく、上の二人落ちさふになるに驚きて、

あゝ危ぶない、とめて、早く止めてやう！

と叫べど下の二人はとめさうにもなく、モッと振ておやりよとふりかくるにぞ上の二人は周章狼狽、

とめてよう、よう、とめてよう、餘りだわ、あら、落こちるよ！

と泣さうになるにぞ、下の二人も驚きて綱をおさゆれば、上の兒は飛びおりる樣におり立てホッといふ息を吐き。又莞爾々々と打笑ひて、

あゝ危なかつた。

言ひながら他の二人に向ひて、

もう少しで落る所だッたわ、餘り強くふるんですもの。ねへ、誰だつて落かゝるは。

言ひながらも今は落る憂なしと安心せるものゝ如く、太き息を吐てぴよい〳〵と飛はねて居るもおかし是より又彼等は手と手をつながれて、平和なる顔をふり仰向て、清き目は高き天に、ふと面白く、

一　母のおもひは空にみち、ゆくへも知らず果もなし、月の桂をたよりてぞ、家の風をば吹せつる、
　仰げ〳〵母のみいさを。

二　母のなさけの撫子よ、露な忘れそ恵をば、家をうつすもそだて草、機をきるさへ敎草、したへし
　たへ母のなさけを。

と高聲に歌ひながら山をくだれば、聲はどよみて山の林に木精する愛らしさは誠におさな兒ぞかし、忽ち門を出で何れへ歟又遊びにゆきたり、

斯の如く雪子は健やかに生長なれば、母なる人の喜びは如何斗なるらん、春の試験にも及第して御褒美貰ひたればとて雪子が喜べば、母も喜びて愈是を激すなるべし。

一日天野の未亡人には諏訪山の櫻今を盛と聞きて幼兒の一群引つれて櫻狩の催ありけり、諏訪山の櫻見は都の花見には異れり、嵐山の櫻は月の桂の水清き流を隔てゝ山上の花を見擧るなり、墨田の櫻は花

下を徘徊して小袖に春の雪を惜むなり、諏訪山の櫻に至りては山巓より常盤木の間に散り交りて咲ける半腹の花を見おろすなれば、其風情又一種の味あるなり、殊に都の如く雜沓する事はなく、花見の客とても近き邊の里人のみなれば、人影は指を折りても數へらるべし。此日夫人は山上の葭簀張を借受て休息所と定め、おさな兒等をして充分の遊びを爲さしめたり、山上にも櫻の大樹あるが、幾百年の星霜を過ぎしもの歟、頭は白雲の上に聳へ幹は五抱もありぬべし、折しも花は盛にて紛々として風に散亂るゝ姿は宛然六花の飛び蝶の舞ふが如くあれば、招かざるにおさな兒のふりの袂へ來て止まれば、幼兒等は面白がりて恰で雪の降る、樣ねと長き袂を兩手に捧て散來る花をとゝめて遊ぶ、

あら、雪子さん私の袂には此樣にどッさり、

一、二、三、……九片よ、

あら私のには八ッ

折からさッと吹く春風に、ぱッと散りゆく袂の櫻、

あら、不可ねへ風が、

悲しむ間もなく又紛々と空より散來る花幾片、

あら散ッたかと思ッたら又落て來てよ、先より殖て、九片で有ッたのが十一になッてよ、

互に多きを競ひながら彼方へかけ此方へかけて、花を止めて喜び遊ぶ姿も又花の蕾、夫人は搖爾やかに

打見やりて眞の花は忘れたるが如し、既にして幼兒の一人叫んでいふ、

一寸、鬼子ッ子なさいな。

あゝしませう。

忽ちどか〳〵と寄集ひ丸くなりて「ドやんけんぽん」、勝たるは次第〳〵に抜けて、雪子一番後に殘りて鬼と定まる、多くの幼兒は四方に散りて、雪子さんの鬼や、おうにや鬼やと噺し立つる、雪子は男の兒の如く育てらるゝなれば、足も強く叉早ければ忽ち一人を捕へかくる、其時其子叫んでいふ「たんこ」機會に雪子捕へて、

そら秋子さんの鬼よ、

あら、ずるくッてよ、たんこして居るでは有ませんか。ねへ春子さん。一寸定める事が有るのですもの、岡なしでは貴孃、誰だッて捕るはだから岡を定めなくては。

あゝ、其ではね、此木と彼木と彼木と此所と、其から此所と彼所と、彼所と彼木とよ、よくッて？

あゝよくッてよ。

と動議なしに決定すれば、忽ち異口同音に、

たんこ潰した。

一同迯て岡へつかまるを、中で年重の冬子といふを目當に雪子追ひかけて岡へつかまらせねば、冬子苦

しがりて逃ながら、
あら雪子さん餘りね、私一人を狙ッて、一人狙三度鬼よ、
言へば彼方の夏子又叫んで、
其から出這入も三度鬼よ。
又他の一人叫んで、
其から手さわりトやんけんよ。
と次第〳〵に條例現はれて、規則の確定さるゝも面白し。既にして雪子一人を捕へれば、忽ち又多くの子噺立て「山野さんの鬼なら岡なしだ、此所までお出、甘酒進上、」などゝ彼方へかけ、此方へ走る身の輕さ、風を糸縫ふ燕の如く、ふりの袂は落花と共に風に飄ッてひら〳〵〳〵、捕へられしをふりもぎッて逃る拍子におりる肩上、恨し氣に見て泣出すもあれば、是に懲りて兩肌押脱ぎ襦袢一となるもある、面白さは花見の遊びぞかし、遊びの外に彼等なく、彼等の外に遊びなく、一群は歸るを忘れて有けるが、夕暮告ぐる烏の聲に夫人先づ驚かされて、歸宅を布告すれば、幼兒等は愉快なる心と樂しき記臆とを以て家路へこそは歸りけれ。
此櫻狩の遊びの外、野田の芹摘、原山の蕨採など、種々遠出の遊びある中、春も過ぎ、五月雨もゆきて、夏も早始となりけり。一日又天野未亡人は昔の友兩三名をさそひて、前なる山川に螢狩の催を爲しけ

り、夫人の朋といふは孰も三十以上の人にして、子供も二三人はある人のみなれば、各其子供等をも伴ひて、夕暮近き頃より夫人の家へと集りたり、夫人は彼等を誘ひて兼て今日の遊びの爲にとて、傭ひ置ける二艘の船に乗移らせ、字螢澤をさして漕せたり、螢澤は夫人の家より凡そ十一二丁を隔てし川下にて上州一の虫所なり又此地の螢は東都玉川の螢と異りて其形最も大きく、其數も夥しく實に驚く斗なり、

月なき夜の天晴て吹風も涼しく心よきに、山川の流急にして船降ること矢の如くなれば、雪子を始め一同のおさな兒は跳上りて歡聲暫も止む時はなかりき。船螢澤へ近づける頃には螢の二ッ三ッ四ッ迷子の如く河の背を飛びくるも哀にて、あれ取たしと幼兒の叫ぶ間に船は一下して岩角をめぐれば、河上一面の螢にて團々として鞠子の如く、紛々として火花の如く、或は天に向ひて飛び、或は草叢に向ひて散る、美しさ言はん方もなく、其間を螢狩の船幾艘彼方此方と漕ぎ廻はる有樣、天の河原の中をゆく歟と思はるゝ斗なれば、夫人達もあな夥しの螢や、美のし事やと感歎暫時も止まざりき、まして物珍らしき幼兒には如何斗面白く思はれけん、あれあの澤山の所へ船をやッて、早く／＼と舟子をせき立てもどかしがり立上りて騒ぐを靜に、落ぬ樣にと親達の制するもおかしく、やがて其處へ船の來れば、幼兒等は手に手に扇を擧て之を打つに、紛々として水上船上に落つる數限もなし、拾ひ取りて各用意の籠に入るれば、見る見る籠は螢を以て充され、絹張の碧紗一面に光りて燈火を點さゞるに幾つの燈の照る如く

人々の面影鮮に眺められたり、夫人達も皆おさなき昔に返りて、おさな兒等と共に遊びに餘念なく、水上に落惱むを拾ひ取りて袂を水に曳き、或は船を岸に添はせてやらせつゝ草の葉蔭に休らふを捕へて、白き手を土にまみらすなど興に乘ずれば、まして遊びを半勤とする幼兒は袖袂の潤ふ事の面白ければ歸るを忘れて遊びけり、

中にも雪子は母が手づから縫ひたる筒袖の單衣に。男兒のする唐縮緬のへコ帶後に結んで打扮輕く、小さき船の中の彼方此方とはね廻りつゝ、武藏野の月を描ける深草形の團扇を擧て飛び來るを拂へば、母または他の夫人の肩襟の邊にばらん／＼と落かゝる面白さ、拾はせて籠に入させ、又水面に落つるは母をせがみて掬はせつゝ、疲るゝも知らず狂ひ廻はりぬ、既にして夜もやう／＼に更ゆけば周圍の船も追々に漕返り、岸上の人影も次第に少くなりゆくに心着て、我一群の人も盡ぬ興に名殘惜しけれども、正可に夜を此所に送る事も出來ざれば、今夜の遊びも是までなりと家路をさして船を漕せぬ斯る折々の遊びの外天野夫人には日曜の休日はいふまでもなし、平日も夕暮には近き邊の兒ども等を誘ひて、そゞろ歩きする事常なりけり、斯て夏も事なく經過て秋も早半となりしある日の朝の事なりき、雪子は常の如く學校へゆきたるに、我同年級の生徒幾人玄關の所に遊び居たるが、雪子を見るより、

天野雪子さん、今日はね穢い子が入學してよ、穢多の、厭だわねへ、早く往て御覽なさいよ。

雪子は穢い子と聞くより定めし髮などのおしき香ありて、衣裳などの垢づき汚れたるを着、目などのく

しや〳〵として腐れたる如くあるべしと思ひ、少し急ぎ足にて教場に來て見れば、向ひの墨板の片隅に本と石板とを入れし歟と思はゝる包を抱へて、しよんぼりと立てる七歳斗の女兒居たり、されど其豫想には異りて手織木綿の袷衣の新しきを衣て、新しき麻裏双履を穿ちたるが、顏たちもやさしく目鼻立も揃ひし愛らしき兒あれば、何處が穢いの歟と疑はしく思ひながら見てあれば、多くの女兒はお轉婆にもちよい〳〵と新入の兒の顏を見ては、互に囁き合ふて、

ねへ、木下さん私彼奴に隣へ來られては厭だわねへ。

あゝ私だッてだわ。

中にも腕白の男兒は

あたりまへよ、穢多なんぞに隣へ來られてたまるもの歟、穢いや、

と聲高くいふ、甚しきは又面向ひて、

おい、お前の家ハ穢多かい？え、穢多？ハクショ穢多だとよ、オイ田口此奴の家ハ穢多だとさ、穢らハしいねへ。

惡しき朋友をさそひかくれば、さそわるゝ此方の惡太郎、憎々と口角尖らして、

穢多？そうかい、生意氣の奴だなあ、穢多の癖に學校へなんぞ來やがッて、やい穢多、乞食、畜生、穢多は人間でハないのだぞ、歸れ、手前が居ると穢らハしいや。

と罵りぬ、憐むべし此おさな兒、始めて學校へあがりて始めて此樣な逆待に遇ひて、今は早堪かねけん、涙を目の縁に浮べて黒板の向ひへ退歩するを、雪子は元より穢多とは如何なるものにて、何故に穢いと卑しまるゝ歟、其理由を知らざれば、默然として始終の樣子を眺て居りしが、此に至りて哀みに堪へず、つと立上りて其傍へゆけば、哀なる幼兒は又も辱めらるゝにやと身を縮ませて遠かるを、雪子はやさしき貌に充分憐みの情を含みて、

あの、貴君、私のお机の所へ來て坐ッてお居でな、今に先生が來ると貴君のお坐も定るから。

いふ聲は今までの荊棘の針の尖りたる聲に異りて、情のこもるやさしき聲なれば、穢多の子は地獄で佛に遇ふ嬉しさ、ひかるゝまゝに其坐に着けば、雪子は尚も慰め貌に、

此包の中は何、御本、今まで御本讀んだ事有て、

と言へば彼女は袖で涙を拭ながら、低い聲で、

ないの、

と口の内でいふも哀なり、多くの小兒と女兒とは雪子のふるまいに暫くあきれて、口をつぐみて見てありしが、忽ち一人、

やあ、天野さん、貴君此人知てゝ、先から知てゝ？

又一人、

親類なの！おゝそう。やあ宜事聞いた〳〵、

と言へば、忽ち又何だ〳〵と集りて耳こすりを始めしが、やがて一同大きな聲で、

やあ、天野雪子さんは穢多だとさ、穢いな、穢多や、穢多や、天野の穢多や、

と囃し立つるに雪子怒て、

今に言つけてやるから宜先生か來ると、

暫くして教師入來れば生徒ら一目見て忽ち靜りかへりて、今まで騷ぎ居たるは誰歟といふ風なり、新入生は新入生の常とて教師の指圖に據りて最も後の席に着しぬ、然るに隣坐の女の兒は是と席を連ぬるを厭ひて、目附顔付して睨みながら片方なる隣坐の兒と何を歟耳さしがやがて、其子の席に一ッになりて坐るもおかし、教授一時にして十分の休みとなり、教師も控所に立去れば、後いまたときの聲、多くの生徒忽ち又彼新入生を圍みてなぶり始む、中にも隣坐の子憎體らしく、

おい、お前外へ外ておくれ、お前が其處に居てハね、私坐る事出來なくつてよ、御本の時ハ山野さんのお坐へ往てるから宜が、御手習の時にハしやうがなくッてよ、よう、外へ往ておくれ、ようよッてば。

と可愛らしき手しながら机をぽん〳〵と叩て責立れハ。哀ある幼兒ハ何も言ハず唯しく〳〵と泣出すを、雪子又哀に思ひて、自分の本と石板とを持ちて其傍へゆき隣座の子に向ひて、

杉村さん、貴君其樣に此處が厭なら私の所へお出なさい、私此處へ來るから、其樣にゐぢ目るものでハなくッてよ、

なんだいお世話燒婆、おや貴君此處へいらッしやい、私彼方へ往くから。と坐をかへるもおかし、暫くして敎師入來りて此樣子を見、其理由を問ふに雪子答へて是々と言へば、敎師は面を正して兒供等を諭し、又雪子をして元の席へ着かせて授業を始めぬ。雪子は心竊に何故に穢多の子は穢なきもの歟と疑へり、

此日家に歸りて後雪子は母に向ひて今日學校にて有りし事を語り、又何故に穢多の兒は穢きもの歟と質問せり、母は有りし事を聞きて我子の性質の善良なるを喜び。涙を浮べながら天に感謝しつゝ、暫く考てありしが、

穢なかッた歟穢くなかッた歟お前見なさッたらう? 穢なかッたかへ?

否、穢かないの、他の子より奇麗でしたの。

さう、其では他の子のいふ事がわるいの、穢多だとて人ですもの何も穢い事ハ有ません、

さう、其でハ今度家へ遊びに呼んでよくッて、え、母樣、母樣!

夫人は返答に躊躇せり、穢多なりとて元より卑しむべき理ハなけれども、如何にせん此處等邊の舍田人は敎育もなき疎野の人達、昔よりの迷信の失せざれば、穢多の子にして我子の朋友たらん歟、是が爲め

に我子も穢多と同じきものと思はれ、人より、忌まるゝ事なしとも言はれず、又我身とても其通りなり、去ながら蒙を開き陋を破ぶるは善事にはあれども、此身は女の事なれば、母親としては雪子の教育を怠らぬが勤……………寧其請を容ざるが宜歟と躊躇ひしが、おさな兒は其心母よりも清ければ、

ねへ、母樣、今度連て來ても宜ッて、え、え、おとなしい善子ですよ、宜くッて、え、え、

おさな兒の清き心より響き來る聲は恰も天の反響の如く、母の疑懼心を打破ぶりぬ、母は覺えず、あゝ宜よと承諾を與へぬ。

雪子は翌日學校の歸りに例の穢多の子を誘ひて歸りぬ。玄關をあがるや否や此方の室より母樣只今と先づ聲をかけながら其傍へゆき、

此子よ、昨日話したのは。

天野夫人はあゝさうかへと言ひながら其子の貌を見れば、色白く丸貌にして兩の目のさへざへとしたる愛らしき子なれば、莞爾やかに

よく遊びにお出だね、幾歳におなりだへ?

幼兒は耻し氣に少し頭をかしげて、

七歳。

其では雪もおない同志だね、中よく遊んでおくれよ。

言ひつゝ菓子など紙にくるんでやれば、雪子はやがて誘ひて裏庭へゆく、天野の裏庭は廣ければ幼兒等は面白がりて其邊をかけ廻はり、芝の上へ這ひ登り、或は轉がり、又は鞦韆をゆすぶりなどして夕暮の近づくをも知らざりき。

此日よりして彼穢多の子は屢雪子の家へ遊びに來れば、雪子も又其家を音づれて終には無二の朋友とぞなりける。是が爲め母なる人も折々雪子に誘はれては穢多村へ遊びにゆきたるが、此處に又多くの哀むべき貧しき人の有けるより、憐愍の心深き夫人の天性は見るに忍びず、之に力の許す丈の助力を與へしより、惹て屢往來する事にありたり、之を見るより里人等は果して夫人を嘲笑ひて、種々とわる口を叩きつるが、婦人の動ぬを見るより終には馴れて怪しまず、果は彼等自らの中にも穢多村と往來するもの二三人より五六人と次第に其數を増す樣になりたり、加之らず學校の生徒等も一ッは教師の教誨と、一ッは彼哀むべき穢多の子が天性愛らしき氣質と容貌とを有てるより、之に親しみ之を愛して、果は一校の生徒の中一人として彼を忌む者なくなりたり、是れを聞く多くの新平民は我も〳〵と其子を學校へやり始しにぞ、今は兒童の柔順なる腦髓の中には穢多を忌むの念全くなく、穢多てふ文字は全く意味のなきものとぞなりけるされば、此影響は惹て其兩親等に押及びて、今は彼等の兩親の腦髓にも新平民を穢多とし卑しむの念薄らぎしは誠に目出度き事にこそ、嗚呼普天の下王土に非ざるなく、率土の濱王民に非ざるなきを、何時の代より穢人非人として卑めけん、幸に彼等明治の聖代に生れて、我王君の聖恩

に浴する事深し、豈貴からずや。

閑話休題、天野夫人は意外にも我四隣の新平民を卑しむの念薄らぎしを見て、之も時勢の然らしむる所歟と感じ、却て其身が端なく其動力の一ッなりし事を知らざるもおかし、去ながら是等の事は夫人の身に取りてハ何の得失もなき事なり、夫人ハ其身が母たる人の勤として、一意雪子の教育にのみ注意して有れば、其にて其天職ハ終るなれば、ひたすら其事にのみ心を盡せり、されば健やかなる愛らしき幼兒ハ將來、如何なる淑女に歟なるらん、母の望をして水上の泡とならしめねば幸なりさりながら記者神ならなくに未來の事ハ斷定し難し、只一言を述て此物語の局を結びなんに、夫人が此地に移りてより一年餘の星霜を經たり、此里人の中何人なりとも、天晴渡る日の夕暮には天女歟とも思はるゝ優美の婦人と愛らしき七八歳の女兒七八人との一群が、やさしき唱歌節面白く四方の林に反響させつゝ、田中の細道を漫歩する樣を打霞む暮煙の中に見るなるべし。

◉都土産　　乙羽庵主人

《其一》

我が思ふ人ありやなしや。言問ひ團子言問ふによしも無く。人ぢらしの都鳥の流れ散る落花を嚙み嘴を彩どる愛らしさ。人言を解すか點頭いて波に古歌の散らし書され、冷泉定家の筆を擬ね長引いて怪しげなり。竹屋の渡場竹屋も見えず。待乳山の森夕陽に照りて木陰黒し。渡りにさすや水馴棹。往きには柳橋の藝妓乘せて。歸りは腰嫋々の新造に娘。それで功徳になる渡りの舟人、花ならば蝴蝶といふ境界。さて〳〵活計も人さま〴〵。千鳥足の花見一群。洋杖の頭に瓢縊り付けしは云はでもの書生連なれどさりとては下宿屋の賄にお小言を召さるゝ御方々とは見受けず。小首傾けるは女太夫の身振りを學びてか。此處古昔ならば班女の前が葉竹に扇結はれて舟人を呼びしところ。世が世なればとて變つた世の中と愚痴溢す乘合の老人、婚禮の座にも數珠持つて出る有難者にて三圍の石華表を舟の中に拜んでさへ念佛申す阿彌陀通の高聲に談話し書生見て五月蠅げに下唇嚙むも可笑し。「ヤア半田君何うも驚いた。實にこれ立錐の餘地なしだ。「立食の餘地なしとは恐れ入つた。西洋料理ぢやあるまいし。それはそうと吾曹が御輿を据る處も無いのには閉口ぢや。さうと云つて言問ひ團子俗物多く。八百松の會席會計は言文一致「……」の沙汰ぢや。仕樣が無い向ふの掛茶屋の櫻茶に微醉の敵を醒さうぢやないか。オイ遠

山乙に哲學者氣取つて何故默止つて居るんだ。コレサ遠山。君が首を捻つて考へるといふのは抑も自家撞着の話ぢやないか。人見君なら未だしも圖取の考案といふ必要もあるが。法學士先生眞逆人情哲學を研究するの必要もあるまい。チー人見君。君の故鄕は山水秀靈の勝地だと聞いたが。到底墨江の好景にや及ぶまい。見聞を博めるのは何うしても大都で無くちやいけない。君何うだ向ふを通る蒲腰島々の令孃。何う見ても美術の原則に適つて居る風俗だろう。吾曹は人見君の目的は實に羨ましい。眼に見耳に聽くもの悉く筆刀の材料となつて。胸中の無盡藏となるんだからね。遠山君。君もさう思ふだらう。「あアさうだ〳〵併し美術も材料の撰擇如何に因つてはその範圍を脫する事があるから。强ち何を見ても美術の材料とは云はれないサ。だから材料を撰むのは美術家第一の必要かと思ふのだ。「然り〳〵注意到れり盡せり。ヤアこの人は何うだ花を見ずして人。人を見るか。人見君實に驚くだらう。

花無くば枯野歸りの虫賣りに古昔忍ばる片田舍も花ありてこそ足も向島。出る人は山か波。さても咲いたり。花一片を一人に當てゝは。花の多々には劣るべきも。さりとて日每の花見る人には花の心もさぞや忙がし。

憎くらしや筑波の山の我儘者。人氣よいところんやらサ。サゝよいとこな。と跳りぞよめく花見の人を高い山から谷底睨み。霞の衣口に當て。クスリ〳〵と吹き出す、風暖かな隅田川。腹をよつたか波のうねく〳〵。名を聞いてさへなまめかし、吾妻のはとりに枕橋。閨の睦言波風立たず孕んで見ゆる帆かけ船。

へイ舟が着きました。「ヤア非常に陽氣ぢやワイ。
さて舟から出た三人。半田といふ男名は通次郎。此奴なか〳〵のにやけ者。黒ずんだ結城紬の袷。黒七子の羽織シットリと下る。納戸博多の男帯に黒山高帽子を冠り。年は二十二三。人品を云へば色白く眼はパッチリの天晴なる好男子。何處やら福助に似て居るよとは毎度下宿屋のお春といふ下婢が陰噂なり。次は人見親雄といふ十八九の若者。未だ淺草の富士珍らしがる山出しなれど孰れ田舍では頗る家の息子株あるべし衣服も東京にはチト縁遠けれど。金目のある瀧縞の紬の羽織は脇の下五六寸明いて可笑し。遠山靏之助縞羅紗の洋服男らしくして好く。洋杖の瓢物欲しげに輕し。先づ掛茶屋の床几に腰うちかけやれ〳〵と欠伸せし人見。兩手を顔に當てゝ微醉の熱を量る。「あッ呑み過して苦しくッていけない。「ナニ苦しい。アレばかりで弱い奴。「チイ遠山。君は朋友甲斐も無い。介抱してれやりよ。可愛さうにお坊ちやんを……。「ナニれ坊ちやんだ。「まア大人しくして居たまへ。ア。ソレ姉さんが茶を呉れるぢやないか。「コリヤ失敬。「ホヽヽ。大層にマア陽氣でゐらッしやいますこと。「恐れ入りました。今日はお坊ちやんと一所に來たら世話がやけて仕樣がない。「半田チイ止さないか。「おやまつたく。マアそんなに怒るナ。人見そろ〳〵ぶら歩くとせう。遠山は何うした。ヤア早い男だ。ナニ向ふへ行ッた。姉さん失敬。
火鉢の陰に光る銀貨。茶屋の女愛想造つて。お歸りさま引。

見渡せば此處にも葭簀張の掛茶屋ありて女中が懸くる紅襷のお掛けなさいと引き止むる聲もかしまし。此方には藁苞に刺す目かつら賣。閻魔に地藏下戸に上戸。種々樣々の半面相。牛の御前長命寺は一群むら立つ人の山。茶番は藝人兎事は娘ッ子や。紙芥子玉の手拭被り。櫻一輪染め出せし疊み手拭を首より掛けて一寸前に結び。裳端折りて緋縮緬の長襦袢をひらめかす可愛らしさ。誰が隱れ家か冠木門。奥より洩るゝ妻琴の床しき君の羨ましさ。三人ハ笑ひつ語りつ。そゞろ歩くに。彼方より微醉の花見一トなだれ。遠山は其を避けんと身を反るを。ドヤ／＼と押し出す人數。思はず靴の先を踏まれ。痛たやと其人を見れば我が父なり。父は驚きし面地。「蠶之助怪我せんか。怪我せんと、さうか。連れは幾人ばかりだ。「半田君と人見君と三人きりです。

蠶之助は後を顧みて二人を呼び。「宜いところで逢ッた。君失敬だが此處で一寸僕の父に紹介しやう。父さん兩君は僕がいろ／＼世話になつて居る半田君に人見君です。「あゝさうか。私ハ蠶之助の父正春。チト遊びにお出でなさい。「あり難う存じます。私は半田通次郎……。「私は人見親雄……。二人聲を揃へて。「以後は何分御敎授を願ひます。

挨拶畢り遠山正春は馭者を促し彼方に去りぬ。思ふに一輛の馬車枕橋に繫ぎしあるべし。その後姿は黑の山高帽子。綾羅紗の洋服は萬人の中一際目立ちて高尙し。

美人去り美人來る。來る者は多くは美人。都慣れぬ人見の眼には天人界か眼前にまたチラリ。叱ッ邪魔

な人なだれに殘念や翠の髪は跳る者の袖に隱され。東下駄の音微かに彼方の人蔭に響く。床かしきものは未だ見ぬ人の奥。奥には美くしき花あると思ふ未練。奥のみ花は濃かならねど。殘り惜しさは見えぬ奥なり。

花曇の空兎角當てにならず。當て込みし借衣濡らして。槇屋の娘春雨に淚ぐんで歸るはまゝある事。されどポツ〳〵と降りかゝらぬまでは歸る惜しさに花見る人の癖。見る〳〵筑波峰に。黑蜘蛛の這ふかと見れば。一天に網をや張りけん。はや洩れかゝる大粒の雨。先づ水の音に勢を添へて。一トしきり降り來にければ。すはやと狼狽へる者。潮湧きて岸浸す如く。綺羅粧ひし娘もかうなりては錦繡の帶手拭に隱され。氣取る新造も裳狹む可笑しさ。最寄の茶屋門下は雨宿りの廂となりて。三人の身を容るべき隙もなし。人に押され人に挾まれ。歩むともなく枕橋の邊に至り。半田は俄かに氣の附きしか。連れを顧みれはかけ離れて人見の駈け來るのみ。遠山はと聞けど知らずと答ふ。雨はます〳〵烈しくなりて。常にハ五月蠅勸める車夫も。足元を睨み此方を見向きもせず。はや車の數も殘り少なになれば。是れではならぬと遠山を搜す隙も無く。半田は早くも二挺をやとひ。ひた走りに走らす。人見は母衣の中に隱されて、吾妻橋の欄干半ばまでたゞおぼろ〳〵。人見は未だ醒めやらぬ微醉を車にゆられ。アツ閑靜な處だ。……熱鬧なと獨言つ間も無く。矢を射る早さ。此處にも櫻が。さても長い一軒屋。大丸は長いと聞えたが。それもなか〳〵此の間口には。へーお客樣引。

見れば萬燈は花より明けて。何時までも日の暮れぬに呆れ。事の不思議に人見は恍惚。まごつくも可笑し。「マァ人見君上りたまへ。此處も材料の一ッだ。

《其　二》

後朝の別れ際にポンと叩かれし肩先痛しとも思はざりしが。程經て後も其處ばかり痺れしやうに覺えて氣にすれば。堤の朝風身に戰と染みて思はぬに嚔二ッ三ッ。風邪感いたかと袖顔に當つれば。床かしき移り香弗と匂ひ出で丶我が袖ながらなつかしきに。睦言の善惡を繰り返しての品さだめ。くすり〳〵と笑顔つくりて。後ろ振り向けばはや霞して無耶無耶の中。憎くや車の早さ。翠帳紅閨の跡も空しく。轍に嚙まれて轆々の音身を刻む。さて何んとして斯く名殘惜しき。云ふべき事聞くべき事は。昨夜の夢と消えたる筈。これが人目を忍び逢ふ戀と云ふでもなし。情を買ふの客。云はゞ此方の氣隨氣儘。さりとて沙汰の限りと一概に云つて退ければ夫れ迄の事なれど。これと馴染を重さねて此方の無理を眞に受けさすのもまた一興。慰みに戀する人はいざ知らず。彼方も此方の情にひかされ。勤氣の水臭き仕打さらりと離れて。互に五分〳〵の戀に理屈をつけ。眞底しんみりの語り合ひに、隱し立ての紐解きて。たとへ蚯蚓のよろばへ書きでも。彼奴自づからの誓紙と思へば。よし横張にする賣屋札も。此時の心はぞくこん嬉しかるべし。首尾惡るく逢はで寢て覺めし明けての朝。酒呑まぬに溜飲の氣味胸わろき折り。誓紙の片隅少しばかり。手鋏に切り刻み一口に呑み下せば。グーッと胸押しつくると。なか〳〵能書にも

無い功能ありて。其日は先づお三どのに御飯の陰噂さるゝと請合なり。車の母衣に微醉を包む。これぞホンのほろ醉機嫌で。勇ましく神田小川町邊の或る小奇麗なる下宿屋の檐下へ横着けにつけし二人乘。お歸り引の聲ばかりは旦那殿めけど。中では平氣な顔で唯今ホゝとの受け答へ。莞爾で車を下りる二人の書生。毎度あり難うで引き返す車夫。ドン〳〵の梯子段ガラリの障子。「ヤァ床が……。「ヤァとこさうだんよ。ウッ何うした人見。「串戲ぢや無い可憐さうに冷たくなつてらア。「イヽよ直ぐ寢るから……。「また寢るのか。「寢なくつてサ。何うせ學校は止しだらう。「それはそうだが。「だがとハ何か不足があるか。ハヽア睦言の云ひ殘しだらう。「串戲云つて……。「眞面目になるから可笑しい。君なんぞは未だお坊ちやんだ。何うだ拙が昨夜のお手際は先拂と來ちやア。ホィ安く無いだらう。「モー寢るから默止つて居ろ。「でも先拂のお手際は何うだ。「あア騷々しい。郵便だと思つて居やがる。「居やがるたァ恐れ入つた。失敬ながら君なんざァ横から見たつて。縱から見たつて女には緣遠い方だ。それもその筈緋毛布大盡だ。「ナニ緋ケット……。失敬な人を田舍漢視して……。「田舍漢視するにあらず。田舍風を矯めんと欲すだ。了得は愛鄉心に富んでるだけ。言語擧動に何日までも國風を保存して居るのは恐れ入つた。チト拙が俠骨玲瓏たる風姿を摸し給へ。この間ソレ小川亭で美人を恍惚させたのは何うだッた。「聞きたくも無い止せ〳〵。君の姿に恍惚したのぢやない。義太夫に感心したんぢや。「君なんかさう思ふだらう。ところが何うして話せない。アノ樣子ありげな

素振。君震ひつくやうであつたらう。「ウッ人を馬鹿にして……。チイ夫はいゝが遠山の洋行は何日かしらん……。「突然恐れ入つた。アンな金佛の洋行なんざア何日だか知りやアしない。近頃と思つてりア間違いない。あア漸やう寢むくなッた。人見默止つて寢るべし。「氣樂な事云つて。饒舌るだけ饒舌つた癖に……。「ナニが何んでそんなに厭味を云んだ。今度ハ何うせそろ／＼君のお惚氣と來るだらう。此處らは恰度幕の引きどころだ。「酷い奴……。「酷いか酷くないか。話しかけられてチッとも寢かされない人の心になつて見たまへ。「また饒舌る、默止つて居りやア罪の無いのに……。

折から楷子をバタ／＼と登つて來た下女のお春。「チヤまたお寢み。「あア何んだと思つたら煙草火か。お春さん今迄かゝつて……。「だッて毎日の樣に未だお歸りぢや無いと思つて……。これでも心切に急いで熾して來たので御座いますワ。「お爲こがしはあり難くも何んともない。「人見さんお口の惡るいこと。アノ子に敎はッたので御座いませう。「何んですとアノ子。ハヽア判つた。鹿の子の根懸は何うも豪氣なもんですね。イエなにお春さん。昨晩お結ひ遊ばしたつて。コリヤ請取れない。居眠り勝に結ッたから拙いんだア。それでも昨夕の髮にはチト頽し方が早いぢやありませんか。ハヽア誰か破わし人があつたと見える。ナニ寢像が惡るいから。コリヤ恐れ入つた。お春さんにも似合はないナ。「アラお二人して冷やかしちやアいやで御座いますよ。「何んとして勿體ないこと。「無いつて被仰いましても。お顏に印がありますもの。「何が。「何つて貴君。お樂みのお名殘がチヨッピリ頰に殘つて居ますよ。

ソレ其處を嘗めて擽つて御覽遊ばせ。アラモー落ちました。ホヽヽ。「ヤアコリヤ閉口した。人見モー無いか。「アハヽ口紅なんか付けられて……。「情けない君までか助太刀するたア。「人見さんさん〳〵笑つておやんなさい。お惚氣の癖が付きますから……。

腹を抱へて座敷を出で去りし後は。談話も絶え程經て兩人の鼾の聲高し。さても〳〵亂れたり兩人の風儀。これとても故郷を出づる時は。まさかに千金丹の箱。肩にして來しにはあらずかし。學若し成らずば生きて歸らぬの極り文句。瘦我慢の肩肱立てしは昨日の事。はや戀に身を責められては。足下にからみつく愛着の繩。足も兎角學校の堅苦しい方へは向かず。母が仕送りの綿入綿厚く醜し迚嫌ひ。往來を通るにさへ草臥れる程氣取つて。花魁の八文字誰が敎へざるに踏み覺え。目は見ぬ振りの横目遣ひ。一寸古着屋の見世へ寄つてさへ。婀娜めく品にあかして色々に難癖つけ。コレ澁いのコレ野暮のと意氣がる可笑しさ。言語も動作もなまめかしく。書生風の凛として男らしきところ厭になり。談話するさへ乙に講釋師の前座ぶる面憎くさ。これとても自力でするなら未だしも。根も葉も無き胃病脚氣を言ひ草にして。母の懷ろを痛め仕送金の餘分をねだる曲者。肩休めなのは書籍ばかり。二月も三月も前に紙の端一枚折られたばかり。其儘机上に棄てられて。ミルトン。マコレー晝寢の出花。あア茲な怠惰者にかゝつては己れの感化力も及ばぬかと。先哲の方々腕組みして史中の慨嘆。尤も旅書生ほど色仕易き者は無し。前々の宿急ぐ旅人にあらず。卒業は三年か五年かの相庭ありて。左まで氣を縮めて勉強するにも及ばず。

國を遙かに離れて居れば小言云ふ人も無し。仕送の金。滅茶苦茶にしても少しも判らず。あァ氣樂なるものは金のある旅書生の身の上。
半田人見の兩人も今は花街の風に慣れて。夜を晝とのうッて違ひ。夢中の囈語ドンの音に驚き。今日もまた一日と暮し二日と過ぎて。行末は哀れ國へ涙の土產。國元の親兄弟斯くなる事と知らば。初めより手離しは仕間敷もの。さりとては親心の脆き事よ。村の敎員樣に御子息はなか〳〵學者でゐらッしやると。焚きつけられ我が子れはや大先生にでもなつた心地。ポッ〳〵喜び常には紙屑一ッ捨てる若者を叱りつけて下唇噛み。味噌漉の糟犬にやるお三を當り惡るくする親御も。大まいの紙幣耳を揃へて。我が子にはそれ英和辭書史記日本外史と値を嫌はず。己れ四角な文字と横文字と讀めぬ癖よ。己らが悴はかう〳〵いふ六ヶ敷本を讀むと。實語經の講釋するやら。お庚申講の晩村中への御吹聽。頤の荒髯片手に拔きかけて感心する水呑み親方。悴の噂聞きたいばかり。未だ二月も間のある觀音講の當番我れから急ぎて。燒豆腐に昆布卷の膳部立。栗の皮剝きながら村中の婆さん打ち揃つての焚きつけ話。東京へ行かつしやつたら豪氣なお役人樣にでもならつしやるべいと噂とり〳〵。イエ愚鈍な悴何うしてそんな豪氣な者にあれませうと辭退しても心の中では被仰しやる通りの豪氣な者にならして御覽に入れませうと思へば心嬉しく東京へ登して後も。五圓で濟む仕送金も可愛さに六圓も八圓も送つて。餘分があらば他人の見ぬ珍らしい本でも讀み。博學になつて他人より早く立身して呉れとの親御の御恩も。何處を風吹く

やらとの子息殿の考へ。先づ奥羽關東の書生方なら。やう〳〵此處は東京だ。晝飯は上野の山下の雁鍋。イヤ滅想に豪氣なものぢや。女中の大勢居るのは女郎の下拵へでもあるだらうと膽を消した苦い顔の未だぬけぬ中は。料理屋と云へば松田雁鍋に過ぐもの無しと思ひし者が。チッとの間に小癪にも八百松紅葉館何が糞と鼻であしらひ。いろはで見た女中を天人と見し眼ハはや三月四月と過ぎ。春の花見秋の紅葉色々と咲き變り染め變りて。團子坂に令孃と袖摩り合ふては。ウッお多福と惡口云ふも半年此方。惡友に誘引はれ女義太夫聞いたのが初手。廓の夜櫻氣晴しが元とありてむら〳〵の迷ひ雲足下をからむに至る。まして人見は未だ若者。邪魔の闇雲無かりしならば。何とて〳〵容易に春は知る間敷に。一夜の情百年の仇となるは。さても〳〵うたてき戀。物の哀れもこれよりぞ知る戀とは云ひながら。憖いの戀は腐れ繩で桶の欲に代ふるより猶以つて危うし。

人見親雄は夢やう〳〵覺め。頭さし伸ばし枕元の火入を長煙管で引き寄せ。一喫吸ひながら片手で眼を摩り。一ッ二ッの屎伸して。またしてもスッパ〳〵と吸ひ。口を尖がらして。その煙を吹き出せば。煙の中にあり〳〵と馴染の顔。しかも朱羅宇の長煙管。吸ひつけ煙草此方へ向け差出す思ひ入れ。人見は思ひ出して獨り莞爾と笑ふ吸殼を。ポンと灰吹に叩きつけ。物見るともなく瞬もせず莞爾。また一喫吸つて吸口を頰に押し當て。ウッ。と冷笑つて思はず身震ひする樣子。他人に見せたら狂氣の沙汰。「ウッ畜生……。コレサ半田起きないか。半田通次郎微かに眼を開き。夜具の袖より此方を覗き。「何うし

た笑つて……。何が可笑んだ。失敬な獨りで惚氣て居る。間もなく最前の下女。一封の書狀持ち來て人見に渡す。人見直に封おし切りて一通り見たり。「あァ感心な妹だ後見人が苦情云ふのを母さんと二人して隱して學資を送つて吳れた。「何んだ學資が來た。盲龜の浮木ツりャ旨い。今夜また行かうぢやあいか。「ヒヤ〳〵。「アラ今夜もゐらつしやいますノ。二人は驚き伸び上りて夜具の裾を見る。「チャお春さん未だ其處に居るノ。「人見さん何か御用で御座いますか。お召物を疊んで居ましたので御座いますよ。二人の談話を外處に聞く半田は人見の書狀を讀み下し。「人見君それぢやァ君に許嫁の妻があるノか。「たゞ名目ばかりサ。「噓云へ。それで例のを迷はして……。コン蓄生あやかり者め。「アラ半田さん一寸貴君。只今何んと被仰いましたノ。「お春さん人見に何か驕らしておやりよ。

《其　三》

暦で日をくり。三世相で方位を定め。鬼門に旅立たせず。寅の日を忌みて。出立の日を一日と延ばし二日と延ばして。五月雨の晴れ間無きに。はや十日も過ぎ。さて愈〻といふ日になれば。今日生憎も不成就日。これではならぬと。家内寄り集りて暦を捻くれど。さて近頃思はしき日はなし。さりとて親類相談の上取極めた立日。今更さうべん〳〵と延ばされず。皆樣のお見送り下さる手順もあれば天氣好い日を吉日として。いよ〳〵明後日と定めませうとの相談。それにしては明日は好い日だから。明日家を出た積りにして。叔父さんの處は道筋なれば。途中に泊つた氣で草鞋と風呂敷包其方へ屆けて置けど。我

が子に初旅さす時の親御の心配。豆で胡桃で出先を祝ひ。それ草鞋の紐の結びやうが違ふと父が傍らから世話燒けば。母の道中の護摩の蠅氣遣ひて。宿屋の風呂場で胴卷に氣をおつけと呉々の指圖。子もその心切にあまえて。自然に落つる嬉し涙を。怪我除けに出す梅干の酸味で顔皺めるにかこつけ。母さん大層酸ばい梅干ですと。紺絞りの襦袢の袖に涙を竊と拭ふ。されば父も母も行先の事いよ〳〵案ぜられ。お前茄子漬もお上りかい。梅干は一時の災難を除けるといふが。茄子漬は一日の怪我を除けると云ひますぞい。宿屋をたつ時は屹度兩方貰つてお上りよ。左樣なら行つて參ります。いゝか怪我せぬ樣に氣をつけて。そんなら御機嫌よろしくと。まるで戰場へ出陣でもするやうに。隣村の境まで見送られても。別るゝ人の殘り惜しく心細さよ。まこと一日十里詰に歩りくとて。百里の道中は十日かゝる。了得は倫敦巴黎羨ましいと羨んだのは昨日の事。陸奥の果から南海の隅まで。鐵道蒸氣スラリシーッと。滊笛の音ピーピー。松島の翠朝に摘みて。向島の花夕に折る。百里の旅も前垂懸け。千里の道中も雨具は無用。米國の牛乳日本に配れば。英國の肉築地邊の料理屋に入る。扨も〳〵便利の世の中。便利の庇蔭で半田通次郎。人見親雄も故郷を離れて。東京に遊學する今の身の上。半田は大坂者名に釣り合つた通人。東京の人氣に慣れて萬事拔目の無い男。其癖萬人に靡れて輕薄なれど。滅金の指輪テンプラと見せぬ上手。口先ばかりの心切。一寸見て人に好かれる性分。人見は未だ東京へ來て一年にも足らねば。萬事體好く引き立てゝ呉れる半田を無二の良友と思ひ。嵌れば嵌る泥田の水。片足を拔けばまた片足。結

句儘よと腦漿の定まらぬだけ迷ふにも早く。追分の標木見當を違へて途方も無い横道へ踏ん込み。人知らぬ花一枝折り取つて恐悦がる愚さ。それより以後は。半田人見吉原通になりし氣で。物堅い遠山靍之助を金佛と稱へ。身震ひして敵手にせず。遠山が今度の洋行は結句邪魔除けなりとて。さて今日送別會の宴席に連る事となりぬ。危いかな人見親雄。己れ人見る眼に乏しく。一歩違つた親雄の行末。これとても元は無心の白糸なりけるものを。

繪草紙屋の店先景氣つける裡體の美人を美術の極粹と理屈をつけて。うつとりと見惚れて居る學者先生もある今の世の中。到底見上げた美術家の出來ぬもの理の當然。近頃美術の風やゝ暖かになりしより。地方の物持先祖傳來の掛幅屏風俄に思ひ立つての虫干。畫師の年代記繰返して似ても似つかぬ贋物を引き捉らへ。これ〳〵金岡だ具慶だと。三文の價値も無い芋山水の虫喰物を鑑定頼んで。純子の表具桐箱の新調。今年道具屋の當り年。常には天窓下げて臺所より出入した者が。如何なる風の吹き廻しか。旦那方より態々の御使ひ。その上菓子折添へての鑑定頼み。だらう位の極め書。たゞの一目も拜まれぬ金釘流も。應擧と書いてさへあればあり難しと。押し頂かゝる嬉しさ。こんな事なら折手本の百冊も書いて置くのにと今更後悔せし道具屋の顏色。何うぢや悴に畫を習はしちやアと。これはまた改まつて慇懃なる御相談。な……成程人の心と秋の空。變ることの早いもの。一昨年の秋東京の畫師が。北海道の方から廻つて來て。此家の奧座敷の襖の繪畫いた時。アノ醜くい風體見たか子孫代々まで畫師には決して

〳〵成らせはせぬと云れし事。僅か二年で未だ忘れもせぬ筈さて〳〵流行は恐ろしいものと。道具屋我れから不思議がるも可笑し。人見親雄の生國は宮城縣仙臺。其家市中きつての物持。父が四五年前沒してより以後は。親雄己れハ土俵に蹈み上つて後見人の叔父に身代を任せ。骨董旦那を氣取り。秋の收穫何石といふ數ば知らねど。古器物の蹈價には眼が明いたものと骨董屋の手代へ自分持出しの御自慢。左樣で御座います。へ。へ。私どもは旦那樣のお目利には叶ひません。ですから決してお掛直は申しませぬな見す〳〵高い品物を買ひ込んで。お出入の家來にこれは何うぢやと鼻うごめかし給ふ御氣性。御無理はます〳〵增長して。後には途方もなき大望を起し。東京で繪を習つて見たい。早く繪事學校の生徒にならうとの立願。母御も一度は驚かれしが。親雄は是と云つて格別多用の人間でもなし。今の世の中に今の年頃。女郎狂ひするものもあるに。繪を習ひたいとは神妙の望み。その上諸國の人に交つて見たなら少しは世の中の道理も悟るだらうと。母御と妹との膝を合せての相談。後見人も早速承知してさて親雄を東京へ手離したり虎を野に放てりとは正に此事。

遠山蠶之助は東京の生れ。父は正春とて或る省で課長の地位を占め給ふ大達者。出仕には馬車をも召さるゝ御身分。蠶之助了得高等の敎育を受けしだけ。發育も思想も至つて氣尙く。しかも二十三の秋首尾克大學を卒業して。英國へ遊學する身の上となりたり。親御の愉快は如何ばかり。當人も傍輩に對して身巾の廣き心地し。常には無駄口叩く親友もお目出度の挨拶のみは眞面目で云つて呉れるだけ。隱れ無

き名譽の程嬉しく。さわれいま一歩進みて。天晴一方の人物とならんとて。親の許しを喜び。名殘惜しき日を急ぎて近日いよ〳〵横濱解纜の便船に乘り込み。英國へ向け出立することゝはなりぬ。心ある同ド年輩の友ならば。蠶之助の行末をいたく羨むべきにさりとては。無心ある人見半田。心に虫生へてより其身の臭きを知らぬにや。蠶之助の名譽を羨みもせず。夜は鐘より早く明くるを怨み。晝は秋の日の眠り足らぬを喞ち。學校よりの注意を受けしははや幾回といふことを知ず。朋友には指彈きして絶交されこれにても。未だ醒めぬ痴蝶の夢。雨の窓に耳欹てゝは借金の遣繰りを思ひ。風の音に夢驚かされてはヘボンの辭書流質の期限近づくを怨む、空想現となり女郎の影身に添ひて消えず。我れ笑へば彼れも靨に漣を寄せ。耳下に口寄せて囁くものは誰ぞ。見詰むれば其人も無し。近か下宿屋に夢を結びては。夜の風身に染みて褥冷く。思ひ出しては後の契りの日を急ぎて。明けぬにはや暮るゝを待てば。夢の中に忽ち日は落ちぬ。愁いに戀知りし身は。心何となくいそ〳〵して。物の業だに手には就かず。

遠山蠶之助は初めより半田人見とは交り親しかりしが。心半田の輕薄を嫌ひ。蔭ながら人見に呉々も注意せしが。人見は未だ塲所馴れざる若者。遂には半田が甘口に乘りて。今はかへつて遠山の交りを疎むに至れり。されど遠山の眞ある心切は。何處までも人見を保護せばやと。種々その方便を巡らせども。一度朱に染みし糸は洗ふも詮なく。半田が作る蠶之助の虚構の落度を眞にうけて。今ははや迷ふたり人

見親雄近頃淺草江崎で寫し撮りたる。遠山半田と三人の寫眞さへ。俄に厭やになりしとて。國元の妹の許へ送り遣りしとの事。さても〳〵心の曲りたる事よ。跳りの師匠弟子の身振を矯めて弟子には辛しと溢さるゝもこれも總て人の心の有樣かや。遠山蠶之助さりとては蝶を驚かす花間の嵐。それも花散らす無情嵐にあらで。眠る蝶に雨を知らす嵐。されど飽くまで花に迷ふ胡蝶は。これをしも怨むうたてさ。蠶之助は今日送別會の宴を幸ひ。厭やがる人見を別室に招き。懇々身の上の事諭言すれど。さて改心といふ決斷力も出ぬ樣子に呆れ果てしが。此上は半田に忠告するか。兎も角も此儘に棄て置かば遂には身を果すべしと。竊かに親元へ云ひ送り。人見を國元へ引き取らす方宜からんとて。翌日書狀を差出したり。

此處は麴町富士見樓。今日遠山蠶之助が送別會。今が今まで騷がしかりし樓上樓下も。客ハはや歸り去りては。殘肴の喰ひ荒らせし遺物。二三人親しき友の一ト酒宴。かけ離れて此方の隅に遠山蠶之助半田通次郎と密々語り合ふ談話は人見親雄が身の上の事。蠶之助は半田の腹ゑぐるやう。痛く和らかに改心の事頼む。頼まるゝ身の切無さつらさ。手に汗握るも可笑し。「かう云つちやァ君に惡るく當るやうだが。君は人見から見りやァ年嵩も學力も兄分ぢやないか。その兄さんが……。失敬ぢやが君何うかして人見を改心さして呉れ給へ。「あァ君にさう云はれりやァ一言も無いが。僕は誓つて人見君を改心さして見せやう。僕も一時の迷ひでツィ魔道に嵌り罪も無い人見君に……。あァ僕が惡るかつた。「君がさ

う云ふ氣で居て呉れりやア實に安心だ。僕だつても二年か三年の中には歸つて來て。君あり人見君なりが立派な人物にでもなつて居りやア愉快だが。もしも……。結果見るべしなどいふ惡評を聞いた日にやアあまり朋友冥利の好い話ぢや無いからナ。こんな事を僕の口から云つちやア。洋行するのを自負するやうに聞えるだらうが。マア君も考へて見たまへ。

熱心に語りかけて不圖半田の顏を偸み見るに。やゝ冷笑ひの氣味眉間に洩るゝを。左あらぬ體に粧ふ樣子。語りしとて詮なしと思ひ。俄かに言語を和らげ。「かう云つちやア人見の放蕩は君が敎へたと云ふやうに聞えるだらうが。決してそんな譯ぢやないから君腹立てゝ呉れちやいかん。しかし人見の事は宜しく賴むよ。「ウム委細承知した。あア實に僕が過つたんだ。君彼地へ着いたら屹度知らして呉れ給ひな。「あア。君も暇があつたら日本の出來事を知らして呉れ給へ。外國に行つては力にするものは故鄕の音信ばかりださうだ。それぢやア君。今話した通り人見の事はいゝか。「あア心配したまうな。

二人は談話を止めて。蠶之助は便所の方へ行かんとて振り向く後邊。彼方の小暗き隅に誰やら人影。訝かしながら近づけば人見なり。柱に凭れて苦しげなる樣子。「オイ人見。何うした氣分でも惡るいのか。ナニ腹が痛い。藥でも呑んだか。ナンダ呑まん。それぢやアいかん。女中でも呼んでやらうか。いゝつて遠慮するにや及ばない。「あアもーいゝ。やう〳〵落ち着いた。君失敬ぢやが僕ハ先に御免を蒙らう。「さうかそれぢや失敬。人力車を賴んで貰はんか。オイ君。人見君一寸待つた。イヽか先刻も云つたアノ

事は。マアよく考へて御覽。「あア。君の心切はあり難い。以後は屹度……。君安心して呉れ給へ。
遠山は俄に笑顔つくり。「さう云氣なら僕も安心した。實は僕が今度の別れは三人の性質の岐るゝところだからチ。それぢや君失敬。

《其　四》

降るやこん／＼樹も庭もみな白妙の布團着て。葉垂れの深雪。呉竹の寐る程積る夕暮のこの淋しさを。餘處に餘念も子供一群。あらゝ勇まし面白や。しほのめ天窓うち振りて。いたづら盛り惡る盛り。冷飯草履濡れくさり。つめたき足を爪立てゝ。負けぬ氣を出すいぢらしさ。倒さるまでも我慢して。まろめて打つや雪礫。此處までござれ御大將。駒の足どりしやん／＼と。研り込む敵の大手口。折角立てた雪女郎。奪られな遁げあと行き歸り。彼方へさそひ此處へ連れ。名に合ふ源平敵味方。負け勝見えぬ雪合戰。雪吹き飛ばすさら／＼／＼。空はさながら花散る里。餘念泣く子も笑ふ子も。果ては互に愛嬌つくり。洋犬が來てアレ淡雪に飜れ梅。

今朝も今朝とて我が子に斯る快よからね音信見しより。心地惡しとて臥し居たる親雄の母親。我が子は立派な人になり明日は歸ろかもし今日かと。待つ甲斐も無き遠山の忠告書。さてはと讀みて憂ひに沈み。表に子供の騷ぐも五月蠅く。部屋の紙門閉めきりて。巨燵に頭押しつけ勝。お母さん御氣分は如何であらッしやいますと案じ煩づらう娘お妙。なんなら御本の二三枚もお聞かせ申ませうかと愛嬌つくる可愛

らしさ。母も微笑みてさらば一ト口聞かうかと握り手を額にあてゝ苦勞を娘に見せトとすれど。胸は有耶無耶うつら〳〵の物思ひ。讀み人も少しひるむ折から。座頭梅の市お見舞と申上る聲めづらし。娘は人はしき折とて。呼んで浮世の噂話聞いて慰め申さうと。呼べばいそ〳〵口輕な梅の市。「へイ。これは奥様お孃様何人様も御機嫌よろしうお目出たう存じます。其後は一向に御無沙汰致しましてどうもはや……。「おう梅の市さんいゝ處へ來てお呉れだネ。此處でお母さんのお肩を按ッて上げてお呉れ。そして何日のやうな面白い話してお聞かせナ。「へ。へ。宜敷御座います。奥様今日は大分お寒いやうで御座いますネ。「さうネ。お前こんなに降ちやア歩行にもさぞ難義だらう。「あり難う存トます。奥樣大分お肩が張ッて居りますが。何處もお惡るくはゐらッしやいませんか。「何處も惡るかァないが。今日はチと氣分がいけないから。お婆アさんでもあるやうに巨燵へばかり這入ッて居ましたよ。「ハ。ハ。それがかへッて御養生になります。近頃は大分風邪が流行ますので。私が參りまする旦那方でも。お子さん方やお女中方が風邪で臥せッてゐらッしやるお家も二三軒見えますが。此方樣では何誰樣もお變りは御座りますまい。私先頃から師匠が度々呼びますので。一寸の間東京へ參ッて居ましたので。何うも御家內樣の御樣子も。トンと不束になりました。「おう。誰も變りはないよ。「ソレは何よりお結構なことで御座います。

此時襖の彼方に摺足の音して。娘のお妙茶を梅の市にすゝむ。「お孃樣。これは結構なお茶で御座いま

す。へ。へ。モー充分に頂きました。さて今日は雪が降りますので。療治の方が至ッて閑で御座いますから。方々の旦那方へ御無沙汰のお詫事に上らうと存じまして出掛ましたが。イヤハヤ何うも東京とは違ひましたもので御座います。この大雪に下駄がごろつきまして。ツイ御門前で鼻緒を切らし。御臺所へ廻りお三どんに麻絲の御無心を願ひ。御機嫌御伺ひ申まして御用を承はり。仕合にこの大雪を凌ぎました。そこでお孃様に緩々お話し申上げたいのは山々川々。しかも東京仕入の本場請合。蓋明けてお耳に達しませう。今日こそは話の種に閉口して。お茶一服とおねだり申す梅の市とは違ひますよ。これはしたり私ばかりお饒舌を致まして。まことにはや何うも……。「アラ梅の市さん前振ればかりして。例日のやうな落し話は厭やですよ。早く話してお聞かせなさい。お母さんもお聞き遊ばして。面白いやうなのを。一寸摘んでお聞かせよ。「へ。へ。只今直ぐ……奥様お五月蠅は御座いませんか。「なんの五月蠅いとはあるものか。お妙が聞きたいッて云ひますから。チッとばかりでもいゝから話してお呉れ。
「左様ならお孃様。サア〳〵お話しの始りで御座ります。
仔細らしく天窓うち振り。両手は奥様の肩に力入れて。時々の眼瞬白くうるむ珠ぎろ〳〵。出もせぬ咳拂ひ一ッ二ッ。さて説き出す物語。
東京御見物の御方々。先刻御承知の淺草上野。別してお若い御方の御禁物。花の吉原と申しては。此處不夜城と名のあるだけ。千光萬燈花より明け。入り込む客は千差萬別。まことに〳〵嚴格しや。紀文が

閉ぢたといふ大門。四季折々の眺めには。花に燈籠に仁和賀に菊に。兎角若者吸ひつけ煙草。それ。それが惚氣の口火となりて。本町筋の角屋敷。後目を繼いで三年目。亡父の年忌當りには。涙で手向ける線香の煙りと消え。これはこれはお情ない裏店住居。隣りの芋屋の竈を羨む今の境界。これとても昔時はりうとした若旦那。今は屑屋もなか〳〵なる御風情。此人惡魔に魅入られし始末。今を距ること。ナニ夫程斷る迄も無い出來事は今年の春。しかも本店は上州桐生。親指か人さし指に數へらるゝ處の大盡その獨子息どのが學問修業にとて。官員樣のお引越なさるやう。柳行李二ッ三ッ。りうとして上京或る商學校へ御通學。間も無く父は東京本町へ支店出すとて。管頭の久兵衛支配役に選ばれ。六七人の手代召し寄せ。紺地白拔きの長暖簾。出店では豪氣なものと。直ぐ向ふ絹屋の丁稚不思議がるも可笑し。若旦那は下宿屋を引き取り。支店より日毎の御通學。今年十九色白な瘦體の若者。むざ〳〵埋木に花咲かせんは惜しいものと。噂するはお下地を窺ふ白鼠。ツイ氣晴しと一夜の遊びは。これぞこれ横丁に這入り込む溝板の腐れ緣。さて翌日は手代丁稚唐銅の火鉢取り卷き。口々に嬲つて見る功者顏。中にも年嵩の手代藤八。火鉢に頤に片手を衝ッ掛け。鐵火箸把つて灰に參らせ候かしくと樂書き。若旦那の橫顏ジッと尻眼で睨み。若旦那何うも話せないネ。抑〻女郎の誠と云つては。卷繪師の吉兵衛三浦屋の高尾に馴染み。情を籠めし手細工蒔繪の盃。思はぬ男に身受けされ。貰らひしは儘ならぬ水盃。悟つて吉兵衛天窓圓め。念佛三昧鉦叩いて南無阿彌陀〳〵。其外からと數へたら。一切經誦むよりも長い事。紀文の

なれの果。伊左衛門の紙子擔ぎ出して。女郎を魔物と思ふものは。振られた人の負け惜み。若旦那初會おぢや味が知れませぬ。馴染から間夫となつて。ハイ〳〵後は申しませぬ。若旦那お打ちなさるものぢや御座いませぬ。あァあッ痛い後は決して云ひません。迷ふは闇雲。遂に身を酒色に持ち崩し。是はと悟りの開くる時分は。父には死なれ屋敷は人手。我手にはお舍利の一ッも殘らず。さて分別は出ず出るのは涙。兩袖に拭つても足らぬ〳〵。着換への衣無ければ。涙の染痕殘るたけ恨めしく。今は未練に倒まながら。女郎に無心云はうと思ひ。貧すれば了得心も太くなりて。厚かましく廓の內に入り込みしが。瘦せ細りたる身の置所無く。格子の外に身を縮めて。靜かに名を呼ぶにさへ後暗らく。彼方は何氣無く出す吸ひつけ煙草。橫目にジロリ其姿のむさぐるしさ。驚いて尻込むと二足三足。うろ〳〵する若者を。氣轉に追ひ出す揚屋の若い衆。若旦那は氣も拔け心も迷ひ。小砂利に兩膝を摩り剝ぎて。口惜涙はら〳〵。今更詮方無く切齒しながら。月に送られて歸る我が後姿も耻かしく。此處で死んで父上への申譯と。思ひながらも考ふれば憎くきは女。さてもよく〳〵男を誑らかしたなと。夫より以後は寢る眼も合はさず。働きぬいてやう〳〵溜めしは四五圓の金なり。夫れを懷中にして一目散。出花にパッパと光らす騷ぎ。はや夜更けて行燈の影ほの暗く。二人差向ひて言葉も無く。若旦那は一口二口の怨み言。女は憚りと立たんとするを。隱せし短刀水も溜らず。キヤッとの一聲。はや立ち騷ぐ樓上樓下。是ではならぬと騷ぎに紛れ。走れば眞ッ暗雨の道。淺草に亡父の假り寺。墓地の前に腹くつろぎて。先祖の墓

に血拭ひの手跡。あはれ紅葉して流せし浮名。たゞ不愍さは後に殘る母親一人。病み上りの身の窶れ子に後れ食竭きて。憂を荷ふて他人の門に立寄るとは。聞くもあか〳〵哀れ。それを横町の床屋で聞いた其時の涙。「さて憐れな事では御座りませぬか。世の中には不仕合な人もあればあるもので御座りますナ。

他所の涙に貰ひ泣く親子。その一事〳〵も身に應へ。顔見合せて言葉も無し。

「梅の市さんお前が話の上手なので。妾までがツイ貰ひ泣きを……。お妙チヤお前も泣いたのかい。」ハイあんまり哀れなお話でツイ涙が……。

親子は互に顔見合せ。また潸然と泣くも憐れ。梅の市樣子知らねば誇り顔。「今日は大分お話が御意に入りましたと見えて……。イエナニ豆腐屋の八が申まするには私は近頃めッきり話が上手になりましたといふ事で御座います。へ。へ。話は何誰樣も出來ますもので御座いますが。哀れな事を申上げても。人樣がお泣き遊ばさぬやうな事では。話が上手ぢやとは申上げられません。へ。へ。さうお賞めに預りますと。何うもはや。へ。へ。あり難う存じます。

間も無く襖の明く音して。女中は閾に手をつかへ。慇懃に言葉和らげ。「奥樣梅の市さんを種田樣からお迎ひに參りました。」種田樣からお使ひが來ました。ハイ〳〵只今直ぐ參上致ますと。お使ひにさう被仰ッて下さい。お竹さん何うも憚りさまで御座ります。「梅の市さん種田さんへ行くのなら。妾ハモー止

してもいゝから。お前お茶でも呑んで。お使ひと御一所に行ッてもいゝよ。「へ。へ。それぢやアさう願ひませうか。お竹さんお使ひを一寸待たして置いて下さい。左様なら奥様お孃様御免下さいませ。「チヤモーお歸り。何うもお粗末であッたチ。竹や梅の市さんのお手を取ッてお上げよ。「ハイ。「コリヤお竹さんあり難い。さて和らッかい膨ッ手だチ。「厭やですよ。握ッちやア。「オヤこれはしたり。梅の市なか〳〵元氣。よいとこな。奥様ハイ左様なら。

跡は親子が差向ひ。たゞ凋れかへりて言葉もなし。良あッて娘は言葉を出し。「お母さん。「お妙。「で……御心配遊ばしてはいけません。そして御氣分は如何で御座います。「あゝいゝ。

娘は涙を袖に拭ひて。次の間に出で行きし後は。獨り思案に胸を痛めて。母は涙にくるゝも痛まし。「あア親雄は何んとした子だろう。妾にばかり心配させて。人聞きの悪るい女狂ひ。此事は種田さんへ何うか知れないで呉れりやいゝが。もしも知れたらアノ娘……。許嫁のお金さんを破談するッて被仰るまいか。あア何うも心配でならない。親雄が先頃の書面には。モー一月で學校は卒業すると云ッたが。遠山様の書面で見ると今年の夏に退學とやら……。親にまで嘘を云ッて。呆れかへッた親不孝。親雄が今迄費ッたお金は何の位と思ッて居るやら……。今年の養蠶では少しばかりの損ぢやない。イヽエ後見人の前も面目無い。お前が可愛いけりやこそ。叔父さんと物云ひしても送ッたお金。それもお前が立派な者になッて來るのを樂みにして……。ホンに生甲斐もない。もしも梅の市さんに聞いた母親のやうに……

あアいッそ死ぬ……死んだら。ま……ましだろう。
間も無く忙がしく馳け來るお妙。何事と涙を拭ひて靜かに問へば。娘は語らぬにはや涙ぐむ。「お母さんお金さんがゐらッしやいました。お……お母さん。お金さんが……。
見ればお金といふ娘も正體なく泣くに。母は驚き呆れお金に問へば。うるむ答も憐れ涙聲。「お婆さんお聞き下さいませ。お父さんが親雄さんのお噂をお聞きなさいまして。お嫁にやるのは厭やぢやから。は……破談するッて……。お婆さん〳〵……口惜しう御座います。
乙女心の恥かしきも打ち忘れ。思ひ切ッては云ふべきだけ。袖嚙みしめて涙に語る。擔下の雪此處のみ解けて。三人泣く音に村雨はら〳〵。

《其　五》

實直にしてお世辭無き者。死物とて今の世に退けられ。隱奸にして人に媚びる者何時の世にか時を得て。錦繡の褥に眠るとはさても世の濁りたる事よ。半田通次郎の輕薄にして陽に心切を飾り萬事拔目の無き仕打は遂に人見親雄を魔道に落せしが。人見は遠山の注意にて國元より迎ひの人共に歸りし後は丶や一年になれど。更に音沙汰無きのみか送りし書狀は行先不分明とてみな戾り來れば。今は人見の腰も目當にはならず。兎角遊び呆すうち。後にはその學資にさへ困る樣になりしかば。斯うしては居られぬと。蠶之助が英國より送れる書狀あるを心切氣に遠山の家に持込み。例の辨舌もて遂に遠山の父を說き伏せ

そが情にすがりて身を官員に變へ茱省の會計課へ出頭する事とはなりぬ。遠山正春も半田が書生氣離れて。萬事如裁無きを此上無き者と思ひ。殊には靍之助が朋友なれば深く信用して用ゐることなれば自然他の官員よりは昇給も早く。今は格外なる家宅を借り受け下婢召仕ふて暮しける。されど生得無頼の白者なれば身樂になるに從ひ。又もや酒色に耽り居るを知らぬ人心のおぞまし。駿河臺鈴木町邊の一家を借り切りて小奇麗に住居する半田通次郎。門には杉柾の札に半田通次郎の名刺を貼り。庭には少しばかりの植込もあり。這入ッて左の口を應接所と定め。次の間は主人の居間一脚の机床の間の前に飾られて手にだに觸れぬ體裁の洋書五六冊。傍には餘る程詰められし本箱。その上には洋服懸柱を隱くして裙長くドッサリと垂る。違ひ棚には月琴を横たふれど。火鉢の鐵瓶其の音を掠めてはや松風の響颼なり。主人は黒唐天の敷布團に座して。顏を傾けながら假名バかりの書面認め居るは訝かし。此時彼方に足音して襖の音ともに下女閾に手をついて聲靜に挨拶す。「旦那樣人見さんとおッしやるお方が被入いました此方へお通し申ませうか。ナニ人見。人見何んといふ人ぢや。親雄とは云ひはしないか。ハイ。たゞ人見さんでおッしやるお方が……。おやア人見かしら……。そしてそのお方は幾歳位なお方ぢや。左樣で御座います。二十三四にもお成り遊ばすかと思ふお方で御座います。「ウム。そして顏は……。「色が黒くッて顏へ黴瘡が大層出てゐて。髮の毛は誠に薄くッて。まるで病人ででもゐらッしやるやうで御座います。「イエ色が黒くつて顏に黴瘡……そして。身裝は何うぢや。「それは何うも醜い體をなさいまして。

兵子帶もモー鼠色に變つて居ます。旦那樣また何日ぞやの壯士とかぢや御座いませんか。御用がありませんのなら早くお返し遊ばした方が宜いぢやありませんか。「ムウそんな奴に逢つちやアいかん。梅や主人が居らぬと云つて早く返して呉れ。外聞が惡るい……。」「それぢやアさう斷つても宜う御座いますか。「あゝいゝ。早く……。

下女が立ち去りし後。通次郎未練ながら障子細目に開き見れば。擬ふ方無き人見親雄。如何に落ち果てしとは云へ。前には絹布纏みに贅澤を極めし者が。色もはや褪めて膝の邊半ば切れかゝりたる身を崩縞の袷。白の兵子帶古びれて色も見定めがたく。後減りのした日和下駄穿き。帽子無ければザンバラと亂れし髮隱す由もなく。蝙蝠傘持たねば。恥かしき身を隱しもならず。梅毒に病みほうけしか。顏には黴瘡痕を留めて去年の俤なく。鬚さへ延びてその樣怪げなるに。了得の半田も打ち驚き思はず持ちたる筆はたと落せしこそ可笑し。人見親雄は半田に面會を斷はられ。遺憾に堪えかぬれど身の醜さに恥ぢて强ても云はず。悄々と歸りしが。道すがらも熟々考ふるに。通次郎の輕薄なる仕方無念に堪えかね。獨り淚を嚙みて過を悔いても今ははや詮なし。親雄思ふに我斯く寠々しき身となりしも。元を糺せば半田が師となりしと。汝の毒舌に陷らずして今迄學びたることならば我は立派な人間となりて。錦を故郷に飾るべきに。さりとては憎らしき半田通次郎。さきに同宿せし折にはその窮迫を助けて。急を惠みたる事幾回といふことを知らず。其後汝は官に緣を求めて今の身分となり。我れ數度の不幸に遇ひ今零落の

身とあるも。元々生死を盟ひしものを。今日やう〳〵その居宅を尋ね出し。身の落着を頼まんとするに。姿の醜を見て面會を斷るこそ此上も無き恨みあれ。何日か仇せでは止むべきと。いたく怒かりて身を退きしが。今ぞ知る遠山が針言身に當りて。錐もて胸を刺さるゝ如く。母の事妹の事坐ろに思ひ出でゝ。さて足の運びも捗取らず。

今更考ふれば親の慈悲程あり難きものはなしまして。氣の狹い母親の氣になりたらば。可愛い子に旅させては雨につけ風につけ。行末を思ひ出さぬ日は更に無く。年頃なる他人の子を見ては。我子も斯く成長すと喜び。稻荷樣の祭禮に子の朋友が着て居る袷の摸樣に惚々してれ。我が子にもとの慾を起し。夜の眼も合はさず機織り初めて。三月目に漸やう出來上り。やれ嬉しやと綿厚く入れて温かな綿入。納戸裏の褄少し出過ぎしとて。縫うては解き解きては縫う忙はしさ。風荒む冬の夜更け薄暗き燈搔き立てゝ精一杯の針仕事。人樣に負かさぬ樣にと蔭ながら力つけるあり難さ。せめて寺詣りの小遣錢。少しづゝ溜め置きて。これでも子の小遣のたしにもなろと。召仕に吝嗇と云はるゝのも耳の外に聞流して人知らぬ苦勞するも親御の情。それもあり難しとも思はずか不孝者の人見親雄ハ由なき戀に身を果し。下宿屋に晝睡の夢を驚かせし母が急病との知らせ。都には心殘れどいそ〳〵故鄕に歸りて見れば。報知にまさる大病。聞けば母の病氣は己れの不埒を苦にして求めしとぞ。了得性根の腐りし親雄もそれ聞きては思はず淚を溢しける。されど母は果敢なくも沒去りしかば。一家の愁傷云はん方なく。別けて妹お妙の悲

しみ。賴む母親に死なれ兄ハ身持放蕩なれば行末の力ともならず。網に洩れし雜魚の親を羨む如くなりしと近處隣りの口善惡無き女共の噂。七日と過ぎ二七日と過ぎ。鉦撞木の音微になるに隨ひ。家内は漸やうに淋しくなり。お妙は我と語らう人も無く。花手折閼伽桶に水汲み母の墓に詣でゝは。鳥啼きに身を責められて。思ひ出すは母の世にありし事のさま〴〵。アンなに妾を可愛がつて下さいました。お母さんに一日の御恩も送りもせず。お果て遊ばすまで御心配ばかりかけて。こんなことならせめて十日もお母さんのお好な物でも差上げて……。思へば悲し口惜しと涙に暮れて黑白も判かず。泣いて居るところで無い。せめて一遍の御回向も數重ならば。母樣が成佛なさるもお易いことゝ。珠數爪繰りて南無阿……彌陀佛。門前にどよめく子供一群。犬嚙み合はすやら竹馬に乘るやら。鬼事に氣を奪ばゝれて卒塔婆引き倒し。手向けの花樒荒らして。彼方へ遁げ此方に隱れ。お妙の何時迄も墓場去らぬを怪しみ。誰來よ彼れ來よと前に立ち後ろに塞りて。指さして笑ひ囁きて點頭など。氣にくはぬ事のみなれど。回向の邪魔なれば巾着より少しばかりの錢取り出し。分ち與へて。墓荒らすな花奪るなと教ふれば。喜びて飴屋にはせ　涕啜りながら飴嘗めて餘念無し。お妙ハ回向しながら草を採り塵を淸め。さて夕暮の雲に送られ家に歸り佛壇の前に額づき。見れば白張の位牌眼にちらつきて時ならぬ袖に時雨し。母が臨終の際まで臥居の床跡に至りてハ何やら物足らぬ心地し。闇に身を寄せて潸々と泣けば。病み窶れし母の俤眼にちら〳〵と纏綿る。懷かしや母樣と抱き着けば。柳籠の蓋に載せて遺物別けの紋附一重。明日

親類へ贈り届ける用意の品。見れば鼠小紋の小袖。これも母が好みの物と思ひ出せば何處やら殘り惜しく。其夜は小袖抱きしめ。せめて夢に見るを樂みに。眠れば夢に苦叫て時ならぬ深夜に眼を覺まし。見れども淡き燈の外四邊に人も無く。去年の秋は母と枕並べて風荒む芭蕉の破れも知らずありしが。今年如何なる因果にや木枯らしの音無常の枕に音信れ。あはれ褥冷やかに骨冰りて。夢現覺めて後容易く寢つかれず。思ひ屈して終夜。トロ〳〵と明け方の夢。車井の音に驚き起き上れば。日高く光て枕元をキラ〳〵と射る恥かしさ。我れながら氣後れして。手水も濟まぬに部屋を掃除するなど。今時分は母樣の起して下すつた頃だのにと。獨り愚痴溢してはまた潸々。化粧らぬに先づ懷中鏡竊と取り出して。泣き顏隱すぞ哀れなる。

さて兄の親雄は故郷に歸り。身を謹みて母を看病するにぞ。今は母の怒りも和らぎ。不孝な子程可愛さは親の習。癒らぬ病氣と覺悟する心の切なさ。梅櫻の兄妹殘し行末も見ずして死ぬること思へば浮世は恨めし。兄には妹の縁組の事呉々賴み。妹には兄の行末こま〴〵遺言して明け方の空西へカックリ臨終正念の大往生。葬式も天晴見事。先に惡噂せし者親雄どのは生れ返りしかと云ひ直す噂とり〴〵。忌中も過ぎて親雄の活計の帳簿取り出し。十露盤にかけて割り出せば。これは〳〵とばかり吃驚して。呑みさした煙管ハタと落し。太き溜息一ッ……腕組んで眼はパアチ〳〵。煙艸にでもお醉ひ遊ばしたかと。妹が肩摩する手取交はして。口惜し涙泣いても足らぬ程。何んな譯で御座いますよ。よ。兄さんと語れ

ば妹も涙に咽び。それぢやア屋敷も家も人手に渡つて居りますかと。驚いて後見人の顔見れば。夫れ見よがしの冷笑ひ顔。親雄は我が成せし過に凋れかへり。今更後見の非を打つ譯にもゆかず。夜具引き被つて二夜三日の考へ通し。されど宜い工夫も出ず。この上は道具を賣るより詮なしと。去年屏風繪の鑑定頼みし道具屋四五人呼べど。なか〳〵一度二度の使では來ず。親雄自身の出馬泣くやうに頼み漸やう來ハ來たもの丶。去年五圓の價値ある古書今日になつて僅か半圓。この貧相な防さん富士あればこそ西行と見える位。こんな反故同樣なものと散々の惡口。さても〳〵情けない下落。其癖何も彼も諸色高直の時節。親雄お妙ハ寶藏に入りてハ。大切に秘藏せし什物。やう〳〵しく出して道具屋の手に渡せば。これハいかんと濡れ薪束ねるやうに投げ出され。切なさ苦しさ泣きたさを耐へる心配。山に積んだ荷車二三挺。その直を問へばなんの眼藥にもならぬ程。間も無く住み馴れし屋敷を離れ。あるにも無き裏店の詫住居。後見にハはや身を隠され。許嫁の妻には先方より破談せられ。今更外聞惡るく故郷にも住みかね。妹は東京に登り知人を頼み。或る官員樣に勤め奉公すれど。親雄にさへ住所の知れぬ位。今ハ獨身の結句氣輕なれば。これより一ト奮發と思ふ內。弱り目に何とやら性惡るの梅毒に罹り眼も當てられぬ醜き姿となり。金ハ竭き頼み寄る瀨も無く。漸やうに半田の住所を聞き知り。身の落着を頼まんとせば。無慈悲にも舊情を忘れて面會を斷はられ。胸の中男泣きに泣きて。歩むともなく淺草觀音の境内に至る。フと心つき我する適當の商賣ハ無きやと尋ね廻りて。何時しか足ハ北へ向けば。これでハならぬ

と氣に咎めても。何處やら昔時懷かしく。ハや誰彼れの夕紛れ。人に押されて廓に入り込めば。賑ひハ去年に變らねど。變り果てし我が身を恥ぢ。身巾を狹めて馴染の格子先に佇み。思ひをかけたる花誰ぞ手折りハせぬかと寄らんとてうッとりする後より一人の若者。綱挽きの腕車急がせて此方に來る途端、親雄ハ梶棒を衝き當てられ。拔袖の力無くよろめきて。傍に岸破と尻もちつくを見向きもやらず。門口へ横着けにせし車中の人。アッ半田……と驚くも道理。親雄ハ呆れて言葉も無く。袖を掩ひ足早に立ち去りて。溜め息ホッと一ッ。

續けざまに面白からぬ事のみなれば。廓を出で丶淺草藏前に來かゝりし後より。アレお嫁さんが通ると懸聲するに驚き。身を傍に寄せ瓦斯燈の光りチラと見れば。憎くや我が許嫁の妻なりし種田の娘。今ハ何れの人に身を任せしやらと車の後に踵いて。二三丁も馳せ行くにまこと豪氣な商家。羨まし昔時の身なりせばと悔めども詮なく。其夜ハ木賃宿に明して。翌朝半田が詰め居る役所に至り面會を申込み。應接所にて暫時其人を待てば。ハや一時間も過ぎしと思ふ頃。後ろの開き戸の音ガチヤン。驚きて見返へれば待つ其人。互に一言二言と話せど。半田ハ兎角人見を蔑視て。傲慢の素振見ゆれば此方ハ結句燒け氣になり。青筋立て丶云ひ爭へば。半田ハ外聞惡るさに。氣を和らげかへすこそ上策と心づき。此處でハ人目あり話ハ緩々宅にて聞かうと。云ひ遁れんとするを。悟りて人見ハます〳〵怒り。この身の斯くなりしも皆おのれの惡所すゝめより起りし事。我ハたゞ此地にて書を習ハんとこそすれ。それを英一

蝶は花街に遊びて。美人を購くに譽を殘し。淺妻舟は今も世に持て囃さるゝなど煽ぎ立てられ。ツイに一圖に心迷ひ。斯かる身の上となる。人を困めておのれ歡樂を貪るこそ。蔭間の盜賊なれと大聲にて罵るを事起りぬと受附の人々驅け寄りければ。此評判一圖に高くなりて。遂に遠山課長の耳に入り。以ての外なる半田と腹立たれしが。同僚の仲裁にて事無く濟めど。濁りたる半田の噂役所中に知れて。課長同僚も半田の擧動にやゝ眼をつける樣になりし。

（其　六）

「お妙〳〵。泣いてはチッとも樣子が知れぬ。一寸此處へ來て譯をお聞かせ。

心切に問ふは年頃四十五六。これ遠山正春の奥方。紺甲斐絹の裙裏付けしやはらか物。上から下までツックリとうち重ね。古緞子の敷布團に座り。呑みさせし煙管火鉢の縁へ靜に叩き。次の間見てまたも呼ぶ聲に。お妙は恐る〳〵座敷の閾に膝もたせて潸々と泣く可愛らしさ。年は十七八色白く鼻高く。眉は濃くして眸冷しく、天晴なる美人。身裝も左まで醜くからず。されど物思はしげなる風情は何處やら素振の表に現はれて。鬢の後れ毛顏にかゝるも一層なり。お妙は漸やうに顏を擡げて。今わや語らむとする矢庭。玄關にてお歸り……と呼ぶ聲。勝手にても出迎ひに出でしと思ふ、間もなく來る遠山正春。役所よりの歸りと見へ。直に和服に着換へして設けの布團に座り。お妙は何うしたとのかけ聲。お妙はたゞハイと頭を垂るゝのみ。奥方は殿の御機嫌伺はれ。氣色もいとゞ麗はしければ。まづ〳〵心安堵し

て。お妙を急がせ茶をたてさして。殿にすゝむれば殿は言葉を和らげ。お妙の樣子の常と變りしを奥方に問はる。「妙は何うしたのぢや。「妙で御座いますか。今日御前の御留守中に。故國の人を尋ねるつて。妾に暇を願ひますから。許して遣はしましたが。間もなく歸つて參りまして。獨りで泣いて居りますから。只今その譯を聞いて居りましたところで御座ります。

言葉靜かに答へらるれば。正春はさもさうずと云はぬばかりの顏色。お妙の横顔をジット見詰め片手に髯捻る威嚴しさ。お妙はたゞ下を向いて涙に暮るゝばかりなれば。兎角の問も埒明かず。「妙お前何うしたのぢや。譯も話さず泣いてゐては譯が判からん。何ういふ事ぢや。サヽ奥に語つてお聞かせ。

問れてお妙はやう／＼に涙を袖に窃と拭ひ。「殿樣。奥樣一通りお聞き下さいませ。妾は御案内樣の宮城生れ。何不足無く活計て居りましたが。兄はさる年東京へ修業に參まして。ツイ惡友に誘引れ。吉原通ひをしましたのが事の初り。トウ／＼屋敷も……兩親には死なれ。兄には離れ。頼るお方も無くなり。やう／＼殿樣奥樣の御恩を頂きまして。御心切にして下さいますのに就きましても。別れた兄が戀しくなり。故郷へ音信しましても。所在はチットも判りません。泣いてばかり居りましたが。フと此頃半田樣が度々被入るのに氣がつきまして。見れば兄のお朋友と寫眞で知つて居りましたお方。逢つてお話を承はつたら。もしもや兄の住處が知れるかと思ひまして。お暇を頂きお宅へ上つて聞いて見ますと。以ての外のお方にて。兄さんの事さん／″＼惡口なされた上妾にまで惡口なされ。もしや兄は半田樣に遣

恨でもある事かと匆々にして歸りましたがチエー口惜しくつてなりません。噂に聞きますれば兄さんを不身持にして下さいましたも。妾が大切に持つて居ります。コ。この三人寫つて居る寫眞の中のお一人さんぢやと聞いて居ました。奥樣これで御座います。

淚ながら帶の間より一葉の寫眞を出し。その中のお一人さんは兄の身持を心配して下さいまして度々御諭言なされたり。その上妾と母さんへ。一時も早く兄さんを國許へ引き取れと。信切の御書面まで下さいました情深いお方がありますが。今は外國へゐらつしやいまして。東京にはゐらつしやらぬ御樣子。それで兄さんを尋ねまする事も出來ず。口惜しくつてありませぬ。殿樣奥樣何うぞ賴み少ない妾を行末長く可愛がつて下さいませ。

淚にその身も浮くばかり。憐れ正春聞えて小膝をうち叩かれ。「そんなら妙は人見親雄の妹か。「ハ……ハイ。御意に御座います。殿樣兄を御存じで……。「ウム委しく存じて居るが。去年の秋故鄕へ歸つたと聞いたが。その後は行方少しも知れぬと。ソレソノ寫眞の中に洋服着てゐる書生は悴蠶之助ぢや。妙其方が外國へ行つて居るといふのは悴ぢや。蠶之助ぢや。「殿樣それでは。ア……アノ若旦那樣でゐらつしやいますか。「おう〳〵悴ぢやモー間もなく歸つて來る。其方の兄も今頃まで學問に出精したら。豪氣な者になるのであつたが……。「御意に御座います。兄の身を果たしましたのも元は半田樣の……

云ふに正春うち默頭き。役所でありし一伍一什を物語るに奥方もお妙も驚きて言葉もなし。「それと知つ

たら親雄を此方へ呼ぶのでアッたが。歸つた後であつたゆへ。さて〱殘念な事をした。妙心配するに及ばぬ其中方々尋ねてやる。

云はれてお妙は嬉し泣きに泣くも道理ぞ。お妙は殿の言葉を力にしてさて一日二日と暮せば。早くも蠶之助が歸朝の日に近づきぬ。

外に樂みある人はいざ知らず。よし十里二十里の旅すればとて。故鄕には親兄弟も無事に居るものを。我れ獨り旅鳥の空定め無く。立ちては泊り泊りては立ち。襟首寒き煎餅團布にうま〱と夢も結ばれぬ夜は兎角に思ひ出すものは故鄕の事なり。まして本國を去る何千何百里。山ならば未だしもの事。波風荒き海路遙かに船の便りを力にして外國に學問する人の身にとりては。戀しいもの思ひ出すものは先づ故鄕の音信なるべし。朝の手水にお早うと聲かける人。夕の臥房にお寢みと挨拶する人もまた見も慣れぬ人ばかり。思ひ寢に親の夢見悪しとて胸安からぬこと月幾回。日毎に便船の報知を待て今日は〱と門に立つ心の果敢なさ。待てば生憎其日には來ず音信聞かぬことはや二月。父上は無事か母上は病氣でもしたまはぬかと。思ひ續けて熟睡まぬ夜もあるものを。朋友の無音信。さて朋友甲斐の無い朋友かなと。切なき時の友を怨むも。もと〱人を思ふ故なり。

遠山蠶之助は英國大學に入り。學問怠り無き故にいたく校長敎師にも愛せられ。時々賞辭を受くる位なれば。ます〱心に勵みを生じ。勉學に餘念無きも身もまた數千里の遠きに離れ。故鄕の音信聞く事さ

へ稀れ〳〵なれば。時々本國よりの來信を此上なく喜ぶも道理ぞ。半田通次郎はなか〳〵の奸者なれば。遠山の行末人傑となる事を察し。厚く交際結び置かば後々の爲にもなるべしとの慾心なり。何時も日本の出來事書細々と認め送れば。遠山は偏にその志の深きを喜び。今はかへつて初め疎みしを悔むに至れり。引き換へて人見には本國の事何彼と無く。通信頼み置きしに絕へて一度の音信も無く。二年も三年も打ち絕えたるを不思議に思ひ。その薄情に呆れ眉を顰めて人心の計り難きを獨語せる事もありぬ。其後も人見の通信は更らに無く。半田よりは何時も身丈けに餘る長文言。讀めば訝かしや橫濱を出帆する迄は人見の放蕩も半田の隱武者とのみ思ひしに。通り雨はや霽れても。うつて變つて闇雲の殘る人見親雄。夏の空にドロンと身を果して逐電せし由。蠶之助はたゞ茫然と呆れて口開きし儘カーヒーも呑み得ざりし。さても其後は遠山蠶之助無事に大學を卒業し故鄉に飾る譽の學位。勇み喜び便船に乘り込みて。玆本國日本へ目出度歸朝せるこそ兩親の喜び如何ばかりぞや。

兄親雄の不身持を恐ろしく思ひしより。戀てふものを仇敵のやうに思ひ居しお妙も末賴母しき蠶之助の歸り來しに心嬉しく。殊更寫眞で見しよりは十倍も好い男振り。洋服も立派にてしかも上品。鼻昻く眉秀で色は汐風に黑みたれど男らしきところかへつて好きに。我れを忘れて彼方を墻覗てうつとりするを傍の女中に嬲られて。顏赤らめ急ぎ部屋に退きたり。さて其夜より如何にしけん蠶之助の優しき姿夢に入りて去りやらず。うたてやと寢返りして眼を閉づれば耳下に聞ゆるは正しく其人の聲。さも心切に種

々と兄の身の上を問ふて下さる嬉しさに我れを忘れて涙に咽び。夜具の襟ヒヤ〳〵濡らせしに驚き四邊を見れど其の影も無く聲もなし。これも及びもない若旦那樣に思ひを懸けて妾も兄と同じ戀に身を果すかと口惜泣きに苦叫くをまたうなされてと傍の女中に振り起され。夢ならぬに夢や現の境もわかず。解けぬ縺の物思ひに病氣でもしてお奉公を疎かにしてはならぬと。苦勞に苦勞を重ねて老實〳〵しく働くぞいぢらし。

蠶之助が歸朝しても忙がしきに紛れ。父さへ母さへ未だ染々と話さへせぬ位。されどお勤めはお勤めだけ。正春は役所より未だ戻らず。奥方は女中連れて蠶之助の無事に歸りしを氏神へ禮詣りかた〴〵。御墓參の留守居には蠶之助。庭先に出でゝ盆栽に水灑ぎ。松の葉に玉まろばし縁端に腰打ちかけて眺め一層。殘り番のお妙は氣轉に茶を入れて。

「若旦那樣御一服召し上りませ。大層御精が出ますことで御座います。

蠶之助は此方を一寸と見て。

「ナアニ玩弄物にやつてるんだ。お妙未だお母樣はお歸りにならんか。お前一人で留守居して居ちやう徒然だろう。ソコの机の上に新聞が載つてるから取て御覽よ。「ハ……ハイあり難う存じます。それぢや一寸拜見致しまして宜う御座いますか。「あゝ宜しい。お前閑があつたら新聞は毎日讀むが好い。女でも世の中の出來事を知らなくちやいかん。英國の婦人なんぞア……。

云ひ掛けて弗と言葉を止。お妙の顔を見詰むるに。お妙ハ一心に讀みかけて思ハず涙一ト雫蠶之助訝かしく思ひ。「妙お前何うした。

訝ぶかりながらも氣を知りかね。笑ひに紛らし問かくるを。お妙ハ涙を袖に拭ひ。

「若旦那樣。御……御免下さいませ。こゝにあつた哀れな小説を讀みましたら。俄かに兄が戀しくなりましてツイ……。「ナニ兄。……ソノ兄さんが何うした。「ハイ。未だお禮も申上げませんが。妾ハ貴君樣にいろ／＼お世話を頂きました。人見の妹で……。「アッお前が人見の……。それぢや僕が三年前にお前の國元へ送つてやつた書狀の事も存じて居るか。「ハイよく存じて居ります。アノ事に就きましてハいろいろ御心配を頂きまして……。「そして親雄君ハ何うした。少とも音信が無いから實ハ案じて居るところだが。變り無しで國に居るか。「イヽエ。所在はチッとも判ません。若旦那樣それを御存じでゐらつしやるかと存じまして……。「イヽヤ僕ハチッとも知らんが。半田といふ男ハかね／＼親雄君とハ交が好かつたから。もしも半田が……。「イエ。

互に云ハんと語らんとする時。正春ハ役所より歸り來り座敷に通るに打ち驚き。お妙ハ間の惡るさうにそれぢや煙草火を持つて參りませうと氣轉に座を立つて。紙門越に正春の語るを聞けばうたてや人心の淺猿しさ。

「蠶之助。人ハ容易に信用が出來んぞ。半田ハ。通次郎ハ官金を竊盜して身を隱した。半田ハ官金を……。

驚きて此方に去れば。女中共々歸り來し奥方。お早うお歸りさまと挨拶すれど。さてしかとかに胸安からず。

其日よりはや一月も過ぎて。今日は何うして奥にお話ばかりある事と怪しみながら。お妙は罪な事と思へど戸蔭の竊聞き。晝は殿樣奥樣お二方の密々話間も無く殿樣は宴會へお出で遊ばして。その留守の間には奥樣と若旦那樣。もしも妾が身の上ではあるまいかと女心にくよくよして。世界を縮める心配もこれも乙女の癖なるかそも。

チラリと聞えた談話の趣。お妙はホッと膽を冷やして。一足此方に退きしが未練の殘る後の一言。耳を澄して障子の蔭。

「藏之助お前だつて洋行もした身だから無理には云はぬ。マアよく考へて御覽な。アノ子なら毎日顔を合はして居て心立も知つて居ることだから。妾は惡るい事は云はない。妾が見ては實に感心な子だよ。それともお前が別にこれと思ふ女があるのなら。隱さずと云ひ。また其うち。お前マアよく考へて御覽な。何ゆへにお妙。掌を合はして後姿あり難さうに伏し拜む。おとは知れぬ間に足音靜く漸やう部居にたどりつき。思ひに沈んで莞爾と笑ひ顔。せめて今宵も俤ばかり夢に見るを嬉しさに。夜更けなばいそいそ獨り枕に着く事ぞかし。

《其　七》

淺草の賑ひハ然も只の賑ひにあらず。米袋の口を倒まに篩つたやうと。田舎者が都土産の言の葉に殘る。さてもあり難の南無觀世音大菩薩。今日普門品第廿五日の縁日とて。すれ違ふ程の人の足。濱の眞砂の數々並べし如く。兩側の煉瓦店長い處ハ伊勢鰕の這ふに似て怪し。先づ門前の雷おこしハ雷門の名殘を留めて。太皷の看板檐に下り。紅梅燒の忙ハしさ。燒いて居る女中頬に火形つけて。時ならぬ季違ひの翫れ梅。裸體畫の賣出しに新造袖を掩ひて通り。京人形にうッとりする田舎者ハ。連れを見失ひてまごつくもおかし。髷屋の店に撰り好みして管頭に翫さるゝを覺らぬ權妻。毛絲細工に見惚れて居る束髪娘子に玩弄品ねだられて。巾着を掏れしを悔ゆる母御あれば。乳呑み子を泣かして鬼灯屋に足を留むる子傅もあり。水菓子屋は水を撒いて塵を洗ひ。大福餅は人なだれに燒き焦がして愚痴溢すも一興。南京豆屋に南京の人も見えず。洋酒店の椅子赤髯の客もなく。了得は未だ内地雜居の生聲を聞かぬだけ。西洋婦人を孔雀かと珍らしかる古風な店の小僧もあり。菰の上に並んだ女二人。琴三味線の合ひの手に縋りて合力の情を願ふ親子。アラ水の上に石が浮いたと口を開いて驚く長松。傳授師の顏を眺めて御用の遲くなるも忘る。此方はピーピー風車紙風船にゴム珠飛し。おでんかん酒甘酒屋。天麩羅の立喰ひ空腹にドンと應へ。諸人に股潜らして高慢がる山門あれば。空と脊丈を競べて居る五重の塔。五十の十とはさて安いものと。子に豆を撒かする内室さんあれば。三枚の禮も忘れて我れ勝に啄む鳩の行儀の悪るさ。君が代唄ふ可愛い女生徒。時世もまことによか〳〵餅。鞘に納る六尺八寸。身丈けに餘れど拔いて御覽に

入れますと。振れ込む入歯師長井兵助。たかる群集は櫛の歯を挽き貫かれたる腕白小僧歯磨買ふて莞爾顔。此方は打つて革細工。カバン手下げに佛蘭西靴。地相火相に人相見。身の上精しく一錢と。正札附の賣卜聞いて。前世の因果と涙ぐむ湯屋の三助。今戸燒の達摩元祿女郎を傍に置き。浮世を茶にして悟り顔。實に東國の三十三所。淺草に勝す寺もなく。南無一群の順禮衆。二世安樂はほんの名ばかり。風袋引けば願ひ叶つた東京見物。この賑やかに何んとして。是ハ〳〵と驚くのみ。繪馬は珍らし提燈も。勇む魚がし大根がし。お守り買ふて御影受けて。婆が孫への後生の土產。ハイ御明しと投げ込む錢箱。義母子の數を算へて見たり。何間あると柱を讀み。豪氣なものと珠數爪操る性根の優しさ。お神樂堂に念佛堂。神祇釋敎戀無常。寺は名に負ふ傳法院。社は世に鳴る淺艸神社。鐘に名代の鐘樓あり。稻荷地藏に大寶殿。經藏大佛藥師堂。閻王殿を子は恐はがれど。隣りは子育婆王尊。神馬に豆買ふ翁あれば。一錢投げて身體の量目を獨りで試めす自動器あり。さて奥山の見物には。赤前垂の矢場女。二人で六錢如何樣と五月蠅勸める寫眞屋あれば。竹田からくり獨樂廻し。親は代々獵師にて。親の因果が子に報ひ。生れもつかぬ轆轤首。ドロン〳〵の太鼓の音。春は花かは花屋敷。役者の似顔造菊高いは富士に銀閣寺。手品大象大仕懸。これ鏝細工玉突塲。吹矢にパン屋ゆで玉子。芝居は花の吾妻座に。鈍張なれど常盤座ハ知る人ぞ知る大繁昌。幽靈も赤顔で出る猿芝居。辻講釋の黃色い聲。出て來る人も千差萬別。緋ケットの田舍大盡。洋服高帽の官員樣。さても見事なお孃樣。足のお靴ハ何事ぞ。これ橫文字を知つた風

奥方の鬢出過ぎはせぬか。冬なればお風邪召すらん氣遣はし。お附の女中も絹布ぐるみ。さて〳〵尻は邪魔さうな。渡り者の身を捻るは雁金の飛ぶ如く。職人の勇み肌松魚のやうで威勢よく。柳橋の藝妓衆遠く匂ひを殘して。書生の鼻にピンとさせ。大家さんの若旦那。長松に促がされて。思ひを嚙んで通り拔く。俳諧師の十德姿。俳優のにやけ。丁稚の小いそがしさ。風流人の墓探り。さて境内に名高きは中原氏の筆塚や。笠翁齋の花塚も。世にふる机 机塚。五瓶の塚は苔蒸すばかり。斯る中にも戀あればこそ。茶屋の女に戲れて五錢の名殘惜みもせず。今見し女の一群の跡を慕ふて路を違へ。拔口のない露路にまごつく男もあり。表も裏も人……人の山。お腹が空いたら八百善御坐れ。好みは恰度しる粉屋すし屋。乙に氣取つて珈琲店。更科そばに一直豆腐。酒は劍菱男山。琴あり三絃あり囃子あり。蒸汽に馬車に人力車。ゴッサイヒーヒガラ〴〵〴〵。馬で歸ろか自轉車か。アレ鐘が鳴る。鐘は上野か淺草か。入り亂れたる人なだれ。この賑やかさ賑やかさ。

秋なれば花無きのみかは枯木立。落葉掃ひし箒の痕に波のうね〳〵百千鳥。砂で書いたる砂書師。四邊にたかる人の山。見事手際と賛めどよめきて。バラ〳〵バッと投げ出す錢は。膝の邊におちこちと拾ひ集めて。慇懃に地に額づくを見るも哀れ。人見親雄のなれの果なり。身に粗末なる破袷。この寒天にさぞ寒むからう。袖と膝とは垢に黑み。染まねばこれも白兵子帶。病み上りの髮毛薄く。昔時忍ばる吉原冠り。黴毒の痕顏隈どりてさても醜し。親雄は白砂篩に懸け土に色紙の形を置き。黑砂摑みてはら〳〵と。

書くも愛でたき筆の跡。此人とても元の身元を糺したなら。せめて一筆そもじ樣參らせ候位は書かれし身だろと見物衆の粋な鑑定。如何なればとて世のたゞしまい。淺猿しきは人の行末。また腕伸ばしてさら〳〵。鼻一ッ書き目二ッ書き。色砂加へて出來上る一人の沙門。「サア〳〵皆樣御覽じませこれは。風流砂傾城。髪風俗や似顔まで。昔時の俤そつくり其儘。書きますところが御慰み。材料は孰れも御案内樣。世にしる塵哉が北廓事譚。噓で無い實ある事。筆老實なのは御評判。いよ評判ぢや〳〵。身裝に似合はぬ粋な口上。アレ御覽遊ばしませと向ふから來る婦人を見れば。此頃流行根上り島田艶々し。銀鼠縮緬の羽織しつとりと着流し。藝妓かと思へば髷に金紗の根掛をかけたる。また大盡の娘かと見れば續く女中もなし。羨ましいは手を取る男。何さま美人と見詰れば。これはしたり昔時嫁許して取らせし種田の娘。其後我れと破談して。何日ぞやの晩嫁入するを見たるお金。傍の男は夫と見える。ポッテリとした顔。水道の水に磨き上げたと見え。國元の垢拔けたは拔けたれ。アッ天晴見上るお孃樣。我れは見下げたこの有樣。稚な遊びの昔時馴染。逢つても知れぬこの面相。我も昔時の親雄なら。首尾克お前と盃して。三々九度も蝶々の花に戯れあひ〳〵傘。世間晴れてソレそのやうに。イエ憎くらしい手を取つて。遊ぶてあらうに。ふつと傾城狂ひを仕初め。三代續きし家藏人手に渡し。馴染の町を立腕きし身分。變り果てたこの姿。誰れに見せやう。チエー耻かしと涙ぐむを。ヤアー成田屋と賞められて。見れば積つた合力錢やうやうに氣を取り直し。砂を摑みて書きながら。「爰に憐れお説話がごーざる。頃

は延寶の昔時の事。未だ堺町に吉原があつた頃。雁金屋の抱へ女郎釆女太夫。昔時の繪姿そつくり只今。書いて御覽に供へませう。ハイ〳〵大層頂きました。何うもあり難う御座います。さてその釆女の太夫さんは。沙門の何某に深く云ひかはして。通ひ路の度重り。その坊さんはとうとう師匠の許を追ひ出されました。

勇ましく語れども何處やら涙にくもる樣子。さてその後と催促され。語らうとする後ろより。人數を目懸けて新聞屋。「今日發行の東京新聞には。條約改正の論說から官報官令は申すに及ばず。天氣豫報に宮廷錄事。雜報には種々色々の記事澤山。それに諸物價米相場。當時名代の桐座の評判。おまけに本紙同樣の大附錄には。官金竊盜の半田通次郎。吉原にて召捕りの一件を詳しく綴つた一部の小說。それで代價は僅か一錢。

風鈴の音勇ましく。一枚召せと勸むるを見れば。十二三の男の子。印半纒丈長がくと。苦勞も知らぬ振れ聲高し。親雄はフッと氣に咎め。耳欹てゝ怪しや怪し。「アッその新聞。……

と云つては見しが。氣がついて四邊を見れば。見物は山の如く。今見しお金は何處へ行きしぞ。アラと見詰る人數の奥。また見物に催促され。書きしは太夫の左の片袖。「サアサそれから沙門の坊さん。師匠の御坊に勘當うけ。身を寄せまする緣者もなく。坂本邊に詫住居。隱れ〳〵に釆女の許へ通つてゐるので。後にはお金も遣ひ果て。揚屋よりは斷はられ。詮方なさに傳を求め。やう〳〵釆女へ文を贈り。今

宵忍んで御出でなされば。屹度逢ひます話もしますと。云はれて坊さん大喜び。日暮れを待つて雁金屋の格子先に參りましたが。客の都合が悪いと見えて。待てど暮らせど釆女に逢はず。はやヒケ過ぎになつた頃。坊さんは獨り燈籠の光りを怨み。格子の蔭に隱れてゐるを男共に見咎められ。果ては散々打擲かれ。霎時涙にくれましたが。思ふ女に逢れもせず。これ程待つに出て來ぬは。釆女も此身を見限つたか。チエー殘念な無念なと。一圖に心も氣も狂ひ。其所をも去らず哀れにも……無慘にも。未だ花の二十三歳を一期として。ツイ自害してしまいました。こればかりでは御座りませぬ。女郎に迷つた其人のなれの果て。斯く申す私も元は新茶の出花の盛り。遣ひ果して今は此の樣。ゆめ放蕩はなりませぬ。これがこの繪を書きました始末。御見物樣孰れも樣。この一言はお若い衆の御諭言で御座います。さて其後は釆女の太夫。沙門の横死を泣き悲しみ。……

云へばホロ〳〵落ち來る涙ソレお錢やる早く語れと。人蔭より投げ出したる十錢銀貨。これはと驚き其人見れば。忘れもせぬ遠山靏之助。アッと呆れて言葉もなし。

（其　八）

別れてよりははや三年。行末目出たい人物となるであろうとは思つて居しが。斯く見上げたる立派な人に……。今目前に逢つて見ればまこと東京でも何人と數へらるゝ人物。洋服高帽は一層人品を氣高く見せ。男振と云ひ舉動と云ひ。是れと一つ點打つ處もなし。顔見合せても我れと知らぬか。此方を見て笑ひな

がら。手を引きし婦人の顔の美くしさ。その婦人とはさても〳〵驚き入りたる次第。姿こそ細君風なれ現在血を分けし妹お妙。再び呆れて身震ひすれば。毛孔より戰々と寒氣だち。俄かに顔は火のやうになりて。はや前後左右も辨まへぬ位。遠山の顔妹の顔。何か密々談話するさへ。我を嘲けるか罵るか。うたてや人心。淺猿しやこの身裝。語り合はゞさぞ喜ぶべきも。當時日の出の遠山の名儀にも關はるべし。殊さら妹の丸髷定めし蠶之助方へ嫁入せしに相違なし。我れも立派にこの身を過さば。今はアノ名譽ある蠶之助の兄分。蠶之助と呼び捨ては勿體ない。この醜姿で兄氣取り。妹は絹布ぐるみ。兄はコレこの見苦しさ。よし立派な羽織袴借着して。尋ね逢ひしとて身を果したる印あり〳〵顔の黴毒。何の顔あつて名乘り逢はりやう。遠山が洋行の折柄。呉々も私に諭言して呉れし事。用ひもせぬ犬畜生に何逢ひたからう。逢つて妹の面よごし。アンナ兄が時々尋ねて來ることなら。妹を嫁にするのも外聞惡るい。坊主憎くめば袈裟までか。我れ袈裟衣着て天晴悟道を開くとも。顔の瘡痕は如何にせん。砂繪書きて五錢十錢の金に露命を繫げばとて何面白からう、いつそ死んで……。否々死なばかへつて浮名が立つ。譯も無い妹にまで噂さるゝやうになつては猶更心苦し。扨何んとせう。否々死んだとて浮名立つ憂ひは無い哩。今は天下に戸籍も無ければ。昔時ならホンの無宿者。生きて居てさへこの己れと知れぬ面相。土左衛門の膨れ顔これが親雄ドやと知れる筈がない。さうぢや〳〵と覺悟はすれど。これが二人の顔の見納めかと思へば悲しく恨しく。バラ〳〵と落つる涙。繿縷の袖に拭へど。さて〳〵と考へれば考へる程浮

世の腹立しさ。我がため何故かく儘ならぬ事か。否々我が身ばかりでもなし。今の新聞聞けば半田も官金盗み出し召し捕られしとやら。初め冥利の悪るい者ハ。行末の實ハ収穫ぬ筈。花あればこそ實ある世の中。人の身の上程圖られぬものはなし。「ハイ〳〵只今直に書きます。この空泣きハホンの傾城。十二太夫の繪が早く出來上る御祈禱。

チイ〳〵其の後を語らんか。其後釆女ハ何う致した。沙門の橫死を歎いてから。コリヤ樣子が變ぢや氣が狂いハせぬか。と多くの人に催促されて涙を包み。「ハイ〳〵狂氣もしませぬ。狂ひもしませぬ。矢ッ張元の砂書師で御座います。さてその釆女の太夫さんハ。沙門の橫死を泣き悲しみ。如何にお金にならぬお方ぢやとて。コレ若い衆打ち打擲ハチエー何事ぞ。お恨めしう御座いますと。泣いてチッとも譯が判らず。さて沙門さんの死んでから三日目の晩ハ。空も氣を利かして曇つた〳〵。闇を幸ひ釆女は廓を遁げ出して淺茅が原の鏡が池にとう〳〵身を飛び込む水音ザンブ。あんと皆樣哀れな話しでハ御座りませぬか。これこの繪像がそれその釆女太夫で御座います。よろしく眼を留めて御覽じろ。さて雁金屋では上を下への大騷ぎ。釆女ハ見えぬ何處へ行た。方々へ人を出して搜して見ますと。鏡ケ池の汀の松にアラ白い物こわや幽靈と一足尻込み。見れば白無垢の片袖に血汐の痕あり〳〵。釆女が一首の辭世の歌がハイありますぞへ。わ私一寸此處に書いて見ませう。これハツレ〳〵御存知の御方が御推もじ下さいますれば。それ死……後に判ります。これを遺物と……。遺物のう歌で御座ります。此處へ書き示すぞ。

「いはずとも名はそれと知れ猿澤の跡を鏡ケ池に沈めん。

と書いてありました。ツそして年は僅か十七。惜しい蕾の花で御座いました。ザざんふ投げます身を……鏡が池は昔々あつた事。とこの歌はそれ〴〵太夫の遺物で御座います。歳こそ上だが同じ死ぬる身。イエナニ沙門の事で御座います。御案内樣年は二十三歳。私も今年は二十と三歳。戯言にもこの私が死にましたとて。泣いて呉れます女なんぞはたゞの一人もハイマアありません。跡の吊らひ。その後の吊ひは。鏡が池の庵主さんが二人の身の上を憐んで。池の傍に墓を立てゝ呉れましたとの事。さても功徳にある事では御座いませぬか。死んだなら墓を立てゝ貰らうのが……。へイ〳〵ナニ二人の墓の事で御座います。定めし未來で嬉しく思ふでありませう。語り續けて顔を上げれば。遠山に妹は訝かしげに此方を見る樣子。悟られてはと思ひ態と笑ひ顔。「へイ妙な事を申上げまして。定めし孰れも樣の御機嫌を損ねましたらう。

詫ぶるも此世の暇乞ひ。二人が行き過ぐ後姿。見送れば溢るゝ涙。はや黄昏の薄暮がり。冬の日の俄かに變る雨催ひ。親雄は色砂集めもせず。二人の悟り歸らぬうち。早く身を隱さうと身仕度もいそ〳〵。折からしよぼ〳〵と降り出す雨。三途の川の水嵩増せど死ぬには結句夜も更け亘り。降つては通りも稀れな百本杭。川風雨を吹いて寒く。捲き上ぐる衣の裙。「アッ南無。…………殘る阿彌陀佛は水音に消され。パッと立つ水煙。

雨中に残る遺物の一首いはずとも名はそれと知れ……。さても〳〵哀れは明日知れぬ人の身の上

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

短篇小説　明治文庫第四編　終

明治廿六年十二月十五日印刷發行

定價金拾五錢

明治廿六年八月三十日內務省許可

版權所有

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　杉原辨次郎
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

印刷所　杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目二番地

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

参謀本部次長陸軍中將川上操六君題辭　幸田露伴君序文

野崎左文君著　第壹編十一月廿日發

日本名勝地誌

畿內ノ部　名所舊跡千餘ケ所

一冊紙數五百五十頁

正價一冊三拾錢　郵税一冊金八錢宛

全部豫約前金壹圓八拾錢

本年十一月第壹編發兌　隔月一回明年十一月完成

全七冊

全部總紙數四千百頁　毎卷生巧舘彫刻西洋木版密圖數十個宛挿入

我邦名所圖會若くは案内記の著に乏しからずと雖も、概ね一縣一國叉は近傍二三の勝地を擧ぐるに過ぎずして、記事亦繁簡宜しきを得ず、其繁なるものは、徒らに數帙に渉り、浩瀚にして携帶に便ならず、其簡なるものは、唯だ地名を列するに止まり、粗畧にして參考となすに足らず、而も其書は多く數十年前の上梓に係るを以て、昨の桑田も今の碧海と變じ、往々實地と差ふものあり、豈に漫遊者の爲めに一大缺點ならずや、著者此に感あり、終に奮つて此書を著はす、全編都て七冊にして之を五畿八道に分ち、初めに日本地理の總論を錄し、次に各道各國皆地理沿革等を叙し、名所、舊跡、神社、佛閣、山川、沼湖、温泉、海水浴場の如きは、各々郡別とし、遠近の順序に由りて之を詳述す、其位置名稱は、悉く新町村の名を以てし、里程戸口も亦最近の調査に係るものを擧ぐ、而して毎編卷首に細密なる地圖を載せ、卷中には數十個の寫眞木版を挿入して、以て各名勝地の實景を描出す、記事の精確、文章の流暢、豈に喋々するを須ゐんや、此書の既刊名所圖繪の類に優る啻に此のみに非ずして、其の地理風土を始め山河の形勢、人情の厚薄、氣候の寒暄、物産の多寡等を記する極めて確實、一國一郡一市一町悉く小地誌を備へたるを以て、之を一部の大地理書として見るも決して妨げず著者が名勝地誌の名を負はしたるの意蓋し此に存ず、眞に近代の一大著作なり

春夏秋冬

每年四季一回宛發兌
每冊大判紙數百六十頁
密畫入雅裝美本
正價一冊十五錢郵稅四錢

春の花、夏の山、江月、暮雪、天地の美を鍾め、宇宙の妙を極むるに擬して、茲に**春夏秋冬**と題し、四季毎に各家の新作數篇を綢る、小說を發刊せんとす、羅する所は偏に當代知名の大家のみに非ず、後進の才子、未題の俊髦及び、時に懸賞の方法を以て、普く傑作を募り、之を江湖に紹介すべし、此等秀才の錦心繡腸より織成す文の美は、天地宇宙の妙と相對して、特に精華絢爛たらん、抑も又後進を誘掖して、深山幽谿を拓き、名花美玉を世に出さば、斯文の進步上の、一德たるべき哉

◉第壹回　**競馬**（くらべうま）

桂舟、永洸、永興、年方、丹陸
廣業、國松七畫伯密畫入　（廿七年一月二日發兌）

本篇は夙に文壇の一方に雄視して、梁山泊と呼ばる硯友社の諸英が、午の年に因みて結構意匠を焉に寫し、各妙想奇文を鬪はしたる、新作七篇を聚めり。

圖書出版
東京博文館

明治文庫

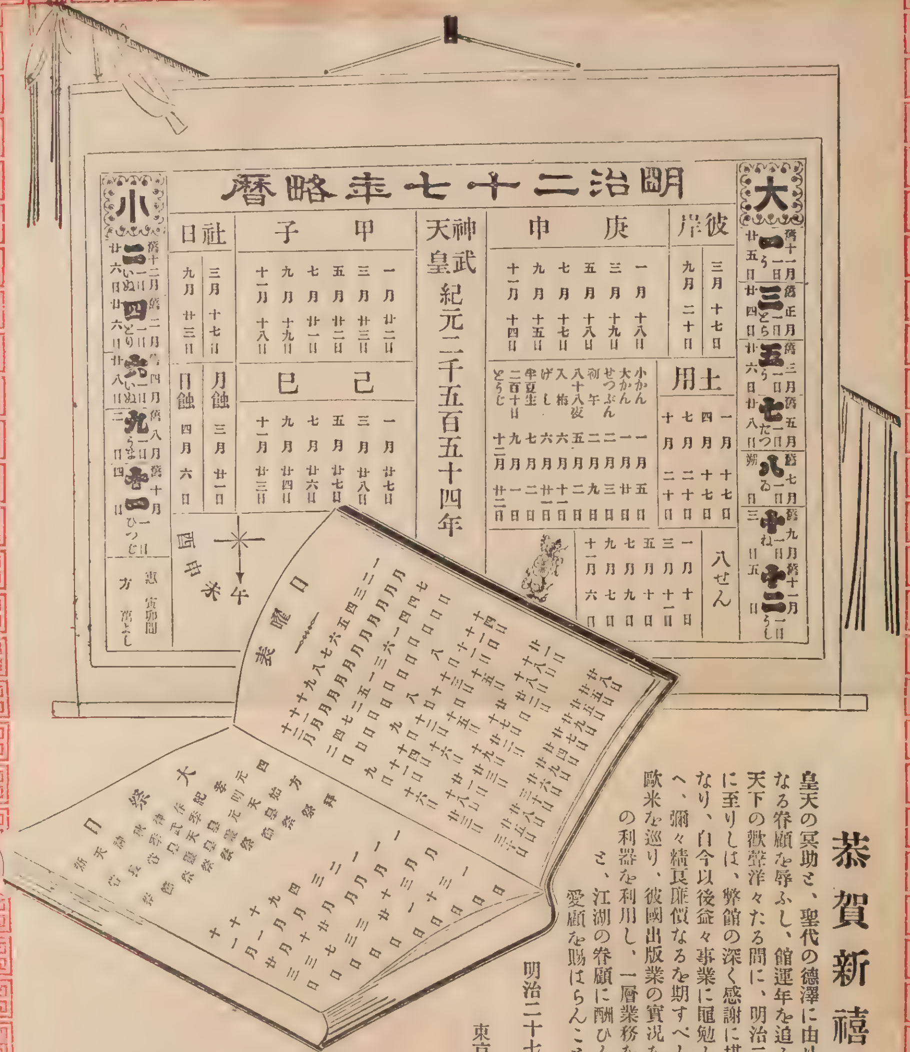
短篇小説

博文館發行

明治文庫第五編

山田美妙著

みゝずをを
田舎聖者
雪折竹
大龍王
古切手
くきを縁
戸隠山紀行
都門雜興



恭賀新禧

皇天の冥助と、聖代の德澤に由り、幸ひに江湖君子の優渥なる眷顧を辱ふし、館運年を追ふて隆昌の域に進み、今や天下の歡聲洋々たる間に、明治二十七年の新天地を迎ふるに至りしは、弊館の深く感謝に堪えず、大に光榮とする所なり、自今以後益々事業に黽勉し、雜誌書籍皆大改良を加へ、彌々精良廉價なるを期すべし、特に昨年は館主自から歐米を巡り、彼國出版業の實況を調査し來れば、漸次文明の利器を利用し、一層業務を擴張し、聊か聖代の恩德と、江湖の眷顧に酬ひんとす、伏して請ふ倍舊の愛顧を賜はらんことを

明治二十七年一月

東京日本橋區本町三丁目

博文館

博文館發兌雜誌目次

- 幼年雜誌
- 日本之少年
- 日本商業雜誌
- 日本農業新誌
- 婦女雜誌
- 文藝共進會
- 學生筆戰場
- 日本之法律
- 日本大家論集

東京築地活版製造所印行

雑誌購買と新年の祝意を表し此特別割引券を呈す へ御注文の御方へは

左の割引にて御注文に應ず○此割引券の有効期限は廿七年一月三十一日限とす

雑誌、全書、圖書類は一割引とす　豫約書類（書名は別紙にあり）は五分引とす

但し館友諸君に限り館友規定外五分引とす

◎此券を添へ御注文の諸君へは定價の一割引とす

博文館 雑誌類 特別割引券

◎此券の有効期限は廿七年一月三十一日限りとす

◎此券を添へ御注文の諸君へは定價の一割引とす

博文館 全書類 特別割引券

◎此券の有効期限は廿七年一月三十一日限りとす

切斷線

◎此券を添へ御注文の諸君へは定價の一割引とす

博文館 圖書 特別割引券

◎此券の有効期限は廿七年一月三十一日限りとす

◎此券を添へ御注文の諸君へは豫約實價の五分引

博文館 豫約書類 特別割引券

◎此券の有効期限は廿七年一月三十一日限りとす

博文館豫約出版圖書廣告

今般弊館ニ於テ江戸名所圖繪等ノ著名ノ木版數種買入候ニ付聊カ祝意ヲ表センガ爲メ廿七年一月ヨリ二月廿八日迄左記ノ各書參百部宛ヲ限リ豫約實價ニテ發賣仕候尤モ期限中ニテモ豫約部數ニ滿員ノ際ハ普通賣價ニ相復シ可申候ニ付至急御注文希上候代金ハ一切前金ノ規定ニテ送本ハ製本既成御送金次第即日發送可仕候

一月初刊ノ雜誌ニ挿入セシ圖書割引券相添エ御注文ノ節ハ豫約實價ヨリ更ニ五分引トス且ツ館友諸君ニテ右割引券相添エ御注文ノ節ハ豫約實價ヨリ一割引トス◎金高五圓以上ノ御注文ノ方ヘハ館友證ヲ贈呈スベシ右館友證ハ次回ヨリノ御注文ニ効力ヲ有ス

書名	編著者	冊數・體裁・正價	豫約實價・送料
●江戸名所圖繪	松濤軒長秋編 長谷川雪旦畫	全貳拾冊和裝大本 正價金五圓	豫約實價金四圓 通運料金五拾錢
●江戸名所花暦	岡山鳥編 長谷川雪旦畫	全四冊和裝大本 正價金四拾錢	豫約實價金三拾錢 郵稅金拾四錢
●東都歳事記	齋藤月岑編 長谷川雪旦畫	全五冊和裝大本 正價金五拾錢	豫約實價金四拾錢 郵稅金八錢
●行書類纂	關子德先生選 關世道先生編	全拾二冊和裝木版 正價金貳圓	豫約實價金壹圓貳拾錢 郵稅金貳拾貳錢
●略可法	米庵先生手輯	全二冊和裝本版 正價金四拾錢	豫約實價金三拾錢 郵稅金四錢
●墨場必携	米庵先生輯	全六冊木版和裝 正價金五拾錢	豫約實價金四拾錢 郵稅金拾二錢
●書法詳論	石川鴻齋先生著	全二冊木版唐裝 正價金四拾錢	豫約實價金三拾五錢 郵稅金六錢
●畫法詳論	雨谷、和亭兩先生校閲 石川鴻齋先生著	全三冊木版唐裝 正價金五拾錢	豫約實價金四拾錢 郵稅金六錢

詩法詳論	石川鴻齋先生著	全二冊木版唐装 正價金四拾錢	豫約實價金三拾五錢 郵稅金六錢
文法詳論	石川鴻齋先生著	全二冊木版唐装 正價金四拾錢	豫約實價金三拾五錢 郵稅金六錢
續文法詳論	石川鴻齋先生著	全二冊木版唐装 正價金四拾錢	豫約實價金三拾五錢 郵稅金六錢
流芳遺墨	勝安房伯爵著	全一冊雅装美本 正價金壹圓五拾錢	豫約價金壹圓三拾錢 郵稅金拾四錢
大日本農史	農商務省農務局纂訂	全四冊洋装背皮 正價金貳圓五拾錢	豫約實價金貳圓 郵稅金貳拾四錢
資治通鑑	三島中州先生校閲 山名善讓先生訓點	全七拾冊和装美本 正價金拾五圓	豫約實價金九圓 通運料金五拾錢
五代史	石川鴻齋先生校訂	全八冊木版和装 正價金壹圓五拾錢	豫約實價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾八錢
廿二史言行略	矢土勝之先生訓點	全六冊木版和装 正價金壹圓	豫約實價金七拾五錢 郵稅金拾四錢
校訂史記讀本	安藤定格先生纂釋	全貳拾冊木版和装 正價金參圓五拾錢	豫約實價金貳圓貳拾錢 通運料金四拾錢
標註春秋左氏傳校本	大槻東陽先生校訂	全拾五冊木版和装 正價金貳圓五拾錢	豫約實價金壹圓五拾錢 通運料金四拾錢
標註唐宋八大家文讀本	清沈德潜確士評點 榧木寛則先生標註	全八冊銅版唐装 正價金壹圓六拾錢	豫約實價金壹圓貳拾錢 郵稅金貳拾錢
和漢合璧文章軌範	石川鴻齋先生編	全四冊木版和装 正價金六拾錢	豫約實價金五拾五錢 郵稅金拾錢
箋註正續文章軌範讀本	南摩羽峯先生校閲 安原健堂先生箋註	全二冊洋装美本 正價金六拾錢	豫約實價金五拾五錢 郵稅金拾貳錢
萬國史標十八史略評註	近藤甁城先生標註	全七冊木版和装 正價金壹圓貳拾錢	豫約實價金八拾錢 郵稅金貳拾錠

書名	編著者	冊數・裝幀	正價	豫約實價	送料
●明治新刻 日本政記	大橋學橋先生編次	全拾冊木版和裝	正價金壹圓五拾錢	豫約實價金壹圓貳拾錢	通運料金貳拾八錢
●五經	後藤點 大版	全壹冊木版和裝	正價金貳圓五拾錢	豫約實價金壹圓五拾錢	通運料金四拾錢
●鼇頭音釋 康熙字典	石川鴻齋先生編修	全六冊銅版雅裝	正價金六圓	豫約實價金三圓六拾錢	通運料金三拾錢
●增訂纂文詳註 日本大玉篇	石川鴻齋先生纂修	全三冊銅版雅裝	正價金參圓	豫約實價金壹圓八拾錢	郵稅金貳拾四錢
●新撰日本字典	石川鴻齋先生編	全二冊銅版和裝	正價金壹圓	豫約實價金六拾錢	郵稅金拾四錢
●新撰明治字典	太田淳軒先生編	全一冊銅版和裝	正價金三拾五錢	豫納實價金廿八錢	郵稅金四錢
●日本辭林	大宮宗司先生編	全一冊洋裝背皮	正價金五拾錢	豫約實價金四拾錢	郵稅金六錢
●假名遣枕詞字典	佐々木弘綱先生 岡野伊平先生撰	全一冊洋裝背皮	正價金五拾錢	豫約實價金四拾錢	郵稅金八錢
●新撰日本節用	內山正如先生編	全一冊銅版和裝	正價金壹圓	豫約實價金六拾錢	郵稅金拾四錢
●萬國人名辭書	山田美妙齋先生著	全二冊洋裝背皮	正價金參圓	豫約實價金貳圓	通運料金三拾錢
●教育辭典	木村一步先生編著	全一冊千頁上裝	正價金貳圓五拾錢	豫約實價金壹圓六拾錢	通運料金貳拾錢
●益軒十訓	西田敬止先生著	全一冊千二百頁	正價金壹圓	豫約實價金八拾錢	郵稅金拾八錢
●日本古代法典	萩野由之先生 小中村義象先生 增田于信先生編	全一冊一千頁上裝	正價金壹圓貳拾錢	豫約實價金壹圓	郵稅金拾六錢
●歌の栞	佐々木信綱先生編	全一冊一千五百頁	正價金壹圓六拾錢	豫約實價金壹圓	通運料金貳拾錢

明治廿六年發刊諸雜誌非常廉價（定價半額）發賣廣告

本年ヨリ諸雜誌共大改頁致シ且出版事業一層擴張ノ爲メ倉庫沸ヒトシテ廿六年發刊ノ左記諸雜誌共**定價ノ半額ニテ發賣**仕候尤モ**殘本ハ各號**モト**僅少**ニ付キ品切レト相成候テハ御需メニ應ジ難ク候間御望ミノ方ハ此際**大至急御注文希上候**

● **幼年雜誌** 第三卷 自第壹號至第廿四號 廿四部 内 第拾八號、第拾九號、第貳拾號、第廿壹號 四部缺號

定價 一冊三錢●六冊前金拾八錢●十二冊前金三拾五錢●廿四冊前金六拾八錢●郵稅一冊一錢宛

● **日本之少年** 第五卷 自第壹號至第廿四號 廿四部 缺號ナシ

● **日本商業雜誌** 第三卷 自第壹號至第廿四號 廿四部 内 第參號 壹部缺號

● **日本農業雜誌** 第二卷 自第壹號至第廿四號 廿四部 内 第拾八號、第拾九號、第貳拾號、第廿壹號 四部缺號

以上三誌同價 一冊八錢●六冊前金四拾五錢●十二冊前金八拾五錢●廿四冊前金一圓六拾錢●郵稅一冊一錢

● **婦女雜誌** 第三卷 自第壹號至第廿四號 廿四部 内 第壹號、第拾八號、第十九號、第廿號、第廿一號 缺號

● **日本全國小學生徒筆戰場** 第三卷 自第壹號至第拾貳號 拾二部 缺號ナシ

以上二誌同價 一冊五錢●六冊前金廿七錢●十二冊前金五拾錢●廿四冊前金九拾五錢●郵稅一冊壹錢

● **日本大家論集** 第六卷 自第壹號至第拾二號 拾二部 内 第壹號 壹部缺號

● **日本教育雜誌** 第二卷 自第壹號至第拾二號 拾二部 缺號ナシ

● **日本之法律** 第五卷 自第壹號至第拾二號 拾二部 内 第壹號、第貳號、第拾號、第拾壹號、第拾貳號 五部缺號

● **少年學術共進會** 第四卷 自第壹號至第拾二號 拾二部 缺號ナシ

以上四誌同價●一冊拾錢●六冊前金五拾七錢●十二冊前金一圓八錢●郵稅一冊一錢五厘

明治文庫第五編目次

みみずばれ……一
曙の春……五一
月花見立て……五四
紅墻記……五五
夏の初め人を懐ひおこして……五六
頼朝の墓 附 韻文……五六
雪折竹……五八
韻文大龍王……八〇
田舎聖者……八一
鎌倉小雛失明恨……九〇
貧……九七
古切手……一〇一
くされ縁……一一〇
あめは降る降る……一三〇
ゐなか娘……一三〇
母のなさけ……一三一

春の花鳥……一三一
まなべ、あそべ、ねふれ……一三三
いづれ務めのある世かな……一三三
忍ぶ合ひ圖の炭俵……一三四
鎌倉江島鴉の道行 一名種ほどり……一三七
戸隱山紀行……一五一
妖女身嗜みの一節……一七三
都門雜興の内
初卯……一七七
年始まはり……一七九
一月の十五、十六……一八五
雪……一八七
夜の雪……一九一
婦人の髪形……一九三

以上

◉これが社會か　みゝずばれ

山田美妙

第一

何と無く間の抜けた長四疊の間を扣へた六疊ばかりの坐敷、この盆前に疊がへするつもりのところ、少々御主人懐中都合がわるいと云ふので其儘にし、その癖素人の手でいぢくつて彼方此方つまりは焼けつ焦げも少なく、緣もいたまぬのを人の目につく處へ置き換へたため疊と疊との間が隨分仲間われに爲つたと云ふ、可なり言ひ立てにも手數の掛かる茶の間。さすがに暑くて邪魔にされ、片隅に押し付けられて居るのは頗る時代のついた長火鉢、一ヶ所の抽斗は取手が取れ、その代りに垢だらけな紙撚がさも力無さうにだらりと垂れ下つて居る、其下には二三疋の小さな油虫が威勢よくちよろちよろ驅けて居た。

油むしと言へバ聞えも宜しくは無し。が、それを此家の御新造の擔ぎ好きから黃金虫と呼び換へていつそ繁殖るのを樂しみにして居ると云ふ、大きに虫に取つては仕合はせな住まひ、御壕に住む鯉鮒と一般、殺生禁斷の靈地に肥えふくらんで先は眷屬の中と爲つて居た。

主人といふのは喜藤常時とて五十二三の好い年輩、耳學問の外に是ぞと出來る事も無い人物で、素生を洗ふと以前は下總の何とか村で名主の權助をして居た人間、どうかして小金を溜めて、成り上り者の常とて俄かに顏が高くなり、もとの名の久助は葛見たやうでをかしいとて大骨を折つた末、自身に擇んだ名が即ち常時。　武家出かと知らぬ者に言はれるのが何よりの樂しみで、從つて又駄法螺も段々上手に吹き、口も變妙な漢語まじりの切り口上に改まつて、無け無しの髯をも生やす、始めて縮緬の兵兒帶を〆めた時にはわざわざ用を拵へて知人の家をまはつたといふ程であつた。　そこで耳學問だけ有つて世の中に通用する俚諺の紋切形、やれ犬が歩くと棒にあたるとか、やれ亭主の好きな赤烏帽子とか、そんな俚諺を談話の中へ交せるのが大好きで、其口の利きやうと云つたら隨分世間の評判もの。が、本人は一向平氣、相變はらず誰を見ても例の傳をバ行つた。

今の商賣は小金貸しと家作貸しで、その外には地所家屋の周旋、手あたり次第にぶつかつて裾切らしと下駄滅らしには隨分根をよくして中中飽きず、近所には憎まられる商賣ながら矢張り御顏を高くする事は終ぞやめず、誰も聞きもせぬに近所の人に向ひ、家では銀行へ八千圓預けて置きますとの御披露。分の厚い鐘は容易に鳴らぬもの。ちと痛み入る丈で、眞僞の處は判然しない披露にむざむざと欺されるほどの馬鹿ばかりが世の中に有る物でも無し、それも是もことごとく近所蔭言の種であつた。かと言つて氣立ては惡いのでも無く、矢張り何方かと言へば一合の舍利別を一斗の水を交せた位の甘

い方。白白しい嘘はつくものの必らずしもその嘘がいつも惡意では無かつた樣子。　來客を送り出して今茶の間へもどるや否や、ええ草臥れたと計りどしんと地ひびき仰向に寐たふれて、頭の先の方に居る女房を額ごしに見遣つて欠伸と一所に「おッ、阿玉！　出した菓子を己食ひたくつて爲んなかつたが、自分も食やお人も食ふで、それが否さに我慢して居た。」　ははは笑つて阿玉は起ち、やがて持ちかへして來た菓子、さて何んな立派なのかと思へば腐れやすくない石衣といふ德用もの。

常時の女房、即ち常時が下女に敎へた言葉で言へば財產家喜藤君の內方奥樣令夫人、その阿玉の素生を洗つて見れば是亦下總の百姓生れ。十二の時から名主の家へ傳娘に住み込み、錢車の日向ぼつこに顏色の染め上げにも念を入れ、やがて日蔭の豆もはぢけるといふ十八九、諺にさへ鬼も十七、人間の事ゆゑ十八九も十四五に見えるだらうとは當人だけの考へで、やうやく肩腰を撫でさする事も覺え、背戶の溜りの水かがみにすつとこ冠りの形も直せば、江戶風といふ事も段段と聞き覺え、寒ざらしの白玉粉をでも偸み出して白粉の代理にしやう抔との野心も起つて、鎮守の祭禮村內の若い者に思ひ切つた調戲口を叩かれるのが結句うれしく爲つた頃、不圖した事から馴染を重ねて水も洩らさぬ中と爲つたのは外でもない其時は久助の、今の財產家喜藤常時。　「久助つてら好い名だな。葛におやかつて色白だ」とそれ相應の褒め言葉を男に聞かせて悅ばせ、「御前等もはおまた好い名だつて。　阿玉たおよく付けた。百合つ玉のやうに眞白氣だ」と禮がてらに言はれるが眞實嬉しく、變はるな變はらぬと契つた緣、それ

も良縁と見えて遂ぞ破れず、今に爲るまで其儘固く、夫婦の中には阿世穂といふ田舍ドみた名の鎹も出來て爾來こゝに三十年、御愛でたい事であつた。然し此阿玉は百姓の子傭奉公などして居た身に似げなく、讀み書きする事が妙に好きで、もとよりぽつぽつの拾ひ學問、どうせ人並とはゆかぬものゝ、亭主から見れバ天晴當代稀有の才女。身上の賄ひに至つては是全く掛け直なしの上手で、一錢の金それを一錢以上に働かせてつかふ段に於てはむしろ亭主も及ばぬ位。常時の今の身分も六分方女房の力であつた。糟糠の妻、むかし友稼ぎした夫婦中も立身するに從ひ疎くなり、隱し妻など亭主が貯へ出したがる此不德の世の中に、こゝだけは常時が飛んだ大出來、たゞ一つの古ぼけた疊を撫でさすりして可愛がり、新らしいのが好い抔との野心も起こらず會の何かで、夜更けて歸る時必らず土產は調へて相應に機嫌も取るほどの同和。

それにもそれで仔細は有り。重石の無い漬物酸くなり易し、可なり嚴しい阿玉の燒き加減に常時も先は腐れず、で、丸くも治まつて居た。氣立てに於ては阿玉の方が亭主よりは好く無い方、隨分の厚皮で田舍ずれに擦れて居た。これが鼻緖ずれや靴ずれと違つて田舍ずれは半夏の粉でまさか治らず、又廓ずれや、花街ずれと違つて、體裁もとより搆つた事で無い、相應に見得張る心は有つても家賃の催促や貸金の督促に掛かつては裂ける程の口を開いて裂ける程の聲を吹つ切り、裂ける程に目を釣り上げて平氣なもの。あれこそ生れ付きの高利貸、高利貸の天才だと隣りの下宿屋の書生に評されるのを當人一

向知らないで花。
顏立ちに於ては大した出來損ひでもなし。亭主が言つた、それこそ百合つ玉ほど白くも無いものの、又加州玉や蒟蒻玉ほど茶色でも無し、一體の出來が南京玉流の小粒で、些反齒で前齒二枚の間は小楊枝が差し支へ無く通行する位透いて居た。　髪の毛が本人の自慢で、成る程これは美事なもの。結ひばえが有るとの髪結の評は全く本當で、このため顏も大きに引き立つ。一度何處かで藝者に一度、御うらやましいとたつた一度褒められたと言ふのが毎も毎も阿玉が人に向つてする披露であつた。

第　二

話しは前へ立ち戻り、常時は來客を送り出してから寢倒れて頰杖つきながら例の石衣を一つ二つ、食べるのは自分一人で、相伴は誰にもさせず、客へ出した出し殼の茶を阿玉が湯呑になみなみ注いで出したのを縮めた儘の左の手で受け取り、常の癖とてずずず呑んで一旦ふくんでまたがらがらと口中で音をたたせ、呑み下して口を曲げ急に呼吸を齒の根へ吸ひ込んだ處を見れば是亦齒性のわるい質か。「嗚呼さつぱりして好い心もちだ。　木村の奴め旨さうに飲んで居たつけ」と別に思慮も無い體何氣無く言つて俄に又思ひ附いた風、「犬も歩けば棒にあたると思つて、木村め儲け口ばかり探して居るが、その癖こつちへ向つちや重荷を打つ被せやうと言ふ氣だから、此方だつて魚心有れば水心で餘り好い氣持ちも爲ないでなあ。

「へえ、何かそんな事を？。金でも、無心でも？」

「いいや左樣ぢや無い。金なら此方だつて貸すのも今日樣の商賣だから利を取つて貸して遣るまいものでも無いが、百貫の抵當に網笠一蓋といふやうな仕儀で厄介物を押つ付けられるのも否ぢや無いか？　何だつて御前今日あの木村がわざわざ遣つて來た用つてへのは外ぢや無い、あの兼さんを暫時引き取つてくれろつてへんだ。だからさ、此己によ。さうよ、この家へ。」

兼さんと言ふのは以前常時夫婦が仕へた主人の一人息子で、今は家も零落して賴る處も無くなつた身分であつた。聞いて阿玉は駭いた體、目を圓くして辷り出て、是も癖斯ういふ時には仰山に額へ八の字だか九の字だかを絞り寄せて宛がら生の鬼を見るやう、「人、馬鹿にしている木村だよ。何だらう、ま、人んとこを好い御救小屋か何ぞのやうに…鹿島さまの人身御供ぢや有るまいし、引き取つてくれもよく出來た。そして、何だから何なンだつて？」

「その、何だづてんだ。」

「何だつて？」

何づくしの送り迎へ當人同士には一向氣が付かず、互に眼は据ゑる。流石に常時も跳ね起きて、

「あの通りの仕儀で零落たらう、旦那が死んでから。處で兼さんは病身で、又是ぞといふ商賣も無いだらう。わづかの金は古川に水絶えずで阿母さんと一途に千分多分持つては居るが中中それで

一本立ち、野中の一本杉と頑張つて世をわたる事は出來ないのさ。何さ、千圓――千圓も有るまいさ――木村は欲めやうと思つて二千圓は有ると言つたが嘘だよ、大丈夫嘘だよ。又御前二千圓有りや五朱の利として百圓は利が食ふもの、かつかつに暮らしや一人口や二人口は――贅澤すりや切りも無いが――ね道理が左樣ぢやないか。で、どうも困る、就ては當金まづ一千圓だけ入れるから…入れる、あゝ家へさ…それに對して兼さん母子を引き取つて貰ひたいといふ譯なんだ。是まで主家來と言はれた緣も有り、かたがた外に賴る所も無い故見掛けてどうぞ御願ひ申すといやもう手の甲頰摺つてたよ。」

「其一函は入れたつきりで、跡は返さないでもいいんだらう」、昔が昔ゆゑ不作法な口前。

「まあ引き取つて食はせてさへ置きや……」

「食はせるつてほんの命をつながせときや好いんだらう。今日日なら茄子か唐茄子ぐらゐで毎日…ははは鈴虫見たやうだッ。」

金の功力と云ふ物は、只噺しだけでも好い加減に顏色がなほつて來るから奇妙。

金の番人の身に取つては世の中に金より懷かしい物も無し、親子夫婦よりまだ賴もし、金と名の付く物ならば氣がねや待ちかねなどでも宜し、世間普通の人情には全く木耳の耳ながら金の響きには夜半も冴えて、それだればこそ寺にも曉鐘、佛地にも金錢の功力は有るものだと銘銘自分から極めての言ひわ

け、溜まる程きたなく爲りたがると云ふ、其灰吹き姿に下水面、好い加減にして居てさへ餘り感心もせぬものを、況して其下水面が大きく爲られて何で岡目に堪るもの。ことには自由にならぬで怨むが世の中、澁團扇に煽ぎ立てられる連中がぢりぢりいとど天柱を曲げて睨み付ける程に爲つては左樣快い事でも無し、とは其灰吹き姿の自身すら滿更知らなくも無くて夫で何うにも爲らぬ因果。千圓といふ掛け聲に阿玉はいつそ目を無くして、不斷の高調子が俄に低くなるのも思へばよくよくの事でした。

利で取り立てても覺えが有る、一函をここで浮かせるのも小金貸し位の身分ではあんまり容易な事でも無し、ここは躰よく繕つて主人母子を引き取つて、そして其金を捲き上げるが宜からうぢや有るまいかと早目的にして企らみ掛かれば、それも左樣だと男に於ても流石に否な氣持ちもせず、「何とかして旨く言つて一旦は、そんなら引き取るか。」――「さうさ何しろ高は一函。家のやうにして貸し付けりや高利だからわいら二人を食はせる處か――」――「その上で何うか又折りを見てぽんといふ目を食はせりやなあ……」――「だともさ。　やつぱり何うしても是や好い口だよ。　おや直ぐまた是から木村の處へ御前がちよつくら。」　たちまち常時は肱を張つて「大きに左樣だ、着物を出しな。」

次ぎの四疊の端で縫ひ物をして居た娘の阿世穗、今親父が出掛けるといふのを聞いて、縫ひ掛けに一寸澁紙をかぶせ、又しても危ないからと叱られるのを忘れて絲の付いた針を鴨脚がへしの峰に刺し、襟先をしごき乍ら出て來た。　年頃は十九ばかり、惡ぶとりに肥つた方で、にくらしいほどの甲斐爪、いと

どぽつちやりした手先を目立たせた。小原女染の浴衣に掛けの端が少し弱つた繻子の帶、小奇麗な顏だけに浴衣も派手ながら可なり似合つて、十人並とは誰でも言ふ顏、にこにこしながら側へ來て「おとつさん、此暑いのに出掛けるの？」

親はふり返つて、「うん木村のとけへ。」

「今來たあの人？」

「うん、さうよ。聞いてたらう、矢張り儲け口よ。骨折り損の草臥まうけとならないで呉れなきや好いが。事に因ると其何だよ、家にも居候ふが是から出來る。」

「その先の御主人とか？　面倒くさいぢや無いか、厄介だね。威張られるだらう、否だねえ。それにや又臺所も忙しくならうし、誰より何より一番利くのは女と妾の二人だわ。」

「ははあ、大きに左樣だなあ。その代りにや着物が殖るぜ、着物を買つてやつたら嬉しいだらう。で、又何ぼ主人だからつて今は居候ふも同樣だ、威張らせるもんぢや無い。」

着物と言はれて流石につこり、威張らせぬと言はれて又につこり、打ち解けて見得は無い塲合ひながら、それにしても年には似ぬ婀娜氣無さ。人の竈で煮た惣菜、その味も知らぬ、摺れぬ娘、御前ぐらゐの年になれば子の一人ぐらゐ抱くのが多いと時時に阿玉が言つた言葉も滿更上部だけでも無ささうな躰。

第三

是も慾ゆゑ、石も鎔ける日中ながら千圓の價の有る暑さと思へば厭つて居られた物でも無く支度する内から鼻面に汗の玉、無精に指で押し拭つてそこそこにして常時が出掛けた跡、家内に殘るのは阿玉と阿世穗と下女の喜代との三人一山に揃つた女島。暑さに封ぜられて碌碌に口を利くものも無し、亭主を送り出した時だけは剛氣と改まつて阿玉も滿足に着物を着て、直に座敷へ引つ返す途中に於て立ち藝でくるりと引き脫ぐ肌、見馴れた事とて阿世穗も平氣、やはり是また一つ穴、

「暑いのねェ、意地わるく。」

だから妾も脫ぐとの先ぶれ。

「こら、こんな汗、」

と右の手を出して見せる頃は早もう左の腕が懷中を搯り拔ける。あらはれた乳房の流石に處女だけふつくりと括れ上つて薄色の、見る目にも美くしい邊、意味有りさうに阿玉は一寸見て返す目で阿世穗の顏。向ふの見る目とばつたり出過へば、處女の常とて何でもをかしく、忽ち仰山なげたげた笑ひ。

「何がをかしいだ?」

と問はれて又げらげら。今度は其聞いた顏付きが恐ろしく間が拔けてをかしいと云ふので轉げ倒れる程の大さわぎ。釣り込まれて、好い年をした母までが同じ涙間の渦の中、流石に見ぐるしく無い母子中。

「人、いやな子だよ、はははは。　ま、何がをかしいだ？」
「をかしいだ！　をかしいだ！　始まつた又阿母さんの可笑しだが。」
田舍訛りが男と違ひ、阿玉は充分に拔け切らず、よく妙な事を今でも言ひ出して、その都度いつも自身の娘、是だけは正銘の江戸うまれの阿世穗に笑はれた。　今も斯う笑はれては滿更好い心持ちでも無し、怒るといふ程では無くて、兎に角今まで釣り込まれたその笑ひ顏の消えたは事實。
一寸前とは樣子が變はつて、しよげた中に稍あらたまる。
「兼さんなんぞが來て御覽。　さう人の言氣尻なんぞ取つた日にや――阿父さんに怒られるよ。」
「その事、あゝお母さん」と俄に是も眞面目に爲つて、「兼さんて人が來るつてな、あの何時頃？」
「分からないよ、何時だか、日は。　知つてる通り御坊ちやん育ちの若旦那だから――それにや御前も家の雪隱より外……」
「又おつかさん雪隱なんて、」
と中途で顏をしかめれば、
「ぢや手水場さ。　手水場よりほか……」
「好いつてば、下がかりを」と肌を脫ぐやうな身で他のこと、「もうもう言ふ事は分かつたよ。　我儘するなと言ふんだらう。　そんなら疾くに承知の助さ。」

早く先をくぐられて阿玉は大きに手持ち無沙汰。

「ね、そうだらう、」

と跟け入られて、

「生、御言ひで無い、」と口惜しんばう。

「だつて夫に違ひ無い。ありありと阿母さんの顔の上に字が書いてあるよ阿母さん」と何處までも親を友だちもどき。

「親あつかまへて」

と睨まれれば、

「つかまへてや爲ない。放してらあね。」

第　四

阿世穗の人と爲りを言へば寧ろ昔流の躾を受けた、何方かと言へば親の身として姑息の安心の得られ易い、大抵をとなしい、丸きりの世間見ず、何が無し親の脛――親が澁面や催促で拵らへ上げた親の脛を只平氣で心樂しく食ひ減らして行く丈の娘であつた。今の大望、寧ろ生涯のは、何かと言へば新しい流行の着物を着切れぬ程こしらへて、夏なら藷、冬なら唐茄子、茶受けに榮太樓の羊羹一棹をぺろりと一人でやつて、厚燒の玉子と口取りを三度の食事の惣菜にし、純金金剛石の指環を暹羅人の出來損ひ

見たやう右左十本の指に欲めて、毎も黒鴨打扮の車夫に挽かれて芝居見物をし、家へハ新駒や米藏が阿孃さま御機嫌よろしゆと毎日伺ひに來るところで、おやよく御出でだね暑かつたらう氷が御否なら何を上げやう、斯う遣つて毎日御出でだに遠慮も入らないぢや無いかなんぞと悠然落ち着いて見せ掛けて、で又一寸でも外へ出る時には何處の大家の阿娘樣かと人が見て振り返つても呉れ、花見とか菊見とか大勢人の寄つて居る處をぶらぶら歩いて居る時抔には一寸又誂らへ向きに其處でもうまい工合に團洲や音羽屋に逢つて向ふから言葉を掛け、おや御孃さま今日はと言つたやうな鹽梅に無つてそこらの見物が一同此方をじろりと見るといふやうな、斯う言ふ目に逢ひたいといふのがそもそも今の望みであた。

一人つ子ゆゑ甘やかされる。身の毒に爲りながらも我儘は爲る。大事に爲れる丈實は損を儲けて居る。親も惡くしつけやうとは思はぬものの、可愛さに嚴しくは迚も出來ず。十二三の頃好い加減に最う可なりの年をして居ながら朝起きるや否や寢床の中から誰も敎へぬ長唄の朝稽古。おおよく精が出る、泣き工合ひが餘つ程上手に爲つた、聲の捻り鹽梅が調子に乘つて來たと眞逆に親も言ひは爲まいが、扨言つたのも同じこと。御褒美か何ぞのやうに、仕舞つて置いた菓子をあてがへば、阿保陀羅經坊主が錢をもらふと直行つて仕舞ふのと同じやうに、よくも左樣早くだまれると思ふ程速かに泣き止んでしまふ。目毛に涙の白玉がきらついて居る中から其菓子をむしやむしや。やがて學校へ行く時間となれは又愚圖る。始めハ只否だと言つて愚圖つたものの、小兒ながら甲羅が生へ終ひには假病といふものを覺え込み、

絲のゆるい鼓の音見たやう、投げ節の鼻聲で、ぽんぽんが痛いよとは考へた物。病氣と言はれて弱くなるのは親心、そんなら休めと脆く折れると、氣の利いた腹中も有る物で直に又治つて仕舞ふ。苦くなく、其代り利きもせぬ、匂ひ袋同前ただ匂ひのいい藥が飛んだ儲け役で、さも利いたやうな顔を爲たばかり。

それ故、纏まつた學問も出來ず、能の云ふのは甘い物の征伐に合はせ鏡の使ひ方、母に向つて鼻を鳴らす工夫と父に向つてとぼける容態、是で嫁に行くあり、聟なり取つてまあ何う爲る事だらうとは佛壇の位牌が言ふだけであつた。

何にしろ阿世穗は喜藤夫婦の手の內の玉、うつかりすると轉げたがる、轉げ出せば瑕は付くとて其方の見張りには見張り賃も取らぬ母が齷齪。さすがに其甲斐は有つて明らさまに言へば食ひ氣が勝つ、前の世の仇敵か夏はもう毎日毎日唐茄子を引き受けて一歩も退かず、蔕丸、高胴、縮緬肌、どんな唐茄子でもさあ來い、來れッ？

第五

信仰の光りの薄い世の中、其世の中に育つた處女の身の物堅いといふ程當にならぬことは無くて、酷く手きびしく言へば、ほんの手綱や轡で引き付けられた丈の事、一旦すこしの隙でも有れば、何の名譽だらうが、地位だらうが——兎もすれば血氣に衝かれての盲さわぎ、百年の大計をあやまるのが先づは

普通の咄しです。
十五六で女並の心となり、草木の靡くのも身振りと見えて、冬瓜に向つても白粉の付け工合ひを參考し出す頃となれば、血氣の焔硝その實內部に乾き乾いて一點の誘ひの火も中中仇には見過ぐさず、哀れ其火の近寄れとばかり。

不經驗が心を臆させる內はまだしも結搆。思ひの炎が熾になれば臆病も高じて大膽と爲る。もしも其火の方から近寄つて來なければ此方からして近づかうとまで。

何か一念信ずる心、つまり心を堅める念がこの時にせめても有れば、危いながら墮落の究厄どうか逃れられるものの、それが無かつたら一大事。が、この一大事が世には多し、滔滔として大抵みなそれ。焔硝久しく燃えずには居ず、爆裂した處に立つのは臭氣、くすぶり汚れるのは身體、人はいやしんで耳を掩ふ音、兎もすれば又自身もくだける。ただそれだけ。

阿世穗が物がたい人間かどうかはそれ故今の境界で言へたものでも無し、物堅いとも言へるものの、物堅く無いとも言へる――つまり焔硝が親の加護の下に濡布團被つて居るのかも知れず。若いものの道德三昧はまづ言はばアルミ臺の鍍金、外面の立派だけに中身に一分も氣は許せず、これが何かの堅固な信者なら兎も角も、買ひかぶれば隨分恥ぢをも掻く事です。

處が不思議なもので、親の身になると大抵が殆んど是ほどには思ひ做さず、多少の心配は費しても非

常に心を配りもせず、いつか目を拔かれ、手綱を切られ、遲くなつて氣が付いて泣いたり騷いたり、もう早其時になると肝心の當人は濡れぬ先こそ露をも厭へと馬鹿度胸を落ち着けて、親がこぼす涙の雫、其一滴にしろ分配しやうと云ふ處か、あまつさへ何を言ふかと思へば逆捻に爲つて駄駄の大駄駄。

親といふ人、よしや頗るの拔け作でも流石に幾十年かの經驗は有り、且は常に自身の傍でわが子の樣子をつくづく見て居る、で有り乍ら此失策。捨てて置いたかと聞けば中中どうして――わが子監督のためには夜の目も寐ず、世間何千組の野合沙汰、そもそも親が全く許して雛鳥の爲たい三昧、勝手な眞似を爲せるといふのは――浮氣家業なら兎も角も其外に於ては――其實はとんでもない程。

で、事に爲つてから始めて驚く、岡目から見て馬鹿馬鹿しい事、當人に取つては五里霧中。ただ何が無しに油斷が元で、その油斷といふも外ではなし、親心として吾子を兎もすれば買ひかぶりたがつた故――親心として吾子を兎もすれば子供あつかひに爲たがつた故――目を拔かれたといふのも唯この故。

根つから小兒で困りますと他に向つて親は言ふ、よしや幾分の世辭は有つても、可愛がつて子を遊手物にする處から幾干か又わが子をいつ迄も子供と思ふ故。子供だから大事あるまいと安心する、なるほど家内水入らずの塲合ひには十八九娘ざかりの御孃さまが隨分大足を投げ出して甘藷の横かぢり、味噌濾一杯を平らげてげつぷつと黄色い水を吐き、晩飯も最う入らぬと云ふ飾りけなしも爲るものの、是で親が安心するのは抑抑の大間違ひ。あくる日芝居の割込桝、とんと人間が生れかはつて物も碌に食べず

見得をして居る處によくよく御目をとめられたら夢にも小兒だなどの譫言は出された物でも無い、そこを左樣行かぬで終に玄く玄る、娘も無論わるいものの、親も扨いとは言へず、只只心次第。

第六

木村といふ男の家に常時が行き、色色相談してどうか角か纏まりも付いたと見え、夫から四五日經つ内に、城部しづ、同兼太郎同居といふ趣きが常時の手から區役所の帳面に乘つた。言ふまでも無い、此二人が常時夫婦の舊の主人で、阿靜は當年五十と幾つか、慢性僂痲質斯の間斷無い宿り家で、左の肩などは殆ど利かず。又其兼太郎といふのは例の前にも幾度か出た兼さんで阿靜に取つては天にも地にも掛け替への無い一人息子、年と云つたら男一人前、歯から外へ出した一言でも美事刀に掛けられる廿七歳といふ年輩ながら、乳母日傘に甘味が付いて、扨馬鹿でも有るまいが、鋭くも無し、隨つて氣のせいか一寸見ると幼な顔もいくらか殘つて居る鹽梅、しかも子供のやうな口の利きやうで、人の目顔など讀む事は元元不得手な方であつた。二人が引き取られて半月程といふものは、嘘も無い、全く以て喜藤の一家に時ならぬ花が咲いた。敷金見たやうな格で入れる金、それも千圓足らずぐらゐと始め考へて居た處、何さま古川に水絶えずで、やがて持つて來て見せられた處で意外に思つた、と云ふは其金額が千の上、二千足らずは有つた。それからして思はず知らず常時夫婦も主人二人を大事にする氣にも爲る。忠も愛もそんな事に誰が搆はう、金の重量で頭もさがれば金の電氣で手足も働らく、何が無し阿靜母子

が兎も角も金魂ぐらゐに見えるので、可なりに手厚くして持て做せば、流石に一方も亦喜んで當坐は必らずしも顏を高くしやうともせず、無論主人風は更に吹かせず、零落した身と考へて据膳を辭んだ事も二度三度、いそいそ常時夫婦も心よく爲つた。

が、只迷惑なのは阿世穗であつた。　下女は兎も角も、人增せば水增すで二人前の用事が一度に込む。そこで食客あつかひに爲やうと思へば慾張りの兩親がまざまざと前言を食んで仕舞つて蔭へ呼んで睨み付ける。　一人子で我儘に育つた丈棚木に生まれた猫見たやうに兎角大きな御坊ちやんが人見知り――人見知りとは言ひ乍らいくらか若い男と鼻つき合はせて居る羞慚も中には交る――親に小言を言はれても、さすがに見得をする氣が有るので、毎ものやうに荒立つてぴんしやん口返答は爲なくなつた物の、其實面白くなかつた。

いつも食事は阿靜母子に常時親子の合計五人が車座に爲つて爲るところで、何だか阿世穗の食物今迄程矢鱈で無くなつた樣な鹽梅、御前此頃は暴食をしないねと一口言はれるとつんとして、「夏だもの、何時だつて」。すると親たちは何とも言はず、唯顏見合はせて妙に笑ふ、腹の中は何ういふものか。

はじめ五六日の間といふものは阿玉も肌はさすがに脱がず、その内汗疹は出來たから天花粉を付けると云つて、それから毎日汗疹さわぎでやがて肝心な物は治つても終に脱ぐことは止めなくなる。わア暑いと呟く阿世穗にむかつて、好いから御脫ぎなと勸めると、冷笑して返辭もせず、絞るやうに爲つても

行狀は良くして居た。

阿靜とは阿世穗も可なり言氣を交しました。が、兼太郎に向つては一向に頓着も無し、野呂間トみた事を向ふで言ふと、忽ち拔き衣紋になつて横を向くといふ惡澄まし。でも兼太郎の方では何とも思はず。

ある日の夕方、昨日籠から逃げられた松虫の聲が庭の下草の中に聞こえると云つて、仰山に兼太郎が阿世穗を呼んだ。實は阿世穗の思ひの掛かつて居る松虫、昨日餌をやるとき逃したとて、まだ今日も下女が怒られて居る矢先、涙の出るほど戀ひしい虫が草叢に居ると云はれて阿世穗も飛び立つやうな氣持ちで、返辭に及ばず驅け付けて、

庭下駄を横からつッかけながら

「本當?」

と目を圓くする顔を向ふはしけトけと見て笑ひ出す。

「ほんと。あれあの……そら、ちんりんちんりん。」

但し得知れぬ虫の聲、松虫抔とは似ても似付かず。

「あれが?」

詰問の語氣でふたたび問へば、相手はますます高く笑つて、

「松むし――の樣な虫」。

赫となつて阿世穗は目もくらむ。譯も無く眼中にさしぐむ涙。一言も言はず踵を返して、わが居間へ驅けもどつて、

「大……バカ野郎！」

阿世穗が正齋河豚のやうに脹れて自分の居間へ駈け戻つた跡から、目顏の見えぬ身とて兼太郎も引き續いて七分三分の違ひで追つ掛けて部屋へ入つたからには、どうしても阿世穗が口惜し紛れに怒鳴つた「大馬鹿野郎」も兎に角其幾分かにしろ聞こえたには違ひ無い譯。が、さうでも無いと見えて一方は別段變つた樣子もあらはさず、それとも人が好いので氣にも爲なかつたと言ふ次第か、平常有り合はせどはりの――阿世穗に言はせれば、野呂間らしい――顏付きでやがて、追つて入つて來て吸ひ上げるやうにげつけと笑ふ。

「怒つたの、阿世穗さん？」

と言はれて此方では竦として身が縮む。いきなり側へ來てべつたり坐りかける兼太郎をトろりと一目極はめてするどく尻目に掛けて、物をも言はず、つんと立つ顏、それを下の方から兼太郎はにやにや見上げて

「松虫の御神さんが欺かされたつて怒つたよゥ。」

物をも言はずに又行き掛ける阿世穗の體、今までは冗談一方と思つて居た身があてに至つて何だか些し氣の毒の「キ」の字ぐらゐは心付く。急雨たちまち瓢簞の塵をあらつて吃驚したほど眞面目になり、共にわれ知らず立ちながら、

「阿…阿世穗さん、何だ、おい。　怒らないだつていゝぢや無いか」。

袖を引き止めればつつと拂つて、

「御よしなさいよ、人を馬鹿！」

「馬鹿…馬鹿…馬鹿なんぞに誰が爲たらう。　冗談にただ松虫で擔いた計りだね。　そんな事に怒るつて奴が――いゝ子だ、ね、阿世穗樣。」

いゝ子だもよく出來た、口の利き樣も知らぬ大馬鹿めと此方はいよいよ腹は無しやくしや、

「ちつとも怒りやしませんとも…」

其言ひ樣は極はめて暴し、

「怒りや爲ませんとも――又さうでしやう、欺まかされた方が馬鹿なんでさ。　欺かした方は御利口で……」

言つてトつと兼太郎を睨み付けたが、兼太郎の顏色に別段變つた雲も出ぬ樣子。馬鹿め、分からぬかと云ふ體で阿世穗は些し冷笑つて、

「自體、もし兼さん、こんな事言ふのは何だか變ですけれど、ね、御前さんだつて大新聞ぐらゐ御讀みなさる身で……」

と言ふ譯は外でも無し、おれは大新聞の社説がすらすら讀めると二日計り前に兼太郎が恐ろしい鼻高に爲つた事の有る、實は其執柄がへし。充分に見下して又あざわらひ、

「人の部室へ矢鱈に入つていいもんか惡いもんか位は疾つくに御存ぢの事でしやう。」

憎憎しく言ひ飛ばされてやうやう兼太郎の脉にも感ずる。大新聞がどうとか言はれ、些笑ひかけた顔が俄に流石改まつて、むらむらと始めて立腹した樣子。

「ふん、大層な事を言ひ出した。」

「當り前の事ですよ。」

「當り前は知つてらい！」

「知つてるなら何故さうした？」

是だけは獨言のやうに言つて、たちまち急に金切聲、兼太郎に行けと言はぬ計り、次の間の方を向いて、

「おッかさん、あの一寸！」

第七

何れを見ても懐中そだち、御坊ちやん同士の曲み合ひ、雛兒の裁判には常時夫婦も當惑を極はめた。ただただ金と云ふ貴いもの、其後光が兼太郎の肩のあたりからきらきらと輝くため兎角は團扇も兼太郎の方へあがり勝ちで、阿世穂の底意地たしかに幾割か惡くもなる。懐中そだちで終ぞ些しも世の中の變な苦痛も知らなかつた身が不思議な事から爰に始めて他人といふ、一種人間で無い樣なものの味も覺えて、吾家ながら何となく隔ての膜も出來た。

些親たち迄も憎く爲る。憎いと思ふと何を言はれても捻金をやつて見たく爲る。あくる日一日の間の食事は好い味がしたのやら、爲ぬのやら。

あくる日の朝はやうやう膳部がよく揃つた處で阿世穂は急がしさうに一寸來て而も二膳、暖い飯ながら暗雲に汁を被けて仕舞つて一息に濟まし、楊枝を啣へた儘つつと立つて自分の居間へ立ち戻つて仕舞つた。

立ち戻つて考へだす心の中には、御世穂の言葉を假りて言へば、例の野呂間野郎の俤がありあり浮かぶ。百姓流に箸の先へ御飯の大山をつつ掛けて口の中へ寧そ押し込み、受け餘つて總躰の二割ぐらゐを逆もどしに茶碗の中へばらばら降らせて、そして頰の皮を脹れさせながらもぐもぐ食べる姿がありあり見える。下司張りも物知らずめ、厚かましやめと繰りかへして二三度言ひながら簪を引き拔いて

あらあらしく前髪を掻き亂し、急にその手を止めて一思案。

向ふが厚ましく出るに、此方が小さくなるのも損。よし今度はづつと強く爲つてづぶづぶしく出掛けて遣らうとそれから晝と爲つて奮發し御膳といふ掛け聲を聞くや否や第一着に席へ就き、下女がまだ並べ終らぬ皿小鉢を一所に爲つて手傳ふ處へ例の當の相手も亦出て來る、底根城をわるくして藥味や醤油の類はわざと兼太郎の方から遠くして、是でやうやう多少の滿足。只ひとり得意で笑ふ顔付き、不圖目に付いて母の阿玉も譯は分からずに笑ひ貌、

「何笑ふだよ、この子は、ま?」

鴨が仲間に相圖を爲たかのやう、此一聲に一座殘らずその顔は阿世穗に向く。早く受け取つて口を繼いだのは兼太郎の母の阿靜であつた。

これも阿玉に負けぬ國訛り、

「あら、ま、嬉しさうだつて。何よ思ひ出したんべ。」

小癪な事をと上目で睨むを、氣の付かぬ父親の常時は是も言葉の末を受け取り、

「何さ、兼さんと一つ鍋の物を食ふからよ、なう阿世穗。」

一句胸にしみる言葉。ええ情無いと紅める顔色、咳でこみ上げる躰に紛らせは爲たものの、人、をかしくも無い事をからからからと一同に笑はれて流石に今は目も眩む。默つて居やうとは思つても扨承知せぬ

のは口であつた」
にくにくしさうに齒を見せて、
「くだらない事を阿父さん。」
はづみに兼太郎を睨めつけたいは山山でも、さすがにさう爲る勇氣は無し、家の中の蛤蜊貝で僅に親父をつよく睨んで、もう早我慢も無くなつた。
「一所ん爲ッていおめやがる！」
是だけは口の中、後は一言も物をば言はず、茶碗を取つて手盛りで二杯、人は何うとも勝手に食へ！菜は丁度小鯵の煑附け、骨が多いよと三子のやうに注意する母を鼻であしらひ、背筋だけの處を撰つて惡く暴らし、早く誰よりさきに食べ了つて、怒りを移す我儘呼はり、下女こそは好い迷惑、
「清ッ、鈍間だねえ……人、大野呂間！早く持ッて來ないか、御茶ッ！」
見脉に驚いて一座白けて暫時は無言。
「なぜぶりぶり爲るんだろ。毎も饒舌る癖に口も利かず……」
と言ひ掛ける母、これ幸ひと取つて掛てつ、
「食に語らずと言ひますよ。御膳の時にしやべつたり、大口にもぐもぐ食べたりするなゐ田舍の土百姓に限るんだ！」

當坐の內こそ常時夫婦も表向き兼太郎の贔負を爲たものの、何と言つても親身の愛情、蒟蒻の化物見たやう阿世穗にぷりぷりされて見れば心持ちは好くも無し、惡まれるのも馬鹿な噺しと氣が付けば、夫婦寢物語りのひそひそ相談、どうしたものかとの談合は時ならぬに聞える團扇づかひの音でも知れる、その次の朝に限つて夫婦、ことに阿玉が兼太郎に對する樣子が頗る變になつた。

蔭にまはつて阿玉は阿世穗にほとほと詫び入る。――知つての通りの魄膽から實は算用づくで引き取つた主人夫婦、それで大事の娘の御前に迄難儀を掛けるのは氣の毒だが、待てば海路の日和とやら、阿父さんも色色と腹を決めて御出でゆゑ遠からぬ內に何とか又好い處置を付けやうさと。

內にもよほした事の外にあらはれぬは少し、日一日と經つに從つて主人母子の待遇が段段に變はつて來た。一口に言へば食客といふ格に。

今までは阿靜母子につけた菜、魚なら脂の有る、體裁の見ぐるしく無いのをと撰んだのが此頃になつてがらりと變はつて、そんな方には敏い兼太郎津延の湧く種となつた。

ある夜何かの會から歸つて常時が土產に料理の折りを持つて來たところで、其持つて來たのは兼太郎もちらりと見た、それで其折りを出して食はせなかつたと密密阿靜母子の間に不平の聲が湧き出して來た。

意地は境遇によつて汚なくなるものか、さしも人をつかふ身分でもあつた母子がこんな事に剛氣と騷

ぐ。いつ折りを開いちやつたらう、大方寐床で食べたんだんべ、と年甲斐も無く阿靜が邪推をまはす。なぜと言はれて得意顏、「御前、寐て知んなかつたんべ。あの跡で、な、阿世穗の咄し聲が久助等の寐床で聞けえた」と。

斯う爲つて來ると兩方が兩方で兩方の惡い所だけを見て騷ぎを強くし、今迄凪いて居た主人風も反動でそろそろ吹き立つて來る、おや生意氣なと此方でも亦風よけを造らうと骨を折る。面あて盡くしがとどのつまり。

昨夜折りを開いてよしや其中の魚の一箸でも御食べなさいと云はれたならそれこそ氣は心で嬉しいが、匿されたと思ふと業が煮える。先が先なら此方も此方だ。

下女を呼んで阿靜兼太郎二人口を揃へ、

「一寸今すぐ使ひに行つてくれ。」

「はい、」

と蹲るのを睨めるやうに屹と見て、

「直だよ御晝の間に合ふやうに。柳川へ行つて丼七つ、十二錢計りのを極早く。」

不審顏する下女をいよいよ睨めて、おはや大雷を落としさうな體。畏まりましたと受け合つても流石に何だか心元無く、丁度二人鼻を揃へて居る常時夫婦の處へ行き、事の趣きを告げ知らせると、流石に

是等も亦駭く。

「妙ぢや無いか、丼七つ？」

下女の前も有り、上部は是だけ。内心ははあと考へ附く。意氣張りに爲つたと見えて差し止めず、その儘下女を出してやれば、阿玉は兎角氣になる體。脛に疵で是も亦昨夜の折りの仇うちだと勘付いての苦わらひ。忍び聲で手眞似を加へ、

「恐ろしい意地つ張りだ。」

咽喉へ刺の立つやうな鰻飯がずらりと茶の間に並べば冷笑ひ顔の阿靜母子が常時夫婦と阿世穗を呼び、何の故だとも言はず、只取つたから食べろと計り。

流石常時等夫婦も躊躇して居る内に、阿靜は又心得顔で下女を呼ぶ。一同白ける樣子に化轉してのつそり顔を差し出す相手に向つて、丼の一つを指さして、

「今日は御前も是え食べるさ。好いから一つ持つて行きな」、と大腹中。

いつも何を取つても下女には亘らぬ喜藤の家風、それ知つて居ての此面當。今までは我慢して居た阿玉もぐつと胸に來ました。御節介なと忌忌しく、心頭に燃え立つ憤怒なかなか舌では押へ切れず、

「ようムい升よ」、

と邪魔を入れると、阿靜は此方をふり返つて、いくらか口の尖も鋭らせ、

「いいぢや無いか遣つたつて。」
吹き立つた主人風、言葉もここに麁末に爲つた、巳れ意氣地無しがと阿玉はむしやくしや。而もただただ夫だけなら可し、次第に憎い事を言はれて腹の中は烹えくり返る。——
「不斷何も食べないから偶にや御前だつてねえ…」と下女の方を向いてにやりと笑ふと、篦棒な！何がをかしい！兼太郎ゝそれと同時に一拍ぽんと手を叩いて、高笑ひのはははははは。
始めから始終の樣子を見て居た阿世穗には一向に神機秘密の工合ひが分からず、母を見ればつんけんして耳の根までも紅く爲り、父を見れば是は無言でむんづりとも口を開かず、苦り切つて五六分方の上目をつかふ鹽梅式。
水も激せられれば鳴る物で、言葉の行きがかりから阿玉の方でも意地に爲る氣に爲りました。考へて見れば人を馬鹿にし食客のくせに差し出た一言！
不斷何も食べないから偶にや御前だつてねえと叱しやがつた。
當り前だ、まだ下女だ。下女だ。めしつかひだ。鰻丼を食はせてたまるものか！人の召し使ひを捕まへて惡い癖を付けやがる！
言ふ口がそもそもにつくい。下卑藏、食ひ意地めが昨夕の折りを根に持つて——鰻めし、みんなで

も食ッちまへ！
たとへば其丼だけの代を此方の懐中から出して下女に呉れて遣つたにしろ、今斯う言つて差し出されてそれをおめおめとは食はせられぬ。さきが先なら此方も此方だ。へん！何の目くされ金の千や二千！　構ふものか、我を張らァ！　それで否あらどうでもしろ！
下女を睨めつけて、
「御前の御菜はもう出來てるから――よしかね、御菜は出來てるから。」
目で知らせた其途端、扨も有難い、思ひ付いた好い惡躰。これが言はずに居られうか！
見わたした所は七つの丼、それをずらりと目で數へて、
「澤山も無い丼だ。兼さんだつて三つは食はうさ！」

第八

それでも何うか角か下女も一丼を拜領し、いそいそと引き下がつた跡、やがて一同坐を共にして愈愈食に掛かつた處で、常時夫婦の身に取つては丼の飯加減の柔かいのもいつそ硬いかに思はれて、蒸しの好い鰻も丁度木端を嚙む工合ひ、儀式だけに常時夫婦が二人で一丼を分けた計り、何と言はれても二つ目には手を出さず、常時はまだ兎も角も、阿玉の方は餘程の胸氣で食べ了つて改まり、仰仰しく禮を述べた。

呑氣なのは若いもので、親たちの呑む針、阿世穂に取つては痛くも無し、鼻の尖から湯氣を吹かせて、まだ若い額に色消しの皺さへ寄せ、呼吸づかひをも暴くして、一丼を片付けるにせつせといふ大騒ぎ。詰め過ぎて胸ぐるしく、産婦そこ退けの肩息に爲つて、舌うちして、煮えかへる計りの鰻屋の茶を不思議に外見も捨てずすずす飲み、片手に團扇をつかひ乍ら「おお暑い」と言ふ姿、横目で阿玉ハ冷蔑むやう、睨めるやうにじつと見詰めて何を思つてか返す目で兼太郎の顏を一目。

甘いが常の兼太郎、見られた目に取り縋つて扨も大家出の子に似合はぬ風呂敷。常に阿玉夫婦を叔母叔父と呼ぶ事とて、褒められたさの、而も否味。——

「叔母さん、ね、おい。錢さへ出しやあ何んな物でも食へなかあ無いからねえ。」

聞こえぬふりで横を向くのを構はず又も二の矢を繼ぎ

「え、おい、左樣ぢや無いか?」

言ふのはさして惡氣でも無し。が、むしやくしや腹で迎へられれば到底白眼の睨み付けられ又免かれた物でも無し。

「あい左樣ですとも」、

と計りつんと爲れて流石にしよげて手持ち無沙汰。讀み盡くしてある傍の新聞、取り上げて無駄な目を廣告の上に休ませた。

其夜常時夫婦の居間では阿世穗さへ喚び付けられての密密相談。阿世穗は眞向から浴せ掛けられる大小言。子供ぢや有るまいし、好い加減に意地きたなも大概にしろ、反るほど食いこみやがつて土瓶と首つ引きも無いものだと專賣の惡口口を衝いて出た。

あんな氣の強い母子も無い、舊主人とれ言ひながら酷極はまる。此儘でぐづぐづして居た日には庇を貸して母屋を取られる、と例の漢語と俚諺とで煉り交ぜ、胸高に腕ぐみし乍ら首を捻つたのは常時であつた。

「……當にさ、何たら燒糞の母子だあか。首根つ子取つかめへたくつてむづむづしたが、御前が默まつてるもんで——どうか法さ付けざあねえ」。

御得意で恐ろしく顏をしかめてにぢり寄られて、身を避けて、

「この温氣に——ちよつ、暑い。離れて……てえても咄しや出來る。」

「呑氣な事を言ふまえよ。庇貸して母屋なんぞと言つたくせに。今逐ん出したら惡からうか？」

「工合ひもんだあわ、それも。」

「惜しくも有るから、なう、あの預り金が。」

「返却する氣に爲りや造作あいが、夫ぢやあ全での骨折損……」

「極り文句だ、草臥まうけか。つまら無え。よおく考へて見なせえよ。旨え都合に手付かずに。」

傍にはまだ阿世穗がまトまト。小言の腹立ちがこびり付いて居る顔で灰吹の蓋をくるくる手遊に爲て居た。

義理の柵、人情の枷、何れも無殘に今は無くなる。はトめ鷹揚めかして居た阿静母子の方でも中中うつかりとは爲て居ず、一函あまりの金ならば些しは利もあがるだらう、小遣ひに爲るからと野面になる、仕方無しにしぶしぶ出してやる時の常時の顔と云つたら取つて呑みさうな見脈。

阿静母子も相應にひそひそ何か相談する體、そこには此方も邪推を交せる。その都度に烹える腸。

何んな話しをして居るか御前聞いたかと下女に聞くと、畜生め、恩知らず！一つの丼に目がくらんで「いいえ」と先の贔負を爲る。

すると又いろいろに心で物事に色を附け、からだ如此だと考へ出す。そんな事を穴ぐりたがる阿玉の言葉、妾がかげで見て居るのも知らず何でもあいつ(下女)は野呂間共(主人母子)の贔負して先刻も新芋の筋の無ささうな處をわざわざ撰つて野呂間共の椀に付けやがつた。

阿静母子は前から二間ばかり小さいながらも部屋を宛がはれて居たものの、當座まだ氣まづく爲らなかつた頃は物珍らしさに日がな一日自分の居間はまるで空いて毎でも阿玉の方へ入りびたり、處が此頃に爲つてと云ふものは流石にそれも面白く無いと見えて飛んだ御月樣雲がくれで用の時より外御顔は拜めず。うつとしく無くつて極く好いとは本當らしい阿玉の獨言。

當座食事の時に阿靜母子が部屋へ引き込んでも居た時には毎も阿玉自身が迎へに行くのが常のところ、今になつては夫もうるさく、下女に呼ばせるか、それで無ければ阿玉自身が金切り聲、例の以前に野中で吹つ切つた流儀で「御うまんまあ！」

今迄の待遇が綿ならば今日此頃のは鐵、今迄のが火ならば今日此頃のは水。いくらか馬鹿でも是で以て腹は立たずに居られもせず、火か水か激した結果は以前に中へ立つて口を利いた木村といふ男の處を阿靜が尋ねる事と爲つた。

行つて木村に面會し、何方にも言へるは理窟で、舌のかぎりに喜藤の讒訴。見下げはてた人物に兎も角も今は母子命の根の、千圓の金、氣を許しては迚も置けぬから何とか處置をしたい物と流石に汗をかいての頼み。それも聞けば無理でも無し、左樣でムいましたかな、そんな人とも實は思ひませんでしたがと、初めの內言つて居た御坐形も段段に攻められて退行きならず、では何うか處置を付けましやうと言葉を番へる迄に押しつまつて、そんなら何ういふ處置にしますと改まつて反問すれば、哀れ、さう爲ると又これと言ふ口も利けず、目を見張つた計りで只おどおど。

志かし乍ら弱いものいぢめの世界、而も慾の爲とあれば二分か三分の若菜の芽も藪鶯の目さへ逃れず、世間無數の詐欺師の達人、道德も法律でわづかに色の保つ常とて、力無い弱い身は其弱いだけ弱くされ、馬鹿にされ、押し遣られ、蹈みにぢられるが關であつた。

一函の金を處置して遣つて一息骨を折るからには少なくも報酬は三つ一。で無ければといふ意味を言外にほのめかせた。　それがまた否ならばいつそ此方で殘らず取ると。さてこれは腹の中であつた。

木村といふは後家人あがりで、其筋への屆は無職業。士族といふ名を剛氣に自慢で、赤鰯の形ばかり、三一と言はれたのは身共で厶らぬといふ顔付き、隨分と同じ仲間が世間に有りさうな人物であつた。擊劍が出來るとかいふのが自慢で、御流儀はと言はれると北辰一刀の眞影流と答へる。はてな、一刀流と眞影流とは違ひましやうがと反問されると、何さ折衷したのさと答へた。

劍術を學ぶと目がこはく爲ると人が言ふと、木村にいつもそれを駁す。――「それはまだ至らぬので、極髓に突き拔けると平人と變はらなく爲る。はて、味噌の味噌くさきは味噌に非ず、處女の處女らしさは多く當にならずッ」。成る程と人も呑まれて仕舞つて木村を見ると、何樣極髓に突き拔けたと見えて目付きも平人と同ドであッた。

それ程に劍術が出來ながら、何でも歸去來が何うしたとか、五斗米の相場がいくら爲るとか六かしい言ひ立てで、其劍法を種に奉職なり何なり爲やうとは言はず、かと言つて才學で食へないと見えて左樣もせず、只何が無しに一日一日と過ぐして居た。

小口が利けて其くせ腕の無いものの掃溜は三百に越したものも無し、懷中持ちの刑法治罪法夜店で大枚六錢に値切り飛ばし、三月斗り讀んだかと思ふ内――御擦り見たやうな女房も曰ふ「器用で厶い升か

ら最うどんな公事沙汰でも」。直と木村が受け取つて、呆れ顔の近所の人に向かつて、「なあに一意道理でつらぬくです」。

が、天は兎角下手な方へ職業を授けたがる物と見え、新規卒業の、自分が考へても上手な木村に頼むやうな具眼の君子は兎角少なく、つひ夫なりで腮にも答へる。答へるといふ其果ては手當り次第に智慧(?)での世わたり。

地所の周旋、家屋の賣買、金の貸借、證書の抵當、嫁入聟取養女養子、つまりは何でもムれの八宗兼學。片手間には探偵の眞似をして妙な利を吸ふとの噂さ。

妙な利と云ふのが一寸立ち前に爲ると見え、玄關がまへは兎も角も見ぐるしく無くして居たで。

何からして探偵の手下のやうに爲つたかと尋ねると、實以て御座のさめた話しながら併し世間に同樣なのは隨分と澤山有る、これも才子の働らきだと本人の味噌であつた。

木村は年頃もはや分別ざかりの四十足らず。で人形ぶりが好いとか言ふ處から浮氣な待合茶屋の女主人に見立てられて譯の分からぬ本尊さまと崇められ、それからしての小遣ひ取り。自然待合茶屋とあれば客の出入も中中多し、日に幾度も本當の探偵といふものも來る、それらとやがて懇意になつて、一二度の花合戰それを入魂のはじめとし、夫からしての飛び入り相撲、俗の俗人の最も羨やむ、所謂樂な身に爲つた。

素より本當の探偵でも無し、別段に咎められる規律も無し、それからしての勝手放題。待合茶屋を本陣とし、足の向く儘の遊び場所と切つて回つて、探偵といふ觸れ込みから強面おどしの傳法肌。一度かかり合つたが最期、こだはりを附けて只は引かず、その癖羽織ごろと言はれる流議で、情婦愛慕の念の籠つた御仕着せの凛とした身のまはり、二圓以下の下駄なら穿かないよといふ分外の贅澤沙汰。炎天の太陽烈しく照つて何故こいつらを燒き殺さぬとは一度いたぶられた事の有る者の蔭言であつた。

(右人物木村の名は誤つて餘り普通な名をつかひ、今更をかしく見えるものの、決して誰を種といふ譯でも無し、もしも不幸にして世にこれと同名の人が有つたなら何卒偶然の一致として御容赦を願ひます……美妙誌)

第九

網にかかつた瘦せ蜻蛉、見付けたが生涯蜘蛛は逃がさず、賴まれていざと云ふ場合ひになれば流石に平常の性質が性質とて慾も氣ざす、宜しいと呑み込んだ木村の肚には蝮蛇何疋畜つたか。表部から見透せず、拜まぬ斗りにして賴んで還つて、子と思へば甘いとも考へず、事の子細を兼太郎に告げ知らせれば何が無しに只同意。それでも慾目の有りがたさ、天晴一角一人前の男と思つて、阿靜の心もいよいよ決まる、あはや其決まる丈は死地へ死地へと急ぐ鹽梅。人知れず喜ぶのはただただ木村一人だけ。

すぐに木村は支度して自分の家は出たものの途中に爲つて思案も出た。阿靜は喜藤の家に居る、そ

こへ行つて何角の魂膽、つまりは打明けて機密のところを常時に告げるのも餘り上手な沙汰でも無し、なる程それもさうであつたと心を定めて趣向を變へ、にはかに車の向きを轉ド常時の近處の料理屋へ——その實跡で儲かる目的も有る故——いきほひ快く乘り着けて手紙を書いて使ひに持たせ、常時を招かせた。

てつきり阿靜に關した事と常時も早く察してそれから膝を交へて阿玉と相談。阿靜や兼太郞の素振りが今日に爲つて俄に怪しい、てつきり子細も有る事と半ば占つて居たが果たして違はぬ、是は餘程の大事件だと額を集めて談合し始めた、幾分か木村をこはく思ふと見えて。

行つて相手の肚の中を聞く迄は隨分と混む苦勞。最初木村の口ぶりの乙に此方に世辭を言ふとて買ひかぶつて又大きに考へ、段段と打ち解けられて且はあやしみ、最後に本當のわる企、つまり手着かずに其血の出るやうな大事の金をわが物にする肩に乘れと臆面も無く言ひ出された時は驚きもする、嬉しくも有る、不思議でも有る、夢のやうでもある、五味でたませの心もちで、返辭も急には口を出ず、しけじけと相手に、而も笑ひ顏を以て見詰められてやうやくに心付く。——

「さうですな」、

とは言つた物の跡は出ず、舌の根の邊がむづ痒く爲るのは分かるものの、扨どうとも自由に爲らず、案外に肝の小さな奴だと相手に見透かされる種を作つて。

笑つて一方は竹槍のやたら突き、
「御不同意ならば仕方は…………」と唯それ丈聞いたところで此方は胸にひやりと來る。例の俚諺づくしの臺詞が藥にも出さうも無し。流石に、しかし、肝もすわる――實は是から坐りかける。――
「不同意といふ程の事でもな…」
何の言葉を濁す初心な男と相手はいよいよ見くびるだけ、此奴どうでも自由になると、いよいよますます乘つても來る。屹と爲つて膝立て直し、
「しかとした御返辭を伺ひたうムいます。」
これも一所に腹の中では、「法律を知らぬ奴あ不愍だ！」
惡事の纒まる程善事が整ふから世間に道德の講義ハ要らず、何を言つて依怙地な法則、惡人の惡善人の善より目に立つ世とて、從つて又惡人の惡善人の善よりは俗に好まれ、逐ひつ、くゞりつ大修羅場。縋る枝は折れやすし、賴む木蔭ハ漏りやすし、紙屑を丸めて格子の內から外へ投げて、ほとんど無心にすれば巧く飛び拔け、いざ巧く飛び拔かせやうと賭でもしたらばそもそも最期、どうしても旨くは行きかねる、是が必らずさうといふ理は毛頭微塵も無いながら、そこが人間の邪推とやらそのやうにも亦思はるれ樣。悲しく、果敢無く賴みがたく、凄く、恐ろしいのは阿靜に取て唯この浮世、ただ其分子の人

であつた。

どういふ咄しの相談にしたか、其邊の天機は秘密で分からぬもの、恐ろしく混み入つた工夫を木村と喜藤との兩人が纏めたとは軈ておやといふ目に逢つて仕舞つた處で始めて阿靜母子も氣が付いた。事の處置を阿靜が木村に賴んだ後ち凡そ四日計り過ぎた處で、やがて木村から來た手紙、何事かと封を切り、節を掛けて兼太郞が讀んで見れば色色委しい咄しも有るから今日夕景迄に御二人で拙宅へ御出で下さいとの文面、扨は彼の咄しだと胸も躍り、支度もそこそこ母子一所に連れ立つて行つて見れば、氣の毒な！いろいろの大御馳走。此頃食客半分の身と爲つて頗る下卑て來た目に映る金とんの黃金、蒲鉾の白銀、鬼売焼きの色は紅、海坊布の髯は綠、早くはしる津液に十分がもの八九分は木村を有りがたく思ふほどの世話無しぞろひ、肝心の咄しハそつち退け、いただかずに早く澄まして歸るゝ損だと、やがて勸められる儘に取り上げる杉箸、さつくりと割いたそのこころよさ。

阿靜も兼太郞もいくらかは成る口とて猪口をさし付けられれば辿もいなめず、えへへん笑ひで受け取つてくだらぬ駄洒落にきやつきやつと騷ぐを、木村ははいはい嬉しい鹽梅、暴事師に似合はぬ世辭上手が切り賃も取らずに上價に駄洒落を買つて遣り、前後忘却させての獻酬三昧、果ては盛りつぶさぬ斗りにして、御茶一服と爲つたところで改まつて相談と爲つた。

が、もう何を言つても駄目。愛嬌たつぷりと口前うまく何だとかかんだとか說き付けられて無茶苦茶

に唯夢をたゞつて好し好しと承知して仕舞ふ。證書と言つて差し付けられて忽ちに調印と爲つたとは！其相談の趣きと言ふは外でも無し、つまりは預り人の名義を變へただけ。實は私の手許が少少不都合ゆゑ此方へ貸して貰ひたい、是迄の御懇意づく、決して喜藤が爲たやうな不深切は行はず、其上に利も好くし、御二人に下女を付け、そこで安樂に暮らさせますと棚から牡丹餅の落る樣な言ひ草であつた。

一つは醉つても居る、一つは慾にもくらむ、又一つは御馳走一度で深く木村を善く思ふ、それら三方四方に煽動されて、それだけの勝手な證書におめおめと調印したのであつた。

無殘阿靜母子のものは木村の手の内に丸められて證書――而も印紙さへ無い假證書に――捺印をさへ爲た始末。つまらぬ世辭上手に浮かれ込んで世は助ける神の多いと計り思ふかの塩梅、勸められる儘に其夜は木村の家へ泊り、翌る朝喜藤の方へ立ち戻る顏付きも常よりもいとゞ大きく、肩で風を剪るいきほひ。元より打ち合はせの有る魂膽、馬鹿めと心で喜藤夫婦に冷笑される、そこらは別に心も付かず、吾ひとり賢者ぶる其哀れさ。

事の始末は瞬く間に木村から喜藤の方へ電話が掛かり、其夜の内に當金千圓それだけを木村が喜藤から受け取つて、殘餘は喜藤の所有と爲つた敏捷さ。

その足でか、又出直して來たものか、忽然として木村が喜藤方へ尋ねて來て、近所の寄席に面白い手品が有るから今すぐ是から行かうぢや無いかと阿靜母子を煽動した。

すぐだ、時間が後れると闇雲に急かせられて取る物も取りあへず、呑氣に爲つて母子揃つて喜藤一家を尻目に掛け、大威張で出掛けた。寄席の前まで行つて見ると、木村が評判した手品は無し、おやと木村も大きにしよげて面目無さそうに頭を掻き、まづ運なほしと名を附けて道傍の鰻屋へ上り込めば、蒲燒の匂ひは鼻を貫く、寄席の御わびは最う出來た。

醉ひつぶれて家へ歸り、翌る朝まで死人と爲つてやがて目を覺まして見れば客間の方に木村の聲。便所をかこつけに側をとほつて話しの樣子を聞き定めれば、すはや要用、いよいよ、全權大使が談判着手。例の勇ましい代言口調で、預け金を返してくれろ、其代り此後は拙者に於て阿靜樣御親子二人は引き取り、充分に保護して行くとの序びらき。聞く身も動く斗りの嬉しさ。下女が來るので割愛し、其處を立ち去つて吾部屋へもどつても胸の動悸は靜まらず、嘸や喜藤が驚いたらうと夫ばかりが小氣味よくて堪らず、手眞似や身ぶり聲を潛ませ、兼太郎と咄して共にこにこ。

その内に下女が來て一寸御二人に入らつしやつてと客間へ連れて行かれた處で、すはと胸は又動搖めく、母子二人つれ立つて、客間へづつと入り乍ら木村と顏を見合はせれば、堪へるつもりの笑ひ顏が矢張り堪らず直にも出る、坐に着いて喜藤を見れば極はめて苦苦しい顏つき。

これこれいふ譯で厶いますと白ばくれて木村が言ふのを此方も白ばくれて聞く、その嬉しさ快よさは

ほとんど比べる物も無し、「どうも折角御馴染み申しましたが…」と今更さも殘念さうに言ふ喜藤の顏を穴の明くほど眺めた丈でも命は兎角延びるらしい。　御坐形の世辭も言はず、すぐに承知したと挨拶すれば、そんならば一時も早くと木村は其儘喜藤を辭し、送つて出る阿靜母子と顏見合はせて妙に笑ひ、いそいそとして歸つた。

もう早重荷も下りた鹽梅。直に坐敷へ立ちもどつて母子は色も艶も無く手まはりの荷ごしらへに其夜のやがて更けるも思はず、それにしても大事なものと其序に手函を開いて木村から受け取つた證書を見やうとすれば、是はいかに影も無い、扨は置きわすれたかと尋ねるついで、思ひ付いて以前喜藤への預け證書を取り出して見やうとすれば、是さへいつか無くなつて居た。

さすがに大事の證書の紛失、阿靜母子も蒼く爲り、血眼で噪ぎ出して、見當らぬ儘に樣樣うたがふ、一圖にそれと目星を付ける。外から何も這入らぬに紛失する所以は無し、是は何でも泥坊は家の内に居る事だと四邊かまはず聞えよがし、泣き聲立てて阿靜の言ふ聲、終には阿玉の耳にも入つて、山のやうに座敷一杯取り散らした所へ出て來た。

子細を聞いて目を睜る。何の己れがとぼけると憎さ搔きむしりも爲たい程。で、口の儘の當り障り、

「證文に羽でも生へてたんだ。　ひとりでに頭の黑え鼠の懷中へ入つたんだ。」

尻目にぎろり睨まれて阿玉もぐつと胸に來た體。此方は猶も二度の驅け。

「物騒な家ださあ。誰、ほかに取る奴が有るもんか」と。

阿玉も是では屹と爲る、言葉尻に取つても掛かる。——

「誰、ほかにたあをかしいね。誰たあ誰の事で厶いますかね。」

「どつか其處邊に居るだんべよ。」

相槌を打つ兼太郞。——

「盜人あ武武しいからね。」

「盜人てへもなあ一體にむかしの恩も何も知らねえだ。主人を困らせて、へん、三尺高えとこで御處置に爲らうかと思つて。見やがれ今に罰い中ててやる。木村さんに賴みや商賣がらだ、どいつが盜んだかあ一目で睨んで仕舞はあ、馬鹿な。」

聞き過ぐし兼ねた體。「もし」と一言凛凛しく狹んで阿玉は目に稜を立て、

「何…何よ言ひなさる？こりや默まつちや居られねえ。何だか人をあてつこするが、おや御前さん等あ私等が取りでもしたかと思はつしやるね。」

せせら笑つて、

「へへへへん？」と阿靜。

兼太郞と顏見合はせて又二度ばかりせせら笑ふ。それをしけドけ睨みつけて阿玉はいくらか淚含む、

「これッ」と鋭くつめ寄つて、「せせら笑ふたあ――いや外の事たあ違ひまさ。ぬす人呼はり明りさ立てないぢや…」

「だれがいつ盗人よばはりした?」と揚げ足を取る兼太郎。

「今言つたさ」と睨める阿玉。

「御前を盗人たあ言はねえよ。無えから無えと云つた丈だ。無えからにや取られたに違へ無え。また左樣だ有んめゐか。御前が泥坊だと爪の垢ほども…」

「うんにや待ちあせ」と搖頭をふつて、「逃げたつてそりやいけね。剛氣と御前さん方あ家のものを疑ぐりなさるから默られね。疑ぐるなる大きく疑ぐれ。」

「何…何だと?」

「當つこすりなんぞ活地の無え事をしずに、訴人するなら訴人しな。」

「訴人しなも無えもんだ。」

「盗人てへもなあむかしの恩を忘れるたあ何ういふ譯なのかね? もし、阿靜さん、兼太郎さん、主人に困らせて三尺高ゐ御處置たあ、もし、當つこすりで無くつて何ですかね。憚んながら昔やむかし今あ今、落魄て人の竈戸まはりませんよ。馬鹿にしあさるな、是でも今は一家の主人の女房で厶いまさ。千や二千の目くされ金、貧乏垢のくつついてる端金を誰が取らうなんぞと、人馬

鹿な！　それともたしかな證據が有つて私等が盗んだてへのかね。　さうなら左樣で聞きましやうよ。」

一段聲をあらためて、

「證據が有るなら見ましやうよ。」

第十一

證據と言はれて行き詰まり、藪に眞鍬を言ひ出す處へごたごたの騒ぎを聞き附けて常時も亦遣つて來る。油紙に火が點いてべらべらと焚き附ける阿玉の言葉、もう義理も見得も入らぬと思へば、さうかさうかと取り上げて阿靜母子を其處へ据ゑて、やれ濡衣だとか寃罪だとか、それにはそれで角を立て、證據の無いといふのを根に取つてこづき回す斗りの突つかかり。鼻つ張りの強いばかりで、もともと理窟の言へぬ母子口惜しさは骨身に透るが言ひ通せず、呑氣な兼太郎はまだ兎も角も、阿靜に取つては必死の苦しみ、身も世もあられなくなつた。

するすると横の窓が開く。くすくすと云ふ笑ひ聲がたちまち耳にも入つた處で、やがて何心無くふりかへると、殘念これは又何たる事！　阿世穗めが下女めと一所に窓の向ふから透き見をして此方を見てにやりにやり。　下女め、畜生め鰻めしくらつた恩も思はずに――罰あたりめ、憎みは優る。

から迄馬鹿にされるかといとど又口惜しくなれば目も眩む。口も勝手次第になる――今まではまだ謹

しんで居た分。

「人を理窟で込めやがつたつて、」

と言つて吾とわが聲の泣き聲に爲つたに殆どはじめて心づく、「恩知らずの畜生めら、今に見ろ、おぼえてやがれ。　木村さん連れて來て白いか黑いか分けてやる！　ええ、くやしいや、口惜しいやい。」

身をふるはせて叫ぶ其口、流石兼太郎も見るに見かね、差し寄つて押さへるのをふりもぎつて又惡口。表には早もう人の黑山。今や巡査も來さうな鹽梅。

がらりと外の格子の音。　すはと胸をうつたらしい阿玉の顏もたちまち其人を見るに迨んでまた活き返つたらしい工合ひ。その人といふは木村であつた。

「おお木村さん」、と飛び立つたぎり、阿靜は泣いて物も言へず。早く口を開いたのは例の阿玉で、一方は阿靜を睨み付け、一方は木村に笑ひ顏。これこれだと咄し出せば、阿靜も默つて聞いては居られず、是も自分の言ひたい事、右左りから並べ立てれば、其果ては聲で勝たうといづれも其方では引けぬ双方、聞く身の耳は拔けるかの樣。　何が何やら更に分からず、さり乍ら仲裁にも慣れた人間、木村はぐつと呑み込んで阿玉夫婦に何やら目くばせ、阿靜さんの方がどちらかと言ふと御尤も、證據が有らうが無からうがつひ吃驚したもんで向に爲つても言ひなさつた事、是は仕方の無いと考へて阿玉さんの方に於て

も怒りなさらぬが宜しいと何方かと言へば片方贔負。向ふは打ち合はせが有るゆゑ怒りもせず、こちらだけは奉つられて哀れにも直に得意と爲る。涙もやがて乾く姿、猛惡な目から見てむしろ内心笑ふ斗りで微塵ほども哀れと思はず、只おだてれば乘ると知つて只ならば聞き捨てにもならぬばかりの白白しい世辭、

「併し御たのしみで厶い升、かうして兼太郎さんが若いに似合はず御大人しくつて御利口でゐらつしやいますもの。」

言つて、阿靜の氣の付かぬ間、木村はふつと阿世穗と目と目。たまりかねて窓の障子を阿世穗がばたりと〆め切る音。同時下へころげたふれてくつくと笑ひを呑み込む樣子。

口惜しくて堪らず、阿靜は獨りでやつさもつさ、うぢうぢする兼太郎を憎くは無いが叱り飛ばして、もう早こんな否な家一時も居るものかと荷ごしらへも殆どそこそこ。縛らずに手文庫を小脇にかかへ、がらがらと抽斗を拔け出させ中の按摩膏即効紙、烟草入の古緒〆、乃至何だか得知れぬ紙包、ごたごたの物をそこらへ撒き散らして、而も隙見する阿世穗にくつくと笑はれて益益怒る。白烟を天窓の明地から噴き上げさせ、汗水に爲つての取り片付け。　告別の挨拶もほんの是只儀式一片、あの姿は何うだらう、啞が辛子に咽せた樣だと跡で喜藤一家に言はれる種をつくつて、立つ鳥美事に跡をも濁す。今に於て灘の遠山、ほんの命の綱と賴む木村の家へ到り着いて、餘憤の晴れぬ語氣も鋭く、斯う斯うだとの洗

ひざらひ。

すると案外な木村の體！

今までとは打つて變はつた冷淡、是是と譯をくはしく、慰められたさに咄しても牛の角に蚊が止まつた位にしか感せず、へえ左様ですか位で受けるばかり。

變だなと氣が付いて覺束無い目で様子を見るにつれて何となく變にも見える。約束のとほりちやんと宛がひ扶持をしてくれるかと試ろみに聞いて見ると、「それは無論」とそれだけは判然たしかに答へた。

では變でも無かつたのかと吾と吾目の不明を笑つて、其夜は安心してそこに泊り、其次の日も無事で過ぐし、やがて第三日目と爲つた處で木村は朝出て歸つて來て、いい貸家が有るから約束して來た、そこへ御出でなさいと火急の命令。

行つて見ると稍失望。家といふは二疊に六疊の小さな住まひ、蟻の手掌ほどの庭に物あはれな夏菊が瘦せこけて生へて居た。

ちと狹いと云ひかけると、木村は些し目を怒らせ、「だつてたつた御二人でしやう。下女を置いた處が三人ぐらし」と一口に言ひ消した。

我慢して入る。その月の手當は約束どほりに來たものの、次の月からはぱつたりとまる。度度催促し

たところでやうやう刻み金で二三圓。食ひかせぎしてやらうと阿靜や兼太郎が交代して木村の家へ押しかけると、午砲の音は聞こえても、腹は減らぬか、木村は一向氣の付かぬ顏、知らぬ顏。

次の月あたりからは其二三圓宛の刻み金さへふつつりと絕へて仕舞ふ。阿靜は大方半狂亂。かと言つて自分の方に證書は無し、よし有つた處が荒立てる塲合ひで無いと思えば、足を近く口說き寄つて、果ては怒鳴りつけられた。

癪にさはる事も目に入る——喜藤とは絕交しますと一時は大に公言した木村が今も之と交際すると見えて、阿靜には見覺えの有る常時の常用燒き臺の日和下駄が折り折り木村の家の靴ぬぎにちやんと揃へてあつた。

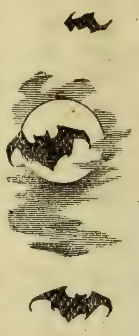
今日も滯り金の催促に行つたところで、木村が留守をつかはうとし、使ひそこなつて阿靜に見付かり、阿靜も大に氣をわるくし、やや荒く談判すると、木村は以ての外といふ體で、にくらしい事を言つた趣き。すごすごと歸宅して溜め淚を阿靜はみなぎらせて居た。

けれど捗捗しく相談に乗るやうな兼太郎でも無し、つひそれ母も腹が立つ。賣言葉に買言葉で怒りを移す八つあたり。　壁一重の隣の棚から洋盥が落ちるどたばた騷ぎも始まつて、親子恥ぢをさらし合ふ大世話塲。

死んでしまふと狂ふ阿靜も仲裁になだめられて靜まれば、驅け出しかけた兼太郎も同じく亦踏みとゞ

まる。でも扨何と言つても母子、翌日となれば交情もおはつて、諄諄として木村や喜藤の評もはじまる。と、言つて斷行の手段も無し、いたづらに母子喧嘩の名殘を殘して、餘所目にも哀れ極まるのは顏や手足のみみずばれ！

（をはり）



◉曙の春

花ぐもりとか言ふ空、花香るとか言ふ風。　高殿から見わたせば、まこと慈鎮の和尚の言葉もおもひ出される。　更け行く月を惜しんで、鞦韆は無くも、影のままに影を移す夜をあはれと見たのも、曙のこの美くしさを忘れ果てて居たからであらう。　優美！　春の精が優美か、優美が春の精か？　むしろわれわれの汚れた軀も――梅の香に染まる墻の桃――心から洗はれて、むしろわれわれが昨日まで徒らに天に抱いたおどけ無い怨みも、むしろ今は跡を潛めて、この自然の美を分解する目を、それでも、與へられた、その嬉しさに――肉はたをやかな風にやはらか、そして心もうららかな天氣におだやか。「今日見ずば明日は雪とぞ……」、花ををしんで筆に寄する才はむかしの人に及ばずとも花を惜しんで夜半の嵐を妬む情はどうして譲らう。　朝開――ただ清いと言つて充分か。人の孃が摘んだばかりで持つ

て來た菜、取り上げてみづから駒鳥にやるその嬉しさ。身ぶるひをして、咽喉――銀の鈴を振る咽喉――をふくらし、愛らしい口を一杯に開いて、此方を稱へるやうな姿の愛らしさ。出來ることなら手をさしいれてその頭やその羽翼を撫でてもやりたいばかり。

人もおなじ心か、朝起きたまま手馴らしの須磨琴をさらさらとさせて居る。庭づたひに池の水をすべつて來るその響き、風を受けぬ松はさぞかし怨みもしやう。綾をかんだ春雨がまだわづかに上つたばかりのところ、水際の若草はいづれも身の長をくらべて、袖に白玉をつづつて居る。濡れ果てて猫の足痕にも――ああ春――花をとどめる土の間。早落ちた桃が波のまにまにおだやかに浮いて居る岸の石の水。魚の肩のあたたかになるのも早五日六日。いざ晴れたらば鳩の音もしやう、それを聞くのもまた樂しみ。

昨夜までの厚着がにはかに薄くなつた心地のよさ。肌の味もわが身づから何處となく膩いてなめらかです。昨夜臥床に入るとき脱いだ肌着、それもその儘腕にとはらず、今朝は一つ綿いれのしどけ無さ。人には會はれぬ姿、去かし閑に我の外には春よりほかの相手の無い時には中中の心たのしさ。香水のかをりは花ですでに十分。別に香を求めては焚く煉香。大内と打つた銘――ならば此處は吉野の行宮か。美くしい隣りの少年が――それも正行の面影――金泥塗骨の扇をかざしに來るのも床しく見える。

人をはなれて身を天地とし、更に身を脱して身を春と見ても、亦身を春の人としてもあじはいは千萬無量。　ああ春！萬物の母、慈善の姫、むごたらしい冬の怒りを和らげて、あどけなく、愛敬づいて池と共に閉ぢた胸の氷も解く力のありがたさ。　清らかな瑠璃の空にたなびいて居る紫の雲、その雲に薄紅の肌のままやはらかい腰を掛けて、わらつて下界を流目に見る想像の天女。とても思つたらはじめて春の姿が會得されやうか。　春三月、日數九十日、曙の春、夜半の春、およびまた晝の春。　しかし、美くしさは暮れの春に名譽をとどめて、そして婉しさは曙の春が女王です。　いたましさ、おだやかさ、うららかさ、清さ、いづれも皆美くしさの本。しかし、ことさらに撰めば、清さにまさるものが有らうか。

我れに何の徳が有つて、われに何の靈が有つて、この美くしい天地に身を置くことが出來るのかと、仰いで天を望めば天は無心、俯して地を見れば地は無心、横さまに森羅萬象に問へば森羅萬象も無心！

茫漠として限の無い宇宙にいつか空蟬の身は露と消えるこの我のはかなさ、そのはかないものに賜はる天の「美」、これを尊い道理の惠と言つても、ゑかし足らぬのは感謝の言葉。　趣を更へてやがては夏も、秋も、冬も來るとは——まこと、更に思ひかへせば、ああ、人間！宇宙の粋を見るための人間！

◉月花見立て

その一　有明の月。　對は　寒梅。

「何をしのぶとおけれども」と喞ち、また「よしのの里の雪」とたとへたその昔しもすべて淸い中に冴えた處を持つ心であらう。おのづから立ち超えた風情はたふといものの、しかし哀れをむかへる身に染みとほる味はいづれ劣らぬながめです。

その二　夕月。　對は　白蓮。

氣高い氣はひ、しかし淋しい風情。晝の間の埃、嫩風の塵、受けても受けぬさまのしほらしさ。茂林にかへる鴉を惜しさうに見送る處、やや潛む小鯉の鰭にわずかふるへる體いづれも無常、はかなさ、しづけさを含んだ一對。

その三　かたわれ月。　對は　柳の花。

「滿村疑得楊花雪。啼鳥聲寒昧爽風」。寒氣なのが柳の花のおもむきか、まこと肌にくるしい姿。しかし、どことなく、おのづから自分だけに足りたところが有る體、美くしさは鏡に及ばぬながら猶横櫛の銀泥をあらはし、あでやかさは梨に劣りながら猶白金の光りを凝らして居る。

その四　落月。　對は　白菊。

山をふくむさま灯燈の消えかかつたのと同じくをさまり初めた光が更にしばらく蘇るかのやう。霜

に殘る姿は斷えかかつた焚物と同じく、自然のかをりがかすかに糸筋を引いて居る。あはれよりはむしろ撓まぬ、おとろへぬ風情が目につくばかり。常闇も扣へてまだ山の端を襲はず、冬もためらつて猶園の中に侵しては入らず。

◉紅墻記

梅を見ての歸りみち、浮動する暗香のかはりに物思ひの種に爲る伽羅のかをり。ああ君が裏鼠の蝙蝠に照りあへぬ日を人の目もろともに逃げて樹陰に休はれた風情を、人は見ずとも戀ひにやつれはてた身の目に止まらずに居やうか。今のわが目にもさしぬけた君の領鬪が後毛をほろつかせた體がありありと見えるものを。ああ君、かへり去つた紅墻の蔭、白薔薇が春に蕾の夢をも今やぶる體見れば君の此後の世界も推しはかられて。ああ君の行く人は月の桂男、齊眉の契り色は褪めず、夫に塗られたものあらば白玉の乳房の下蔭に殘る守宮の血色もむしろ血黒子とあつて夫の名をあらはせ！　それまでの君の此後、ああ天、天の美の幸福はただ君一人にとどまつて、及びもつかぬ傍觀の身がさても恨めしい。まこと春三月桃の夭夭、この子ここに歸いで王母が仙家の昔を繼ぐ事。ああ世界の男子、また女子、君が花の殿の校舍に得た名譽の見本を試みに問へば宇宙ただ月も美、また花も美、男女ここに無限の怨みを懷けば春といふ名もああああ物思ひの種。

◉夏の初め人を懐ひおこして

やや肌心地のいい南風。待つばかりの杜鵑、愛らしい春は何處に痕を潜めたか、今只夜は薫らぬ月のみを掛けて、白の玉簾に緑を彩るさはやかさ。池の幼いものも時を得て雨孕む空に雀躍すれば芽生の浮草もほのかに足を浮かせる。無水月の乾蒸はまだへだてる夢一結び。濕ふ嫌風にうるほふ土の間。わが道筋に銀を殘す、をとなしい蝸牛のかよわい力を助ければ苔も銀糸も縫取りした褥となつて、散り布いた花にはかない宿を貸せる。ああ夏の初め？春とはまた趣を似せさせて違へた風情、つたない口には言ひ盡くされず、言ひ盡くすべき人はと問へば、昔し共に折つた若楓ばかりがその俤として仄に風に囁いて居る。

◉頼朝の墓

「ますらをや空しかるべきよろづ代にかたり繼ぐべき名はたたずして。」さても阿房の煙が雄圖の名殘り、果ては香魂を劍の影に飛ばせるばかりか？

今たづねて來て見れば、星月夜鎌倉山には草一面、君が雨露の恩に浴してなびかぬ風は無いと云つた、昔の跡はそもそもいづこ？朱ぬりの社、四十間四面の廻廊、むかし居並んだ侍どもの貔貅數百、萬馬吶喊の號令に皺嗄れた咽喉の唱歌に鞍坪を叩いて節くれ立つた手の鼓、鶴が岡八幡の社頭に吉野山の殘んの櫻をへし打つて來て世は靜御前とはさても奸雄！もとは唐棣の蔭に生へた枝、それながら權

威の嵐に吹きたしなめて。而も六十餘州に覇業をただ三寸の掌に握りつめ、終に蕭牆の禍を思はず。社頭の石段には今も血にまがふ葉末の露をしたたらして、荒法師の潜んだ銀杏の樹が影くらく千秋の無念を籠めて居るやうな。あゝこゝで公曉が嫉みの刄、目釘を嚙んで三世の榮華の根を絕つたか？　社頭の篝火花を散らして突きゑぐつた呻り聲は永眠の耳に入らなかつたものか？　七百年の今月今日、はか無いものは世の成り行き、昔ながらの物とては梢を拂ふ松の風と由比が濱邊に打つ浪の音ばかり。八町四方の御殿の跡は足を植ゑた畑と爲り果てて、あゝこの土の中のどれかが曾て大頭の足にも觸れたか知らず、其墓はと問へばそもそも浮世、山ふところに殘る五輪が名殘り、苔さびて山の露常にうるほふ、そもそもこの下に爾來七百年間の覇業が埋つて居る事かと思ふと言ふのも夢心地。墓の邊の青木の色は綠、椿の花の春はくれなゐ、槇の大木の陰は闇黑、それら木木はいつまでか何を守護する氣か？

さらでだに　命　は　脆き　もの　と　聞く。
その　時めきし　かげ　も　無き
世　こそ　ひとしは　つれなけれ
いは　を　も　裂きし　もののふ　の
こぶし　も　いま　は　いは　の　かげ、

ふみにおりたる　あをくさ　も
いま　は　かしら　の　うへ　に　生ふ。
涙　の　音　ばかり　むかし　にて。
月　は　今日　まで　まどか　なり。

◉雪　折　竹（利久と太閤）

第　一

「おのれ、やれ、奇怪、奇怪！　いやぢやとは大膽不敵、寵遇にほこる我儘三昧！　天下日本の殿下の旨にさからつたとは己れ、やれ！」　茶室をひかへた端近の十二疊ばかりの小座敷の中、紫の厚裀に片膝立てながら目を睜り、吠えるやうな聲で叫んだ在郷ざむらひ、今は一天を四寸か三寸の掌の中に握りつめて、山も碎き、海もふさぐ、勢ひに於いては誰とて面前に立つ者の無いと吾も自身に許して居る元の藤吉渾名に呼ばれた猿面冠者、今あがめ奉られる太閤殿下。　四海八荒殿下の名前に感服されて生殺與奪の一切自由、重い物を宙で手放しにしてそれから地上へ落ちる、それら天理の自由にならぬのが今は忌忌しい抔と夫から夫とさがし出しての大廣言。　驕るもの久しからず、但し「驕らぬ者亦久しからず」と何處までも捻くれて宇宙を芥子粒の中の微分子ほどとも思はず、そのくせ流石に取り締りも有つて、其我意を走り過ぎて全く兇暴を見られるやうには働かず、世界はここで傾いて必らず向ふで平均するとの道理をいつか五十年間經驗の母に敎へられ、一方をいぢめてぐつと一呼咽喉をつかむ下から一方の繩をば解き、是に怨まれて彼に喜ばせ、巧にすり拔け辷り拔けて正を負で消し、負を正で拭ひ、かしこくも九重の深遠な處をば社稷の看板是でムいと唯崇めて見せ付ける丈にして、六十餘州足を伸べ

ても屆かぬ隈なく、深閨の蘭若の香の中、枕にする美人の膝頭も何のこんな物、富士の山ぐらゐな物だらうよ！　身は五尺但し伸ばせば何萬方里。一滴の油を水に落として何間四方にひろがりわたる、それ見たらば秀吉をも想像しろ。　八重潮の風に吹れて磯松の新芽がもし曲ぬるものならば、思ひ知れ、秀吉の一呵に遇つて泰山も土砂になるぞと。　それ、それ程の此身分。身分といふも勿體無い、これ、是程の大閤殿下にあへてさからふといふ愚昧な俗物、利久の大言どこから出た音か？

名ばかりながら牛を桃林の野に放つ狀況、天下やうやう治まつて弓は袋に太刀は鞘、春は今年も立ち返つて、京洛の花の色に人心もおのおの浮き立ち、駒をうたせ、駕をかかせて都は何處も櫻狩。いざや人間何が風流、おれも冥途への一つの土產、一度は風流に指をも染めたと言へるため、風流とやらんやつて見やうと魚まじりの關白の俄優美、黑谷の名花の中をしづかに打たせて、警蹕の聲をさをさいかめしく威風は有情の人間の花、觀覽の明眸皓齒をも駭かして、むしろ肝心の花の見方は先へ飛ぶ虫類の蝴蝶に敎へられるばかりの行列、やがて行く途中でいよいよ麗人におどろかされて、春は英雄の胸にも催した。　路を逃げそこなひ、おそるおそる路ばたに平伏して、流石に羞を含んだ顏、偸むやうな秋波で此方を見て居た一人の美人、やつやつしい伴をつれたものの心にくい程な着物の好み。紫地に雪より白く花鳥風月の四字を拔き上げた鹽梅――無殘や刄物の無い人ごろし。　何ものと聞かせれば何の殿下が常から寵遇尋常でない茶道千利久の實のいとし子、曾て百舌屋といふ商家へ嫁いて、夫に早く死別れ、

まだ妙齢の半開の蕾の花、惜しくも今は空閨を守る身の上との事。　妙至極、さても淀にも劣らぬ國色、差し支へ無くて極めてよし、幸ひに身の側室に出せ、利久承知してくれと十分が十分の成功をあらかじめ測つて頼み込んで、やがて使臣がもたらした返音、聞けば案外不敵な挨拶、言葉の飾りの花は有つても、むしり取つて眞を採れば「利久、不義の榮華榮曜は死ぬよりもいやでおぢやる」といふ事。

斜ならず常から寵愛して居る利久が恩を恩とも更に思はず、一たまりも無く殿下の命を蹴かへして空吹く風と聞き澄ましたこと、實は流石の大閤の身に取つても殆ど一切が意外に出て、しばらくは兎角の思慮も付かぬくらゐ。　何故だらうと考へはじめたものの、例のくせとて碌碌人とも談合せず、其日の暮れを待ちかねて一人同じ座敷にごろごろして、時時は心氣活動すると見え、手近にある小刀を握りつめることさへ有つた。

人間の身に取つて生れ落ちてから死に果てる迄慾といふ物がそもそも命脈であるものの、烈しい功名名譽の念には時として其慾の故さらに殺がれて仕舞ふ事も有り。功名名譽を得たいと望む、これ素より慾に違ひ無し、が、時としては此念が他のあり來りの看板掛けて所謂慾と名唱る其慾を壓倒することの無くも無し、ひとはトき鼻頭を彈かれて大閤もこの一人となつた。　肱鐵砲を食はされて、腹も立つ、忌忌しくも有る、畜生、利久め恩知らずと例の金壺眼に時ならぬ稻妻をきらめかして切齒をして噪ぎ出した、その原因はそもそも何?　如何さま利久の娘は不思議の美人、貴妃も小町も物數とせぬ容色で、

その色に大閤が迷ひ出し駄駄つ子の飴菓子同樣、じだんだ蹈み出したにも所以は全く無くも無し。それで彈かれて怒り出した、その怒り出したのはむしろ本意不通の點よりは見下げられたと思へばこそ。權威能力具はり盡くし一切に自由の利く瀨戶際に立つて案外な物に案外出遇へば、折角の地位功名がそれで挫けるかと思ふ煩惱、その煩惱に煽動されてむしろ其目的とした物を得ぬよりも唯其方に向かつてくやしがり出すのが世の中。千丈の松を叩きくぢく天狗風、却つて岩陰の艶欵冬は倒し得ず、鶴ケ岡の虎狼の中に却つてかよわい人は立つがその例、これを鯁直の極と言はば言ふもの、一方の身に取つて少なからぬ不愉快は得て多くもよはすもの。

今海內を一定して威武を一身に背負て立ち、關白とやら、殿下とやら、好放題の名目を振りまはして存分に爲盡くして居る場合ひ、何の凡人の利久風情、それに一いぢめ食はされただけ、はかない身のものに遣られただけ、いとどいとど鼻ばしらも曲る鹽梅。と思へば心火も亢動して、ともすれば其の六十餘州に伸びる身が妄想一片の黑布の中に絞め絞めて絞められた。思へば思へば器量のわるさ——御歸りものの、相手は、後家、後家でもいいから側室に出せと、さてさて思へばこの時から威光は二分とはりくだけた譯。で、成功したなら知らぬ事。物の美事に抛げ飛ばされて、しかも相手は風、疎竹にわたつて竹聲を留めず、否ぢやと堅くはねつけて、早く澄まして何處を風と！ 骨髓に食ひ入る無念。血肉をみりつかせる心外。あはれ功名經營に齷齪として居る策士の不慜さ。これら一片のはかない

事も或は威武の邪魔かと思はれ、反働の一念は甚しく胸の中に燃え出した。　「やはか其儘にさし置かうか、不敵もの！」くりかへして咳く此一句に大小千萬の苦痛を籠め、また沈思して無殘な妄念、小姓を呼んで、

「うさ晴らしぢや、淀をこれへ呼べと申せ！」

第　二

程もなく女の童二人ばかり輕く具し、召しに因つて主君の御座まで淀君が伺候した。　水際の立つた何さま美人、身體のこしらへは全體に大柄で、並べて置いて見た處、痩せ細つた大閤と殆ど不釣り合ひらしく思はれるばかりの樣子。　今までの苦虫に引きかへて、淀君の伺候するのを見るよりも一方の顏色は忽ちの間に和らいて、そこに平伏する相手をしばしば麾き、「いつもいつも同ト事ぢや。　殊には今宵は晴れがましい席でも無いに、打ち解けて近う進め」とばかり。　なにと無く凄味の有る淀君の目ざし、其目ざして俯向きながら微笑を含み、かるく主君をじろりと瞻てやがて禮して進み出れば、心得て早くも小姓が差し出す儀式ばかりの菓子の臺、それを太閤はしげしげ眺ながら、「小姓ども人は遠いか？」と氣遣はしさうな言葉。「次ぎ次ぎに加へさせて候ふ四人五人」。——「誰ぢや？」——「堀尾、淺野、それに道葊……」

半ば言ひかけたのを屹と食ひとめ、

「道斧とか？」と不審顏。

御意のとほりと挨拶すれば、更にまた思ひかねた體

「茶道の道斧が、利久の子の？」

「なかなか、仰の儘で御ぢやる。」

はなはだしく胸にこたへた樣子、そのまま無言で太閤はしばらくの間下を向いたままの舌舐づり、屹となつて頭をわけ、「遠ざけろ」との烈しい言葉、小姓の問ひかへす言葉も待たず、「いづれもぢや、皆のものを！」

辷り出て命令のままに取りはからひ、更に立ち戻つて來た小姓をも「立て」とばかりに嚴しく命じて是をも次の次の座敷に一人殘らず遠ざけた、それら始終の樣子の不思儀さ、最前から默然として見て居る淀君の胸中、さては何事か起こつた事と大抵は推測して、そして窃かにうかがへばおのづから殺氣を帶びた主君の顏いろ、善惡如何を料りかねて、ただ何氣なく默して居る內、やかて四邊に人氣も絕えて、もはや掛念もなくなれば、身を屈ませて太閤は今些し近く寄れと再び三たび淀を強ひ、

「卿に聞きたい事が有つて、かく忍びやかに問ひ質すぢや。近頃茶道の利久和尙、今の身の上について卿は兎角思ひ付いたる節とては御ぢやらぬか？」

言つてぢつと相手の顏、穴の開く程見つめる眼光、比へやうもないまでに極はめてするどく輝いた。

豪傑と言はれる人間、さりながら不思儀にまたいつも女性の助言を大事の時に聞き尋ねた。　草履取りから出世して今の身分まで經上つた、それ迄の粒粒辛苦も、何ぞ料らん、一切萬端、奥方の阿萬の方の保助誘導に多くは基いたといふ經歴が實は全く太閤をして婦人の助言は中中輕輕しく見做せぬといふ事を何となく思ひ付くやうにさせた。　それに加へて淀君の陰險な胸、才氣は以何にも限りのない、それに對していとど又平生から奪へぬ信用、いつも配下の人物の内情陰事は或は阿萬の方、或は淀君、これら兩女姓の口から傳達して兎に角太閤の耳にも入るのが平常で、もとよりその風説に多少の誤謬は有るものの、何しろこれを以て一種便利な下情を知る便とした。　流石に權勢をあらそふ餘り、阿萬の方と淀君との兩端に隱然立てわかれて睨み合ふ處の有り、髯面の五尺の武士が或は奥方の一味となり或は淀君の手下となり、その間隨分火水を揉んで居ること、それらを主君の身として太閤がよく知つて居たか居なかつたかは天氣あまり秘密で、そもそも明らさまに言ふ丈が野暮の方、兎に角に下情をばこれら閨秀を叩いて聞き馴れて居る事とて今もまたそれとなく利久の噂を淀の口から問ひ正す事となつた。

子細の無いに問ひ正し出すやうな主君でも無し、思ふに是には曰くの有る事、何か利久に面白からぬ處でも有り、それを見て今斯う問ひ尋ねられる事と思へば、一言の返辭もかるがるしく出來たものでもなし、淀君も當坐は默つて居た。　默つて俯向いて居る胸の中、もしも割つて見られたものならば又大變、凄まじい謀計が隱隱として蟠つて居て、あはれ利久の運命もこれからただ一轉うごき出す其愛らし

い舌の自由にほとほと任せてある鹽梅、その默然として居るのはむしろ主君をして好奇の心をいとど奨まさせる種であつた。

全體が利久といふ人間、なかなか一筋繩で行く性質でも無し、爲る事いつも目から鼻へ拔けて、大刀こそ取らね是とても亦戰國時代の一個の人物、度量宏くて事に屈せず、そのくせ又細い事にも行きわたつて、修羅の街の有りさまを一風變つて横目でにらみ、其方へ向く才略を茶や花の技術に當て嵌め、體裁のいい帮閑と爲り澄まし、交遊の廣いは驚くほどで、いつも大名の内部に立ち入り、隱然またおのづから彼是言ふ政治の上の出來事に關係して居るが常であつた。　で、自身に能も有り、徒らに目を眩まして人に媚びず、權勢に於ては頗る盛んな淀君に對してもいつも挨拶は通り一遍、その通り一遍がかねがね淀君の小癪にも障つて居た。　と言つて擠しいれる程の事もなし、あはよくば味方に付けても宜し、又無いものにしても宜しと思ふばかりにして過ぐして來た一二年、たちまち今尋ねられて流石に答へにまごついた。　但し素素こちらも才女、跡形の無い事を下手に言つて言ひ開きの出來ぬやうな大不間を仕出來す茫然肌でもなし、有る事を其儘告げてそれと悟らせるに得意な方。からして屹と考へ付けば兎も角も返答として申し上げる事も有り、其こたへの遲さに稍いらだつ太閤を思ふ坪と散散にはぐらかせ、やうやうにして口を切り、「聞き込みまいた事の無くもおりやらねど、さして聞ゆべき程の事でもおりやらぬ」と氣を持たせれば相手は乘り込み、「是非に及ばず聞いた事だけ其儘に御語りやれ」と信は早充分

もよほした語氣。　今はとばかりに物語り始めたのは蒲生氏郷と利久との間柄であつた。

既に大方は御承知の事、あの油斷のならぬ小冠者蒲生氏郷を御膝下ぢかくに置く時は元元凄まじい稀有の英才、どのやうな野心を起し、豐臣の天下を一呵して覆へさうと企み出さぬとも言はれぬとの殿下の御見込みからそれとなく恩賞に事寄せ、奥羽四十二萬石の大名に取り立てて體よく之を遠ざけた時、人は氏郷の大した出世を祝つて騷いだに似氣もなく、凄まじい男だけ有つて早くも殿下の御心察し、氏郷も奥州の田舍武士に爲つた以上は戰場に花花しく塵をふる事も爲らず終世の望みも全く是で盡き果てたと而も明月の影の下で歎息して居たとの噂。　その大氣の程は是でも分かるに、何事の緣が有つてか利久の佛顔しげしげ、之に出入りして、何の話しか深夜の密談「限りあれば吹かねど花は散るものを、心みじかきはるの山風」と暗に氏郷が殿下の處置を刺つたのを說き破らうとはつやつやせず、利久が之に返しをして「降ると見ばつもらぬさきに拂へかし、雪には折れぬ青柳の糸」とはそもそも何の不忠の譫言、これが實說であつた事あらば、言ふまでもなく利久はそれ――いや、何、利久の肚の中は兎角さとりがたいものでおりやるよ。

第　三

遠攻の意味深重、はなはだしくは攻擊せず、で、また何處やら焚き附ける氣味合ひ、それを默然と聞き澄まして大閤もしばらく茫然として居た。　さすがに容貌を掩ふ技量は有り、默然となり、又茫然と

した下に猶かつ一種の微笑をよそほつて、物に頓着せぬ顔つき。半分ぐらゐの處まで聞いただけで、句切りを機會に手眞似を加へ、しつとばかり淀君の跡の言葉を堰き止めた。

「聞いた、その咄なら疾く聞いた。利久も抜けぬ親父よ、喃。」

珍らしく早く出た挨拶と思へば、一向に肚の知れぬ奇な言葉。引きつづけて、又變妙、

「はははは、利久も歌はうまい！」

淀君もいくらか肝を抜かれ、只かしこまつて頭を低げる、その領元の邊の奇麗な處をしけじけと眺めて、又笑ひ出し、「いつもながら美くしいよと」何食はぬ澄まし方。襟元を褒められたとは思ひも附かず、「はッ？」と忽ちもたげる顔、意外！いつの間にか面前にぬつと差し出して而も快笑滿面の主君の顔とぶつかつて、餘りの事に是はと呆れる。たまりかねてくつくとばかり、而も色香を以て地位をつなぐ身の常の樣子の大袈裟、仰山に笑ひたふれれば、主君も最ど得意な體、輕く打出した一言の文句は亦頗るの女殺し、——「利久が娘より美くしいッ。」

ただしその場の樣子の時時刻刻移りかはるはいつも大閤に取つて珍らしくない事でもなく、今斯う巫山戯出したかと思ふ間もない瞬間、また何を思つたか急雨一降り峯を洗つて見る間たちまち改つて、設けの鈴を動かしながら耳も抜けるやうに小姓を呼ぶ。——

「大事ない。みな疾くもどれ。夜と共に語り明かしもしやう、道菴これへ召しいだせ。」

事の心をはかりかねて、眉をひそめる淀君を見てまた妙な笑ひ方。そして何を言ふかと思へば、極り切つた、譯のわからぬ事。――「道菴は利久が子ぢや」としかもそれを獨言の樣に。

やがて召に應じて出て來た道菴、そもそもどのやうな樣子を以て太閤が之に接するかとは殊に淀君が眸子を凝らして他目もふらずに見た事でした。が、實際を見て、意外に出られて霧の中にもさまよひ出す。その鹽梅――辷り出た道菴にまづ高笑ひを浴せ掛けて、久しぶりだに近く寄れ、いつもの茶道の風流ばなしに深夜の鬱をはらつてくれと常よりも解けた昵しみ工合ひ。利久に娘を所望してはぢかれて、まだ日一日の隔たりもない、それを一方も知つて居る。知つて居るだけ今斯うしたしくされて、脛に疵、中中深くいたみ入り、ほとほとまた面をあげず、平伏する體を見て、さもこそと言ふ樣子、淀君を尻目にかけて大閤はまた呵呵笑つて、とぼけ拔いて、

「どうぢや、利久に變はり無いか？」

利久に變はりは無いかと云はれていよいよ弱り切る道菴、殆んど捗捗しい言句も出ず、只恐る恐る挨拶する内、無殘ややがて荒肝をひしぐすつぱ拔き、引き續いて何を言ふかと思へば、

「娘にも變はりは無いか？」

ぷつりと語を食ひ切つて後、更に一揉み力を加へ、

「娘の名は何とか言ふたの？」

おいそれと返答が何で又即坐に出るもの。大方領元に朱を濺いで目も暗む計りの心持ち、ただ默つて平伏して居る處を、さても執念まだ慊らず、

「せめての事には名をでも覺えて寐覺の思ひ出にしやうか。道莽、その名を語りやれな」。

「名…名も無い女郎。恐れ多いことで…道莽も今…」

「今——今が何ぢや。美人ぢやの。未練と笑はれるか知らぬが、思ひ切るは切無いことぢや。道莽そこは何と思ふ？」

「全く以つて恐れ入つて」。

「思ひ出した思ひ出した、利久が娘、その妹の名は阿三と言ふたの。ははは、阿三、全くそれぢや。阿三、阿三。もうもう忘れはやるまいぞ。」

側の淀君をかへりみて、

「淀、この後は御身の名をせめて阿三と代へ申さう。何を笑ふか、心知らず！　淀では無うて是から阿三。その名の好いで嬉しいか。道莽、淀は恐悦ぢや」。

飽くまで巫山戲てたしなめて、その間道莽の背に湧かせた冷汗の量は何斗何升。見る目さへ氣の毒なほど押し究め究めて頭を一分も上げさせず、最早それ切りかと思ふ間も無く、差し迫つてつがへた二の箭のするどさ、聲がらさへも屹となり、

「道葊、利久は何故に阿三を越すを許さぬのぢや？　阿三の胸か、利久の心か？　打ち明けて聞きたいの」。

それ何として言へる物。ああ大概にしてもくれ。熱病にとり付かれて夏寐とはすよりつらい切迫、「ただ恐れ多く御ぢやる故」と杓子定規をならべれば、冷笑つて、「げにも恐れ多くも有らう。　秀吉もとは下司故に喃」。

「いやいや、これは快くない言葉であつた」

と直にまた氣を變へた、——

「利久にそないな心の無いは兼ねてから身も知つた。　あの親父もともと凡人でも無い、秀吉がむかし忘れて風流三昧、妾三昧、天下は何も自由に爲ると思ひ高ぶり出したと思ふてわざと諫言した事ぢや。と、それ道葊、身は思ふぞ。　茶道ながら天晴人物、利久は惜しい肝玉ぢや。　傲り高ぶつた秀吉に一たまりも無く衝るとは、ても扨も見上げた肝ぢや。　それに似氣無いはこれ道葊、そこは今の秀吉の威し、はははは、眞として驚いたげな。　はははは、親には似ぬ肝ぢや。　親は愛でたい胸中ぢや。　逆らはれて却つて嬉しい秀吉の存念、よう測つても見い！」

右ひだり捻ぢまはされて物凄くも有り、たふとくも有り、下手が活けた水仙、筋も骨もぐつたりして歸する處はさしぐむ涙。「もう用はない、次へ立て」と命ぜられ、二三拜して辷り出せば、こやと又呼

び止める、見れば主君は手に短刀一本、「威した詫びや、これを取らす」と而も而も手づから氣輕く。今は迸り落る道葊の淚。見て一方は滿面快笑―反映の數寄な丈に物凄さは一室に滿ちました。やや立ち出づる道葊の姿を反身に爲つて見おくりながら

「道葊、ただし未練はこよひかぎりぢや。何よ、おどろく事では無い。その後阿三の三の字も身が言ふまいと言ふ事ぢや。茶道のつとめは變らずと好う其許から利久に傳へ！」

第四

あくる朝家に歸つて道葊は前後の一伍一什を親の利久に告げた處で、利久も聞いて驚いた。右から思へば左に爲る、いつもの太閤の神出鬼沒、やはり其傳とは思ふものの、流石に胸中の委曲のところを充分には料りかねて、是が土産の拜領の品と道葊が差し出した短刀、その光芒の凛凛として何處やら殺氣の髣髴たる姿を見るにつけても襟元から冷水を注がれる氣持ちもした。どのやうな樣子であらせられたかと幾度か聞き直すもそもそも愚痴。甚だ打ち解けられたと答へられて、扨さうとは信じながら一種の疑念は兎角に腹を掻き亂した。

道葊、そもじは何と思ふか知らぬが、根が由斷のならぬ主君。しかもその御側に淀が居たといふも奇妙で無いか。人情として己がやうに娘は遣らぬとことわられて心持ち惡くせぬ者はない筈。そこを假令包むにしろ、その包むと云ふが恐ろしい。されば此後のところは何うあつても心元無いと前以て臍

を固めなければ爲らず、何事も身の分と思へば怨む處も何も無い。つまりは此やうにほのめかす肚の中、それ察すれば堪らぬ子心。目を瞠つて道葊もたちまち屹となつた。

「さらば全く殿下の御所存、只その表部のみ御飾りやつた事でも御ぢやるか？」

「その場合ひに己がみづから出で逢はねばさだかには言はれぬが、人も知るとほりの殿下の御氣性こなたより料る料ると思ふ間に料られるが常の事ぢや。日數もあらば兎も角も、今日といふ今日早く思ひかへして追從三昧稀有では無いか。言葉のみならば猶まだしも、御下賄物さへこれ有るとは一向に合點行かず、邪推かは知らぬが、喃、利久の思はくは今言ふとほりぢや。なれど何も此事が命に及ぼう所以も無い。喃、命には及ぶまいと——又殿下とてもともと然る方、既に前後の體でも知れた、よし肚の中は御解けやらずとも、外部にはあらはしも爲さるまい。綿の中に針でも包みて是から年をおくるのぢや。」

何氣無く言ふものの、實はわが實子にさへも打ち明けられぬ種種の秘密、氏鄕との歌の贈答が世に傳はつた起さは利久に於て知らぬでも無し、今になつて懊惱の中、いろいろに推察し、また邪推し、それから夫と考へれば、口に扣へて言はぬだけ夫丈の心痛が只全身に蔓こつた。想像を荒れさせたさに道葊にも暇を與へて坐を立たせ、好みの茶室に閉ぢ籠もつて最う早誰に用捨も無し、端然と正坐して、ねぶつた眼中に朧ろ朧ろと殿下の顏色態度を浮かべれば謀略に富んだ目ざし鋭く、何を言ひ出すか知れ

ぬ口を屹と結んで此方を睨みつめるかのやう。もとより夢でも無し、猶現でも無し、ただ端坐しての默想の中、それでも其閉ぢた目の中のくらやみ金輪の美くしくきらきらする中に出沒自在に姿をほのめかせるのは娘の阿三。親ながらも見惚れる計りの容色、いとど愁ひ顔に情致を加へて、ああ、やれ、太閤迷ふも道理か！ 掛けてある湯もやや沸つて一間どころの松風に瀑の音、床の女郎花のくねりがちなのも矢張り因緣。思ひ至れば自分の身に取り、太閤の恩義も受け受けて來た、それを仇にする氣は爐の緣の灰ほども無し、此上の榮華、しかも色香によつて求める浮雲流水の榮華に眩むと言はれるが口惜しさ、第一の餘念はそもそもそれでそれからしての頑固な言ひ分、要するに殿下に於て之を知らなくも有るまい、心もちは惡くもされたらうか只それだけで濟むであらうといふのがさしも考へ據つた揚句の果の決斷で、それでいかなければ何うでも爲されと肝を据ゑて取り掛かるのがやはり例の癖であつた。茶を立てて一服味ひ、味ひながら床に對して、今はまた何を思ひ出したか、茫然となつて床を見る風采後から見ても前から見ても何が無し平平凡凡、推察想像の工合ひも亦平凡、それだけで心を轉じ、譯も無く又一意專心茶を味はつて茫然と爲つたところは表面どうしてもつまらぬ一個の人間であつた。

次ぎの日は利久も角を立てず、こころよく出仕して殿下の常に住む奥殿の高い敷居を跨いでそれと無く樣子を窺へば、矢張りいくらかの推察どほり是ぞと云ふ不快の氣色も見ゑず、その見えぬといふ事、そもそも情を矯めて外見を飾るためか、それとも光風霽月の洒洒落落微塵一點も心を殘さぬためかと、

今も猶又思ひめぐらせば何れとも利久は悟れぬものの、何にしろ其高かつた敷居も大方餘程低くなつて、それと初めの推察は付いた乍ら猶案外にも思はれた。しかも阿三の事は爪の垢ほども太閤の口から出ず、只只いつもどほり茶や花の優優とした物語りに時二時ばかりを費してやがて食事の頃ともなれば利久に陪席をさへ命じた。

この日は是で首尾よく果てて、流石におろかでも無かつた利久ながら充分これには欺された。さまざまの疑ひも時として出没しなくも無い、それも心を心が抑へて、疑ひが終に明察となる事も無く、與し易い殿下だと思ふにつけて頗る胸は落ち付いた。

胸の落ち付いたといふ事、唯是だけの故かと思へば誠に女女しい限りの沙汰。唯是だけの故を以て利久とも言はれた者が眞實に心を安めた事とすれば、その所業の力無さ、こせこせとして人の鼻息のみ窺ふ、只これ一個の卑屈の幇閑としか思はれぬ、それにはそれで仔細も有り、打ち明けては言はれぬ魂膽が有つての上の事であつた。

茶を啜り、香を捻る、その段に於ての利久居士は權門に出入して命を御辭儀の數でつなぐ一人の藝人であつた。が、併し權門に出入して時の大頭の內事を心得、思ひ付かぬ處に思ひ付かぬ力を持つ千利久は天晴一個堂堂たる、恐ろしい武士であつた。才は才を以て集まつて、智慧からして秀吉の心を得、旭日の昇る勢ひの立身に侍共を駭かせ、又その肝を自由に役つて虛を以て實を摶ち、兎角して地位の

土臺をよく固めた今日、野火も一坪か半坪の頃は道行く人に愛せられてやがて一里も廣がられてはそろそろ忌まれ出した。　忌むといふは侍ひで無し、茶道仲間で無し、その實引き立ててくれた人、はじめ焚草を加へてくれた人、始め愛して暖まつてくれた人、その二つ無い恩人であつた。　何處でも受けの好い利久、打ち捨てて置く時は身に利く藥に毒有る道理、どのやうな事を爲やうも知れぬと彼是思ひ出して來た此頃、この間際とあつた處で阿三所望の一條であつた。　内にある思ひの外にあらはれる體、此方も然るもの丈に早く見拔く。それを知らず顏にすねて見せて、それからしての試しくらべ。で、早くまづ籠絡され、別條の餘念の太閤ゑない事と思つて深く安心をした譯であつた。

人は智慧の有るだけ欺され易いもので、陰險の比べつこに於てここで利久の方が後手の方になつた。岡目から見ればそれだけでも可笑しい咄し、痩せても枯れても主君たるの身を以つて、彈かれた上の追從沙汰、むしろ自が地位の威嚴を損ずるまでにして取つて掛かる、そこに深い心の何で無いもの。が、受け身にあつては思ひ迷はれた。　料られる料られると知りつつ知りつつ矢張り料られて、幾分か安心の心持、しかも與し易い殿下だと侮る心も催した、是が大きな脫落であつた。

第　五

その以來また利久に對する太閤の寵遇は前より一入深く爲るばかりで、他目にもほとほと目立つくらゐの勢ひ。誰言ふとなく、大閤が利久の娘を所望してそして彈かれたとの風聞も傳はれば、臆斷で說を

兎角付けたがる世の常とて今の利久の寵愛が一層好くあつたのも夫等の故と風説し、見込んだ花が捨てられず、未練猶殘つて親から取り込むつもりであらうと取り取りに浮評した。すると又世話燒好き——その實は尾髯の塵取達が六波羅の花鳥の使ひ其處のけと云ふ意氣組みでその風説をあさり取り、狩り蒐め、手柄顔にあつて淀君の許まで持つて來る。それを又取り次いで剝ぎ剝ぎの繼ぎ合はせを上手にし、香閨の裡の睦言に交せて巧みに淀君は殿下の耳にも入れて見る。これが誠に度度であつた。が、不思議な事も有れば有るもの。只ならば憤然として誰も心もちを惡くするやうな風説を耳にたこの入る程聞かせられて相手はさつぱり平氣であつた。噂では何とも言はうよと計りで取り合はず、その癖又その噂を全で心に掛けぬかと思へば、又そうでもなささうな處も有り、此方で言ひ出さぬ時は自分の方から切り出して色色と聞き出した。つまりは一口に言つて淀君にも本心はまだ見ゐなかつたもの、世間の噂も何も角も實は大閤の身に取つて好い、うまい道具に爲つたのであつた。

すつかり旨く籠絡されて流石に拔けぬ利久ながら——なまじひに彼是と判斷を鹿爪らしく下して見る丈終に秀吉の網の中へ陷つて仕舞つた。幾日經つても幾月過ぎても恩遇が深く爲りまさる斗りの境遇、それが一度や二度で無く、又右から見ても左から見ても詐僞らしくも見ゐなかつた處から眞實に油斷もするその。油斷の結果といふは紫野の大德寺に利久が自身の彫像を誰はばからず建てる事であつた。言ひ盡くにすれば天子將軍の貴い人も出入りするといふ門の上によしや彫像にしろ履物を穿いた儘の

老衲が立ちはだかるとは奇怪な咄と、やがて惡評を爲る人が而も現在自分が愛顧をかうふる太閤であらうとは！　茶道に於て千家といふ名は雷のやうに鳴りひびく時、一箇稀有の和尙といふ名は誰彼に論無く傳へる時、で、又一天四海を握りつめて權威をさをさ帝王をも凌ぐ人の等閑ならぬ寵愛を受けて居る時、遊藝の鑑識に於てハ一人の敵も殆ど無い身と吾も人も思つて居る時、これら一つとして頭を抑へるものの無い境遇、しかもその上に氣を許すといふ事、それや是や前後相集まつて、大德寺の門の上に肖像を置くといふ事も扨何氣無く思はれた。　そもそも之が避けがたい厄難の種とは夢にも知らず、つまりは傲り高ぶつた譯、別段に深く心に經營も費さず、よりより其支度に着手した始末、早く忽ち太閤の耳にも入つた。　が、知らぬ顏。しかもいよいよ優すばかりの恩遇——即ちいよいよ近づく厄難！一切殘らず支度が調のひ旣に工事も濟んだ處で、まざまざとして案外な太閤の大憤怒。　席を蹴て起ち上り、　躍り狂ひ、おのれ賣僧の推參きはまる、その儘にさし置かうかと狂ひ立つての罵る聲、洩れて利久にも傳はつて、さすが亦これも事の意外に唯唯是は是はとばかり。

狙ひ澄まされて遁れるのは容易で無し、釣られたり料られたりした揚句終に利休は釜の中の哀れな魚と爲つた。　昨日に引き變へて、近習さへ仰いでは見られぬ斗りの殿下の形相、さもさも腹に据ゑかねむた體、寵にほこつて推參極はまる稀有の惡物、その儘にさし置いては理も道も立たぬとばかり。

殿下が大に氣色を損ドて、歸する處殺害の憂目をいよいよ被らせる事と爲つて、利久も驚きもしたも

のの、叉屹と思ひ直した。ここに至つて悟る四十九年の非。白髪にあつて、それ迄の恩の仇に爲つた感慨、口に言へぬ程一時に混みあげた。蜜を知らぬ子は蜜を欲しがつて啼かず、恩といふものそれ受けた事の無い身に於てそれがために誤りを招く所以も無し、つくづくと考へれば悪びれぬ氣も起こらぬ境界。大徳寺の一事が凄まじい人の口實と圖らずも爲つて仕舞つたこと思へば初めから心注かなかつた身のぬかり乍ら、それを今又脱落だと云ふだけが愚痴。「さまざまの莫妄想を入れ置きし堪忍ぶくろ今切れにけり」、末期の思ひは殆どただ是。あくる日の死を待つ前夜の鐘の音、呻くやうに樹立ちを潜つて——夜、その闇黒も矢張り是亦清明と交代の世の中。目を瞑つたが最期、身は變はる土饅頭。その土饅頭の前に異日人が立ち駐まつて、ああ利久といふ人も不幸な人であつたとでも切めて下生への小草の露程眼中をうるほした事ならば、人間の身に於いて別に事事しい愚痴をならべて非分の大慾を望にもあたらぬ事か。

* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

既に利久も無殘の最期を遂げて仕舞つた。嘗て花を見た目も瞑り、嘗て茶を味はつた舌も乾いて天下また一人の似寄りの人も無くあつた。人の此世を去つときに當たつて、第一に催す考へは天地幾萬の蟻のやうな群集の中また一人も其死んだ人と全く何處から何處まで似寄つたむしろ同じ人の無くなつた

と云ふ事、只是か？、同じものが再び又索められず、其人の蘇生するより外は再び之を相見ることの出來ぬ故にこそ朋友は之がために惜しみ、又悲しみ、仇敵は之を憶ひ出し、また喜びもする、太閤も是であつた。

殺して仕舞つて腹は癒えても、なまじひに殘つて居る坐敷の什器、一旦は其無殘に死んだ人の目にも觸れたと考へれば、日は終日、夜は終夜、品物の稜稜に死人の顏もちらつくやうな。　稍肩の輕く爲つた處は嬉しし、死に顏のちらつくのは面白くも無し。什器殘らずを抛つてたたきこはして仕舞はうか、猶殘つて居る舘も有り、舘――曾て其人を欺いた處の舘。その舘も毀さうか、猶殘つて居る淀君も有り、淀――しかもその人の身の上を曾て尋ねたその淀君。殘る處は猶身もあり、自身を殺せば何にもあらず取り直す情は熾ながら懊惱も催した。　しつかりしろと氣をはげまし單身ただわづかの小姓を率ゐて、一間どころに夜こもつて、その死んだ人に敎はつた手加減で茶の湯三昧。うす暗い火光の向ふを不圖見れば、ぼんやりとして蹲つて居る白い人影！　おのれと此方も目をいからせ、齒を嚙んで睨めれば、影は消えて只殘る枯蘆の襖。　吹きおくる風も雨を呼び顏。きつと爲つて次を見かへり、「三十郎これへ」と呼べば、呼ばれて辷り出る紅顏の美少年、物すごい一間の中一點のうるはしい物に一入の凄みを添へて、見ればその小姓堀三十郎の著服は畜生、それも薄むらさきの獨鈷を白く横に拔いて、しかも其名も阿三の因緣！

◉韻文大龍王

破邪の神、威怒の大王！
日月と力をたぐふ。
天何ぞ！わがくろ雲に
おほはれて光りも空し。
壌何ぞ！わがむら雨に
涵されて海とこそなれ。
大鵬の翔る九萬
わが夢の呼吸にも足らず。
蜉蝣の身の宏しとおふぐ
大世界捲きも込めけり。
かくれては小魚よる岸

ゆふかせのそよぎをぞ聞く。
海老蟹とともに群れ居て
蘆の根の塵泥を呑む。
雲ひとへ天地を罩めて
澤闇し雨のあら玉、
風鳴りて山もひびけば
天晴！さて！天地を呑む！
淺ましや目しひの小魚、
手の掌に足らぬ澤邊に
われのみの夢の榮華。
事成りてはじめて知れば
大王は雲に駕り行く。

◉田舍聖者

さて　來いな。
やつちや　して來い、　して來い　な!
まかり　いでたる　それがし　と
名のる　も　おかた　管　なれど、
管　は　この　世　の　とほりもの。
管　で　空　見る　似非天文、
管　で　舌　まく　下司上戸、
よつて　くだん　の　證文　も
神や　ほとけ　の　知らぬ　もの。
いつはり　多き　世の　中　の
にごり　に　しまぬ　神　の　宿、
ほとけ　の　御座　が　知りたくば、
宿　の　榎　の　木　を　横に　見て
蜘手づたひ　の　ゆきわたり、
茅　の　わばらや　尋ね　見よ。
かざり　も　納屋　の　味噌　の　味
嘗めて　も　見さい　みやこ人。
さしみ　の　つま　の　はつもの　も
鈍　や　黄金　で　味　つけて
錢　を　嚙む　齒　の　よく　見れば、
さて　も　したり　や　金　入れて、

おやぢの脛の嚙みよさよ！
　あたらいのちを釜茹に
虫を殺して糸とりて
織りてかづけば身柄よき
それが都とゆふぐれの
この味知るかみやこ人！
知らでむざむざ土と爲る。
つね煩惱の火ともなる。
うはきごころの水と爲る。
鳴るな瀧つせとうとうと
一夜の渣垢もとどまらず、
めぐればきよき水ぐるま、
これも輪廻の糸ぐるま。
外界は修羅の矢ぐるまに
ここはそら吹く風ぐるま。

外界は假の御所ぐるま、
ここはしぼまぬ花ぐるま。
外界は罪の荷ぐるまに、
ここは眠りのうまぐるま。
つづくいのちの緒ぐるまに
心は長きうしぐるま。
くるわくるくるつばくらめ、
こぞの故巣のたのまれて
春は千代千代鳴ん鳴きつれて
ことぶき、山吹、秋田蕗、
笠のやどりと言ふてほし。
　　　　日にやけて、
煩惱までも燒き盡くし、
まことのほかはつひ觸れぬ

手に鋤鍬の豆をとこ。
誰だとおもふ、つがもねえ。
借りても減らぬ神のもの、
背門の入り日の金色に
その日その日の目の垢を
ぬぐへばわれも菩薩なり。
人もぼさつと木棉機の
音もきこゆるかへりみち、
妻が手業も誰がためと
思へばたのし世の中に
われもねぐらか、むらがらす、
可愛可愛と呼びかはす。
首しめる
襟巻ならば絹も何!
いくその人のあぶらあはせ

塗りてつやある唐びつに
慾ををさめてえんやらさ。
さして行く手は死出の山、
やがてはわたる三途川。
外道の里の八陣に
迷ひのやみのくらまぎれ。
それ覺えてか舌切りの
むかしがたりを子ごころに
きざみあげても年の皺、
何を後生としらがなる
痩身に重る强慾の
すがたは惡魔惡外道。
解脱現世のたのしみを
くるしみとする哀れさを
それあざわらふ野邊の水。

水はこの世を水と見て
たれにへだてもなかなかに
草もけものも鳥も呑む。
上根、下根、善、悪魔、
主をころした血刀も
親にもてゆく一桶も
おなどごころににごり無し。

　　　　　つかれたる
痩せ狐には尾も重し。
餌にことかかぬ籠の鳥
されば雲井のこひしさと
笑止、しらぬが名ばかりの
ほとけ心のみやこ人。
都てふ名のやさしさに

籠ともしらでこもりくの
果ては地獄をよそに見て
心をくだく、肝を磨る。
するする磨り餌一はちが
これ萬人のいのちとて、
あだし無間の寺のかね、
　　　　　なさけなや、
無常を人にさとらせず。
　　　　　とは見にも
ゆかしわが家のいたびさし、
霞の幕に裾させて
黒ずむかげに扨つつむ
たのし思ひはいかばかり。
おぼろをわけて見わたせば、

うき世を　思ひ　引きしほ　に
出でても　きよき　川ぞこ　は
佛が　のぞく　水かがみ。
夕日　の　あかね　やや　のこる
空の　雲間　の　それ　そこ　が
無上帝座　か　りうりう　と
颪が　ささやく　簫　の　聲。
おさらば　さらば！　路　の　梅！

そもや　そもド　も　すね仲間。
やさし顔　して　あれほど　の
酸い　實　生る　と　は　思はれぬ
それ　も　誠　か。きよらか　な
露　と　こよひ　も　むつ言　の
名殘　の　笑顔　かはらず　に
さらば　又　明日　見せよ　かし。

田舍聖者を讀む

あたみ無黄道士

四月三日の國民新聞附錄に掲げたる律文、美妙齋主人の「田舍聖者」は實に近來の一大作なり、一讀して用語の奇拔なるに驚歎し、再讀して措辭の巧緻なるに感服し、三讀して句調の輕妙なるに厭くを忘れしむ、嗚呼何たる愉快の文字ぞや、實に近年文學社會の不振に際し、世の耳目を驚すべき一大新作なり、之を主人が是迄の作に就て評すれば散文に於ては「武藏野」律文に於ては此編こそ主人が文學者として

以來の傑作と謂ふべけれ

近來韻文と名乘りて世に現はるゝ者多しと雖も、半ば誦み來て紙を抛たしめざるものは鮮し、敢て此編の妙に比して他を蔑視するには非ず、他に實に誦むに足るものあらざるなり、律文の價値は思想の美よりも、寧ろ修辭の美を賞するものなり、然るに他は元より趣工の巧あらざるに、加ふるに措辭の妙あらず、又自から韵文と稱すれども決して押韻せず、故に從つて步韻の自在を賞するの地なし、唯だ音數を調べたる點よりは律文と稱すべきも、中には調はざるもありて、平平凡凡の思想を野卑厖雜なる言辭もて、長たらしく言ひ現はしたるのみと云ふの外なし、

主人の此編が大に余を感ぜしめたるは、盖し他の乾燥文字が我我日本人の口に適せざるに反し、頗る和融の氣を含んで、甚だ格調に適したるに職由せずんばあらず、想ふに主人は此篇を綴るに當つて、大に我國人の日常口にする所の淨瑠璃を參考したるなり、其の之を公けにするに先だちては、大に推敲を費したるなり、推敲を費やしたるの文字は往往無理澁滯の痕あるを免かれざる者なるに絕て其痕なきはこれ、主人が主人たる所あり、余は近來主人の作が何時も万篇一律にして、變化に乏しき優柔濃厚的のもの多きを見、私かに以爲らく、主人己に大家の稱を得て自ら得得然とし、今は名の爲に作らずして名の爲に作らせらるゝ人となり了れり、已ぬる哉。と今此の大作を見るに及んで其然らざるを知り喜んで之を稱揚するものなり、

「まかり出たる」云云の前に、劈頭に「やつちやしてこい」の句を附加したるは何等の大膽ぞ、此大膽快活が先づ讀者をして驚歎感服せしむるの材料たらずんばあらず、是等凡て俗曲の文句より來りたるものにして、其他「鳴るは瀧の水」三番叟「誰が爲と思へば樂し世の中」我が物「それ覺えてか舌切の」將門及び一句挿入せる「なさけなや」梅の春幷に「痩身に重る强慾の」我が物等何れも其の俗曲然たる點が却て人口に狎れ易く、唱ひものに適する所以なり

主人は此篇に於て近松其他の俗曲學者が爲しし如く、自在に掛口調を用ひたり、下司上戶よりよつて件と掛け、水となるより鳴るは瀧と掛け、うしぐるまよりくるわくるくると掛け、えんやらさよりさして行くと掛け、山よりやがてと掛け、こもりくのより果と掛け、其他極めて口調の流暢をなしたれば、第一章「よつて件」の邊、第三章(首しめる云云)の末段より第四章の首の邊、少しく意味の明瞭を欠くが如き所あるにも拘らず、「糸とつて織つて」と云はずして「取りて織りて」と云へる杯、雅言を用ひたるが俗曲の中に在ては常に目立つ物なるにも拘らず、「つがもねえ」は江戶つ子調にして田舍聖者の詞には不似合なるにも拘らず、「神のもの」など云ふは田舍人の思想には高尙に過ぐるにも拘らず、又其の神の跡に直ちに佛語を用ひて「金色」と接けたる如き不釣合あるにも拘はらず、難なく誦みもて行かるるは一に此流暢の德に依らずんばあらず、

强て難を云はば「茅のわばらや尋ね見よ」は餘所餘所しく見え過ぐるが如し、今少し主觀的に「尋ね來

よ」とか何とか適切に云ひ現はしたき事、「親父の脛の嚙みよさよ」は嚙みよさよの五文字望むらくは順序を二文字三文字にせずして、三文字二文字とし以て律を正したき事、「りうりうと風がささやく」は前にりうりうと淸らかなる以上は後に寂寂たる意味「ささやく」は不釣合なるを以てを改めて「調ぶる」とか何とか別字にしたき事なり、此外に難とてはなし、勿論活版の誤と見ゆる所三ヶ所あり、「あぶらなや」は「膏にや」なるべく、「ぬしを殺した」は「主を殺した」なるべく、「うき世を思へ引しほに」は「思ひ引きしほ」なるべし、是等は作者の罪に非ず、夫とも余が誤解か、

句讀と語の綴り方に付ては主人は嚴格なる論者なり、本篇を記すにも必ず注意をなしたるなるべし、余は元より主人と同意にて、行末は散文にも言語と言語の間を離して書く規則を實行し、句讀をも必ず打つ事にしたき心願の者なり、然れば此規則に付て主人と余と意見を異にする點を述べて、研究の料とすべく思ふなり、

主人は本篇中疑問の句に？を用ひざるにも拘はらず、感歎の句には！を用ひたる如何ぞや、日本文に於ても疑問感歎の句を現す爲に特別の符號を用ふべしと云ふ論は余其の理あるを知る、然れども洋文の符を其儘に日本文に用ふるは余決して其の理を見ざるなり、洋文は平叙の句に●を用ふるが故にこそ、疑問の句、感歎の句共に●を其下部に帶る所の？！を用ふるなれ、日本にては句點に○を用ふる以上は、疑問感歎の句に於ても○に似たる符號をこそ用ふべけれ、？！にては毫も文章の終尾なり句末なりとの

感覺を讀者に與ふる事能はず、

主人は已に？を用ひず、用ひざる時は日本の句讀法に遵て、。又は！を用代すべきなり然るに「此味知るか、都人」「それ覺えてか、舌切りの」及び無上帝座か、りうりうと」の三句共に「か」の下に句點を施さず、又「誰が爲と思へば擧し、世の中に」及び「遠見にもゆかし、我が家の板庇」の二句共に「し」の終止言に句點を施さず、又「嘗ても見さい、都人」及び「空の雲間の、それ、そこに」は何れも命令句、感歎句なれば。を施す歟或は主人の好む所に從て！を施すべき所なるに絶て其事なし、主人の注意の足らざるか、將た活版の誤か、

「たのし思ひは如何ばかり」は「たのし」と「思ひ」の二語合して一語となりし者なれば、間を離すべからず、離したくば|を以て連續せしむべし「嬉し涙」「くるし紛れ」「いとし御方」の類皆此の例なり、主人別に説あらば、乞ふ猶互に論究して後日の考とあさん、要するに、主人の此作は實に文學上の一大現象として觀るべきものなり、記して以て貴社に投ず、（國民新聞所載）

◉鎌倉小雛失明恨

（注意——書き下し方はやはり韻文躰にしたものの、句配は從來の淨瑠璃とさらに違はぬ）。

はし月夜
かまくら山 の つるが岡、
羽 を 伸す 家 の 繁昌 は
名 さへ 利得 を 鳥屋 とて
ところ 切つて の とまりやど。
行きかへり の わたり鳥
共さへづり の 評判 に
つばさ そろへて 寄る 浪 の
音 に きこえし 一かまへ。
女中 小雛 が 呼びもの に
鳴子 の すずめ おの が 身 の
羽風 と 知らぬ 戀風 を

眞帆 に 孕みて でれでれと
鼻毛 を 伸ばす
梶原九郎
伯父 平三 が いきほひ を
肩 に 掛けて の 權柄面。
「何と、 これ 小雛、
氣づよい に も 程 は 有る。
一月ごし かう やつて
屋敷 へ も 足ぶみ せず、
旅籠屋ずまひ に 日 を 暮らす は
それ その 笑靨 に 陥つた 斗り。
石 も 水 に は 碎ける に

是ほど思ふ眞實が
そちは憎いか、嫌らしいか?
　　　　やい、喃。
うんとさへ言ふたなら
左しむきそちは誰有らう、
鎌くらどのの御氣に入り、
梶原が一門の
北の方となるしあはせ。
ここに合點が行たならば、
いつ迄そおいな、いやさこれ」、と
膝さし寄すればちやつと飛び退き、
「ああ申し、
數ならぬ身に過ぎた仰せ。
ありがたいとも嬉しいとも、
御禮は言葉に盡くせませぬが、

つねづねも申すとほり
いささか心願有る身のうへ。
心と言ふ字におろした錠の
手前に對し、その事は」と
言はせもはてず聲あららげ、
「はて、扨、しぶとい惡ずまし、
聞きたうもないのろけ沙汰。
顔いろかへて腹立ちやる、
先がさうなら猶の事。
兵作〳〵といふ男の有るは
知つてのうへの横戀慕、
意地に掛けても思は透す。
　　　　それも是
人並の男ならば兎もかくも。
あた活地ないい青二才、

風吹き鳥 の すかんぴん、
鳥屋 が 軒 を うろついて
餌食 に 有りつく 羽抜け鳥 に
心中 だて が 何 に 爲る！
宿 の 亭主 に 打ち明けて
頼む は 知つて 居る なれど、
亭主 は 木佛、いしほどけ、
土臺 が 咄し に のらぬ ゆゑ、
それで おきおき 口説く の を
外れて いつ まで それ鷹 の
高 を くくつた 落ちつきかた、
彈かれたらば それ なり に
指 を くはへて 引つ込む 九郎 と
思ふ は 大き な 感ちがひ。
襟もと で 行く 世の中 に

慾 は 忘れて 來た と 言ふ
その 愛らしい かはつき を
よう これ 一寸 見せて たも、」と
また さしよれば 振りはらひ、
「あの、わしや 否 で ムんすわいな。」
「何、いや ぢや と？」「あい」。
「すりや 是 まで に 頼んで も
どう でも 否 ぢや と 言ひ切る か？」
「否で ムんす。いや や の」、と
はねつけられて 急き入る 九郎、
「おお よく 言ふた、よく 拔かした。
膿 の 血 を 吸ふ 情 の 數數、
無駄 に 爲つたら おつち も 男。
吹きづら かかぬ 用意して、
名殘 に 男 と とちぐるへ！

もう 斯う あれば 狸阿魔、
ここ に 置く さへ 巳も いやぢや。
とつと と 早う 立ち去れ、」と
いまいましさ の にくて口。
願ふ ところ と つん と して
開く 障子 も 反 合はぬ
敷居 またいで ほつと 息、
見かへり も せず……
出でて 行く。
跡 見送つて 梶原九郎。
むね に たくみ は ありわけ の
わかり 掻き立て、手匣 より
取り いだす
藥 の 壺。
すかし ながめて につこり と

笑む や 唐子 の 紙ぶすま。
襖 の かた に 身 を 寄せて
時刻 を はかる 猿まなこ、
心 の 猿 か、戸 の 棧 か、
へだて の 杉戸 そと 明けて
戀 ゆゑ 闇 の 長廊下、
勝手 知つたる 兵作 が
寢所 へ こそ は 忍び入る。
内 に は それ とも 露 知らぬ
小雛 が 夢 の ねいりばな、
かりそめ ならぬ 親 さへ も
許した 夫 兵作 が
かへり を 夢 に 待つ ぞ とも
知らぬ 九郎 は 拔き足 差し足、
さぐる 枕 は 見おぼえ の

かの 兵作 と 見ちがへて、
閉づる 兩眼 手さぐりに、
用意 の くすり つと 注せば、
あつと 一聲 はねおきる
氣色 に 是 は と 駭く 九郎。
「さて は 女がたき 兵作 と
思ひし 人 は それ ならで
あがる 小雛 で あつたる か と
今さら 前後 たうわく の
胸 に こたへる 泣ごゑ に
認め られじ と にげ もどる。
跡 に いとし や 小雛 の 苦痛、
くすり の 毒氣 目 に しみて
千本針 の やたらづき、
眼中 さながら 燃ゆる か と

あやしむ まで の 死 の くるしみ。
ただでと あらず と 雄雄しく も
引火奴 を さぐつて 埋み火 を
かき も 起す や 角行燈 に
うつせど 見えぬ 浮世 の ひかり。
扨 は うつつ に 何もの か
近より來し と 思ふた が
やつぱり 夢 に は あらずして
その 折り くすり を さされた か?
目界 も 見えず なつた か と
心づい たる くちをしさ。
くだくる ばかり 身 を もだえ、
「ちえ、ざんねん や、口をし や!
相手 は たれ と 言はず とも
宵 に くどいた 梶はら が

大方 うらみ で この しだら。
こりや 何と したら よからう ぞ。」
思へば思へば、なさけ 無い！
兵作 さま の その ほか に は
明けて 言はれぬ 胸 の うち、
親 の かたき が 討ちたさ に
浮世 を しのぶ 水しわざ。
神神 さま に 願かけて
どう ぞ 御なさけ、この いのち
減らして かたき が 打てるなら
翌日 は 死ぬ とも いとひませぬ。
どう ぞ 御慈悲 に うたせて と
祈つた 甲斐 も 無い かい な。
かたき の 顔 も 知らぬ 身 が
めぐり も 合はず この やう に

盲目 に 爲つて この 後 に
何と かたき が 打て やう ぞ。
喃 悲し や と 計り にて
前後不覺 に 泣き しづむ
うらみ の ことば 哀 なる。
やや 有りて おもて を もたげ、
「ちちうへ さま、ははうへ さま、
腑甲斐 無い 女 め で ム り升る。」
口 に 申す も 勿體ない、
父うへ さま は たれあらう、
平家 の 方 に かくれ 無き
重衡 さま と いふ 御方。
御んいたはしく も 御首を
あげた 源氏 の はした武者 に
せめて 一太刀 かへして と

「いまはの時にかかさまが
涙ながらの御遺言。
かならず怨みはかへしまするとちかふた言葉も今は反古！
兵作さまと・もろともに
心あはせてさぐつたも
思へばこれが名殘かや！」
三千世界に死ぬ人の
數はかぎりも知れまいに
多くは目しひにならず死に、
望みの有る身はなまじひに
目しひとなつて長らへる。
目界の見えての往生は
うらやましいと搔きくどく。
始終をたちぎく梶原九郎、

さてはとばかり躍り入り、
「阿魔め！いい事吐かしたな。
かく言ふおれがその太刀取、
重衡がそつくびちよん切つた
剛のものぢやと知らぬかやい！
さう聞く上はおもしれえ、
間ちがひついでの腹いせに
息の根とめる。覺悟なせ！」
「さあては己れが仇敵よな？
念願つひに空ならず、
めぐりあふたか、ありがたや。
うらみはつもる梶原九郎、
目は見えずとも念力の
いかで通はで置くべきか！」
「やあ、血まよふたよまひ言、

それ！」と 言ひさま こしがたな
拔かん と したる 時 し も あれ、
誰 と は 知らず 障子ごし
やつ と 掛けごゑ つきいだす
白刃 に 九郎 は わきばら を
づぶり と 縫はれて たぢたぢたぢ。
よろめく 横 の 紙しやうじ
さつと 蹴開き 立ちいづる

これ ぞ 小皺 が 夫 の 兵作！
かたきめ、覺悟！ の 聲 の 下
もろく も 九郎 の 細首 は
ころり と 前 に 落ち栗 の
栗 の いがいが 因果 の 道理
かたり つたへて そのまま を
末世 の 記錄 に とどめ ける。

◉ 貧 （韻文）

貧すれば緞子に いねし はぶたへの
はだも つづれに つつまれて

紅梅ぎぬの 頰と 見し
きのふの いろも あまよみの

甲斐絹の　ねずみ　鳴きも　せず。
　身の　やせ　見ゆる　むかし帶
なみだ　なり　けり　細腰に
　はてれ　骨さへ　龍田川、
秋は　うきよと　ゆふばえに
　てりそふ　もみぢ　氣を　もみぢ、
食も　こゝろも　ほそりゆく。
　ましてや　貧に　うまれ來て
餘所　知らぬ　身の　いかにぞや。
　はづかしながら　身も　ひとり、
　しづが　伏屋に　うまれでし
　これ　人間の　屑ひろひ、
　はかなく　になふ竹かごの
溲る　目の　おほき　ふしあはせ。
　いでや　きのふは　筍の

指に裂かれて　きぬぎぬの
　歌を　とゞめし　片もあり、
けふは　紅白　いろかはり、
　無常の　くろの　水引の
やせ帶　かけし　紙も　あり。
　世は　いろいろの　からにしき、
喜憂の　はてを　ごみための
　末の　ところに　さぐり出す
われも　一人の　聖者　かな。
　白蓮の　花　泥に　おふ、
泥の　うちにも　淸淨の
　みなもと　あるを　思ひ知れ。
　百合の　紅　塵に　咲く、
塵の　なかにも　猩猩緋
　色は　こもるを　思へかし。

われも　天地の　大供爐
それにも　似たる　竹籠に
になふて　かへる　人の　紙
三行半の　端も　あり、
結納　こめしも　あるべきに、
いづれも　わかで　五十年
それを　命に　漉き延ばす
いづくに　分を　欠くべきぞ。
欠かじといへど　欠きしにも
おとる　すがたを　見るからに
たのまれぬ　ものは　うき世　かな。
夫婦　ふたりに　子は　三人、
むかしは　いまの　胡麻鹽も
びんづら　くろく、　色も　こく
かまど　はづみて　われあべに

ふたり　一體　ふさはしき
妻も　ありその　海よりも
深き　慈愛の　子も　うまれ、
子とし　おもへば　身のはしと
そら　不思議にも　目のくれて、
わが　身の　つとめ　まもりふだ、
守らぬ　神の　ある　ものか。
思へ　うき世は　貧の　敵。
森羅萬象　ことごとく
慈悲の　かは　着て　血を　舐る。
上界　下界　雲　ひとへ、
一重は　千里、　萬人の
くるしむ　聲は　つたはらず。
量は　かろけれど　いと　重き
こがねに　代へし　羽衣も

人にぬはせて　舞ふ　そらの
天女は　ひとり　月を　見る。
まことあらば、　平等と
言はれし　かひに　月だにも
思ひやる　目も　あるべきを
知らず顔にて　にしきには
てりて　つづれに　晃めかず。
邪正の　道に　縄うちて
正せば　ゆがむ　かはぎしの
みみづも　夜は　ほたる火と
色を　よそはふ　世の　中に
かざれる　人の　多き　かな。
何を　いはれに　紙と　石、
片おとし　なる　世の　中か。
富みたる　方は　うらやまず。

など　まづしき　か　さとり得ず。
ふまれて　さわぐ　溷板に
聞耳　たてて　ゑむ　つまの
問はぬも　くるし　うすまうけ。
世は　せちがらく　なる子縄、
むすぶ　紙撚の　一筋も
おろかに　すてぬ　うき世より
つなぎのこせし　玉の　緒の
糸の　はし　引くはかなさよ。
われ　もろともに　五人口
五人に　わかつ　代とへば……
なみだ！　こどもは　やせ肱を
張りつ　張られつ　いでむかふ。
むかへられて　土産も　あらば…無き　物を
みやげ　と　せがむ　あどなさよ！

みかへれば　妻も　うしろを　見せて　泣く！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

佛者の　因果　おもひしる。
米と　汁にて　瘦髑髏

そだて來にしも　またたく　間。
いま　一炊の　あはれげに
ためいき　つけば　無心なる
のきばの　しのぶ　色　さえて
すずしき　風に　うごく　めり。

◉古切手

「御免下さいまし」と皺枯れた聲、聲だけ聞いても白髪首からより外出さうも無く思はれる聲。内玄關の格子戸を音もせぬ程しづかに開けて跡は閉め切らず、外へ一人の小女を立たせた儘自分だけ格子を潜り、朝清めの水の痕の奇麗に光る敲きの靴ぬぎへ御恥かしい唐天鼻緒山桐で目方は百目は有りさうな阿多福下駄をからころさせ、音なつた一人の老女、取り次ぎに出た下女と顏を見合はせるや否や、桂庵の本性地金は直に丸出し、えへへん笑ひで口を切つて、小腰も輕く、「あの、飯田屋で厶います。えへ

へへへ、女を連れて參りましたとどうぞ御奥へ御取り次ぎをえへへへ」と嚙みしめるやうな、猫を被つた口の利き方。取り次ぎに下女が立つた跡白眼勝の恐らしい目をぎよろつかせて四邊近處を鵜の目鷹の目、一寸の間でも身上の値踏をするといふ細かさ。　取次が濟んで程無く廊下を轉て來る人間めいた灰俵「直と御通りなさい」と稍横柄。何の二月前に口は無いかと賴みに行つたのは妾ぢや無いといふ顏付きも、逆らはぬが商賣、桂庵は氣にもせず、又もえへへへで受け取て、うしろをかへり見、閉め切らぬ格子の外、袖で顏を半分かくしながら眞紅に爲つて立つて居る女を呼び掛け、「あのそんなら御前さん、それぢや此方へ御上りなさいな」。

　内玄關から右へ折れ、拭き込みに手が掛つて下女が冬は泣くといふ栂と檜抱き合せの廊下を七八間、誰も聞く人も無いのを知りながら、丸で鏡のやうなと空世辭、思へば桂庵もつらいもの。案内は知た突き當りの奥さまの部屋、其處の二三間前から早もう中腰になつた浮足ちよこちよこ敷居の外から蹲つてきつと見込めば、奥樣は火鉢の前八反の小體な坐蒲團ずまひ、半分を猫の「玉や」に貸してやつた儘輕く振り向いて愛敬よく、飯田屋かえ、此方へとばかり。辷り込んでにつと笑つた其顏は此方が癲癇で無くて仕合せ。　枯野の薄とばらついた銀光りのする白髮をくつて、昔聞きたい目付の鋭さ。蜂に螫れた時の用心か縱段の付た齒を掩ふ齒屎は白が黄色とまで劫を經て、あの矢張り蒲鉾の樣にして燒け付いたのだと利口らしい近所の馬鹿の評言。　洗ひざらした唐棧の半纏、脊中には孟宗に知らしてやりたいや

うな、冬でも現はれた大きな竹の子、その癖手措きがいいと見えて垢も付かぬとは流石に女、何處からの拜領か、いづれ前世は袴であつたと思はれるやうな嘉平次平の横糸の弱つた紺前垂が身上第一の金目物でそれを大事にして座るにも一寸手加減。小間遣ひを連れて御出でかえと奥さまに聞かれてまた空笑ひ、「えへへへ、大層よいのが厶いまして、夫から圖星此方樣と存ド……はい、年は十五とか申しました」と言ひ掛けながら例の前垂に會釋して半分身を曲げて後を見かへり、一寸とばかり呼び入れたのは例の小女、それと奥さまとを見くらべながら、

「えへへへ、奥さま、此娘で厶います」。

紹き介された其子を見れば、聞いた年よりは大柄な方、固まり付いた鴨脚髷、たぼの出るのが流行るといふ世の中に未練無くしつつめて油氣は梳いて取つたといふ有り樣。綿天鵝賊の半襟、毛の寢ぬ處を見れば餘處行きさか、怨みつこ無し桂庵と好一對、洗ひざらした綿銘の綿入、糸入りと言ふのは名計りで、水へ入つて染み出した藍氣に買ひ立ては純白の糸も藍と寂び果て、哀れそこらからして此娘を老けさせる情無さ。家はよく無いなと奥樣も思ふ。思ふにつけて感心なは立居振舞のしとやかさ、人品の氣高さ。怜悧らしいと云ふよりは大人しさう、出來る物なら取りかへたいと思ふ計りの可愛い目に處女氣の極りわるさを現然含んで初奉公の價値も見え、折りこごみも馴れたもので、山出しのぶつきりしやつきり、乃至阿婆摺れの竹つ葉がさがさは藥にしたくも影をとどめず、ああ好い娘だと感心すれば奧樣の

笑顔もまた特別で、桂庵に話す聲もやさしく、「飛んだ好ささうな娘だ」と言へば只それだけではつと逆上せて顔赧らめるのも仇氣なく、いよいよ此方も早氣に入る、

「大人しさうな娘だが、生れは何處？　年にしては大きいね」。

「えへへへ、御左樣さまで厶いますよ、飛んだ好ささうな御娘さんで——いつち此方さまと存じまして連れて參りました儀で厶いますが、品川に御家が厶いまして、へい、えへへへ、小學校をも爲さいましたし、御行儀も、それ故、へい御左樣さまで厶いますよ」。御左樣さまとえへへへ笑ひとが此桂庵の專賣であつた。

「何かえ、家は何商賣？　そして名は何てへの？　小學校を遣つたなら手も御書きだらうねえ。家では些しは書ける者で無ければいけないのだが——あの一寸書いて御覽な」。

硯函を差し寄せれば深くも辭まず、會釋して紙を展べ、筆を取る體も落ち付いたもの。流石人知れぬ胸の動搖、證據は頰にもあらはれて時ならぬ散紅葉に床しさは益益加はる。書き訖つた手跡を見れば筆の走りは鈍くも無し、枯れぬところが幼い證據、宿所姓名を書き下して奥樣にわたした處で、しとやかに辭儀をも爲る。奥樣は讀み下し、

「東京府士族秋田正行長女いね十五年——いね——いねといふ名なの？　中中よく書くのねえ感心な。大分好ささうに見えるが、ねえ、飯田屋、矢張り定規通りだから二三日目見えを爲せてから——

大抵良人でも此娘ならいいと仰しやらうとは思ふけれど」。

「御左樣さまで厶いますよ。どうぞ御使ひ遊ばして、えへへへ、何もう此方樣へ參る奉公人は仕合はせで厶いますよ、よい御方斗り御揃ひさまで、姉さんそんなら是からでも御目見えを爲さいましな、よおく、ね、皆樣の仰り付けの通りに、ね」。世辭やら忠告やら何や角や、兎に角置いて見やうとの落着に飯田屋は最早八九分は此方の物と愈よいそいそ、例の色附の齒を出して笑つて其處で欠伸をした猫にまで世辭、一禮をして例の前垂氣に掛けながら辷つて出れば、一寸そこまで見送る阿稻、初心！さすがに殘りをしいかいくらか兩眼も淚にうるんで、小さな聲で、「御世話さま」。

目見え奉公とて一層身を入れ、年に似ずよく働き、成るたけと氣を注けて御用大事と勉める阿稻の忠實、主人も氣に入れば運びも早く、二三日と云ふところが一日で澄み、飯田屋も例のえへへへ笑ひで伺候して、證文に印紙を貼ることとさへ爲つた。中中家では食べたことの無い味、賄ひの佳さ如何にも違つたものだと阿稻も眞實居心よく、搗てて加へた主人夫婦の寬仁大度、いたいたしい小さな子と思へば奧樣も面倒よく翌る日は手函を掃除して半襟や羽織の紐、古い處を賜はれば口も利けずに淚ぐむ——淚はつまり感謝のしるしといとど奧樣の可愛氣も加はつて、稻や稻やと勦はれば中中阿稻の身に取つても九尺二間の裏店住まひ、親と共住みの快樂までほとほと忘れるほどの嬉しさ、いよいよ忠實だつて勤めた。

役所から退つて後主人公も奥で一杯。酌に侍る奥様も稲や御出でと冊かせて、時としては食盤の上の口取肴が哀れ主人の口へは入らず、朋輩が羨むから其處で頂いて御仕舞ひとさへ言はれて、食べ付けぬ蒲鉾や金とんが阿稲の舌に上りもする仕儀。氣に入られ、可愛がられて、流石にさかしい性質だけ有つて、さうかと言つて増長せず、主人大事、朋輩大事と、むしろおづおづし過ぎる程物事に心注けて立ち働けば天晴れ年こそ若いものの、一家内の天女と崇められて、夜更けて奥様の前、裁縫の手傳ひしながら聞けば、よく御勉めよ年頃に爲つたら妾から旦那へさう申し上げて家からして御前を御嫁に遣つてやるからと迄。はづかしさに上氣して、ただ紛らはしに強ねて笑へば「何の笑ふ事が有るものかね」と矢張り笑ひ聲で攻めかかられて――しつ！恭すよ、今夜は、このとほりの汗！

阿稲ハ本の小娘、それにして妙だと思はれた事と云ふのハ親許への往復の書狀を三日と絶たぬことであつた。今日親から來たかと思へば、翌日ハ必らず阿稲から出す、手紙を書くのをも務めにして如何な用事でも之をば廢さず、家内に用事が立て籠めば寢る目も寢ずに洋燈を借りて、果ては不思議だと朋輩はじめ奥さまにさへ言ひ出されて泣きさうに爲つて俯向く斗り。　事の不思議なのハ是のみで無く、家の主人ハ世間が廣く、從つて餘所から來る郵便、それも一日四五通の下へハ下らず、一一開いて見た果ハ狀袋も何の氣無しに屑籠へ入れられる、それを見てハ何のつもりか、阿稲ハ奥さまの許可を得て其封筒の使ひ枯らしを一枚ごとに拾ひ出して、自分に取つてハ一つの寶藏手梱の中へ仕舞ふ不思議さ。

初めは然して心にも爲なかつた物の、餘りの根よさに驚いて果ては奥樣も尋ねる氣になり、ある日折りを得て阿稻を呼び寄せ、物やはらかに子細を聞けば、いよいよ以て不思儀の至り、常に物事にはきはきして返辭も重く無かつた身が之に限つて何とも言はず、俯向いて眞紅に爲つて、いつか目に涙もよはす。小娘と小袋、油斷のならぬと言ふものの、現在親許との往復、まさかに言ひかはした男が有つての魂膽でも無ささうな譯。親許ならば何も何も毎日か隔日に二錢宛でも散財して、多くも無い給銀を費すいはれも無ささうと、考へれば考へる程合點が行かず、怪しく爲つて詰め寄れば、阿稻はたちまち泣きたふれて、「御免ください」とばかり忍び聲。

「御前が御前の勝手で手紙を取り遣りするのだから何もそれを妾たちが彼是云ふのでも無し、又無理に御廢しとも言はないが、どうも奇體でならないからね。　毎日毎日さう用が有つての手紙でも有るまいが、夫とも何か用なのかえ?」

やさしく問はれて胸一杯。　つらいが折角の尋ね、それと明かさなければ爲らず、幾度か袖で目を拭ひ、扨言はうと爲ても口は利けず、はふり落ちる涙顏へあてた袖も放さず、また默つてうつむけば、奥さまは亦さし寄る。いつもの通りの婉しい言葉。――「用なら用で搆はないが、え、是非といふ用なのかえ?」

問へば阿稻は振頭を振る。「是非といふ用ぢや無いの?」と更にまた問ひ正せば、最早包むに術も無

し、やうやう涙の中からして、「いいえ是非といふ用では……あの、あの、只その……ちつ！奥さま、どうぞ御免遊ばして。」――「泣かないでさ、御話しな。　どうしたの？」

突と阿稲は立ち上り、手文庫を持つて來て奥さまの前。――「みんな安否を尋ねました手紙で厶います」と言つた儘又泣き倒れ、「親たちの安否を聞きませんと、どうも夜……夜も安安……つひ夫からして毎日毎日……御免遊ばして下さいまし」と、思ひの外の阿稲の言葉。「そんなら御前兩親の機嫌をあの毎日？」と慌てるやうにして問ひ掛れば涙に溺れて返辭も無し、身を震はせて泣き沈んで、「はい」といふ聲それさへ優しい――ても扨も孝行なと聞く方の身も早堪らず、奥さまの聲も亦うるんで、「本當にまあ感心な！あたしや涙がこぼれるよ」。

然りながら不審も有り、阿稲の給料は高の知れた一ヶ月一圓足らず、毎日二錢宛費して一月立てば六十錢、殘る處はいくらも無し、それで何うする氣かと怪しめば、其邊の内部が奇妙でならず、餘り立ち入り過ぎるやうだけれど、御前の家とて大した物でも無し、聞けば困つて口減らしに御前をも奉公に出したと云ふでは無いか、それ程の身に取つたら毎日二錢宛向ふと此方で費して仕舞ふのも餘り輕くは無い事でも有らうに、一圓合點が行かぬ始末、こちらは何うした事なのだえと道理を責めて問ひ掛けた一言、窮所に中たつて一方は言句も無い體。奥樣も不審は湧く。上部に見えぬ人の心、やさしく見えても鍵の手かとさすがに無理でも無い疑念、疑ふままに結め寄れば、いよいよ一方は唯泣き臥す。――

「をかしいぢや無いかね、唯聞くだけだよ。御前、切手はどう御しだえ？　品に因つたら、あんまりいぢらしい心根ゆゑ切手代ぐらゐ助けて上げなくも無いと思ふに隱す程の事も無からうが。　え、隱すにも及ぶまいが。　何？　何だつて？　有りがたうぢやあ無い。本當にどうしたの？　何？　え？　泣いてちや些とも分からない。え？　何だつて？　惡い事をしましたとえ？」

扨はと奧樣も胸どつきり。無殘、推察のとほり鍵の手をした事か？

「惡い事とハ何……どうしたの？」

透かさず詰め寄れば、いよいよ泣いて、「惡い事を致しました。實ハ今までに一枚も切手をば買ひませず……」

「買はずにそしてあの御前どうして郵便を御出しだえ？」。

「御屑籠の中の古切手を……あの此間もいただきましたあれでもつて」。

「をかしい事を云ふ娘だよ。　一度つかつた切手なんぞ何うして二度と使へるものか。つかへば罰を着るぢや無いか。その上に通る法も爲し。そりや御前嘘だらう」。

理にも無い事ゆゑ中中承知せず、それも御無理ぢやムいません、是にハ子細がムいますと掻き口說く言葉を聞けば、ても扨も扨も扨も！

一度つかつた古切手の消印の掛らぬ奇麗な處だけを切り取り、外の切手の同じく一度つかつて片隅の

消えて居ぬのと接ぎ合はせれば、天晴新奇な微塵一點も批難の入らぬ切手が出來て、すなはち阿稻はそれをこしらへ、辛くして通用させたとのこと。

どうぞ御內分にとばかり、萎れて泣き沈まれて且は憐れみ且は叉舌も捲いた。唯の少女とは思はれぬ工夫。其工夫を聞いては確に五分方は可愛さも減るやうな心もち。——

「まあ飛んでもない事をねえ」。

感ずるよりむしろ呆れた方の奧樣の言葉は只これであつた。

◉くされ縁

第一

朝日亭に始めて掛かつた女義太夫竹本玉江と云ふ此年十七歲の少女、どんな好い月日の下に生まれた事か忽然として朝日亭を初陣とし、頻迦の妙音を高座に響かせ出してから以來、見る間に近所押しなべて梁の塵が落ちて阿三の用が殖えて來たとか、天の雲も步みを遏めて其區內は連日曇りとはしでならぬとか、尾に尾を加へての大評判。

朝日亭に詰め込む人數は御救ひ米に馳せ集まる貧乏人の數より多く、十五錢とまで刎ね上つた座料も何の惜しまう、聞いて置かなければ噺しが爲らぬと先を爭つて押し掛ければ、あはれ根太板も拔け兼ねぬといふ勢ひに、昨日までは乾からびて居た寄席の主人の枯葉面も一夜の中に形相かはつて利德にとろける喜色滿面、今日は見違へる戎さま其儘、そつくりと其顏を取つて紙幣の裏へ摺り込んでもまんざら似合はなくも無さうな位。　今までは薩張はやらなかつた寄席、一時は木戸を一錢臺まで引き下げて、それでも客を引けなかつた家が人氣とは言ひながらさて變はれば變はる物。

「入らつしやあい」と引つ張らせる人足も聲の好いのを高く雇つて。從つて積んで山と爲る客の下足も三時間の質に入れてすら融通も利く、好運が向いて來た曉には辷つて轉んだ目の前に金貨が落ちて居ると云ふ位なもので、三方四方が旨く爲つて如何にも主人が喜ぶのも無理で無し、これも何も玉江の御蔭、朝日亭に取つては大明神、外へは遣らぬと御機嫌取れば、引きつゞいて玉江の方の實入りもよし、面白い世の中となつた。

何で玉江が是程の全盛を極はめるかと尋ねて見れば實の處人氣ばかり。成る程玉江も下手では無し、持つて生まれた自然の妙音は胸の惡い思ひして蝸牛生玉子を飲むにも及ばず、玲瓏として透き徹るやうではあるものの、何と言つても年、節は中中まだ枯れず、それで人氣が是程に付いたこと、不思議と云へば不思議であつた。　年は當年十七歲と本人自身が名唱るものの、此社會に取つては珍らしい沙汰、

別段に可愛らしく小さく見せやうともせず然ればと言つて更けても見せず、有りの儘に粧つて有りの儘に語る、其さつぱりとした處が一つは人氣の元であつた。さり乍ら世の中には苦勞性の人も有り、十七だとさといふ評判に張肱して、「何の鹿馬な面な、藝人と萬年新造とは附物と云ふ事を知らぬか」、と遣り付ければ「それは酷い、横から見ても縦から見ても若いから仕方が無い」と刎ねかへす。硬派軟派相伴つて、御苦勞にもわざわざ區役所に足を運んで、戸籍帳を繰つて見れば何さま本當。十七といふ方が勝と決つて、あたら散財、晩食の反毛鷄をとうとう奢らされると云ふ仕儀。近所近邊は玉江の浮評で持ち切つて、中中飛ぶ鳥を落す位の古臭い言葉で形容の出來たもので無し、彼傳へ是受け取つて、東洋のあでらいな、ぱつち孃との評判がをさをさ諸方へ傳播して料らず不思儀な人の耳にまで入つた。

葦澤滋と言つて朝日亭とは程遠からぬ處に野廣く立派な角屋敷をかまへて居た人が有つた。年頃は二十八九、會社様の事に關係して素ばしこく立ち廻る性質とて損もせず、兎に角町內での屈指の身代と爲り上がつて、節無しの檜の板塀も上身代とて色艶よく、外搆へからして內幕も知れる程の果報者。女好きの爲る顔立ちだけに若い時から蕩樂が強く、それも爲盡くしては鼻に付いて、近頃では吾と吾心から固まつて來た覺後禪、氣に入つた女も無いとの見識から高くとまつて三十男が今だに妻といふ者を持たず、身も碌には飾らず唯唯安樂の內に心を置いて、あつさりとして居た人物。變りものとの評判の流石に無くも無かつた身が、何の張り合ひか、忽然玉江の噂を聞いて、珍らしく聞き耳そばだて、根から

りは爲まいかとは、やがて引き下がつた跡での抱への車夫の噂であつた。

葉から問ひ正して、「年は十七と…若いにえらいな」。變はり者の旦那のあの言葉、近頃天氣でも變は

第　二

縁と云ふ物は何處で引つ掛かつて何處で搦まり合ふか知れず、蘆澤滋は蕩樂に蕩樂を仕盡くして大抵の女が鼻に付いて堪らぬと云ふ程の身に似氣無く、是も出雲の神樣のいたづら事か、玉江の浮評に聞き耳そばだて、一度行つて見やうといふ氣が村村と湧いて來て、吾ながら妙だ不思議だと思ふくらゐ。其日は用事が有るので思ふに任せず、次の日は餘處から早く歸つたを幸ひ、半時間か一時間の間に急用を取り片附けたものの、さてまだ日も暮れず、寄席へ行くには間も有り、どうせ閑つぶしだと氣を換へて、かねて馴染の近所の待合黄昏とか言ふ家へ久しぶりで音なへば、藝妓上りの內儀が飛んで出ての愛想。御久久でムいましたと何返か繰り返して、相手が相手ゆゑ洒落を言ふ張り合ひも有り、其以來滋の足の遠ぬいた間に溜め込んだ新手の洒落をここぞと一度に振り蒔けば、直に見透かしての高わらひ、大分仕入が出來たぢや無いか、仕入元が氣に爲るぜと一言の返答相手にいくらか花を持たせて、羽織を脫ぐを切掛に「何ぞ御誂へは」との極り文句。「おや薄情なもんだ、些し來ない內に最う拙者の好きな物を忘れて仕舞つてさ」と撃ち込めば、是も巧者、輕忽には笑ひもせず、「つい取りのぼせてわくわくしてさ」と危い處で切り脫けて、二の矢を受けぬ間を引つ外して褌の外、思ひ出したやうに高高と笑つ

て見せて身を輕く下へ驅け下りた。

驅け下りて程無くふたたび上つて來る姿を見れば最早帶から着物から櫛簪まで變つて仕舞つた素早さ。目の早く付く客とかねてから知るだけ、其處を跟け込んでの改まり方に際どい處で人の氣を喜ばせる魂膽。喜ばせて何う爲るかと云へば、矢張り持上げて大黒樣を一人前でも多くと望む慾念。それとハ知つても受身に爲つて快く無くも無し、「おや大夫さま引き拔きに御爲んなすつたね、早い事だ。其手際だもの、人の身の皮を剝ぐ位何でも無いさ」と寸鐵に殺し付け、慌てて遣り返さうとひしめく處を取つて押へ、「ここの家ハ違つたものだよ」。「おや何ですとえ?」と眞面目になれば、澄まして靜かに、「何さ、伊丹から取り寄せると見えて大分酒の出が遲い」。

憎らしい御口と笑ひながら再び下へ立つて酒を急がせ、彼是一二杯まはるに從つて、誰ぞ掛けましやうかと促す相手に手を振つて受け附けず、今日ハ質達摩さと言ひなぐつて、又二三杯傾けた。やがて徐徐醉ひもまはる。何處から初めたか段段に話の緒口順にたどつて來て果てハ例の玉江の事。御前聞いたか、大層な評判だとね、本當かと眞面目になれば、相手も恐ろしく改まつて、

「まだ聞いた事はムいませんが、夫ハ夫は大層な評判でムいますよ。御客樣がよく入らしつてハ色色の噂で、實ハ一度噺しの種に行つて聞かうかと思ひます」。

「して見ると本當だな。大した別嬪でも無いと云ふに大評判とは不思議なもんだ」。

「處が評判の譯が有りますよ。　いえ最う聞けば聞く程御話の種に爲る、そりや餘程面白い內幕なんで、あの娘があゝ評判の好いのは親孝行だからと云ふ事ですよ」。
「ふふん、本當か？」
「好くは知りませんが左樣ですと。　けれど其處が又妙でしたね、男親ハ恐ろしい大泥坊でムいましたと」。
「其泥坊に孝行なのか？」
驚いた氣味で問ひ掛ければ、「いいえさ、其泥坊ハ最う御處刑に爲つちまひましたとか言ふ事で跡には阿母さんとあの玉江さんと二人が殘つて居るばかり——それからして義太夫語りと爲つたさうなのでして、唯あの玉江さんは阿父さんに些しも似ず、大層利口で孝行で、一人の阿母さんをそれはそれは大變に優しくして居るとの評判でムいますよ。　けれど、ねえ、夫や孝行には違ひ有りますまいが、何ぼ何でも泥坊の子だと聞いちや餘りねえ貴君、疎とも爲ませんのねえ」。
「御處刑とハ、殺されたのか？」
「さうだとか申しましたよ。　薄つ氣味が惡いぢやありませんか、ねえ、貴君」。
何心無し聞いたまゝを其儘に打ち明かされて滋も何と無く胸はどきつく。　どきつく物の、見たさはそれで益益募る。　聞き訖つてしばらくの間ハ無言。　たちまち屹と時計を見て、

「どうだ、今夜付き合はないか?」

突然に言はれて吃驚して、「へい何で厶います?」

「はて其玉江を一席聞きにさ。話しの種だ。行つて見やう。もうそろそろ日も暮れるぜ、誰か下婢をも一人連れて、ぶらぶら其邊歩るきながら」。

立つて帶をしめ直せば內儀も委細心得て御免下さいましと挨拶してやがて下へ下りた。

第三

やがて一同の支度も整ひ、滋と待合の主婦と外に小婦、すべて三人の一群は朝日亭までぶらぶら行き着き、下足の多さに頭からして目眩ひ、成る程大したものだと捨臺詞を言ひ言ひ中へ導き入れられて見れば、最早座る席も無い位のいきほひ。是程の人氣とは夢にも知らなかつたと今更三人が三人共後ればせながら驚きもし、頭の上へ乘られる程の苦しみを忍び、嘔吐の出るやうな前座の獨りよがりを好い加減に聞き流した末、いざや玉江といふ段に爲れば、言ひ合はせた樣に場內が忽ち直す居三昧、いよいよ今度だと待ち掛ければ僅の中入も待遠しく、五分と立たぬ間に手も鳴り出して玉江を呼ぶ聲が非常であつた。今更滋も舌を卷いて是さへも俗に連れられて我知らず膝をも立て直し、わが前に居る客の高帽子が氣に爲つて來るといふ仕儀。程無くして聞える紋切形の披露の文句、東西東西ここ許御聞に達しまする淨瑠璃外題と例の口上が始まるや否や、流石待ち望む事とて胸もいくらかどきつく鹽梅、捲き上

がる御簾と共に徐ろに顏をもたげる其一刻、例は違ふが嫁聟の見合ひの一刻と同じこと、一目の中に力は有り、人さわがせな女どんな顏かとこゝに滋も眸を凝らせば、しつ！圓顏のぽつちり目！

御簾が上つては一心不亂、見臺に目を注いで更に亂れず、下向の容顏をつらつらと眺めれば睫毛がくつきり目に立つて、すり付けて毛薄の細眉が長く伸び、そしてちんまりとした唇、彼處から夫程の妙音が出るものかと、まだ聞かぬ內は怪しまれる位の飾り無い風體——顏立から言つては別段に是ぞと云ふ程の處は無いものの、愛嬌たつぷりで憎氣は無く、何さま人受けは宜さゝうであつた。

やがて語り出す一聲二聲、聞けば何さま始めて駭く、思ひの外の枯れた咽喉であつた。顏を見ずに聞いたなら男かとも聞き紛ひかねぬ鹽梅、その羅綺にさへ堪へぬ孱細い五體から扨も案外と氣を呑まれて、夫でも今迄は危んで居た滋たちも座ろに感じ入つて來る。歌もますます佳境に入る。妙音いよいよ畫龍の睛を點じて、聞く身は何れも恍惚となり、身の世にあるのも忘れたくらゐ、喜怒哀樂、醜美善惡、凡それからの諸感覺はことごとく玉江三寸の咽喉の自由に爲つて、一座しばらくは水を打つたやうに靜まり返り、喘息も咳をせず、天井の鼠も噪がず、無二無三に聽衆の五體は是等稀世の天樂に綿のやうに爲れた。

曲が終つては一途に湧く歡呼喝采。十目の見るところ如何にも爭はれぬものだと滋もほとほと感に堪へず「駭いたよ」とばかり、感歎の溜め息に噛み交せて待合の內儀をふり向けば、是も充分に感動され

て目蓋さへも重重しく、「どうも」と言つた切りで跡は言へず、むら立つて歸る他の客を茫然として見送るばかり、三人が三人したたかに強酢で揉まれた。

さあ呼んで見たくも爲る。年は若し、孝行だしそれに又稀代の妙音、一點も拔けて居ぬと思へばとても見捨てられた物で無し、屹となつて滋は身を起こし、「感心だ感心だ、本當に駭いた」と二度三度つづけざまに呟いて、待合の主婦の耳に口、

「呼ばうよ、其處邊の料理屋へ。逢つてしみじみと聞かう」と云へば、笑ひながら此方を見上げて、「大分御氣に召しました」と冷やかな言葉で一本斬り込む。「何さ御前たちにも聞かせて遣る」と流石事馴れた身ながらたぢろげば、「ほほほほ、御爲ごかしで御忝に存じます」と――畜生め！ もう腹を見すかした。

直に事の趣きを席へとほして滋等三人は一足さきに出、其近所の料理屋の座敷へとほつて待つ間程無くやがて玉江も席へあらはれた。

第四

待ち設けて居た事とて、玉江が入つて來るや否や三人の目は一同に玉江たつた一人の全身の上に注いで、特には一際目敏ひ内儀、見る間に頭の天邊から足の爪先まできらりと稻光りを行き亘らせて、さあ此方へと席を開けば、おづおづとして會釋する體、それさへも落ち附いて居た。

是でも泥坊の子か知らんと中中に世の浮評が今更噓かとも思はれる鹽梅、口にこそ出さぬものの、一同が扨感にも堪へて、從つて滋の心中も何と無く其態度を攪き亂される樣な工合ひ。いざと盃を勸めて後一くさりばかり語らせ、好い加減に飮食させて、兎に角其夜は其儘にさして更けぬ内切り上げ、別れ別れに爲つて一同家へと歸つた。

歸つては滋の心に枝を張り、葉を繁らせて來た懊惱。不思議に恍惚と爲つて目の底に玉江の面影が絕えやらず、どうしても思ひ切られぬ儘、殊には物事の大抵自由に爲る身分とて、玉江を自分の持物に爲たくも爲る。儘よ、やつて見ろと決心して、それから連日連宵、此處へ呼び、其處へ招き、手を盡くし、品を極め、それと意中をほのめかして今日は望みが遂げやうか、翌日は快い返辭が有るかと心待ちに待つては見ても一向に驗は見えず、路傍の一本柳、靡くやうで扨なびかず、いとど心は焦燥つていとど又追目にも掛る、兎角する間に二月あまり空想の內に過ぎた。

流石の滋も業が稍沸えた。花を折り、柳を矯める艷な事には吾から馴れて居るとも思ふ、其身が扨無殘に失敗して、高が十七歲斗りの少女を二月も掛かつてどうとも出來ず、色色に盡くした深切もほとほと空になりかけたとれ! 馬鹿らしくて噺にも爲らず、金で叩いても碎けず、情で責めても脆く爲らず一種比類も無い相手、さてさて妙だと思ふに付けて、奇妙な物でいとど又斷念も出來なく爲つた。或は深く言ひかはした相手が有つてかと拔目無く氣を附けても一向に其邊の事も見えず、ならば毛嫌ひ

を爲れるのかと再び首を捻つて見るに、自惚かは知らぬが左樣でも無いやう。荒く掛かつて退引言はせず思ふ儘に爲る事を知らなくも無し、それ乍ら夫では根から面白味も乏しい譯。羊羹を丸嚙りにする不風流は道樂上りとて忍んでも出來ず、つまりは情からしてぢわりぢわり首筋を〆めやうと思へば中中に骨も折れた。　時には思ひ切つて荒く遣つて見てどうだ否かな妾に爲るのはとしげしげ顏を見詰めれば俯向いて何とも言はず、段段に攻め寄れば仇氣無く頭を振つて、其邊に見得も追從も無い體、畜生め！未練を殘させやがる！　かねての經驗で滋も知る――袖褄を引かれて辭退して蝦の刺身の樣にぴんしやん跳ね付ける婦人でも靡く靡かぬは顏色に屹度あらはれる物、仄めかされて外部ばかりはよし何れ程つんと爲やうが、櫻色が頰に散れば決して否とは思はぬ證據。よしや無言でだんまりむつつり眞晝間の耳木兎を極めて居やうが挑まれて忽の間に蒼ざめて來たらば最期、肱鐵砲はやがて食ふと、此道の秘傳は心得て居なくも無い自身、そこからして割り出せば、玉江の樣子も脈は有り、すなはち未練は殘つた。

如何さま水は石の錐でも無し、但し久しい間滴れば穴も明くのが自然の道理。氣を長くして掛かれと斗り、それからして又二月三月滋の熱心はますます加はるにつけ、玉江の方でも疎まぬ證據は身に關する一切の事果ては洩らさず滋にも告げる程の仕儀、親が泥坊であつた事まで打ち明かして、料理屋の奥座敷、さし向かいて身上噺に移つた時などの有り樣は傍目で見てどうしても譯は有ると思はれた。

餘りの事にさすがの滋も果れ辛抱の精を切らせて、是までの心づくしの程を段段に繰り返し、恩がましく言ふでハ無いが、實ハ御前のために何の位氣骨を折つたか知れぬものを、何が志願か、まことに强面い。どうしても否だと言ふなら是誠に仕方は無し、緣が無いとも諦らめて決して怨みもつらみもせぬ、と故意と柔かく、物哀れに搔き口說き、ここを最期と斷念の摸樣を見せれば、人ぢらしな蛇の生殺し！物をも言はずさめざめと泣き出して、さも情無がる樣子。それで妾が否なら妻にでも爲る氣だが夫でも否かと立ち返つて未練を殘せば、一生懸命と云ふ語氣で、「勿體ない御言葉。御部屋へ參る計りでも身に取つて罰の中る位でムいますものを」とばかり――「分からないな夫程に思つて呉れるなら今ここで承知と答へても宜ささうなものだが」。――「それは御答へいたしたいは山山でムいますが…」――「それで？…」――「あの申しにくうムいます」。――「いいさ、どうした譯なのだ？」
さし寄れば又泣き沈み、胸にとほる計りの一句の言葉。――「男を斷つて居りますので」。
おやと呆れて暫時見詰めて、「男…男を、あの斷つた！　とは又何で？　心願か？」
泣いて泣いて泣き死ぬ程、淚の中から忍び聲。――
「母の病身を治したさに…つひ心願を掛けました…はい、不動さまへ、昨年の秋！」

第五

淚脆くも無い身ながら滋も座ろに目を濕して、いとど又濁り氣に染まず男をも斷つたと云ふ少女氣の

仇氣無さに愛らしさも加はり、其心根の不愍さも思ひ遣られ、中中に巫山戲て掛かつた吾と吾身がほとほと恥かしくも爲つた。　感心なはなしだ、まあ左樣とは知らなかつたと手持無沙汰に爲つて言つて、我ながら手持無沙汰の聲柄も間が拔けたやうにも思はれた。　が、向ふは笑ひもせず、目蓋重くなつて俯向いて、ややをさまり掛ける涙を繰りかへし繰りかへし拭つて居る體も哀れであつた。

「妾ハ本當に是迄いろいろに心身も及ばず盡くして下さる御深切を更更仇とは思ひません。いつも母に嘶しましてハ實は蔭で拜まない斗りにして居りますので、決して決して我儘を申して貴君樣の御氣に逆らふのでは厶いません。　どうぞ其處だけは…あの洵にこんな否な事を申しては…」

何を思つてか其儘に言葉をふつと食ひ止めた。

「いいさ、まあ感心した。　いよいよ感心するに付き、御前を見捨てる事は出來ない。それでと、妙に立ち入つて聞く樣だが、何時迄男を斷つ氣なのか？　期限が無いと云ふでも有るまい。　一年なら一年、二年なら二年、大方左樣なんだらう？」

「はい」

「はいぢや分からない、いつ迄だ？　しつこい男だと思ふか知らないが、實は御前のために己も浮身を窶して居る。　乘り掛かつた船、男を斷つて居るなら仕方は無い、己あもう用は無いと傳法肌な事も言へないさ。　期限が盡きる迄は先志を破らぬとして置いて、其上否で無けりやあ私の處

へ來たらどうだ？　と、まあ此方だけは思ふんだが、御前の腹も夫や有るだらうし…何とか返辭をしたらどうだね」。

やさしく言はれる丈猶かなしく、「どうも其處なので厶います。　ここで妾が御返辭をいたしたら最期、もう是限り旦那さまは…是非……もう、あの…」

いよいよ又泣き沈まれて譯が分からず、私がどうしたと言ふのだと差し寄つて尋ねれば、啜り泣きの裡から微かに洩らして、「御目に掛かる事が出來ますまいと思ひますもの」。――「なぜさ？　妙な事を言ふぢや無いか？」――「いいゑ妙では厶いません。　御志に從ひたいのは山山で厶いますが…ま、何う致しましやう、板挾みに爲りました」。――「板挾みとは何うしてねえ」。――「はい、母の命のある限りは男を斷つとの御願でして…」

それ故に迚も纒まつた縁は繫げぬ。願を破れば母の命を無くなす譯、破らずとも母が死んだなら其上での約束すれば是れ母の死ぬのを待つと云ふもの。さればと言つて折角の御志いつまでもべんべんとして居るのも心ぐるし。とても成り立たぬ縁との趣むき、もはや包みあへずに殘らず胸中を打ち明けて、「もう斯う申し上げますれば、何の道御愛想も盡きた事と心から思ひます。　それが苦しさに今迄はとやかうと此處までを申し上げず…處がとうとう…ああ今更もう致し方は…もう妾は締めました」。

と斗りで泣き沈まれて見れば、いぢらしさ、可愛さ、いたましさ！　馴れた身も熱酢で責られて――ても扨も健氣な心底！　思へば珍らしい泥中の蓮花、そもそも是程とは知らなかつた。

不道理ならば知らぬ事、道理一點の批難も入らぬ烈女の一念、此方も男――今更見捨てゝなる物かと吾を忘れて滋も握る拳。拳で涙を搯り拭つて何の何の妾三昧！もう左樣わかれば無理は云はない。但し此上とも變らずに及ばずながら手助けに爲つて遣らうと是も聲をうるませて慰めれば、ちッ！玉江は身をもだゑて、手を合はせて拜んで、一切無言。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

最早清潔な交際、相變はらず滋は玉江に拔目無く目を掛けた。其儘で半月ばかり。忽然として玉江の母のいつもの性質、病ひの問屋だけ有つて一番に流行感冒を引き込んで、肺炎にかはつて、五日六日の瞬く間にどつと床へついて枕も上がらず、孝心の玉江の周章狼狽、毎夜幾百人の見物を振り捨てて寄席へも出ず、枕元に冊いて醫者よ、藥よ、針よ、灸。滋も聞いて駭いて、驅け付けて來て見て介抱も等閑では無く、折り折り尋ねては慰めれば、それに力を得て玉江も一層の勇氣を增し、茶だち、鹽斷ち、水垢離、日參、さまざまに手を盡くしていたわつた。

第　六

さまざまに玉江が盡くした介抱、その効も終に空しく、悲しくも玉江の母は次第次第に病が重り、やがて半月ばかりしか煩はぬ内この世を去る事となつた。 老病ゆゑ見込みは無いと、其前からして醫者も見切りを付けたものの、子としての人情、それでも若しやと思ひ迷へば、今は息を引き取るといふ處まで押しつまつても猶どうかと僅かに頼みを以けて居て、いよいよとなられて仕舞つては宛がら夢かとも思ふ計りに爲つた。死顔をさし覗いては涙、耳の底に殘るやうな聲を思ひ出しては涙、涙に浸されて他の見る目も氣の毒なまでに泣き迷ひ、歎き悲しむいぢらしさ―― 怨言を寄せられた醫者の身も骨節は寸分に刻まれて、悄悄として歸るといふ切所。五十年の命なら十年は減るらしく思はれた。

生にく臨終の時に滋は來合はさず、それでも感心に寄り集つて居る女義太夫仲間、それらが甲斐甲斐しく立ちはたらき、やがて使を差し立てて、程無く滋も宙を飛んで驅け付けた。 驅け付けてづつと通る奥の間、入つて來る姿を一目見ば、折角やや收まつた玉江の涙もまた一時にほとばしつて、食しめる氣でも洩る泣聲、ぐたぐたと爲つて突つ臥すのをさし寄つて、「とうとういけなく爲つたか、これ」と一句言はれてはますます堪らず、身を震はせて顔をば上げず、「尤ともだ尤もだ、そりやあ肉身の親子の間がらだもの……ああ氣の毒な事に爲つたなあ! 玉江、おい、これ、しかし、泣いてちや……一體いつだ、いつ息をしき取つた?」

何でたしかに玉江が答へられるもの。座に居合はせた人人が代はつてしんみりと聲ひくく、聞いたま

の委細を物がたつて、其夜は滋も遲く迄居て、一切の事何から何まで心付けて遣れば、その威光で寄つて來てはたらく人も多し、それから一日置いて次の日にとどこほり無く野邊の送りも濟み、藝人の常とて見送りの人も多く、それらに對する物入りは總べて滋が腹をいためた事とて玉江の方に苦勞は無く、ああ、仕合はせな佛樣だと褒められる嬉しさにつけてまた拔かりの無い滋の恩義には感泣袖も朽ちるばかりであつた。

淚の中に日も過ぎて、彼是して三十五日、それ迄は玉江の親類つづきとか言ふものが來て手助けをして居たものの、それとても永くさうして居られた物で無し、やがて玉江が一人と爲つては稼業も最早出來なく爲るのは明けて見たより强い斷、どうだ其の邊の御前の見込はとある夜火鉢を中のさし向ひで、しんみりと滋に問ひ掛けられて、今更のやうに胸もどきついた。賴もしい男の世話に爲ること、此の場合何より嬉しい事ながら、摺れぬ身だけに此方からして口は切れず、返辭にまごついて俯向いて居て、「こないだ言つた事否か」と言はれて「纔にどういたしましてと」返した。「阿母さんの命を狙つたやうで何だか變だけれどもう是肝心の阿母さんも無くあつて、御前の願も解けたやうなもの、是からは斷然寄席をやめて、いよいよ足を洗つたらどうだねえ」。――「はい」。――「はいとは……本當か?」と念を押せば、さて口よりはよく物を言ふ目付き、怨めしさうに滋を見上げて、たちまちこぼす實情の淚の一滴。「ぢやあ、さうと極めるがいいかね」と言葉を番へれば、たちまち飛びすさつて禮をして、「不

つつかもの……」と言つただけで其跡は更にわからず……

第七

素より玉江に於て蘆澤を嫌つて居た譯でも無し、もはや命を捧げた母親も死んだ事ゆゑ最う宜からうと言はれれば、それを拒む筋も無し、やがて蘆澤の本宅に引取られる事と定まつた立身出世。あれも全く孝行の徳だ、いいや落ち付いて居てそれで馬鹿で無かつた御かげだと世間の人に羨まれるにつけ、つらつら身の程の俄出世が空恐しいやうでもあり、名目こそは妾であつても、旦那に本妻も無い身分、本宅に乗り込んでいよいよ勤め次第に因つては美事本妻の籍に立てなはる望みもある抔とは扨も夢では無いかと思ふばかり。旦那の方に何か都合が有る事とて當分の間は舊のまま、舊の住居に玉江を置き、それからして一ヶ月も經てば何や角や支度もととのふ事ゆゑそれまで辛抱して居ろとの言葉。承知いたしましたと呑み込んで最早假初にも浮いた氣振を見せず、以前の肌合たちまち別人と爲つたかと怪しまれる位あらたまつて、束髪にしやうか、丸髷にしやうかと今は質美な氣の揉み方、旦那もいよいよ可愛く爲つて、やがて殘る日數も十日ばかり、來月の一日から引き取るとさへ言はれた。

幾度も言つた禮ながら、又やさしく言はれれバ又あらたまつて言ひ出す杓子定規の禮。すれぬ女だと一方はさてをかしくも有り、「他人行儀だね」と一寸よろこばせて、刺身か何かで銚子一本、その夜はかるく飲んだ。飲みながらの色色な物がたり、「玉江」と言ひ掛けて不圖やめて、「おや無かつた

け、玉、阿玉！　はははは、口馴れないので言ひにくい。　是から御前に馬鹿にされる種を蒔いて今迄の惚氣を打ち明けて見やうか。　はははは、否だと？　否だも無いもんだ。　言はさぬ前からとうに御存じだらう。　欺かされて浮身をやつして、本當に男といふ者は馬鹿なものさ」。　だまつて居られなく爲つて氣の毒さうに、「あんな事を仰やいますよ」。――「あんな事も無いもんだ。ね、本當に男と云ふ者は馬鹿な物だと自分ながら知つてるね。　女はそれ程で無く、つつしみが好いから感心さ。　男で御覽、肱つ骨で女に膝をぐりぐり遣られると疼くつても我慢して嬉しがるから好くしたものさ。　から爲れれば斯う、ああ言へば斯う、この女め、口から出まかせ、うまい事を言つてやがると滿更此方で知らなくも無いが、扨其處だて、知つて居ながら乘り掛かるね。　御前に於ても亦然りさ」としたかに焦燥して置いて、其言葉の訖りもせぬ間火鉢越に玉江の頰を一寸一つき、「それ其笑靨だもの」と二の矢を射れば、たまらなく爲つて笑ひたふれて、聲も立てずに笑ひを呑む體、つくづくと見て滿面とろけて、「不思儀な藝も出來るねえ。　まるで雨蛙そつくりだ！」

それからして又何心無い滋の物がたり、御前も家へいよいよ來るからには何を隱さなくてもいいが、實は私の家も親の頃までは可なりであつたのだが、不慮の事から親父も非業の最期を遂げ、それから身代も大に疲れてやうやう近頃立て直して行く位なもの、不自由は覺悟して居てとの言葉。　さすがに此方も聞耳そばだて、「大旦那さまは？」と目をみはれば、「何ね、泥坊に斬り殺され、有金を奪はれた」。

――聞けば、ぎよつとする處も有り、「へえいつ頃で厶いました？」――「何さもう四五年前」。――「あの唯今の處に居らつしやいまして？」――「いいや其頃は下谷に居た」。――「下谷は…あの何の邊で？」「御徒士町三丁目さ」。

聞いただけ、それだけで玉江は無言、その夜はその儘に爲つた。其夜蘆澤も其處へ泊り、翌朝起きて見ると玉江の姿が見えず、あたり見回すと蒲團の前に書置一通！　取り上げて見れば玉江の自筆！

「……前の世の因果もつたい無くも大旦那さまを手に掛けたはわたくしの父にて只今御はなしにて始めて伺ひ申し候生きて御目にかかれぬ面目無さ唯今までの御恩の程もしみじみ忝なくそれ是にて命を相捨て申し御詫いたし申し候まま何とぞ變らぬ御志しただ不愍と思しめし下さらば有りがたく存じまゐらせ候……」

ただし跡は讀めず、直に飛び立つて出た裏手、目先にぶら下がつて居たのは玉江の死骸！　曉烏の聲も物あはれに空も今降り出すかのやう曇つて居た。

◉あめは降る降る

あめは　ふるふる、はるの　夜しづか、
のきの　つばめの　ひそひそ　夜鳴き。
ひとつ　小そでの　はだ　なめらかに

あすは　たのしみ　さくらも　咲かむ。
あね　よ　いもと　よ、そろひの　簪
花の　ふぶきに　あす、明日　むせぶ。

◉ゐなか娘

ゐなかむすめの　みやこぶり
はやりの　洋服　ああ　うれし。
かきねの　はなの　さくらいろ。
かほも　きものも　ひとつ　いろ。
いろ　めづらしき　野邊に　でて
見れば　わが　みは　女王なり。
きのふに　かはる　いでたちに

ねだの　からすも　あきれがほ、
女王、女王　と　ほめそやす。
むらだちむぎの　みすの　かげ
はぢてや　すがた　かくしつつ
こうたを　もらす　みそさざい。
るりの　しとねの　わかくさも
この　身の　ものか、さても　さて。

◉母のなさけ

（一）

いづれば　おくりて　影を　ながめ、
かへれバ　かどべに　たちてむかふ。
いでゆく　はてをも　まもる　心、
あだには　えならじ　ははのおもひ。

（二）

つれなき　浮世の　風にもまれ、
身をさへ　はかなみ　かへるわが子
なくなく　はげます　ふかきなさけ
あだには　えならじ　ははのなみだ。

（三）

いさをも　のぞみも　たてつ、遂げつ、
片頰に　ゑみつつ　かへるわが子
なくなく　喜ぶ　ふかき　なさけ、
あだには　えならじ　母のなみだ。

（四）

さだめの　月日は　身にてまもり、
うまれて　みとせは　乳にて守る、
なさけは　いくとせ　へても盡きず、
あだには　えならじ　母のおもひ。

（五）

あぶらも凍れる　雪の　夜さむ、
ふしども　ぬくきを　子には　させて
ひえしを　わが身に　しけるおもひ
あだには　えならド　はゝのおもひ。

（六）

己が子と　思へば　やさし言葉
ひとしほ　うれしさ　身にもしみて
こたへはなみだの　露にしめす、
あだには　えならド　はゝのなさけ。

◉春の花鳥

（一）

つぼすみれ、やへざくら、
ながき　ねふりを　いで　さませ！
この　世を　かざる　かみの　慈悲
慈悲の　にほひを　かがやかせ！

（二）

つばくらめ、にほひどり、
みどりの　野邊に　まひいでよ！
この　よに　ひびく　神の　うた
うたの　こころを　つたへ　かし！

◉まなべ、あそべ、ねふれ

（一） まなべ

こどもよ、まなべ、 おもちやを しまへ、
あそび たい なら まづ よく まなべ。

（二） あそべ

こどもよ あそべ、 わすれよ うさを、
なまけず あそべ、 きままに あそべ。

（三） ねふれ

こどもよ ねふれ、 ねむりて やすめ、
からすも ねぐら、 金魚も しづむ。

◉いづれ務めのある世かな

かあゆき ひなの すみかに と
はとは こえだを 巣に はこぶ。
むかし わすれぬ ぬれつばめ
やなぎが もとの かぜを とふ。
あさげの かぜを まちわびて
ひばりは 雲に のど 鳴らす。
いろ さまざまの あやにしき
そのふに 蜂は うたひゆく。
いづれ つとめの ある 世かな、
いづれ つとめの ある 世かな。

◉忍ぶ合ひ圓の炭俵

不景氣から揉み出した娼法筋、三圓か四圓で立てなぐりの安妾が近頃若草と同じく一雨毎によきによき殖けて桂庵は堅氣堅造の周旋より此方の口に忙がしいものの、扨何と云つても角と云つてもいざや御圍で候ふと名乘りを上げた日に爲れば相應の嗜みも爲なければ爲らず、眞逆に旦那との向かひ火鉢で爪垢切れの手は見せられず、其れからして水仕業をば錢の出ぬ婆やさん即ち阿母の君へ專任させて先づ其方の苦勞は減つても其次ぎに差し當たつては衣裳の一事、縱や二子木綿でも裁ち下ろしを引つ掛けたのならくだら無い古物のべんべらよりは遙かに奥床しいには違ひ無いが、どうせ相手の旦那と云ふは高が三圓や四圓の金を淸水の舞臺から落ちた氣ではづんで居る盲同前の人物、眞正の意氣とか粹とかいふ物の味を嚙み分けられたものでも無し、「おや御前唐棧着たのか？瘦せ、瘦せ、黑ちりの方が似合ふ。」「だつて彼れは年數物です。」「うんにや年數物でも搆はんさ。腐つても鯛は鯛だよ」と、斯う分からずやでも話しには爲らず、此方許り氣を揉んでも肝腎の旦那殿に分からなければ詮は無いと、夫れからし

ての贋物づくめ。晴れやかな座敷へ出れば折り折り冷汗もかくものの、性無い身には自由も利かず、襦袢の袖から上着まで身に着くと言ふ品物は一切合切怨みつこ無し、二度三度は何れも何れも洗ひ張り屋の手に掛かつて、衰れ横絲の強つた處は巻き附けの引き糊で夜目遠目と胡麻化すだけ。來年は壁の塗り込みにして大抵罰も中たるまいと思はれる羽織の縮緬、それも何うか斯うか正宗の名刀、さはると切れると云ふ迄に爲つたものの、如才無く、地薄な處は染め綿で厚く見せるといふ魂膽。身代も魂膽なら身の廻りも魂膽、それから旦那に向かつても魂膽なら酒屋米屋を引つかけるも魂膽、魂膽で固め着けた身の上の、嗚呼前生は何であつたか？

白粉も入れば油も入る、血の出るやうな中から體裁だけに猫といふ飾り物を畜つて居て、阿母と兎に角暮らす、唯の四圓こつきりで立つ目は無し、つひ腕に撚りを掛けて手當り次第稼ぐ氣になる、何時か桂庵は日日出入りして旦那の御用はと聞きに來る始末と爲つて「どうだえ御婆さん好い鳥は無ささうかね。」「然うさ月六才で四つ五つ出すのなら滿更無くもありませんよ」。「そんなら當たつて見たいものだね。唯た一人ぢやあ何にもならないからねえ。後三株ぐらゐは引き受けられるよ」と鳥だの株だのと青物市へ行つたやうな問答。夫れからしていよいよ娼賣氣。初めは可なり初心でもあつた身が墮落するには修業も入らず、忽ちの內に二人三人一手に引き受け月十五六圓の收入はあり、其處が手管で旦那御入來の日を定めず、あなたの外に旦那は取らぬと哀れがらせての款待に、鼻毛の長い旦那殿も一人で四圓ぢ

や安いもんぢやと手球に取られて罪も無かつた。

抑も此三人迄旦那を引き爲けた腕達者を誰かといふに神田區は旭町邊とやら其近處での評判者御面相は差して佳くもないが、白粉萌えのする顔で目付きに何と無く愛嬌あり、名は其人の體を現はす阿花と云つて語呂も善く、三人が三人ながら程善く引き受けて襤褸を出さず、旨い都合にして居る內何かの都合があつて、三人の中の一人は向かふから手を引いて得意が一軒減つたものゝ今に又見付けると思へば苦にも爲らず、跡の二人の旦那大事と面白く綾なして居たが、阿花とても矢張人間まづい物のまづいは人と同じく、金で叩き付けられた凸凹旦那、偶には口直しも爲て見たく、然ればと云つて金も無し、馬の足も食べられないければ鹿の肉も菜に爲らず、何がなと首を捻つた思案の末とうとう出入りの活洗屋の若い男に白羽の箭が立ち、阿母迄が承知の助。先づは命を伸ばして居たが、偖此事が旦那に知れたらそれこそ以つて飯の食ひ上げ。薄つめたい前髪を旦那の鼻面へ押つ付けて、貴君ばかりですと言つた魂膽、破れたら大事と其處からして割り出した一世の智慧、一人の旦那は大抵が土曜日に來ること故此方は大丈夫として今一人の旦那の爲めにといしくも巧んだ天晴計略活け洗ひ屋と打ち合はせ、旦那が來て居る時は何時でも裏の門口の前に炭の明き俵を出して置くから其れを目印しとして其時は入つて來て御呉れでないと、合圖を極めてからといふものは炭俵はいつも門口。氣の好い旦那は平氣の平左。これで旨く濟んで居たが、或る日も亦旦那の御來臨にそれと阿母が心得て、いつもの通り用意の俵を裏口へ出

して置いて大安心して居た處運の盡きか折り惡く此晩活け洗ひ屋も遣つて來て、例の通り裏口へ廻つて見ると出入り禁制の炭俵有り難いことに今夜は無し。其實をいふ時は阿母が出して置いたのを通り掛かりのあたゞけなしが何心無く目を付けて焚き付けにしやうとの出來心から持つて行つた事なのだが神ならぬ身の活け洗ひ屋がそれと察すべきやうは無く、一圖に首尾が好いと心得て裏口から勢ひよく「阿花は在宅か？久し振りでしみゞみ顔を見に來た」と誰憚らぬ高調子。づつと奥の間へ立ち入つて旦那と顔を見合はせて是はと斗り吃驚敗亡。阿花も阿母も呆れに呆れて口を開いた儘言句も出ず、旦那も遉に様子を見て取り、席を蹴立てて歸つて仕舞つて其後は鼬の道切り。日文矢文も効を奏せず、御前はなおと活洗ひ屋に母子揃つて攻め掛けたが是とて知らぬと爲方無し、今は旦那は殘る一人。是では爲らぬと大騒ぎして、それでもづうづうしく旦那に向かつて「御知り合ひの方に妾の御入り用は有りませんか！」

◉鎌倉江島　鴉の道行

一名種はじり

佐佐木信綱氏が草廬を叩かれた處で俄に始まる遠征沙汰。時は枯れ野の眺めも凄し、山痩せて水も涸

れたあたり、是から鎌倉への膝栗毛、一むち試みてはとの催しに直に相談も落着する、何がさて其人は名もやかましい「綱」の通り字頼朝に池月の名馬をねだつて美事宇治川で曲馬を遣つてのけた四郎高綱に縁も有り、そも此人と一所ならば差し當つて自分は佐佐木盛綱、是は不思議な時代ものと先早心が動くにつけても早その當日が待ち遠しく。何にしろ兵は速かなるがよし、廿七日と定めろと腮で切り出し、腮で應へ、それにしては今一二人、同じ志しの一味の勇者を募れと其日は夫でわかれた。

やがて鎌倉攻めの一味に加はつた外の人は佐藤珠、柵山人の二氏、佐藤といふ名も坂東武者は全く縁の無くも無しとつまらぬ事を理屈にして、明ればの明治二十四年の十一月末の廿七日、一番汽車といふ處を褥が原の伏勢して眠り過ぐして間に合はず、八時の汽車に驅け付けて御定まりの汽笛一聲、相變はらず珍しくも無い途中。

この朝の寒さと言つては此冬での骨頂とて面面の高い鼻をもがれるやうな風の嚴しさ。汽車の玻璃窓にすら凄まじい霜が凝り着いて、外を見ていよいよ驚く。平原の枯れ草はいづれも白い粉を吹いて、廢殘の蓮の葉の殘る田に薄氷が閉ぢて居る體、佐佐木氏と筆者との兩人、外套連が勝ちを〆めたと詰まらぬ處で威張りもする。

見馴れても見馴れても見物の價うちの有るは誰も鎌倉と言ふいきほひ。まして筆者は猶一入此頃は都の花の「兜菊」やら新太平記やらの用意とて、今はじめてでは無いものの、又勇み立つ心もして兎角は先

ばかり只急がれ、大船を出放れていよいよ鎌倉近くなり、懷かしい山影を見た時は故人に逢つた心もした。

鎌倉で降りて茶屋へ休めば相變はらず御案內とて無駄腰を屈めて跟く車夫を劍呑みで追つぱらひ、みづから名唱かけた案內役、兎も角も鶴岡の八幡宮へ滿足に參詣すれば例のとほりの懷古展覽會も有り、一人前五錢宛を出して縱覽を乞へば、絹紬か太織か何しろそんな羽織の黑いのを着て二子の上衣を着流にした二十すこし上の若い人が立ち出でて戶を開き、さあ見ろと擧動ばかり。これは例年の普通の時とは些樣子が違ふやうだと些し面くらつて其人をつらつら見れば手に一冊の小本を持つおやなる程われを見て讀み立てるのかと思つたものの、其推察は無殘や外れて、先生は何やら面白さうに自身ただ讀むばかりで只立つて居るだけで何でも無い、扨は見張りをするだけか、見張りをする間にも本いじりするとはえらいものと頗る內心に感服し、まづ左りの端へ入つて見れば、宮司宮崎博尹氏の和歌（假名づかひが少少妙な）が貼り付けてあり、それからしての古物づくめ。品數は何さま多し、やれ畠山重忠の何、やれ源右府の何、やれ靜御前の緋袴、やれ巴御前の裲襠——と、是は少少御負けながら何しろ一見して昔を懷ふ正眞正銘の品物、實以て正美正銘の品物、決して贋物でも無い貴い品が瓦礫のやうにそれは無數。これが五錢とは安直だ安直過ぎて淚が出ると後で取られぬと知つての風呂敷。昔は右大將賴朝の子供の時の髑髏を見せたと一つ咄しにも言はれたとか、今は何やら左樣でも無い趣き、まづは見物

の仕合はせ乍らさり乍ら餘り多くて、目が眩んでどうも分からず、是がそもそもの遺憾であつた。遺憾は外にもう一つ、品物の説明の附け札の文字や文言に少少奇妙な處が有り、「文學上人」といふは床しい名、「曾我五郎時宗」といふ一種の人、それから熊谷次郎直實が目上から「貰ひし」といふ品物——一體、文學とか時宗とかいふ人はどの時代の人だつたらうと拜見はしながらも唯不審で埋つた。

不審で埋つて社を出ながらも流石また思ひ出すのは昔の事。ああ此昔は四十間四面の廻廊に三浦富山などの面面が星のやうに整列した時の立派さはと眞面目になつて涙ぐめば、「あの時やそりやもうどんなに立派でしたらう。こんな處から和田義盛が上がつて來て、ね、丁度風邪の治り揚句だとか言ふ話しで、鼻の下を眞赤にしながら頻りと咳きをして居ました」と相槌を打つ人も有り。「さうだつけ、それそれあすこ、靜が男舞をやつた時、あすこの柱の處に工藤左衛門が坐つて居て埃を浴びせられて居ましたつけ」と又意地を張る勇者も有り。門の內側建て掛けた長刀の鞘が修覆もせぬ故無殘に割れた、それを麻糸で縛つてゐるのを、見付け出さずともいいに見付け出して、やれ、ま、情無いと言ふも有り。それからして外へ出れば例の公曉の銀杏の木がまた下高な事を言はれる。まこと此鴉の道行に出逢つては何であらうが迚もたまらず、手當り次第に蹂躪して、「見さいな、坂東武者の手並を喃！」

土堤の切り通しかち境內を出、御谷舘を見て新道を過ぎ、直に建長寺に行つたところで、流石に今までの鴉どもも些しく口がくたびれ氣味で、前ほど暴くは取つてこなさず、彫刻や格天井を生眞面目に筆

者が説明しても其下からは冷かされず、銅瓦の寄進名簿を馬鹿な顔して見たぐらゐで、譯もなく其邊を歩き、やがて横から寺を出た。

出てから向ふへ一目散、山の内といふ著名な處へ是よりは御案内とわれわれ二人の嚮導が兎も角も五六町面面を連れた處で扨いくら行つても何も無し、兩側は山の内の人家が有つて切り芋杯が乾してある、で無ければ甘干し柿が吾吾の舌見たやうに吊るされてある計りで根から葉から興も無い、これにいくらか氣が付いて、そこらの者に道を問へば、飛んでも無い、ここを眞直に行けば大船の方へ出ると――扨も扨もと大きに駭く。これが失策のそもそも序幕で、さあ案内の申し譯無さ。坂東武者の意地として差しあたり詰め腹が極つた相場。未練は言はぬ詰め腹爲やう、時間もすでに十二時過ぎ、是から鶴が岡まで歸り、門前の角屋か三橋で晝食の詰め腹と致さうかと先切り出して見た處、その相談には異議も無く、それから又舊の道。忌忌しくも有り、くやしくも有り、何さ去年とは道が變はつたやうだ、大方市區改正が有つたのだらうと物の見事に辨護すれば、無殘な腹の虫どもが早く詰め腹と行かぬかと勇ましくも責め立てる。待て待てと賺かす戻り道、しやう事なしの口から出まかせ、たまたま逢ふ往來の者を時代ことばでの批評三昧。「見さい、むかふから參る武士、あれも鎌倉の古つはものでがな御ぢやるべい。綴ぢくつた重ね裏の厚鞋に目盲縞繼繼の脛當固く、御ん襤褸襤褸の印半天丸に大の字の紋打つたる大襤褸大荒目の鎧着て先祖傳來の麥藁帽子の兜をかぶり、澁皮の筋入つたる天秤棒に分捕の兵

粮、刈り稻の實無し藁を曳曳と擔ぎあげて此方を指してまゐるで御ぢやる。　稍眠氣ある面付きは兵糧無しの是も武士道、木賃が宿の宿直して立ち歸らるると覺えて候ふ。」

やがて彼是一時頃、鶴が岡まで歸つて來て三橋へ飛び込めば相も變はらず御言辭は好し、奥の又奥の奥に導かれて「鈍や八陣に入つたるぞや」と柵山人の大たんか。　日あたりの好い椽側、見れば乾してある昨夜の夜具あれも鎌倉武士の宿直の名殘りと無理にも鑓にもこじつける處へ。女中が出て來て誂らへを聞く、その女を見てすらも「いざふれ、見參！鎌倉武士！」

名もゆかしい蝦の具足煮、ここで之を食はぬは馬鹿と、飛んだ處で利口になり、具足煮と外に二三品。待つ間はとらんぷの合戰七八合。やや飽きが來たところへ誂へがやがて來る。すはや詰め腹だとばかりに勇み立ついさぎよさ。何のそれ式は飯櫃ぐらゐと腕まくりしたは好かつたものの、肝心の具足煮を眞逆まに殼ぐるみは食べられず、箸で押へれば筋斗うつて皿を飛び出して敵地へ入る、入つたが最期、俘囚と爲る。仕方無しの指遣ひにあちらでもみりみり此方でもみりみり。果てはそれさへ困却して、「姉さんむしつてくれないかと」哀れな音さへ出した。

放言大語の內に中食も終つた處で、一つの評定が始まつたといふはそれからして江の島へ行かうかそれとも鎌倉を委しく見て歸るか、何れにしやうとの二說であつた。　江の島と言つたとて海の中に島が在るだけの事、別段に珍らしくも何とも無いと破壞的を遣り出した人もあつたものの、多數決で負けに

なり、それには又物思はせぶりであつた可笑しな天氣もどうか望み有りさうに爲つた處で、さらば出掛けろとの事に相談が一決し、宿の拂ひを奇麗に濟まして——いや、何、「ほんとでムえやすよ」——折ぶらさげのてくてく歩き。せめて鎌倉では白旗神社だけ見て行かうと言つた人の言葉に從ひ、案內をする氣で又道を取り違へ、いつか江の島道へ向かつて仕舞へば、早くも車夫が附いた。富士おろしの雪風に毛氈よりは顏紅くして、路端の茅茨それより戰へて聲あはれに、「閑暇でぐせす。江の島まで御安すく……」「さつと閑暇か？」「へい」。閑暇だとなぜ安い？」「あははは、旦那あ……御安くまゐります」。「江の島までいくらだ？」「十八錢が定價でぐせす」。「定價ならどう玄た？十八錢たあ四臺でか、一臺でか？」「御冗談！一臺で」。「この四人一臺に乘らないか？」「また御冗談」。「十八錢づつあら四臺で七十二錢か？高い、そりや、この霜枯れに」。「御いくらで？」「一臺十錢づつ」。「旦那、道は二里ぐせえす」。「何、二里あもんか、一里と卅六丁だ。一里八錢さ。處で卅六丁が二錢」。「そりや御無理です。ぢや、十五錢づつ」。「いやだ、どうせ江の島どまりだ。歩いたつていい身體だ。平民的旅行といふ掛け聲に對し、馬鹿錢をつかふと罰を取られる定めだもの、仕方が無い、前の世の因果とあきらめろ」。「ですから、どうぞ十五錢」。「根が盡きる程ねだるぢや無いか。そんなら特別に奮發して十三錢宛にしてやらう」。「十三錢？」「さうさ」。「四臺五十二錢？」念を押すのもをかしい至り。

相談もどうか纏まつて四臺の車が楫を揃へ、風を剪つてといふと剛氣なものの、あんまり旨く剪るでも無く、鈍刀ぐらゐで剪つて通つて鎌倉からして一時間、歴史には有名な由比ヶ濱、七里ヶ濱、さては腰越を走り過ぎて、江の島の濱邊に到着すれば、さすがに面白い海の眺め、いつ見ても扨飽きぬもの。

一連の鴉どもも坐ろに昔がたりを憶ひ出しておのづから眞面目になるも亦奇妙、曾我やら、義經やら、義貞やら、又は白菊やら自休やら、憶ひ出す古人の姿がありありそこらに髣髴として、砕けかへる高浪も今其古人が見たそのやうな。　一刷毛あつさり墨繪で書いて黒松の群だちで根を〆めたあれが馴染みの大磯か？大空近く裾野を引いた富士の傍、さしのぞくといふ工合ひで唐輪の髪を結びあげたあれが此夏も踏んだ二子山か？時刻と言へば早四時頃、やうやくに傾きかかつた夕日の金丸、潮ぐもりの狹霧に光りを擦られて浪によりより箔を置く。

濱邊づたひにゑとゑと歩いて拾ひからしの貝など拾つて、時時は又足元を仰仰しくも浪に威され、初心らしく飛び立つて、笑はれての減らず口、何さ折角の浪に免じてさとそろそろ鴉がはゞまれば、各各また負けず劣らず、濱風に袖の羽翼を婆娑つかせて、段段意地を張り出すうち、やがて島がよひの棧橋にとかかる。四分板の四五枚ならべが、處處は一枚ぐらゐ踏み折れたり砕かれたりした、それ幸ひと取つて掛つて「浪間の老女」とをかしな故事附け。　別段に笑ひ手も無く、さすがに怪我でもするのは否とて、欠けた隙間に心を付ければ、おのづから又質美にもなる。とんと扨その棧橋が御開帳の橋に似

たといふので「御信心のともがらは近う寄つて禮拜を遂げられましやう」と口で呟いたぐらゐなもの。かたくりばたくり喧ましく、それもやうやう渡り了つて否應言はせず橋錢取られ、いよいよ島へ到着すれば、相もかはらず兩側から村千鳥の共さへづり、人を呼ぶ聲がどつと湧く。そこをやうやう出拔けた所で金龜樓の前を過ぎ、何が無し一本槍洞窟の方へ足を向ければ、さあ案内者と漁師どもに右ひだりから取卷れた。島の案内、それこそ腕に覺えが有り、何の案内が入るものか、圍ひの蝦や蠑螺を取るに、何の漁師が入るものか、と辛く一方を切り脱けて、凡そ一町行く間も無く、また一人の案内に強情につかまれた。

* * * * * * * * * * * * *
* * * * * * * * * * * *

岩屋を出て漁師に跟かれ、とうとうこれにも強情出されて生洲の蝦や蠑螺を背負込み、この處すこぶる馬鹿な御客に爲つてそろそろ戻りかけて見れば、日は早富士の横に隱れて大磯を包む潮霧深く、愛鷹函根の山山はいよいよ墨繪の姿をして得も言はれぬ眺であつた。ほとんど見捨てられぬ景色をやうやうにして割愛し、近道をまはつて立ち戻れば、料らず例の貝細工屋にどうか角か又呼び込まれた。あれや是やの二三品を銘銘しるしに買ひ取つて、やがて老父に案内料を見はからひで取らせれば、些少のそれに躍つて禮いふ、なる程妻子も助かるだらうと捨ぜりふにして橋にかかれば又橋錢を四人で六錢。

何だ叉橋錢か、おのれ往きにも取つたと誰かが捻ね出せば、橋をわたりさへ爲さらなければ一文も取りませぬと一本まゐるしよげたその顔闇夜の事とて紛らせやすし、恵比壽屋や何か兩側の泊りやどから呼び込まれる中をふりかかつて再びつつと橋にかかつて、さあ驚いたの驚かぬのとて！

木がらしの行方を受け取る涙の音。　潮は既に充分上げて棧橋をひたひた拍つ、それより凄いは風であつた。　明きかへて夜は山から落とす富士おろしがほとほと身躰を飛ばすばかり、しかも朝からの寒氣とて寒さは骨に入つた。　帽子を縛り、扣紐をしめ、前こごみに爲つて只掛け聲。ともすれば吹き惱されて棧橋から落とされさうな、いづれも互ひに聲で奬ます。　一面の濱邊、はるかに見える沖の漁火、冥漠の裡にちらりくらり、蒼ざめた色を明滅させて、或は海龍王の目か。　眺めるところも更に無い、その飽きが來れば棧橋も往きよりは長く思はれ思ふほどには捗取らず、如法闇夜と言ひながら前見た處處の板の拔けに彼これ心をつけるままに氣骨の折れるも亦一入。

からくして棧橋をわたり了れば、此度は猶困る只一面の砂原であつた。

星月夜にいくらか見える砂の色だけ白く透いて急げば急ぐだけ足坐らず、風は益益暴く吹く、一歩行つて吹きもどされ、二歩進んで横へたぢろぐ其埒無さ。　時には叉自暴になり、濱邊と思つて氣を許し下を向いて風を衝き、一目散に驅け出せば運惡く砂の上に横はつて居る舟へばたりと打付かつてそれこそ目から火花を出す。　無駄口も冗談も最う斯う爲つては出さうも無く無駄口言ふだけの聲が有つたら

掛け聲に遣はうと哀れな口說き始める始末。　かれ是れして一二町、いくら行つても砂濱で、夜は全く暮れ切つて星の影のみ光りするどく、何處が何處か方角わからず、片瀬の里へは出る氣でも扨聞く人も無い境界。　すこし小高い山へ登つて方角を付けろとて只有る砂山を這ひ登れば、まるで蟻がするやうな眞似、砂はぞろぞろ頽れる上に風は上から烈しく吹く、その登りにくさと言つたら誠はなしにもならぬ位。　やうやうにして這ひ上り、四方を見ても一向わからず、片瀬かと思ふ向ふに一點の人家の燈光が影薄く見えるものの、さて何處をまはつたら其處へ行けるか、やつぱり分からず、いよいよここに當惑した。

それこそ狐に化かされたやうな、迷ひ迷つては最早案內も願ひさげと爲なければ叶はぬ仕儀と爲つて、ところまだらに雜生した枯尾花の根に腰落ち付け、一評定を開いたものの、分からぬものは矢張り分からず、路を探りに些し出かけた柵山人がはるか遠くから掛け聲してこちらに路が有りさうだといふ、その「有りさうだ」に力が付き、闇を探つてそろりそろり兎もすればくづれる砂に辷つてあはや危い足元を辛うじて蹈み〆めて稍その方へ行つたところで、何の！やつぱり道は無茶苦茶。　行かうとする方は雜木山の絕壁で、その中に川が有るか澗があるか一向に譯がわからず、いよいよここに當惑して切りに道を探す足元、星わかりにほのかに透かせばむづむづと動く大きなもの！

小牛ぐらゐな大きさで、ぼんやりと薄く見えた正に何か怪しい動物。　さすがに誰れもぎよつと爲る、

人跡の絶えた山の中に——そもそも何の怪物かと思へば今更冒險の身をそぞろにみづから悔いもする。としたが所が百年目、よしんば何であらうとも正かに此方は四人の同勢、やみやみ自由になるものかと誰もかれも肚の中は言はずに封じて思案も定める。いよいよつらつら透かして見て、又一入驚いたのは、いかに、それが人であつた。

人！非人一人！　草双紙にある繪その儘蒲鉾小屋を茅萱の中に結び成してそこに野ぶせりの時代物とは扨も扨もと重ねて驚く。「非人か？」と聲掛ければ、只附き穗なく「えい」とばかり。「さうか非人か」と思はず言つて、跡でそれでは先方に駭いたふりを見せるやうと心付くも扨をかし。「非人なら聞く事が有る。　實はわれわれ此四人は江の島もどりの旅のもの。不知案内の山路に思はず路を失つて甚だ難儀きはめたり。　望むがままに代取らす。　はやはや案内し候らへ」と些謠ひじみて說き付ければ又「えい」でこたへて更に動かぬ、これで折角の謠ひも何も焦燥飛ばされて、急き立てて「えいぢや無い。さあ早く！」不精不精に辛くして立ち出たのを見れば是はいかに、雲突くほどの大男。「こから片瀬へはどう出るな？」「この山お下りなさい。」「路が有るか？」「道は無い。」「ひどい崖だぜ。」「仕方が無い。」「下に水か谷は無いか？」「雨が降らなけりや水は無い。」「どう行くのか。」「かうでさあ。」指し示す様子ながら闇ゆゑ更に手付きが分からず、「おい手が見えない。」「見えなきや探つて見なさい——手を。」「きたない誰が乞食の手を！」

それ是する內不圖振り返ればいつの間にか其非人は蒲鉾小屋に逃げ込んで、もはやいつかな動きもせず、また可笑しな乞食も有るものだ、案內料は出すといふに、引つ込む奴が有るものか、さ、出て來て案內するさ、これさこれさと五六度、力めて引つ立てやうとしても何氣味でも惡いのか、磐石のセメントで貧乏ゆるぎもせぬ有りさま「何、譯はありやせん。その山さへ下りや直片瀨です。」精も根も盡きはてて終には一同我をも折り、慾の無い人間だと捨て臺詞で呟いて、よくよく見當を聞きさだめ、扨その山でしと爲つた處でさあ又驚くばかりの難所白砂の事とて星あかりに薄白く見える位のもので、足もとの高低は一向に鑑が付かず、それからして兎もすれば僅かと思つて驅け下りて、案外に傾きが長くて急で、驅け下り出したからには足がとまらず、十間二十間卅間ただ一息に下る苦しさ。それからして又高味へのぼる、早もう此度は尾花の類が生ひ茂つた草叢であつた。その間何の木か立ち木も有り、が、何か一向わからず、草は人足を知らぬとて彌が上に生ひ茂つてざわざわと分けて入れば、身體も大方沒した。道もなし、いよいよ例の絕壁で、さあもう否であらうが、應であらうが、そこを下りなければ爲らず、まづは筆者が先陣第一、歷史なら鵯越の時に試み下した二疋の馬、その馬と同じ役目に爲り、眞先に草をたよりに足だまりを見付け見付け下ること大凡半丁ばかり何だか麓へ達したやうな工合ひで、かすかに下が白く見えて、測る處平たいやうな、これに幾らか又困つて、そこらからして石を探し、投げ下せばぼくりと手ごたへ、水でも無いと安心して、はや最う威張つて掛け聲して逆落しと

いふ意氣込み、足音たかく飛び下りれば、たちまち近い處の邊に駭いて吠える狗の聲。扨は人家に近づいたと其時の嬉しさは飯時に友だちの家で居すくまりを極め付けてとうとう御膳を狙ひ出した、そのやうだと誰かの評。直に御定まりどほり木の間がくれの藁屋の光りを目的にして辿り着けばとある百姓家の裏庭であつた。戸際に立つて殊勝らしく、「道に迷ひましたが、ね、ここは何といふ處です？」すると裡から老女の聲で「片瀬です。」やれ嬉しやと飛び起つ思ひ、「藤澤へはどう出ますな。」「胴が出ればその跡は腰から足がすぐ出ます」と最う早大きに安心して傍から冷やかしさへ出た。

藤澤へ行く道を此深切なお老女に敎はり、溝へ落るなとさへ戒しめられて、おいおいと謹聽しそれからして道程一里餘。安心すれば咽喉も乾く、腹も御座る、そろそろ水が呑みたいの、やれ柿がかぢりたいの、やれ稻荷ずしが食べたいのと――いや何――互ひに鼻を鳴らす內、どうか角か藤澤まで辿り着いて停車場の前に出ればすは〆めたと計りにむらむらと前の茶屋へは入つた。そこでおいしい物を食べた、その物は心外ながら御土産にもせぬ事とてまづまづここでは言ひますまい。

汽車は八時四分の發、まだ間が有るとて又とらんぷ。とらんぷと手洋燈と茶屋で間違へなどさへして飛んだ興さへ添へてくれて、もよほす草臥いくらか減る。やうやく汽車を待ち着けて汽笛一聲、すは大船！跡は無事の東京入り。

◉戸隱山紀行

去年の夏信濃國戸隱山に遊び、其日記を書くつもりで居て終に果たさず、思ひ至れハ既に今日で殆ど一年。山に對しては紀行を誓つた、それ諸共其日を記憶するため心覺えの中から列ねて、この夏期漫遊を計る人にも人のまた餘り行かぬ此山の名勝を知らせる所存、引きつづいて是から暫時此處へのせます。

耶馬溪の奇は實見せぬ事とて何とも云へず、妙義の勝ハ成る程勝、然し戸隱山に比べれば猶規摸の小さい處が恨です。戸隱の名ハ紅葉狩の故事から縁を引いて今日も人が聞く、聞いてそれで見た人は却て少ない、それには原因も有ること。何を言ふにも信越のほとんど境、長野からさへ五里の險阻を越えなければ行かれぬ、是が一つ。それに有名な險阻な山、一度遊んだものが懲懲して驚いて其危險を唱道する、是が一つ。つまりは第一の原因が都城の人足を隔てたわけで、第二が信濃人をさへ威した處であつた。信濃、而も長野の人で猶戸隱を見ぬ人が頗る有る、それで其險も分かる。長野へ着いた其夕ぐれ、福武氏に逢つて戸隱の話しを聞けは險阻は險阻ながら見る價値は充分あるとの事、福武氏ハ嘗

て一度遊んだ事が有つて山蕎麥の味も忘れられぬとか同行しやうとの言葉、聞く身も勇さみ立つた。これを人に話すと矢張り長野の柴田氏も贊成した。　けれど三四日間ハ大雨で出立さへ出來ず、空しく天を恨むばかり。それでなくとも、戸隱は雨の多い山で、道の泥濘は無類との事、まづ白河法皇を極めて空しく日を暮らしてゐた。　ときに七月十五日、午後から不思議に雲切れを見付けた其嬉しさ、まだ晴雨何れとも決せぬものの早晴れた心持ち、前日來の雨で道ハ嘸かし損じた事と思つたものの夫を顧りみる處でなく、翌日ハ晴雨に拘はらず、無論濡れるハ覺悟、泥布子を着るのハ必定、夫ながら朝立ちして向はうと相談一決し、翌朝を契つて其夜は床に付いた物の、目を覺ませば山嵐も點滴とあやまたれて、田の蛙のなく聲も雨を呼ぶかと胸ハとつおいつ、いつか起されて見ればああ戸隱大明神！東の嶺の端しらしらと晃めいて、朝霧の薄紗が朝日山の額を包み、風しづかに、空玉子色正に好天氣の瑞ハあらはれた。　朝まだ四時、既に柴田氏に訪はれた。　顏を洗つたか、洗はぬかハ全く夢中、單衣にくくりつけた高袴、脚半と足袋とで足をしめてそして前夜用意した日和下駄を穿つた打扮ハ登山に似合はぬ打扮と人ハ轉げて笑ふばかり。生來山越は靴で無ければ下駄、其外は不得手な私、よしや黒鐵の岩角でも踏み碎いて進まうものをと氣ばかりは半ば拔けて山へ馳せた。　柴田氏はハ單衣の着流しに脚半草鞋がけ、福武氏も單衣に高袴の脚半草鞋がけ、何も身輕な打扮であつた。　金剛杖にも象る蝙蝠つきたて用意整つていざと許りに出立した。　長野町の人家まだ起きず買ひ立ての樫齒音高く響いて、而も朝開の風も

ろとも涼しさう。往生寺山に差掛かる内爪先ハ次第に上つて其谷を經た頃ハ最早一起一伏すこしも定まらぬ峠となつた、此處を何と聞けば其處に聳えるのが大峯山との事であつた。

この大峯山は有名な松茸山で、如何さま見上げた處松といふ木の外にハ土ばかり。山はざらめいた土で松には適しさう。之を左右に送り迎への一里ばかりハまことに唯の山、是と言ふ興もなければ是といふ不興もなく、同行三人無駄口を木だまに響かせて罪もない途傍の甘艸又ハ釣鐘草の花をつまんでむしるばかり。果てハ高笑ひに驚いて飛び立つ雲雀が二つ三つ。顧りみれば長野にあつて見上げた朝日山やまた今まで高いと思つた大峯山も山途の常、次第に低くなり果てて終にハ記標に見えた絶頂の松が地平線に囓まれて行く體。夜ハ充分に明け離れて山の端を繞取る旭日の色もほんのり紅く、此日の天氣いよいよ賴もしくなつた。行き行く内に荒安といふ處にかかる。掛つたところで際立つたのハ道が樂に爲つた事であつた。むかし親鸞上人が大峯山からここまで來る時、道の險阻に弱り果てやうやく荒安まで來て「あら安」と其道の樂になつたのを喜んだと云ふ、それが故事で今日も其處を荒安と名付けたとか。今ハ——婦人小供にハやや六かしいものの——夫程の道でもなく、むかしこのやうで親鸞がさう言つた物ならば實に上人は飛んだ弱虫、三里の灸を勸告しても宜からうと一同が飛んだ空威張。

路傍に一軒ばかり淋しさうに設けた茶店に立ち寄つて見晴らしのいい椽鼻から遠くを望めば今までの山中に引き更へ天がまるで切り開けたやう、山は遠近にうねつて思ひ思ひの色、中に一際遠く見える

一脉は猶あまたの雪を載せて居る、あれは何山と尋ねれば飛驒の國境との答へ、ああ飛驒が見える處までもう來たかと思はず感じもした。腰に帶びた望遠鏡を取り出した柴田氏は頻りに吾吾とも見回はすのを村の小兒が見て羨ましがる。「飛驒の山に蠅が居る」と威して渡せば眞面目で望遠鏡の鏡の面にとまつた蠅に欺かれて居るをかしさ。

休息所を立ち出ていくらも行かぬ內次第次第に天氣が惡くなり始め、遠山の根方は切れて居るものの頭の上には雲足が低くなつた。幸ひに涼しさは涼し、然し苦勞も苦勞。聞こえる難所にやがてさし掛つて降られたら何程の不都合であらう。が、雲足の低れた割りには容易に雨も來ず、沖沖に送られてぼつぼつと足を運んだ。路は一起一伏やはり定まらず、而もやうやく一間前後の上り下り、左右は或は林或は谷、人家も折り折り思ひ出したやうに一二軒あるばかり頗る氣候は下界と變はつたと見えて時時見える麥畑の麥は猶靑味を帶びて、脊も低く、而もそれで苅つては無かつた。見るからが變はつた心持ち。道を傍つて流れる溪流の透き徹るまで美しいのに立ち去りかね、はんけちを浸して汗などを拭つてゐる內に落ち合つた二人の男、是も旅よそほひであつた。最早人界に遠ざかつて中中に人は戀しく、言葉をかければ先方も應答した。これら二人は丹波島のもので、鶯の雛を戸隱山に取りに行くとか、矢張り朝立ちして出て來たのであつた。何を携へるかと思ふと別にそれらしい物も無く、就いて鶯の事を話せばなる程黑人であつた。戸隱には以前鶯が中中澤山であつたところ近頃取り盡して大

に少なくあり大によわるとの愚痴。誰が取り盡したと問ひかへせば「私等さ」と言つて呵呵とわらふ其質朴！

小一里の道をこれらと一途にして、一行すべて五人、面白をかしく思はず道を捗取つた。やがて其内林の中に突然と鶯が見えたとか「それ居た」と言ふより早く二人は林に飛び入ると、さても草の深さ、身は早沒して仕舞つた。心よい田舍の人の道連れもここに無くなつた。人の鯛釣り、見て隙をつぶすのも詰らぬ嘶し、其儘袂を分かつて彼是四五町、何と言ふか名は忘れたが山繭など道傍に多く居る、山中の一軒家を遙かに望んで右を迂回し、左をまはり、行き着いて見れば是は如何に、前の二人は既に其處に腰を掛けてゐた。

最早一日の馴染互に言葉を掛け合つて吾吾も其處に腰を掛け、さて其家を見回すと、何が無し目に入つたのは獵銃であつた。獵師かと問へば齒の拔けた皺がれ聲の老婆が「はい」と答へる。途端見れば見馴れぬ吾吾の姿に寄つて來たのは例の日本種の狐めいた、痩がれた狗、主に獵に用る類であつた。差し出す山茶ハ色ばかり。よく有る事、烟草盆に取り入れた火は爐の燃えさしで、取るや否や一服つけさせたのを御役濟にして直さま消えて仕舞つた。獵についての事を話かけても兎角老婆の話しも火同樣、答へるだけで直ぐ消えるばかり。前の二人の鶯取りとは傍で聞いて更に分からぬ應答を高聲で饒舌つた。要するに前の二人は常に鶯を取りに來て、ここの家とも既に入懇。われわれは一足さきに袂を

分かつた。この間見るものは山、一つ越せばまた山。空も山で支へられ、地面も山で固めてあつた。で、始めてやや珍らしい心持ちのしたのは是からが即ち信濃で有名の原、飯縄が原に掛かるのであつた。

程無くも飯縄が原に出て見れば、何さま凄まじい大きな原。一望ただ茫漠と切り開かれて、今までに山中をもぐつた目が俄かに暗いやう。右を見れば例の名高い飯縄山が雪の中に入つて居た。飯縄の不動と言つて音に聞えた山、即ち是かと見上げれば山も凜然と故さら威儀を正した風情、一面に何の木か隙間もなく、而も造化の手は過不及なく其梢を揃へさせて、評すれば豊富な山。山の形は西角に大襞を絞つて、それで目に立つ山脈も無い事とて屹然として而も三角形に恰好よく峙つて居た。山の裾からの一回が即ち飯縄が原、われわれが過ぎた處は大抵山から一里ばかり離れたのみ、それで山の威厳は猶是程であつた。携へたのは双眼鏡、力ても山の木は何か分からず、それが頗る遺憾であつたが、扨其遺憾に附け加へていやな話しと不快とを段段に感じた。いやな話しとはこの邊に山犬（狼の一種）の多いといふ事、及び原の景色がやがて千篇一律になつたことである。

近來汽車が開けたから猛獸の類は皆其響きに怯ぢ、深山へ逃げ込んで、其ため從來あまり猛獸に逢はなかつた山にも意外のものが現はれて、この飯縄が原にも折折山犬が出没するとのこと。われわれがここに差し掛かつたのは早や午前八時やや過ぎた頃で、晝間のことゆゑ眞逆と思ふ氣もあつたがしかし半

ばい恐いもの見たさの心も交つた。

原と言つても中中むかしの武藏野などのやうではなく小さな岡が高低して居る平地で、二つばかり湖も有つた。　原の土は墨のやうな黑土、木らしい木は一本も無く、下生の草は芝ばかり、其外は實のつかぬいちご、又は名も知れぬ灌木ぐらゐのもの、わるく言へば草さへ碌なのは少しも無かつた。土質の惡るさに物も生へず、唯荒蕪に歸して居るのは惜しいものと飛んだ實業家氣取りで呟くのは吾ながらをかしな話し、いくら歩いても歩いても飯繩山はやはり右に元の形、原はやはり形も變はらず、もう山が鼻について八重十重に列なる體を見ても名を聞きたくもなく、また聞くものもなく、前後をふり返へれば一面圓い天に限られた平たい土盤の上に人間はわれわれ只三人、肺が破ぶれる計に人の事を罵しつても空氣の外には聞くものも無く、唯唯滿足したのは其サブライムな事!

此原が戸隱へ旅行する者の最も不快な處である。長野から出て足は早いくらか草臥て來た上に增して長い間變化もない處、同伴でも無ければ欠伸は請合である。　夏でも人の通行は一日何人と言ふ位、十月の初めからは全く雪で埋つて、それに飯繩おろしの吹雪は馬をも埋める計り、人跡は全く絕えて、容易ならぬ所用の有る者の外僅に飢ゑた獸類が雪を踏むのみとのことであつた。　いつとか長野から兇賊が脫走して戸隱山に逃げ込んだ時警官が其跡を追つて此原を徒歩で越した事が有つたさうで、雪は三尺も積つて居る内になほどんどん降りしきつてやがて戸隱へ行き着いた頃には烈寒にこらえて足は血がに

じんで脹れ上つたとの事であつた。

やうやくにして原の果てに當つてささやかな鳥居を認めた時の嬉しさ、其鳥居が即ち戸隱神社のもので、すはや着いたかと躍り立つて、さて又聞けば、驚く話し、はるか遠くの雲の中で糢糊として居るのが戸隱山との事。まだまだ里程は遠い事。評すれば鳥居はほんの小供だましの藥菓子、一寸氣を賺すだけであつた。　が、流石に氣は勇んだ。　ことには天の憐れみか、泣き出しかかつた天氣も亦直つて雲も稍薄く、折り折りの破れ目から目的の山の中腹を見せた、そこに眸を凝らせば、さても妙絶佳絶鼠色の巉崖絶壁！

やや催した足の疲れも忘れ果てるばかり、既に原をば後に見て山道を左右に迂回し山の位置をこかしこに見かへて、とある人家二軒ばかり有る處に出て、それを見過ぐせば一軒の休息所。　直に入つて憩ふ間に、無殘、亂雲が其處此處に湧いて日影も忽ちかくれ、ねばるやうな雨が降り出した。

亭主は世辭のいい、小利口らしい男、而もここは戸隱登山の者のために力餅を賣る處とて頻りに之をすすめ、それでも感心に白砂糖をふりかけて出した。　今までの道の寂寞に引き更へて意外なのはここの茶店に糸莚連中が同しく旅よそほひで二十人餘も居たことで、聞けば是れは飯山（信濃の北隅、雪の名所）最寄の農家のもの、近頃の降り續きに晴れを山神に祈るための登山との趣むき、いづれも力餅の馳走に大口を開いて口中は丸で眞白。　がやがやわやわや目を眠れば繁華な土地へ出た心持ちもする程で

あつた。

われわれが腰をかけた處は向つて左の庭めいた處で、屹然と其前に當つて峙つのは全く石質の大磐石、千年の苔蒸して谷水のしたたりが膩を絶やさず、名も知れぬ異草が生へて居た。はや空氣の温度は冷やか。思へば今日は盆の十六日、都下の此頃の暑さと比較すれば猶冷やかと言ふ中に言ひ盡されぬ凄味が山の常とて身に染みた。この雨は霽れるかと亭主に聞けば、いつかは晴れるだらうとの言葉。戸隱は餘處が降らぬ時でも降るゆゑ珍らしく無いとの澄した答へ、聞いても聞かぬでも同じ話しであつた。

雨は無論覺悟の事、いざとばかり立ち出ればさあ此度は飽き飽きする道、それから山までは一町毎に町數が記して一里半(?)と石杭の立つてゐたが、その間は左右いづれも木立ばかり。山も見えなければ雨はびしよつく、道は漸く一間位、中に一筋おのづから石段を刻んだやうに牛の跡が蛇腹についてゐた。石はなし、道は赤土、うつかりすれば辷るあぶなさ、すでにわれわれ三人が實際之を經驗した。左右の林は何處まで奥があるのか、大木に小木、灌木に下草、土目になれて生ひ茂つて蛇がゐるやら蝮がゐるやら、ことに目につくのは樺の木とまた雷火に燃えた大木であつた。伊香保から掛けて上州の山にも落雷した木が多いとほり、この邊にも落雷ハ凄まじい事と見えた。

談笑の中に向ふにあたつて見える一簇の樅の木立、其横にきらつくのは待ちに待つた戸隱の山里であ

つた。　折から雨も晴れて雲も少なく、漏れる戸隱山の絶頂を仰げば岩石の樣もやゝ詳らか、谷間に一點見える白いもの、瀧か河かと評したのも當推量、よく見定めれば矢張り雪であつた。　いつか樅の木立に入れば山はもう何處へ行つたか分からず、日影も洩らぬ木下闇、まづ異常なのは身に感ずる山氣であつた。　樅は木立でこそあれ、猛然として雪を突くいかめしさ、山に入るに從がつて山だけの形容が段段ついて來た。　時計を見ればやゝ午前十一時。

右の鳥居は一の鳥居とて長野からの登路はここに限ることで、それから力餅を賣つて居た處ハ大久保といふ村いざや山と言ふ處で追分路になり、其處に石が建つて居て「右、中社。左、寶光社」と彫つてあつた。　中社と言ふのは中院で奧の院へ行くものの經る處。寶光社ハ一つ山に別に設けた一宇の社でここからも中院へ行けるが、初めて登山するものはまづ中院へ行くのが順路である。　はじめ携さへた繪圖によれば此追分から右の道を取つて程なく熊の塔といふ由緒の有るらしい物が有つた趣き。しかし殘念な事、見損なつて仕舞つた。　右に富士見山といふのを眺めて登る山路、さあ聞いた通り弱り果てた。　何しろ途は柔かい赤土、それで果もない大のぼり、自然と足に力が入る、それ丈に一足下せばぐつと潛つた。　曾て碓氷峠を越した時、其道のわるさ馬さへ脛を沒する勢にハ駭いたものの、此處ハ上信の境で通行も有る處ゆゑと諦めたが、僻境の戸がくしが斯うあらうとは思ひも付かぬ話し。　草鞋がけなら辷らずには濟まず下駄がけなら脱がずには終らず、私も二三度下駄を吸ひ取られた。　唯掛け

聲ばかり。其くせ、我慢で成るたけよささうな道と擇ぶだけ些しも捗らず。儲けものだか、損耗だか泥染めの足袋が出來た。やがて引き續く山里、いづれも舊の許多の神官の住ひで、今は何れも登山の人のための旅宿、見たのは其くらゐ、下を向いて足をとられぬ用心するばかり。中社まで行き着いた時は重荷を下したやうな氣がした。

中社と言ふは思つたよりは大きな規摸、而も登山の人が虚弱でもあれば其上奧社迄猶遙か有る事とて多く此中社限りにして歸る、其爲の拜殿ゆゑ其立派なのは山中第一であつた。社は白木づくりの宏壯な殿堂、他國にも中中珍らしい普請、別に案內者も持ずに見たのみか、而も寺と違つて其處此處に塗抹彫刻の飾りが無いために深く目に留る物も無く、只宏壯と感じたのみであつたが、獨り二間四方餘ばかりの一枚板の天井に描いてあつた墨繪の龍、筆者は誰か、兎に角非凡な出來、只夫が目について後で歸京して圖らず思ひ出したのは即ち是が曉齋翁の筆であつたので、曾て香亭氏の雅談で讀みまた同氏からも其由緒を直接に聞いた事も有つた、それをさつぱり忘れ果ててしまつた。早く氣がついたらと後で悔いるといふぬかりの至り。

中社から直ぐ左にあたつて有つた社務所は社司久山義男氏の住ひであつた。柴田氏は久山氏と懇意な中、柴田氏の案內によつて先此社務所に着き、泥足の事とて裏へまはり、其處の下男と顔見合はせて柴田氏が愛嬌のある久し振の挨拶、洗足の水に足を清めて上れば俄かに出るくたびれ。廣間二つばか

りを過ぎて見晴らしのいい一間に案內された。時計を見れば正に十二時。食膳と蕎麥と共に言ひ附けると、引き違へて出した菓子は例の越後へ行けば必ある翁飴であつた。

休息して煙草一服、袴を脫ぎ捨て今までの道の事を話しながらつらつら家の建築を見れば何さま昔し慕はれるやうな。一間の木目立つた椽側がはるかに走つて、小壁の高さは四尺ばかり。摺金の六角形臍附の釘かくしも處處取れては居たものの、ここに衣冠で坐を廣く潰しても失策は無ささうな體、見るからが古代に生れた心持が爲た。戸隱山と言へば歷史に緣の深い山、神代記のそもそも始め、天照皇大神が素盞命の暴を憤つてこもられた岩窟は即ちこの戸隱山で、今でもそれゆゑ手力雄命を祀つてあるとの口傳もあり、維茂が此山に分け登つて鬼女を退治した紅葉狩の故事もあり（今でも山中に紅葉狩といふ處が存在する）、また近くは武田信玄が河中島の戰爭とかで埒の明かぬため早く勝たせてと此山に祈つた事もあり、または佐久間象山翁が軍旗と兵書とを携へて此山に籠つた事もあるなど、それやこれやを思ひ出せば日本建國の昔しからの二千年間を一時に短め合せに其處に生れ出た心持ち。ことには身の前後左右すべて、古風な物で無いものはない——わが姿をさへ顧みなければ全で明治以前の世の中であつた。

吾吾の部屋は奥書院で、其前には庭が廣く造つてあつた。左に當つて峙つ山、其切り岸からしたたる瀧の點滴が常に雨の音をなして、雨をうれへる吾吾の耳を幾度か欺いた。瀧の下流から右へ折れて

出來た池水ハ泥にごりで魚も見えず、流れを受ける事とて絶えず水面は動搖して雲紋を絞つた。　水水として居るのは岸の草木ばかり、名の知れぬ草に名の知れぬ木、山蕨、木賊、さまざまな苔などが愛らしく雜生して、ことに驚いたのは菖蒲の莖ハ有つても蕾がやうやく催はしたと云ふ位な體であつた事である。

七月の中旬に菖蒲が咲かぬとは。

彼是する内持ち運ぶ杯盤、向つて箸を取れば空腹か中中うまい料理、魚ハ燒くにも煮るにも岩魚ばかり、其他は玉子ばかり。しかし岩魚の煮びたしから鹽燒、また茶碗蒸しに至るまで中中深山で得られる物とハ思はれぬ計り。特には戸隱固有といふ地瘤とか言ふ菌の一種、それが他國で迚も得られぬ物であつた。　地瘤とは形ち土筆の大きなやう、蛇の脊に似た斑があつて其色は薄鼠、口へ入れればぬらついて一寸言へば蓴菜のやう、しかし美味であつた。　是ハ地から取つて數時間立つと腐敗して虫になるとか、其ために戸隱より外へ持出す事も出來ず、長野にも亦無い程である。

地瘤の名ハ獵人が知らぬものの、蕎麥に至つては信濃の人で戸隱の名を知らぬ者は無いくらゐ。東京で更科が其名所と聞いて、さて其の土地へ行つて見れば更科などさしたる方でハ無いとの事であつた。蕎麥ハ縱六寸横四寸ばかりの楕圓形の竹笊に揃へてならべてあつた、決して東京などのやうに紊れさせてハ盛らず、奇麗にそろへて。　山家の蕎麥には他でも間間この類がある。元よりいづれも盛蕎麥で、種物は無く、下地汁の蕎麥に比して劣等なのが殆んど玉に瑕の心持ち。藥

味は葱に山葵に乾海苔の揉んだの、是等でした。　福武氏は常からの蕎麥黨、柴田氏もゆづらぬ相手。やや冷淡なのが私であつた。　やがてぞろぞろざらざら。餘所目からは蕎麥の食べ方が一番をかしいもの――鼻息はあらくなる、目はすわつて、そして山葵の涙で一杯になる。一杯二杯と片付けて相手の兩雄も頻りにひしめいて居た。　しかし何れも言葉ほどには行かず、強ひる、斷はるでしばらくは捫擇、やがて食事も果ててそれから一先休息とて給仕の女が蒲團小夜着など持たらしたのを幸ひ、しばらく横になつた。

二時半といふ頃起きて顔を洗ひ、いささか養つた勇氣を力にいよいよそれから奥の院まで登らうと決した。　社司の久山義男氏は旅行中で不在、細君が見えたを幸ひ其趣きを話せば眉をひそめて今日の道は御わるうムいましやうとの言葉、しかし思ひ立つた矢竹心は中中之でしづまらず、笑つて決心の趣を答へるとそんならと言つて子息に案内させてくれた。　また舊のとほりの打扮。裏山を傳はつて山路に就けば何さまこたへたと言はうか、何と言はうか、其路のわるさ、意地わるさ、道といふよりは泥であつた。　それもいいが山路の常とてすさまじい虻の攻撃、すこしでも油斷すれば震るへるばかりに嚙まれて跡には殘る疼痛と痒み、ぬかつて扇も團扇も忘れて詮無く辛くもはんけちを振るばかり。襟をはらへば足につく、足を逐へば顔に來る、折角少しいい道を見付けても繰り人形の眞似するやうに手足ふればよろめいて深みへ飛び込むやら、まだまだ雨の無いのがせめても、是で雨に降られたらそれこそ大

變。降らなくても虻の用心に安心しては四方を見られず。なる程厄介な山とつくづく思ひ知つた。山はますます登る斗り、いよいよ深く行けば行くほど行處が奥だかわからぬ程、道は左右に林と松ばかり何のながめも無く、やがて次第に行くに從つて山氣が凛然と肌にしみて來た。　蓊鬱と茂つてほのぐらくなつたのはまた樅と松との森で、中を通して一條の道が有るばかり、森の奥には雜草や灌木が叢生して人跡はすこしも止めず、處處足を奪ふやうに狂ひ立つて飛び流れる溪流の清さ。　道の向ふに當つて見える一構への門、近よつて見れば荒れさびた隨神門で、見るから胸にとほる石の榜示杭に「下馬」とばかりに唯一句。將軍の肖像は雨露と時代に剝落してゐたが其剝落が却つて物凄くなつて居た。　空氣は最早ひやついて來て、汗は出ても氷のやう、それに深山ほとんど晦冥、口に言へぬ一種の臭がして、あはれその梢の上に大魔王でもゐるかの心持。少し咳でもすれば木靈の誤らず答へる、いよいよ凄味は加はつて、正にありあり神靈に撲たれるかの迷ひも出るばかりであつた。

戸隱は海面から五千尺の山。　既に此下馬から絶頂までは遠くも無い事とて肌には異常な冷氣を覺えて來た。　道の困難に津津と湧く汗、それも出るや否や冷汗と變つて、身の內が熱して外が冷え言ふに言はれぬ心持。のみか山には天狗が棲むとの俗評、いはゆる天狗風が怒號して林立した梢を揉み立てる、橡などの枝葉は脆くも吹き折られて鳥の樣に飛ぶ勢ひ、その凄じさ。　草も次第に乏しくなり、艶欵冬、獨活など嚴寒を物ともせぬのが多く生じて、やがて奥院に近づくに從ひ數十段出來てゐる石段の

上に我物顔に生じてゐるのは様様な苔であつた。　ただ木ばかりは密封して絶頂を示さず、わづかに泄れる處から仰ぎ眺むれば大盤石の屏風を建てたばかり。石段の盡きた處が即ち奥院であつた。　社殿物凄く寂莫として飾つてある一面の鏡の薄曇りしてゐるのが何やら靈氣を帯びたやう、魔風が時を賺さず吹き掛けて注連繩の定まる折も無いくらゐ。之に並んで左にある社は九頭龍神社と呼ぶ建物、九頭の蛇を祀つたものとか、蛇は今でも生きてゐて日日供御する趣きで、見れば社殿は岩窟にさしかけて出來、其前に九枚の土器が有り、蛇が通ふといふ廻廊が些しばかり出來てゐた。　素より人を禁じて窟には近づかせず人も此方から眺めるのみであるが、窟は三尺餘、隱隱として薄暗く爲つてゐた。

兩神社から左の手前、さし出た岩角に設けた一搆への家は即ち奥社を護る男のゐる處で、すべて岩を土臺とした岩を楯にして、一方社に向つた方は壁が岩、岩の窪みが即ち竈、入口は天日も洩れず殆んど暗夜、音なひの聲に立ち出て來たのはくゝり袴をぞつぷり穿いて惣髪に結つた男であつた。　やがて客座とも言ふところに案内されて今一人の主の山守に應接された。

客座は八疊ばかりの座敷、岩角へさしぬけた一間で欄干が古風についてゐた。　岩角の事ゆゑ眺めもいい事、其處で休んで遠近を望めば何がなし、ただ千里兩眼の中。

裏口から絶頂を仰げば、さてもよく峙つた事、只岩石の塊であつた。　岩は妙義あたりの粘土の様に凝つたやうな物とは違つて全くの石、それで一面用捨なく屹立してゐた。　苔が滿ちて足はすべる。わ

づかにある岩間のひびが足の掛け處、手の入れ場所、道の無い處に道を認めるばかりの至り。　絶頂は充分に見盡くすには一日かかるといふ廣さ、而も我も我もと峙つ岩石の種種さまざま。　蟻のとわたりといふ道は幅僅に只の五寸。　五寸の處が即ち峯の上、左右は底も知れぬ千尋の谷、一歩足をあやまてば身體は粉粉微塵。　わづかに有る鐵綱が命の本、鐵綱が切れたら身は忽ち谷底の蛇の食ひ物である。ここに至るまでは勇氣も火と燃えて、ここで忽ち水と冷めるが常とは誰の心も同じものか？　いざや幅五寸の、苔にぬらつく自然の危橋を踏まうといふ處で誰がふるへずに居られやう。　顫へを促がす寒氣の殘虐、七月の夏が猶冬であつた。　見なければいいに其處が人情、つひ谷底をすかし見れば亂雲白雪千年のままに殘つて珍らしい人間の生物に腮を張つて待つてゐるやう。　風さへ烈しく足をとられる、誰が立つてゐるかれやう。　馬琴が庚申山で現八が石橋をわたる處を叙し、やすやすそれを渡つて現八は全く柔術に長けてゐたよしを書いた、それも流石に思ひ當ること。　ここに至つて這はずに居られず、更に安全を索めて道を馬乘りに跨つて擦り行かずに居られず、ここまで攀ぢてくる人すら少ない處、更にここで勇氣を挫かれて立歸る人が過半とか。　思へば役行者が此處をも經て更に絶頂の最絶頂の劍ケ峯に高足駄の歯を鳴らした恐しさ。　蟻のとわたりを渡つて氣のむくまま、嶮岨に打ち勝ち打ち勝つてかけ回れば越後の海もはや目に入つて而も信州甲州二國をつらぬいて富士も珍らしく見えるとは！　近く見れば飯繩、黒姫、妙高の諸山、遠く眺めれば越中、飛騨の連山、木曾の山山、われを見ろと言はぬばか

り。一劔直ちに天宮を衝くのは鋒先山、一脈急に空を支へるのは御嶽山あちこちに間斷なく湧く亂雲の樣も種種さまざま。 つかれて山の腰にもたれ掛かるもあり、怒つて大獸の牙を張つて走るのもあり、其間、さても奇絶、塵に染まず、白けた峯の岩角に肩を怒らせて止つてゐた鷲が獲物を見てか、この天地を我物がほ、縱横無盡に飛びまはる造化一個の大觀！ ひるがへつて山の岩を仔細に尋ねれば、白玉の山をなした水晶窟、形ち怒つた獸王に似た獅子窟、天帝窟、大多利窟、仙人窟、大岩殿、歡喜窟、金剛窟、三世窟、威德窟、猿女窟、不動窟、西窟、長岩殿、三層窟、虛空窟、象が窟、五色窟、大隈窟、小隈窟、中窟、鷲窟、利軍窟、金窟、藥師窟、日中窟、大盤窟、智慧窟、醍醐窟、梯濟窟、そして醍醐窟と藥師窟との間にあるのが天岩屋、すべて岩がすなはち窟、外には佛掌窟なぞと言ふのも有つて窟の數が大抵三十ばかり、思へばよく斯う揃つた物。

あゝ山の奇といひ、海の妙といひ、自然は無心で作つたものがよくもかうまで完全なもの。 近づいてつらつら見れば岩の色は矢張り鼠、それながら夏の三伏囚人の着る肌着の色とは思はれぬ、さても天地秀靈の氣の凝つたもの！ 岩角にただずめば千里一瞬の風が耳を擦つて天は何所まで連なる事かまた何所まで高いことか、素晴らしく大きな夕陽が天神の毬を抛つて、餘所に分かつ餘光は永久不變の天火の彩色り。 咽喉わづか三寸、つんざける斗り叫んでも袞を玩ぶ風の囁きには勝てず、目を閉ぢてぢつと觀念、金輪を暗黑の皮裏に湧かせても終に消えかかる横雲の鍍金の色にさへ及ばぬ――さても偉人とは何

のことか！　曾て大平洋に向つて立つた時、成る程海はこんな物かと坐ろに舌を巻いた、それと同じ心持ち。しかし今比較して考へれば海の大と山の大とは亦違つた所も有つた。　思もふに日本の山は富士、富士でもない所で是程に考へるのはやや量の狹い至りながら思ひ切つて切り開けた天に向つた心持は要するに推せる事であらう。　で、比較すれば海の大は快活に近く山の大は威嚴に傾いたやう。例すれば海は希臘の神らしく、山は印度の佛めいたやう。浪怒つて天を呑む所は壯なものの、一旦怒りが凪と共に消えれば面は嬌羞をうつす鏡を拭つて平和優美、また愉快。之を山の千本の劍はげしく空と刺し、千秋の靈氣を凝らして人を睨め下す所に比べて凄まじいのはそもそもどちら？

さして深い考へが催さぬものの、立ち去るのは殆んど強面いやう。夕暮に促がされて割愛する事となつた。　山守は愛嬌のある男、若い時には江戸にも居たとか、ただ吾吾を駭ろかしたのは前に記した飯繩原の鳥居、その建立は殆んど十年前。で、立つた以來まだ一度も其山守は見ぬとのこと、即ち山に起臥して些しも下界を踏まぬ譯。質朴で金錢をむさぼらず、敝衣一枚が千年の裘、床の間に吊したものを何かと言へば冬雪に山が埋つた時の用意に取つて置く獨活との事であつた。早足は引ずるやう、やがて打ち連れて中社へ立ち歸る道、いづれも骨は中中折れたが、道で梢などから下る猿尾草など見れば飛び附いたり、下つたり、いよいよ草臥に掛けをした。　中社の久山氏方へは轉げ込む、直ちに風呂にころげ込む、透きとほる湯に心氣全く恢復して一同沐浴を終つてやがて膳に向へば早燈光が點いた。　夜は

畳とかはつて料理、いづれも佳味であつた。　が、外に猶一つ珍らしいものが有つた。　即ち給仕に出た處女、年は十七八、口重で容易に物を言はず、かざりも無く唐人髷を結んで飛白の單衣と赤勝の帶、質朴な、世にすれぬ氣色正にたつぷり、他日清潔な鄙の少女を詩か小說に使ふ時には之に因つても宜さうな、笑顏を出すのは惜しいと言ふ體、一寸洩らしたと思ふ間にすら見直せば何處へやら。燃燒の早い花火といふ風で、ことに其名はさてもさても、何かと言へば「紅葉」と一言。　要するに是は紅葉狩の故事から緣で命じた名、御前が鬼女かと言つてさへ泣き出さうかと危まれる程。

　秋はまだ知らぬ深山の若もみぢいかなる風の色に染むらむ。

夜の寒さは骨に透つて、中宵目が覺めて廊下へ立ち出れば寢衣一枚なかなか凌ぎ切れず、溪流の音は山風に通ひ分つて——その筈思へば身は五千尺も上の事。

朝景色のうるはしさは言葉に盡くされず、久山氏が貸してくれた羽織を引掛けて、ふたたび近處を散歩して富士などをさぐり眺めて立ち歸へつて食事につき、それからはトランプ又花がるた、また第一に志した所藏の寶物など見た。　寶物は久山氏の家に預る分が長持に三つばかり、故さらに許されて吾吾の自由自在、見張りも何もせず勝手に引き出して自由に見せてくれた久山氏の深切は深く感謝する。實は何處の名所舊跡でも案内が錢を貪つて早口に由緒を說いて人に隔靴の感をいだかせるのは普通の事、此日自由に品に近づいて寫すことの出來たのは何よりも仕合はせであつた。　寶物は多數で數へ切

れぬものの、其中での尤物を抜けば即ち左の品品であつた。

一　持統天皇御所用犀角御笏（形は後世の笏より小形で切落しも少ない方）

二　後醍醐天皇宸翰

三　後陽成院懐紙（歌の題は重陽月詠菊有新花とあり、歌は「うへかへてなをいくあきと契らまし、けふをはとめの白きくの花」但しこの假名は思ふ所あつて原文の儘にした）

四　正親町天皇和歌（「みよしのの山の白雲つもるらし、ふる郷さむくありまさるなり」例の有名の御歌である）

五　後光巖院歌切

六　定家卿式紙（たのみてし常盤の山も大空の霞にかすむ世にこそありけれ）

七　頼政和歌二首（是は取り落として忘れた）

八　武田信玄願狀（上杉に對して勝軍を戸隱山に祈つた漢文の願狀、年付は永祿元年戊午八月）

九　西山公書翰

十　德川秀忠和歌（題は逢不逢戀「千鳥なく澤邊のちはら風絶えて逢はでぞ歸る有明の月」）

十一　慈眼大師一行物（長生殿裡富春秋）

十二　烏丸光廣卿百人一首

十三　兆典司羅漢圖二幅

十四　探幽雪中文珠圖

十五　同人丸像（題歌ほのぼのは守澄親王）

十六　石川丈山贊堂堂武矦圖（畫は狩野安重）

十七　戸隱山紅葉狩繪卷物二卷（畫工筆者共に不分明）

其他には佐久間象山の旗、家綱將軍にはとりの畫など一寸珍らしい物が許多、外に刀劍類に至つては凄まじい物が無數であつた。

晝すこし過ぎてから名殘をしい山を下りはじめ、寶光社に立寄つたそれからの歸り道はいづれも前日と同樣であつた。　山には種ヶ池、涌池などいふ池もある趣であつたが吾吾は見なかつた。　何にしろ、今思ひ出しても其凜然とした姿は目にも逼るああ秀靈の名山！

◉妖女身喑みの内の一くさり

春先女の油いため

貪慾苦惱の海に一千年、手練手管嘘の川儘の川に一千年、渾名して三十振袖四十島田、又の渾名が万年新造、又の渾名が下腹毛無し、哀れ一にぎりにも足らぬ纎手の手首にトりにトりとしめ付けられ、骨肉どろどろに爲つて涎とかはり、凝つて金銀の湯水となり、有頂天に昇つて雲となり雨と爲り、此妖女の口車に積み載せられて形も無く運び去られて仕舞つた家倉地邸は値償にして何万か。十三か十四の春、姉分の口傳に因つて大野呂間一名「男」と云ふ物を手捕にする術を覺え、何人と云ふ男を牢屋へ打ち込み、乞食に墮とし、一朝無常を感じて手管を黑髮と共に剃り捨て、剃痕のうるはしく青青とした處を昔しの春の紀念と眺めて五十ぉにがしと云ふ年に發心しての木魚三昧。妙何とかいふ法名付けて春は花ざかりの人心の狂ふところで、腕に覺えの有る春さき女の油いためとして望みの人に食べさせるとの披露。人間の油いためとは何んな料理通にも新らしからう、これは後學のため一度味を試みやうと夫から夫と人間の口は早いもの、それぞれの好事の耳に聞こえて、いづれも皆其日を待ち受け、尼の庵室に押し寄せれば、門口の立札なる程奇妙奇妙！墨くろく筆あざやかに

「春さきの女の油いため

右尼が昔おぼえた手加減にて調理御望みの方に進らすべく候。　但し一切が無料の事。大入と相成れば客止堰止決して樓主の指圖を俟つにも及ばず」

立札からして不思議な書き方。妙だ妙だと烹ねこぢれて明巣の多くなつた素蕩夫連が一期の思ひ出とも言ふ體で朝早くから押し掛けて、やがて正午まで待つ、一時とある、二時と爲る、又三時また四時、首を長くして待つても一向に料理の出さうな氣色も無し、腹は減る、權助の大欠伸さへ其空腹にぐつと答へる、かれ是する内塒にかへる鴉の聲。氣のみじかいのは席を蹴立てて奥へつめ込み、まだかと虫を好くして問ひ掛かれば、根から葉から取り合はれず、何時に出すと立札に書いて在つた？と言はれて見れば行きつまる、何時からとも無い立札を早呑み込みした方にこそ曲は有り、是は一番やられたと頭をかかへて尻込みすれば、之に一體が勇氣をしたたか挫かれて、又談判をはじめるものも無し、其うちに日も暮れる、ぐづぐづする内四邊は見えず、照る月ばかりで燈光も點けず、やがて白裝束して尼が其中へ朦朧として現れたところは地獄か娑婆か天地渾沌、いよいよ妙だよと根氣のつよい素蕩夫連がまじまじとして眺めて居ると、やがて尼ははじめて口を切つた。「油いためと申して食べる物では厶いません。」それは又異變など眉を寄せれば「春先からの婦人の品評で厶います。妾の身に覺えも有り夫からして御噺し申して薄のろい殿方の御心を一寸と些し…いえ何暫時その儘にして兎角は御聞き下さいませ。鯛をめし上がつても御覽じろ、春は春の味も有り、旬によりましては樣子も違ふ、ここらが

魂膽で厶います。よしや顔立はどのやうで厶いましても此魂膽を呑み込みまして、天晴美事遣りとはしさへ致しますれば殿方はころりと爲りますもので、其手品の奥を申せば誠に御座の覺めた噺し、嘸や殿方は御呆れ遊ばす事と存じます。ここにゐらせられる方方は何れも殿方、わたくしの存念も何とぞ殿方の御耳に入れ、錦の裏の汚ないところを其儘出して御迷ひの厶いませんやうにと——處で春さきからの婦人の嗜み、つまりは是から申し上げるやうな、まことまことに夫は夫は敢無いもので厶います。其嗜みのあらましに先名を付けて申しますれば、蝙蝠傘、柳腰、身分ちがひ、膝くづし、其外猶種種さまざま、いざ是から一一くはしく委細の處を申しましやう。

やがて始まつた説法片唾を呑んで謹聽すれば、之は如何、皮肉を掻きむしる計な言葉、しかも作り飾りも無く、

「春夏秋冬それぞれに應じ、小袖となり、袷となり、それも自分よりどつちかと言へば男と云ふ贅澤猫に見せつけて遣りたい計りで種種に手を換へ品を換へ、何れ等閑は無いものの、扨其中でも春先から秋の末までの女ほど得用の付くものは無い其子細下のとほり、

第一　春からの婦人は親よりも主人よりも蝙蝠傘に大恩受けて、是がために浮むといふ物。はてさ、蝙蝠傘をさす。青裏の二重海氣で澁紙面も青ずんでおや色白だと吃驚される、これも蝙蝠傘の御かげ。又は氣障な奴か、極りがわるいか借金取か、何でも面白く無い相手に出遇つた時に手に是を持つ

たが最期で、是で早速の雲隠れ、顔を隠すといふ便利もあり。又此傘で蔭になればたしかに二割方器量もあがる、それに又日にも焼けず、こんな旨い噺は無し——頭巾と薄くらがりは女をよく見せると紅葉子は言はれたが、惜しかつた蝙蝠を入れなかつたが。

第二　一枚宛でも脱いで來れば灰俵の申し子か、括り枕のおやかり者かと思ふ斗りの、大でくでくの大土佛、大土臼もそれ幾分か柳——枝垂柳とは行かずとも——猫柳ぐらゐには成れる譯。

第三　身輕になれば着物に○式がたんと入らず、そこで身分より割合ひに好い形も出來、目の利かぬ阿坊ちやんを藁海鼠とするに手間隙入らず……

第四　身輕になればしどけ無く爲り易し、土臭い田舍紳退治には是で無くては藥が利かず。その譯の無い事は鼠の天麩羅で狐を釣るよりも！

第五　白粉の剝げやすいは些まづいが、「貴君に逆上せて斯うですよ。あら焦燥たい、汗になる迄氣を揉んで居り升と言ふ事さ」と魔藥を煉るのに至極好し……

跡は有つても天氣を漏らす恐れも有れば此の位にして廢さうとの思はせぶり。人を釣るは、仕舞まで言へ。「いいえ仕舞は付いて居る」。「馬鹿　言ふな。まだ中途だ」。「それ故にこそ俗の迷ひ」。「何ど？」「俗の迷ひで厶います。今申したのが妖女の內心——釣るやうにして男を釣る、思へば釣られる男は大馬鹿。化粧も今言つた通りの工合で、はて扨御座は覺めませんか」言つて座を下つて

二度は出ず、聴衆は顔見合はせて口あんぐり、
「矢張是も錦の裏か？」

◉都門雜興の内

◎初卯

いつも一月の初めの卯の日が、初卯と唱へる緣起日である。參る社といふは若みどりの柳島村に鎭座まします妙見さまで、つまりは運が開くといふ神さま。參詣もそれ故に景氣一方の騷ぎ連で、ところは龜井戸の些しさき、同じく川ぞひといふ上に、昔ハ人力車が無かつたため、これを以て贅澤の種に遣ひ、屋根でぎりぎり漕ぎ付けるのが一般の相場であつたのが、今は人力車が出來たため、舟は櫓櫂空しく腐れて船頭も多分の祝儀に有り着けず、自然初卯の景氣に於ても引つ立ちが無くなつた。何の今時舟に乘らう、人力車の方が快くてよし、それにはまた寒く無しとただ斯ういふは實の逃げ道。その實船は經費が嵩む、むしろ舟の方が車より暄かいのをさまざまと胡麻化して諸事簡畧の算盤玉を目の玉と共にぱちつかせて前後考への遊びにて、折角の橋本（妙見の大料理屋）も大きな鴨は矢張り取れず、有

り來りの藝者づれ、一番ひ一圓の御茶代ぐらゐを嵩でこなすといふ位。それながらも、流手な社、まさかに鹽なめ地藏とか、笠守いなりとか程不意氣さはまる向きでも無し、東京といふは只名ばかり、楢の切株や藁塚があちこちに見える片隅に脂紛のかをりも此日は爲る、辻車では業平橋組合が此日を可なり當て込む處で、もしも田舍から一寸出て來て、東京士女の衣物の好み其今の流行など見やうといふには差し向きここら妙見あたりへ出張つて見るが先づ一番。令夫人、令孃もやはり行く、が、數から言へば寧ろ少なし、その多い部分は賣人で、涎を塗つた髯に縋り、毛切らず白天鵝絨の吾妻下駄、更紗か小紋の三枚がさねに、どつしりとした黑か小紋の濱ちりの羽織、高麗うちのちよつきりに目の覺めるやうな大肩掛は問はずとも一種の醜人、ぢれては御客を丸める手段に半ばくづれた立て膝で象牙の撥の薄い隅をぢれつたいよと噛み折る類。

言はば藝人の參詣が多し、男では役や鹿や太夫連、女では藝に踊りの御師匠さん、いづれも入費は御客にかぶせて――ああああ只だ慾ばかり!

◎年始まはり

逃げ道流行の世の中とて、嘘はその下より兀げても搆ひなしとの「近縣旅行」に飲みたふしの惡魔を切りはらひ、その實御奥へ閉ぢ籠り、夜はせめてもの二重鳶を無二の味方と有難たがつて、御多福風に重い頭を桃形兜にきつと褁み、どこか其邊の軟障の蔭、春はまだ淺い忍び駒に、鳴るは何さま驛路の鈴か御召しによつて參內したぽつくりの鈴のちりからから。　これを紳士の雛形とて、廻禮はほんの目上にとゞまり、よしんば旅行はせぬと言つても、大概は手紙で澄ます、或は一圓こつきりで乙な競賣市を開いた工合ひで、名刺交換と畧儀になる、思へばこの兩三年、何れにてしも年始まはりが數減つたのも無理はなし、ましてや不景氣とかいふ邪魔もの、禮を主とする君子國とて社會一般に對してもと天晴孔子さまに爲りすませば、ことしの年始はいよいよ冴ゑず、大晦日から待ち掛けて力負けがした工合ひ。

それながらも流石に都、書けば書くだけの事も有り、舊習と新式と衝突して跳ね戻り、おりおり又一所に中よくなりさうな今の切所とて、それはそれは年始まはりも種種異形の分子を寄せた名もつけられぬ共進會である。　まづは鷄の八聲に去年と今年とを啼きわければ、さすがに寐坊も早く起きて、名ばかりの若水目脂を洗つて上戸も辭なめぬ儀式の雜煮。朝腹に屠蘇がきりきり浸みわたつて風邪あがりの覺束無い鼻の障子を室咲きの盆梅の香に撲たれては昨日までの高利貸も今一刻は詩味をも覺えて、何が

成る程だか、ほゝ成る程。　といふ間も無く、飛び込む年頭。來たぞと受けて座敷へとほせば、御さだまりの口上糊で貼り付けたやうな言ひ草。　御目度たう厶いますで切り出して、舊年中はと小聲で受ける、それならば猶またよし、舊冬中はと時候を限つて、それから、何角と御世話さま。　一方でこれを諳誦する内に一方でも同じ文句をちやんぽんと打つて出す、丁度鍛冶屋の槌音見たやう、打つ的は同じながら僅かに聲と調子ぐあひが「トン」と出たり「カン」と鳴つたり。どうぞ相變りませずで結びを付けて是で兎も角口演が澄む。その間には安頭が算盤つなぎにぽくぽく下がつて、ともすれば雙方で十五六がものは有る、酒が利く筈だと皮肉な評を入れられても辨解は扨出來ぬ事。

でも此口誼が滿足に只これだけで終ればよし、少なくも別題にある貫目のあることまでが此處へ擔ぎ込まれれば、中中受け方にも答へる次第。　赤ちやんの御誕生やら、借りた番傘の御禮やら、下手に迷付くと去年の冬猫子をもらつた禮までもやたら漬に切り出して、年一年の棚おろしをそれこそ此處で一途に遣れば、また一方も負けるは卑怯と奥さんの血の道までも考へ出して御尋ね申す、果てはたがひに息が切れて結末無しの物わかれ。

それから始まる御さだまり五十にとゞく妻君が娘御の白粉借用し、粉吹き猿に彩つて、小紋更紗の二枚下着、上は流石にくすんだ無地で、畧して黒ちりをぞろりと引つ掛け、摺り足で辷り込んで又もや又も同じ挨拶。又引きつゞく娘御は是見よかしの自慢の精靈、衣服の好い嬉しさにいつも程は强ねもせず、

まだ朝早く、御化粧に二三分方憾みの有るが殘念ぐらゐで入り込んで、これだけは文句も言はず、鐵槌の川ながれを爲た處で、扨それからが屠蘇の杯。

屠蘇も家家に因つて儀式は多少違ふものの、大方は大同小異の、つまりは粧飾一方のもの。膳或は畧して盆、その上の片隅に角瀬戸の重函の三つ重ねは御定まりの數の子に照り田作に黒の煮豆、これを形ばかりに小皿へ取つて、三組の杯その小の方を取つて除け、中をさしつけて屠蘇を注ぐ、一擧一動が皆式であつた。それを受けて一二獻、時に强られて三獻を大抵の關として、是で一先儀式が濟み、そこで客が成る口あらば御正月ですものの一文句で逃げる足元取つて押へ、屠蘇を引き換へて燗酒になる、その酒の下物といふも是亦決つたやうなもの。

大抵は前年の卅日か大晦日近邊の料理屋に小言言つたうへやうやう揃へた口取物が春は三ヶ日のまはしを取つていや――何、蒲鉾の隅が少少折り目高くなる位は當り前――すこし心を用ゐる家で、その都度別に椀物を注文して客へ出す、或ひは妻君御自身が庖厨に立ちまはる部類では暮から用意の海老しんじやう、ささげ海老、或は千久輪、貝の柱、之に野暮なら芹を投げ込み、氣を利かしては三葉を浮かせ、口柚子ぐらゐで進めるのを、扨手をつける向きもあり、又あらたまつて付けぬも有り、先は一吸ひ吸つたくらゐが大抵普通のあしらゐである。

主人もここで席をわかつ、又中中無理に强ひる、まだ參る處が有りますからと辛うじて切り拔けても、

至る所が此風で、それ故こゝで三獻あすこで四獻、いつか効驗も身にこたへて、下戸は苦しむ、上戸は喜ぶ、禮の終りは矢張り亂。

つまりは是が儀式の大要、その細密に至つては屠蘇の品品、禮者の身の姿、交接方の心くばり、あらあらざつと順にしるせば、

まづ其一が屠蘇の品品。前に述べたとほりの次第で有りふれた豆や田作が通り相場といふものの、中には又この外に牛蒡を添へる家もあり、も一つ昆布巻を出すも有り、近來はやりの鰯の泡漬、葉山葵の砂糖漬、小田原流の大柚餅、四季の野菜の砂糖漬など取り揃へる向もあり、いづれも主眼とする所は長くよく腐敗せず、又酒になつた時に於ても直に一轉下物になる、即ち德用な品ばかり。

屠蘇の銚子も色色有り、最上の梨子地ものは近頃次第に少なくなつて、多くは瀨戸が席をしめ、或は銀と見紛ふ天ぷら、又ぱぴかぴか光る錫、そこで銚子と杯とがよく對した家といふは先づあまり多くもあい方。

禮者の身姿に至つてはそれこそ複雜極つて、もしも此儘後世で明治今日の風俗を畫にでも現さうといふ日には畫工はどれ程困るものか、思ひ遣られるばかりである。まだまだ此年は簡な方、さて一兩年の前を思へば、種類は指で數へも切れぬ、ことしは其邊の名殘とて兎角はまだ片付き切らず、或は洋服、或は和服それも或は袴羽織、古渡り物の木綿打扮、昔を殘す革羽織、千紫萬紅の咲き分けである。

歐化主義の大津浪が兩三年前强く脹れ、都下百萬のぞよぞよを大泡沫の中へ卷き込んで、從つてまた年始には、洋服とまづ相場が付く。思ひも掛けぬ人人が、扨は米屋の糠旦那、小間物屋の鼈甲坊主、とんと洋服に入用の無いもの迄が俄に日蔭町や柳原へ十圓前後の金を落として一組買つて歸つた處で、さあ襯衣が無い、扣紐が無い、直衣は婆樣のちやんちやんで間に合はせろ、帽子は頭巾で胡麻化せぐらゐな、頗る異形な洋裝人がへい御愛でとうで來たのも夢、一夜一夜と曙け代つてことし廿五年となれば、また國粹の極と爲つて、袴羽織が殖ゑて來た。洋服は賣つても二足三文、と云つて御古を細君にもまはせず、いや不經濟な代物だと一人が懲りれば又一人同じ懲り仲間で口が合ふ、ことしは和服と立ち戻れば、その代りには二重鳶、下の御召しが何う有らうとも上から見えぬ襤褸かくし、いや乙力な物が出來た、こいつを一つ買ひ込めと五圓ばかりで出來合ひ物、鳶の袖が短かくて扣紐のかがり目に手の拔けたを慣れぬ身には能くわからず、何の廿圓出したとそりや嘘だ、僕は大枚五圓でもこのとほり流行の藁鼠、色合ひからしてよからうと、これを召しての年始まはり、こいつで下駄さへよく耆れば、下は金襴を着たとも見えると、獻上の鴨そこのけに足の方へも心を用ゐ、元朝早く「御愛でたう」。

二重鳶はそれ故ことしの流行、去年よりは一際えらし、これを引つ剝いで木地を見れば御定まりの重ね物、にやけては更紗の下着、すこし澁くて小紋のそれ、上着は大抵相場の極つた、まづ羽二重を上として、或は市樂、或は魚子、又は小紋が主なところ。羽織はとしらべれば、是も羽二重、魚子、八丈、

下つた處で奉書紬、色合ひの淡藍鼠は來年黑に直さうとの經濟向きから起つたしるしで、染め直しの黑の色のいきなり染めに劣るは構はず、工夫算段もここ迄付けば、それこそ最早どんづまり、七分三分の兼ね合ひ。

縱に見れば右のとほり、これを橫から種類に應じそれぞれ、身柄に應じて見れば、さすが又亂れた中にいくらか秩序も有ること。　金紋打つた御手車、絹帽子の黑光りにいとど胸飾の白を目立たせ、本黑羅紗緣無しの禮服に裏綿羊の白の手套、五分も透らぬ打扮はいづれ夜會に指をも染めた、交際馴れた紳士株。　同じく金紋の抱へ車、同じく絹帽子の立烏帽子、口綿薄の下襦袢に同じ仕立の長襦袢、之に小紋の下着を二枚或は捻つて輕く一枚、上着は羽二重又は市樂、京染の黑羽織、別あつらへの紐は平打ち、濃御納戸の籠編みに、裏無し仙臺平の袴、わざと畧して絹を避けた裏綿羊のきやらこの足袋、是も思入れ凜とした、而も氣取つた打扮は、いづれ銀行、會社連、新聞記者か、作者の類。　古式に因つて小僧を供、山高の黑帽子に本紺の奇麗な絹股引、糸織ぐらゐの上着を着て白縮緬の襟卷きしたのはまづ中どほりの小商人。　二子織りの糸織わたり、高麗打ちの羽織の紐、獻上博多の目立つ帶に、帽子無しの壳頭、櫛目正しく奇麗に分けたは芝居者か、箱屋連、又は町内の鳶頭が畧したやうな畧さぬやうな年始まはりの禮服。　帽子目深に二重鳶、その癖白けた顏つきは役か、鹿か、講談師。　紳士向きへは黑羽織、大商人へは革羽織、只の家へは糸織わたり、相手に因つて服を變へるは正しく土地の仕事師か、

又は出入の職人類。

◎一月の十五、十六

一七兩月の十五十六此二日が一年ただ二度しか無い小僧どもには居ても立つても居られぬ放生會の嬉しい日で、此ただ前後二日の間に可愛い生命がいくら伸びるか、餘所目にも羨ましい限りである。　ただに小僧のみで無く、同じく大供の連中にも此二日は遊ぶ日と相場がきまつて、從つて市中各所のさかり場にも目の覺める程人出は有り、松の內を取り除ければ、一年中の他の日は迚も及ばぬほどの姿。まづは一月の上十日に小遣錢の底をはたく、底をはたけば遊べもせず、爲うこと無しに寐入つた處で、やがて十四日と爲るに於ては又それぞれに拂ひが取れる、それからえての十五十六、何で遊ばすに居られるもの！つまりはそれ故此日の遊びは職人どもの方に多し、それにつれて他の人人も推しなべての賑ひに釣り込まれ、同じ此日を遊ぶと爲れば、そこで何より儲けるのは客をむかへる商賣人。

順を追つて片付ければ、筆頭第一が料理屋である。　松の內のざつくばらんにいくらか實入りも有つた處で、扨それながらも苦しがりは此社會の相場とて、七草過ぎて瞬く間、早くも質に入つて仕舞つた客

火鉢や膳椀茶道具、額や掛け物のくさぐさを又も俄かに受け出して唯この二日の竅を埋める――ほとんど小僧轍鮒の急。

次に立つは藝者である。 染めかへしにしろ、何にしろ、兎も角春着はこしらへた、その春着を今一つ、ここで十五十六兩日だけは成る事ならば別のに代へて是見てくれろと實は言ひたい。が、言ひたい丈で力は無し、もしも詮方盡きた日には矢張り仲通か、仲町だと灰をいぢつて青い呼吸。

春は許多の合戰で痛み拔いた花がるたをさらりと捨てて別に仕入れ、同じく夜具をも日に乾して、あはれ好い鴨來てかかれと待ち掛けるのは待合茶屋。 旦那さまから御神さん、番頭どのから手代衆、それぞれから拜領した小遣錢の二三圓、その小僧どもの蝦蟇口を外へはやらね總〆めだと蓋を開ける演劇に寄席。

これらを重な部類とし、その細かい所に至つては緣日の小商人に辻待の赤げつと、これらも御多分には無論洩れず、今日一日は小僧どのも己がためには大旦那。 また小僧の方でも氣ばかり急く、ただ一日の遊山には扨何から片付けていいものやら、家へかへつて親にも逢ひたし、兄弟どもの顏も見たし、演劇も見たし、寄席も聞きたし、おつと手品もこいつ上等、十二階へも登りたし、心は八方身は一つ、成る事ならば今日だけが身體が眞粉細工でも爲つて、あちこちへ千切れたいと――さあ命と賴むは人力車。 さすがに經費の程度も有り、追加案も出せぬ身とて綱曳き跡れしなどははづめず、それでも何

うか多くはづむ、つまりは足元を見込まれて、曳き出された上ねだられて矢張り食ひ物となる次第。
遊びの場所は東京市中至る所賑はふものの十六日の重なものは閻魔大王の御祭りで、芝、淺草の兩公園、その他閻魔の有る處いづれも讓らぬ賑ひながら、さて又閻魔は附けたりで、やはり見世物とか、茶店とかが多ほくは客は受ける方。　小僧の遊びは高も知れた極おとなしい方ながら、稍年を取つた大僧は此方どうして油斷がならず、それ相應なくすね錢、わざと洒落れて此日は出ず、もつと後れていいとも言ふ、で無くて又出たうへは流行を見習ふ溫泉まはり、近郊五六里の處へ遠出などして財布を盡くして歸る仕末。

◎雪

廿五年一月十二日、今日は初卯といふ朝、目を覺ませば曉の寒さ骨にこたへ、切り椽の障子の色も冴えに冴えた。
雪といふ聲がいつか家の中に湧く、すはと枕を蹴て起きれば、何さま思ひも掛けぬ美觀。　空は薄墨にどんよりして、亂れ散る不香の花、松の幹にも一刷子當てて、今を盛の緋龍の山茶花に紅白際立つ白

然の配合。敷き松葉の鳶色に、天女の裀か、綿を布いて、その布きわたした木の下蔭に鉢うゑの仙蓼が寒さうに殘る、ことし切つての眺めであつた。

さてもよく降つたよく降つた。　去年はむなしく待ち外し、雪釣り繩も伊達に爲つた、それに引かへ、今年は是。　朝方からの降り出しとて積らぬといふ憾みは有つても、晝ゆゑ眺めはせはしく無し、しかもますます降りしきれば、見る見る一寸ほどは積る。この上にもう一寸つもれば〆めて會計が二寸となると其下から冷かされて、我慢しては笑ひもせず、椽端で寢惚け顏、はるかの空の上を眺め、薄ぐろくなつて落ちて來る大玉をはるかに下から目で迎へ、段段と落ちて來る末を見送り、落ち付く果てまで見屆ける、頼まれもせぬ雪の守護役。

その甲斐も無殘や無し、降る降ると言つたのも形ばかりの吉例で、その内にやがて歇む。これは左樣した約定では無かつたがと空を仰いで詰め寄れば、南の果てに雲が切れ、切れ目に旭日の茜が掛かつて、まづは此所これぎりと口上を言ひさうな風。　言はば是が雀の三里、で無ければ伊達者の入れ綿、うつすりと一枚どほりだけ入れて、肥るといけぬからとの御注意か、さりとは些しと怨むものの、また思ひ直せば人助け、凍りつくやうな震ひ聲に夜半粒粒の辛苦を嘗めるそれら數數の苦惱を思へば、さて又此くらゐな御しるしほど、加賀や越後の御裾分ほどでも我慢の出來ぬ筈も無いと吾から吾と思ひ直して、机によつて筆を執れば、不思議や筆がおのづと動いてせめてもの腹愈せにと次ぎ次ぎの文を書いた。

正味より騷ぎの方が強いのは賣出しの廣告文と箒を鬼と見た評判、それから初産の嫁女の苦勞に見本だけのみやこの雪。　よしや精精降つたところが高が一尺の上には越えず、得て多くは五寸ぐらゐが都では驚く大雪とて、そりや降つたといふ日にはやれ湯豆腐だ、雪見酒だと騷ぎの方が大きい事である。まづは一降りちらつけば旦那どのの机のほとりに雪見案内の招待狀が得て二三本かならず出來る。雪が降つたら上流へ行くと阿嬌に約した男子の一言これ金鐵だと堅く守つてその支度を爲る紳士も有れば、河岸河岸の舟宿は俄かに櫓櫂の用意して、屋根舟の掃除も怠り無く、從つてまた處處の紅樓、高臺とか川添ひとか、雪見持つて來いといふ家は朝口の瓢輕者を逃がすまいと腕に捩り。

でも流石に寒さは怖し、どんどんと降りしきる中、幌掛け車で輾らせるのは先以て少ない方で、大抵は歇んでから車を命ドて用意と爲る。事に因つてはずつとの遠出、王子や目黑へ押し出して火鉢を圍こんでの行三昧。　これをば中等以上の遊びとし、それから上の社會ではこれを機會の別莊自慢、も一つ手きびしく言へば、別莊の留守つとめさせる麗人の見せびらかしに、客こそ飛んだ切ない役目、他人が鍾愛の雪の肌を本物の雪と見くらべて、いや美事とは其內實どちらを褒めるか分らぬ口。

以上は俗な雪の見方、この朱を奪ふ紫連を取り除けて、純粹の雅人と名唱る向きに移れば、さて早これも矢張り同樣、いづれかと言へば騷ぎが大きく、その割り合ひには雪を見ず。「初雪や何が何して何とやら」と宗匠が首をひねくれば、「雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人はハクジヨウをきて立つて徘徊す」

と韻筒撫でる詩人も有り、多くは炬燵の閉ぢこもりに「轉ぶところまで」の勇は無し、また實景をその塲で無ければ寫せぬといふ異變な文人、そもそもそれが風流か？

いづれも雪は付けたりの、兎もすれば伊達の雪見。兎も角も雪に對して眞實の考へを――よし好いにしろ、わるいにしろ――吐き出だすものの貧しい中、ただただ是はと思はれるは社會の中の一部分、多數には擯斥される貧人といふ一種。

で無くとも地獄のくるしみ、寒苦に身を責められて妻子に此世の姿も無い、いざや翌日はと待つ翌日が一旦白く掩はれては吁！吁！何の無情の天！

天に對して苦惱を吐く呼吸、凍つて朦朧の狹霧となる、その中にはそもそも扨どれほどの怨みが籠る？車を挽いて外出しても世の不景氣は客をも封じて一日一貫が覺束無し、足は踏み拔きにみりみり痛む、それを厭へば死ぬ切迫。　ままよ凍つて足が霜げく、跡は脫疽と爲ればとて出ぬ譯には行かぬと思へば、無情の天はいよいよ憎し、何のまはり遠い豐年の瑞、さても無殘と怨む情はよしや一種の偏頗にしろ、徒らに風流華奢を衒ふ大俗物よりはるか眞實！

◎夜の雪

都門の夜の雪、その眺めが必らずしも鄙ほど風雅であるとは限らぬものの、一種變はつた味ひの有るのが此前の方の一つの長處で、眺めれば眺めるほど淋しさも加はつて、又悲しさも添ふやうな。晝の間から小休もなくしんしんと降りしきる粉のやうな粒を眺めて、ああ是ぢや今夜は積もるわいと震へ聲して言つて歩く往來の人の聲も寒し。每每五時の時計が鳴れば、それを合圖といふやふに常よりも日が早く暮れかかり一面の白布も薄墨色の刷子を受けて、枝の弱い木犀や竹柏などが情無さそうに酩銘枝の半面に白玉の粉を衣に着てしをれてぐたりとなつた姿も何と無く冬ドみ、夕ぐれじみ、又さも寒とし。而も折りも折りとて陰にこもる鐘の音もろとも吹きすさむ北風につれてぶるぶる震へ出すなどいとど哀れを極はめた有り樣。　かきくれて行く先きの見えぬ寒空、立ち迷ふ夕鴉。それもろともに聲振り絞つて、是も腮には逐はれる苦しみ「豆腐ゥィ!」と引つ張り引つ張り重荷にみりつく肩を奨まし、各家晩酌の好下物を具へさせて歩けば、此日に限つて常よりは宜く賣れる。ここかしこの家家から半ば閉めた戸を開けて或は半挺二三挺。そもそもそれ見れば亦想ひやられるのは一家の團欒で、それを下物に火鉢の前、愛らしい妻子の顔をながめ、餘所は知らぬ一間の春に舌つづみをも拍つ事か?

兎角する内日も暮れ切れば、街燈と瓦斯燈だけが常に變はらぬ光り方、さしも喧囂を以て誇る町町も

戰後の街と思ふまでに寂寥として人影無く、鐵道馬車も早く休めば、人力車も仕舞つて歸る。一町が此方の端から向ふの果てまで總勘定して往來はちらりほらり。

偶には通る人力車、綱はつけても車は動かず、跳ね上がつた酒代に跳ねあがつて股にも届く雪の深さ。一粒はいくらと言ふ汗を嚴寒の中にしたたらして、是が火水の苦しみといふのを、懷かしいほおむのためには厭つて居られず、息せき切つて駈けて行けば、それでも亦辛抱づよく辻辻に客待ちする連中は羨ましさうにそれを見送る。　客らしい客は得て通らず、万一有つたらそれこそ値は好い、この一六勝負の追ひ目にかかり、人は人はときよろきよろ眼。

公園の電氣燈は晝よりも明るく照りわたつて夕鴉に今蹴られたまま枝は輕く爲つた立木を穿つて見るも物凄い光りを放つ、一面が茫漠として天の色だけは不思議に赤味を含み、大地一杯の白い所は蒼ざめに蒼ざめて兎もすれば立木の蔭が黒痣のやうに斑を置いて、思へば是が下界の眺めか、それとも地獄の樣子かと坐ろ怪しまれる斗りの有り樣は畵にも描けず、口にも言へず。

夜はいよいよ更けに更けて九時十時といふ頃になれば、辻待の車も全く無く、今こそは己の世界と言ふ顏して往來中を狂ひまはる狗ばかりが數多く、大抵の商人は早く店を〆め切つて、土方人足宿の溝の邊など雪ざらしにした儘押し付けた荷車の片輪などが哀れに殘つて、どう見ても都とは思へぬやうな。わづかに店を張るものと言へは、蕎麥屋に一膳飯屋、それから荒物屋が店を閉め切つてほんの目ゝるし

だけ門口に「正銘糸眞蠟燭」とした角行燈を出して置くばかり。

◎婦人の髪形

これは少少批評に近い放言ながら都下今日の婦人の髪形もしたたか書くだけの價値が有り、或ひは束髪、あるひは結髪、それそれについて局外から見る時にはわつと感服することも、えへんと笑ひたくなる事も中中に澤山ある。

今と爲つて束髪は女學生とか、山の手の奥さん方に大方きまり付いて仕舞つて、さほどに目立つ所も無し、衛生的と言つた人が大分近頃はこて付けられ、經濟的と言つた方が大分近頃は髪結びに此束髪をも頼むやうな、これらがほんの今の姿。咄しは少し枝道ながら、これを公平に言つた日には、(失禮御免) 束髪を爲さる人に身のまはりの飾り方が御上手なのは扨少し。いや何、御洒落で無いにもしろ、色の取り合はせや摸樣の配合を天晴美事に爲さる方は其所等曉の星ぐらゐなもの。妾は虚飾を悦ばずと抑眉さかだてて一口に言ひ飛ばされればそれ迄ながら人界の花とも言ふ女姓の方がさうした尼さまじみた念を屹度御持ちだとの御宣言にはどうも印紙は貼りかねる次第。多少――よしや度合の強弱は有

るにしろ――見得をも爲さる譯、ところでその見得が、平たく言へば、上手な方が得て少なし、兎もすれば御國流の木に竹流、引つつめ髪の剝き出し顔、前髪取らずの白瓜額、季にも合はぬ花かんざしに、猪首をかたどる引き〆め衣紋、四手網の四切り見たやうな毛糸の肩掛を裾みじかに召した體は何う御世辭が言ひたくても、義理にも言へたもので無い、これも何かの因緣か。

束髮は措いてくはしく言はぬとして、扨結髪の方に移れば、是とても不思議な事實が實際今も有るから不思議。　實はこの前年このかたようよう心付いて見たところ、全く妙な事實が有り即ち此東京市中芝、日本橋、又は麹町それぞれの所に應し、多少婦人の髪かたちが相違する、即ち好いのと惡いのと有り、意氣なのと野暮のと有り、その意氣といふのを野暮の方から惡評すれば下品といふ譯にもなる、その野暮といふのを意氣の方から酷評すれば上品といふ譯にもなる、それ故有りやうに言ひのめしても御腹だちは無くてもよし、と先言ひ譯からして置いて、女髪結の巧拙に就いて言はば、一概に見たところで、下町よりは山の手のが何うも上手で無いらしい。　勿論それにも箇條は有り、そもそも髪を結ぶに於て油澤山のこて付けが好いものか、それともさらりとした淡油が好いものか、まづ此優劣を片付けなければ、まだまだうつかりした事ハ言へず。と、して扨此優劣はと言へば、どうも、公平に見たところで、こて付けは甚だ以て感心出來るものでも無し。油でなる程こて付ける、髪の形はよくも有らう、又長持ちも爲るか知れず、ただし身體に毒でも有り、又こて付けはむしろ爲やすし、これで腕前がいいも

のとは言へたものでも有るまい。　こゝからして言ふところで、淡あぶらの輕い細工は容易な腕前では中中出來ぬ。ところが山の手の髮の風は得て此こて付け流義である。こて付け流義で、塗り固めて大嵐がはじまつても毛筋一本も動かせぬといふそれはそれは濃厚い結ひ方。つまりは髮を結ぶといふより捩ぢかためるといふ方が當るやうな、これらがそもそも固有である。ただ是だけなら猶まだよし、些しは餘所も見るらしいに、その髮結の保守一徹、もはや下町では下火に爲つた髮かたちを、珍らしさうに後から用ゐて、島田なら竹の皮づつみ、丸髷ならば大鐵瓶、一あぶら又一あぶら、乙力は曲物屋の化けもの見たやう油づくめで何うにか固める。で、さて固めあげて見れば、ただ何が無しに奇麗ではある。

山の手の髮結ひが何故かう野暮くさいかと言ふに、そこに即ち道理も有り、平たく言つた處で山の手には地方出が兎角多い、これがそもそもその一つ。も一つは昔流儀に御屋敷といふ肌が殘る、從つて又御殿女中流の濃厚流儀が命をつなぐ、これがそもそもその二つ、それからして又下町とは緣が遠く、右ひだり餘り交際も無く、自然見くらべる便りが無い、これがそもそも其三つ。それに又華族の臭味・これが中中の曲者で保守の段には拔け目が無し、しかも幕府時代から命脈を殘し來た諺にも曰ふ「御大名の大ごつてり」が今も變はらず殘るところで、水髮のさつぱりした處、薄化粧の輕いところは何うかと言へば受けられず、濃化粧に伴つて、自然髮もこて付ける。こて付けられても決して嫌はず、むしろ

こて付けが愛される。見やう見眞似で地方出が只これのみを眞似て來る、終に一風出來た始儀。まだしもそれを胡魔化す付け立て。凄まじい櫛簪に目も眩むやうな奇麗な着物で、どうか威も附く、品も出來る。中中に又かうなれば其こつてりが目にも立たず、よし目には立つにしても紅紫金銀のさまざまに果は立派な御姫さまや奧さまがちんと函馬車の暗い處におはします樣に爲るものの、子細に分れば論も無し。有り體に評すれば御姫さまの島田など殊更出來の好いのは尠なく、兎もすれば竹の皮づつみ、それへ一本が二十圓もする簪を（噓も無い）三本ぐらゐ簪すところで、いや最うその奇麗さ、美事さ、仰山さ。　仰山も猶まだよしとて付けて簪を三本も簪すとなれば、低地の柳で、根が緩くなければ、迚も叶つたもので無し、もしも堅かつたら根が吊れて、それこそ彌次北の二の舞は遣りかねぬ、で、三本もさすくらゐに其根をゆるくしたならば、是も餘計な心配ながら、夜寢る時は何う有らうか、仰向けに寐たが最後、美ッ事髷が筋斗打つて反りかへり、七分と三分の兼ね合ひは正に受合つて出來ること。思へば扨も苦勞な髷！

短篇小說　明治文庫第五編　畢

明治二十六年十二月廿五日印刷發行

定價金拾五錢

明治廿六年八月三十日內務省許可

版權所有

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　杉原辨次郎　京橋區元數寄屋町四丁目二番地

印刷所　杉原活版所　京橋區元數寄屋町四丁目二番地

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

番組

壹番目
玉堂恨話美人禪(三幕)……悲劇

中幕
村上義光錦旗風(壹幕)……悲劇

美妙齋新脚本 村上義光錦旗風

番組

貳番目
忠烈百錬鐵(六幕)……悲劇

大切
通達磨(常盤津連中)……所作

或る方様の御勧ならで、自ら名乗る彌次馬が、賣出す時も午の年、駈出者の名を縁と、尾筒にあらぬ筆筒を、硯の海に躍や。横紙破りの拙案は、地乗の足らぬ初鞍と、御許し爲されて孰れも方、先一鞭を中てゝ給べ。中てると云ふも亦吉兆、一昨年からの修業にて、稍劇道の内幕を、知つたと云ふは手前味噌、附の打方木の入方、幕は斯して斯切ると、唯其位を知つただけ、素面では爲らぬと景淸擬き、翻り附たる鐙皿、趣向の手綱搔繰て、孰れも御覧ハイどう〳〵。梨園の馬場の乗初に物せし作は前後四種、是を一座の一日分、御評を願ひ揚幕と、初見參の御挨拶、筋の次第は此後の博文館の口上看板…………作者

全壹册 美本 富岡永洗密畫入
當る新年一月一日より惣幕出揃賣初仕候

各様益御機嫌克奉恐賀候扨今回美妙齋氏の新脚本御覧の外題にて出版仕候間何卒電覧被遊度奉願候右脚本草稿の爲には同氏自身一昨年來劇道の内部に身を投じ諸種の經驗を經し次第尋常脚本外新機軸を出し俳優の所作振事臺詞述方大小道具鳴物衣裳切物等一切其脚本必要の事件即脚本が演劇に移る迄の順序の心得は一一幕毎に示候物にて決て尋常脚本の比に非ず充分完全なる脚本の模範、劇道局外者の夢想無之事實を擧候へば其面白は譬ふる方無之と奉存候特に一座一日分を一冊とせしは空前の工風にて三様の悲劇三様の特色有り美人禪村上義光の時代物共に正史の事實を挺す百錬鐵の世話物巧に今日の時弊を穿ち加之大切通達磨は同氏得意の新作歌曲況哉又挿畫及表紙は同氏久く工風を凝せし物錦上の花花外の月甲午第一の壯觀に有之候段前以御披露如此御座候恐恐謹言……發兌元

大和田建樹先生著　第壹編

廿七年一月下旬發兌

國民文庫

全部拾貳册　洋裝美本　每月壹回發

正價●壹册（紙數二百頁）拾貳錢●全部前金壹圓廿五錢●六册前金六拾七錢●郵稅一册六錢

廿七年一月より一ヶ年間に完成す

國民文庫は、明治廿七年に於ける、文學の新天地を開闢するものなり。

國民文庫は、明治廿七年に於ける、詩學の新知己を紹介するものなり。

國民文庫は、明治廿七年に於ける、新躰歷史の開拓に奮つて鍬を執るものなり。未來廿七年の新社會は、又將に既往廿六年の舊社會にあらざらんとす。實に此活動社會と共に一新すべき、文學世界の風潮を卜知すべきは、此書あるのみ。

國民文庫全部總目次

第壹編　第貳編　第參編　**歐米名家詩集**　全三册

此書は、歐米大家の咳唾玉を爲す名作を翻譯するに、紙躍り墨舞ふの快筆を、以てせしものなり。

第四編　第五編　**文學遊戲**　全二册

此書は、文學を以て少年子女の遊戲に應用し、知らず〳〵の間に文學的趣味を、掬せしむる仕組也

第六編　第七編　**新體日本歷史**　全二册

此書は、日本歷史を極めて面白く、極めて通俗に、極めて新體に、先生が得意の筆もて、書かれしものなり。

第八編　第九編　**新體萬國歷史**　全二册

此書は、萬國歷史を極めて日本人的に、極めて日本文的に、解し易く、感じ易く、泣き易く、笑ひ易く、書かれしものなり。

第拾編　**明治文學史**　全一册

此書は、複雜極まる現今の文學世界を觀察し、其因て來る處の活歷史を、網羅蒐集せられしものなり。

第拾壹編　第拾貳編　**新體文林**　全二册

此書は、先生が一家獨得の新案に成れる、新躰散文と新躰韻文とを載せ、以て其意見のある處を、實例に示されしものなり。

春夏秋冬

毎編讀切　上等洋紙（一冊紙數百六十頁）密書挿入　雅装美本

四季壹回發兌　正價一冊拾五錢　郵税一冊四錢

春の花、夏の山、江月、暮雪、天地の美を鍾め、宇宙の妙を極むるに擬し茲に春夏秋冬と題し、四季毎に各家の新作數篇を綴れる、小説を發刊せんとす。羅する所は偏に當代知名の大家のみに非らず、後進の才子、未顯の俊髦に及び、時に懸賞の方法を以て、普く傑作を募り、之を江湖に紹介すべし、此等秀才の錦心繡腸より織成す文辭の美は、天地宇宙の妙と相對して、特に精華絢爛たらん、抑も又後進を誘掖して、深山幽谿を拓き、名花美玉を世に出さば、斯文進歩上の一功德たるべきかな。

第壹回

競馬（くらべうま）

（桂舟、永洗、永興、丹陵、廣業、年方、國松、柳塢諸氏密畫）

廿七年一月二日發賣

本篇は夙に文壇の一方に雄視して、深山泊と呼ばる硯友社の尾崎紅葉、川上眉山、巖谷漣、石橋思案、江見水蔭、中村花痩、渡部乙羽の七氏が午の年に因みて、結構意匠を馬に寓し、各妙想奇文を闘はしたる新作七篇を聚めたり。

博文館發兌圖書總目錄

明治廿七年一月改正

注意 左ノ目錄書名ノ上ニ附シタル◉印ハ洋裝上製 ◉印は洋裝並製 ○印ハ和製仕立ナリ

本館發行ノ諸雜誌ハ本年一月初刊ヨリ悉ク大改革ヲ加ヘ記事體裁共一新仕候間御一覽ノ上陸續御愛讀ヲ祈ル

◉各雜誌共一月ノ初刊ニ限リ見本トシテ御注文ノ方ヘハ一冊丈ケハ郵税本館ニテ支辨ス

廿七年一月ヨリハ雜誌類賣切ノ際ハ再版不致候ニ付至急御注文ヲ乞フ

博文館發兌圖書目錄ハ東京商況月報ニ附載シ御望ミノ方ヘ郵呈セシガ本年ヨリハ右廢止シ更ニ幼年雜誌每月一日發刊ノ分ニ右圖書目錄附載仕候ニ付キ自今圖書目錄御入用ノ節ハ幼年雜誌御注文被下度候

◉幼年雜誌一冊郵税共金四錢 紙數目錄共一冊百頁以上

(一) 雜誌類

定期刊行 遞信省認可

● 幼年雜誌

每月二回發兌 一日十五日

第四卷第一號 廿七年一月一日刊行

本誌ハ本年ヨリ紙數七十二頁ニ增加シタリ

定價(一冊三錢 六册前金十八錢 十二册前金三十五錢 廿四册(一ヶ年分)前金六十八錢 郵税一册一錢 郵券代用一割增以下モ同ジ)

● 日本之少年

每月二回發兌 一日十五日

第六卷第一號 廿七年一月一日刊行

定價(一冊八錢 六册前金四十五錢 十二册前金八十五錢 廿四册(一ヶ年分)前金一圓六十錢 郵税一册一錢)

● 日本商業雜誌

每月二回發兌 三日十八日

第四卷第一號 廿七年一月三日刊行

定價(日本之少年ト仝價)

● 日本農業新誌

每月一回發兌 五日

第四卷第一號 廿七年一月五日刊行

本誌ハ本年ヨリ每月一回ノ發行ニ改正シタリ

定價(一冊八錢 六册前金四十五錢 十二册(一ヶ年分)前金八十錢 郵税一册一錢)

● 婦女雜誌

每月二回發兌 一日十五日

第四卷第一號 廿七年一月一日刊行

本誌ハ本年ヨリ紙數ヲ增加シ定價ヲ改正シタリ

定價(一冊六錢 六册前金卅四錢 十二册前金六十五錢 廿四册(一ヶ年分)前金一圓廿五錢 郵税一册一錢)

● 文藝共進會

每月一回發兌 五日

第五卷第一號 廿七年一月五日刊行

本誌ハ少年學術共進會ヲ本年ヨリ改題シタルモノニシテ記事モ一變シ詩歌俳諧戲文短篇小說川柳狂

歌狂句都々一落語等文藝上娯樂ノ事項ヲ編述シ紙數ハ一冊百頁トシ定價モ左ノ如ク改正シタリ
定價（一冊六錢 六冊前金卅四錢 十二冊（一ヶ年分）前金六十五錢 郵税一冊一錢）

● 學生筆戰場　毎月一回十日發兌
第四巻第一號 廿七年一月五日刊行
本誌ハ日本全國小學生徒筆戰場ヲ本年ヨリ改題シ記事ハ專ラ作文專修ノ研究場トナシ紙數ヲ一冊百頁ニ増加シ定價モ改正シタリ
定價（文藝共進會ト仝價）

● 日本之法律　毎月一回十日發兌
第六巻第一號 廿七年一月十日刊行
定價（一冊十錢 六冊前金五十七錢 十二冊（一ヶ年分）前金一圓八錢 郵税一冊一錢五厘）

● 日本大家論集　毎月一回十日發兌
第六巻第一號 廿七年一月十日刊行
本誌ハ從來掲載ノ大家ノ學術論説ノ外ニ本年ヨリ政治上ノ名士議論ヲ併載シ日本教育雜誌ノ記事モ合併シ誌上殆ンド一新セリ
定價（日本之法律ト仝價）

（二）定期刊行 全書類（新刊之部）

● 國民文庫　毎月一回發兌 紙數三百頁
正價一冊金十二錢●六冊前金六十七錢●全部十二冊前金金一圓二十五錢●郵税一冊ニ付四錢
本書は通俗文學全書の著者大和田建樹氏の執筆にして明治廿七年に於ける文界の新天地を開闢するものなり

● 社會文庫　毎月二回發兌 紙數百七十頁
正價 國民文庫と同價なり
●第一編 個人對國家論 永井久滿次著
●第二編 日本ト布哇 外山義天著
本書は政治經濟に關する現今の社會上必讀の圖書を陸續發兌するものなり

● 戊辰戰史　毎月二回發兌 紙數百二十頁
正價 國民文庫と同價にして、著者は西南戰史の著者川崎紫山氏なり

● 幼年玉手函　毎月一回發兌 紙數百二十頁
正價一冊金十錢●六冊前金五十七錢●十二冊前金一圓〇八錢●郵税一冊金四錢
●第一編 新年狂言 春駒 漣山人新作 一月二日發兌
本書は少年文學及幼年全書を併行して幼年必讀の新著を發行するものなり

● 春夏秋冬　毎季一回發兌 紙數二百頁
正價一冊金十五錢●四冊前金五十六錢●郵税一冊四錢
●第一回 競馬（くらべうま） 一月二日發兌
本書は當代知名の大家及後進秀才の錦心繡腸より作り成せる小說を發行するものなり

● 蠶糸業全書　毎月一回發兌 紙數二百頁
正價一冊金十五錢●全部六冊前金八十五錢●郵税一冊六錢
帝國大學農科大學講師横井時敬君校閲 吉池慶正君著
●第壹編 蠶業汎論 ●第二編 栽桑編
●第三編 養蠶編上 ●第四編 養蠶編下
●第五編 製糸編上 ●第六編 製糸編下
本書は我國產の主位を占むる蠶糸の増殖及び改良に關する新案を叙述したるものなり。

● 明治歌集　各月一回發兌 紙數二百頁
正價一冊金十二錢●全部六冊金前六十七錢●郵税一冊四錢
本書は全國諸歌人の詠草を蒐集し佐々木信綱氏の撰を請ひ明治歌人の玉詠を網羅するものなり

○音樂全書

定價 幼年玉手函と全價著者は音樂雜誌記者百足登氏なり

毎月一回發兌 紙數百二十頁

（本書總目次）

●第壹編 明清樂の栞
●第貳編 琴曲の栞
●第三編 尺八の栞
●第四編 横笛の栞
●第五編 洋樂の栞
●第六編 胡弓、八雲、一絃琴の栞

本書は世間絶無の珍書にして、音樂上初心の人も獨稽古の出來得る樣一新法を出したるものなり

（繼續出版之部）

◉帝國文庫

正價一冊金五十錢●十冊前金四圓六十錢●三十冊前金十三圓●全部五十冊前金二十圓●郵税一冊十四錢●通運料金十錢

毎月二回發兌 紙數千百頁

●世界文庫

正價一冊金十五錢●六冊前金八十五錢●十二冊前金一圓六十錢●廿四冊前金三圓十錢●郵税一冊に付金六錢

毎月二回發兌 紙數二百頁

●明治文庫

正價 世界文庫と全價なり

毎月一回發兌 紙數二百頁

●逸話文庫

正價一冊金十二錢●六冊前金六十七錢●十二冊前金一圓廿五錢●廿四冊前金二圓五十錢●郵税一冊金四錢

毎月一回發兌 紙數百六十頁

●支那文學全書

正價一冊金廿五錢●六冊前金一圓三十錢●十二冊前金二圓五十錢●三十六冊前金七圓●郵税一冊八錢

毎月二回發兌 紙數四百廿頁

●普通教育全書

毎月一回發兌 紙數二百頁

正價 世界文庫と全價なり

●通俗教育全書

正價 逸話文庫と全價なり

毎月三回發兌 紙數二百頁

●新撰日本外史

正價 世界文庫と全價なり

毎月一回發兌 紙數百五十頁

○少年文學

正價 話逸文庫と全價なり

毎月一回發兌 紙數二百頁

●寸珍百種

正價一冊金十錢●六冊前金五十七錢●廿四冊前金二圓二十錢●百冊前金八圓●郵税一冊四錢

毎月二回發兌 紙數二百頁

○幼年全書

正價 寸珍百種と全價なり但し郵税一冊に付金二錢

毎月二回發兌 紙數百枚

●日本名勝地誌

正價一冊金三十錢●全部七冊前金一圓八十錢●郵税一冊八錢

各月一回發兌 紙數五百五十頁

（出版完成之部）

●通俗文學全書 全部十二冊完成

●日本歷史評林 全部十二冊完成

●實用教育農業全書 全部十九冊完成

●實用教育商業全書 全部十二冊完成

●女學全書 全部十二冊完成

以上五書正價一冊金十五錢●六冊前金八十五錢●十二冊前金一圓六十錢●郵税一冊六錢

● 西南戰史　全部十二冊完成

● 歷史讀本　全部十二冊完成

● 日本百傑傳　全部十二冊完成

以上三書正價一冊金十二錢●六冊金六十七錢●全部十二冊金一圓二十五錢●郵稅一冊金四錢

● 世界百傑傳　全部十二冊完成

● 東洋文藝全書　全部廿四冊完成

以上二書正價一冊金二十錢●六冊金一圓十錢●十二冊金二圓●二十四冊金三圓六十錢●郵稅一冊金六錢

● 日本文學全書　全部廿四冊完成

● 日本歌學全書　全部十二冊完成

● 少年必讀 日本文庫　全部十二冊完成

● 近古文藝 溫知叢書　全部十二冊完成

● 謠曲通解　全部八冊完成

● 技藝百科全書　全部十二冊完成

以上六書正價一冊金二十五錢●六冊金一圓三十五錢●十二冊金二圓五十錢●廿冊金四圓七十五錢●郵稅一冊ニ付三錢

● 萬國歷史全書　全部十二冊完成

● 日本法典全書　全部十四冊完成

以上二書正價一冊金三十錢●六冊金一圓六十錢●十二冊前金三圓●郵稅一冊八錢

（三）

小說稗史書類（新刊之部）

● 春夏秋冬　每年四回　一冊十五錢　郵稅一冊四錢

● 幼年玉手函　每月一回　一冊十錢　郵稅四錢

● 小說明治文庫　每月一回　一冊十五錢　郵稅六錢

◉第壹編
巖谷漣山人著　◎辻占飴　◎黑衣[illegible]　◎山時鳥
◎秋の蝶　◎白面鬼　◎京自慢
武內桂舟插畫　◎けなげさ　◎梢上月　◎花の旅
富岡永洗插畫

◉第貳編
川上眉山著　廣津柳浪著　石橋思案著　◎雪折竹　◎佛[illegible]一紙　◎姥櫻
村井弦齋著　嵯峨の屋著　江見水蔭著　◎福の神　◎薄命の鈴子　◎[illegible]く鴎

◉第參編
江見水蔭著　◎劍客　◎骨武者　◎信天翁　◎漁郎　◎一夜の宿
◎初[illegible]　◎畫[illegible]　◎[illegible]　◎わかれ霜　◎雲烟過眼
武內桂舟插畫　◎[illegible]太守　◎斷絃　◎故家水　◎畫師の妻

◉第四編
幸田露伴著　多田漁山著　田山花袋著　渡部乙羽著　◎緣外緣　◎新學士　◎隅田川の秋　◎都土產
巖谷漣著　川上眉山著　嵯峨の屋著　[illegible]介人　風流狂言記　庭の教子
小林永興插畫

◉第五編
山田美妙齋著　◎みみずばれ　◎紅墻記　◎大龍王　◎くされ緣　◎春の花鳥　◎都門雜與
◎[illegible]　◎[illegible]　◎[illegible]　◎[illegible]　◎[illegible]
三島蕉窓插畫　◎月花目立て　◎雪折れ竹　◎古切手　◎母のなさけ　◎戶隱山紀行

巖谷漣山人著 新年狂言 ●春駒　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

硯友社友新作 ●競馬　全一冊　正價十五錢　郵稅四錢

横濱ガゼット新聞記者井上十吉君著 ●英文忠臣藏　全一冊　一月中旬發兌

德田克德君譯述　若松珊瑚君筆記 ●夜と朝　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

西地機凝先生著 ●滑稽談　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

巖谷漣山人著 ●新御伽草子　全一冊　正價十八錢　郵稅四錢

巖谷漣山人著 ○猿蟹後日譚　全一冊　正價八錢　郵稅二錢

尾崎紅葉山人著 ○鬼桃太郎　全一冊　正價八錢　郵稅二錢

三遊亭圓朝講演 ●八景隅田川　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢

三遊亭圓朝講演 ●政談月の鏡　全一冊　正價十五錢　郵稅四錢

やまと新聞主筆探偵散人條野傳平君著 ●痘痕傳七郎　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢

文學士小川忠八君譯 ●佛蘭西二人皇后　全二冊　正價廿四錢　郵稅八錢

○少年文學　毎月一回　一冊十二錢　郵稅四錢

（少年文學既刊之部）

幸田露伴君著 ○日蓮上人　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

遲塚麗水君著 ○菅相丞　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

渡部乙羽君著 ○上杉鷹山公　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

三宅青軒君著 ○賴山陽　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

尾崎紅葉山人著 ○俠黑兒　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

尾崎紅葉山人著 ○二人むく助　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

高橋太華山人著 ○新太郎少將　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

高橋太華山人著 ○太閤秀吉　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

村井弦齋君著 ○河村瑞賢　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

村井弦齋著 ○紀文大盡　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

幸田露伴君著 ○近江聖人　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

原抱一庵主人著 ○二宮尊德翁　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

○大石良雄　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

巖谷漣山人著 ○こがね丸 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

巖谷漣山人著 ○暑中休暇 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

巖谷漣山人著 ○當世少年氣質 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

幸堂得知君著 ○陸奥の長者 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

南新二君著 ○甲子待 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

川上眉山人著 ○寶の山 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

山田美妙齋君著 ○雨の日ぐらし 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

江見水蔭君著 ○今辨慶 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

嵯峨のやおむろ君著 ○姉と弟 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

宮崎三昧道人著 ○親の恩 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

(脚本之部)

山田美妙君著 ●村上義光錦旗風 全一冊 正價廿五錢 郵稅六錢

福地櫻癡先生著 ●大久保彦左衛門 全一冊 正價二十錢 郵稅六錢

福地櫻癡先生著 ●平野次郎 全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

福地櫻癡先生著 ●女楠 附 求女塚 身替新田 全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

福地櫻癡先生著 ●十二時會稽曾我 全一冊 正價十八錢 郵稅四錢

福地櫻癡先生著 ●東鏡拜賀卷 附 春興鏡獅子 全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

福地櫻癡先生著 ●關ヶ原譽凱歌 全一冊 正價二十錢 郵稅四錢

(古書飜刻之部)

博文館編輯局校訂 ●帝國文庫(全部五十冊) 毎月二回 一冊五十錢 郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂 ●種彦傑作集 全一冊 正價五十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●京傳傑作集 全一冊 正價五十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●柳澤、越後、黑田、加賀、伊達 騷動實記 全一冊 正價五十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●三馬傑作集 全一冊 正價五十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●眞書太閤記 全四冊 一冊五十錢 郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂 ●源平盛衰記 全一冊 正價五十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 ●南總里見八犬傳 全三冊 一冊五十錢 郵稅各十六錢

博文館編輯局校訂 ●東海、岐蘇、奥羽、江ノ島 道中膝栗毛 全一冊 正價五十錢 郵稅十六錢

博文館編輯局校訂 爲永春水

●梅暦春告鳥 全一冊 正價五十錢 郵税十六錢

博文館編輯局校訂

◎校訂通俗三國志 全二冊 一冊五十錢 郵税十六錢

(四) 史傳及逸話書類

學海依田百川先生著

●話園 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

學海依田百川先生著

●譚海 全三冊 正價一冊十錢 郵税一册四錢

質軒岸上操君編

●逸話文庫 毎月一回 一冊十二錢 郵税一册四錢

大和田建樹君著

●日本文人傳 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

内藤燦聚君著

●近世大儒列傳 全二册 一冊十二錢 郵税各四錢

前文部大臣大木伯題辭 花房、山本兩君編

●日本博士全傳 全一冊 正價卅五錢 郵税八錢

松井柏軒、北村紫山兩君編

●日本百傑傳 全十二冊 一册十二錢 郵税各四錢

北村紫山君編

●世界百傑傳 全十二冊 一冊二十錢 郵税各三錢

栗原亮一、宇田友猪兩君編

◎板垣退助君傳 卷之一 正價一圓 郵税十二錢

澁江保君著

●萬國發明家列傳 全一冊 正價十錢 郵税四錢

五洲 矢部新作君著

○徳川家康 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

角田音吉君著

●水野越前守 全一冊 正價十錢 郵税四錢

北村紫山君著(石版肖像眞蹟入)

○維新三傑 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

文學士千頭清臣君述 宮崎晴瀾君綴

●ソクラテス 全一册 正價十二錢 郵税四錢

五洲 矢部新作君著

●ウエルリントン 全一冊 正價十錢 郵税二錢

[illegible]雪山君纂譯

●三大革命巨人 バーク 全一冊 正價十錢 郵税四錢

[illegible]田勤君著

●マルチンルーテル 全一冊 正價二十錢 郵税四錢

荻原絹涯君纂譯

●英傑之典型 全一册 正價十錢 郵税四錢

[illegible]一庵主人著

●拿破崙 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

漣山人、霧山人共撰

●獨逸文壇六大家列傳 全一冊 正價十錢 郵税四錢

坪谷善四郎君著

●内外豪商列傳 全一册 正價十二錢 郵税四錢

貴族院議員安場保和君題辭 江島茂逸君編

●[illegible]人龜鑑博多三傑傳 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

寺島伯題辭、澁澤榮一君序、中原尚德君編

●ロスチャイルド一家詳傳 全一冊 正價十錢 郵税二錢

英國スマイルス氏原著荻原文學士譯補

●俊傑少年 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

英國スマイルス氏原著、荻原文學士譯補
俊傑老年 全一冊 正價四十二錢 郵税四錢

中山代議士序文、澁江保君著
少年鑑 **神童** 全一冊 正價廿五錢 郵税三錢

中村鶯三郎君 鈴木倉之助君合著
泰西近古史談 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘

堀江少將題字、鈴木倉之助君著
少年英傑 **尚武史談** 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘

重野文學博士題字、大塚敏三郎君著
先賢幼時言行錄 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

學習院講師萩野由之君著
朝野年中行事 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

故内藤耻叟先生著、(松本楓湖密畫入)
大祭祝日義解 全一冊 正價十錢 郵税二錢

岸上操君編
事物原始一千題 全一冊 正價十錢 郵税四錢

第一高等中學校教授落合直文、小中村義象兩君合著
歷史讀本 全十二冊 一冊十二錢 郵税一冊四錢

本書全部完成總目次

第一編
能褒野の露……(日本武尊之事蹟)
裾野の嵐……(曾我兄弟復讐事蹟)

第二編
如意輪堂……(楠正行之事蹟)
泉岳寺……(赤穗義士復仇事蹟)

第三編
小松の雪……(平重盛之事蹟)
鬼界ヶ島……(俊寛僧都之事蹟)

第四編
鶴ヶ岡……(靜御前之事蹟)
鳥羽の戀塚……(袈裟御前之事蹟)
館の血烟……(細川忠興夫人事蹟)

第五編
青葉の笛……(平敦盛之事蹟)
日野の若草……(阿新丸之事蹟)
森のあらし……(森蘭丸之事蹟)

第六編
宇佐の御使……(和氣清麿之事蹟)
恩賜の御衣……(菅原道實之事蹟)

第七編
御船の涙……(神后皇后之事蹟)
土のむろや……(護良親王之事蹟)

第八編
菊の下水……(楠正成之事蹟)
八道の野分……(加藤清正之事蹟)

第九編
名古曾の關……(源義家之事蹟)
宇治川……(佐々木高綱之事蹟)
屋島の浦……(那須宗高之事蹟)

第十編
關城の月……(北畠親房之事蹟)
越路の雪……(新田義貞之事蹟)

第十一編
行宮の櫻……(兒島高德之事蹟)
尋ねぬ虫……(藤原師賢之事蹟)

第十二編
六無齋……(林子平之事蹟)
玉の御聲……(高山彥九郎之事蹟)

(五) 紀行及冒險談書類

正六位吉田正春君著
回疆探險 **波斯之旅** 全一冊 正價二十錢 郵税四錢

高橋雄峯君譯述
ロビンソン クルーソー **絶島漂流記** 全三冊 一冊十五錢 郵税一冊六錢

西班牙セルベンテス氏著 松居松葉君譯述
鈍翁冒險譚 全二冊 一冊十五錢 郵税一冊六錢

露國レフ、トルストイ伯著、田山花袋君譯述
コサック兵 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

英國ヘスチングス、マルクハム氏原著、幸田露伴君譯
大氷海 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

亞非利加探險者スタンレー氏著、矢部五洲君譯述
闇黑亞弗利加 全六冊 一冊十五錢 郵税一冊六錢

幸田露伴君著
枕頭山水 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

●世界三週航實記　海軍省水交社纂譯、肝付海軍大佐校訂　ケピテン、クーク　全一冊　正價四十錢　郵稅十六錢

●世界周遊實記　板垣退助伯、勝安芳伯、中江篤介君題辭　島田三郎君、植木枝盛君、栗原亮一君序文　德富猪一郎君、小林樟雄君、辻治之君　二冊五拾錢　世界旅行者　依光方成君著述　全一冊　正價二十五錢　郵稅四錢

●墨西哥探撿實記　副島伯、西鄉從道伯、朝鮮名士朴泳孝氏題辭　前衆議院議長星亨君、河野廣中君序文、立川雲平君、安田勳君跋　法學士三宅恒德君校、竹澤、福田、中村三君合著　全一冊　正價二十五錢　郵稅六錢

●支那漫遊實記　支那漫遊者安東不二雄君著　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

●南洋探撿實記　副島種臣伯序文、鈴木經勳君著　全一冊　正價二十四錢　郵稅六錢

●支那哲學者歐洲巡遊通信　英國文學大家ゴールドスミス氏著、羽化仙人譯　全二冊　一冊十錢　郵稅一冊四錢

(六) 雜曲及戲文書類

●明清樂の栞　音樂雜誌記者百足登君編　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

●琴曲の栞　音樂雜誌記者百足登君編　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

●今昔落語集　登亭今升君編著　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

●滑稽教育談　痩々亭骨皮道人著　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

●骨皮滑稽談　痩々亭骨皮道人著　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

○謡曲通解　大和田建樹君著　全八冊　一冊廿五錢　郵稅六錢

本書全部完成總目次

第一巻目次　●首卷●總論○歌舞の起原○猿樂の起原○能の大成○能の作者○明和の改正○能の組織○能の興味○謡の文學上價値○通解○の由來●高砂●田村●東北●道成寺●鶴龜●實盛●熊野●卒都婆小町●羽衣●竹生島●景清●班女●小袖曾我●右近●邯鄲●千手●遊行柳●室君●張良●朝長●野宮●仲光●土蜘蛛●小鹽●小督●大原御幸●百萬●船辨慶●岩船

第二巻目次　●老松●八島●江口●望月●紅葉狩●葛城●知章●玉葛●鞍馬天狗●海士●大蛇●夜討曾我●三山●熊坂●安達原●咸陽宮●忠度●隅田川●鉢木●藤榮●吳服●花月●花筐●弱法師●七騎落●金札

第三巻目次　●白樂天●箙●楊貴妃●俊寛●檀風●難波●放下僧●松風●安宅●攝待●雨月●經政●求塚●天鼓●羅生門●氷室●正尊●富士太鼓●鐵輪●唐船●西王母●巴●杜若●藤戸●山姥●嵐山

第四巻目次　●養老●敦盛●井筒●關寺小町●石橋●加茂●木曾●蟬丸●蘆刈●殺生石●善界●松虫●三井寺●木賊●融●鵜飼●賴政●夕顔●鳥追船●雷電●志賀●清經●砧●阿漕●大江山●春日龍神●西行櫻●大瓶猩々

第五巻目次　●三輪●鵺●芭蕉●草紙洗小町●烏帽子折●白鬚●三笑●竹雪●姨捨●絃上●弓八幡●項羽●源氏供養●錦木●大會●皇帝●春榮●籠太鼓●一角仙人●自然居士●放生川●生田敦盛●胡蝶●柏崎●通小町●當麻●調伏曾我●元服曾我●合浦

第六巻目次　●龍田●兼平●誓願寺●葵上●禪師曾我●佐保山●通盛●祇王●高野物狂●須磨源氏●卷絹●關原與市●藤●鸚鵡小町●松山鏡●枕慈童●忠信●吉野靜●二人靜●歌占●第六天●橋●身延●現在七面●鷺●東方朔●俊成忠度●梅枝●加茂物狂●車僧●御裳濯●碇潜●浮船●千引●小鍛冶

第七巻目次　●玉井●橋辨慶●檜垣●東岸居士●國栖●江島●鱗形●佛原●祇王●葛城天狗●和布刈●土車●櫻川●飛鳥川●舍利●道明寺●湛海●住吉詣●谷行●龍虎●寐覺●空蟬●六浦●神無月被●昭君●大社●淡路●雲雀山●戀重荷●花軍●水無瀨●吉野天人●錦戸●通守

第八巻目次　●蟻通●大佛供養●女郎花●定家●鍾馗●繪馬●泰山府君●半蔀●墨染櫻●飛雲●伏見●雪●善知鳥●愛宕空也●久世戶●松尾●落葉●藍染川●松山天狗●祭●源太夫●雲林院●綾鼓●輪藏●

代主●盛久●梅●草薙●逆鉾●切兼曾我●釆女●舞車●常陸帶●浦島●猩々

- 大槻如電君序文、岸上操君編 ●**新撰歌曲集** 全二冊 正價四十錢 郵税五錢
- 大宮宗司君編 長歌今樣箏歌 ●**日本雅曲集** 全一冊 正價二十錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 ●**狂言評註** 全一冊 正價十五錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 ●**歌曲評註** 全一冊 正價十五錢 郵税六錢
- 大和田建樹君著 ●**淨瑠璃評註** 全一冊 正價十五錢 郵税六錢
- 晝寢樓主人編 ●**義太夫文粹** 全二冊 正價一册廿錢 郵税一册六錢
- 鶯亭金升君著 ●**都々逸獨稽古** 全一冊 正價二十錢 郵税二錢五厘
- 曾軒居士岸上操君編 ●**古今狂歌狂句集** 全一冊 正價二十錢 郵税二錢五厘
- 痩々亭骨皮道人編 ●**古今川柳一萬集** 全一冊 正價二十錢 郵税六錢
- 織田純一郎君序文、三木、岸上兩君編 ●**古今名家戲文集** 全二冊 正價四十錢 郵税五錢

(七) 家庭及遊戲書類

- 秋原捨五郎君著 ○**幼年全書** 毎月二回 正價一冊十錢 郵税一冊二錢
- 少年書類 ●**家庭讀本** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢
- 幼年雜誌記者坂下龜太郎君著 ○**繪入幼年歷史** 全一冊 正價二十錢 郵税二錢
- 幼年雜誌記者坂下龜太郎君著 ○**繪入幼年讀本** 全一冊 正價二十錢 郵税二錢
- 谷口政德君著 家庭教育 ●**幼稚園** 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘
- 谷口政德君著 家庭教育 ●**尋常小學校** 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘
- 谷口政德君著 家庭教育 ●**高等小學校** 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘
- 須永金三郎君著 家庭教育 ●**女學校** 全一册 正價十二錢 郵税一錢五厘
- 谷口政德君著 實用教育 ●**商業學校** 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘
- 谷口政德君著 實用教育 ●**農工學校** 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘
- 第一高等中學校教授落合直文、小中村義象兩君合著 ○**歷史讀本** 全十二冊 一冊十二錢 郵税一冊四錢
- 岸弘毅君著 ●**修身入門畫** 附圖解添 全一冊 正價廿五錢 郵税六錢
- 内藤耻叟先生序文、佐藤治郎吉君著(秀湖畫) 少年書類 ●**新伊蘇普物語** 全一冊 正價四十五錢 郵税四錢
- 幸福夜史澁江保君著(密畫入) ●**西洋妖怪奇談** 全一冊 正價四十二錢 郵税四錢
- 音樂雜誌記者百足登君編 ○**音樂全書** 全六冊 一冊十錢 郵税一冊四錢

吟花嘯月樓主人著
● 花遊の枝折 一名、花かるた必勝指南 全一冊 正價十錢 郵稅四錢

羽化仙人編
● 魔術（西洋木版密畫數十個入） 全二冊 一冊十五錢 郵稅一冊四錢

青山牧吉君編
● 男女遊戲法 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

幼年雜誌記者坂下龜太郎君編
○ 繪入幼年遊戲 全一冊 正價十錢 郵稅二錢

幼年雜誌記者坂下龜太郎君編
○ 繪入遊戲算術 全一册 正價十錢 郵稅二錢

幼年雜誌記者坂下龜太郎君著
● 少年必讀 理科遊戲 上 一冊 正價十二錢 郵稅四錢

寺崎農業、坂下龜太郎兩君著
● 物理奇觀 一名理科應用遊戲 全三冊 一冊十二錢 郵稅各四錢

三木貞一君校閲、齋藤良恭君編
● 少年育才 文園遊戲 全一册 正價十二錢 郵稅四錢

大槻東陽君著
○ 五連碁秘傳 全一冊 正價十錢 郵稅二錢

小中村義象、落合直文兩君考案、武内桂舟畫
● 日本歷史雙六 附圖解添 全一册 正價廿五錢 郵稅四錢

農商務省農商務局纂訂
◉ 狩獵圖說 全一冊 正價五十錢 郵稅六錢

（八）詩歌書類

大和田建樹君著
● 歐米名家詩集 全三冊 一冊十二錢 郵稅一册六錢

成島柳北先生著
● 柳北詩抄 全一冊 正價四十錢 郵稅 錢

米國文學士工藤精一君校閲、越山玉坡君譯述
● 英詩和譯 一名ユーニオン第四讀本詩譯 全一冊 正價四十錢 郵稅 錢

嚴谷一六先生題辭、佐藤六石先生撰
● 日本名家詩選 全一冊 正價二十錢 郵稅二錢五厘

黄石翁、朴泳孝兩君題辭、松井柏軒君撰
● 和漢名家詩集 全一冊 正價二十錢 郵稅二錢五厘

湖山小野長愿先生題辭、内山正如君編
● 明治英傑詩纂 全一冊 正價四十錢 郵稅 錢

佐藤六石先生編
● 皇朝千家絕句 全一冊 正價四十錢 郵稅 錢

近衛公爵題歌、黎庶昌、矢土錦山兩君序文
横山香苗、佐成源、兒島光亨 三君合編
岡本黄石
● 雷笑餘聲 附 祭星餘光 雞林詩選 合一冊 正價四十錢 郵稅 錢

勝伯題字、清國黎庶昌君序文
向山黄村翁題辭、井上陳政君編
● 田園自述詩 全一冊 正價二十五錢 郵稅 錢

織田完之君著
○ 厚生利用集 全一冊 正價十八錢 郵稅四錢

代議士末廣鐵腸君序文、三木愛花君編
● 古今狂詩大全 全一冊 正價二十錢 郵稅二錢五厘

正親町伯爵題辭、東久世伯爵題歌、佐々木信綱君撰
● 明治歌集 全六冊 一冊十二錢 郵稅一册四錢

佐々木弘綱仝信綱兩君標註校訂
● 日本歌學全書 全十二冊 一冊廿五錢 郵稅六錢

全部完成總目次

（第一編）古今集　躬恒家集　友則歌集　貫之歌集　忠岑家集

（第二編）後撰集　元輔家集　順家集　能宣家集　天徳歌集

（第三編）拾遺集　紫式部家集　公任家集　清少納言家集

（第四編）後拾遺集　相模家集　經信卿母集　高陽院歌合

（第五編）金葉集　詞華集　堀川百首

（第六編）千載集　永久百首　忠度集　後京極自歌合

（第七編）新古今和歌集　自讃歌　鴨長明集

（第八編）徳大寺大臣集　西行法師家集　源三位賴政集　右大臣實朝集

萬葉集（自第九編至第十一編）

（第十二編）悦目抄　無名抄　歌かたり　にひまなび　新學異見　歌ふくろ　調の直路

毛利公爵題辭、本居大教正題詠
佐々木弘綱佐々木信綱二君校訂
萬葉集
全三冊　正價一冊廿五錢　郵税一册六錢

東久世伯爵題字、近衛公爵題詞
高崎御歌所長題詠、佐々木弘綱大人撰（弘訓石版肖像入）
千代田歌集
全三冊　正價一冊廿錢　郵税一冊六錢

三條實萬公序文、三條實美公序文
美濃部代議士跋、佐々木弘綱大人撰
足代弘訓翁家集
全一冊　正價廿五錢　郵税六錢

東久世伯序、前田子題歌、佐々木信綱君著
百人一首講義
全一冊　正價二十錢　郵税六錢

品川子爵題辭、從五位鈴木重嶺君題詠
正四位秋月種樹君評、天野御民君編
歷世記事
詠史百首（帙入）
全一冊　正價五十錢　郵税十二錢

東久世伯題詠、佐々木信綱君標註
七種百人一首
全一冊　正價二十錢　郵税四錢

谷勤大人序文、下野遠光君著
百人一首略解
全一冊　正價十五錢　郵税六錢

中岸[illegible]軒先生遺著
百首贅々
全一冊　正價二十錢　郵税四錢

野村傳四郎君編
錦羽大人
靜先生
硯海の一勺（寫眞入）
全一冊　正價十二錢　郵税四錢

大和田建樹君註釋
文部省選定
祝祭日唱歌註釋
全一冊　正價六錢　郵税二錢

大和田建樹君著（文部省檢定濟）
文部省御選定
祝日大祭日歌詞并樂譜
全一冊　正價二錢　郵税三冊迄二錢

大和田建樹君著（文部省檢定濟）
尋常小學
帝國唱歌
全一冊　正價十六錢　郵税四錢

大和田建樹君著（文部省檢定濟）
高等小學
帝國唱歌
全二冊　正價廿四錢　郵税四錢

高島陸軍大佐題字、東京音學々校教授上眞行先生校閲
學習院教官納所辨次郎君著
日本軍歌
全一冊　正價十二錢　郵税二錢

佐々木信綱君著
繪入幼年唱歌
全一冊　正價十錢　郵税四錢

山田美妙齋君著
新體詩文
青年唱歌集
全二冊　正價二十錢　郵税四錢

梅花道人中西幹男君著
●新體梅花詩集 全一册 正價十五錢 郵稅四錢

（九）詩歌作法書類

植村蘆洲君校閲、沖芝嶺君編
○新撰詩語活用 全三册 正價廿五錢 郵稅四錢

津田甚三郎君著
○作詩秘要 全一册 正價十二錢 郵稅二錢

石川鴻齋先生著
○詩法詳論 唐裝美本 全二册 正價四十錢 郵稅六錢

東久世伯題辭、高崎正風男題辭
福羽美靜子序、佐々木信綱君著
●歌の栞 全一册 正價一圓廿錢 郵送料十五錢

第一高等中學校教授落合直文君著
●新選歌典 全一册 正價六十錢 郵稅十二錢

東久世伯題辭、井口隆太郎君著
●歌學捷徑 全一册 正價十五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
●應用歌學 全一册 正價十五錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
●新體詩學 全一册 正價十五錢 郵稅六錢

（十）俳諧書類

夜雪庵金羨、阿心庵永機兩宗匠撰
●明治新撰俳諧一萬葉 全二册 正價四十錢 郵稅八錢五厘

品川子爵題歌、撫松庵松永厚君著
●俳諧麓の栞 全一册 正價廿五錢 郵稅六錢

田中寶二郎君著
●俳諧獨案内 全一册 正價十錢 郵稅四錢

山[illegible]庚午太郎君著
●俳諧史談 全一册 正價十錢 郵稅四錢

[illegible]花樓主人著
●俳諧名家列傳 全一册 正價十錢 郵稅四錢

[illegible]岸上操君編
●雅俗文範 俳諧文選 全一册 正價二十錢 郵稅六錢

（十一）和漢文書類

第一高等中學校教授落合直文君編
●中等教育國文軌範 全一册 正價五十錢 郵稅八錢

石川鴻齋先生編
●中等教育漢文軌範 全一册 正價四十錢 郵稅八錢

近衛公爵題辭、本田男爵序文、東久世伯爵題辭、佐々木信綱君著
●日本文範 全二册 正價四十錢 郵稅五錢

第一高等中學校教授落合直文君著
●國文評釋 全五册 一册十二錢 郵稅四錢

巖谷一六、向山黄村兩君題字、北村三郎、松井廣吉兩君撰
●和漢名家文粹 全二册 正價四十錢 郵稅五錢

幻[illegible]內山正如君編
●明治英傑文集 全一册 正價十錢 郵稅四錢

故成島柳北翁遺稿
●柳北遺稿 全二册 正價一册十錢 郵稅一册四錢

故江藤新平君遺稿
●南白遺稿 全一册 正價二十錢 郵稅四錢

陸軍中將三好子爵題辭、內山正如君編
● 詔勅熟纂 祝辭演說一千題　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

研ヶ敦子君題歌、佐々木信綱君撰
● 婦女詞藻　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

(十二) 文法書類

學習院教授從七位萩野由之君著
● 中等教育作文法　全一冊　正價六十錢　郵稅十錢

落合直文、小中村義象兩君合著
● 中等教育日本文典　全一冊　正價六十錢　郵稅十錢

金井之恭先生題辭、大宮宗司、星野三郎兩君合著
● 日本小文典　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

福羽子爵校閱、山中煥乎君著
○ 假名交文典　全一冊　正價八錢　郵稅二錢

久米幹文先生校閱、帆足正久君著
○ 假字つかひ早學　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

久米幹文先生校閱、小谷一馬君著
○ 國語教授問答　全一冊　正價十五錢　郵稅四錢

石川鴻齋先生著
○ 文法詳論　唐裝美本全二冊　正價四十錢　郵稅六錢

石川鴻齋先生著
○ 續文法詳論　唐裝美本全二冊　正價四十錢　郵稅六錢

京都同志社教授松浦政泰君著
● 應用文章學　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

大和田建樹君著
● 應用漢文學　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
● 應用和文學　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
● 作文組立法　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

大和田建樹君著
● 書簡組立法　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

村上秀吉君著
○ 修辭學　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

帝國大學漢書科卒業安原健堂君著
● 支那文典　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

帝國大學漢書科卒業安原健堂君著
● 和漢譯文法　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

石川鴻齋先生編
● 漢文講讀法　全二冊　正價廿四錢　郵稅八錢

鈴木倉之助君著
● 初等文法詳解　全一冊　正價二十錢　郵稅六錢

鈴木倉之助君著
● 尋常小學作文教科書　全一冊　正價十五錢　郵稅四錢

岡村増太郎君著
● 高等小學作文教科書　全一冊　正價二十錢　郵稅六錢

谷口政德君著
● 初等教育作文一千題　全二冊　正價廿四錢　郵稅八錢

田中墨軒君編
● 初等教育作文新書　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

● 繪入作文大意　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

(十三) 用文書類

川田文學博士序、大和田建樹君著、巖谷一六君書
○ 明治書簡文　全一冊　正價三十錢　郵稅四錢

東京工業學校助教諭神作濱吉君著
● 日本工業用文　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

巖谷一六先生題辭、內山正如君著
● 實地活用日本用文大全　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

山口明吉君序、須永金三郎君著
● 新撰日本商業用文　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

横井時敬農學士序文　坪谷善四郎君著
○ 日本農工用文　（帙入）全一冊　正價五十錢　郵稅十四錢

賀井上操君編
● 名家尺牘文集　全一冊　正價二十錢　郵稅六錢

高槻法學士序文、須永金三郎君著
● 日本學生用文　全一冊　正價三十錢　郵稅六錢

谷口政德君著
● 獨習自在生徒用文　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

稻垣敎子君序文、佐々木信綱君著
● 日本婦女用文　全一冊　正價廿五錢　郵稅二錢五厘

閑院宮妃殿下題字、東久世伯序文、佐々木信綱君著
● 日本女子用文章　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

土谷忠次君著
● 新撰書入書牘文　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

陸軍中將三好子爵題辭、內山正如君編
● 日本軍人用文　全一冊　正價三十錢　郵稅八錢

（十四）演說及處世書類

文學博士島田重禮君序文、澁江保君編纂
◉ 國民錦囊　全一冊　正價九十錢　郵稅十二錢

目次　●金言集　●俚諺集　●作文法　●勉學法　●處世法　●詩歌集　●演說法

澁江保君著
● 雄辯法　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

栗本鋤雲先生題字、澁江保君著
● 通俗教育演說　全一冊　正價十二錢　郵稅六錢

小中村義象君序文　須永金三郎君著
● 通俗學術演說　全一冊　正價十二錢　郵稅六錢

宮川鐵次郎君著
○ 學問之方針　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

西村茂樹君述
● 讀書次第　全一冊　正價八錢　郵稅二錢

井上文學博士、高田文學士序文、吉田巳之助君述
● 成功遂志勤學要訣　全一冊　正價廿五錢　郵稅二錢

槐堂居士著
● 交際法　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

澁江保君譯述
● 處世方針幸福要訣　全一冊　正價十二錢　郵稅六錢

英國マッシュース氏原著、澁江保君譯補
● 處世活法　全一冊　正價十二錢　郵稅六錢

法學士高槻純之助君序文、澁江保君著
● 福之神　全一冊　正價十二錢　郵稅六錢

（十五）文學及隨筆書類

大和田建樹君著
● 通俗文學全書　全十二冊　一冊十五錢　郵稅一冊六錢

第一高等中學校教授落合直文先生校訂
第一高等中學校教授小中村義象先生
學習院教授萩野由之先生標註
● 日本文學全書　全廿四冊　一冊廿五錢　郵稅各三錢

本書全部完成總目次

（第一編）
●竹取物語
●伊勢物語
●住吉物語
●徒然草
●紫式部日記

（第二編）
●土佐日記
●枕草紙
●更科日記
●方丈記

（第三編）
●十六夜日記
●落窪物語
●辨内侍日記

（第四編）
●とりかへばや物語
●堤中納言物語
●四季物語

（第五編）
●中務内侍日記
●蜻蛉日記
●讃岐典侍日記
●和泉式部日記

（第六編）
●濱松中納言物語
●大和物語
●唐物語

（第七編）
●宇治拾遺物語
●多武峯少將物語

（自第八至第十二編）
●源氏物語

（自第十三至第十五編）
●榮花物語

（自第十六至第十八編）
●太平記

（第十九編）
●保元物語
●平治物語
●秋夜長物語
●鴉鷺合戰物語

（第二十編）
●平家物語

（第二十一編）
●古今著聞集

（第二十二編）
●公事根源
●十訓抄

（第二十三編）
●水鏡
●大鏡

（第二十四編）
●增鏡

帝國文科大學教授正七位内藤恥叟先生 慶應義塾大學部講師小宮山綏介先生校訂
●溫知叢書 全十二冊 一冊廿五錢 郵稅各六錢

帝國文科大學教授内藤恥叟先生校訂
●少年必讀日本文庫 全十二冊 一冊廿五錢 郵稅各六錢

第一高等中學校教授小中村義象君 第一高等中學校講師増田于信君合著
●中等教育日本文學史 全一冊 正價五十錢 郵稅八錢

大和田建樹君著
●和文學史 全一冊 正價九十錢 郵稅十二錢

文學士高津鍬三郎校閲、下野遠光、山崎庚午太郎兩君編
●日本文學集覽 全一冊 正價五十錢 郵稅十錢

内田不知庵主人著
●文學一斑 全一冊 正價十二錢 郵稅六錢

澁江保君著
●英國文學史 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

澁江保君著
●獨佛文學史 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

澁江保君著
●希臘羅馬文學史 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

元田男爵序文 小中村、落合、萩野三君校訂
●源氏物語 全五冊 一冊廿五錢 郵稅一冊三錢

東久世伯爵題詞 小中村、落合、萩野三君校訂
●榮花物語 全三冊 一冊廿五錢 郵稅一冊三錢

小中村、落合、萩野三君校訂
●平家物語 全一冊 正價廿五錢 郵稅三錢五厘

小中村、落合、萩野三君校訂
●保元平治物語 合一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

久我侯爵題字、内藤恥叟先生序文 小中村、落合、萩野三君校訂
●太平記 全三冊 一冊廿五錢 郵稅一冊三錢

小中村、落合、萩野三君校訂
●水鏡大鏡 合一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

小中村、落合、萩野三君校訂
●增鏡 全一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

小中村、落合、萩野三君校訂
●古今著聞集 全一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

小中村、落合、萩野三君校訂
●公事根源十訓抄 合一冊 正價廿五錢 郵稅三錢

(十六) 漢學書類

(活版洋裝之部)

南摩羽峯先生校閲、安原健堂君箋註	箋註 正文章軌範讀本	全一冊	正價三十錢 郵税六錢
南摩羽峯先生校閲 安原健堂先生箋註	箋註 續文章軌範讀本	全一冊	正價三十錢 郵税六錢
從七位城井悔庵君講述	史記列傳講義	全三冊	一冊廿五錢 郵税各八錢
小宮山綏介君講述	詩經講義	全一冊	正價廿五錢 郵税八錢
正七位内藤耻叟君講述	墨子文中子講義	合一冊	正價廿五錢 郵税八錢
從七位城井壽章君講述	荀子講義	全二冊	一冊廿五錢 郵税一冊八錢
太田淳軒君講述	莊子講義	全二冊	一冊廿五錢 郵税一冊八錢
慶應義塾大學部講師小宮山綏介君講述	韓非子講義	全二冊	一冊廿五錢 郵税一冊八錢
慶應義塾大學部講師小宮山綏介君講述	老子列子孫子吳子講義	合一冊	正價廿五錢 郵税八錢
正七位内藤耻叟君講述	近思錄講義 附 近思別錄	合一冊	正價廿五錢 郵税八錢
平井魯堂君講述	戰國策講義	全二冊	一冊廿五錢 郵税一册八錢
正七位内藤耻叟君講述	靖獻遺言講義	全一冊	正價廿五錢 郵税八錢
正七位内藤耻叟君講述	大學中庸論語講義	合一冊	正價廿五錢 郵税八錢
正七位内藤耻叟君講述	孟子講義	全一冊	正價廿五錢 郵税八錢
正七位内藤耻叟君講述	小學孝經忠經講義	合一冊	正價廿五錢 郵税八錢
石川鴻齋君講述	十八史略講義	全二冊	一冊廿五錢 郵税一冊八錢
石川鴻齋君講述	正文章軌範講義	全一冊	正價廿五錢 郵税八錢
石川鴻齋君講述	續文章軌範講義	全一冊	正價廿五錢 郵税八錢
太田淳軒君講述	唐詩選三體詩講義	合一冊	正價廿五錢 郵税八錢

(木版和裝之部)

三島中洲先生校閲、山口留次郎君訓點	○資治通鑑	(唐裝)全七十冊	正價九圓 通運料五十錢
石川鴻齋君先生校	○五代史	全八册	一圓五十錢 豫約一圓廿錢
錦山矢土勝之先生訓點	○廿二史言行畧	全六册	正價一圓 豫約七十錢
安藤定格先生纂釋	○校訂 史記讀本	全廿冊	正價二圓廿錢 通運料四十錢
大槻東陽先生校訂	○標註 春秋左氏傳校本	全十五冊	一圓五十錢 通運料廿五錢
清沈德潛確士評點、[illegible]木寬則先生標註	○標註 唐宋八大家文讀本	(銅版唐裝)全八冊	正價一圓 郵税廿錢
石川鴻齋先生編	○和漢 合璧文章軌範	木版和裝 全四册	正價六十錢 郵税十錢
近藤瓶城先生評註	○萬國史標 十八史略評註	木版和裝 全七冊	正價八十錢 郵税二十錢

後藤點 ○五經 木版大字大本 全十一冊 一圓五十錢 通運料四十錢

(十七) 辭書類

井上文部大臣題辭 辻大日本教育會長題辭 西村茂樹君序文 南摩綱紀君序文 木村一歩君編著
●教育辭典 全一冊 正價二圓 通運料二十錢

山田美妙君著
●萬國人名辭書（上卷西洋漢土之部、下卷日本之部） 全二冊 一冊一圓五十錢 通運料各十五錢

石川鴻齋先生纂修
●增頭音釋 康熙字典（全部銅刻帙入絹表紙） 全六冊 正價四圓 郵稅五十四錢 特製桐函入三十錢増 通運料三十錢

岡本黃石、小野湖山、日下部鳴鶴、丁野巖谷一六、岡鹿門、長森丹山、栗本匏庵、矢山錦山、大槻學稼、神波即山、石川鴻齋先生編修、如電、諸大先生校閲
○增訂詳註 篆文 日本大玉篇（全部銅刻帙入絹表紙） 全三冊 正價二圓 郵稅廿四錢

石川鴻齋先生撰
○新撰日本字典（全部銅刻帙入絹表紙） 全二冊 正價八十錢 郵稅十錢

太田淳軒先生編
○新撰明治字典 全一冊 正價卅五錢 郵稅四錢

佐々木伯題辭、栗田寛先生序、大宮宗司君撰
●日本辭林 全一冊 正價五十錢 郵稅六錢

東久世伯題詞、佐々木弘綱、岡野伊平兩君撰
●假名遣枕詞字典 全一冊 正價五十錢 郵稅八錢

小中村、落合、萩野三君閲、大宮、星野、田島三君合著
●國文辭典 全三冊 一冊廿五錢 郵稅一冊六錢

吉田正雄君著
●小學全科字典（上卷讀本、理科）（下卷歷史、地理） 全二冊 一冊十五錢 郵稅各四錢

内山正如君編
○新撰日本節用 全一冊 正價一圓 郵稅十四錢

太田淳幹編
○歷史字典 全一冊 近刊

戸田翠香君編
○文章字典 全一冊 近刊

●傳家寶典 明治節用大全 全一冊 近刊

(十八) 習字書類

從四位巖谷一六君書 川田文學博士題辭 大和田建樹君著
○明治書簡文 全一冊 正價三十錢 郵稅六錢

小陽柳澤信大先生書
○三體千字文 全一冊 正價三十錢 郵稅四錢

從四位巖谷修先生書
○一六蘭亭帖 全一冊 正價二十錢 郵稅四錢

正五位日下部東作先生書
○鳴鶴蘭亭帖 全一冊 正價二十錢 郵稅四錢

橘千蔭先生書 高等女子習字帖
○烏丸帖 全一冊 正價三十錢 郵稅四錢

河村蠶稼君書
○十體千字文 附十字文講義 實語教俗解 童子教俗解 全一冊 正價十五錢 郵稅四錢

石川鴻齋先生著
○書法詳論 唐裝美本 全二冊 正價四十錢 郵稅六錢

南闕子德先生著
○行書類纂 全十冊 近刊

米庵先生著
○略可法 全二冊 正價四十錢 孫約三十錢

米庵先生書
○墨場必携　全六冊　正價五十錢　豫約四十錢

小野鵞堂先生著
●書法大意　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

成瀬大域先生書、東京府教育會編纂
○小學校習字帖　尋常科全八冊　高等科全八冊
尋常科一冊　正價三錢　郵稅二錢
高等科一冊　正價三錢　郵稅二錢
同女子用一冊　正價三錢　郵稅二錢

小陽柳澤信大君書
○隷書歸去來帖　全一冊折本　正價三十錢　郵稅四錢
小陽澤柳信大君書

○楷書烝民帖　全一冊折本　正價廿五錢　郵稅四錢
西郷伯題字、賜硯堂成瀬大域君書

○訂正大字眞書千字文　全四冊折本　正價一圓廿錢　郵稅十六錢
谷子題字、賜硯堂成瀬大域君書

○訂正小字眞書千字文　全一冊折本　正價四十錢　郵稅六錢
故三條實美公題字、黎庶昌賛跋、賜硯堂主人書

○石摺墨帖眞書正信偈　全一冊折本　正價四十錢　郵稅四錢
從四位嚴谷修先生書、寫眞石版印刷

○楷書教育勅語　額面用全一枚　正價廿五錢　郵稅二錢
習字用又ハ捧讀用卷物製美裝桐箱入　正價五十錢　郵稅四錢

中原尙德君著
●實用英字書法　全一冊　正價四十錢　郵稅四錢

(十九)畫學書類

工學博士 校閲
中等教育
●用器畫法　全一冊　近刊
東京工業學校授教諭竹下富次郎著

印藤眞楯、岡村增太郎兩君著
●尋常小學帝國習畫帖（文部省檢定濟）　金四冊　正價廿六錢　郵稅八錢

印藤眞楯、岡村增太郎兩君著
●高等小學帝國習畫帖（文部省檢定濟）　全四冊　正價四十八錢　郵稅十錢

印藤眞楯、岡村增太郎兩君著
●帝國習畫帖教授要旨　透視畫法（文部省檢定濟）　合一冊　正價六錢　郵稅二錢

印藤眞楯、岡村增太郎兩君著
●幾何畫法（文部省檢定濟）　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

川村雨谷、瀧和亭兩先生校閲、石川鴻齋先生著
○畫法詳論　唐裝美本全三冊　正價五十錢　郵稅六錢

久保田米僊先生著
●畫法大意　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

(二十)書畫類

樂翁公評　文學博士川田剛先生跋
賴山陽眞蹟
○上樂翁公書　全一冊　正價二十錢　郵稅二錢

伯爵勝安芳公著
○流芳遺墨　附追贊一話　全二冊帙入　正價一圓五十錢　郵稅十錢

伯爵勝安芳公著
○亡友帖　全一冊　正價八十錢　郵稅十錢

關口與三郎兵衛君編
○墨緣奇賞　全三冊帙入　正價一圓五十錢　郵稅十二錢

子爵品川彌二郎公秘藏、寫眞石版摺
●吉田松陰先生眞蹟　一枚　正價五錢　郵稅二錢

子爵品川彌二郎公秘藏、寫眞石版摺
●大鹽平八郎眞蹟　一枚　正價三十錢　郵稅二錢

上等畫箋紙石版密刻
●貴顯御尊影之圖　全一枚　正價十錢　郵稅二錢

書名	著者・體裁	冊數	正價	郵税
●帝國御宮城之圖	上等洋紙石版密刻	全一帙	十錢	二錢
●憲法發布式之圖	上等畫發紙石版密刻	全一枚	廿五錢	二錢
●日本農工圖繪	洋畫專門村井鼎之輔君筆	全二帙	五十錢	八錢
●白虎隊自及之圖	上等畫發紙石版密刻	大判一枚	二十錢	二錢
●日光山之眞圖	同 石版密刻	全一帙	十五錢	四錢
●七福神之圖	同 石版密刻	全一帙	十五錢	二錢
●日本女禮式	尾形月耕君筆	全一帙	三十錢	二錢
●子供遊戯之圖	洋畫專門石黒辰太郎君筆	全一帙	十五錢	二錢
●四季の風景	渡邉省亭君筆	全一帙	三十錢	二錢
●富士十二景	小林清親君筆	全一帙	十五錢	四錢
●美人十二ケ月	伯々部捨四郎君筆	全一帙	十五錢	四錢
●ひとゝせ	久保田米僊君筆	全一帙	三十錢	二錢
●教訓畫 十二枚一ト組	洋畫專門淺井忠先生筆	一枚	十錢	二錢

(廿一) 名所案内書類

書名	著者・體裁	冊數	正價	郵税・豫約
●日本名勝地誌	參謀本部次長陸軍中將川上操六君題辭、幸田露伴君序文 野崎左文君著（隔月一回發兌） 西洋木版密畫數十個入	全七冊	一冊三十錢	郵税各八錢
◎東海、東山 畿内、山陽 漫遊案内	國會新聞記者野崎左文君著	全一冊	三十錢	郵税四錢
●新編東京獨案内	三木愛花仙史閲 風月散史著	全一冊	二十錢	郵税二錢五厘
○鹽溪紀勝	蘭田與三郎兵衛君著	全帙三冊入	二圓五十錢	郵税十六錢
○江戸名勝圖會	松濤軒長秋編 長谷川雪旦畫	全廿冊	五圓	豫約四圓
○江戸名所花暦	岡山鳥編 長谷川雪旦密畫	全四冊	四十錢	豫約三十錢
○東都歳事記	齋藤月岑編 長谷川雪旦密畫	全五冊	五十錢	豫約四十錢
●温故知新江戸の花	温古堂主人著	全一冊	十八錢	郵税二錢

(廿二) 家政及婦女書類

書名	著者	冊數	正價	郵税
○家政學	華族女學校學監從五位下田歌君述	全二冊	六十錢	十二錢
●家政整理法	坪谷善四郎君著	全一冊	十二錢	四錢
●家事經濟書	飯島半十郎君著（密圖挿入）	全一冊	十二錢	四錢

山田美妙君著（密圖挿入）

●日本室内粧飾法　全一册　正價十五錢　郵税六錢

文部省學校衛生事項取調囑託小兒科醫學士三島通良先生著
皇后陛下御覽

○はゝのつとめ　全一册　正價五十錢　郵税六錢

子爵森有禮君序文、戸塚文海君序文、陸軍々醫總監松本順君題辭、堀誠太郎君譯

●婦女性理一代鑑　全一册　正價三十錢　郵税十錢

矢島錦藏君序文、伊東琴次郎君著

●胎内教育　全一册　正價十二錢　郵税四錢

醫學士中村正道君著

●小兒養育法　全一册　正價十錢　郵税二錢

三條實美公　芳川顯正君　渡邊洪基君　清浦奎吾君題序
文學士濱田健次郎君校閲　中洲濱本義顯君著

○婦女教育明治姫鏡　全一册　正價五十錢　郵税八錢

坪谷善四郎君著、（楓湖、永湖月耕密畫）

○閨秀錦囊日本女禮式　挾入美本　全一册　正價五十錢　郵税十二錢

下田歌子女史題辭、西田敬止君序文、岸上操君撰

●和漢婦女龜鑑　全一册　正價十五錢　郵税六錢

幸福散史澁江保君著

●泰西婦女龜鑑　全一册　正價十五錢　郵税六錢

須永金三郎君著（密圖入）

●婦女手藝法　全一册　正價十五錢　郵税六錢

第三高等中學校教授醫學士高橋金一郎君著

●通俗看病法　全一册　正價十五錢　郵税六錢

刈城森槇太郎君著

●衛生美身術　全一册　正價十錢　郵税四錢

（廿三）商業書類

福澤諭吉先生著

●實業論　全一册　正價十錢　郵税二錢

高市任太郎、川上忠平兩君纂譯

●貨幣問題　全一册　正價三十五錢　郵税四錢

三井銀行京都支店長小野友次郎君著

●ブールス　全一册　正價五十錢　郵税八錢

商業學校卒業生祖山、原田、龜井三君合著

◉實地練習商業活法　全一册　正價四十錢　郵税十錢

須永金三郎君著

●商業秘訣　全一册　正價十五錢　郵税四錢

山本邦之助、田村八二兩君合著

●新式商業簿記全書　全一册　正價四十錢　郵税八錢

保田安政君著

●商業帳簿組立法　全一册　正價十五錢　郵税四錢

秋山行藏、石川豐太郎兩君合著

●商業實用帳合活法　全一册　正價十二錢　郵税四錢

近衛公題辭、富田前東京府知事序文、近藤千吉、六條隆吉兩君著

◉中等教育世界商業史　全一册　正價五十錢　郵税十錢

遠藤芳樹君著

●日本商業志　全一册　正價廿五錢　郵税三錢五厘

伴山三郎君著

●萬國商業史　全一册　正價十五錢　郵税四錢

法學士高槻純之助君著

●内外商業地理　全一册　正價十五錢　郵税四錢

瀧川文學士校閲、伊勢本一郎君著

●應用新論經濟地理　全一册　正價十錢　郵税四錢

戸田翠香君著
● 日本商品學　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

法學士高槻純之助君著
● 商業作文組立法　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

保田安政君著
● 商業作文會話　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

天城安政君著
● 商業讀本（文部省檢定濟）　全三冊　一冊十三錢　郵税一冊四錢

法學士高槻純之助君著
◎ 商業教科書　全一冊　正價六十錢　郵税十二錢

法學士高槻純之助君著
● 商業經濟學　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

文學士天野爲之君著
● 銀行及手形　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

法學士高槻純之助君著
● 銀行論　全一冊　正價廿五錢　郵税三錢

文學士添田壽一君著
● 爲換及外國貿易　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

文學士添田壽一君著
● 外國貿易論

法學士有賀長文君著
● 外國爲替論

シカゴ商業專門學校卒業生深町藤藏君著
● 貨幣論

（外國貿易論・外國爲替論・貨幣論）合一冊　正價廿五錢　郵税三錢

● 米國商家實見錄　全一冊　正價三十錢　郵税六錢

雄峯高橋光威君譯述
● 最近五十年間 米國繁昌記　全二冊　正價三十六錢　郵税八錢

（廿四）農業書類

博士フリードレー氏著、阪牧勇助君補著
● 金（金即權　散能聚）　正價合本　全一冊　正價三十錢　郵税六錢

法學士高槻純之助君著
● 錢　一名通俗貨幣大意　全一冊　正價十錢　郵税四錢

中原尚德君著
● 勿　一名處世之方針　全一冊　正價十錢　郵税四錢

● 蠶絲業全書　全六冊　一冊十五錢　郵税一冊六錢

● 實用教育農業全書　全十九冊　一冊十五錢　郵税一冊六錢

閑院宮載仁親王殿下御題辭
農科大學園藝學講師從五位福羽逸人先生著
● 蔬菜栽培法　全一冊　正價七十錢　郵税十二錢

高等師範學校教授農學士大內健君著
◎ 中等教育農學通論（文部省檢定濟）　全一冊　正價九十錢　郵税十二錢

農商務省農商務局纂訂
◎ 大日本農史　全四冊　價二圓五十錢　郵税二十四錢

帝國大學教授大藏省顧問博士エッゲルト氏著、法學士織田一君譯
◎ 日本振農策　全一冊　正價六十錢　郵税六錢

農學士楠原正三君著
● 米麥篇　全一冊　正價十五錢　郵税六錢

林學士鈴木審三君著
● 林業篇　全一冊　正價十五錢　郵税六錢

林學士白杵永次郎君著
● 造林學　全一冊　正價十五錢　郵税六錢

林學士白杵永次郎君著 **林產物製造法** 全二冊 一冊十五錢 郵稅一冊六錢

獸醫學士內村兵藏、安井濤之助兩君著 **獸醫篇** 全二冊 一冊十五錢 郵稅一冊六錢

農學士横井時敬君著 **農業汎論** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士今關常次郎君著 **農業經濟篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士原熙君著 **養畜篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士高田鑑三君著 **蠶業篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士今關常次郎君著 **農產製造篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士池田日升三君著 **農業須知** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士堀尾錬作、池田日升三兩君著 **栽培篇** 全二冊 一冊十五錢 郵稅各六錢

農學士小島銀吉君著 **作物病害篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士高田鑑三君著 **作物篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士原熙君著 **肥料篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農學士中村鼎君著 **土壤改良篇** 全一冊 正價十五錢 郵稅六錢

農科大學教授玉利喜造君閱、齊柳造二郎君著 **通俗菓園法** 附蔬菜改良法 全一冊 正價十錢 郵稅四錢

農學士恩田鐵彌君著 **苹菓栽培法** 全一冊 正價十錢 郵稅四錢

理學博士伊藤圭介先生校閱、角田音吉君編 **簡易園藝法** 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

農科大學校師農學士横井時敬君著 **農業讀本**（文部省檢定濟） 全二冊 一冊十二錢 郵稅四錢

農商務省農務局纂訂 **大日本農功傳** 全一冊 正價二十錢 郵稅六錢

農學士瀨尾鍋吉君校閱、高橋要亮君譯述 **家禽新書** 全一冊 正價卅錢 郵稅六錢

技師關澤明清君閱、竹中邦香君著 **水產學大意** 全一冊 正價廿五錢 郵稅六錢

(廿五) 工藝書類

農商務省四等技師山岡次郎君著 **實地應用技藝百科全書** 全十二冊 一冊廿五錢 郵稅三錢

農商務省四等技師山岡次郎君著 **初學染色法** 木綿之部 全一冊 正價九十五錢 郵稅六錢

農商務省四等技師山岡次郎君著 **初學染色法** 絹糸之部 全一冊 正價一圓十錢 郵稅六錢

農商務省四等技師山岡次郎君著 **初學染色法** 染料藥品之部 全一冊 正價七十五錢 郵稅六錢

須永金三郎君著 **大日本織物誌** 全一冊 正價二十五錢 郵稅六錢

幸福散史瀧江保君著 **簡易手工學** 全一冊 正價十二錢 郵稅四錢

● 諳氏材力論　建築學士アンダーソン氏著、瓜生寅君譯　全一冊　正價五十錢　郵税八錢

（廿六）政治及經濟書類

● 社會文庫　衆議院書記官法學士永井久滿次君譯　毎月二回　一冊十五錢　郵税四錢

● 個人對國家論　外山義文君著　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

● 日本ト布哇　澁江保君著　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

● 社會學　前内務大臣副島伯序文、丸山作樂先生跋　細川潤次郎先生序文、遠山角助君著　全一冊　正價十二錢　郵税四錢

● 日本之日本　杉浦重剛君序文、松井廣吉君著　全一冊　正價十二錢　郵税四錢

● 日本内閣論　小林雄七郎君著　全一冊　正價十二錢　郵税四錢

● 薩長土肥　小中村、丸山、增田、落合、萩野五先生著　全一冊　正價十二錢　郵税四錢

● 外交　從七位内藤耻叟先生著　全一冊　正價八錢　郵税二錢

● 國體發輝　從三位子爵福羽美靜君著　全一冊　正價八錢　郵税二錢

● 國民本義　文學士有賀長雄君校閲、淺野多作加藤治之丞兩君著　全一冊　正價五錢　郵税二錢

● 日本行政法釋義　全一冊　正價三十錢　郵税六錢

● 日本帝國國勢一斑（第十二回本年改正分）　内務大臣官房報告課御編纂　全一冊　正價三十錢　郵税四錢

● 佛氏國家生理學　文部省編輯局譯　全二冊　正價一冊廿錢　郵税六錢

● 文明論　米國エメルソン氏原著、佐藤重紀君譯　全一冊　正價十二錢　郵税四錢

● 政治新論　坪谷善四郎君著　全一冊　正價十八錢　郵税四錢

● 政治原論　法學士石原健三君著　全一冊　正價二十五錢　郵税三錢

● 通俗政治演説　高田文學士序文、坪谷善四郎君著　全一冊　正價十五錢　郵税四錢

● 通俗國會演説　尾崎代議士序文、松井從夫君著　全一冊　正價二十錢　郵税二錢五厘

● 第一期帝國議會要錄　故代議士植木枝盛君編纂　全一冊　正價三十五錢　郵税八錢

● 第二期帝國議會要錄　故代議士植木枝盛君編纂　全一冊　正價五十錢　郵税十錢

● 第一期國會始末　議員集會所編纂　全一冊　正價二十錢　郵税四錢

● 會議法　法學士龜井英三郎君著
● 撰擧原理　法學士龜井英三郎君著
（合一冊　正價廿五錢　郵税三錢）

● 日本政體史　秦政治郎君著
● 日本財政史　從七位萩野由之君著
（合一冊　正價廿五錢　郵税三錢）

書名	著者	册數	正價	郵稅
財政學	法學士橫田秀雄君著	全一册	廿五錢	三錢
歲計論	文學士添田壽一君著	全一册	廿五錢	三錢
統計學	呉文聰君著	全一册	廿五錢	三錢
國際私法	法學士伊藤悌治君著	合一册	廿五錢	三錢
國際公法	法學士石川錦一郎君著			
國法學	法學士橋爪金一郎君著	合一册	二十五錢	二錢五厘
國債論	法學士織田一君著			
經濟原理	法學士嵯峨根不二郎君著	全一册	廿五錢	四錢
經濟原論	法學士有賀長文君著	全一册	廿五錢	三錢
經濟學研究法	文學士天野爲之君著	合一册	廿五錢	三錢
應用經濟學	法學士嵯峨根不二郎君著			
經濟學史	經濟博士ケーミハエリス氏著			
日本會計法要論	文學士阪谷芳郎君著			

(廿七) 法律書類

書名	著者	册數	正價	郵稅
日本法令大全	山縣樞密院議長題辭、奧田官報局長序文 博文館編輯局編纂	全一册	二圓	通運料三十錢
日本法令大全附錄	博文館編輯局編纂	全一册	十五錢	四錢
警察法規大全	宮川大壽君編	全一册	廿五錢	四錢
日本古代法典	文學博士小中村清矩先生校閲、萩野、小中村、增田三君合編	全一册	一圓	十六錢
官民必携 帝國法典	宮川大壽君編纂	全一册	五十錢	十二錢
法律解釋學	法學士江木衷君著	全一册	四十錢	八錢
法理學	法學士石原健君著	全一册	廿五錢	三錢
改定實施 日本商法釋義	法學士伊藤悌治君校閲、坪谷善四郎君著	全一册	三十錢	八錢
通俗 日本商法註解	法學士熊倉操君校閲、涌井武治郎君著	全一册	十五錢	四錢
近世 民法汎論	法學士江木衷君著	全一册	六十錢	十錢
日本民法註釋	河津祐之君題辭、坪谷善四郎君著	全五册	一册卅錢	一册八錢
日本民法正解	法學士神崎東藏君校閲、宮川大壽君著	全一册	廿五錢	四錢
商法原理	法學士神崎東藏君著	全一册	廿五錢	三錢

著者	書名	冊數	正價	郵稅
法學士神崎東藏君校閱、坪谷善四郎君著	日本商法正解	全一冊	廿五錢	三錢
法學士伊藤悌治君校閱、坪谷善四郎君著	日本商法註釋	全二冊	一冊卅錢	八錢
法學士城數馬君著	刑法原理	全一冊	廿五錢	三錢
河津祐之、龜山貞義兩君校閱、金子源治君編纂	刑法實用大全（講義說明）	全一冊	三十錢	八錢
河津祐之、龜山貞義兩君校閱、金子源治君著	日本刑事訴訟法註釋	全二冊	一冊卅錢	一冊八錢
法學士磯谷幸次郎君校閱、宮川大壽君著	日本刑事訴訟法正解	全一冊	二十五錢	二錢五厘
法學士上條愼藏君著	刑事訴訟法原理	全一冊	廿五錢	三錢
法學士城數馬君校閱、宮川大壽君著	民事訴訟法註釋	全一冊	三十錢	八錢
法學士磯谷幸次郎君校閱、宮川大壽君著	日本民事訴訟法正解	全一冊	二十五錢	二錢五厘
法律學士平島及平君著	民事訴訟法原理	全一冊	廿五錢	三錢
朝倉法學士校閱、宮川大壽君著	現行民事刑事訴訟手續	全一冊	廿五錢	六錢
文學士添田壽一、法學士樋山資之兩君閱、坪谷善四郎君著	大日本帝國憲法註釋	全一冊	三十錢	十二錢
法學士伊藤悌治君閱、園田寶四郎君著	帝國憲法正解	全一冊	八錢	一錢五厘
文學士高田早苗君序文、坪谷善四郎君著	校訂萬國憲法	全一冊	十五錢	六錢
東久世伯題辭、坪谷善四郎君著	府縣制郡制註釋	全一冊	三十錢	八錢
宮川大壽君著	府縣制郡制正解	全一冊	八錢	一錢
前遞信次官前島密君題辭、坪谷善四郎君著	市町村議員必携	全一冊	二十錢	六錢
大審院心得名村泰造君題辭、坪谷善四郎君著	市制町村制註釋	全一冊	十五錢	六錢
鑛山局長和田維四郎君著	帝國鑛山法	全一冊	九十錢	八錢
鑛山局長和田維四郎君著	坑法論	全一冊	三十錢	六錢
涌井武次郎君編纂	鑛山法令大全	全一冊	二十錢	四錢
譽田幾次郎、淺野多作兩君合著	公證人規則實用	全一冊	二十錢	六錢
色川文部書記官序文、日下部三之介君著	小學學令釋義	全一冊	二十錢	二錢
宮川大壽君著	通俗法律演說	全一冊	十二錢	六錢

(廿八) 宗教書類

著者	書名	冊數	正價	郵稅
北畠道龍師著	眞宗眞要	全一冊	十五錢	四錢

●萬國宗教大意　原坦山禪師題辭、內山正如君著　全一冊　正價十二錢　郵稅六錢

(廿九) 軍人書類

●日本軍人用文　陸軍中將三好子爵題辭、內山正如君著　山口陸軍少將題辭、新井步兵大尉校閱　大石兵藏・横田左仲兩君著　全一冊　正價三十錢　郵稅八錢

●軍隊教科算術書　總生寬先生著、諸大家批評　全一冊　正價十八錢　郵稅六錢

●武經　內藤耻叟先生校校、內藤燦聚君著　全一冊　正價十二錢　郵稅二錢

●忠君愛國軍人讀本　伯爵勝安芳公著、本宿大佐鈔述　全一冊　正價三十錢　郵稅六錢

●海軍歷史鈔　勝安芳伯題辭　陸軍中將伊藤雋吉君序　海軍大佐本宿宅命君著　全一冊　正價三十錢　郵稅八錢

●列國海軍提要　全一冊　正價三十錢　郵稅八錢

(三十) 醫學及衛生書類

●袖珍處方必携　醫科大學教授從六位丹波敬三君校閱、從七位矢野十一郎君補譯　全一冊　正價五十錢　郵稅六錢

●袖珍臨床療法大全　長與專齋君題辭、樫村醫學博士校閱　陸軍々醫監石黑忠悳君序文、正七位林代次郎、遠山椿吉兩君譯　全一冊　正價九十五錢　郵稅六錢

●學校衛生學　文部省學校衛生事項取調囑託小兒科醫學士三島通良君著　全一冊　正價六十錢　郵稅六錢

●救世種痘學　文部省學校衛生事項取調囑託小兒科醫學士三島通良君著　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢

●通俗看病法　第三高等中學校教授醫學士高橋金一郎君著　全一冊　正價十五錢　郵稅六錢

●通俗簡易治療法　醫學士岡本武次君校閱、松尾連君著　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

●小兒養育法　醫學士中村正道君著　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

●衛生美身術　刈城森種太郎君著　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

●傍訓改正日本藥局方　松尾連君編纂　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

●上野鑛泉誌　高橋周楨君著　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

(卅一) 歷史書類

●戊辰戰史（每月二回發兌）　川崎紫山君著　全十二冊　一冊十二錢　郵稅一冊四錢

●西南戰史（每月二回發兌）　川崎紫山君著　全十二冊　一冊十二錢　郵稅一冊四錢

●德川十五代史　正七位內藤耻叟先生著　全十二冊　一冊廿五錢　郵稅六錢

●新撰日本外史　第一高等中學校教授小中村義象、落合直文兩君著　全十二冊　一冊十五錢　郵稅四錢

本書全部總目次

◉第一編　御矛の　軍……（神代）
◉第二編　大和　錦……（大和時代上）

◉第三編　唐錦……（大和時代下）
◉第四編　藤の下蔭……（藤原時代）
◉第五編　躑躅の咲分……（源平時代）
◉第六編　星月夜……（鎌倉時代）
◉第七編　芳野の櫻……（南北朝時代）
◉第八編　北山時雨……（室町時代）
◉第九編　五月闇……（戰國時代）
◉第十編　桃山の春……（豐臣時代）
◉第十一編　江戸紫……（德川時代）
◉第十二編　千代田の宮……（明治時代）

學習院教授從七位萩野由之君著
● 日本歴史評林　全十二冊　一冊十五錢　郵稅六錢

正七位内藤耻叟先生校閲　大宮宗司君校註
● 校註神皇正統記　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

學橋大郷穆先生編次
○ 明治新刻日本政記　全十冊　正價一圓廿錢　通運料廿八錢

學習院教授從七位萩野由之君著
◉ 中等教育日本歴史　全二冊　正價一圓十錢　郵稅十六錢

柏軒松井廣吉君著
◉ 新撰大日本帝國史　全一冊　正價四十錢　郵稅十錢

帝國大學卒業秦政次郎君著
● 日本帝國歴史　全一冊　正價三十錢　郵稅八錢

文科大學教授栗田寛先生校閲　增田于信君著（文部省檢定濟）
◉ 高等小學日本歴史　全二冊　正價五十錢　郵稅十四錢

文科大教授栗田寛先生校閲　今泉定介君著（文部省檢定濟）
○ 初等日本歴史　全二冊　正價廿錢　郵稅四錢

谷口政德君著
● 增訂日本小歴史　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

東京女學校教頭永江正直君著　東久世伯題辭　坪谷善四郎君著
○ 繪入日本歴史　全二冊　正價二十錢　郵稅[illegible]

慶應義塾大學部講師小宮山綏介君校閲　山崎彥八君著
◉ 明治歴史　全二冊　正價九十五錢　郵稅二十二錢

山形縣尋常中學校長文學士中原貞七君著
○ 東京府史談　全一冊　正價十錢　郵稅四錢

北村三郎君著
◉ 中等教育萬國歴史　全二冊　正價一圓廿錢　郵稅十八錢

谷口政德君著
◉ 新撰支那國史　全三冊　一册四十錢　郵稅八錢

山川陸軍少將　須永金三郎君著
● 受驗應用支那小歴史　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

松下丈吉君序文　川島純幹君著
● 英國史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

三宅文學士序文　坪谷善四郎君著
● 米國史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

岡本武雄君序文　北村三郎君著
● 佛蘭西史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

矢野文雄君序文　北村三郎君著
● 日耳曼史　全一冊　正價三十錢　都稅三錢五厘

榎本子爵題辭　宮川鐵次郎君著
● 魯國史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

佐藤伯爵題辭　北村三郎君著
● 希臘羅馬史　全一冊　正價三[illegible]錢　郵稅三錢五厘

陸實君序文　北村三郎君著
● 土耳機史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

● 歐洲列國史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

● 鳥尾中將題辭　北村三郎君著
印度史　全一冊　正價三十錢　郵稅三錢五厘

(廿二) 地理書類

學習院教授從七位峯是三郎君著
● 中等教育 **新編地文學**　全一冊　正價五十錢　正價八錢

理學博士小藤文次郎君序　淸政治郎君著(文部省檢定濟)
● 中等教育 **大日本地誌**　全一冊　正價五十錢　郵稅十錢

理學博士寺尾壽君序　秦政治郎君著
● 中等教育 **萬國地誌**　全一冊　正價七十錢　郵稅十四錢

關藤成緖君著
● 高等小學 **日本地理**　(文部省檢定濟)　全一冊　正價廿五錢　郵稅八錢

澁江保君著
● 高等小學 **萬國地理**　(文部省檢定濟)　全一冊　正價三十五錢　郵稅十錢

山崎彥八君著
○ **初等日本地理**　(文部省檢定濟)　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

谷口政德君著
● 應用受驗 **日本小地誌**　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

谷口政德君著
● 應用受驗 **萬國小地誌**　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

秦政治郎君著
● 尋常小學 **地理歷史教科書**　生徒用 教師用　一冊十八錢　郵稅六錢

鎌田勝之進君著
○ **繪入日本地理**　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

(廿三) 地圖類

博文館編輯局製
● **大日本地圖**　大形切圖　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

博文館編輯局製
● **萬國地圖**　大形切圖　全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

博文館編輯局製
● 新撰學生 **實用日本地圖**　大形切圖　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢

博文館編輯局製
● 新撰學生 **實用萬國地圖**　小形切圖　全一冊　正價二十錢　郵稅四錢

博文館編輯局製
● 區劃便覽 **新撰東京地圖**　大形切圖　全一冊　正價二十五錢　郵稅六錢

博文館編輯局製
● **大日本帝國全圖**　全一折　正價三十錢　郵稅六錢

博文館編輯局製
● 縣治區劃 撰學區劃 **日本帝國地圖**　全一折　正價十五錢　郵稅四錢

博文館編輯局製
○ 日本地理 **暗射分割圖**　全一袋　正價十錢　郵稅二錢

博文館編輯局製
○ 萬國地理 **暗射分割圖**　全一袋　正價七錢　郵稅二錢

(廿四) 理科書類

西村貞君著
○ **理科讀本**　全四冊　一冊十三錢　郵稅一冊四錢

學習院教授峯是三郎君校閲　遠藤立敬君著
● 中等教育 **實用植物書**　全一冊　正價四十錢　郵稅八錢

前農商務次官石田英吉君題辭　工學士鳥居炁夫君著
● 中等教育 **有機化學**　全一冊　正價五十錢　郵稅八錢

中江篤介君譯述
◉理學沿革史　全二冊　正價一圓廿錢　郵稅三十錢

小栗栖香平君編述（文部省檢定濟）
○小學理科訓導　全八冊　正價一圓廿錢　郵稅十八錢

本書ハ分冊ニテモ御注文ニ應ズ

第一	動物篇上	正價十五錢	郵稅四錢
第二	動物篇下	正價十五錢	郵稅四錢
	植物篇上		
第三	植物篇下	正價十五錢	郵稅四錢
	鑛物篇完		
第四	物理篇上	正價十五錢	郵稅四錢
第五	物理篇下	正價十五錢	郵稅四錢
第六	化學篇完	正價十五錢	郵稅四錢
第七	動物生理學上	正價十五錢	郵稅四錢
第八	動物生理學下	正價十五錢	郵稅二錢
	植物生理學完		

農學士澤村眞君校閱　小松喜平治君譯述
◉實驗化學　全一冊　正價十二錢　郵稅四錢

坂下龜太郎君著
◉通俗簡易物理學　全一冊　正價四十錢　郵稅八錢

須永元四郎君著
◉初等教育小金石學　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

大熊權平君著
◉初等教育小植物書　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

三田周一郎君著
◉初等教育小動物學　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

澁江保君著
◉初等教育小天文學　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

谷口政德君著
◉初等教育小地文學　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

澁江保君著
◉初等教育小地質學　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

谷口政德君著
◉初等教育小物理書　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢九厘

谷口政德君著
◉初等教育小化學書　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

松尾遜君著
◉初等教育小生理書　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

谷口政德君著
◉簡易地震學　全一冊　正價十二錢　郵稅一錢五厘

幼年雜誌記者坂下龜太郎君著
○繪入理科讀本　全一冊　正價十錢　郵稅二錢

修身書類（册五）

西村茂樹先生閱、日下部三之介君著（文部省檢定濟）
○日本修身訓　全十二册　尋常高等科生徒教師用

- ○尋常生徒用　四冊　正價金二十九錢　郵稅八錢
- ○尋常教師用　四冊　正價金三十六錢　郵稅八錢
- ◉高等生徒用　四冊　正價金六十錢　郵稅廿錢
- ◉高等教師用　四冊　正價金三十六錢　郵稅十二錢

東京學士會院員岡松甕谷先生閱、岡村增太郎君著（文部省檢定濟）
○高等小學修身教科書　全八冊　生徒教師用

- ○生徒用　四冊　正價金二十七錢　郵稅八錢
- ●教師用　四冊　正價金四十四錢　郵稅十六錢

東京學士會院員岡松甕谷先生閱、岡村增太郎君著（文部省檢定濟）
○尋常小學修身教科書　全八冊　生徒教師用

- ○生徒用　四冊　正價金三十八錢　郵稅八錢
- ●教師用　四冊　正價金四十八錢　郵稅十八錢

文學士荻原朝之介君著
○帝國修身軌範（文部省檢定濟） 全四冊 一冊正價廿五錢 郵税四錢

子爵福羽美靜先生校閲、西田敬止君著
○帝國女子修身鑑（文部省檢定濟） 全四冊 正價四十八錢 郵税十錢

帝國大學教授内藤耻叟君著
○帝國童兒訓 全八冊 生徒用 教師用
○尋常生徒用 四冊 正價金二十七錢 郵税八錢
●尋常教師用 四冊 正價金二十六錢 郵税八錢

東久世伯爵題辭、日下部三之介君著
○教育典範 全二冊 正價六十錢 郵税八錢

陸軍中將曾我祐準子題辭 香月衆議院議員序文 東京女學校教授西田敬止君著
◉益軒十訓 全一冊 正價八十錢 郵税十八錢

芳川宮中顧問官題辭、井上文學博士序文、鈴木倉之助君著
○勅語衍義國民修身談 全一冊 正價廿五錢 郵税六錢

文科大學教授栗田寛先生講述
●勅語講義 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

内藤耻叟先生校閲、奥山千代松君著
●教育基本勅語釋義 全一冊 正價十錢 郵税二錢

從三位子爵福羽美靜君著
●忠孝本義 全一冊 正價五錢 郵税二錢

峯是三郎君校閲、素木眞龍君著
●初等教育修身口授書 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘

西村茂樹先生序文、伊藤武壽君著
●國民道德論 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

法學士柳川勝二君著
●普通道德論 全一冊 正價十二錢 郵税一錢五厘

鈴木倉之助君編
○繪入修身讀本 全一冊 正價十錢 郵税二錢

（卅六）教育書類

學習院教授從七位峯是三郎君著
●實驗立案修身教授及訓練法 全一冊 正價廿五錢 郵税六錢

東京府尋常師範學校教諭本庄太一郎君著
●教育古典 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

埼玉縣尋常師範學校教諭一條鎭次郎君著
●習字圖畫教授法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

宮城縣尋常中學校教授今泉祐善君著
●教育學 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

埼玉縣尋常師範學校教諭一條鎭次郎君著
●學校管理法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

高等師範學校教授高橋章臣君著
●教育史 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

學習院教授從七位峯是三郎君著
◉中等教育應用心理學 全一冊 正價六十錢 郵税八錢

靜岡縣尋常師範學校長矢島錦藏君著
●心理學 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

東京府尋常師範學校教諭本庄太一郎君著
●兒童心理學 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

東京府尋常師範學校教諭本庄太一郎君著
●歷史教授法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

本庄太一郎、高橋章臣兩君著
●地理教授法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

靜岡縣尋常師範學校長矢島錦藏君著
●德美教育及修身教授法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

東京府尋常師範學校教諭今泉祐善君著
●讀書作文教授法 全一冊 正價十五錢 郵税六錢

著者	書名	冊數	正價	郵税
今泉祐善君著	理科教授法	全一冊	十五錢	六錢
宮城縣尋常中學校教授今泉祐善君著	算術教授法	全一冊	十五錢	六錢
清水眞義君著	單級教授法	全一冊	十二錢	四錢
大石兵藏君著	初尋教育教授法	全一冊	十二錢	一錢五厘
西大條規校閲、佐藤時外彦三君合著	尋常小學教授法	全一冊	十二錢	四錢
杉山正毅君著	實驗學校管理法	全一冊	十二錢	四錢
東京府女學校教頭永江正直君著	女子教育論	全一冊	十五錢	六錢
中江篤介君譯述	維氏美學	全二冊	六十錢	二十錢
理學博士村岡範爲馳先生講述、法學士高槻純之助君著	平民學校論略	全一冊	廿五錢	八錢
澁江保君著	教育新論	全一冊	十二錢	四錢
澁江保君著	普通教育學	全一冊	十二錢	一錢五厘
栗本鋤雲先生題字、澁江保君著	通俗教育演説	全一冊	十二錢	六錢
澁江保君著	初等教育小倫理書	全一冊	十二錢	一錢五厘
澁江保君著	初等教育小心理書	全一冊	十二錢	一錢五厘
澁江保君著	初等教育小論理書	全一冊	十二錢	一錢五厘
澁江保君著	簡易體操法	全一冊	十二錢	四錢

（廿七）數學書類

著者	書名	冊數	正價	郵税
高等中學鹿兒島造士館教頭理學士谷田部梅吉君編纂	中等教育平面幾何學	全一冊	五十錢	六錢
理學士鮫島晉君著、松見文平君閲、片山淸謙、三田暉信兩君著	普通教育算術教科書	全一冊	一冊五十錢	八錢
三田暉保君著	理論適用普通算術	全一冊	四十錢	八錢
澁江保君著	實用數學一萬題	全一冊	五十錢	十錢
英國チャーレススミス氏著、澁江保君譯	算術五千題	全二冊	一冊十二錢	四錢
英國ウヰルソン氏著、澁江保君譯	代數一千題	全一冊	十二錢	四錢
英國クーシー氏著、澁江保君譯	幾何一千題	全一冊	十二錢	四錢
	初等三角術	全一冊	十二錢	四錢
岡村増太郎君著	初等教育算術新書	全一冊	卅五錢	十錢
吉田正雄君著	尋常小學珠算教科書	全二冊	三十錢	八錢

岡村増太郎君著 尋常小學 **筆算教科書** 全一冊 正價四十錢 郵税八錢

岡村増太郎君著 高等小學 **筆算教科書** 全一冊 正價五十錢 郵税八錢

農科大學々生 稻垣乙丙兩君著 町村落小學校 補習科用 **農業算術** 全一冊 正價八錢 郵税二錢

法學士 高槻純之助君著 **商業算術** 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

山口陸軍少將題辭 新井歩兵大尉校閲 大石兵藏 横田左仲兩君著 **軍隊教科算術書** 全一冊 正價十八錢 郵税六錢

(廿九) 受驗問答書類

梶原藍山君著 官立學校入學試驗 **及第秘訣** 全二冊 正價廿四錢 郵税八錢

梶原藍山君著 受驗必携 **中學豫備門** 全二冊 正價廿四錢 郵税八錢

内山正如君著 受驗問答 **日本地理一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

内山正如君著 受驗問答 **日本歷史一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

内山正如君著 受驗問答 **支那歷史一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

高槻法學士序文、高橋光威、稻見一郎兩君譯 **萬國歷史問答大全** 全一冊 正價四十錢 郵税八錢

博士ドロッパス君、序文高橋、光威稻々紀一郎兩君譯 **萬國地理問答大全** 全一冊 正價三十錢 郵税六錢

大宮宗司君著 受驗問答 **國文學一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

岸上操君著 受驗問答 **漢學一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

須永金三郎君著 受驗問答 **博物一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

須永企三郎君著 受驗問答 **物理一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

須永金三郎君著 受驗問答 **化學一千題** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

高槻法學士序文、村松直一郎君著 官立學校入學試驗 **問題答案** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

石川雅二君著 商業學校入學試驗 **問題答案** 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

須永金三郎君著 **東京修學案内** 全一冊 正價廿五錢 郵税四錢

追加之部

○**改正官員錄** 各月一回發兌 和製 全二冊 一冊四十錢 郵税八錢

佐々木信綱君校註 **校註徒然草** 全一冊 正價廿五錢 郵税六錢

佐々木信綱君校註 **校註土佐日記** 全一冊 正價十錢 郵税二錢

佐々木信綱君校註 **校註方丈記** 全一冊 正價十錢 郵税二錢

佐々木信綱君校註 **校註竹取物語** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

佐々木信綱君校註 **校註伊勢物語** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

佐々木信綱君校註 **校註更科日記** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

東久世通禧伯序文 佐々木綱信君校註 **校註明倫歌集** 全一冊 正價三十錢 郵税六錢

鈴木重嶺先生序文 岸本宗道君校評 **校註古今和歌集** 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

本居豊頴先生序文 岸本、大宮兩君編 **新撰長歌集** 全一冊 正價廿五錢 郵税四錢

匏菴 栗本鋤雲先生題詩 耿亭 蒲生重章先生序文 孤松 片岡政保君編纂 學生必讀 **名家詩纂** 全一冊 正價二十錢 郵税[illegible]錢

黄村 向山榮先生題詩 匏菴 栗本鋤雲先生題詩 内外諸大家十數名散評 觀風吟社編輯 **海外觀風詩集** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

朝鮮欽差辦事大臣李鶴圭君題辭 文科大學囑托教師張滋昉君題詞 松本紀山先生著 **作詩訣** 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

中峯居士高田早苗君序文 如不及齋市島謙吉君序文 破天荒齋松平康國君序文 讀賣新聞記者鈴木君編輯 **明治豪傑譚** 全三冊 一冊十二錢 郵税四錢

讀賣新聞記者小澤勝次郎君編輯 **明治紳士譚** 全二冊 一冊十二錢 郵税四錢

讀賣新聞記者鈴木光次郎君編輯 **明治閨秀美譚** 全一冊 正價十五錢 郵税[illegible]錢

慶應義塾大學部講師小宮山綏介先生編輯 **近世豪傑譚** 全三冊 一冊[illegible]十[illegible]錢 郵税[illegible]錢

少年寶庫 流鶯子 佐藤治郎吉君編著 **日本男兒** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

日本之少年主筆 須永金三郎君編輯 **豪傑となる譚** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

樞密顧問官副島種臣伯題辭 頭山滿君序文 鈴木天眼。太承山人。補正 今田主税君編著 國士[illegible] **平野國臣傳** 全一冊 正價四十錢 郵税六錢

日本[illegible]業雜誌主幹坪谷善四郎君著 [illegible]肖像挿入 **實業家百傑傳** 全六冊 一冊二十錢 郵税六錢

貴族院議員福羽美靜先生題辭 陸軍教授內藤耻叟先生序文 宮川鐵次郎君編輯 **明治新政譚** 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

貴族院議員子爵福羽美靜先生著（一名女大學） 女子教諭 **道の栞** 全一冊 正價十五錢 郵税四錢

想[illegible]子[illegible]外君著 空前絶後 **世界大演說會** 全一冊 正價十二錢 郵税四錢

三島桂洲先生校閲 永井槐山君編 [illegible]家必携 **助字彙註** 全一冊 正價二[illegible]錢 郵税[illegible]錢

美妙齋新脚本 村上義光錦旗風

全一冊美本
富岡永洗畫
正價廿五錢
郵稅六錢

番組

壹番目 玉堂恨話美人禪（三幕）……悲劇
中幕 村上義光錦旗風（壹幕）……悲劇
貳番目 忠烈百錬鐵（六幕）……悲劇
大切 通達磨（常盤津連中）……所作

當る新年一月一日より惣幕出揃賣初仕候

或る方様の御勸ならで、自ら名乘る獨次馬が、賣出す時も午の年、近出者の名も縁さ、尾筒にあらぬ筆筒を、硯の海に騒や、横紙破りの拙案は、地藥の足らぬ初鞍さ、御許し爲されて孰れも方、先一鞭を中てゝ給へ。中[illegible]さ云ふも亦吉兆、一昨年からの修業にて、稍劇道の内幕を、知つたと云ふは手前味噌、附の打方木の入方、幕は斯して斯引るさ、唯其位を知つただけ、素面では爲らぬさ景清擬き、踊り出たる鐙風、趣向の手綱掻繰て、孰れも御覽へイざう／＼。梨園の舞場の乘初に物せし作は前後四種、是を一座の一日分、御評を願ひ[illegible]さ、初見參の御挨拶、筋の次第は此後の博文館の口上看板……………作者

○各樣益御機嫌克奉恐賀候扨今回美妙齋氏の新脚本御覽の外題にて出版仕候間何卒電覽被遊度奉願候右脚本草稿のためには同氏自身一昨年來劇道の內部に身を投じ諸種の經驗を經し[illegible]常脚本の[illegible]機軸を出し俳優の所作振事套詞遣方大小道具鳴物衣裳切物等一切其脚本必要の事件即ち脚本より演劇に移る迄の順序の[illegible]は一[illegible]毎に示[illegible]物にて決て尋常脚本の比に非ず充分完全なる脚本の模範、劇道局外者の夢想[illegible]之至寶を得候へば其面白さは譬ふる方無之[illegible]に一座一日分を一冊させしは空前の工風にて三樣の悲劇三[illegible]の特色有り美人禪[illegible]上義光の時代物共に正史の事實を枉げず[illegible]鍊[illegible]の世話物巧に今日の陰弊を穿ち加之大切通達磨は同氏得意の新[illegible]歌曲[illegible]又挿畫及表紙は[illegible]氏久しく工風を凝せし物[illegible]の花花外の月[illegible]午[illegible]第一の出[illegible]に有之[illegible]以て御披露如此御座候恐惶謹言…………………發兌元

三宅青軒君著

頼山陽

全一冊
正價十二錢
郵稅二錢

日本外史日本政記の著者として、雄渾奔放の文章家として、兒童走卒も其名を知らざるなきは山陽先生頼襄氏なり、而して徒に其名を知るもの多く、其人となりの如何に尊ぶへく敬すべきかを知るもの少なきは何ぞや、一部完全の傳記なきに因らずんばあらず、是れ此の編ある所以なり、此編を繙くものは始めて山陽の山陽たる所以を知らん。

幸田露伴君著
○日蓮上人 全一冊 正價拾貳錢 郵稅四錢

遲塚麗水君著
○菅相丞 全一冊 正價拾貳錢 郵稅四錢

高橋太華山人著
○新太郎少將 全一冊 正價拾二錢 郵稅四錢

幸堂得知君著
○陸奥の長者 全一冊 正價拾二錢 郵稅四錢

[illegible]山人著
○俠黑兒 全一冊 正價拾二錢 郵稅四錢

春夏秋冬

四季毎回發兌 壹編讀切 正價一册金拾五錢 郵税四錢

春の花、夏の山、江月、暮雪、天地の美を鍾め、宇宙の妙を極むるに擬し茲に春夏秋冬と題し、四季毎に各家の新作數篇を綴れる、小説を發刊せんとす。羅する所は偏に當代知名の大家のみにあらず、後進の才子、未顯の俊髦に及び、時に懸賞の方法を以て、普ねく傑作を募り、之を江湖に紹介すべし、此等秀才の錦心繡腸より織成す文辭の美は、天地宇宙の妙と相對して、特に精華絢爛たらん、抑も又後進を誘掖して、深山幽谿を拓き、名花美玉を世に出さば、斯文進歩上の一功德たるべき哉

◉第壹回 競馬（くらべうま）（桂舟、永洗、永興、丹陵、廣業、年方、國松七畫伯挿畫入） 廿七年一月一日發賣

本篇は夙に文壇の一方に雄視して、梁山泊と呼ばるゝ硯友社の尾崎紅葉、川上眉山、巖谷漣、江見水蔭、石橋思案、中村花瘦、渡部乙羽の七氏が、午の年に因みて、結構意匠を馬に寓し、各妙想奇文を闘はしたる、新作七篇を聚めたり。

幼年玉手函

正價 一册金拾錢●六册前金五拾七錢●十二册前金壹圓〇八錢●郵税一册四錢

本書は明美なる文學と、愉快なる遊戯を、巧みに融和渾成して、幼年諸君が玲瓏爛熳なる、天眞を利導せんとす、毎編皆な名家の新意匠に成る、挿畫又端麗、書册の美、定價の廉、眞に幼年界の玉手函、坐ながらにして珍寶金玉の精美を觀ん

巖谷漣山人新作

◉第壹編 新年狂言 春駒（歌川國松密畫） 全一册

幼年小説界壇場の筆を揮はるゝ、漣山人が得意の彩筆もて、文は能狂言躰に擬したる、文學趣味の好珍本なり、幼年諸君、何ぞ此春駒をとつて、學界の先陣をなさゝる。

渡邊乙羽君著

上杉鷹山公

（寺崎廣業密畫）

全一册和裝 正價拾二錢 郵税 四錢

米澤の太守上杉鷹山公の性行逸事、描き來て聲色凛々、有數政治家としての渠れ、千古經濟としての渠れ、幼年としての渠れ、君子としての渠れ、明君賢臣相遭ふて宏德一代に普き千載の美談、皆是少年立身の一大鑑紙上冉々として一大偉人の躍り來るを覺えん。

短篇小說 明治文庫

正價 一冊金拾五錢●六冊前金八拾五錢
十二冊前金壹圓六十錢●郵稅各六錢

最も詩趣多きものは短篇なり、最も雅致を含むものも短篇なり、最も奇絕なるものも短篇なり、最も壯快なるものも短篇なり、雜感を捨て抽象的に絕美を發輝するものも短篇なり、恰も霞山の花の如し、水底の月の如し、滊車を驅りて富岳の下を過ぐるか如し、滊船を走らして松島の間を行くか如し、杜鵑の如し、電光の如し、舞花の如し、一瞬の間に天地の大觀を示す、奇絕壯快之に出づるものあらんや。明治文庫は最も短篇に得意なる諸名家の傑作を集め、逐月之を刊行す。千紫萬紅、一たび之を繙かは片舟に掉して急流を下るか如し、奇景百出人をして應接に閑なからしむ。

毎月壹回發兌

◉第六編 一月十日發兌

內外古今 逸話文庫

正價 一冊金拾二錢●六冊前金六拾七錢
十二冊前金壹圓廿五錢●郵稅一冊四錢●

古今の長き、萬國の廣き、其の名賢碩傑偉人巨匠の言行に關する、快談奇話珍說外語、其他百事萬物、大にしては歷史を補ひ智見を廣め、然らざるも以て話柄に供し消閑に資すべきの談話を求めば何ぞ啻に百千萬億件にして盡きんや、本書は廣く此種の逸話の、殊に正確にして興味あり資益あるべき者を網羅し、左の十項に繫けて逐月刊行、以て幽を闡き光を揚げ、異聞を擴め智見を博くするの料に供せんとす。

目次〈文藝、武事、洒落、豪爽、機智、德行、品藻、立志、畸行、博聞

凡そ記載すべきの事項、此數種に限れるに非す、是唯其大要を示すのみ、乃ち天下笑ふべく泣くべく怒るべく樂むべく哀むべく、以て智を廣め德を養ふべきの談は必す網羅して遺さゞらんとを期す、希はくは文献徵するに足らざるの嘆を免れしめむか。

毎月壹回發兌

◉第五編 一月十五日發兌

齋藤月岑先生編 長谷川雪旦畫

江戸名所圖繪

全二十册和裝
正價金五圓
豫約實價四圓
逓運

岡山鳥先生編 長谷川雪旦畫

江戸名所花暦

全四冊和裝
正價金四拾錢
豫約實價卅錢
郵稅金六錢

齋藤月岑先生編 長谷川雪旦畫

東都歳事記

全五冊和裝
正價金五拾錢
豫約金四拾錢
郵稅金八錢

江戸名所圖繪は齋藤氏三世の刻力に成り、江戸名所花暦は岡山鳥氏の編輯する所、東都歳事記も亦齋藤月岑の選に繫れり、齋藤氏は世々江戸神田の里正にして篤學精研、殊に江戸の地理風物の事に至ては、精博其右に出つるものなし岡山氏亦往時の一董狐たり、而して三書ともに畫は長谷川雪旦の筆に成る、三長以外更に一長を具するものといふべし、地理風俗歴史の資材たるは論なく、名勝舊蹟を探らんとするもの、亦此書を措て他に津梁を問ふべからざるなり。

松平樂翁公評　川田文學博士跋

賴山陽眞蹟 上樂翁公書

全一冊　正價二拾錢　郵税二錢

一世の大手筆たる山陽賴氏が、一世の名相松平樂翁公の知遇に感じて、その懷抱を述べたる文、辭藻の妙、已に二家の名と共に世上に喧傳せり、而かも其眞蹟に至ては松平家の秘藏に屬し、宇宙間只一部あるのみ、世人が久しく屬目せんことを願ふて得ざりし所なり、本館此度同家の允許を得て石版に摸刻し、始めて世に公にするに至れり、筆力遒勁、翁の書中に在ても實に觀るに稀なる所、當時掀髯脾睨、毫を揮て紙に落すの狀想ふに餘あり、希世の淸玩にして、亦文を學び字を習ふの摸範に供すべし、

伯爵勝安芳君著

○流芳遺墨 附追贊一話

全二冊帙入　正價一圓五拾錢　郵税十四錢

伯爵勝安芳君著

○亡友帖

全一冊　正價八拾錢　郵税十錢

重野文學博士題辭

赤穗義士眞蹟帖

全一冊　正價金貳圓

赤穗義士復讐の事蹟今を距ること二百餘年の上にあり而して其忠誠大義日月と光を爭ひ兒童走卒に至る迄其名を知らざるは無く亦其風を聞て感奮激勵せざるはなし眞に是れ千古の快擧美談なり北越の豪農長谷川某氏最も赤穗義士の偉蹟を慕ひ資を惜まずして其眞蹟を集めんと欲す偶大石良雄以下同盟四十七人及び其事に關係最深き者若干人との手簡を蒐集せし一卷を得て多年之を珍藏す實に希世の寶什なり重野文學博士嘗て之を見其湮色に埋沒するを惜み慫慂して石版に摹寫し之を世に頒たしむ弊館特に撰まれて石版印刷の事を囑せられ辛苦經營して業今全く成る其書は概ね義士が相共に贈答せるものにして原書の形は毫も伸縮する所なく一點一畫も其眞に違はず眞に書は能く其人の性情を發揮す一度之に對すれば義士の音容髣髴として眼前に現はれ翻閲の間覺へず肅然として容を改め頑夫も廉に懦夫も志を立つべし義士の風を慕ふ人々は須らく坐右に備へられて可ならん

子爵品川彌二郎公秘藏　寫眞石版摺

●吉田松陰先生眞蹟

一枚　正價五錢　郵税二錢

子爵品川彌二郎公秘藏　寫眞石版摺

●大鹽平八郎眞蹟

一枚　正價三十錢　郵税二錢

従二位東久世伯爵序
正四位前田子爵題歌
佐々木信綱先生著
（定家卿眞像入）

百人一首講義

二十七年一月上旬出版

全一冊洋裝　紙數三百頁　正價二十錢　郵税六錢

古今和漢の書、其數數十萬部に及ぶべしといへども、普く世に行はれ普く世人に知られ、汐くむ海士柴刈る童にいたるまで、口に暗んずるは此百人一首なるべし。定家卿の撰ありてより既に千年、普く廣く吟賞せられ、老幼貴賤和歌としいへばまづ此書をさすに至れり。故を以て從來註釋の書少なからざれど、あるは煩に過ぎあるは簡に過て未だ適當の書ある事なし。こゝに歌人の名世に高き佐々木先生此講義を公にせらる。本書の體裁、まづ人々の傳記逸話をのせ、次に懇切なる講義、及古人の異見を擧げ、詳細もらす所なし。故に何人も是を讀めば、百首の深意を知り、作歌の栞ともなすを得べし。歌に志す人はさらなり、歌を知らざる人も、又一本を机上に備へて其眞意をさとりたまへ。

谷勤大人序文下野遠光君著

●百人一首略解

全一冊　正價拾五錢　郵税六錢

東久世伯爵題詠、佐々木信綱先生標註

標註 七種百人一首

全一冊洋裝　正價金廿錢　郵税六錢

目次●小倉百人一首●新百人一首●近世百人一首●後撰百人一首●續百人一首●修身百人一首●源氏百人一首

小倉百人一首は昔より世に普く行はれて、幼童少女も、猶其名を知らざるものなし、而して後世其續撰をなせるもの數種ありと雖も、其名をだに知る人少なきは遺憾の至といふべし。こゝに歌學を以て其名當世に高き佐々木先生數種の内より最秀逸せるもの、即小倉百人一首にもれ又順徳院以下の歌仙の詠歌をあつめし新、續、後撰の三種、眞淵、景樹其他近世諸歌人の歌をあつめしもの、又修身道徳の歌をあつめ、兒童の忠君愛國の志を養成せしめんとて撰ひしもの、及源氏物語の百人一首等七種を撰ひ、小倉百人一首を第一におき、以下の六種に各簡略にして明瞭なる標註を添へられたれば歌に志ある人は更なり、歌を知らざる人と雖も朝夕に吟誦せらるへく、特に世の令孃諸君は必坐右に一本を備へられんことを

●歌の栞

東久世伯題字高崎正風男題字、福羽美靜子序、佐々木信綱君編

全一冊　正價一圓二十錢　通運料十五錢

●新撰歌典

第一高等中學校教授落合直文君著

全一冊　正價六十錢　郵税十二錢

●歌學捷徑

東久世伯題字　井口隆太君著

全一冊　正價十五錢　郵税六錢

●應用歌學

大和田建樹君著

全一冊　正價十五錢　郵税六錢

大和田建樹君著

國民文庫

全拾二册

正價 一册金拾二錢●六册前金八拾五錢●全部前金壹圓廿五錢●郵税一册四錢●

國民文庫は、明治廿七年に於ける、文學の新天地を開闢するものなり、國民文庫は、明治廿七年に於ける、詩學の新知己を紹介するものなり、國民文庫は明治廿七年に於ける、新躰歷史の開拓に舊つて鍬を執るものなり、未來廿七年の新社會は、又將に既往廿六年の舊社會にあらさらんとす。實に此活動社會と共に一新すべき、文學世界の風潮を卜知すべきは此書あるのみ

國民文庫全部總目次

◉第壹編 歐米名家詩集
◉第貳編 歐米名家詩集
◉第參編 歐米名家詩集
此書は、歐米大家の咳唾玉を爲す名作を翻譯するに、紙躍り墨舞ふの快筆を以てせしものなり

◉第四編 文學遊戲
◉第五編 文學遊戲
此書は、文學を以て少年子女の遊戲に應用し、知らず／＼の間に文學的趣味を、掬せしむる仕組なり

◉第六編 新體日本歷史
◉第七編 新體日本歷史
此書は、日本歷史を極めて面白く、極めて通俗に、極めて新體に、先生が得意の筆もて、書かれしものなり

◉第八編 新體萬國歷史
◉第九編 新體萬國歷史
此書は、萬國歷史を極めて日本人的に、極めて日本文的に、解し易く、感じ易く、泣き易く、笑ひ易く、書かれしものなり

◉第拾編 明治文學史
此書は、複雜極まる現今の文學世界を觀察し、其因て來る處の活歷史を、網羅蒐集せられしものなり

◉第拾一編 新體文林
◉第拾二編 新體文林
此書は、先生が一家獨得の新案に成れる、新躰散文と新躰韻文とを載せ、以て其意見のある處を、實例に示されしものなり

川崎紫山君著

戊辰戰史

全十二册

正價 一册金拾二錢●六册前金八拾五錢●全部前金壹圓廿五錢●郵税一册四錢●

戊辰の役は、振古未曾有の大革命なり、政躰は一變し、制度文物は一新し、社會の組織、人情好尚を一變せり、其風雲に際會して富貴功名を成したるもの、其紛雜に擠せられて榮華勢利を失へるもの、萬態啻ならす、振古未曾有の大史筆あつて而して後始めて之を悉すへし、世戊辰革命に關する史書少なからさるも、未だ能く之を悉せるものあらず、紫山氏少壯の才筆史家として今專ら力を玆に用ゐ全部十二卷の大冊中に、此の大革命の事情を描かんとす、戊辰改革の由て來る所、改革の成れる次第、及び今日あるを致せる所以等、明鏡を把て妍媸を照らすか如くならん、幸に江湖の愛讀を請ふ

第壹編 廿七年一月二日發兌

本編は筆を米艦來航の初に起し、德川氏對外政策の微弱未定なりしを論じ、阿部、堀田、井伊の政畧如何を叙述し、次に烈公、東湖等當時國論の骨子たりし對外主義、尊王派、開國派の意見、及び其運動等に入り、其他諸氏の論説、書簡、意見等を明かにし、筆を櫻田要擊に收めたり、文辭悲壯、大勢の明動暗移、活劇を見るが如し、

社會文庫

每月二回 洋装美本 毎編讀切

正價 一冊十五錢●六冊前金八十五錢●十二冊前金一圓六十錢●郵税一冊に付金六錢つゝ

社會の事物は日に複雑に赴き、其研究にして密ならざれば、時に臨みて措を失ひ、終に其身を誤るもの多し、政事、經濟、法律、宗教、或は社交上の事に至るまで、改頁進歩を謀るべきもの舉げ數ふるに堪へず、況や其機に觸れ、時に臨み、利害を窮め得失を論ずべきものは一にして足らず、之に對し能く學理を實際に應用し、世人を警醒して時務の爲に方針を示すは學者の任なり、而して方今文化日進圖書の出版多しと雖ども、多くは廣汎空漠に流れて要領を得ず、宜へなり眞理隱れて邪説獨り行はれ、學者の實用を世に爲すもの少なきや、社會文庫は此に慨して起る、乃ち平生社會上緊切の問題は、之を當代の名家に囑し、東西古今の學理と實際とに鑑み、詳に之を論窮し、論を逐ふて世に公にせんとす、惟ふに今後世上に起る時事問題の、深淵なる學理と、精確なる調査とは、本書によりて能く之を知るを得ん

英國碩儒スペンサー氏原著
衆議院書記官法學士永井久滿次君譯述

◉第壹編 個人對國家論

全一冊洋装正價十五錢郵税六錢

個人と國家、是れ方今政論家の常に口にする所、而して其國利と民福とを調和して、共に增進せんと欲する者は、何人も之を精討せざる可からざるの大問題なり、國家の權を強くすれば壓制となり、個人の權を大にすれば放縱に流る、干渉と放任との因て別るゝ所、自由と保護の由て異る所は、一に此に在り、英國の大儒スペンサー氏、二者の調和に關して頗る詳かに之を論じ、法學士永井久滿次氏之を譯す、本書即ち是なり、世の權利を重んじ、意を政論に注ぐの士は、皆な一讀せざるべからず、

衆議院議員小林樟雄君序文
米國文學士外山義文君著

◉第貳編 日本ト布哇

全一冊洋装正價十五錢郵税六錢

今や布哇國革命の事あり、王國を廢して共和國を爲し、國内大に亂れんとす、我日本は布哇と關係最も密なり、此際豈に拱手して坐視するを得んや、而して喙を彼の內政に容るゝには、先づ其國情地勢を察し、且つ彼我の關係を窮めざる可からず、然れども從來未だ之を詳論したる書なし、著者親しく彼嶋に渡し、精細の觀察を遂げ、歸りて此書を爲す、彼我の關係を論し、次に彼の國の風俗沿革を叙する精細、苟も布哇問題を說かんとする者は、須らく先づ本書を繙ひて可なり。

農科大學講師農學士橫井時敬君校閲
蠶業熱心家吉池慶正君著

蠶絲業全書

全部六册

正價 一冊金拾五錢●全部六冊前金八拾五錢●郵税一冊六錢 毎月壹冊

蠶糸は我國輸出品中第一位に居る國家の最大富源なり、然れども從來養蠶の事は唯だ經驗を以て傳へ、委しく學理を應用して其改良發達を謀るもの稀なり、吉池慶正君此に慨するあり、農學士橫井時敬君と謀り此書を著はす、凡そ蠶糸業に屬する改良發明の方案は具さに研究して之を集め、得失を論じ利害を明にし、以て此業に從ふ者の爲に渡津の舟筏となり、夜行の燈光たるを期す

蠶糸業全書總目次

◉第壹編 蠶業汎論……全一冊
◉第貳編 栽桑編……全一冊
◉第參編 養蠶編……上卷
◉第四編 養蠶編……下卷
◉第五編 製絲編……上卷
◉第六編 製絲編……下卷

農業全書

全拾九册完成

正價 一冊金拾五錢●六冊金八拾五錢●全部金二圓七十錢●郵税一冊金六錢宛

本書既成總目次

◉第壹編 農業汎論……農學士橫井時敬著
◉第貳編 農業須知……農學士池田日升三著
◉第參編 農產製造篇……農學士今關常次郎著
◉第四編 蠶業篇……農學士高田鑑三著
◉第五編 栽培篇上……農學士堀尾鍭作著
◉第六編 栽培篇下……農學士池田日升三著
◉第七編 農業經濟論……農學士今關常次郎著
◉第八編 養畜篇……農學士原熙著
◉第九編 作物病害篇……農學士小島銀吉著
◉第十編 作物篇……農學士高田鑑三著
◉第十一編 肥料篇……農學士原熙著
◉第十二編 土壤改良篇……農學士中村鼎著
◉第十三編 造林學……農學士臼杵永次郎著
◉第十四編 林產物製法上……林學士臼杵永次郎著
◉第十五編 林產物製造法下……林學士臼杵永次郎著
◉第十六編 林業篇……林學士鈴木審三著
◉第十七編 獸醫篇上……獸醫學士內村兵藏著
◉第十八編 獸醫篇下……獸醫學士安井淳之助著
◉第十九編 米麥篇……農學士橋原正三著

川崎紫山君著

西南戰史

全拾冊完成

正價 一册金拾貳錢●六册金六拾七錢●全部金一圓二拾五錢●郵稅一册四錢宛

明治十年の亂は關ヶ原以來の大戰にして、維新中興の成就と、國民意向の趨勢とに至大の關係ありて、實に明治史中第一の出來事なり、然るに世間たゞ其戰史あつて其原因、結果、趨勢を審かにし、完全なる西南戰史としたるものなし、川崎紫山氏拮据經營、精確なる朝野幾多の材料に據り、當途の士の目擊耳聞を參照して本書を著はす、憑據精嚴、文章雄渾にして近來傑出の一著作なり、西南戰史始めて完備したりといふべし、讀者一び目を通さば當時天下の大勢、對外の趨勢及幾多老雄の心胸肺肝、籌策經綸を首め、世間未知の奇事等躍如として紙上に顯はれ、拍案快哉を大呼せん、

水哉坪谷善四郎君著

明治歷史

全部二冊完成

上裝紙數千二百頁　正價九拾五錢　郵稅拾六錢

嘉永癸丑米艦に入津して以來、兩政一變して郡縣制一の王政と爲し、政治、風俗、文學、美術、宗教、教育、生產業の諸現象に至るまで、全然舊面目を一新し、遂に立憲代議の新政躰を組織し、古今未曾有の大革新、其功を奏したる者は實に我國の近世史なり、其間の歳月四十年に過ぎざるも、其事變の大に、遷移の急なる、寧ろ上古二千年來の長さに比するも尚ほ優る者なり、其經驗の四十年に、世に未だ完成の効を奏したる者なし、著者茲に思ひを潜め、此書を著はす、上下二卷、一千二百頁、纂輯嘉永發端に提して今日に及ぶ、叙事精細、用筆森嚴、四十年來日本社會の實相、陰陽消長寫し出して、掌上に示すが如し、

正七位內藤耻叟君著

德川十五代史

全十二冊完成

正價 一册金拾五錢●六册金八拾五錢●全部金一圓六拾錢●郵稅一册金六錢宛

我が德川氏執權三百年間の時代は、我が國史有てより最も進步し最も開發せし時代にして、其制度風俗文學教育より美術工藝農事商賈宗教に至るまで、奇特種の發達を遂げ一個出色の文明は當時大東洋上燦然たる光輝を放てり、特に江戶の如きは一時實に世界第一の大都府なり、是れ止だ我國民の名譽たるのみならず、實に世界文化の上に於て、大に注目すべき問題なり、然るに世間未だ此時代の歷史として、其精確なるものあらず、內藤先生是を憂へ此書を著はす、其三百年間の事蹟記述洩らさず、其周到精密言を待たず、風紀の汚隆、政綱の弛張、治亂の跡瞭々として火を見るが如し、

從七位萩野由之君著

日本歷史評林

全十二冊完成

正價 一册金拾五錢●六册金八拾五錢●全部金一圓六拾錢●郵稅一册金六錢宛

事實と評論とは歷史の雙眼なり、いかに古今の事實を網羅して豐富を極めたる歷史なりと雖も、評論品隲せずんば史中の事實は悉く枯槁して、千載生機を失はん、史の評論を缺くこと此の如し、然れども從來の史籍は評論に乏しく、僅に世に顯はるゝ者は、概ね一時の習文の爲に綴れる平凡淺薄なる論贊のみにて、歷史の幽光を闡發すべき卓論大議は、多く埋れて顯はれず、然れども各書に散在して絕えざる所なし、萩野先生史學の資料として之を集めし者、斯に多年に及べり、因て其の精粹を擇び類を分ち批評す、歷史を讀む者一度此書を取りて參照せば治亂盛衰の理は刃を迎へて忽ち解けむ。

内藤燦聚君著

近世大儒列傳

（製本既成）

全二册

洋裝紙數四百頁　正價一册拾二錢　郵稅一册四錢

本書目次

●藤原惺窩●林羅山●谷時中●中江藤樹●野中兼山●山崎闇齋●熊澤蕃山●木下順庵●伊藤仁齋●貝原益軒●淺見絅齋●安積澹泊●新井白石●室鳩巢●荻生徂徠●伊藤東涯●栗山潛峯●澁井太室●細井平洲●井上金峨●皆川淇園●西山拙齋●柴野栗山●龜井南冥●尾藤二洲●山本北山●龜田鵬齋●太田錦城●林述齋●松崎慊堂●佐藤一齋●藤田幽谷●帆足萬里●賴山陽●會澤正志齋●藤田東湖●青山延光●鹽谷宕陰●齋藤竹堂

徳川三百年間治平、學者雲の如く、才俊林の如し、文物典章の花、忠孝節義の實、日本歴史第一の盛觀となす、本書は近世の大儒藤原惺窩より、藤田東湖に至る迄、數十名の傳記を網羅したるものにして、上慶元に始まり、下維新に終る。學者滿腹の經綸、異色錯然として、一大幻燈を見るが如し、浮誇豪宕の漢學、優美婉曲の和文、哲學を主張するもの、開國を論議するもの、經濟の長策を建つるもの、文運の教育を陳ふるもの、有德の君、卓落の偉人、文學者、宗教家の集つて本書にあり

漣山人、霧山人、共撰

（製本既成）

獨逸文壇

六大家列傳

全一册洋裝
正價金十錢
郵稅　四錢

從二位伯爵大木喬任公題辭
花房吉太郎、山本源太兩君合著

日本博士全傳

（製本既成）

全一册

雅裝三百八十頁　正價卅五錢　郵稅金八錢

文學博士 加藤弘之●重野安繹●島田重禮●小中村清矩●外山正一●末松謙澄●中村正直●川田剛●黑川眞賴●南條文雄●井上哲二郎●坪井九馬三●元良勇次郎●星野恒

法學博士 箕作麟祥●鳩山和夫●穗積陳重●田尻稻次郎●菊池武夫●岡村輝彥●木下廣次●富井政章●井上正一●熊野敏三●宮崎道三郎●增島六一郎●末岡精一●穗積八束●梅謙次郎●土方寧●和田垣謙三●金井延

醫學博士 高木兼寬●大澤謙二●三宅秀●池田謙齋●橋本綱常●佐藤進●田口和美●小金井良精●佐々木政吉●緒方正規●實吉安純●樫村清德●宇野朗●大森治豐●谷口謙●濱田玄達●高橋順太郎●北里柴三郎●片山國嘉●三浦守治●中濱東一郎●佐藤三吉●榊俶●隈川宗雄●青山胤通●河本重次郎●大谷周庵●森林太郎●村田謙太郎●菊地常三郎●猪子吉人●弘田長

理學博士 伊藤圭介●山川健二郎●菊地大麓●矢田部良吉●長井長義●寺尾壽●松井直吉●櫻井錠二●小藤文次郎●箕作佳吉●久原躬弦●佐々木忠二郎●巨知部忠承●北尾次郎●關谷清景●村岡範爲馳●松村任三●横山又二郎●吉田彥六郎●齋田功太郎●石川千代松●原田豐吉●飯島魁●藤澤利喜太郎●田中正平●田中舘愛橘

工學博士 長谷川芳之助●原口要●松本莊一郎●古市公威●志田林三郎●辰野金吾●谷口直貞●巖谷立太郎●高松豐吉●平井晴二郎●山田要吉●增田禮作●石橋絢彥●片山東熊●冲野忠雄●南部球吾●南清●石黑五十二●高山甚太郎●清水清●藤岡市助●仙石貢●三好晉六郎●渡邊渡●白石直治●中澤岩太●山口半六●野呂景義●大島道太郎●田邊朔郎●眞野文二

特別大賣捌所

博文館圖書大賣捌所

東京　東海堂
同　巖々堂
同　水野慶次郎
同　信文堂
同　石川商店
同　上田屋本店
同　吉岡平助
同　柳原喜兵衛
同　梅原龜七
同　岡島新聞舖
同　平井新聞舖
同　中村峯雄
京都　東枝律書房
同　田中治兵衛
名古屋　川瀨代助
同　新文舍
同　片野東四郎
神戸　熊谷久榮堂
同　舟井新聞舖
同　吉岡支店
同　船山堂
熊本　長崎次郎
鹿兒島　吉田幸兵衛
長野　西澤喜太郎
松本　水琴堂
四日市　伊藤善太郎
津　河島九右衛門
同　愛友舍
靜岡　新文書房
濵松　谷島屋源三郎

東京神田表神保町　東京堂

濵松　林新聞舖
沼津　蘭契社
甲府　柳正堂
横濵　丸屋書店
同　里見亭太郎
鴻巣　長島爲一郎
東金　多田屋本店
千葉　同支店
佐倉　吉田德兵衛
佐原　朝野利兵衛
水戸　川又銀藏
大津　澤一二郎
同　太田支店
小諸　廣文堂
飯田　曾川文星堂
前橋　煥乎堂
平　清光堂
白河　奥村書店
福島　上野屋彦太郎
仙台　木村文助
同　佐勘書店
石ノ卷　山口德之助
盛岡　佐藤庄兵衛
同　便益堂
弘前　野崎九兵衛
青森　鎌田書店
山形　八文字屋書店
米澤　素月晨平
秋田　成見清兵衛
同　鈴木秋穗堂
酒田　鈴木喜八

福井　品川太右衛門
金澤　雲根堂
小松　宇都宮源平
富山　清明堂
高岡　學海堂
新潟　櫻井產作
長岡　覺張治平
同　目黑十三郎
高田　室直三郎
同　高橋書店
水原　西村六平
松江　川岡清助
岡山　武內彌三郎
廣島　松村善助
山口　宮川臣吉
和歌山　平井文助
德島　阪井萬吉
西條　金川支店
博多　森岡商店
同　積善館支店
久留米　菊竹儀平
大分　山川正三郎
長崎　虎與號商店
同　鶴野書店
佐賀　河內汲古堂
函館　魁文舍
同　愛新軒
札幌　聚文堂
同　前野長發
同　小塩自治堂
同　萱間左右太

大阪東區備後町　盛文館

東京　小林喜右衛門
同　林平次郎
同　杉本七百丸
同　目黑支店
同　青木嵩山堂
同　松村孫吉
同　大倉孫兵衛
同　辻岡文助
同　榊原友吉
同　內田芳兵衛
同　田中書店
同　盛春堂
同　中西屋
同　栗原吉五郎
同　盛文堂
同　庭花堂
同　吉川半七
同　青野友三郎
同　中川仁三郎
同　有斐閣
同　有則軒本店
同　北原總吉
同　文海堂
同　有隣堂
同　上原佐一郎
同　鴻盟舍
同　須原屋茂兵衛
同　岡島支店
同　春陽堂
同　金櫻堂
同　柏屋松榮堂
同　大黑屋平吉
同　松成堂
同　大川屋錠吉
同　飯塚書店
同　頁故堂
同　敬業社
同　上田屋支店
同　三宅支店
同　清水泰五郎
同　三宅半四郎

東京　若林晉七
同　文榮堂
同　松盛堂
同　金榮堂
同　平野屋
同　弘文館
同　金泉堂
同　武藏屋
同　方圓閣
同　東洋堂
同　山本益次郎
同　河內屋
同　博聞社
同　佐々木豐吉
同　山田屋甚七
同　金盛堂
同　池田書店
同　榮進館
同　飯田雜誌店
同　鈴木新兵衛
同　川村龜太郎
同　福島熊吉
同　岸田雜誌店
同　書彥堂
同　高知屋
同　高和堂
同　文光堂
同　山陽堂
同　忠愛堂
同　赤川市兵衛
同　青山堂
同　佐野旭堂
同　倉田舫太郎
同　元川定吉
同　日成堂
同　三文字屋
同　洗心堂
同　明々堂
同　秩山堂
同　松江堂
同　岩手屋

東京 有斐閣
同 春陽堂
同 東陽堂
同 京屋
同 文鳳堂
同 積善舍
同 正導舍
同 一心堂
同 河野弘憲堂
同 藤之屋
同 龍本堂
同 改進堂
同 開明堂
同 川崎商店
同 伊勢屋
同 勝々堂
同 荒井書店
同 永岡雜誌店
同 仁井田雜誌店
同 梓新堂
同 萬文堂
同 野村見珍堂
同 勸文堂
同 萬盛堂

●畿內

山城 便利堂
同 大黑屋書舖
同 飯田信文堂
同 文林堂
同 藤井孫兵衛
同 梅原支店
同 內山改進堂
同 若林書店
同 岡田正太郞
同 澤田集光堂
大和 坂田一郞
同 堀德太郞
同 飯田盛文堂
同 白井英[illegible]
河內 西條長榮堂
同 阪口自助社
同 船野六平
和泉 [illegible]雲堂
和泉 集廣舍
攝津 松村九兵衛
同 三輪源兵衛
同 中川勘助
同 豊國新聞舖
同 中村正兵衛
同 山中新聞舖
同 日東館

●東海道

伊賀 安屋精文堂
同 文粹堂
同 岡村常三郞
同 廣田源藏
伊勢 松本堂
同 有文堂
同 織戶忠右衛門
同 古川小平
同 多田要吉郞
同 右文堂
同 淸玉堂
同 加藤夏平
同 本盛堂
同 本田善平
同 知新堂
志摩 伊藤信次郞
同 結城重助
同 井澤新聞店
尾張 耐成堂
同 三輪文次郞
同 井澤重次郞
同 耕芳園
同 耕芳書店
三河 伊藤小文司
同 鈴々舍
同 高須廣治
同 春風舍
同 極本淸七
同 盛榮堂
三河 黑部公平
同 濱月堂
遠江 龜甲堂

遠江 三原屋甚藏
同 小杉亮平
同 郁文社
同 東洋堂
同 叢文堂
同 東淸堂
同 松屋好五郞
同 明治舍
同 守成堂
同 小西新聞舖
同 佐藤半三郞
同 經子屋忠次郞
駿河 廣瀬市藏
同 吉見義次
同 靜陵館
同 文源堂
同 齋藤茂右衛門
同 勝見儀助
同 石田彌[illegible]郞
同 文林堂支店
同 吉成壽[illegible]郞
同 萬屋文[illegible]
同 大石豐吉
同 渡邊八重吉
甲斐 內藤傳右衛門
同 五明堂
同 藏古堂
同 芳文堂
同 齋藤由太郞
伊豆 山本與十
同 山梨啓次郞
同 平野屋久七
同 博文舍
同 村上留治
同 文正堂
相摸 山本佐兵衛
同 開進堂
同 日月堂
同 山口四郞兵衛
同 川上九兵衛
同 柏瀬儀次郞
同 擴進社
武藏 日の出屋

武藏 田沼[illegible]右衛門
同 弘集堂
同 小林祐之
同 小町屋書店
同 藤澤兼太郞
同 西田勝次郞
同 協立舍
同 山合幸
同 日月堂
同 高橋實五郞
同 黑田孫兵衛
同 近紫堂
同 龍井巴
同 平井啓吉
同 水村若郞
同 芝崎久三郞
同 明文堂
同 荒井吉藏
同 松柏堂
同 龜屋[illegible]助
同 野屋[illegible]衛
同 岸田閑太郞
同 森[illegible]次郞
同 宮[illegible]郞
同 大坂源藏
同 青木百太郞
同 小出磯助
同 金子彌吉
同 森田芳次郞
安房 鈴木一郞
同 濂田しも
同 磯谷武一郞
上總 播磨屋常吉
同 宍倉敬太郞
同 復明館
同 長峯和兵衛
同 小松屋長七
同 鈴木慶次郞
同 和團堂淸吉
同 山田淸七
同 東定藏
同 改進社
同 江澤金五郞

下總 立眞舍
同 新々堂
同 明文堂
同 高木文正堂
同 星野平助
同 津之國屋
同 國代金次
同 木內嘉兵衛
同 立澤吉兵衛
同 佐藤靜文堂
同 川村利三郞
同 高寺淸兵衛
同 堤安五郞
同 高木豐吉
同 野々宮商店
同 增田文曜堂
同 中村力三郞
同 集英堂
常陸 太平堂
同 和泉屋半兵衛
同 木村幸助
同 野內熊三
同 高木市兵衛
同 橋本庄右衛門
同 柳旦堂
同 金澤源助
同 伊沼彌助
同 寺田榮次郞
同 川又重郞衛門
同 平澤秀吉
同 近江屋淸助
同 野口武雄
同 皆川朝吉
同 齋藤嘉七
同 海野佐兵衛
同 文明堂
同 文化堂
同 惠日壽屋治作
同 川口重助
同 小菅重一郞
同 宮田重翠園
同 三國亭書舖

●東山道

近江 東枝書店
同 川上半兵衛支店
同 文泉堂
同 島林南强堂
同 井筒書店
同 高田日進堂
同 栗林[illegible]平
美濃 郁文堂
同 水谷善七
同 開思堂
同 岡安支店
同 文[illegible]堂
同 [illegible]堂
飛驒 升屋重兵衛
同 打保竹二郞
信濃 高美書店
同 松榮堂
同 協和堂
同 增屋商店
同 宮阪日新堂
同 荻原朝陽館
同 小宮山儀一
同 丸上商店
同 平林盛太郞
同 西澤支店
同 山下條三郞
同 長田忠[illegible]郞
同 奧村精華堂
同 金井重兵衛
同 都築文堂
同 依田儀三郞
同 寺澤鶴吉
同 長田粂五郞
同 文星堂
同 秀英堂
同 マルイス商店
同 文弘堂
同 協和堂
同 河西力之
同 鶴林堂
同 山崎新聞舖
上野 高崎煥乎堂
同 穀岩堂

上野 文江堂
同 正林堂
同 山田屋金兵衛
同 三泉堂支店
同 文心堂
同 佐渡屋貞吉
同 中澤堂
同 文魁堂
同 水田清三郎
同 文華堂
同 中村孫四郎
同 川木屋庄三郎
下野 内山滝三郎
同 城山常次郎
同 宮川庸三郎
同 手塚祐二郎
同 三泉堂
同 紙屋五郎平
同 東山堂
同 柏田七郎治
同 米山堂
同 正々堂
下 木村源太郎
同 野崎正一郎
磐城 八島商店
同 吉成謙四郎
同 富田屋書店
同 官林伊勢吉
同 丁子屋與七
同 橋本太吉
同 山田俊吉
同 木村清平
岩代 博向堂
同 佐久間繼之助
同 鈴木富造
同 漸進堂
同 松坂屋與一郎
同 瀨野屋作右衛門
同 富屋久之丞
同 田中善平
同 中島儀兵衛
同 森萬作
同 博盛堂

同 虎屋忠右衛門
同 深井傳分堂
同 澤田今朝[illegible]
同 櫻井書店
陸前 文學館
同 高藤書店
同 井上金三郎
同 宮崎新七郎
同 山口啓之助
同 柳澤書店
同 佐藤養藏
同 伊勢安書店
同 近源商店
同 佐々木忠五郎
同 朝野堂
陸中 木津屋藤兵衛
同 廣文館
同 公東堂
同 井上金二郎
同 岩淵益次郎
同 羅忠治
同 菅原忠五郎
同 中島書店
同 東北堂
同 梁川忠助
同 黒田敏斷
同 高橋久々衛門
同 吉田惣太郎
同 羽田半兵衛
陸奥 今泉道次郎
同 浦山政吉
同 近松德太郎
同 成田泰
同 藤田商店
同 小山彌助
羽前 [illegible]佐儀平
同 牧野德太郎
同 荒井太四郎
同 日[illegible]源吉
同 小池藤次郎
同 佐藤傳四郎
同 地主文藏
同 風間五右衛門

羽前 舟山彦兵衛
同 柿本昇
同 高橋富五郎
同 稲澤兵吉
同 菅間兵左衛門
同 佐藤倉吉
同 大泉善助
同 上村平五郎
同 相原太吉
同 加藤屋伊七
同 羽田角之助
羽後 本間金之助
同 新田目金太郎
同 大澤忠四郎
同 東海林重太郎
同 伊藤彌七
同 白崎善助
同 榊田繁治
同 [illegible]後屋虎九郎
同 藤島常二郎
同 齋藤勘右衛門
同 西野六左衛門
同 野口[illegible]店
同 富田三次郎
同 佐藤久左衛門
同 中島商店
同 高橋要藏
同 中島貞右衛門

◎北陸道

若狭 吹田[illegible]堂
同 武内市[illegible]
同 安立庄[illegible]
同 山上宗兵衛
同 松井助[illegible]郎
同 日[illegible]新[illegible]
同 吉岡[illegible]郎
同 不破清七
同 岡崎[illegible]
越前 平澤[illegible]助
同 南部平兵衛
同 [illegible]村伊八
加賀 宇都宮支店

加賀 菁々堂
同 池善平
同 北村嘉平治
同 醉香堂
同 益智館
同 醒世舍
同 毛利祐吉
能登 大來堂
同 白尾屋
同 河内勇作
同 米林五七
同 北陸館
越中 中田書店
同 大橋甚吾
同 文滙堂
同 守川吉兵衛
同 發雲堂
同 清重堂
同 水野鐵三郎
同 長谷川喜一郎
同 中村興次郎
同 清水雄吉
同 文海堂
越後 佐々木舜治
同 村上貫司
同 高橋支店
同 [illegible]屋竹八
同 菅川德吉
同 大竹新平
同 澤野仁太郎
同 樋口書店
同 野島平七
同 原山商店
同 將井佐吉
同 伊丹屋[illegible]吉
同 [illegible]野廣之助
同 島道義光
同 見陽堂
同 福島九藏
同 金子書店
同 山口五六郎
同 熊谷粂治

越後 東洋館
同 明田川書店
佐渡 [illegible]野長藏
同 中山萬平
同 村田七郎
同 荒井忠平
同 西山紋平

◎山陰道

丹波 柏原猪之助
同 北川至誠堂
同 中井正吉
同 野口白雲堂
同 文進堂
同 [illegible]名有恒堂
同 横川芳林堂
同 岡本書店
同 内藤半七
丹後 藤澤和三郎
但馬 日新堂
同 井上開造
同 由利安助
同 井上宗三郎
因幡 横山安次郎
同 島田龜藏
同 山本吉太郎
同 藤谷旭日堂
同 前島榮次郎
伯耆 岡田清三郎
同 河本彌太郎
出雲 盛進堂
同 石原支店
同 大芦利七
同 [illegible]新堂
同 岡山喜右衛門
同 松江堂
石見 安達幾太郎

◎山陽道

播磨 朝榮社
同 朝陽堂
同 赤井新開齋
同 高尾武治
同 山野長平
美作 [illegible]仁久造

同 椿新聞舖
同 渡邊[illegible]次郎
備前 [illegible]
同 細謹舍
同 森禎堂
同 [illegible]谷[illegible]太郎
同 藤井[illegible]
同 山田[illegible]
同 西村支店
同 西崎友次郎
同 大岡新聞舖
同 田中耳目堂
同 白井政治
備中 西澤六藏
同 池松堂
同 岡本嘉一郎
同 池田伊八郎
同 森本飛行館
同 萩原元次郎
備後 友瀧新聞舖
同 三木文明堂
同 前川太[illegible]堂
同 妹尾[illegible]太郎
同 佐久間新聞店
同 天野菁々堂
同 長商店
同 木村源三郎
同 大島知新堂
同 兒玉芝香堂
同 友瀧新聞舖
安藝 三木文明堂
同 長谷川[illegible]店
同 小川[illegible]堂
同 森貫三支店
同 [illegible]智堂
同 平山嘉平
同 田上三郎
周防 超世舘
同 一二三堂
同 [illegible]村邦八
同 [illegible]業舘
同 米谷文照堂
同 育英堂

周防	野上	瀧三郎
長門	松原	喜兵衛
同	石田	壽榮堂
同	山名	松次郎
同	藤川	東輔
同	村谷	傳三郎
同	生田	新一
●南海道		
紀伊	津田	原兵衛
同	岩橋	廣文堂
同	三宅	文昌堂
同	平井	新聞舗
同	鳥居	新聞舗
淡路	成錦堂	
同	福浦	文藏
阿波	里崎	書店
同	小川	知白堂
讃岐	宮脇	開益堂
同	內藤	弘貫堂
同	宮家	照華堂
同	石田	壽榮堂
同	箸方	儀三郎
伊豫	土肥	與平
同	向井	龍次郎
同	福田	新十郎
同	廣田	書舗
同	石崎	商社
同	高橋	傳吾
同	和氣	源三
同	中野	光
土佐	澤本	駒吉
同	小川	代次
同	開成堂	本店
同	小島屋	支舗
同	村岡	書店
同	山中	專助
同	小島	虎三郎
●西海道		
筑前	林	斧介
同	中尾	寛
同	山崎堂	
筑後	一草堂	
同	赤司	平輔
豐前	野依	曆三
同	加部	市太郎
豐前	身深	正則
豐後	甲斐	治平
同	甲斐	文七
肥前	書籍會社	
同	佐伯	書店
同	安中	明太郎
同	前田	彌次郎
同	米倉	林平
肥後	長崎	支店
同	細千屋	新聞舗
同	野中	書店
同	岩本	理平
同	井上	藤平
同	梶原	保八
同	時昌堂	
同	浦田	開明堂
同	宮原	茂平
日向	修進堂	
同	篠原	吉平
薩摩	金光堂	
同	石原	直次郎
同	永井	淸左衛門
壹岐	西村	米作
同	益川	虎一
對馬	齊藤	文港堂
琉球	三笑堂	
●北海道		
渡島	重陽堂	
同	二八堂	
同	萬鶴堂	
同	慶雲堂	
後志	白鳥	書店
同	川南	重祐
同	鎌田	貞六
膽振	最上谷	治吉
後志	四海屋	喜太郎
石狩	寛裕舍	
天鹽	小野寺	喜兵衛
釧路	田中	作次郎
根室	伊藤	喜武
同	山本	利輔
●朝鮮		
仁川	松田	一葉堂

文學博士川田剛先生序
大和田建樹先生著
巖谷一六先生書

明治書簡文

全壹冊木版和裝
正價金三拾錢
郵稅金四錢

巖谷一六先生の書名は既に天下に鳴る、亦多言を要せず、然れごも其習字手本として世に行はるゝ者、僅かに千字文、蘭亭帖の類のみ、未だ書翰文の模範を示されたるなし、本書は新年より年末に至る、時候に應ずる贈答文數十項を撰み、先生得意の健腕を揮はれたるものにして、以て日用書翰の習字手本と爲すべく、亦其作文軌範と爲すに足る、何人にても閑に乘じ机に對し揮毫を試みば、雲煙湧き龍蛇躍るの快あらんか。

市河米庵先生著

◉略可法

全二冊 正價四拾錢 郵稅三拾錢

市河米庵先生は書學の名家なり、始め碁帖を學ぶこと無數、自ら以て頷珠を獲たりとなす、後ち宗人の眞蹟を得て初て布置結構の妙を悟り、孜々漢土諸名家の眞蹟を集め、模刻して後進に殘す、その略可法といふものは盡く讃辭のみ、其實翰墨場裡の寶典といふべし

市河米庵先生著

◉墨場必携

全六冊 正價五拾錢 郵稅四拾錢

略可法、以て書法の模楷に充つべし、然に席慶吊あり、時花月あり、語と字と相應せざれば斯道の妙を盡すに足らず、仍て經子史集を搜羅して文人の腹笥に充つ、題して墨場必携といふ眞に然り

關子德先生選輯 關世道先生編次

◉行書類纂

全十二冊 正價金貳圓 郵稅壹圓廿錢

篆隸は繁なり、楷の嚴と草の略との中間を行きて其用最も廣く其體最も優なるものは行書に如くはなし、此書は韻引に依り、首に楷字を揭げ次に六朝以下明淸に至る諸名家の行字を摸出す、關濱兩先生父子の尤も力を致されたるものなれば、精博無比なるは贅言を要せざるべし

津田甚三郎君編

◉作詩秘要

全一冊 正價 郵稅

詩は志を言ふのみ、されども之が作法に通ぜざれば志ありとも之を言に載すること能はず、猶啞者の意ありて聲を發する能はざるが如し、此に於てか詩の作法を教ふるの書古來世に重んぜらる、而して本書の如きは簡にして明、眞に秘要の名に負かずといふべし

圖書出版

東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第六編

忠義お安

福地櫻癡居士

脚本は佛國
世界は日本

當世二人女婿

依田學海居士

◉忠義お安

櫻癡居士

○第一回

秋と云ふハ名のみにて照續きたる七月に草も動がぬ殘暑の熱さ爍が如きも物ともせず、或ハ馬上或は駕籠、徒士に若黨供頭、鎗箱簑箱翕籠、われ劣らじと行列正しく大道せましと集ひ來て人の海なす大手前。はや巳の刻の（午前十時）御太皷を打出す音も勇ましく大名小路の彼方より刻足にて横目も振らず大手を指して來掛つたるハ時の出頭御老中水野出羽守殿と問ハでも知るき鎗印、御門々々の制止聲に大名小名諸役人道を讓つて通しけり。御駕籠は今や酒井の屋敷の角を廻らんとする所に、人込の中より驅出し飛ぶが如くに走り寄る。それ狼籍ぞ無禮すなと駕籠脇固めし諸侍が取押るを突退け跳退け微弱き女の身ながらも一心凝たる念力に『御主人の一大事御直訴申上まする』と叫びつゝ難なく駕籠に近付て簾を捲け投込たるハ訴狀の一通。駕籠の中より出羽殿の聲として『直訴の曲者捕へ置け』とありければ、畏つたと言ふより早く其女を縛めて邸へこそハ引かれたれ。供頭は駕籠の脇に畏つて『シテ其訴狀ハ』と伺

へば『イヤ訴状は身分が受取たぞ、ソレ駕籠を急がせよ』と差圖あつて其儘登城せられたり。是ぞ今を距ること百廿餘年前徳川十代の将軍家治公の世盛り安永三年甲午七月十一日朝巳の刻江戸の御城御本丸大手前にての事なりける。

出羽守殿は登城ありても柳營にては今朝駕籠訴の一條何とも御同列に對て申出されず、常の如くに御用を取扱ひ例刻に至りて退出なし、居間に入て今朝請取らせたる訴状を披見ありしが、是はと計り打驚きながら篤と讀畢りて御用箱に納め家來を呼び『彼直訴の曲者一應親しく相尋る仔細あれば奥書院の庭口へ引入よ』と命せられ直に出座に及ばれたり。

警固の諸士に引かれて座の白洲に出るを覽たまへば、直訴の砌に取押へられ髷の元結は切れ衣服も引裂かれ尤打亂れたる體にて腰繩に掛つたるが、年の齢は十六か十七かと覺しき處女の色あくまで白く眼元涼しく鼻筋通り世にも稀なる美人にて肌には白絹の襦袢の上に茶屋辻の振袖帷子を着用なし唐織の帶を立やの字に締たるは言はでも知れたる屋敷風、白洲に敷たる席の上に行儀正しく座りつゝ少しも耻らふ風も無く、愛嬌ある口元を堅く結びたる唇には決心の慥かなるを示し、新月を雙べし如き眉の間に寄たる八字の皺には萬斛の愁を胸に湛るとぞ見えたりける。出羽守殿は靜に此處女に向はせて『小普請組青山主馬組森新三郎召使侍女やすと申すは其方か』と問ひ玉へば、阿安は平伏して『私が安に御座りますとしとやかに答へたり『凡そ訴状を捧るには夫々の手續あるもの然るを其手續を履まず差越して自分共へ

直訴いたす時は越訴の咎とあつて死罪にも行れるゝが掟なるが、其方は女にて殊には未だ弱年と相見ゆれば其等の事を辨へず訴狀の作法も存せずして自分が登城の折に出會ひ不圖この訴狀を投込だ事で有うがな、其儀ならば以後を戒め今度の所は內分に致し訴狀を其方へ返し與へて放ち遣はすが、如何であるぞ」と越訴の罪に落さじと人を憐れむ情の詞。阿安はハッとひれ伏して『有がたい思召では御座りますが女ながらも森新三郎の侍女、其訴狀にも認めて置ました通り主人新三郎の一命にも掛ります大事ゆゑ數ならぬ私の命は何樣な御仕置に成ませうとも素より捨る覺悟にて恐多を憚からず御駕籠訴を仕り御慈悲を願ひ上まして御座ります』と命を捨る覺悟の詞に。出羽守殿は感じ玉ひて『ム、左樣な覺悟で直訴には及んだるか、シテ其方は新三郎が年來の召使であるか、又其方が親は何者ぞや』と問はせらる『私事は元森新三郎の家來にて用人役を相勤め其後暇に成て只今は浪人の松村瀨平と申す者の娘、十四歲の頃より其緣を以て侍女奉公いたし今年十七歲に相成まして新三郎譜代の者に御座ります』『シテ此訴狀の事は親瀨平へも相談の上の事であるか』『イヽエ御覽の如く私自筆にて認めました程の事ゆゑ親共は勿論誰へも相談は致しませず全く私一了簡で仕りまして御座ります、何卒新三郎が身の上無事に相成ます樣御願ひ申上げ奉ります』と思込たる一筋に臆する色なく申たり。

○第二回

水野出羽守殿は（前回に御老中に記せしは誤なり、出羽守殿は此時若年寄なりき）靜に阿安に向はせら

れて『其方には主人新三郎の爲筋を一途に存込で一命にも拘ハる程の御咎たりとも更に顧ずに申す決心の段ハ忠義の志奇特であるが、其方が訴狀に認たる如く鏡臺院並に鈴木彌兵衛齊藤龍右衛門など申す輩心を併せて新三郎が家政を我儘に取扱ふ而已ならす新三郎一命も今日にては風前の燈なりと申す程にてあらばナゼ其筋にハ出訴いたさぬ、凡そ小普請には御普請組支配と申す頭役あつて其下には支配組頭幷に世話役等あつて既に青山主馬ハ新三郎の支配頭で無いか、何故あつて主馬へハ申上ざるぞ』と問はせらるれば、阿安ハ謹で『甚だ恐多い儀に御座りますが父瀨平事これまで新三郎が家事に付てハ鏡臺院へ度々諫言いたし又彌兵衛龍右衛門其外へも嚴しく談示を仕りましても更に取用ひ無く依て御支配頭青山主馬樣へ嘆願いたしましたる所御同人へは鏡臺院一味の者共より手入いたしましたれば御同腹にて一向に御取上も無く剩へ父瀨平が暇に相成ましたも實は主馬樣御聞濟の上と申すと夫故に主馬樣へ御願ひ申上ますは詮ない事と存じまして御座ります』と答へたり。出羽守殿は『ム、然らば新三郎親類へはナゼ申立ぬ、書面の趣にては新三郎從弟堀縫殿幷に分家森左兵衛は兩人共に御番士にて歷きとしたる御旗本、すでに新三郎後見同樣の者なればそれに申立るが當然では無いか』『御意に御座ります、縫殿樣左兵衛樣へ御願申上るが當然では御座りますが、御兩人とも信實新三郎の爲を思はるゝ御方とも存ぜられませず、先頃御兩方より家事向取締として御附人同樣で御遣に相成ましたる岡部文之進京極三五郎の兩人共が致方は女ながらも私が腑に落ませせぬ事ばかりで御座りますゆゑ御親類でも由斷は成り兼るかと

存じまして御兩人へは申立させぬ譯で御座ります『ムヽ然らばナゼ町奉行役所か但しは評定所へ表向にて出訴は致さぬぞ』『夫も左樣仕らうかと一旦は存じましたれど書面にも申上ましたる通り、內には鏡臺院の一味の者共外には御親類方、いづれが敵やら味方やら其內情は知れませず、其上に雙方とも御役家には手續も御座りますれば愁ひ出訴いたしても御取上に成ませぬ其時は新三郎の身の上に取まして愈〻一大事と存じ……』『夫で自分直訴を致したので有か』『御意の通り恐入まして御座ります』と答へたり。

出羽守殿は阿安が申立を篤と聞玉ひて『凡の樣子は粗々相分つた、併し其方が訴狀に申立たる趣をのみ證據に致して直に裁許を致す譯には相成らぬ、夫々の吟味を遂げ追て理非明白の御沙汰に相成であらう、夫までの所は其方は越訴人たるを以て牢舍いたさねば成らぬが、其分は覺悟であるか』と問はせられれば、阿安はハツと首を下て『願の通り御吟味なし下されまして新三郎身の上安泰に相成まする事あらば牢舍は疎か、どの樣な苦痛でも更々厭はぬ覺悟ゆゑ御存分に仰付られ下さりませ』と喜の色に己を忘れて伏拜みたり。

出羽守殿は『此者牢舍中篤く痛はり介抱いたし遣すへし』との內意を町奉行に授けたれば、阿安は入牢とは云へ御聲掛の四人敢て左までの苦を受る事もなく又內々にて父の松村瀨平へも阿安が森家の爲に出訴の次第を知らせて安心せしめられたりしとぞ。是より出羽守殿は其翌日登城ありて表面その事を披露に及ばれたりければ『是れ捨置べき事に非ず』とて直に評定所へ廻されて御老若三奉行大小目付の立合

吟味とは相成たり。

○第三回

此に森新三郎が一家の騒動は其因由如何と尋ぬるに、其頃下谷七軒町に森新三郎と云へる旗本あり。抑も此森家と申すは其先祖森播磨守と云へる人森武藏守の庶流にて家康公の御時より初て御旗本に屬し播州に於て千八百石を知行し特には永世家督相違あるまじき旨の御朱印を賜はれたる格別の家筋にて知行所は十分の繩延ある良地なれば内驗高は三千石に餘つたり、其上に數代御役を勤めたれば家富榮へて有名なる内福にてありけり。先祖播磨守より九代森半左衛門は寶暦の頃には兩御番より進で御使番を仰せ蒙つたりけるが次席の者に立身の先を越されたるを無念に思ひ殿中に於て過言に及び其過失を以て御役御免に成て小普請入には成されたり（小普請とは幕府の御旗本御家人の無役の者に附たる名稱なり）時に半左衛門は年齢四十二歳なりしが素より有福にて何一つ不足なき身の上なれば、聊かの小普請金さへ上納すれば勤もせずに事濟ゆゑ結句小普請の方が樂なりとて思を青雲に絶て日々樂び暮して居たりけり。然るに半左衛門の内室は明和二年と申すに年三十九にて歿りたり（此時半左衛門は四十五歳）此内室の腹に二人の子あり、惣領は新三郎とて其時十歳次男は權五郎とて其時七歳なり（此權五郎は其後明和七年に至り十二歳にて夭死したり）半左衛門は涙ながらに内室の亡骸を淺草海禪寺中の金龍寺に葬り二人の子息の成長をぞ俟ちたりけり。扨も半左衛門は其頃世に普通たる柔弱旗本にて更に文武の心掛と

ても無く、藝能とては亂舞謠曲に茶の湯に誹諧、その上の熟達にて免許印可の秘傳までを極めたるは酒色の兩道なれば內室か存生の中より取替引替て許多の妾を召抱へ淫樂にのみ溺れたりけるが、其中にて三年前に召抱へたるは靈岸島濱町に住居なせる浪人鈴木某と云へる者の娘おさよとて其時十六歳の莟の花にて比稀なる美人なれば殊に寵愛して側を離さず引寄て置たるに、此おさよは貧窮に育ちても流石に武士の娘ほどありて起居言語も緩にやさしく且つ天性利發の質なれば內室はドめ局侍女へも如才なく立廻り信々しく振舞て評判も好かりけり。內室死去の後は半左衞門も別に再び本妻を迎へずして愈此おさよを又なき者に思ひたればおさよの威權は自から重く御內證さまと人にも呼ばれ左ながら奥方の樣に取扱はれ其後傳吉お勝とて二人の子を設けし程に更に御部家樣と貴ばれしが此に至りて漸々と惡婦の本性を顯はしたるぞ淺間しかる。其頃下谷御徒町に吉住喜七と藝名を及びたる長唄歌の美男子あり實名は三上安六とて僅か五十俵の小普請三上銀次郎が叔父屋介なり、小祿御家人の習とて學問武藝には少しも心掛ず幼少の頃よりして遊藝にのみ心を委ねしが美男の上に器用なれば廿一二歳にて一廉の藝人となりて三座の劇場へも出勤して二枚目に居つたり、此もの便口奸智の曲者にて巧に人の機嫌を取り歷々へも出入して酒席の興を助け其美男なる故に奥向の女中に取囃され時々不良事共なしたりけり。おさよは何にしてか此安六を搔間見て忽ち身に玄む戀風に心を奪はれ、あわれ女と生れたる果報には斯る美男をこそ夫には持たけれ兩親の爲とは云ひながらアノ老境の半左衞門と夜毎の枕を並ぶる事の憂てさよと仇

なる心の動き出しては思ひ止まる事も出來ず何とぞして安六に意を通せんものをと千々に心を碎きて半左衛門を墮落め彼安六を招寄せて唄はせたるに安六は半左衛門の氣に適ひ夫よりは毎日の樣に出入なし酒宴の伽には無て成らざる人物となり折節は夜深て奥に寐泊する事に成たれば、おさよは大膽にも半左衛門の目を忍びて安六に密通なし現に出生の傳吉お勝は其實安六の種にて伜までも似たるが如くに思はるれば、譜代の用人松村瀬平は深く之を憂ひて安六を遠ざけおさよを退け半左衛門が淫酒をば止させんと幾度と無く面を犯して諫めたれども半左衛門ハ安六おさよが事は少しも疑ハず却て瀬平こそ兩人の寵を妬みて讒言するけれと疑ひて疎ドたり、去れども譜代の筋目ある者なれば暇を出す迄には至らざりけり

○第四回

去程に森半左衛門ハ安永元年壬辰三月廿四日と云ふに行年五十二歳にて卒去たり、未だ老たると云ふにも非ざるに斯く世を早うしたるは酒色に精力を削りたる故とハ知られたり。此時嫡子新三郎ハ十七歳なれども幼年の頃より身體虚弱にて氣力も甚だ薄く隨て物事の分別も年に比べてハ鈍き質にて幾ど女子の如き人物なり、次男權五郎ハ是に引變りて頗る活潑なりしが惜かな三年前に死去りて今ハ亡者の數に入つたりけり三男傳吉ハ四歳、お勝ハ二歳にて倶に妾おさよが腹の出生なり。然るにおさよは此時つく〴〵思ひけるやう『我は今年廿五歳の盛の花まだ散と云ふ年ならねど既に當主半左衛門卒去の上ハ譜

代の用人松村瀬平はトめ此日我を好とも思はざりける家來の輩が親類一同に相談なし話の末が聊かの手當を與へて我を追出す事のありもやせん、左ある時には是まで長の年月を辛抱して彼老耄の閨の伽つらい思を忍びたる甲斐も無く年頃の苦心は水の泡とぞ成りぬべき、いとし男の安六と人目を晴て契り合ひ又我腹の傳吉に此家の相續さすると云ふ兼て計りし數々の深い巧の企も鷸の嘴の食違ひてハ悔ても返らぬ事なるべし、夫を防がんには、若ト我より先を越さんには、左なり〳〵』と獨り首諾き未だ親類も打揃れぬ中におさよは虛淚に兩眼を泣腫し前後正體も無き姿態にて半左衞門が死骸の枕元にて伏嘆き稍あつて懷中より剃刀を出すより早く島田に結ひたる黑髮の綠の雲の澤なせるも髻の上よりプッツト切り亡者の枕邊に差置きて『モシ殿樣貴君が此樣に御隱れ遊ばしました上からハ何を樂に此世に生て居られませう、寧そ自害をしてなりと冥土とやらの十萬億土いづくの果のどこまでも御供とは存じますがさう致す其時は、第一に殿樣の御名前に傷が附き二つには傳吉さまやお勝さまの御介抱、殊には若殿新三郎樣の御世話何かと案ドまするゆゑ惜からぬ此命生長らへて居りまする私が心の中御察あそばして下さりませと、……』と嘆きつ叫びつ取亂しヒシと死骸に取縋り離れがたなき狀況ハ傍で見る目も不便にて、僞事とハ思はれず、松村瀬平その他の者にて日頃よりおさよが心底行狀を知つたるものこそ此惡婦めが狂言を仕組たるよと察したれ、其事情を知らざりける親類の甲乙なんどハアナ殊勝なるおさよが心やなと倶に哀を增たりけり。

程もあらせず森家の親類中にも尤も近親たる堀縫殿（御書院番を勤め、知行千二百石、小日向大曲、三十七歳、半左衛門の伜）森左兵衛（御小姓組、五百石、本所龜澤町、半左衛門の分家）を初め親戚一門皆打揃ひ葬式その外の相談に及びたれば、報知に由て菩提所たる淺草海禪寺中金龍寺の住職楚山と云へる腥和尚は所化伴僧ども引從へて入來り半左衛門に法名をば劍篋院殿蓮仙深虚大居士と贈りて位牌を認め讀經の勤め成たる後に、兼て內々賴を受たる事なれば楚山はおさよが願を直に聞入れて甚だ其貞節を感じ入たる體を見せ『何にも愚僧御賴を承知なし是なる佛樣の前に於て御身を佛弟子となし戒を授け申すで御坐らう』と座に直らせ自はズッと立て拂子をサラリと振廻し『善哉々々卿風流妖孽の身を以て生滅の機緣に乘し一旦無上の大覺を頓悟す、鏡花水月觀じ來れば色即是空、かの强て煩惱を遮斷するは本是れ糞擔漢の公案圓頂緇衣 愁 に僧尼の法體を學ぶと雖ども身體固より慾界の動物たり、妨けず、卿が自今衆生に向つて寶鼎を布施し以て有情の女菩薩たるを、濟度の快樂卿が自由に任す、和尚本來風月を嫌はず、喝、床上一壺の酒』と物體らしくも怪かる法語を並べ即ち法名を鏡臺院と附け伴僧に持たせる衣箱の中より香染の袈裟一領を取出して與へたり。既にかく成たる上は誰あつて暇の評議を言出し得べきにあらねば、おさよは內心に仕濟したりと諾きつゝ此日よりして鏡臺院とは名乘つたり。

〇第五回

去程に鏡臺院は先殿半左衛門の葬式を畢りてより日每の樣に菩提所なる金龍寺へ參詣をぞ成たりける。

初の内は流石に先殿の卒去を悲しみ參らせての參詣は感心なりと云ふものもありしが、松村瀬平は頗る怪み思ふ節のありければ何と無く穩に諫めたるに、鏡臺院は眥を釣し上て怒の聲を震はせて扨は妾が御墓參をば何か怪しいと思つて止さッしやるか、先づ夕景に參るのは此節がら人目に立を憚つてのと、又大勢の供人を連れずに忍びの乘物で參るのは何に妾が此程御上通りに成たればとて餘り見識張る樣に内外の人に思はるゝをば遠慮してのと、夫に何ぞや猥かはしい事でも有やうに御墓參も繁々は宜あるまいとは……ムヽ夫じやア先殿樣の問吊はどうでも宜と云はッしやるのか……イエ／＼さう云ふ了簡であらう……チエッ先殿樣の御高恩を受た卿が先に立て其樣な了簡では新三郎樣の御往先が思ひ遣られて心細う成まする……』と泣つ叫びつ捲し掛て辯じたり。瀬平は此座にて爭ふも無益なりと思ひたれば程よく詫言して下りしが、其後半左衞門が三七日の當日午過より所用に假托て邸を出で七ッ時頃(午後四時)より金龍寺の隣寺にて桃林寺と云へるに赴き都よく言拵て奥書院を借受け獨り默然として待構へたり。此桃林寺の庭先は生垣一重にて直に金龍寺の小座敷なれば垣根の隙間より樣子備さに覗はれたり。鏡臺院は夢にも知らず、墓參はソコ／＼にて此小座敷に打通れば住持の楚山が持出たる馳走の行厨、お相手に出たるは案に違はぬ三上安六、イヤ御押を、ソレ御酌をと興じけるが機を見て取り楚山が退座、あとピッシャりと建切る唐紙、兩人は是から差向ひ互に寄添ひて舌だるき事どもありて椽側の障子を締めたれば如何なる振舞やありけん知る由も無けれども、稍暫くありて鏡臺院は障子を開て裙もあらはに腰帶

も解け支ども無き體にて便所へ赴き、安六は額の汗を手拭にてふきながら障子の小蔭にて扇子使して居たりける。瀬平は是體を覗ひ見て興を覺し斯る事のあるべしとは疾に思ひ知つたれども餘りと云へば淺間しき鏡臺院が身の行狀やと大息を吐て此を去り歸宅なし熟々勘考なしたるに、森家の家來には用人給人等一家を搆へ妻子をはごくめる者十餘人その外徒士若黨を加ふれば三十餘人に及べども概ね皆世間に所謂旗本奉公の輩にて取るに足らざる者共なり其中に譜代の實直する面々六七人はあれど分別も無く智惠も無し偶々少し才覺ある者共は鏡臺院に媚諂ひ己を顧み私を謀るの小人ばら御家の安危を念頭に掛る者にあらず、獨り用人役の佐久間定之進給人役筆頭の大塚廣右衛門この兩人は忠義一途の人物なれば篤と相談を遂べしと心を決して定之進廣右衛門に鏡院臺の淫奔を語り知らせ『扨此事を表立ては御家の瑕瑾なれば穩便に事を計らふに若かず』とて其後は鏡臺院が墓參ごとに此三人代る〴〵に附添て次の間に扣へ尤嚴重に守つたれば鏡臺院は安六に逢ふべき便を失ひ獨り心を苦しめて愈瀬平を憎みたり。

斯て中陰も過ぎ新三郎には事故なく家督を下し置かれたれば、瀬平は用人筆頭にて內々は御家老と唱る家來頭たるを以て先づ一家中のもの當殿新三郎樣へ對し奉り無二の忠義を盡し奉るべき旨の誓詞を新三郎の面前にて行はしめ、其後會議を開き其衆議に由て森家の親類寄合を催したり。森家の親類にて近親と云ひ祿高と云ひ第一に位せるは堀縫殿にて旗本に似合はざる硬直潔白の人なれば瀬平は謹で縫殿に對ひ『新三郎樣御事御當主には立たせられたれども未だ十七歲の御若年なれば御親類樣の御中にて御後

見に御立下され度、私共御家來一同に於ては御前樣へ願ひ奉り度所存に御座ります』と相述たり。縫殿が返詞の有無をも俟たで、傍に座したる森左兵衞は聲荒らげて瀨平に向ひ『コレ瀨平子、拙者に於て敢て拒むと云ふでは無いが、堀樣は御近親と申す條他家の御方、かく森家の一族打揃ひ罷在る其中で他家へ後見相頼むとは聊か其意を得ざる評議サア其仔細左兵衞これにて承はらう』と森家の内福に目を掛て鋭く如何と詰つたり。

○第六回

後見評議はあはや一場の波瀾をも引起すべかりしを、松村瀨平は斯ては當主の爲に惡かりなんと心附たれば一方には親類の面々を慰め一方には家來の人々を制して『何にも左兵衞樣の仰せらるゝ所は御尤千萬に御座りまする畢竟は私共が先殿かねて仰聞け置かれたる思召にのみ思ひ入り不束を申上ましたる段は瀨平恐入り奉ります、然る上は堀樣と今御一方は御家門の中より仰合され御二方にて御後見を願ひ奉り度御座りますと己が身に過失を引受て仲裁説を出したれば是にて事和らぎ『先づ堀縫殿どのは亡半左衞門殿が申置かれたる趣もあれば辭退せらるべきに非ず、次に森一家の中にては誰彼と申さんより御年輩と云ひ殊には御分家頭なれば左兵衞殿に御頼いたし縫殿どのと御申談じ御後見然るべく願ひ申す』と云ふ事に親類の評議も附たれば、新三郎の後見は堀縫殿森左兵衞の兩人と定まりて(第一)森家永代知行の御朱印は當主新三郎幷に列席一同の封印を以て後見中は堀縫殿へ預置べし(第二)新三郎實印は堀縫殿

森左兵衛兩印にて堀縫殿へ預置べし(第三)新三郎家事向は用人頭松村瀬平用人小室喜大夫佐久間定之進重立取扱ひ堀縫殿家來絹川文右衛門森左兵衛家來猿渡兵九郎その立合たるべしと取極て夫々に其旨を申渡したり。

鏡臺院は常々鬱せく思ひたる堀縫殿が後見に立ち剩さへ苦々しき絹川文右衛門が松村瀬平佐久間定之進と一ツに成て家政向を取行ひ奥表とも嚴重に取締り、其上に瀬平が娘阿安とて今年十五歳になる才智發明の女をば縫殿が差圖として新三郎の小間使に入れたりければ左ながら奥に一人の監察を置かれたる如くにして益々究屈の思を成し戀しと思へる安六男に逢ふ事さへ容易は成り難くて心を焦す計なり。此に用人の小室喜太夫は鏡臺院の黨なれば其内意を受て密に猿渡兵九郎を一味に引入れ森左兵衛を誘はせたるに左兵衛は素より森家の身代に目を掛て內々巧のありければ渡に船と喜びて是に應ト專ら鏡臺院と心を併せ兎も角も先づ目の上の瘤とも云べきは用人筆頭松村瀬平用人佐久間定之進給人筆頭大塚廣右衛門の三人を退くべしと其機をぞ待たりける。抑々鏡臺院は森左兵衛を味方になして此三人を退け堀縫殿の後見を遠ざけたる上にて森左兵衛をも遠ざけて己が思ふ如くに押領の望を成さんと思ひ、また森左兵衛も其如く堀を遠ざけたる上にて鏡臺院を蟄居させ己一人にて森家を自由に押領なさんと望みて、互に末は敵と知つれど中途までは同ト道筋ゆくなれば、同道なさんと思ひたるこそ不敵なれ。されば森左兵衛は鏡臺院の淫行を增長させんとて故意と猿渡兵九郎に吩咐て便宜を與へさせたれば夫にて偶々安六と密

會するを得たりしとぞ。

斯て半左衛門が百ヶ日には石塔を建らるべしとありて鏡臺院の發議に由り其事を金龍寺楚山に依托せしめたり、是は家例の事なれば其積書は過分の申立なりとは思ひながら爭ふべきに非ずとて瀬平は其意に任せたり。夫より百ヶ日の二日前に楚山より『御石塔落成なしたれば御見分下さるべし』と案内ありければ、瀬平は文右衛門同道にて參詣なして拜見したるに周圍の玉垣を初めとして石塔の臺石竿石すべて瑩き立て見事に出來したりけるが扨て其表を見れば、コハ何に、先君劔篋院殿の法名に相並べて鏡臺院殿蘭香因本大禪尼と逆修に戒名をぞ彫付たる『正しく先殿に相並ぶべきは先年御死去ありたる御內室に即ち當殿新三郎樣の御母公の外は有べからず、鏡臺院の身分は御上通りの取扱には成たれども御本妻と云ふには非ぬものが逆修とは何事なるか、是こそ彼女が異心を懷ける所なれ、乾度取挫かては叶ふまじ』と思ひて直に堀縫殿へ參上なし云々の次第なりと申立たり、縫殿は是を聞てハタと怒り『憎くきさよが振舞かな、其逆修即刻磨潰させよ』と差圖に及びたれば、瀬平は文右衛門と共に取て返して金龍寺へ赴き石工を呼寄せ石塔を取下して正面の戒名を磨潰させたり、是ぞ即ち瀬平か浮沈の禍を招きたる因とは成りぬ、そは次回を見て知り玉へ。

○第七回

『逆修の石塔、百ヶ日の墓參に堀縫殿を初め親類一門に於て異議なくば我こそは當家の後室にて新三郎が

繼母なりと認められたる實地の證據なれば然る上は堀縫殿森左兵衞が後見と云ふは表方ばかり、邸内の事は都て我心の儘に計らひて忠義立する松村瀬平等を盡く追拂ひ我味方の者共を引入れて遂には新三郎を無者になし可愛實子の傳吉を家督に立べし』と深くも謀りし鏡臺院の企は瀬平に看破られ其石塔は磨潰されにけり。鏡臺院ハ無念やる方なく密かに小室喜太夫を招きて云々せよと命じたれば、喜太夫は猿渡兵九郎と共に金龍寺に赴き楚山に吹込み森左兵衞に訴へさせたれば左兵衞は心得たりと其日の來るを俟たりけり。

扨百ケ日の法事と云ふ當日に至りて森家の書院に於ては列座の大議論。楚山ハ衣の袖を搔合せて『……逆修の事は佛門の例に於て敢て御正室に限ると云ふでは御座らぬ、既に鏡臺院様御發心の砌り愚僧が先殿様の御靈前に於て不肖ながら導師と相成り院號を御授け申したるは各様方にても御立會の事で御座りました、去ば御願に由て逆修を彫入ましたのは廣大無邊の大功德、劍篋院殿に於かせられても草葉の陰で嘸御喜あそばして御座らうと存ドます、然るを御用人頭の瀬平殿が先日俄に石工を召連て御墓所に參られ愚僧が差拒みたるを承引なく御石塔を取下し鏡臺院様の逆修は更なり剩へ劍篋院殿の御法名まで勿體なくも磨潰させたる無慙無道の惡業罪逆、斯る擧動を爲したる上にて瀬平殿が自分の差圖にて刻直させたる御石塔、其仔細納得が參らぬ中は假令檀那で御座らうとも寺法に於て御斷いたしますと申張たはヨモ愚僧が過失では御座りますまい』と主張たれば。森左兵衞は傍より出しや張出て『實に怪からぬ瀬

平が取計ひ、良んば縫殿の御差圖でも同じ後見たる此左兵衛へは何で一應相談は致されぬ、御親類御一門一同の御目鏡で新三郎殿の後見いたす某を蔑に心得て相濟申すか』と頭に掛つて責付たり。瀬平は屈する色なく『先づ逆修のと楚山和尚が何と申さうとも石碑の表は此方の望に由ると、然るを鏡臺院一人の内頼を引受け此方の表立たる注文に背くは住持の不束、然るを以て私事御墓所内拜見に參つたる砌り此儀怪からぬと存じ念の爲に序を以て縫殿樣へ御屆申上げ磨潰させて御座ります、尤も左兵衛樣へ參上いたさゞりしは私の不念には似たれども既に御石塔の表は先殿樣の御法名を彫み奉ると申すと中陰御法事の時に私より申上げ其節左兵衛樣にも縫殿樣と御一同に左樣取計らへとの御差圖で御座りましたる故別段申上ませんで御座りました、又先殿樣御法名を磨潰したると以の外の御批難では御座りますれど同じ面の御石塔を鏡臺院の法名のみ磨潰し先殿樣の御法名を存し置きて此上も無き御不體裁末世に殘る當家御耻辱、其上に未だ御法會前に御座れば御建立に相成らざると同邊の心得にて磨潰し更めて御正面に刻直させましたは敢て無禮不敬とは存じ奉らず、夫を寺法など彼是申張つて御石塔の御落成を差拒み檀那の滿足を妨るは出家に似合はぬ慳貪邪見の致し方、或は内々にて楚山を語らひ斯る次第に及びたるもの歟、事情篤と御賢察願ひ奉ります』と逐一に申披を成たりければ楚山は一言も無く口を鉗て赤面したりけり。

左れども森左兵衛は素より心中に存ずる旨のありければ瀬平が理の當然の辨解を聞かばこそヤッキと成

て大聲上げ「默れ瀬平、便口に任せて彼是申し陳ずるとも先殿の法名を磨潰すとは以ての外の不屆不埒、ソレ程の次第ならナゼ身共へは斷らぬ、コレ宜く聞け、先殿の法名を彫付よとは差圖としたが磨潰して宜いと此左兵衞がいつ差圖を致し置た、エヽ此な虛言者めが」と叱り付れば。堀縫殿は顏色を變て「御扣へ成れ左兵衞殿、その石塔磨潰して刻直せとは此縫殿が差圖いたした、差圖したが不念とあらば瀬平を差置き此縫殿が御相手に罷成う、よし又差圖なき迄も妾の身分で逆修とは武家には曾て例なきと、夫を存じて更むるは家老用人たるものが當然の取計ひ、瀬平の致方この縫殿は尤なりと存じ申す、然るを劍旋院の法名を磨潰したとて變な處に柄をすげて瀬平を罪に陷さんとは武士に似合はぬ御心得、ソレとも別に仔細の御座つてか、左兵衞殿御返答しかと承はり申すで御座らう」と扇を笏に取直しズツと前へぞ進んだる。

○第八回

森左兵衞は斯と見るより心中には少し怖色たちたれど多勢を頼む老奸邪智高を括つて嘲り笑ひ『ハヽヽア是はゑたり縫殿どの、酷う御急召さるゝな、マア氣を落付て此老人が申す事を御聞なされ、此左兵衞が瀬平に向て申す詞を貴公が傍より御口出しには及び申さぬ、畢竟は瀬平一人の不屆に致して貴公の御迷惑に成ぬ樣に致し度のが僕の寸志、それに何ぞや此縫殿が差圖したと餘計な事を御身分から御發言、全體僕に於ては鏡臺院の逆修ゆへて差支も無と存じ申すが、夫が宜ないとあらばマア宜ないに仕た所で、

一旦その宜ない法名を刻付た石塔は即ち傷もの穢た品と申さねは相成まい、其穢れた傷物を潰磨して更に劍箆院の法名を刻付たる石塔は取も直さず不淨の石塔、たとひ僕如き小祿の武士でも德川家の旗本は古手の石塔不淨の品は相用ひぬ、況て千八百石の家柄森半左衞門とも云るゝ人の石塔に不淨の穢物を相用ひて濟と御思なさるゝか、夫位の事に氣が附て新規に致し更むるは家老用人たるものが當然の取計ひ、ソレを御承知ありながらヤレ瀨平の致方この縫殿は、尤なりと存じ申すとは成ほど武士に御似合の御詞で御座る、ワハ……、是は仕たり縫殿どの、可笑の餘りツヒ老人の高笑、御免下され、必らず御氣に障られな』と二十年來勵番の御職御張を勤めたる意地悪口詞の雜言に、縫殿は聞より赫と怒り『ヤア口が横に裂たりとて尾籠至極の悪口雜言、扨は鐸臺院と心を併せ忠義の瀨平を追退け此縫殿までも遠ざけんとの所存であるな、佞奸邪惡の森佐兵衞、今一言いつて見よ、眞二ッに仕てくれう』と脇差取てツッ立あがれば、ソレ喧嘩ぞと立騷き佐兵衞は奥へ逃込たり。一座の面々は縫殿を慰め佐兵衞殿が過言御立腹は重疊なれど兎も角も今日の所は我々共に面じて御怒を鎮められよと散々に詫言に及びたれば、縫殿は漸く憤を歛めて歸宅したりけり。

此騷にて百ヶ日の法事も墓參も其日は中止と相成たれど、中止せざるは堀縫殿森佐兵衞の爭論松村瀨平等の進退なり。此儘に捨置ては森家の騷動眼前なり何れにも取扱はでは相成まじと親類一門の人々は或は鐸臺院を説き付け或は佐兵衞を得心させたる上にて（第一）金龍寺楚山は劍箆院の石塔刻直し建立を

差拒みたる不束の段を詫書を以て森新三郎並に堀縫殿森佐兵衛へ誤り入る事（第二）劍旋院の石塔は森佐兵衛の意見に從ひ更に新規に申付て一周忌までに親類一同の監督を以て建立する事、但し逆修は勿論相除くべき事（第三）鏡臺院は後見人の承諾を得ずして逆修を彫らせたる不念を堀縫殿森佐兵衛へ詫言いたす事（第四）森佐兵衛は衆人の中にて雜言に及びたる段を詫る爲に縫殿方へ自分罷越し挨拶いたす事（第五）用人筆頭松村瀨平用人佐久間定之進給人筆頭大塚廣右衛門の三人は新三郎及び鏡臺院の意に叶はざるを以て永の暇申付る事（第六）然る上は堀縫殿森佐兵衛は隔れなく是迄の通り申談じて新三郎の後見いたす事』と相談を定めて夫々に申入たりけり。縫殿は此仲裁は親類の面々が鏡臺院の甘口に欺かれ贈賄の利慾に眼眩みて忠義の家來を追出す事に同意したるなりと察したれば、瀨平等三人は今度石塔の事に付ては聊か以て落度なし永の暇は無用なりと論じたれども否ゝ石塔の事にあらず平生の勤方新三郎の意に叶はざるが故に暇を遣し候ふなりと頻に辯じたり、然る上は拙者の後見も斷るべしと一旦は主張たれど、左ありては又候ふ廢立て一同の迷惑なりと切に說きされば、縫殿も今は是非なし各方に面じて承知仕るべし但し立合の爲に森家へ遣し置たる家來絹川文右衛門は引取らせ以來は新三郎殿公邊向の事のみ後見いたし家事には一切立入申すこと相斷るべしと答へ漸く夫にて事納つたり、併し森家の御朱印並に新三郎の實印だけは親類一同の賴に由て以前の如く縫殿方に預つたり。

○第九回

親類一同の仲裁にて堀縫殿森佐兵衛其外の折合も附たりければ忠臣の松村瀬平は佐久間定之進大塚廣右衛門と共に永の暇とは成たりけり。尤も鏡臺院は此叙に侍女のお安をも退けんと仕たりけるが、森新三郎は痴鈍ながらも當年已に十七歳なりければはや春心動きてやお安を密に思ひ慕ひて有ける程に『瀬平にこそ罪はあれお安までも暇出さんは不便なり且は我手許の用事に不自由なれば止め置きてよ』と望みたり、新三郎が斯く望める上に此お安は堀縫殿が推擧したる侍女なれば強て退げんとなさば却て事むづかしかるべしと悟つて鏡臺院は暫く其意に任せたり。

扨も松村瀬平は鏡臺院が悪計に掛り永の暇と成ければ住慣たる七軒町の森の邸の長屋を引拂ひ明朝は立退べき事とありぬ。此瀬平は陪臣とは云へ元は由緒ある侍にて先祖より瀬平まで七代の間森家に仕へ百五十石の世祿を賜はり代々重職を承はつたる身柄なれば若黨小者下女も召仕ひ表面は相應に暮したれども常に施與を好み朋輩の難儀を救ひ任侠を喜べる質なりければ有餘とてもあらざる身が俄に扶持放れの浪人と成たれば皆暇を取らせ家財器什なども賣拂ひて若干の金に換へ先途の用意をぞ成たりける。瀬平は今歳三十九歳の壯士なるが家には六十に餘れたる老母の刀自あり、意中の知れざる婦人を容れて母に氣兼苦勞を掛なば何にせん誠に孝養を盡さんには鰥夫こそ好けれとて二年前に妻が死亡て以來まだ後妻をも娶らざりけり。此邸も今夜ばかりの名殘なれば責ては別を惜まんとて忍びやかに定之進廣右衛門其外懇意の輩を打招きて酒くみ替し『扨も我等は是なる定之進廣右衛門の兩氏と共に御不興を蒙り永の

御暇と相成たると恐入たる次第なり、我々共立去ぬる上は御家の事は專ら鏡臺院どの並に佐兵衞樣の御計ひたるべければ必定思の外の珍事をも起り候ふべき歟、餘人は格別我等は累代高恩の身の上なれば假令御暇と相成り候ふとも身命を擲て當殿新三郎樣の御身御安泰を祈り奉るべし、去ながら是より御門內へ立入も適はざる身分となれば心ばかりは切なるとも朝暮御側に附添ひ奉り難し、何卒各方には御恩を思ひ暮々も當殿樣の御事偏に御介抱下され度これのみ願ひ參らする』と涙と共に賴み入たる心底に何れも袖を濕したり。折しも絹川文右衞門は堀縫殿の使として瀨平が許に來り縫殿の口上を陳べ瀨平はじめ定之進廣右衞門の三人へ手當の金子を贈り猶も追々相談に及ぶべき議もあれば瀨平には時々縫殿方へ出入いたさるべしと傳へたれバ、是にて少しは賴みある心地して倶に彼是と談合には及びたり。

斯て瀨平は人々退散して後に老母の刀自と娘のお安と三人鼎立に成て申しけるは『昨日母上へ申上たる通り此瀨平が今度當家御暇に成りましたるは是非なき次第に御座りますれば據處なき事と御明め下さりませ、是よりしては御年寄れし母上へ朝夕の御不自由をさせ奉る不孝の段は私が心中御推察あつて御免しなされて下さりませ、扨お安には昨夜も敎へ諭しし如く當御邸の奧に止まり殿樣の御事何くれと無く氣を附よ、鏡臺院どの初めとして御邸內の人々は男女に限らず皆殿樣の御不爲を謀るばかりか殊に由ては御身の上をも危ふくせんと存ずる輩、その間に交つて御附申す上からは四方八方皆敵勢さながら針の席に座するも同前、うきもつらきも忠義のため此父親に成替り忠義を立て玉はれよ、コレ此通り父が手

を合せて賴むぞや、父子二人が忠義と孝行立通すも通さぬも汝が心の持やう一ッ、合點が往たかコレ娘、尤も急場の時には兼て牒じ合しし如く秘密の合圖を怠るな、また別て愼むべきは色慾の二ッ、イザと云ふ其時は武士の娘の平常の覺悟かならずともに未練を心に存ずるまいぞ……』と忠義の淚ハラ〱〱母も娘も倶淚堰止かねて居たりけり。
斯て瀨平は其翌朝森の邸を立退きて馬喰町一丁目に引移り手習師匠を身の活計となして細き烟を立たりけるが、案に違はず森家にては其歲の暮に至り知行所の騷動こそは起つたれ。

○第十回

却說森家にては松村瀨平佐久間定之進大塚廣左衞門の三人を永の暇となし堀縫殿を自から遠ざかる樣になし從つて絹川文右衞門も森家を引揚たりければ、鏡臺院は復憚る處なく新三郎が相手と云ふに假托て吉住喜七の三上安六を邸內へ招き寄せ奧通させて日每の淫樂に耽つたり。且森左兵衞は此程より暴酒の爲に中氣となりて身體不隨なるが上に言語も分らぞ精神も老耄したれば森家の事に携はるべくもあらず監督の家來猿澤兵九郎は聊づゝの賄賂に眼眩みて何事も見ざる聞ざる言ざるの教を守つて庚申のさるとはめで度木偶の坊。されば誰に遠慮會釋のあるべきぞ鏡臺院は其實の弟の鈴木彌兵衞とて今歲二十五歲なるを松村瀨平が跡役に召抱へ用人頭となして家事を取行はせたり、此彌兵衞は此頃まで靈岸島に住居て無賴の悪徒どもに交り酒色博奕に溺れ行狀不方正ものなりけるが今は俄に一足飛にて森家の重役と

成り上見ぬ鷲の威を振ひ御家の叔父御と崇められ諸事鏡臺院の意を受て心の儘に振舞ひたり、是に依て森家の家來にて少しく正議を唱ふるものあれば直に身の暇を出して更に新規の者を抱ふる程に、年來の者には用人行方友右衛門（六十）同く小室喜太夫（四十五）岡部文之進（四十四）給人京極叉三（四十六）是等は固より忠義の心も無く鏡臺院の機嫌取々に私をのみ顧たり、扨また新參には齋藤龍右衛門（三十六）平山宮助（三十一）吉田作郎兵衛（四十七）なんど彌兵衛に引繼いて専ら威勢を張たりけり。中にも龍右衛門と云へるは鏡臺院の妹おとめが夫なり、此おとめは眉目形こそ人に勝れて麗はしけれ十四歳の頃より淫奔の道に踏迷ひて近所の甲乙と情を通じ常に父兄の迷惑を釀しければ父が死て後に兄の彌兵衛はおとめが十七と云ふ歳に七年の年期にて深川の妓樓に住込ませ其身代もて博奕の資本には成たりけり、おとめはさる淺間しき勤をば結句面白き事に思ひて朝には八幡の鐘の聲に遊蕩漢を送り夕には佃の艫の音に輕薄男を迎へ川竹の流に身を任せたりけるに、鏡臺院さすが親身の妹が斯る苦界に沈めるを氣の毒に思ひ彌兵衛を引入るゝと共に密かに呼吩て親許身請を成せ彌兵衛が家に引取らせたり、然るにおとめが勤の中に二世と言替したる一人の男あり原は丁子屋龍の助とて相應なる町家の次男なりけるが若年より放蕩に身を持崩して今は深川に吟ひ來り都浮太夫軟中と名乘り幇閑を業とせる當年三十二歳の陋弱漢あり、鏡臺院は彌兵衛に謀り此おとめを然るべき人の妻にも成さんと仕たれども、おとめは右の都軟中ならでは外に夫と定むべき男は無し其を許さぬとあらば逐電亡命は疎か情死をもせんずる勢な

れば、左程に思ふ男ならば寧そ添はするが宜しかるべしとて夫婦になし彼の軟中の龍之助を改めて森の家來となし齋藤龍右衛門と名乗らせ用人には成たるなり。又彌兵衛が妻おきちと云へるは是も此頃まで鶴賀吉之介と呼びて新内節を語りて渡世としたる女なれば元より素性よきものに非ず。されば鏡臺院彌兵衛おとめの三人に安六龍右衛門おきち等ありて是等が森家の奥にて酒色に打興じて晝夜を分たざる狀況は左ながら妓樓にも比しき體にぞ見えし。

此に森家知行の代官は是まで大塚廣右衛門が承はつて毎年播州に下り年貢を取立たりけるに、廣右衛門暇と成たれば其後役には吉田作郎兵衛をば成たりける、此作郎兵衛は曾て御代官手代を勤め私欲の筋あつて浪人したる者なれば地方行者を申立て彌兵衛が吹擧にて森家へ仕込み代官と成て播州の陣屋へ下りて實地を見分したるに、成ほど噂に違はざる上地の厚免にて其上に新田穩田とも許多ありければ作郎兵衛は忽に不良の心を起して頻りに賄賂を貪り猶飽足らずして增年貢を申付て歸府したりけり、是にて知行所の村々は大に騷ぎ立ち此上は總代を立て江戶表へ罷出で御地頭へ嘆願なし夫にて御聞入なき時は御勘定奉行に訴へ出るの外に道は有べからずとて百姓中にて政兵衛と云へるもの氣慨ある者なりければ總代となりて江戶へ來り頻りに嘆願に及びたれども彌兵衛等は更に取上ざりければ政兵衛は詮方つきて此年の十二月廿日と申すに御勘定奉行公事方安藤彈正少弼が白洲へ訴狀を上たりけり。

○第十一回

森新三郎知行所の百姓總代として政兵衛より訴狀を差上たりければ、御勘定奉行安藤彈正少弼は此事直に公然の裁許に及びては或は森家の興廢に關る程の大事にも及ぶべき歟兎も角も內裁にて相濟む樣に取計はすこそ穩なるべけれと思案あつて、彼の訴狀は受理して追て何分の御沙汰に及ばるべしと政兵衞へは申渡し、其訴狀の寫をば新三郎の支配頭たる青山主馬方へ送付したりけり（斯る場合には公裁に及ばざる前に支配頭をして取扱はしむること是れ幕府の慣例なりと知るべし）

此事森家に聞えたりければ鏡臺院は大に驚き用人頭鈴木彌兵衞（鏡臺院の弟）用人齋藤龍右衞門（同人の妹聟）給人平山宮助吉田作郎兵衞など云へる腹心の輩を集めて如何はせんと頻に評議を凝らしたれども是等の輩は酒色放蕩の道に達して佞奸邪智の企にこそ巧みなれ素より然るべき分別ある人物ならねば何程に根限り精限り智惠袋を絞つたりとて無い智惠が忽然と湧出べき筈も無く只々『困つたもので御座る〳〵』と大息を吐て首を傾くるより外の事ぞ無き。稍々ありて平山宮助はハッタと膝を打ち名策わが胸中に浮んだりと云ふ面色して小鼻をピク〳〵と蠕かし鏡臺院に對つて申しけるは『此御場合に成ましては御支配頭の青山主馬樣を手に入るゝが萬全の名策、これは先程よりして各々同意の所で御座るが扨其主馬樣に取入るべき手緣が無いに困却千萬、然るに唯今不圖考へ附ましたは御菩提所の金龍寺楚山和尙、先頃御前樣御佛參の時に恰ど主馬樣にも御參詣と見えて和尙の茶室より御出ましに相成て廊下に於て御前樣と御摩違で御座りました、尤も御雙方樣にて御存なきゆゑ御挨拶は無かりしが私事は主

馬様を御見知申して居りましたれば御會釋を申上て御座ります、其後和尚に尋ねましたるに不思議なるかな主馬様の御菩提所も矢はり金龍寺で和尚は殊の外に御懇意を致しまする趣にて既に内々承り込だる儀も御座りますれば何は兎もあれ楚山和尚を急ぎ御呼寄に相成て御相談あそばされたが主馬様の御裏門から廻るには捷路かと存じますると述たれば。一座は是を聞て各々詞を揃へ『官六どの天晴妙案『諸葛孔明楠正成も跣で驅出す大智恵者『夫に上越す名策は御座るまい……と同意をこそは仕たりけれ。鏡臺院は『然らば楚山に逢て頼まう程に卿御苦勞ながら呼で來て玉はぬかと言はせも果ず『心得まして御座りますと官助は大急にて淺草なる金龍寺へぞ赴たる。

此青山主馬と申すは世祿二千石を領して麻布市兵衞町に住居なし今歳五十一歳の勤盛り、惣領齋宮（廿七歳）次男八五郎（廿四歳）を首として子息女たちも數多設られたる人なるが、去年内室に先だゝれて後は性來の色好み益々烈しく成て子供たちの前をも憚らず數人の妾を召抱へ蓆破りの淫樂三昧齢にも愧ず、振舞たり、然るに森家の鏡臺院と云へるは廿五歳の女盛り切髪姿の艶かさは一層にて得も云がたき計にて其生めきたる擧動は障らば落ん風情なりと先つ頃かの楚山が噂話に聽と比しく見ぬ戀にあこがれて密に楚山を頼み其佛參を俟受て垣間見しに話に勝る妖艶冶姿、何かさて好色の主馬なれば茫然として打見とれ『哀れ男と生れたる果報には此若後家を引寄て我思の儘に樂しまば是に越たる愉快はあらじ』と寄々に楚山を頼みければ、楚山は慭に由なき事をして左ながら太平記の侍從が西對の事よりして師

直に頼まれたると同じ境界に隔つたるものかなと大に困却なして居たりけり。斯る所に平山官助は息せき來りて楚山に面會なし『云々斯々の次第なれば貴僧の御計を以て主馬樣を旨く籠絡む巧夫は無や事成就の其上は謝議は莫大贈るべしと』說たるにぞ、楚山は『締た』と心中に喜びたれど故と迷惑の體を示し澁々と承諾なし夫より森家に赴き鏡臺院と密話に及び、楚山は主馬を金龍寺まで引出すべき間鏡臺院にも參詣あつて御面會の上篤と御賴あるべしと說き勸め雙方の都合を問合せて去らば來る廿八日の會合とは定めたり、是ぞ青山主馬が一家破滅の禍因とは成にける其は次回に說く所を讀で知りねかし。

○第十二回

鏡臺院が其日の裝束には、燃出ばかりなる紅縮緬の長繻袢に亂菊を織出たる白綸子の襟を掛け、藍氣鼠の紋縮緬無垢の二枚下着の廻より吹に掛て紅白の色糸もて翻れ梅をば小さく疎に縫はせたる上に、黒綸子五ッ紋の小袖の裾褄に雪折笹をば四條風の下繪にて染出させたるを着、唐織朱珍に金花鳥の模樣を出したる九寸幅の帶を締め、淺黃縮緬のしごきを長らかに結び下げ、大紋縮緬を江戸紫に染め無地緋の壁チヨロの裏を打たる被布に樺色の飾紐大きらかに付たるを羽織り、フサ〳〵と仕たる綠の黑髮を香油にて梳上げ、鬢髱をユラリと出し、髻は薄紫の打紐の兩端に總つけたるをもて結はせ、後茶煎をバ襟元まで垂れてわざと頭には何も簪さねど、紅白粉は好む所の厚化粧、剃落したる黛の跡は遠山

の霞の如く、淨かに剝したる齒の彩は眞珠の光に異ならず、黑塗の骨に金地墨繪の扇を持てしとやかに立出で設の座に就き、少し恥らひたる樣子にて薄く面に紅葉なし、優しき聲して時候の挨拶に及びたる其有樣は觸たくて得も云ひ難き情を含み實に唐土の詩人が梨花一枝春帶雨と詠じゝも是をや申したるらんと思はれて青山主馬は唯見とれたる計にて我を忘れて居たりけり。

住持の楚山大和尚は禪風の工夫には辛棘の苦行を積まねども一旦豁然として不斷煩惱即菩提心と大悟徹底したる惡阿羅漢、柳は緑花は紅くれる物なら何でも受納更に辭退は仕らぬ、酒は醍醐味般若湯素より野衲の大好物、魚鳥の料理は三種の淨肉佛祖の許し所なり鰻の蒲燒山鯨もんぢいでも鼈魚でも食て遣るのが大功徳、精進潔齋これに超たる無駄は無し、酒と肴に色と慾これを嫌がる熟入は夫が即ち野狐禪賣僧、酒席の御相手いたすのが悟道を勸むる大方便、色の取持結ぶの神勿論野衲の神通力と些とも憚る所なく有緣無緣の差別なく手當り次第に取入て幇閑牙儈兼帶の大道師。甘く兩人が中に入り持出たる酒肴、コレナ精進料理では迚も御口に合ますまいが御寒凌の御一興と頻りに勸むる亭主振。主馬は性來大酒のみ鏡臺院とて鳴口なれば初めの辭宜も打解て差つ押へつ杯の廻るに付て廻さるゝ、心の亂れ氣の狂ひ、夫と處置に露れたり。機緣正に到來と楚山が外した其後は二人が一間の差向ひ……主馬は銚子を持たる鏡臺院が手を引よせて「イヤ御賴の一條は御都合の宜樣に取計方が無いでも御座らぬが、此に一ッの難儀と云ふは既に四日以前安藤彈正少弼より相廻つたる書面は直に支配組頭の神谷小作大平

左門の兩人へ相渡し篤と取調を致す樣に申付置たで御座る、彼奴等名代の頑固漢で斯樣な取調に掛ると得たり賢しと種々な内幕を穿鑿だして困り申すじや……唯今仰の御内情を此主馬にナンデ早く仰せられなかつた、アッ惜い事を致した、彼奴等に申付ぬ前であつたら何とでも取計が御座つたもの……イヤ何も引戻が附かぬ事も御座るまい、ソリヤ自分の料見次第で『一旦取調は申付たが森新三郎知行所の一件は暫く見合せ其書類は拙者へ戻さつせエ』と斯樣に權柄づくで高飛車に云付れば彼奴等とても二言は無く矧て堀縫殿なんぞが親類で有らうが後見であろうが口出の出來る譯のもので無いが……サア其取計を致すには自分も少しは了簡の覺悟をいたし、罷り間違つた其時にはドウと云ふ工夫を附けねば相成らぬゆゑマア其な危ない橋を渡るのは止にして身分を大事に致さうヨ、アッ怖いこと〲……ム、其樣に貴婦が涙を出して御頼なさるとあらば隨分この主馬も一肩脱で見ても宜が、其代に自分が頼む……ソレ御覽なされ貴婦は自分が手を拂ひ退てソノ樣に遠くに迯て御座るで無いか……サア夫が即ち魚心あれば水心ありと申すもの……勿論々々自分とても旣に年輩ナンノ一時の浮氣心で斯樣の事をば男の口から申さうぞ實以て眞實本心……今度の一件ばかりで無く何所が何所までも相談の相手に成て貴婦の望み通りに致して進せう……イヤ決して詞に違背は無い……ハテ堅くるしい、まさか未通女でも御座るまいに……。

○第十三回

鏡臺院は素よりさるもの『森家を押領して我子の物になさんには此青山主馬こそ究竟の方人なれ、此奴が年にも恥ざる戀慕の擧動見るも中々嫌なれど急場に臨めば股さへ殺ぐと云ふ喩へ、背に腹は換られぬ、ヨシ〱今一人の半左衞門が新規に又出來たと思へば濟むと、此手で此奴を籠絡で味方に附るが上分別と妾上りの猾辣もの、忽ちソレと思案を定め場所もあらうに金龍寺の小座敷にて仇なる枕を替したり。是よりして主馬は住持の楚山を蜂使となし屢々鏡臺院と密會に及びければ果せるかな其術中に陷りて諸事言ふが隨意に取計らひたり。

却說播州の政兵衞が御勘定奉行の白洲にて訴狀を受理ありたる儘にて待ど暮せど何の御沙汰も無く一度の呼出も無くて其年を送り明れば安永二年癸巳と成たれど二月の末に至るまで空しく馬喰町の鄕宿に滯留したりけり、此上はとて再び訴狀を上たるに『森新三郎知行所增年貢の一件は同人支配頭青山主馬へ申立て先一應は其取扱を承はるべし』と指圖せられたり、是までに主馬より內々の依賴ありての故とは知られたり。されども政兵衞は斯る事とは夢にも知らず麻布市兵衞町なる青山主馬が邸に至り訴訟の趣を申立たるに主馬は腹心の用人を以て度々政兵衞に理解を申聞け兎も角も地頭の申分を承知いたすべしと諭したり、政兵衞は增年貢の苛税は迚も領分一帶にて堪がたき旨を申張て聞かざりければ、主馬は自から白洲に出て威しつ慷しつしたれども百姓でこそあれ了簡を定めて總代に立たる程の男なれば更に臆する所なく新三郎が代官の無理非道なる個條を逐一に證據を擧て申立てたれば、主馬は此上强

て押付なば森家の安危にも係るべき大事をも惹起すべしと見て取り頻に仲裁を入れ、詰り『増年貢一條は百姓の申立通り是を止めて從前の如き免を以て取立べし、但し新田並に隱田にて是迄年貢逃れと相成たる所は都て撿見の上夫々に免を定めて取立べし』と云ふ事にて雙方五分五分の折合と成り政兵衞も凡は承諾したりけり。

然るに政兵衞は右の仲裁を受たる上にて其手續を成さんとて七軒町なる森の邸へ罷越したるに松村瀨平佐久間定之進大塚廣右衞門を初として譜代の用人給人は暇と成て鈴木彌兵衞齋藤作右衞門平山官助吉田作兵衞など云へる新參のみにて地方年貢の事など其譯を知りたるものは惡代官たる作兵衞の外には一人も無くて仲裁の趣意も纏まらず果は政兵衞を憎みて罪人の樣に取扱ひたり、政兵衞は再び主馬の白洲に出て此由を愁訴なし『只今の狀勢にては御領主の御家政は申迄も無く第一地方取扱に差支へ候ふ間御用人頭鈴木彌兵衞代官吉田作郎兵衞の兩人に暇を遣はし更に元御用人頭松村瀨平御用人佐久間定之進代官大塚廣右衞門を召返し復職いたさせ申す樣に御取扱ひ願ひ奉り候ふ』と申立たり。主馬も困り果て種々說得したれども政兵衞は承諾せず、鏡臺院も彼是と我儘を云ひて聞入ざりけるが、『知行所一同に於ては松村瀨平印形の證文にこれ無ては安心あり難ければ年貢の事其外とも一圓承服仕らず强て仰聞られ候ふ時は必定一揆をも起し申すべく候ふ』と政兵衞の申立なれば、是も『吉田作郎兵衞は暇を遣して退身せしめ更に相應の者と代官に申付べし、又松村瀨平は望に任せて年貢申付方の證文に印形いたさし

むべし』と云ふ事にて漸く納得したりけり。
是に由て松村瀬平方へは森家より急に小室喜太夫を使者に立て召返し復職の事を談せしめたるに、初の程は瀬平も辭したりけるが堀縫殿が内々の勸告に從ひ再び森家に歸參して用人筆頭に据り年貢一條の證文に調印して政兵衞に渡し是にて知行所騷ぎは無事に其局を結びたり。斯て瀬平は森家の奥表の不仕だらを見るに付け兼て斯あらんとは思ひ設けし事ながら餘りの狀勢に打驚き此上は親類總寄合を促し時宜に寄ては支配頭にも申立て非常の改革を行はでは森家の安泰覺束なしと心を碎きて思を運らしたる所に四月に至り邸内は差支有之に付き外宅通勤いたすべしと申渡されて邸の外に出されて數日の後に再び永の暇とは達せられたり。

○第十四回

三上安六が森家の奥に入込で鏡臺院と枕席を俱にする事は知たれども青山主馬との密通は流石に楚山が計ひとて巧に其痕を掩ひたる事なれば堀縫殿は言も更なり松村瀬平とても是を知らざりければ再度の暇に憤然と怒を成し此上はとて其事を主馬に訴へ出て『鏡臺院其外の者共へ松村瀬平暇の仔細如何と相尋ね候へども發輝と致したる返答も無し一體譜代の重役たりし同人をば先頃輕々しく暇差遣したるをだに怪かる處置と存じ候ひしに今度再び召返し候ふと間も無く又もや再度の暇とは頗る以て其意を得ず畢竟鏡臺院等一味と成て忠良の家來を遠ざけ候ふ邪行に出で候ふ儀と推察仕れば御取調下され度この段

願ひ奉り候ふ』と申立たり。此方にては兼て心得たる事なれば主馬は堀縫殿および瀬平に向て『先づ森新三郎方に於て主人の意に適はざるを以て家來に暇差遣す事其理なきに非ず、尤も親類一門の向より其仔細を相尋らるゝ事は格別なれども、表向き支配頭より取調ぶる事は家事に立入の嫌あれば方々以て役目に付て成し得べき限にあらず、但し縫殿どの御一分にて新三郎へ御問合の段は敢て此方に故障の筋なし、次に瀬平事その主人より暇を申渡されたる上は其主人に向て暇の仔細を承はると決して武士道に無き所なり、然れば此方に於てさる筋なき儀を取上ると罷成らず、是に代つて若し新三郎方より云々にて暇出し候ふ家來立退き申さずと申出なば其時には組の者を差遣し主人了簡の通に取扱はするが支配頭の心得なり』と横柄に申聞け、否と云はゞ役目の威光支配頭の勢を以て力沙汰にても取計はすべき状況なりければ堀も瀬平も力及ばずして先づ泣寐入とは成たりけり。是ぞ全く知行所の騒を押へんが爲に青山主馬が勸にて其間暫く瀬平を用ひたるとは知られたり。

斯て瀬平は再び馬喰町の原の住居に立返りて益々貧苦に迫り朝夕の煙を立るだに差支がちなりけれども更に志を挫かず一人の老母に孝養を盡し蔭ながらに娘お安が便を聞く毎に主家の事のみ打案じ千々に心を碎きたり。此にお安は去年父の瀬平が邸を立退たる砌りに暮々も言置たる教を守り信やかに新三郎が手側に仕へ萬づ内端に取行ひ聊も怠り無く奉公なし且つ常に空とぼけて少し薄鈍き樣なる體にて立働きたりける程に鏡臺院も初の中こそ氣詰に思ひたれ今は漸く心を許しナンノ高の知れたる小女なり些とも

恐る丶所なしと思ひ侮り秘密の事ども丶お安が見る前にては強に包み隠さぬ様に成たれば是にてお安は愈々鏡臺院一味の密事を知り其度ごとに細々と書認めて陰に五菜男の喜助に托みて瀬平が許へは報通たり。此喜助と云へるは實は佐久間定之進が末の弟にて幼少の頃より知行所にて育ち江戸に來りて後も母方に居て森家の輩に面を見知られざるを幸ひに瀬平が謀らひて姿を扮させ五菜に住込ませお安と共に内幕の事ども探らせたるなり。瀬平は或日この喜助が買物の序に來りて届けたるお安が消息を披て見たるに、コハ何に『一昨日の午過の事まて候ひしが殿様（新三郎）には植木屋に向はせられ御庭の盆栽を彼是と御差圖あつて置換あそばして候ひしに京極又三事其場に居合せ御傍より口を出して植木屋に差圖なし剰さへ殿様をば御嘲弄申上て候ひければ殿様はハッタと御立腹遊ばされ御目通を下れと仰やられて候ふ然るに又三は恐入もせず其儘に直立て是は御母上鏡臺院様の思召で御座候ふと口返答いたし候ふと是にて殿様は益々御怒なされ此新三郎には鏡臺院と申す母は無いぞと仰られしに又三は猶又御逆ひ申て御不孝の様に罵りて果て舌を出して候ふ是を御覽に相成て殿様には御癇氣を發させられ植木屋が所持いたしたる柴刀を取て御振上なされ候へば又三は恐れて逃出し申し候ふ猶も追掛んと遊ばされ候ふ所を御側の人々御取押へ申上げ種々に御慰め參らせて御居間に入れ奉つて候ふ夫より昨日の朝に掛て鏡臺院様には彌兵衛安六龍右衛門官助其外御家内の人々を召寄られ御評議の上にて急に御新座敷に檻を修理へ殿様には御狂氣遊ばされ候ふと申振し勿體なくも昨夜より右の檻の中へ押込め奉り囚人の様に致され見るも

御痛はしき體に候へば早々御救ひ申上げ成さるゝ樣御願ひ申上候ふ』とは書載たり。

○第十五回

松村瀬平は故主森新三郎が檻に入れたりと娘お安が手紙に知り大きに驚き急ぎ其旨を堀縫殿へ告たりければ、縫殿は驚きて馬に打跨り一鞭くれて小日向より七軒町まで馳付け鏡臺院彌兵衛に面會なし其仔細を尋ねたるに、一昨日新三郎殿事俄に發狂いたされ又三を手打に成んと仕たるに付き右の通なりとは答へたり、去ばとて縫殿は檻の外より樣子を見たるに新三郎は深くも先日の癇癪を後悔したりと見へて檻の隅の方に端座なし俯いて居たりけるが、縫殿を見て涙を流し我身の不束より由なき擧動を成し斯る仕合に過ひつる事の面目なさよ何にもして詫言して玉はれと嘆ち悲しみ打萎れて依頼たり。縫殿は此體を見屆て程よく挨拶して暇を告げ直に馬を乘返して麻布なる青山主馬が許へ赴きたるに、主馬は其實宅に居たりしや知れざれども御用向にて他行中なりとの事なれば詮方なく歸宅して其由を瀬平に物語りて猶も相談に及びたるは頼もしき人なりけり。

瀬平は森新三郎後見堀縫殿の家來なりと名乘り衣服を整へて急ぎ牛込袋町なる川口頼母が許へ赴き使者の由を申して面會を求めたり、此頼母と云へるは主馬が支配下にて小普請世話役を勤め家祿五百石の旗本にて至て實直の人なり。頼母は瀬平が申し演ぶる所を聞て『ソハ怪からぬ事なり、森新三郎は拙者が組中なれば速に見廻つて取計に及ぶべし』と答へて瀬平を待たせ置き直に夫より森の邸に出張して見分

あしたるに果して瀬平が申すに違はず新三郎は平生虚弱にて鈍きが上に檻に入られて深く心を痛め頼母に對ひても身の過を謝し涙に暮たる計なり、頼母は此方の一間に於て彌兵衞其外の家來を呼出して篤と事の仔細を問ひ尋ねて後に『……卿等は新三郎殿狂氣の由に申されども拙者見受たる所にては更に左樣とは存じ申さぬ、尤も一昨日刃物を以て御家來を追掛たる事實は有りしに相違なかるべきが、是れ一時の立腹にて前後の分別を忘れたるもの歟……然るを親類後見にも相談なく、又組頭世話役の承知をも待たず勝手に當主を檻に入たると假令ひ實父母の差圖たりとも御旗本の身分に對して致すまじき次第それに何ぞや先主人の側室たる鏡臺院とやらが差圖なりとて手込の次第甚だ以て其意を得ぬぞ……ナニ醫者の診察をも未だ受ざるとは猶更以て不都合千万……早々拙者が眼前に於て彼檻の鎖を外し新三郎殿を出し自由の身に致されよ』と嚴に申し渡したり。彌兵衞等は頼母の理の當然の申し渡に違背する事もならず澁々と新三郎を檻の中より出したれば、頼母は新三郎に向ひ其短氣を戒しめ向後とも右樣の事を致す間敷旨を申し聞て引取たり。是にて新三郎は漸く其危難を免がれたり。

瀬平は頼母より右の取計を聞き悦の嬉涙に手を合せて伏拜みたれば、頼母は不審に思ひ身の素性を尋ねたり、瀬平は平伏して『今は何をか御隱し申上ませう私事は實は新三郎の舊臣にて譜代の用人松村瀬平と申すもので御座りますが……』と是迄の顛末を落も無く述たりければ、頼母は打驚きて『扨は新三郎殿の家事はさる事情ではありつるよな、尤も御取締の噂は薄々聞たがヨモヤ夫迄とは思は無つた

に……善々此上は拙者が氣を附て見廻らう程に卿も左樣に苦勞いたさぬが好い……』と原より實直律義なる賴母が詞に瀨平は深く賴みて立歸りヤット胸の痞を下したり。

斯て二三日を經て賴母は森家を見廻りたるに暫く表座敷に待せ置きやがて案內して新三郎に面會させたるに、別に怪しき體は無けれども新三郎の顏色は益々蒼白て元氣なく何か樣子を問尋ぬれば彌兵衞龍右衞門官六の三人が引取て返答なし新三郎が袖を引かへて詞寡なに挨拶させ萬づ內情を包み隱したる狀況なりけり。去れども賴母は強て問尋ぬべきにあらねば心を殘して歸宅したるに、其後三日ほど經て瀨平は息せき來りて賴母に逢ひ新三郎と再度入檻に相成て候ふとは注進したりけり。

○第十六回

川口賴母はおつ取り刀にて森家に赴き案內も乞はず突然に奧へ入り見廻りなりと喚はつて搜し見たれば、瀨平が注進に違ず新三郎は憐むべし再び檻の中に打入られて其外に附添ふものはお安一人のみなりけり賴母は活と怒り『コハ抑何に』と詰り問へば、鏡臺院は微醉機嫌にて自から出合て一應の挨拶に及び『……扨新三郎發狂に付き後見森佐兵衞連印を以て昨日御支配青山主馬樣へ申上げ檻に入れて候ふ……勿論出入醫師三輪幻齋の藥相用ひ居れば委細の事柄は主馬樣より御聞取下されよ』と執柄返し述たりけり、賴母は斯る手續を經たる上なれば復一言も咎むべき樣は無くスゴ〳〵と其座を立て歸つたるに、鏡臺院は彌兵衞等と顏見合せ嘲り笑て送つたり。是は先日一旦賴母に咎められて新三郎を檻より出しは出した

れども頼母が歸つたる後にて直に再び檻に入れ置き先より鏡臺院は主馬に密會して事情を詞巧に述べたるに素より鏡臺院には現を拔したる主馬なれば忽に欺かれて然らバ斯々の手續を致すべしと敎へ示したり。然るに其手續の未だ附かざる中に先日頼母の見廻に出會ひたれば周章て檻より出して逢はせたれど今度は最早憚る所なく斯は見せたるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

此は主馬が書院。堀縫殿も歸り、鈴木彌兵衞三輪幻齋などの引合人も歸したる後にて頼母と主馬との對座にて暫し互に默然たりしが、頼母は容を正して主馬に打向ひ『唯今までは拙者に於ても御支配頭たる尊上樣の御言條を立て心に不道理とは知りながらも堀縫殿を言伏て引取らせては御座りますが、扨折入て御意を得度ことが御座ります』と云へば、主馬は『ム、何事かは存せぬが承はらう』と答へたり、頼母は少し膝を進めて『別儀でも御座らぬが森新三郎が入檻一條は全く尊公樣の御無念なれば鏡臺院其外の者共が不心得を御諭わつて速に檻を出させます樣いたし度でござります『何と申さるゝ『アイヤ御騷なされますな、彼一條は全く尊公樣に於ては彼等が舌頭に乘せられて御居なさるで御座らうがナ……先第一には尊公樣には未だ一度も新三郎が體御見廻わつたに非ず、僅に組頭大平左門を見分として差遣はされたる丈のと、……シテ左門に於ては慥に發狂なりと見極て其旨を復命いたして御座るか、……モシ發

狂に相違なしと申しなば不肖ながら此頼母は前後三度ほど面會の上篤と樣子を見屆て新三郎は發狂に非ずと申します上からは是非の所左門と論判仕るで御座らう……サ、左門と雖どもヨモ發狂トやとは申しますまい。次に尊公樣には後見人の一人たる森左兵衛が調印の屆書これある上は承はり屆たるぞと縫殿へは御沙汰で御座つたか、拙者は得心仕らぬ、彼左兵衛は現に不隨の中氣にてドット床に就たる病人、それがどうして新三郎の發狂と申す事を存じ居りませうや、鏡臺院等に頼まれて書面に押たる盲判それが證據には相成ますまい。次には唯今御糺あつたる彌兵衛が申口と云ひ幻齋が診察の容體と云ひ此頼母が尋に對しては兎角曖昧なる申條、その上ならず過日拙者對談の節に多人數の家來共が動もすれば新三郎を引かゝめ返詞をさせぬ取計ひ一圓合點の往ざる擧動……去ながら縫殿は他向の者なれば彼へ對しては飽までも尊公樣の御趣意を貫き頼母十分に論破して閉口させては歸したれど、つく〴〵勘考いたす時は新三郎に對したる鏡臺院等が取扱ひ是には深き仔細が有る事と慥に見拔た拙者が眼力……是は仕たり、此頼母尊公樣が御同腹とは曾て申さぬ、唯々彼等が欺きたりと申すだけ、欺かるゝは君子の常、併し欺く可し罔べからずと申す本文も御座りますれば、改て尊公樣より神谷小作其外肝煎世話役の輩をば遣はされ一應事實見屆たる其上にて新三郎發狂全快いたしたれば此上は檻に入れ置に及ばず早々出し申すべしと御達あつて然るべく存じ奉る……否々敢て私の一存を申張では御座らぬが狂氣でも無いものを狂氣なりと申立て無法の處置をいたす輩、餘人は知らず頼母に於ては見脱す事は仕らぬ……強て此儀

御不承知とあるならば拙者とても武士の意地、御支配頭の御爲を存じて御意見申すは此場限り、其上は御目付衆は疎かなと若年寄衆の前へ出ても屹度言條立る覺悟……』尋常の世話役同様に御見違下さるなと辭を盡して論じたり

○第十七回

川口頼母が道理至極の議論に會ひ、青山主馬は初の程こそ抗辯も仕たりけれ、段々に論じ詰られて詞も塞り復言解べうもあらず、其上にまた諫を聽入ざる時には若年寄衆へも御直に申上兼まじき頼母が面魂なれば、主馬も頗る底氣味惡くありて『イヤ好く相分り申した、縫殿其外の面前では拙者の方を持ち飽までも手落で無き趣にて言張り竊に拙者へ意見を加へられたる貴殿の信切重々忝う御座る、然る上は貴殿の意見に從ひ兩三日を繼たらば組頭を見廻に遣し改めて新三郎事病氣全快なりと見屆たれば最早入檻に及ばず早々出し申す樣にと達示させるで御座らう』と我を折て述たりければ、頼母は平伏して『數ならぬ拙者が御爲を存じて申上たる愚存御聞入相成て悦ばしう存じます、何卒左樣御取計ある樣に願はしう御座ります、就ては先程より心ならずも御詞を返したる失敬の段は平に御用捨下さりませ』と答へ猶も詞をつがへて引取たり

主馬は楚山を梯にして例の如く金龍寺に於て密に鏡臺院に出會ひ『世話役の川口頼母が多分堀縫殿に語はれたるならん新三郎入檻の事に付き云々の議論を申張たれば兎も角も今度の所は其意に任せて一應檻

より出すべし然る上にて取計方は更に工夫を運らすべし』と説きたれば。　鏡臺院も左らばとて其意に從ひけり。　由て主馬は二三日を經て神谷小作に川口賴母を差添せ森新三郎見廻の上にて病氣全快出檻を申渡し原の如くに成たりければ、堀縫殿も是にて滿足し松村瀨平は蔭ながら悅びて賴母が信切を謝したりけり

扨も主馬鏡臺院の兩人は堀縫殿と川口賴母が妨なす事は知たれど、松村瀨平が竊に娘のお安と氣脈を通ぜて線を引くとは淺果にも些とも心附ず、先づ其邪魔を拂ふ事に手を著べしとて主馬は故意と賴母を呼近けて譽そやし然るべき勤場所に推擧すべしと申諭したれば、賴母は此輕薄老夫の主馬が何を言やらんと心に嘲りて程よく答へ敢て當にもせざりしにコハ如何に、不思議なるかな主馬が格別の周旋にて其後程なく新御番には仰付られたり。　主馬は是にて我方の妨は除きたれど猶森家に堀縫殿と云へる後見あつては己が俗根ほれ込だる鏡臺院が望を達するに邪魔なれば此後見を表面に止させては萬事に都合あしかるべしと方略をぞ運らしたる。　尤も前にも述たる如く鏡臺院が色情を以て主馬を籠絡だる事は彌兵衞龍右衞門こそ知たれ（男寵の安六も内々は夫と少しは氣取たれど買はれたる身の悲しさには指をくわへて知らぬ顏して居たるなり）堀縫殿松村瀨平は勿論、邸内の者たりとも此秘密を知らしめされば、正議黨の方にては陰謀の敗露るゝ迄は眞さかに主馬が黑幕とは夢にも知らざりしなり。　押領黨の方にても亦前に述たる如く專ら堀縫殿をのみ當の邪魔者なりと心得て策略を運らしたれども彼忠臣の松村瀨平

が其黒幕に隱れて娘お安および五菜男の喜助が其間諜なりとは更に氣附ざりしなり。其仔細を如何と云ふに瀨平が再度森家より暇と成たる後密かに縫殿と謀り故意と瀨平は堀の邸に押掛て合力を賴み縫殿も亦故意と素氣なく拒絶して其爲に一塲の口論を惹起し堀家の家來大勢にて瀨平を門外に引ずり出して追拂ひ縫殿より其趣を内々親類一門へ通知して苦肉の謀計を行ひ其後は瀨平が縫殿に面會するにも常に家中の者にも知れざる樣に成したるなれば、鏡臺院等も此謀計に欺かれて由斷したるなり

斯て四月上旬に至り青山主馬は『申談する儀有之候ふ間後見人同道にて明朝拙者方へ罷出らるべし但新三郎名代は相成らず』と云ふ旨の公達をば森新三郎へ宛て成したりけり。鏡臺院等ハ夫と心中に覺つたれど、新三郎はドめ外樣の家來は云ふに及ばず堀縫殿も森左兵衞も何事ならんと共に憂たりけるが、扨しもあるべき事ならねば翌日(四月七日)森新三郎堀縫殿森左兵衞（是は當人病氣に付き親類七左衞門名代）これに鈴木彌兵衞齋藤龍右衞門の兩人附添て青山主馬が邸へ罷向ひたり。

○第十八回

青山主馬は森新三郎堀縫殿森七左衞門(森佐兵衞の名代)に向ひ『森新三郎事去年三月實父半左衞門病死家督相續の砌り病氣の趣に付き暫くの間親類一門にて後見の儀を承り屆けたり、然るに其後新三郎病氣相募り聊か逆上の趣を以て取締の爲とあつて當分入檻いたさせ候ふ旨後見人森左兵衞幷に家族家來共連印を以て屆出で即ち其意に任せ承り屆たる儀なり、去ども病氣にも致せ當主たる新三郎を長らく

入檻せしむると公儀へ對し奉つて其恐あり殊には後見人堀縫殿より內々申立の趣もあれば猶其後見廻いたさせ篤と實地を撿分せしめたる所、逆上は全く平愈に相違なきに依て直に出檻を相達したり。既に斯く平愈本腹の上は最早後見人には及ばさる儀なり、一體後見人は當主幼年か若くは人事不省の病氣に限る譯合なるに、現に新三郎は當年十八歲にて且つ病氣にも非ざる上は更に後見人を要すべき次第に非ず（幕府の士分は十七歲を以て丁年と定めたり）是に由て今日改めて後見人を相止め以來は新三郎自から家事を治め公邊の御用をも差支なく相勤むべし左樣心得られよ』と嚴に申達したり。

新三郎ハ別に答ふる旨も無くハッと首を下て一禮したるに、縫殿ハ畏て『御達の趣一應の御理には候へども新三郎事十八歲とハ云へ御覽の如く虛弱の質にて一人にてハ御奉公筋ハ勿論家事の取行も如何と案じられ候へば拙者共に限らず誰にも致せ猶當分の間は後見人を置き候ふ儀御聞屆下され度』と云ハせも果ず、主馬ハ居丈高に成て『控へさッせェ、當人虛弱にて公邊の御用向ハ勿論家事の取行も如何と案じらるゝ者に何で家督を願ハッした、家督以來既に一年それを承ハり置たるハ此主馬が新三郎へ對したる格別の厚意ソレニ何ぞや小普請支配たる此主馬に向つて後見人たる貴殿の口からして實ハ當人斯々で御座ると云ハるゝ上は次第に寄てハ聞捨にハ出來ぬ、此旨を若年寄衆へ進達なさは不便や森新三郎ハ御奉公相成らざる者と成て知行召放され數代連綿たる家柄も斷絕せねば相成り申さぬぞ、尤も拙者に於ては是迄とても其等の邊を差含で取扱つては居たものゝ今日にもあれ御目附より新三郎云々ハ如何で御座ると問合せあ

る其時には何と返答いたし申さう、ジヤに依て新三郎一家の爲を思ひ右樣相違申すのに彼是と違背の口上ハ甚だ以て其意を得ぬ、併し森家を斷絶させ度と云ふ趣意にて左樣申張るゝか『イヤ中々以て『左樣で無くば固より異存は無い筈だらう『サア夫は『ヱヽ森新三郎後見人堀縫殿御請の有無ハ如何で御座る』と詞鋭く問詰られ縫殿ハ礑と當惑し森家の浮沈ハ返答次第で新三郎が身の上に降掛つたる一大事と胸を定めて『ハッ恐入て御座る唯今申上たるは拙者が踈忽、新三郎へ御達の趣謹で御受仕ります』と答ふれば、主馬ハ小鼻を動かして』さう無ては相成まい然らば其趣直樣書面にて差出さッせヱ』と達したり。　夫にて後見人ハ今日限り相止め候ふと云へる趣意の書面を新三郎縫殿左兵衛(名代)連印にて主馬へ差出して引退きたり。

堀殿縫ハ歸宅の上ひそかに松村瀬平を招きて『今日斯々の次第なり夫に付ても青山主馬が表面の理窟を眞甲に翳して我等が後見を止めさせたるは是ぞ必らず仔細のあると先頃卿が暇の事と云ひ新三郎殿入檻の事と云ひ若や彼奴め鏡臺院等に語らはれたるには非ざるか』と初めて心附き『我等後見を止たるは煩累なくて都合なれど去とて森家の安危を傍觀するも不都合なり、此上は親族寄合をも開くべき、更に進で森家の內證にも干渉すべき如何はすべき』と瀬平と倶に種々と思案を凝して居たる所に『唯今森新三郎樣方より鈴木彌兵衛御使者として罷出で御逢を願ひます』と次の間より唐紙越に知らせたり。

○第十九回

鈴木彌兵衛は肩衣の襟を正し兩手を突て慇懃に挨拶を演べ畢りて申しけるは新三郎樣より殿樣へ申上へよとの御口上に御座ります、新三郎家督以來永々の間其許樣御後見成下され御蔭を以て公私の都合宜敷御厚情の段口筆に盡し難く重疊難有仕合に存じ奉る何れ新三郎も罷出で親類一門へも吹聽仕り改て篤く御禮申上る心得に御座ります隨て今日御同樣へ青山主馬殿方に於て申渡されたる趣に依り今日よりして公邊向ハ申すに及ばず家事向萬端新三郎自分執行ひますれば兼て其許樣へ御預け仕つたる森家知行安堵の御朱印並に新三郎實印とも只今是なる彌兵衛へ御渡し下置れ度尤も請取書は新三郎華押いたし彌兵衛へ持參いたさせて御座ります委細は此書面に相認めましたれば此段御承知下されたく願ひますとの御儀に御座ります』と使者の口上爽に述べ畢つて持參の書狀を恭しく縫殿が前に差出し懐中なせる請取書をも出して見せたりけり。縫殿は彌兵衛が口上を聞き書狀を披き見れば新三郎より縫殿へ宛たる直書にて敢て代筆とも見えず又請取書の華押も正しく相違なかりければ、心中にて扨ハ鐵臺院等が早くも惡計を運らし新三郎に迫り欺きて此書狀及び受取書をも書かせたるにこそあれ、浮と相渡しては新三郎の爲に宜しからじと思ひたれば彌兵衛に打向ひ『新三郎殿の御書面並に御口上の趣委細承知は仕たが、御朱印並に御實印は親類一門の立會にて預つたる大切の御品なれば其立會の上ならでは御渡し申難し、夫に付ては此方よりも使を出し申すべければ新三郎殿よりも御使を以て早々親類一門の寄合を催されて然るべし、其座へ御預の御品を自分持參いたすで有う、且つ右の御預に付ては同じ後見

たりし森左兵衞殿も立會れたる事なれば是へ斷なくてムザと御渡し申さんも如何あるべき歟此旨新三郎殿へ申上られよ』と答へたり。

彌兵衞は兼て斯る返詞もあらんと期して豫じめ相談を凝らし用意をも成したる事なれば更に懷中より森左兵衞が返詞の一通を取出して縫殿が前へ差出して『御意の趣拜聽仕て御座ります、新三郎樣に於かせられても其邊を慮らせ即ち左兵衞樣方へは使者を以て此趣を申入に相成りましたるに此通り左兵衞樣には御異存無之との御返詞に御座りますれば此上の御打合ハ及ぶまい歟と存じ上ます、將又御實印ハ今日よりして無くて相叶はざる御品、殊に御朱印ハ森家に取ては此上も無き大切の重寶片時たりとも他方へ預け置かるべき御品に御座りませぬ縫殿樣には御親類御一門御立會の上との御意に御座りますが畢竟殿樣御預と相成たる御後見ゆゑの御事にて新三郎樣より御後見に御預けと申す其譯合、然るに其御後見を止させられたる上は右の御品々御預け申すも御預りに相成り居るも兩ながら公邊に對して憚りある儀と存じて御渡を望まれて御座ります、但し當人たる新三郎樣の詞を御信用なく御親類御一門御立會の上に無之てハ御渡に相成らぬとの尊慮に御座りますならば其趣唯今御返書に御認め下され度、新三郎樣に於て的面差支も御座りますれば直に其趣を御支配頭青山主馬樣へ御屆申上げ時宜に寄てハ若年寄樣へも御進達をも願はれるで御座りませう……』と根強く掛合たれば。流石の縫殿も固より否むべき樣も無く心中には憤を含みたれども詮方なければ『委細承知いたした、然らば右御預りの御品ハ

自分即刻新三郎殿方へ持参いたすであらう程に親類一門皆々相招き置かるゝ様に取計ひ置かれよ『ハッ殿様には態々御自身にて御持参下されます段有がたき仕合に御座りますれば新三郎様には御尊來を待受らるゝで御座りませう、尤も御親類方御招寄の儀は同様申上るで御座りませうが何と申されますやら彌兵衞に於ては豫め推量の御受は仕り兼ます』と拔目なく申述て歸宅したりけり

第二十回

去程に堀縫殿は同日の夕方（四月五日）森新三郎より預つたる御朱印並に實印を自から持参して森の邸へ行向ひたるにコハ何に親類一門の輩は一人も居合さず、何故に招き寄せざる哉と詰り問へば、新三郎の傍には鏡臺院彌兵衞龍右衞門官六等附添ひ居て新三郎が御預け申置たる御品を新三郎が受取るに何も親類一門の立會を要する廉なければ初より案内は仕らず假令貴殿様に於て御招き寄あるとも新三郎に於ては迷惑仕れば御斷申上ると言放ち、夫にて達て縫殿が渡さぬと云ふならば公邊へ申立て縫殿を罪に取て落さんずる計慮とは左までの智恵者と云ふにもあらざる縫殿が眼にも透通つて見えたれば、縫殿は看々是を渡しなば森家は此惡徒等が手に押領せられて新三郎の身の安危にも拘るべしとは知つたれども、表面の條理に向ては爭ふべきにあらざれば怒を堪へて御朱印および實印を新三郎へ渡し袂を拂つて歸つたり。

斯て森家は堀縫殿とは義絶の様に成りければ鏡臺院等は是にて邪魔物を拂ひたる心地して大に主馬が取

扱を喜び合ひ楚山を以て贈賄などして謝意を述べ内々にては鏡臺院が毎月五六回くらひ金龍寺へ佛參を假托て主馬に密會なして其慾を遂げしむるが常なりければ主馬は年にも恥ず鏡臺院が色香に現を拔して不義の淫樂に清淨の方丈を穢し鏡臺院の掌に弄ばるゝをば此上も無き樂とは仕たりけり。鏡臺院は心に一物あるゆゑに主馬が云ふ儘に其身を任せ彌兵衞龍右衞門の兩人をも漸々に其密會の席に列らせ何にもして當主の新三郎を押方附て實子の傳吉に森家を相續させんと謀つたるに、主馬は素より疾に承知したる事なれば其事は云々せよ此儀は斯々致せよと惡計の綱を引く程に一味の輩は益々力を得て其巧夫に他事なかりけり(但し男寵の安六へは鏡臺院も憚る心ありと見えて前にも云へる如く主馬との密會を秘たれば安六も知らぬ顔して居たり、又主馬は安六と云へる色男ありとは夢にも知らざれば鏡臺院は我一人に情を運べる女なりと一概に思ひて鼻毛を伸して居たるなり)去ども親類一門の手前と云ひ公邊の御沙汰と云ひ輕々しく手を下すべきに非ざれば急速に事を行ひては敗綻の基なり緩々と時機を計つて行ふべしと其來るを俟けるぞ恐ろしき。

扨も新三郎を除くには如何すべきと今日しも鏡臺院が部屋に彌兵衞龍右衞門おとめおきち及び安六官助を招き寄せて評議を盡したるに……さればで御座る薄鈍き性質とは云へ當年正に十八歳色情の方は中々天晴の生達と見えて動ともすれば近習の若侍を相手にしての女話し『左樣々々既に此程中より侍女のお安を捕らへて頻に口說て御座つたが『ムヽ、シテ安は言ふ事を聞た樣子かェ『處が御聞遊ばせ、アノ

お安が歳ハ今年が十六で豆もはぢける年頃なれど御覽の如き頓痴奇ゆゑ色情とては些とも無く青草喰た馬見た樣にビンシャンと跳付て聞所の段では御座りませぬ『ツウ〳〵そう云へば御前樣お聞遊ばせ一昨日も安が新座敷で彼鈍樣を（新三郎の綽名）突飛して、氣障な殿樣だヨ、と大きな聲で呶鳴て御納戸の方へ逃て來ましたのは餘程面白い風體で御座りましたよ『ホ……ホそりや可笑かつたらうよ、そして鈍殿ハどう仕さつした、腹でも立たのかヱ『腹ても立れば少ハ男らしう御座りますが、彼馬鹿女に突飛されて頭をゴツンと柱に打附てベタリと椽側に尻餅を搗て居ながら起も上らずに頭をサスリ〳〵して安の後姿を見て酷い事をすると云ふ顏付で大きな口を明て居さつしやりました所はトント赤本に繪てある馬鹿殿樣の三太郎丸出して御座りましたヨハ、、、ア『ハ、、、ア實に困りますよ、夫では私安ハ迚も手に合はず、又合た所が邪魔には成とも爲には成りませんゆゑ、寧そ連出して深川か吉原で女狂をさせちやアどうで御座りませう『ム、夫で放蕩漢に成れば此方の注文通だが、アノ鈍殿が直にそう成て呉るだらうか『ハ、、アそりや成ますのは屹度受合、憚ながら私共が手揃で仕込だ日には忽ち放蕩の印可皆傳にして御覽に入ますヲ『アラ好ないヨ、安六ハそんな中には入てハ成ませんよ、夫から彌兵衞も龍右衞門も成ませんヨ、チーおとめおきち、折角眞面に成たものが又それで遊癖が附て堪るものかヲ『ホンニ御前樣の仰しやる通り『コリヤ外の者に仰しやり附て下さる樣にお願申上ます『成程〳〵然らば其放蕩仕込方ハ此官助が又三文之進なども申合せ物の見事に仕立ませうが……夫に付ても彌兵衞樣

其御入用筋ハ『ハテ出して遣るワ……

○第廿一回

『親類中で嚴格家の堀縫殿ハ義絶同様で寄付かず、森左兵衛ハ愚頭の上の中氣病、その外の一門ハ大抵心持を惡くして自から疎遠に成たれば、最早憚る所は無ぞ、然らば當主の鈍殿を（新三郎）放蕩者に仕込や仕込め、併し餘り許多の金を消はせずに成たけ其放蕩が世間の目に附く樣に派手にせよ、遊女に限らず藝妓でも矢場の娘や茶屋女相手を撰ばず手出をさせよ、信切者をば取持な、獏連ものをば周旋し彼奴が心を蕩かせよ、酒に醉れせて居續させよ……』と差圖をすれば、畏つたと平山官助は順風に帆を揚げ尻馬に鞭を加て當主森新三郎を連出して、初ハ佛參文武の稽古それから花見に月見の宴一杯機嫌で狹斜見物と順序を踏で仕込だるに、新三郎は平素の薄鈍には似もやらず其修行に勉強して生達の速なるは特別優等非常の才器いまだ三月だに立ざるに教師の官助も舌を捲て『アッ後世恐るべしでげス』と驚く許の遊蕩得業生とは成たりけり、尤も彌兵衛は兼て牒し合せたる事なれば新三郎が要求をも俟たず殿樣御手許金とて常に幾許の金子をば内々にて新三郎に渡し、偶々新三郎が彌兵衛を呼で内談の口を切る事あれバ直に其機を察して二言と云はせず委細承知と持出して『サア〳〵御消あそばせ尊君の御金で御座りますもの何程でも差上ます』と云はぬ計に支出れば、若氣の新三郎は先後の分別も無く彼奴等が己を仆さん謀計ありとは露知らず好色の面白さに官助および文之進を初め彼又三の如き一時は手打にせん

と迄に思ひたる不屆者さへ其酒席の便口の興あるが氣に入て伴に召連れ果は稽古仲間の惡朋友を誘ひつ誘はれつして遊び戯れ暮したるが、其中に新吉原なる京町にて其頃全盛と知られたる松葉屋の丁山が許へ馴染そめて通ひ遂には色にはなまじ連は邪魔と云ふ氣になり毎夜の樣に七軒町より山下通り坂本大音寺前の路を經て吉原へは赴きたり。

話頭一轉て松村瀬平は浪々の身ながらも深く森家の事をのみ案じ煩ひ堀縫殿および川口頼母を力にして何とぞ新三郎が身の上の安泰を謀らんと望みたりしに青山主馬が計ひにて頼母は御番入となり縫殿も亦後見を罷られて其以來は義絶の樣に成たれば今は頼の綱も切果て誰をたよるべき方便も無く獨り心を苦しめて居たる所に、老母の刀自は夏の初より腰の痛を覺えて藥用の効も見えず床にどッと打臥したれば元來孝心あつき瀬平の事なれば手習子供に敎を授くる間合には撫摩りして看病に怠なく己の食を減じて母の治療介抱に心を盡し夜も碌々は寐ざりけり、其精神の達てや秋の差入より老母は漸々痛も去りて先づ自分の用事だけは便ずる樣に成たれば、瀬平も大きに悦びて益々介抱を勉めたりける。然るに八月の央ごろより瀬平の左眼俄に疼み出し四五日の後には兩眼とも腫塞がりて皆目見えず成り其爲に弟子に讀書算盤を敎ふる事も成かねて休業の體と成りぬ、されども世間に鬼は無しと云へる喩の如く手習子供の父兄を初め近所合壁の輩は平生より瀬平が實直にて弟子を信切に敎へ町内の人々へも實意を盡して交り加ふるに老母へ孝養の勝れたるを知つたればいつと無く孝行師匠と名を呼びて今の不幸を氣の毒

に思ひて或は衣食の料を贈り或は無盡など催して見繼ける程に其情にて瀬平も老母も僅に飢寒の苦みを免れたり。斯て九月の中旬にも成ければ眼病も稍々薄らぎてカツ〳〵歩行も出來る樣に成たれば或日の事とて瀬平は夕方より田中の知人の方へ用事ありて赴き夜の戌の刻ごろに（午後八時過）大音寺前へ差掛つたるに、折助體の惡漢六七人にて一個の若武士を取圍みて喧嘩を吹掛けアハヤ無體の手籠に及ばんずる騷に出會ひたり。義俠の瀬平は憎くき仲間共の振舞やと怒りつゝソト暗陰より月明にすかして見たりければ、眼病ながらも故主の面は爭で見誤るべき紛ふ方なく其武士は森新三郎にてぞありける。

○第廿二回

瀬平はハツと打驚き胸打騷ぎて『アナ淺ましの御有樣やな、先頃より娘お安が文通にて若殿新三郎樣には頃日女狂に心を奪はれ玉ひて兎角夜泊など遊ばさるゝ由を屢告げ來り又五菜の喜助も其事を物語りたれば、何にもして御心を改めさせ玉ふ樣に致すべき功夫は無きやと案じ居たるに、扨は御家來をも召連られで此物騷の往來を獨立にて歩行かせ玉ふか勿體なし』と心に諾き急き袂の中より汚れたる手拭を取出して覆面なし其上に編笠を打冠りて大股に歩行て彼の惡漢等が中に割て入り有無をも言はず新三郎を後に圍ひ右の拳を擧ると見えしが直先に進んだる折助が左の横面骨も挫けよと張飛したり、剛力の瀬平が手練の拳に不意を撃たれて何かは堪るべき折助はアツと叫びて右の方へ打仆され大溝の中へドンブとこそは沈んだれ。『奴輩何奴なれば邪魔ひろぐか』と云ふ儘に命知らずの折助共腰の木刀振翳して打て

掛るを物ともせず其木刀を奪ひ取り當るを幸ひ微塵になれと打て退れば、頭かッちりア痛して、蹵々踹く〳〵ヒヤりてヒヤりて張子の達磨でコロ〳〵〳〵てりや堪らぬと散々に後をも見ずして逃にけり。新三郎ハ危き難を助けられたる其人ハ瀬平なりとハ更に意附かず鄭寧に首を下げて『思ひ寄らざる狼籍者に出逢ひ旣に難儀に及ぶ所を御救ひ下されて有がたう存じます、貴所様ハ何と仰しやる御方で御座りますか自分事ハ下谷七軒町に住居いたす……』と名乘り掛るを瀬平ハ周章て造り聲して押止め『アイヤ御姓名承はるに及ばぬ、拙者も亦仔細あつて名乘は申さぬ、難儀を救ふハ武士の常あへて御禮に及ばぬと、シテ是より何方へ御越召さるか』と問ひ掛たるは、新三郎が遊び先突留んとの底心、新三郎は其とは知らねど流石明ら樣に言兼て『左樣、實は所用あつて此邊へ取越し是より歸宅いたす所で御座ります』と言紛らせば『ハヽヽア七軒町へ歸る御方が何で坂本の方から御出召された、イヤ御隱し成さるに及び申さぬ何方へなりとも御越なさるが宜しいが、併し唯今の惡者とも御歸路に待伏して再び狼籍なさんも知れず、若し吉原の方へ御出なら幸ひ拙者も山谷まで參るもの御同道いたして進せませう』と早くも其と推したれば、新三郎ハ是幸と打笑び『然らば御詞にあまへ御伴いたすで御座りませう』と答へたり。瀬平ハ左てこそと心に悟つたれば詞寡に打連て衣紋坂まで來り此にて暇を告たるに、新三郎は『せめて御禮の驗まで御酒一猷差上たければ懇意の茶屋まで御運びを』と勸むれども、此方は强て斷はつて袖を拂つて立去つたり。斯て瀬平ハ編笠を脫捨て取て返し新三郎が後姿を目當に附たるに、新三郎は仲の

町の森田屋に立寄りしが、程なく藝者幇間を引從がへ看板提灯點させて松葉屋へは登つたりけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『妾に逢度と云て內證へ懸つて來なましたは貴郎ざますか』、妾が其丁山でござりいす、見ればついしか逢た事も無い源さん（往時吉原にて武士を呼だる詞）ざんすが、何ぞ妾に用でもあつて來なましたか』となまめきたる口詞にて尋ぬれば、瀨平は會釋して『貴孃が丁山殿で御座るか、初めて御意を得ます、拙者は馬喰町一丁目に住居いたし手習師匠を渡世にいたす浪人松村瀨平と申すもの、御見知り下され度願ひます、實は貴娘へ初めて御目に掛り折入て御賴申度と申すは甚だ無遠慮には御座れども是ある御主人へも唯今概畧の次第打明て御話いたせしに、左樣なる次第とあらば貴娘へ篤と話を致させよと情ある御主人の御承諾、何分ともに御聞取下さる樣に願ひます』と口を啓けば、丁山は曾に聞馴ざる堅氣の武士の切口上その中に思ひ當れる樣子にて『モシヱ貴郎、お詞の中ざますが、馬喰町で松村と云ふ手習の御師匠さんなら、アノ孝行師匠と云ふのは貴郎ざますか』と突然に問掛れば、瀨平は少し面を赤めて『イヤ何も別段に孝行と申すでも御座らぬが、一人の老母に朝夕仕へまするのを近所の方々が御覽あつて左樣に仰せらるゝとの事、實は其孝行も十分には出來ませいで面目ない儀に御座ります』『ムヽそんなら貴郎の御弟子に荒物屋の吉兵衞さんの息子で吉之助と云ふ十四ばかりの子が有ますで御座んせう』『何にも

荒物屋の悴吉之助と云ふ者が御座る、彼は幼少にして母に分れ父の吉兵衛は打續いたる不幸にて身體頗る不如意で罷在るに、其吉之助は甲斐々々しくも信切て父に仕へ營業を助け長者も及ばぬ立働き、拙者とても見るにつけ我身に思ひ比へては不便の餘り夜々宅へ呼寄て手習算盤を教へ遣はして御座る、併し貴郎にはどうして其を御存知で御座るな『知らいで成いせうか、其吉之助は妾の親身の弟ざます父様からして貴郎の御信切陰ながら聞いして手を合せて拜で居いした、ホンニ〳〵有がたうざます、その御師匠様の御頼とはどの様な事ざます、妾の身に叶ふ事なら何なりとも聞いせう、サア遠慮なしに寛くりとしお咄なまし、モシ旦那様この御師匠さんを妾の部屋にお連申し度ざりいすが……有がとう御座んす、……サア御師匠様妾の部屋に御出なましと樓上へ誘ひたり。

○廿三回

松村瀬平は松葉屋の丁山が信切なる詞に力を得て森新三郎が身の上の概畧を語り『……右の通の譯柄ゆえ御家にては殿様(新三郎)を放埓に仕込み其廉を以て押込隠居に成し素性も知れざる御次男を御當主に立て様と云ふ惡漢どもが奥表と手を組で巧に巧を盡す最中なれば殿様には御用心の上にも御用心が肝腎其に何ぞや日毎夜毎の御遊興は薪を負て火に飛込み石を懐て淵に入ると云ふ諺にも同様で御座る、既に一昨夜大音寺前にて仲間共が狼籍も彼惡漢等が奸計にて殿様の御身に傷を附け其を以て公邊の御不首尾を招かせんとの手段とは慥に其と覺つて御座る、就ては貴娘と殿様の御間柄はどう云ふ深い中かと存せ

ぬが、御先祖武藏守樣より數代連綿と嫡々御相傳の森の御家新三郎樣の御代に至つて斷絶と相成るか然らずば他人に押領せらるゝか何とも以て嘆かはしければ何と當分のうち殿樣の御足が此吉原を遠のく樣に仕ては下さるまいか、其中に御家の治さへ附く上は不肖ながら此瀬平も歸參して貴娘の父御吉兵衞殿と相談なし貴娘の身をも樂になし殿樣へなり誰へなり望に任せて御有附せ申すで御座らう、此の道理を聞分て思切て御工夫を御附なされて下さるやう折入て御頼み申上ます』と勇士と知られし松村瀬平忠義の心の一筋に兩眼より翻るゝ涙と諸共に切なる思を述たりけり。　丁山も共に涙に暮れて居たりしが稍あつて瀬平に打向ひて其身が二月ほど以前より新三郎に狎馴染て今は互に憎からぬ中と成たる事を述べ『去ながら我身に取ては實の弟が大恩受たる御師匠樣殊に老年たる父まで信切の御世話を蒙つたる義理ある御方その御頼とある上は御歴々の御家に係る騷動、いかに浮川竹の流の身でも其を餘所に見る事は致しますまい、思切にくい中なれど當分の間は御頼に任せて新三郎樣の事をフッツと思ひ切り今晩にも御出があるならば直に御邸へ御歸りある樣に及ばずながら御意見を申上げ御聞入なくば情なく接遇て御足を遠ざけ其でもし外々の樓へ御登なされたら新造禿に見張をさせ茶屋を呼付け談じ付け其邪魔するのが廓の作法、どう／＼五丁町へ一足でも踏込まッしやる事が出來ぬ樣に屹度妾が致しませう、とは云へ御家が治まつたら其時こそは唯今の御詞を必らず御忘れ下さるな』と念を押て云ひければ。　瀬平は悦びの餘りにハッと首を下て『アッ流石は此吉原にて多くの人に立られたる丁山どの、拙者が無理な頼

筋御聞入下されて貴娘の御信切は此瀬平が心魂に徹して有がたう御座ります、君傾城ハ只管に人の心をたぶらかす者と計り今日の今まで一途に存じ罷在つたに、實に貴娘が義理も情も酌分て天晴の御得心、その上に拙者に力を添て下さる御厚意の御禮ハ千萬詞に盡されませぬ、御家さへ治り附ば御身の上ハ必らず好あに計ひませう、又御父御弟御の事は及ばずながら此御恩返に拙者が力の及ばん丈は御世話を致すで御座らう程に憚ながら御心強く思召されたが宜しう御座る……』と述て猶も細々と頼み置きて歸つたり。

去程に新三郎ハ丁山が許に例の如く通ひ來りけるに、丁山は平常の如く接遇て座敷の引るを俟ち對座になつたれば、新三郎が身の上の放蕩を諫めたり。新三郎ハ其信切の志を感じて猶も戀慕の彌増てや愈々繁く通ひければ、丁山も今ハ是非なしと心を勵して情なく仕向けたるに、新三郎は礑と怒りて案の如く外の樓に登りたり。丁山ハ夫と牒し知りて新造禿等をば大門口に見張させ或は茶屋を附廻させて夕込またハ朝歸を引捕へて頻に難題もて迷惑させたれば、果して新三郎は吉原の通路を絶たりけり。瀬平は丁山が音信にて斯と知り偖ハ丁山の厚意にて新三郎樣には放蕩を止させ玉ひつるか忝なやと稍々憂の思を寛げしに、十月の末に至りて娘お安が文通および五桒男の喜助が報知にて新三郎が此月の初方より官助又三が勸にて深川へ河岸を變へ藝妓の粂次と云へるに惑溺れ彼丁山が許へ通ひし時よりハ更に一層烈しく成つたりとは知つたりけり。

○第廿四回

深川の粂次と云へるは深川仲町にて人に知られたる浮氣もの、大獏連、ことし廿三歳にて二度も三度も再勤しては落籍み落籍でハ再勤し海に三年川に三年修行に修行を重ねたる古猫の妖魔、深川風の粋な中にて歳に似合ハぬ派手造り一寸見には十八九の若妓とも見ゆるゆゑ厚化粧の粂次とも又は萬年新造の粂次とも異名を呼ばれたる藝妓なれば、何條事を仕損ずべき、官助が吹込だる毒氣をば委細承知と呑込で新三郎を注文の如く面白く綾なして接遇したり。彼の野暮な廓の吉原で見識高い名妓に引替て意氣な世界の藝妓買また一段の妙味ドやと新三郎は有頂天になつて深川へぞ通ひ詰たる。

松村瀬平は此狀況を探り知つて去ば彼粂次に面會して頼まばやと思ひしが、否々丁山こそ不思議の由緒にて我頼を納得したりしかども、粂次と云るハ聞ゆる惡性もの、由なれば、迚も承知ハ致すまド、兎やせん角やせんと思案に餘り同志の佐久間定之進が本所割下水に浪宅なせるを訪問て此事を語り出たるに、定之進は暫し考て膝をハタと打て『思ひ出したりイヤ其粂次と申すハもと御邸(森家)に勤めたる御存の高倉小左衞門が娘のお粂がと、其ならば彼が幼少の頃より一ッ御長屋で育ち懷抱を致したる某ゆゑ折入て頼だら眞逆に管なくは斷り申まい……』と受込で夫より粂次を尋ね徐々と新三郎が事を話し出して頼みたるに、初の程は粂次も猫撫聲して程よく返答して定之進を返したれども、更に其效の見えざれば再三定之進が足を運んで頼みけるを粂次は煩さしとて魔物の本性を顯はし鼻にて接らひ、御召縮緬捧縞の

廣袖に緋博多の平括をクル〳〵と巻き長火鉢の側に立膝して長羅宇の煙管にて薄まゆを燻らせながら『……オイ佐久間さんモウ宜加減に仕て貰はうせ、大抵に煩さいじやア無エか、何も妾が彼の軟漢で癇癪持の新三郎さんに惚て居てお出〳〵を極るのじやアありやア仕ないワ、少し自惚かは知ら無エが此なお多福の妾でも緣は異なもの乙なもので好とか惡ィとか思つて態々根津くんだりからエッチラホッチラと通て來て下さるもの、眞更すげ無くもされなからうじやア有ませんか、お負に玉祝儀の其上に枕金やら鼻紙代やらソレ相應に心附を仕て下さる御客、それを振附ちやア第一お金の罰が當つて藝妓冥利が盡ると云ふもの、それ位ヱの事は貴君だつてマダ毫る年ドやア無し分つて居やうドやア無いかチ、……ハイお氣の毒だが思ひ切ませんチ、惚た腫た計じやア無エヨ當世流行の慾得づくでも罷わけにやア往ませんワ、夫とも貴君が妾の虫が納まるだけの御金をおくんなさりやア其はソレ讀と歌で隨分承知も仕ましやうが、夫やア失禮だが右から左にハイ夫とは出來ア仕まいが、……何の面白も無い妾だつて廣立の新妓じやア有まいしアンナ生白いノッペリした芝居の馬鹿殿様みた様な人に惚るものかチ、一皮剝て云やア金づくサ……ヱヽ罷ておくれ、昔は昔今は今、義理も糸瓜もあるものかィ……御金の算段が出來たら妾の云ふだけ三百兩耳を揃へて持てお出ヨ、いつ何時でも奇麗サッパリと彼長芋様と切て上やうヨ、夫とも貴君が彼是と野暮を云て乙に邪魔でも仕て御覽、京四で（駕籠の名）御邸へ乗込で玄關に駕籠を横付にするか又いつそ出る所へ出て立派に埒を明て見せるヨ、其時に成て後悔お仕で無いヨ……オイ奴（試

補の備）糠を包で湯に往く支度を仕て置な……チー佐久間さん妾や今日は是から御約束で御座敷に出にやァ成りませんから御免なさいョ、……オヤ御歸り、左樣なら』と送り出して表の格子戸をピッシャリと締て『一昨日お出で』故と聞ゆる樣に嘲つて『オイ鹽を振て呉な、エヽ朝ッぱらから緣起が惡イ』とは罵しつたり。

定之進は粂次が雜口に臟腑も煮立ばかりに怒りて既に鐵拳を加へんとは思ひしが、左ありては森家の御名義に係る大事と堪へ忍びてスゴ〳〵と引取り其由を瀨平に告げ更に大塚廣右衞門が芝宇田川町に浪宅なせるを呼迎て倶に評議を凝らしたる心の底ぞ賴もしき。

○第廿五回

森新三郎が七軒町より深川への通路は和泉橋か柳橋まで步行にて其より船にて赴くをば常とせり。扨も鎭臺院去る九月に彌兵衞が思立に同意なし密に近邊の惡徒折助共を語らはせ大音寺前にて新三郎に喧嘩を仕掛させ夫を落度に押込隱居に成さんものと謀つたりしに思ひ掛なき侍の何者とも知れざるが救に出て彼の惡徒共を散々に打懲したるにて其甲斐も無かりければ、再び此手段を行はんと考へしに、其以來は新三郎も途中の狼籍に怖れて獨步行をせず官助又三文之進の中をば必らず二人か三人供に連て出往ければ此策も行はれず、此上は彼の粂次の手にて慊し入世間の惡評を立さするの外なしと一途に其のみ計たるぞ恐しき。

頃は十二月七日の夜の事なりしが、新三郎は官助又三の兩人に供させ仲間に忍提灯もたせて先に立たせ今夜は柳橋より船に乘らんとて和泉橋の北詰より左に折れ佐久間町の河岸へぞ掛たる。東西に渡つたる路なれば月影暗く人通とても絶たる所に南側なる河岸藏の隙間より忽然と顯れ出たる二人の曲者手拭目深く覆面なし尻引端折て腰には大小を落差に成し手々に木劔を携たるが飛鳥の如くに躍り出て仲間が提灯持たる右の手を一度に礑と打掛くれば、仲間はアッと驚き提灯そのまゝ地に落し雲を霞と逃去たり。曲者は提灯取て三人を見るより早く先に立たる新三郎をば河岸の方に突除て左右より官助又三の兩人に打て掛る、官助又三は不意の狼籍に驚き周章て主人の安否は何のその己が一命大事ぞと左右に逃るを追掛て腕限りに打倒し兼て用意や仕たりけん懷中より捕繩を出し高手小手に縛り上ゲ猿轡をはめ兩人目と目と見合せて打詰き何と一言をも發ず繩付引立て何處とも無く去たりけり。

新三郎は彼曲者に突遣られ河岸藏の間にヒヨロ〳〵と歩行み入たりけるが、官助又三の兩人が彼曲者に手痛く打たれて取て押へらるゝを見て驚の餘りに腰を拔し思はず地上に座つたり。斯て新三郎は曲者が家來を縛つて引立て去たる後にて恐る〳〵に漸々と土藏の間より這出て唯一人如何はせんと途方に暮れて茫然として佇みたる所に編笠覆面の浪人向ふの軒下より顯れ出て新三郎が側に近づき小聲にて『お珍らしや一別以來、貴殿には某が詞を用ひず又しても御夜歩行、再び狼籍に出合召されたな』と聲掛れば、新三郎は震へながら『そう仰せらるゝ其許は『御見忘れわられしか、先達て大音寺前の道路にて貴

殿の御難儀御救ひ申た者で御座る『ムヽ成ほど其時の御恩人、どうして此へは『さればで御座る、唯今の狼籍もし御身に掛る其時は御救ひ申し上んと存じ故と彼所へ扣へて居ました『それ程まで某を思ひ召さるゝ其許は『其仔細一應お咄し申さんが此は往來夜陰の物騷、幸ひ柳橋も程遠からねば御出入の船宿升田屋の二階にて『それ迄御存じて御座るとは『ハテ宜く存じて罷在る、イザ御供いたすで御座らう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『ヤア卿は松村瀨平じや無いか』『ハッ殿樣には此瀨平が面體まで御見忘あそばしませぬか、有がたう存じ奉ります、既に去る九月大音寺前にて明さまに拜顏とは存ぜしが御勘當を蒙つたる瀨平その恐わりと差扣へ故と餘所々々しく接待ひましたる段失禮の程恐入て御座ります、其に付ても彼狼籍に御懲も無く御夜歩行は何事ぞ……』と男泣してハラ〳〵涙。御家の内幕は云々にて鏡臺院等が一味の惡謀、青山主馬が利慾に迷ひて由なき尻押に正義の堀縫殿樣を退けたる奸計、遂に殿樣（新三郎）を放埒に仕立て押込隱居と成し素性不慥の傳吉殿を家督に立て森家押領の非望を企て其事に工夫を運らせる事情を述べ、斯る次第なれば御若年御獨身の御不自由を忍ばせて女狂酒狂は一切思ひ切らせ玉へ、此瀨平が娘安と心を合せ遠からぬ中には必らず御安心の成る樣に致さん間だ當分の御辛抱が肝腎なり、尤も今夜瀨平に

御逢の事は努々御他言あるべからず、萬事娘安には御打明て仰あれよ、と恰も小兒に教へ諭す如くに説たりければ。新三郎は愚鈍ながらも宜く分りて初めて知つたる我家の實況、身の毛も悚立ばかりに怖くなりて一々思ひ當る節のあれば醉夢の醒たる心地して倶に涙に沈みたり。

○第廿六回

明れば十二月八日の事ありけるが森新三郎が邸にては其前夜に新三郎が官助又三の兩人を供に連て出往たりしに、其夜亥の刻前に新三郎は一人にて密に裏門より歸邸したれども、官助も又三も歸り來らず八日の朝に至りても更に其行先を知らず。彌兵衛龍右衛門は打案じて新三郎に尋ねたれば、實は昨夜佐久間町河岸にて斯々の危難に出會ひ自分は無面識の人に救はれしが彼等兩人は狼籍者の爲に捕はれて何所へか連行かれたりとの物語なり、其は安からぬ事なりとて心利たる仲間に內意を含めて佐久間町の邊にて夫と無く風聞を探らせたるに、昨夜何にも覆面したる武士が兩人にて相手の侍二人に繩を掛けて何所とも無く引立て行たるを見受しと云ふものもありけり。彌兵衛等は愈々打驚きて兎やせん角やせんと立騷ぎたり。斯る所に堀縫殿より衣川文右衛門を使者に立て『其許樣の御家來平山官助京極又三の兩人は今曉手前邸に繩附にて送付られたり右に付き至急御面談いたし度く候ふ間御家來鈴木彌兵衛其外のもの召連られ即刻御入來被下度候ふ』との口上を申越たり。委細承知の趣を答へて使者を返し鏡臺院とも相談の上にて新三郎ハ病氣に付き名代として罷出たる旨の口上にて彌兵衛は用人行方友右衛門と同道

にて堀が邸へ伺候したり。堀縫殿ハ早速兩人を一間に招きて申聞る樣ハ『扨も不思議の一條こそ起つたれ、今曉丑の刻（午前二時）とも覺しき頃に表門を頻に打叩く者あり、門番の者が誰なるぞと咎めたれば、拙者ハ縫殿樣御存知の侍にて候ふが御一門の御大事に付き急ぎ申上度旨の候へば憚ながら此書面を直樣縫殿樣の御手許へ御出し下さるべしとて封書一通を門番に渡したり、門番ハ彼侍を門外に待たせ置き門番所の武者窓より其一通を請取て宿番の者に交付したり。某その一通を披見したるに、御親類森新三郎樣御身分の事に付き捨置がたき事柄有之候間委細御直に申上度尤も他聞を憚り候ふ儀に付何共恐入り奉り候へども御裏庭前非常御切戸口を開かせ御聞取の段願ひ奉り候ふとの文面なり（とて其一通を示し）依て某ハ小姓一人召具し自から裏口に相廻り誰なりやと尋ねたれば、鈴木彌兵衛齋藤龍右衛門の兩人鏡臺院の內意を承ハり參上仕つて候ふとハ答へたり、其兩人にてあらば仔細無之と存じて小姓に申付け切戸を開かせたるに、突然に怪しき二人のものハ倒るゝ如くに切戸より、邸內の庭前に飛入り彼案內を乞ひし兩人の者共は雲を霞と逃去つたり、己れ狼籍もの慮外なりと跡を追たれども深更にて特にハ暗夜の事なれば行方更に相分らず、小姓に持たせたる雪洞にて彼の入込たる者共を見れば二人とも高手小手に縛られて緊く猿轡を鉗られたる上に羽織頭巾を着し大小を挿だり、胡亂の者なりと轡を脫して面體を見れば思ひきや新三郎殿の御家來平山宮助京極又三の二人にてぞありける、尤も宮助が縛られたる繩の上に一通の書面を堅く結び付て上にハ堀縫殿樣御內覽と筆太に認めたり、先

づ二人の縛を解き如何なる仔細にて斯る耻辱には出遇たるぞと尋ねたるに、初の程は二人とも彼是と隱し陳じたるが、遂に昨夜新三郎殿の供いたし忍び步行を仕つたる所に佐久間町河岸にて狼籍者に出會ひ新三郎殿を保護て防ぎ挑み候ふ所狼籍者は十餘人の多勢にて衆寡敵し難く斯の通りに繩目の耻に遇ひて候ふとの申立なり、扨新三郎殿の御安否は如何と尋ねたれば、一向に存じ申さずとの返答と云ひ其上に防ぎ挑みたりと云へるには似ずして二人ともに差たる大小は鈍刀にて然も拔合せたる證據も無く猶不審しきは二人とも身體に聊の傷も無ければ旁々以て落意なり難く先づ家來に申付て一間に戒め置かせたり』とて一息吐たりけり。

○第廿七回

堀縫殿は猶その物語を續げて『夫より某は寢所に入りて熟々事の體を考ふるに一圓合點ゆかず此封狀にこそ仔細は認めてあるべけれとて披見したるに果して斯の如くなり。

夜陰をも憚り奉らず殊に他人の名を僞りて尊聽を驚かし申上候ふ段重々恐入り奉り候へども千計萬策すでに竭き候ふの間不得已斯く異常の手段を相行ひ候ふ儀私共心底御賢察被爲下失禮の所は萬々御高免願ひ奉り候ふ抑も森新三郎樣御事尊公樣御後見を罷られ候ふ以來は鏡臺院と鈴木彌兵衞齋藤龍右衞門其外一味の者ども申合せ深き惡計有之候ふを以て平山官助京極又三の兩人を語らひ頻に御遊蕩を勸め奉り御若年の御身を宜敷からざる道へ誘ひ入れ世上の惡評を招き候ふ樣にのみ仕り既

に先頃は吉原町へ御遊興を勵め此節は又深川へ御案内いたし賣女酌取女ども御相手に取持ち淸き御心を御放埒に惑はせ奉り候ふ次第其隱れ無御座候ふ實に以て御名家の御瑕瑾御家の御興廢にも相拘り候ふ儀如何にも嘆しき御事に御座候ふ之依乍恐新三郎樣へ御意見申上候ふため且は尊公樣へ此旨申上奉り候ふ爲と存ド甚以て手荒の取扱には候へども今夜新三郎樣深川御通の御途中を驚かし奉り此兩人の奸惡不忠を召捕へ御手許まで差出し申し候ふ尤も新三郎樣御身には聊以て犯し奉り候ふ儀に御座無候ふ間其段は御安心可被下候ふ何卒此兩人嚴しく御吟味遊ばされ彼等一味の輩森家押領の企を御見顯成下され新三郎樣へも御意見差加られ森家御安泰の御取計願ひ奉り度只今の如くにて差置れ候ふては森家の御家は他人の爲に押領せられ可申と懸念仕り候ふ私共儀森家の御扶持を受け罷在り候ふ者共には無御座候へども舊緣有之候へば默止がたく即ち此趣を尊聽に達し奉り候ふ事情篤と御堅察被爲下度是に由て鏡臺院其外一味の者ども惡逆放埒の個條一つ書を以て別紙の通り申上げ奉り候ふ間十分の御取捌き偏に奉願候ふ以上

正義の者共

安永二年癸巳十二月七日

堀縫殿樣

御側小姓衆御中樣

何に兩人この書面の趣にては實に驚き入たる次第に非ずや、此外猶一通を中に封じ籠て鏡臺院はじめ

其方共の不埒の條々逐一相認てあるが、惜かな此書面と云ひ都て其者の姓名を露ハさず殊には某へ面體をも相示さず申さば異形の致し方ゆゑ某に於ても敢て信實なりとも一概には信用いたさぬが、去ながら彼狼籍ものゝ取計方ハ固より強盗物取の所爲にもあらず又新三郎殿へ遺恨を懐きたる故とも思はれねば、或は森家の爲を一途に思ひつる正義の徒が爲る業にも可有之歟、右に付てハ新三郎殿へ面談の上にて官助又三の兩人をば直ちに御引渡いたすか但しは一應御立合にて問糺し致すべきか二樣のうち何れへか仕る所存なれば其方共は歸邸して此趣を新三郎殿へ申上られよ』と苦り切て演說ありければ、流石の彌兵衛も顔より火出る計に赤面なし寒中ながら脊には浹と汗を流し『全く以新三郎樣には左樣の御行狀は無御座これは鏡臺院殿はじめ私共へ遺恨を懐き候ふ御舊臣どもが新三郎樣をば尊君樣へ離間いたし森家の騷動を引起さん爲の悪計と存じ奉れば官助又三の兩人は私共へ御渡し願ひ奉り候ふ、新三郎樣へ御面會遊ばされ候ふとても御存知の通りの御仁にて候へば萬事鏡臺院殿並に私共家事取行ひ候ふゆゑ御賢察の上にて御隠密に願ひ奉ります』と瞞着かゝるを。縫殿ハ嘲り笑つて『新三郎殿には御支配頭青山主馬の鑑定にて公邊向も家事向も立派に一人にて取行ハるゝと定まつたる御方、然る上は某に於て何條御當人を差置て其方づれに相談すべきや早々罷り返つて其段新三郎殿へ申通せよ』と嚴然として申達したり。

○第廿八回

彼官助又三の兩人を佐久間河岸にて脅して縛めたる曲者ハ餘人にあらず即ち佐久間定之進大塚廣右衛門の兩士あり、兩士ハ松村瀬平と謀りて此奇計を行ひ瀬平ハ新三郎を介抱して諫言を爲し定之進廣右衛門ハ堀縫殿方へ兩人を召連たる事にてありき、縫殿も大方ハ其と察したれども飽までも知らぬ振にて是を機會に鏡臺院等が奸計を破らんとて前回の如く彌兵衛等に達して新三郎を招き寄んとは試たり。扨も森家にては彌兵衛が歸り來りて逐一に事情を語つたれば、鏡臺院はじめ一味の輩ハ大に憂へ『抑も彼曲者ハ誰なるやらん松村瀬平にてあらば堀縫殿とは不和の間柄あれば縫殿方へ連往べき筈は無し、察する所縫殿が自分の手にて此計を取行なはせ故と他より致したる體に取繕ひたるにはあらざるか』と樣々に邪推を廻したるが廣右衛門定之進と瀬平が所爲なりとは夢にも思ひ當らざりけり『夫に附ても如何ハすべき彼の兩人を片時たりとも堀が邸へ止め置かれてハ何なる事をば言出して後の累を殘さんも知れず、此上は新三郎を向けて先づ兩人を連歸らしむるの外に策は有る可からずとて軈て其分に取計ひたり。

新三郎は鏡臺院等が勸に止む事を得ず不承々々に縫殿が方へ赴き面目なげに家來兩人を其儘に申乞はんと望みたり。縫殿は新三郎が言條を聞に附ても且は其放埒を怒り且は其庸愚を氣の毒に思ひて一體の事柄を信切に尋ね問ひたるに、初の程こそ新三郎も包み隱して彼是と陳じたれ遂には涙を流して其身の誤を悔い先に大音寺前にて松村瀬平が爲に危難を救はれたる事より昨夜も瀬平に再度の難儀を助けられ篤

く意見を加へられ今は夢の覺たる如き心地せる趣を懺悔したりければ、縫殿は益々驚きて鏡臺院等が惡計の深きを知り又は瀨平父子が忠節の專らなるを感じ新三郎へは暮々も瀨平が云へる如く此方の秘密を彼奴に悟られまじく又放蕩の擧動は尤も厚く愼しむべき旨を敎へ諭し其よりして官助又三の兩人を其儘新三郎に引渡して何事も無く歸邸せしめたり。鏡臺院等は官助又三が縫殿に責問はれて此方の密計を白狀をも仕たるならんか左ありては破滅の基なりと案じ煩ひたる所へ新三郎は兩人を引連て歸り來りたれば、稍々氣を安め兩人の者へ尋ねたるに、縫殿は昨夜一應問糺したる迄にて別に深き樣子も問詰らざりける旨を述べたり、扨は案じける程には無かりしよと胸を撫りて安堵の思を成し兎も角もと悅びの酒宴を催して無事を祝したりしが、去ながら兩人を邸內へ置きては又候ふ縫殿が干涉の端緒を殘すの患あるべしとて內々其意を含め表面は兩人とも暇を出して引拂はせ竊に手當を送り遣して一味に加擔せしめたり。

去程に縫殿は瀨平に會合して此度の事變を語り其秘密を問ひたるに、果して其時の曲者は即ち定之進廣右衞門の兩士にて瀨平と謀りて此儀には及びたるなりと知り、イザ此上は彼奴が惡事を訐きて一挫に成し吳んずと縫殿は頻にいら立たり、瀨平は暫しと押止め未だ機會到らざれば先づ新三郎殿が愼み方を御覽の上にて其事に及ばるべしと諫めたれば、縫殿も其議に同じて怒を鎭め居られたり。其後は新三郎は己の行を愼み斷然と遊所通を思ひ止まりたれば、鏡臺院等は再び惡計の手段を失ひたる所に又もや翌

れば安永三年甲午の春に至り森家に於ては不慮の事件こそ起つたれ。其仔細如何と尋ぬるに森家知行所増年貢の一條は去年、青山主馬が仲裁にて松村瀬平調印の書面を渡し一旦は納まつたるに、其後森家よては彌兵衛等が計ひとして新田隱田の取調を嚴密に成し小物成を多く取立て更に竿入を成さんと仕たるより領分の百姓等騷ぎ立ちアハヤ一揆をも起すべかりしを主馬は鏡臺院に泣付かれて密に御勘定奉行に賴み込み公邊の御威光を假りて無理に押領めたれども。此事風聞隱れなかりけり縫殿は今ぞ問糺すべき時節は到來したりとて即ち二月廿一日と申すに新三郎へ宛て數ヶ條の問條をぞ發したる事は次回に詳く說出すべし。

○第廿九回

鏡臺院は彌兵衛龍右衛門および男寵の安六を一室に招きて『今朝堀縫殿より新三郎へ宛たる尋問の書面と申すは即ち此一通なり新三郎は例の痴呆の性とて更に心を痛めたる色も無く某には文面更に相分り申さねば宜なに御返詞あれよとて妾に渡したるまゝ書齋に引籠りたりイザ篤と讀下して返答の思案を運らせよ』とありければ、承はりぬと彌兵衛は縫殿が書面を取上て讀たるに

急度得御意候ふ然は貴殿御家政向の儀は先頃青山主馬殿の差圖に由て拙者並に森左兵衛殿後見相罷候ふ後は都て貴殿の御獨斷に候ふを以て善惡とも固より傍觀の地位に有之候ふ乍併既に親類一門に連り殊には尊父故半左衛門殿の御遺托を受たる上は貴家の存廢にも拘り可申儀を見聞しながら差搆ひ不

申は本意に無之候ふ間所存の程逐一可申述候ふ抑も故半左衛門殿御逝去貴殿御相續の後は拙者に於て落意いたし兼候ふ不審の個條甚だ以て少なからず世間の取沙汰も頻に相聞え候へば此條にては遂に公邊御役人方へも相聞え貴家の禍とも可相成歟依て左の條々改て御尋問に及び候ふ事實の所を有の儘に御答有之度候

一故半左衛門殿召仕さよ事御葬送の砌落飾いたし鏡臺院と相名乗り候ふと初より拙者共の承諾を得る事には無之當人自己の所爲なり尤も落飾は敢て悪事に無之を以て別に問咎も不致ところ其後御上通りと相成り主人同様に取扱はれ候は此儀貴殿の御差圖に有之候ふ哉

一三上安六とか申す者は長唄の藝人に有之候ふ趣に相聞え候ふ然るを貴殿奥通りに呼近け爾來打續き止宿いたし鏡臺院と格別の懇志を通じ猥りが間敷振舞その隠なく候ふ貴殿に於て御差止無之は何等の仔細に候ふ哉

一貴殿用人頭鈴木彌兵衛は鏡臺院の兄また用人齋藤龍右衛門は鏡臺院妹聟にて何れも原々無頼の小人なり然るを召抱られて家政を取扱はせらるゝは貴殿何等の御所存に候ふ哉

一松村瀬平佐久間定之進大塚廣右衛門を初め貴家譜代の御家來大抵暇差遣され前段彌兵衛其外概ね新規新參の者を召抱へらるゝ段御旗本の體面に於て尤も恥べき所なり如何の御所存に候ふ哉

一御舍弟傳吉殿儀は妾腹の庶子なり嫡庶の差別は武家に於ては尤も正しく可致と勿論に候ふ所貴家に

於ては傳吉殿を若殿樣と呼唱へ候ふ趣また貴殿御事をば蔭にては新三郎樣と申し恰も同樣の地位の如くに仕り候ふ段現に拙者家來ども實地に承り及べる所なり是は貴殿の御差圖に候ふ哉

一貴家御有福の事は故半左衞門殿の御時より拙者に於てもよく存じ罷在候ふ然るに貴殿御相續後未だ滿二年に及ばざるに藏宿其外の町人より御借財被成其上御知行の百姓へ增年貢小物成等嚴重に申付け一昨年の騷動後又々當年も御知行の苦情を釀され候ふ趣は御勘定所へも相知れ有之候ふ右は如何の次第に有之候ふ哉

一貴殿御身持の儀に付き彼是風說も有之候へども全く其實なきは拙者に於ても信ずる所あり乍去貴家奥向に於ては酒宴歌舞の遊興幾ど茶屋小家に比しく其上に鏡臺院等物見遊山いたし更に他聞他見を憚らず言語道斷の有樣に有之候ふ貴殿に於ては何故に御取締不被成候ふ哉

一貴殿奥向幷に家來一同の行狀風俗以ての外に相聞え候ふ如何御氣附被成候ふ哉

右の條々近親之間柄たるを以て御尋問に及び候ふ御返答次第拙者に於ても所存之次第有之候ふ間鏡臺院共御詮議の上發輝たる御返答相待申候ふ右樣の御尋問に及び候ふ拙者心底を御察し可被下候ふ

以上

（安永三年）二月廿一日　　堀縫殿（花押）

森新三郎樣

とは書かれたり、鏡臺院等は顔見合せて面色も變り如何はすべきと差向き思案も出ざりけり。

○第三十回

更衣とは云へ已に下の五日の事なれば濟度を願ふ法の庭彼岸櫻もはや散りて色則是空を示すてふ吉野櫻のはや咲初て寂寞たる寺院の庭も色香を添たる春氣色いと面白く生めきてぞ見えたりける。午過る頃より對面にて他人を交へず組替し語合ひて小室の中に春の日の永きを覺えずして徒らに入相告る鐘の音を心憂しと嘆たるは青山主馬と鏡臺院の兩人なり、鏡臺院はしどけ無き體にて鬢の毛の何にしてか打亂れて橫顔に懸れるを指先にて掻揚つゝ秋波を遣ひて主馬を見て『青山樣 妾が三上安六と何でも無い事は御分り遊ばしたで御座りましたらう』と云へば主馬は袂持の半手拭にて額の汗を拭ひ襟うち寛け殿中形の扇子にて胸の邊を扇きながら打笑つて『アンナに申したのは實に身共が誤りであつた、何を云ふにも縫殿の書面に歴然と認めて有たに由て身共も思はず腹立いたし、其がソレナ、俗に申す燒餅で活と致したゆゑ、彼樣に尊婦へ難題を申たのぢや、併し是と申すも其實尊婦が可愛て〳〵堪らぬから起つた疑ひ、コレ此通り御旗本の青山主馬が手を突て恐入るに由て勘辨を仕て下されい『アレ勿體ない、ソンナに眞面に成て御意あそばすと妾も氣が詰つて成ませんワ、ナンノ今の御詞が眞實でありますなら御折檻を受ますのが結句御嬉しう御座りますよ』と寄添て離れがたなき風情を見すれば主馬は全世界に類なき色男に成り逆せて大の眼の眥を遠慮も無く下げて鏡臺院の顔に見蕩れ鬼髯夥しく生たる頤を撫つゝ

『旨く宣ふなマアサさうでも有りますめエ』と答へたる實に不似合の役廻りとは見受られたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

個様に青山主馬は鏡臺院の毒舌に欺かれて彼の安六男と密通の噂は全く堀縫殿が鏡臺院を憎める餘りに讒者の造言を眞と思ひて尋ね問ひたるに相違なしと愚にも思ひ信じ、然らば云々返答あるべし若し新三郎が差拒みたらば斯々すべく身共その時は是々に取計ふべしと手段を定め夫より彌兵衛龍右衛門へも内々にて謀計を授けたりければ、鏡臺院一味は大に力を得て其如くに執行ひ縫殿が許へ返答の書面を送つたり。

却説も堀縫殿は新三郎および鏡臺院一味の者より何と返答するやらん、何に新三郎が愚鈍の質にもせよ我と云ひまた忠臣の松村瀬平と云ひ彼程までに噛で喫むる様に敎へ諭したる事なればヨモヤ鏡臺院等が舌頭に欺されて己が身を傷くるが如き事ハ仕まじものをと聊か頼み思ひたる所に、新三郎方より小室喜太夫を使者にて尋問書に對せる返答の書狀をぞ差越たる。縫殿ハ如何なる返答振にやと披見したるに、其趣意と云へるハ『三上安六と云へる者は亡父半左衛門の代より遊藝執心の者たるに由り出入いたさせ申し候ふなり、拙者（新三郎）代に至り候ふても同樣時々出入いたさせ候へとも鏡臺院殿と不義の振舞等ハ決して無之候ふ是ハ讒者共の惡口より斯く御聞取の次第と 奉 存候 ふ鏡臺院上通りに取扱ひ候ふ

は亡父の遺言も有之且つ同人落飾の節貴殿に於ても導師楚山和尚授戒の手續等御立會にて御承知に有之候ふ、然るを唯今に至り御不審ハ其故これ無き歟。次に舊家來共儀は拙者若年を侮り諸事心に適はざる勤方有之候ふに付き其者共へは暇差遣し新規の者抱入申候ふ是れ家の爲殊にハ公邊勤向之爲に御座候ふ、尤も其中には鏡臺院殿所縁の者も有之候へども苟も可然人體に候ふ上は更に不都合とハ存じ不申候。將拙者遊興之儀は成程少々其廉も有之候へども唯今に於ては謹愼いたし罷在候ふ、又家内にて酒宴遊興或は遊山等いたし候ふ事ハ更に其覺無之候ふ、是以て他人の讒言歟。況や知行所の支配方ハ夫々筋道を踐で代官へ申付置き候ふを百姓共故なく出訴又は嘆願など致し候ふ分の事あり、且他向借財等も亡父以來家政の都合にて一時の融通に止まり候ふ間御心配被下間敷候ふ。御信切の程は萬々謝し奉り候へども拙者家事に係り深く御立入ハ迷惑に候ふを以て以來ハ御用捨に預り度奉存候ふ』と極めて他人向の失禮なる文面なりけれハ、縫殿ハ礑と憤つて急ぎ密使を以て瀨平を呼寄せ此返答書をぞ見せたりける。

○第三十一回

松村瀨平ハ堀縫殿に打向ひて『扨も先日御內々御示し下されましたる我殿新三郎樣の御返答書、いかに御穩當の御質を附込で鏡臺院彌兵衞等が無理に御勸め申上たるにも致せまさか右樣不都合の御書面を殿樣縫殿へ御差出しに相成る筈は無いと存ぜまして、實は五桒の喜助が使に參りましたを幸ひに密に一封

を遣して娘安に問合せましたる所、御覧下され是この通りに安よりの返詞、この趣で見ますると全く新三郎様にハ御存知あらせられざる儀にて大膽にも御名を騙つたる鏡臺院等が不法の取計たると疑も無き次第に御座ります』と相述へて娘お安より参つたる内状を差出たれば。縫殿は篤と讀畢りて『扨も憎くき下臈女が取計ひ重疊不埒至極なるぞ、ヨシ此上ハ此縫殿が押懸て新三郎殿に面會なし彼奴等一味の悪黨ども一々に奸策を訐き出て處置いたして呉う、瀬平貴様も同伴いたすが宜い』と一途の怒に急立て直にも打て出べき景氣なり。瀬平は暫しと押止めて『アイヤ殿様その御立腹は御尤には御座りますれど、娘安が文通にて察しますれば御支配頭の青山主馬様一方ならずに鏡臺院の肩を持て御座る様子、邪推かは存ドませねど原來女色に溺るゝ主馬様に水性者の鏡臺院モシヤ可怪な交際では有まい歟と思はれまする仔細も御座れば彼等が計企は思の外に根深き相談、ソレニ殿様が眞直な御氣象から一時に荒立て御處置を成さんと遊ばす時は却て森家の御耻辱を惹起します恐あり、其上に事と場合に寄ましては新三郎様の御身の上に御異變なしとも測られませず、何にも致せ森家御内輪の差縺れ世間にパット相成ましては名家の御瑕瑾新三郎様の御不面目、この儀を篤と御賢察あそばして何とぞ穏便に禍を除き度のは、私の願ひ、能々御賢察下されまして一刀兩斷の御處置は萬不得止時節まで御猶豫が第一かと存ド上ます』と前後を考へ思慮ふかき諫言に。縫殿も『何様その通じや』と猶も打合をなして別れたり。去ども縫殿が平生の氣質、瀬平が歸りし其後にて獨り熟々思ひけるは『瀬平が分別尤には似たれども

我も千二百石の御旗本御書院番を勤むる身の上、たとひ新三郎が全く存ト知らざる事にも致せ、斯る無禮不都合の返書を差越され其儘に差置ては、アレ見よ彼堀縫殿も我等が工夫の返答に再び返す詞も無く指をくはへて引込だるぞ目垂顔の擧動臆病未練の腰拔武士よ、と青山主馬を初として奸婦佞人等に嘲り笑はれては武士の耻辱、その上に相手の尻押が主馬とあるからは猶更以て後には引かれぬ、イデ御番士の骨法を顯はし彼等が驚膽を拔き目に物見せてくれんヅ』と思ひ立ては多摩川の上水にて産湯を浴つたる江戸武士、何かは以て猶豫の成るべきぞ、左なり〳〵と自から問ひて自から答へ、手を打鳴らして家來を呼び『森新三郎殿家事に付き聞捨に相成らざる次第あれば是より直様彼が邸へ罷り越し面談いたす所存であるぞ、急ぎ馬に鞍置け肩衣取出させよ、尤も時宜に由ては彼方にて如何ある無禮を致さんも知れ難ければ家の子ども十人計り其用意して供いたせ、……イヽヤ縫殿すでに思ひ切たりェヽ止だて致すな、武士の面に泥を塗られては御旗本が一世の名汚それを勘辨いたすものやある……』と衣川文右衛門等が諫言を聞ばこそ『家來共續けや續け』と云ふまゝに一鞭くれて驅出したり。

頃は二月廿八日酉の刻ばかりの事なるが(午後六時)堀縫殿樣と門番が報知と共にギーと大門の扉を打開かせ玄關當番の給人園部文之進が式臺に出迎ふと共に縫殿は下刀の儘表座敷に打通り『至急新三郎殿へ御面會いたさねば相成らぬ儀があつて縫殿わざ〳〵罷出た、直に案内さッせェ』と突立ながら辭氣鋭く申したり。

○第三十二回

兼て期したる事なりけん、給人の文之進は少しも騒がず、イザ是へ御通り下されよと表書院に案内し烟草盆菓子茶ども法の如く差出し暫し御待ち玉はる樣にと挨拶して退きたり。程もあらせず用人頭の鈴木彌兵衛肩衣爽かに着なし用人齋藤龍右衛門行方友右衛門うち連て行儀正しく出來り、次の間の閾際にて着座なし慇懃に手を支へ『殿樣にはいつも御機嫌よく御渡あらせられ恐悦至極に存じ奉ります扨御入來の趣早速新三郎樣へ申上たる所新三郎樣御口上には、今日は御遠路の所わざ／＼御見舞下され新三郎一入祝着に存じます早速御對顔申上べき筈には御座れども此兩三日以來病氣差起り床に就き罷在り懇意の向に候ふとも面談は宜しからず達て相止り候ふ樣にと醫師より嚴しき申達に御座りますれば失禮の段は万々恐縮ながら御對顔の儀は御免を蒙り奉り度御座ります尤も全快次第尊邸へ參上仕り寛々御意を得る心得に御座ります但し差向たる御用事にても御座りますなら彌兵衛へ御腹藏なく仰聞下さる樣に相願ひます、その趣に御座りますれば左樣御承知下し置かれ御無禮の段は御用捨の程私共よりも願ひ奉ります、次に差向たる至急の御用事新三郎樣名代たる私へ仰聞られ下されませうなら難有仕合に御座ります』と言語を慎みて鄭寧にぞ述たりける。堀縫殿は、扨こそ此奴等我をば新三郎に對面させざる手段を用ひたるなれ憎くき致し方でざんなれと心中磤と怒つたれども、內情は兎も角も表面は筋道立たる病氣の斷りに詮術なく『ム、扨は新三郎殿には御不快であるか、シテ御案じ申す程の御容體で

は御座らぬかと裏問へば『ハッ難有存じ上ます、唯今の分では差て心配と申す程では御座りませねど御承知の如く平生虚弱の質て御座りますれば用心尤も專一と醫師も夫のみ申勸め居りまする『ム、左樣であるか、實は今日自分是へ參上なしたるは新三郎殿へ至急御面談を致さねば相成らぬ儀が有ての事、就ては御病樣でも苦しう無いが一寸御對顏下さるまいか『ハッ畏りまして御座ります、一應相尋ねまして申上ますで御座りませう』と彌兵衞は一禮して退き、龍右衞門友右衞門は縫殿を取持ち中小姓等が運び出たる吸物膳珍味の殽取揃へ銚子盃前へ置き『新三郎樣より申上よとの御口上に御座ります、折角の御入來に御饗應の用意も無之甚以て恥入り奉る在合の踈酒何卒一獻聞し召され龍右衞門共御相手に仰付られ下されませうなら新三郎此上も無き大慶に存じ上ますとの儀に御座ります』と新三郎の口上とて只旁に杯を勸めければ縫殿は夫と知りながらも無下に否む事も成かねて心ならず杯を取上て一獻わざと飲だりけり。程もあらせず彌兵衞は再び席に出て『御口上の趣新三郎樣へ申上ましたる所失禮之儀は重々恐入ますれども何分にも病苦に惱み唯今介抱最中に御座りますれば御免を蒙りますとの儀に御座ります』とヒタと面會を斷つたれば、縫殿は左こそと心に諾き『御病氣にてお六かしいと有うへは致方ない、然らば鏡臺院へ面談いたさう程に其趣を申入い『畏て御座ります』と退きしが、やがて其座に復り來て『鏡臺院殿儀は女の身に御座りますれば殿樣へ御面會御斷申されます『ハテ心得ぬ、他門他人とあらば格別、現在親類の身共、殊には是まで數度面會いたせしものが今日に限り憚るとは如

何なる譯ぞ『ハツ是迄は殿樣には御後見の御身、申さば御一家の御事ゆゑ憚り存せず御目通りも致させましたが、唯今では御後見と申すで無く唯一通の御親類までの事、女の身にて御遠慮あるに當然の儀かと存じます、其上に鏡臺院どの行狀に付き由なき風聞を立られ仄かに御耳にも達し實の樣に御惑ひ取り成されたる哉に思はれますれば、若し唯今御目通り致されて又候ふ堀縫殿樣と是々なりなど根も無き噂を受まするは殘念ゆゑ旁々以て差扣られ御斷を申されて御座ります、右に付き至急の御用事御斟酌なく私へ御存分に仰聞られ度。新三郎樣へも鏡臺院殿へも申聞け、又私共にて相分りまする儀は御答へ申上るで御座りませう』と詞斷に述たりけり。

○第三十三回

斯樣の挨拶に堀縫殿は活と急立ち『イヤ／＼其方達で相濟なら疾に申す、面談せでは相叶はざるに由て態々罷趣たるに病氣なりと申聞け中溜に遮つて面會を斷はるは其方達が所仕切ての計ひにて新三郎殿が知らざる事、すでに此程新三郎殿より差越されたる返書の一通御同人には夢以て御承知なきと申すと此方よッく存じて居る、此上は誠の病氣か僞りか奥へ參つて堀縫殿が見屆けねば相成らぬ』と追取刀に立上れば、彌兵衞は暫しと押止め『御親類の縫殿樣でも誰樣でも當家の主人新三郎が御斷申上るを聞入なく押て御通りなさるとは近頃以て御無遠慮『ユヽ何と申す、無遠慮とは過言であらうぞ、留だて致して無禮をなさば用捨はせぬぞ、ソコ退き居らう』と烈火の如くに憤り支ふる彌兵衞龍右衞門左右にば

らりと投除て仕切の杉戸をがらりと明け奥を目掛て疊を蹴立て已に入らんとなしたる折から『御扣へなされ堀縫殿どの』と聲を掛け向ふに突立ッ一人の武士『此縫殿に扣へよとある其許は『小普請組支配組頭を相勤むる大平左門で御座る『シテ其左門殿が扣へよと御意なさるは『其仔細申述るで御座らう』と打連て原の書院に立戻り對面に座を占めて『拙者と頭支配青山主馬の差圖を受け當家見廻に罷越たる處主人森新三郎殿には病氣との趣なり、病氣とあらば猶更以て病狀まで罷通り見分いたすが拙者の役儀、即ち唯今相通り次の間より見舞しに病氣の勞に打臥し居る體たしかに見分を遂け罷退く所で御座る、然るに貴殿には當家の家來が斷立るを聞入なく押て面會ならんとあるは、如何なる次第か存せねども、新三郎殿病氣と云ふこと拙者慥に見屆て相違ない、又醫師の申立に依て他人へ面會一切相斷りて養生すべしと組頭たる此左門役儀の表で申渡せば御面會は相成ませぬ……イヤサ假令親類でも一門でも小普請の取締は小普請支配が仕れば貴殿の御立入は無用で御座る、併し當家の家來共へ御申聞なされ難き趣とある上は大平左門が承はり善惡とも御挨拶を致すで御座らう……イア是は怪からぬ、貴殿には御番士で御座るゆゑ御普請の作法は全く以て御存知ないと相見え申す、凡小普請組の輩は其當人の行狀より家事の瑣末に至るまで諸事萬事監督なして差圖を致すが頭の職權……その職權より致す差圖に貴殿の干渉相我申さぬ……殊に御見受申せば御酒興の上と相見ゆるが、今日の所は穩に御引取なされるが御身のため、強て彼是申されなば拙者より其段を貴殿の御支配御書院番頭西郷筑前守殿へ進達なし、御組御

番士堀縫殿は酒興の上にて我等支配小普請組森新三郎方へ亂入なせしと掛合はうか……サヽ左なつては貴殿の落度武士の耻辱……イザ御同道いたして當家を退散するで御座らう』と疊掛たる左門が議論、是ぞ正しく鏡臺院が兼て青山主馬と打合せ我來れりと云ふより早く大平左門を呼迎へ役目を嵩に我を凌ぎ手を出させざる計略よな、其上にまた饗應の酒殽われを酒興の體に陥れ理非を云はせぬ奸策なりしか、と心に覺つて無念の齒嚙、見す〳〵夫と知りながら手を空しくして歸るかと、拳を握て怒れども、左門が詞に餘儀なくも袖を列ねて玄關先、彌兵衞其外家來共列を正して式臺送り、大平樣お立ち……堀樣お立と供ぶれなして、大門を八文字を押明れば、供待したる堀が家來勸められたる振舞酒に何れも醉て作法を紊し一歩は高く一歩は抵く蹌踉ながら供したり。左門は見るよりあざ笑ひ『イヤ兩御番の御供方は又格別、左門感心いたして御座る』と冷評ぶりの挨拶に、縫殿は愈々面目なく斯まで彼等に欺かれ不覺を取たる遺恨さよと胸の思の塞がりてスゴ〳〵歸宅したりけり。

斯て兩三日を經て堀縫殿は組頭の某が邸に呼寄られ『其許事親類森新三郎方へ罷越し飲酒いたし當人病氣の所その斷を聞入れず強て面會せんと串張り、剰さへ奥向へ亂入なさんと致せし趣、殊に其節召連れたる家來共まで盡く酩酊なして歸宅したる風聞あり、以後を屹度謹あるべし、就ては以來右新三郎方へは出入無用に致さるべし』と内達せられたれば、縫殿は事情を告るに由なく唯諾して退きたり。是全く主馬が差圖に出たる事なれば是よりして縫殿は森家と往來を絶ちたる程に鏡臺院等は益々憚る處なく愈

々新三郎毒殺の悪議に及びたり、そは次回を待て知り玉へ。

○第三十四回

却説森新三郎は堀縫殿および松村瀬平が意見により愚ながらも漸くに鏡臺院等には心ゆるされぬ事を覺りたれば酒色の放蕩を思ひ止まり行狀を愼みて居たりけるが。堀縫殿より嚴重なる懸合の尋問狀を差越れ痛く驚きもし怒りもしたれども、臆病の質として鏡臺院等を糺し問ふ程の氣力も無く只その書面を鏡臺院に示したる迄にて其後如何なりしか問もせざりけり。然るに近習の者が噂には新三郎より相送たる返詞の甚だ不都合を極めたりければ縫殿は立腹の餘り自から來りて新三郎へ面談を求めたるに彌兵衛等は病氣なりとて面會させず、剩へ小普請組頭の大平左門を招寄せ縫殿を論じ詰させ引取らせたりと云ふを聞き（即ち前回に述たる事實なり）流石に憤りて鏡臺院彌兵衛等に向ひ『何故に我に得心させずして返書を縫殿に送りたるか、又縫殿が參られたる時に我病氣なりと僞りて面會を斷りたるか、若年たりとも當主たる我を差置て自儘の取計ひ其分には差置がたしと責たれば。鏡臺院等は『ッハ御聞違に候ふべし一向にさる事なし、尤も過日縫殿どのが大酩酊にて表へ參られて酒を求め果は醉狂を發し御前樣に逢ふべしと申されたる事ありければ夫をば左樣には噂せしなるべし、某等爭で御前樣の名を騙り又は中溜の取計を致すべきや』と詞を揃へて好樣に言紛らしたり。是にて新三郎は『扨は其事にてありけるか』と脆くも欺かれて強ても問はざりけり。去れども鏡臺院等は猶も心を安せず『去にても誰が斯る事を彼

新三郎には告知られたるにぞ彼奴に個樣の事情を知らせては萬事に便惡きものを』と思ひたりければ、龍右衛門其外に申し付て探らせたるに、果せるかな新三郎が近習の侍甲乙の兩人なりと知られたりけり。ツレ退けよと云ふ儘に新三郎へは何とも知らせずして甲乙の兩人とも身の暇を取らせたり。新三郎は兩人が平日の如く傍に侍かざるを怪しみて如何に彌兵衛へ尋ねたるに去ればで御座る彼等は不都合の次第あつて昨日俄に兩人とも御暇とは相成て御座りますと答へたり『ム、夫は誰が差圖であつたか』鏡臺院樣の御差圖で御座りました『鏡臺院殿の差圖にいたせ自分が近習の者を傍より自儘に遠くるとは相成らぬ、一體其方はじめ當家に罷在る男女の者共は此新三郎の召使か但しは鏡臺院の召使であるか』『ハッ殿樣と鏡臺院樣とは御親子の御中御兩方とも同じ御主人樣と存ト上ます』『默れ彌兵衛、森新三郎には鏡臺院と申す母上は無いぞ、鏡臺院は先殿の御召使 上通には取扱へど當家の主人と申すは斯いふ新三郎一人なるに、其主人の差圖を待たず鏡臺院と其方が兩人の計ひにて永の暇を甲乙に遣はしたりとは不埒千萬』『デハ御座りますあれども、甲乙兩人とも御家風に背き不都合を重ねましたれば、御暇に致しましたは御家の爲であるにもせよ、ナゼ自分へは斷らぬ』『イ、ヤ鏡臺院樣の仰ある上は今度甲乙の御暇に限らず凡は別段殿樣へ伺はずとも宜き儀と相心得て御座ります』『おのれ彌兵衛過言であるぞ、其方共が鏡臺院と申合せて惡事を巧み當家を紊す所存と云ふと此新三郎が存せぬと思ひ居るか、今度に限らす先頃より何かに附て自分をば有か無かに致す其方重々の無禮不屆、其方はじめ龍右衛門も唯々改めて新三郎が

永の暇を差遣はす早々邸を退身いたせ『ては驚入たる無體の御沙汰私儀は鏡臺院樣の御賴に依て當家の御用人頭を相勤ますれば殿樣の御一存では御暇には成りますまい『憎き彌兵衛其分に致し置かぬぞと前なる煙草盆を取るより早く彌兵衛を目懸て叩き付け怒り散して居間の方へぞ入られたる。是は正しく新三郎が寵愛の近習兩人を退げられたるを腹立の餘りに彌兵衛に對ひて斯く述懷には及びたるにて胸に貯へ置かねたるも尤なり。

彌兵衛は驚きて奥へ逃込み云々なりと鏡臺院へ告け急ぎ青山主馬へ相談を遂げ更に大平左門の見廻にて、新三郎事癇症再發に付き母家を懸離れたる所に差置て養生致さすべし此儀相心得られよと新三郎に嚴く達したりけり、夫よりして新三郎をば邸の奥なる所に居住はせ近習一人侍女二人を附置き衣服飲食に至るまで疎末を極め左ながら座敷住の罪人の樣には取扱ひたり。

○第三十五回

『何に御兩氏、御分別は如何で御座るな』されば御座る瀬平殿、御息女の御文通と云ひ五菜男の喜助が咄し彼是存ト合すればいま殿樣（新三郎の事）の御身の上新御座敷の御住居とは名のみにて眞は御座敷牢も同樣『殊に御側に仕へるものは御息女と近習兩人、その近習の侍も鏡臺院が人撰にて宗徒の奴原附添ひ居るとある上は猶更以て懸念の至り『何にも左樣、廣右衛門殿の申さるゝ如く御身の上が尤も大事、もし此儘にて差置なば惡事に長たる奸佞ばら暗殺毒殺いたし兼まいもので御座らぬ『言はれたり定之進

どの、御同樣の心配全く以て此一條、イデ此上はお安どの並に喜助に力を併せ兎も角も殿樣を御邸內より救出し堀樣にあれ又は其外いづれにあれ安心なるべき所へ御供いたして預け參らせ夫よりして鏡臺院彌兵衞安六龍右衞門其外一味の奴原を取て退け御邸內の御改革いたすが卽ち我等が忠義『實に誠、その通り、然るを彼是事情を量り猶豫いたすものならば奸佞益々蔓つて累代名家の森の御家督素性も知れぬ傳吉殿に押領さるゝ仕宜と成り臍を嚙でも及ばぬ後悔、ジヤに由て瀨平どのモウ決心して亂入の手段を行ひ申すが捷徑ナント左樣では御座らぬか、と忠義に凝たる佐久間定之進大塚廣右衞門の兩人は怒の淚を眼に泛へ如何や如何と迫つたり。

松村瀨平は默然として兩人が所存の程を聞たりけるが、稍々あつて膝を進め『殿樣の御身の上何にも憂苦に堪へされど、御邸內へ忍び入り殿樣を奪ひ奉らんと拙者は容易に御同意申さぬ、尤も娘安や喜助の考案にては外に應ずるものあらば命を的に救ひ出し御逃し申すは案の內と手に取やうに書てはあれど、彌兵衞等とても奸智に長たる去者なればさう手輕くは行へまい、良や首尾よくお救ひ申し縫殿樣方へお供れ申した曉が彼等の一味の黑幕に扣へ居らるゝ青山主馬殿御支配頭の威光を振ひ御老若(御老中若年寄)の前を繕ひ高飛車の御沙汰に及ばゞ道理を懷いて非分に陷ち果は殿樣の御身分に思はぬ難儀を招くの恐れ、次には又奸佞ばら何程に惡事を巧むとも他より寛めて置く時はさう早急にお命を絕んず程の惡計は運らし得らるゝもので無い、併し我等共が他より迫り御救出申す事その工夫を運らして騷動いたす其時は寧そ手早く殺害と彼等が迫る道理で御座る、右の通りの理由

なれば目下殿樣の御不自由御痛しくは御座あれど娘等如きが勸に從ひ御邸内へ亂入せば忠義却て不忠と成り後難頗る大切なれば先づ御見合なさるが宜しう御座ると、前後を考へ彼我を計り思慮分別を運らしたる瀬平が詞。　定之進廣右衞門は聞も畢らず腕を捲り臂を張り『ヤア卑怯で御座る瀬平殿、累代の御主君が目前かゝる御難儀を成されて御座るを他目に見て『ヤレ後難だの御家名だのと右を怖れ左に臆し時日を送る其中に『御命にも係はる大難相起つたる其時は我等の忠義は水の泡『たとひ青山主馬等の奸物鏡臺院の尻押なし鷺を鴉と言黒めても我等が忠義の一心凝て進みなば何條成就せざるべき『よし又武運拙くて仕損ずる其時は刀の目釘の折るゝまで斬て斬て斬死なし惡人ばらの屍の山築て見するが一期の思ひ出『殿樣の御身の上に御怪我のあつては御家が立ても詮なき次第『モウ此上は瀬平殿、貴殿が御同意これ無くば御同意はお頼申さぬ『我等二人が忠義の御息女お安どの『まッた五菜の喜助に謀り見事にお救ひ申すで御座らう……イヽヤ止たて召さるな、兩人とも既に決心いたして御座る……と思ひ詰たる面魂　さすがは猛き手束弓返さん樣は見えざりけり。　瀬平は大息を吐て『夫程までに御決心とある上は此瀬平何にも御同意いたすで御座る『然らば其事を謀る手段は如何に、……　斯々と三人密議を凝らし愈々三月廿三日の夜に事を擧べしと牒し合せ、喜助が來るを待ち竊に其事を告げたりければ、お安も夫と承知なし其日の來るを俟受たり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

扨もお安は愁ひ斯る計畧を新三郎へ知らせなば、素より臆病の新三郎ゆゑ其樣子の面に顯はれ鏡臺院等に悟らるゝ事もあるべきかと己一人の胸に納めて居たりけるが、三月廿三日は先殿森半左衞門が三年忌の逮夜にて森家の奥は夜に入るまで混雜してぞ居たりける

○第三十六回

晝間は法の如く明日の法事の仕度を整へ申の刻(午後四時)ごろより逮夜の法會を行ひ參りける人々に精進の膳を侑めなどして其人々も既に退散したりけるが彌生の末の日永なれば漸く黄昏すぎたる計なりけり。　イザ去らば是より口直しの一杯を更めて傾け申さん精進もの、油に砂糖あれには閉口仕ると、刺身羹魚鰻の蒲燒、鯉の生造り、尤も結搆これなら御酒も旨く頂戴出來ると無慙不埒の鏡臺院を上座に据て侍ふ者は誰々ぞ、御閨の御伽の三上安六、御舍弟の鈴木彌兵衞、御妹のおとめ殿、その夫の齋藤龍右衞門、彌兵衞が妻のおきち女郎、金龍寺の楚山大和尚、用人の小室喜大夫、給人の京極又三、いづれも惡事に懸ては一騎當千の兵なれば酒に懸ても何かは二の町に下るべき、猪口は面倒この御茶碗、それも少さい此お椀と銘々に引受〳〵飲ほどに『イザ隱し藝一節を『ナンノ忍駒なら仔細はあらじ』と、前後を忘れて打興じたり。　お安は酌に立たりけるが最はや近よる合圖の時刻、心も心ならずされども鏡臺院が肩を叩けと難儀の役目吩附られて否がたく叩きつ摩りつ仕て居たりける所に。　奥庭隔てゝ彼方の座敷唯事ならぬ人叫び『アレ殿樣を誰やらがお連申して參ります』と喚はるにぞ『ソレ曲者ぞ狼籍ぞ、

宿屋の者は居らざるか、仲間共は裏手に廻れ、表御門をヱッかと締よ、突棒刺叉袖がらみ得物々々を取出せ、』と上を下へと混雑す、左ながら火事場の如くなり。

扨も松村瀬平佐久間定之進大塚廣右衛門の三人は兼て期したる戌の刻(午後十時)案内知つたる森家の裏手暗に混れて忍び寄り、忍術に達せし定之進高塀ひらりと乘越て非常口の切戸をば錠前ねぢ切り押明れば、續て入込む廣右衛門『アノ一間こそ我殿の押込られて御座ます新座敷ぞやござんなれ』と逸る心を押鎮め築山隱れに忍び寄る、瀬平は後詰の二の手にて切戸を鎖して控へたり、喜助は兼て用意の樫棒これ屈竟と身を固め庇合の切所に控へ表の方より仲間共此手に廻らば打仆し奥へは遣らじと構へたり、定之進廣右衛門は首尾よく座敷の椽外まで歩み寄り相圖の咳二ッ三ッ小聲になせど、コハ何に、牒し合せしお安の返詞更に聲えぬ而已ならず俟ども〱雨戸を明けず、不審ながら半時ばかり樹蔭に潛みて俟たるに、内には斯くと夢にも知らず新三郎は近習の侍に手燭もたせて手水に行きやがて手を洗はんと雨戸を半明させたり、天の助と兩人は『殿樣の御難儀お救ひ申上ます』と云より早く新三郎が手を執て椽より庭に引落す『おのれ狼藉何者ぞ』と追取刀に驅出る近習『妨なすな』と手練の柔術、三間ばかり擲付る、新三郎はおぢ怖れ『何人なれば我を捕へ何所に召連行んとするぞ』とわな〱聲して問ひければ『御心安く思召せ、殿樣の御身の上お救ひ申さん其爲に佐久間定之進大塚廣右衛門參上いたして御座ります』と名乘を聞より新三郎『扨は我身を思ふてか、早々邸をつれ出して何所へなりとも連行け』と云ふもか

細き聲音なり『扨こそ定之進廣右衛門、殿樣を奪ひ取り立退んとは成つるぞ、出合へ方々、取卷もの共』と高張提灯差照し通さぬ遣らぬと取圍む、もの〳〵しやと兩人ハ彼方此方をかい潛り切戸口より忍び出で、新三郎を背に負ひ三人共に一生懸命雲を霞と立退たれば、邸の若黨仲間ばら口でハ猛うも罵つたれども手並に恐れて二の足ふみ我追掛て引止んと先を爭ふ者も無く唯アレ〳〵と云ふ而已にて躁ぎ喚はる計なり。

三人の者共は新三郎を堀縫殿が邸へ同道なし斯々なりと申入たるに、縫殿も是には驚きしが、扨しもあるべき事ならねば直に用人を使者に立て『新三郎殿には仔細あつて拙者方へ御越あつて候ふぞ』と通知したり。　鏡臺院は彌兵衛に乘物つらせ廿四日の晩に縫殿方へ差向て一應の謝詞を述べ新三郎の迎として參上なせりと披露したり。　今度の事ハ專ら定之進廣右衛門の兩人その衝に當り瀬平は名を顯ハさゞる方然るべしと縫殿の意見に從ひたりければ、縫殿はよく〳〵此旨を新三郎へ含め置て兩人を傍に座らせて彌兵衛を其座に通らせて『……何にも其方が申す如く新三郎殿を當邸へ同道したるは兩人の仕業なるが、仔細備に承ハつたる其上にて御歸宅を計らひ勸め申すべし、夫に付き先づ其方共並びに鏡臺院等の心得方一應尋ね申さん間心を定めて返答せよ』と目に角立て述たりけり。

○第三十七回

斯て堀縫殿ハ鈴木彌兵衛に向ひて『森家の舊臣佐久間定之進大塚廣右衛門の兩人昨夜貴邸に亂入なし新

三郎殿を引出して是へ同道なしたる事已に當人の申立に立て承知したり、但し其趣意を承はるに新三郎殿差たる癇症の病體にも無之を離座敷に閉籠め置き妄りに外出を差止め飲食衣服其他朝夕の事に至るまで不都合の取扱ひ一家の主人に仕ふる法を失ひたるに由て右の難儀を救ハんため不得止この次第に立至り候ふとの申立なり、就てハ此方よりも其筋へ内々申立て其御沙汰を受る迄は私に其方へ相渡す事なり難し、此段罷歸つて鏡臺院へも申聞よ』と厳かに相達したりければ、彌兵衛も歸す詞なく『然らば私共よりも其趣き御支配へ内届を仕るで御座りませう』と相答へて一旦は引取つたり。縫殿ハ先度の事に懲りしかば直に番頭西郷筑前守方へ罷越して右の次第を申述べ如何はすべきと謀つたるに、筑前守ハ委細を聞き『扨も憎くき主馬が處置振かな、其儀ならば御自分これより月番の御目附都筑源五郎方へ罷越て備に事情を相述べて其意見をも尋ねられよ、拙者よりも依頼の一通只今認め使を以て送るべし』と懇に教へ示したりければ、忝しと謝詞を述べ縫殿は都筑が邸に音信れ委しく事情を陳じたるに、源五郎は定之進廣右衛門の両人を召き寄て其次第を問糺し云々せよと内達せり。縫殿は大に喜び夫より直に青山主馬方へ向ひ『御支配の森新三郎事斯々の仔細に依て拙者方へ參りて候へば同人取扱の事確と相改まる夫迄は拙者慥に預り置き候ふ』と逆寄して斷はつたり。主馬は其前に鏡臺院の使にて此事變を聞知て大に驚き急ぎ大平左門を呼寄て縫殿方へ向はすべしと思ひし所に、縫殿が此通達を受たりければ、礑と怒り『拙者が支配の森新三郎貴殿に於て預り置かるゝ理由は無し早々迎の家來の者へ引

渡これあるべし』と談じたるに、縫殿はわざ笑つて『御書院番の堀縫殿は武士の作法を相守り義理に由て親類の森新三郎保護いたす道こそ存ずれ支配違の御邊の御差圖承はつて新三郎引渡す事は致し申さぬ』と言拂つて暇を告げ悠然として去たりけり。

主馬は益々怒を爲し西郷筑前守へ使者を立て『御邊の御組堀縫殿事云々の次第なれば森新三郎相渡し申す様御談ある様いたし度』と掛合たるに『勤向に關係しては何等の差圖は致せども其身一己の處置振は善惡共に干渉せぬが我等の組の作法で御座る』と返答なし更に取合せざりけり。是にて主馬も困ト果て如何はせんと工夫を凝せる其所に、月番御目附都筑源五郎より御徒目附を以て『御支配森新三郎身分に付き承つたる仔細あれば御登城の上一應面談いたし度』と申越したりければ、主馬は心中安からずも登城なし源五郎へ面談したるに、源五郎は『第一には新三郎癇症の事は事實如何に候ふ哉、第二には鏡臺院並に家來の者共驕奢の振舞これある趣その聞ゑあり御取締は無之候ふ哉、第三には新三郎の三食は一汁一菜の疎飯にして現に着服の如き紬銘仙等を用ひさせ九月下旬の今日に至るまでも袷一枚單襦袢一枚を着用いたさせ置き候ふは如何に候ふ哉、篤と其理由承り申度、その次第に由ては御目附の職權を以て表沙汰にも致すべし』とありければ、主馬は愈々困り切て『何れ篤と取調べ内々申達すべし』と取繕ひて歸宅なし其末遂に御目附方内立會の差圖と成り(一一)森新三郎は癇症にも無之に付以來家政向は同人の決斷に任せ鏡臺院等は口出し致す間敷事(一二)鏡臺院其外家來共無作法の儀は新三郎屹度取

締可致事(三)新三郎家來共の黜陟は新三郎心次第たるべき事(四)新三郎方へ亂入いたしたる舊臣佐久間定之進大塚廣右衛門の兩人は堀縫殿へ預け同人方にて當分蟄居可致事と相定まり新三郎は改めて歸宅なし、其當座は鏡臺院等も身を愼み新三郎を尊び敬ひたりければ、縫殿も瀬平も一旦はその愁眉を開きたり。去れども鏡臺院等が密に毒殺の陰謀ありとは夢にも未だ知らざりけり。

○第三十八回

去程に森家にては表面こそ一旦は納まつたれ、鏡臺院彌兵衛龍右衛門安六文之進又三喜太夫の面々皆押領一味の輩にて憐むべし當主新三郎に心を寄する者とては唯の一人も無かりければ、左なきだに病身虛弱の其上に心細は彌增て『我千八百石の家督に生れ當主に立たる果報はありながら前世の飛業拙なくて斯る孤立の境界に身を苦しむるか殘念や』と悲嘆の涙に袖を濕し鬱々として居たりければ、其屈託が病の種とも成りけるにや、五月の末頃より例ならぬ心地して差たる病氣と云ふにはあらねど何事も懶くて一間にのみ垂籠て居たりけり。それ御服藥御保養と空々しき鏡臺院等が介抱に御出入醫師の三輪幻齋調合の藥日々三帖づゝ服すれど更に効驗も見えざりけり。

* * * * * * * * * * * * * *

頃は六月下旬の事なりしが草もゆるがぬ三伏の熱はいとゞ堪がたく夜に入りても涼風の戰く景色も無かりけり。お安は新三郎の看病に日がな一日掛つたりしが夜食も果て外の侍女と代り合ひ湯浴を成して衣

服を着替へ前栽の方へと涼みがてらに足を運びたるに、茶室の中にて燈を照さず何か囁く人聲するにぞ立聞とにはあらねども壁越に聞ゆるは聞覺ある鏡臺院相手は正しく楚山なり『……幻齋に申付け一思に一服盛て押片付るが第一徒路……貳百兩の金子慥にお預り申して御座る此内百兩は主馬樣へ……委細は來る廿八日に御佛參の其砌り主馬樣と御相談……何分賴むよ彌兵衞も承知して居る程に……ナンノ知れる氣遣ひ更に御座らぬ……』斷れ〳〵の言の端、アッと驚くお安が胸早鐘突が如くなり。見咎られては大事ぞと忍び足して其場を去りしが、翌朝早く五菜の喜助に吩附て實母散を買求め三輪幻齋が調藥と密に是を取替て新三郎へ勸め置き幻齋が調合の藥包は其儘ソッと隱し置き後日の證據と袋もろとも知れざる所に秘め置たり。斯ても猶安心の出來ざりければお安は人無き時を覗ひて新三郎が耳に口寄せ『幻齋の療治は心許なく候ふなれば同人を斷り多紀樂春院の配劑を賴み度と強情に仰あるべし御身の上の御大事で候ふぞや』と敎へたりけるに、お安が忠心天にや通じたりけん神や感し玉ひけん常には物に覺の鈍き新三郎、承知したりと打諾きお安が去たる後に成りて外の侍女を招き『幻齋の療治は氣に叶はぬ當時の名醫多紀樂春院を招きて療治を賴まん其旨直に計らへと彌兵衞其外に申傳へよ』と言出したり。

却說も鏡臺院彌兵衞は楚山を語らひ主馬に內々金子を送り得心させたる其上にて幻齋を語らはせ大膽にも新三郎が病氣に乘じ故に病症に合はざる劇藥を調合させ愚のお安に煎じさせて新三郎に勸めたるに二日たち三日たつても更に異狀の見えざりければ、幻齋不審の顏を成し彌兵衞に囁き申けるは『一昨日よ

り實はお藥の中に多量の烏頭を入れ置たれば昨日か今日は是非とも効驗がある筈なるに些とも變つた體なきは扨も不思議珍奇妙……ナニ阿呆に劇藥が利ぬと云ふ事は御座らぬが……』と倶に不審を成したりける。斯る所に新三郎が幻齋を斷り多紀に頼むと云ふを聞き、コハ以ての外なりと鏡臺院等は種々に諫めたれども、新三郎は一切更に聞入れず、多紀の外の醫師の藥は服用せぬと言張たれば、此上は止み難く然らば其意に任すべしとて望が如くに多紀を招きて療治を依頼したるにぞ折角に幻齋を語らひたりし劇藥も畵餅となり成たりけり。

鏡臺院彌兵衞等程の惡事を巧める輩がお安が佯阿呆を信と思ひ密にお安を招きて『此お藥ハ殿樣の御病氣には此上も無い妙藥併し當人に知らせては飲ませても効が無い、ジヤに由て內々で此藥を御汁の內に入れて殿樣に差上よ必らず人に知すなよ』と言含め一貼の砒霜をば手渡したるぞ淺間しき。お安ハ何氣なき體に請取て帶の間へ秘め置き其夜の中に汗疱の打藥と取替置き翌朝わざと外の傍輩の侍女に見ゆる樣に右の汗疱の藥の白き粉を汁椀の中に入れて掻廻し新三郎に勸めたり。是を聞て鏡臺院ハ扨こそ今度ハ毒殺たしかに行はれしなれと打悦びたるぞ愚なる。是れ安永三年七月九日の朝の事なりき（即ち第一回直訴の朝なり）

○第三十九回

お安ハ新三郎に密に向ひて『私事ハ父瀬平が俄の大病にて事危しと知せ參つて御座りますれば直に是か

ら見舞に參りますが今夕か明朝は歸りまするに依て夫までは御腹が御減あそばしましても何一ツ召上つて成りませんお渇き遊ばしたら御自分で御庭の井戸の水を汲で人に知れぬ樣に召上りませ今は七月十一日尊君樣に取ては一生一度の大厄日今朝の四時から（午前十時）明朝の四時までの間にもし物でも召上らうものならば急度御壽命に障りますと青龍子の占ひよう御心得あそばせや』と夫と無く戒しめ置き心の中には是が我君の御顏の見納か今日直訴に出る上からは其御咎にて死罪に成るは身の覺悟、どうぞ御安泰でおはしませ、御家の納まり附て後に哀れと思召し玉はらば一遍の御回向願ひ上ますと心の中の暇乞せき來る涙を押隱し嗜の帷子着替へ昨夜認め置たりける書面をシカと懷中なし人にも告げず邸を出で足に任せて馳せ急ぎ水野出羽守殿の御登城先へ直訴をぞ成たりける。

主人の命に係はる急訴なりければ、出羽守殿はお安が申立を聞と其儘いそぎ當番御目附を招き寄せ事の虛實は吟味に及びたる上のこと先づ差向き新三郎の一命に變わりては六日の菖蒲となりぬべし夫迄の手當いたされよとありければ、御目附は承はつて候ふとて直に御徒目附御小人目附に下知を傳へ其日の入相ごろには森新三郎宅番として十人餘の役人を出張させ新三郎が飮食を第一として一同の出入を堅く差止め置たりけり。新三郎は驚きてソモ是は何事ぞと尋ねたれば役人は密に耳に口よせて『お安が直訴に其許毒殺の恐ありと聞ゆるからに警固の爲に向ひたるなり我等かく警固の上は飮食ともに安心あれ』と告たりければ、是にて新三郎は初めてお安が言置たる詞を悟り身の毛戰栗て居たりけり。是に變つて鏡

臺院彌兵衛龍右衛門等は思ひ掛なき役人の出張して宅番なせるに出會てモシヤ惡事の露顯の端緒か如何ハすべきと心は千々に亂れしが既に張番受る身と成たれば身動さへも成らざるハ心地よかりし事ともなり、但し男寵の安六ハ此日鏡臺院の差圖を受け同人が化粧料とし別口に立て藏宿に預けたりける金子百五拾兩分前の入用にとて受取に參り右の金子を持參なし夜に入りて歸り來りけるに表門にも裏門にも御小人目付が宅番して出入を嚴しく差留め居たるを見て恂なして引返し其夜ハ知己の方へ一宿なし翌日に至りて樣子を聞きスワ大變と不實者の本性あらはして其金子を懷になし其儘逐電したりけり（右に付安六ハ一旦御吟味を免かれしかども後に至り捕はれて重追放にハ成たるなり）。

初度の吟味は一應の尋なりければ、此條にては左までの事もあるまじと高を括つて居たりしに。第二回の吟味に鏡臺院、鈴木彌兵衛、同人妻、齋藤龍右衛門、同人妻、小室喜大夫、京極又三、醫師三輪幻齋の八人ハ吟味中揚屋入と成り、青山主馬、大平左門、神谷大作、金龍寺楚山の四人は尋までにて返されたり。第三回の吟味は八月十八日なりしが此吟味にて此四人は勿論その外松村瀨平佐久間定之進大塚廣右衛門までも入牢とは成たりけり。此吟味の掛には寺社奉行土岐美濃守町奉行曲淵甲斐守御勘定奉行安藤彈正少弼大目附池田筑後守御目附松浦與十郎にて證人または連累にて評定所に喚召さるゝもの四十餘人に至り世にも稀らしき大獄とハ成たりけり。先づ鏡臺院の陳述には『花麗なる衣服着用の事は此品々亡半左衛門殿存生の砌に賜はつたる衣類にて敢て新調には候ハず、毎夜酒を相用ひ候ふハ若年にて寡居

いたすには血液の凝滞なき爲に藥用として飲むべき旨醫師の勸に由り養生の爲にて候ふなり音曲の事は亡半左衞門殿尤も樂まれたる遊藝なれば命日忌日は云ふに及ばず時々位牌の前にて唄ひ奏て供養いたすべしとの遺言に付き法樂の爲にて候ふなり、新三郎調藥の事は醫師三輪幻齋の療治に付き更に存じ知らざる所にて候ふあり、お安に毒藥の砒霜相渡し新三郎に勸めさせたると是以て痕跡も無き虚構にて毫も覺えは無之候ふなり、將た金龍寺に於て密會あどとは固より存ド知らざると尤も青山主馬も同寺旦那の由にて偶々落合は致せども挨拶は勿論會釋だに致したる事は候はず』と詞冷しく述たりけり。

醫師幻齋は『新三郎病氣に付き療治引受け相用ひさせたる調藥、即ち此藥劑帳に扣へたる如き小柴胡加茯苓湯ふて烏頭なぞ相用たる事は曾て無之候ふ。證據の劇藥は葛根湯の中に烏頭を多量に加へたる物にて其調合樣を見れば賣藥風藥の上に烏頭を入れたりと見受られ候ふ然れば拙者調藥の明き袋にわざと此藥を入れてすり替たるもの歟現に藥の包紙は拙者は常に薄手の藥袋紙を用ひ候ふ此藥は西の內の八ッ切に包みあるが其證據にて候ふ』と は陳述たり。

○第四十回

鏡臺院及び三輪幻齋の白狀は右の通なるが上に青山主馬へ金龍寺楚山其外いづれも裁許の筋道を心得たる輩が詞巧に申述たる事なれば何分にも證據十分ならず。尤も鏡臺院が淫奔なる素行、主馬と密通なして金龍寺にて怪かる會合なせる事、新三郎を退けて傳吉を家督に立て鏡臺院が一味にて森家を押領あ

さんと巧みつる事ども夫に相違なしとは三奉行も見込たれども、是等とても確としたる證據なく矧て況や此度お安が直訴の大眼目たる新三郎毒殺の企に就ては尤も證據を定むるに難かりければ吟味も自づと月を累ね評定所に召出さるゝもの愈々多く連累は夫から夫へと枝葉が咲て益々大獄とは成たれども此分にては憐むべし忠義のお安は取留なき直訴を成したる廉にて死罪にも處せられ松村瀬平等は森家へ亂入の廉にて遠島にも相成りて却て彼の悪徒等が無罪の申渡を受け遂に闇の世の中にも至るべき歟と曲淵甲斐守は竊に心を苦しめ何にしても善悪邪正の判斷を下さんものとは望みたり。

斯て此年十一月に至り甲斐守は何が考へたるにや掛り一座と内議を遂げ先づ直訴人のお安幷に御不審掛つたる青山主馬鏡臺院鈴木彌兵衛の四人のみは以前の如く獄屋に繋ぎ置たれども彌兵衛龍右衛門および兩人の女房ども並びに三輪幻齋金龍寺楚山松村瀬平佐久間定之進大塚廣右衛門其外の者は粗々尋ね相濟たれば悉く出牢を申付け吟味中は同道人へ預け置を申渡し尤寛浴に取扱ひたり。凡そ幕府の例として一旦入牢したるものが出牢して預と成る時は過料か(罰金)無譯(無罪)にて相濟む事なりければ悪徒等は大に喜び正義の輩は大に嘆き關係なき人々は此一件如何落着すべきやと堅唾を呑で居たりけり。然るに其年も暮て明れば安永四年の春に至れども是と云ふべき證據も出ず去とて永引べきに非ざれば二月六日の吟味にて凡は其訊問を畢り、鏡臺院は身持宜しからず、彌兵衛は勤向不束、主馬は宜しからざる風聞と云ふ迄にて差たる罪には落ざれども却て森新三郎は家事不取締に歸着して輕くて半地に減祿せらる

るか重くて改易殊に忠義のお安は遠島か死罪とも相成べき外なかるべしとの評議までに及びたり。お安は白洲にカッパと伏し大聲を揚て甲斐守に對ひ『私は何なる御仕置に成ましうとも素より覺悟の上なればは嘆きも悲みも致しませぬが其爲に御主人の新三郎樣に御疵が附ましては死でも濟ませぬ此度の騷動現在御主人を毒害して御家を押領しやうと云ふ惡徒等が世に蔓り忠義か不忠に成ると云ふ情ない世の狀勢チェー天道さまは御座りませぬか神佛はましませぬか』と兩眼に血を注ぎ睨み詰てぞ居たりけり。甲斐守は心中に哀と思ひ斯る恨のあらせじと去冬正邪の輩とも皆出牢なさしめて預とは成たるに證據を搜して此女を救ふもの丶今日まで未だ一人も無きは何事ぞや我眼力も今度に限りて違ひたるか何にしても此吟味詰なはも猶豫をさせんものをと流石に名奉行の甲斐守は兎角の工夫に默然として居られたり。斯る所に下司の役人は走り出て『ハッ申上ます松村瀨平を森新三郎一件に付き御急訴申上ると罷出て御座ります』と申ければ、ソレ呼入よと召されたり。瀨平は一束の書類を出して『扨も昨夜金龍寺へ亂入いたし楚山を責付々々遂に白狀いたさせたれば楚山は其身の罪を悔ゐ此通り青山主馬鏡臺院の密通並に森家押領の內議に與つたる手紙とも拙者の手に渡し當人は其座にて舌嚙切て自殺いたして御座ります又定之進廣右衛門の兩人は三輪幻齋が歸宅を途中にて待受け極樂水の邊にて同人を拷問なし此通り自筆の白狀書を認させて御座りますれば是以て御覽に入れ奉ります』とて差出したり。是にて忽に證據あがりければ甲斐守は左ればとて此者共を出牢はさせたるなれとて吟味を更められたるにぞ青山主馬は

鏡臺院と密通の上に金子をも借受け森家押領の密議に與つたる事、鏡臺院は密通の上に新三郎を仆して己が產の子の傳吉に森家相續させんと企たる事、鈴木彌兵衞は鏡臺院を說きて三輪幻齋に劇藥を調合させ猶その上に鏡臺院を說勸めて砒霜の毒をお安に渡させ新三郎毒殺を計らせたる事ども落も無く白狀に及びたり。依て二月廿七日の落着を以て、青山主馬は知行召放されて永御預家名斷絕、神谷小作大平左門は免職逼塞、鏡臺院は遠島、鈴木彌兵衞は死罪、齋藤龍右衞門は重追放同人妻及び彌兵衞妻は中追放三輪幻齋は遠島堀縫殿は瀨平等が亂入を唆したる廉を以て叱り、松村瀨平佐久間定之進大塚廣右衞門は森家亂入並に楚山幻齋を恣に拷問したる廉を以て遠島の所格別の譯を以て罪數等を減じて押込、森新三郎は閉門其外は都て無構と申渡されて夫々處刑に及び其後程も無く新三郎瀨平等の咎を許させお安は水野出羽守殿御申渡にて忠義の御褒美を賜はりたり、扨こそ森家は是にて押領の難を免がれたり

（大尾）

脚本ハ佛國
世界ハ日本
當世二人女婿

凡例

一此書は佛國文範と名つけたる佛國人ドクトル、エル、ジエップレーか著書中にのせたる演戯本を基として作りたるものなり原書はもと詞語にして所謂詞曲といふものなるを今改めて我邦の臺帳とす但この作意は英人セキスヒヤか著せる詞曲のうちなるリーア王か二女コチリル、リーガン、に土地財寶をゆつりたりしのち二女は壻王と心を合して老王を逐出したるを種として作り設けたるものと見えたり去からは此書は二回の變化を經て成れるものといふべし

一書中載する所の人物假にその名を設けたれども趣向言語とも大かた原書によりてこれを作れり唯その意やゝ我邦人の意と同しからざるものあるはこれを改めたり又末段結局の場原書は二人の壻改心の事なし老翁の爲に計られて大に慚る所あるのみさしては結局人意に滿たざるをもて已を得ず本文の如くに改めたりその餘は原作の意を易へたる所なし

學海居士志るす

脚本ハ佛國
世界ハ日本

當世二人女婿

學海居士戲編　秋濤外史原譯
寶岑道人校訂　耕雨小史評點

序幕　番町高井務邸門前の場
同　　小座敷の場
　　　靖國神社裏門前の場
同返し　高井務居間の場

本舞臺正面一間。立派なる西洋風の衡門。此柱へ標札を掛け。鐵棒の扉續ひて下手三尺の潜り。鐵棒のひらき。好所へ郵便函をさげ。上下一面磨きたる石垣に鐵棒の垣誂へあり。此内所々庭木の植込み向ふ西洋風建物の書割。上の方三尺煉瓦の塀の袖にて見切り。下の方石造の土藏の道具にて見切る。總て官員高井務邸宅の體。爰に百姓二人旅姿たチョン髷かづらにて立掛り居る。上手に精養軒の若ひ者二人。印半纏ツッヽポ仕出しの荷を置て立掛り居る。下手に巡査棒を持て立て居る。此摸樣流行唄にて幕明く。

開手先借一箇田舍漢來說其邸舍壯麗。

絶倒。

言語絮煩。自ラ是レ田舎漢ノ本色妙。

又借リ一箇來チ說ク其宴集盛大チ。見ル主人ノ豪奢チ。

百姓　一寸物が御尋申たうござります。エアノ招魂社へはどう參て宜ござりましよう。

巡査　一町程往ッてチットと出て眞直に往ば。直に招魂社の脇へ出るワイ。

百姓　ヘイ有難うござります。斯して一寸物をお聽申ても。大層便利に成ました。さうして爰の御役所は、大層立派な物でござりますが。マア何の御役所でござりますナ。

巡査　ム、。爰は高井務といふ人の邸宅トやワイ。

百姓　ヘヱ左樣なら。御役所ではござりませぬか。

巡査　イヤ役所ではない。早く參るがよい。

ト巡査迷惑なる思ひ入れ。

□精養軒若者　オイ〳〵お前方ハ。東京ハ始てかへ。

○百姓　二十五年程前に參りましたぎりで。大層樣子が替たといふ噺を聞まして。見物かた〴〵出て參りました。

△百姓　どちらへ往ても。イヤモウ立派な事で。實に魂消てしまひましたハア。

□精養軒　御一新前の江戸とは見りやア大違ひサ。此高井樣のお邸を何の御役所かと。いひなさるのは無理ハないのサ。

○百姓　それでは此お屋敷ハ。御大名樣でござりますか。

賛稱一番以テ起ニ下文ヲ。次ニ說ル入ニ宴會ニ。

就テ宴會ニ更ニ添ヘ一句ヲ覺フ十分熱鬧ヲ。

此一句不ニ是

□精養軒　今はもう大名と云者は無く成て有ませぬヨ。此高井樣は去る省へ御勤なさる官員イヤナニお役人サ。しかも當時有名の御方で。東京は勿論。日本中へも大體は名の響いたお役人樣だアチ。

△百姓　そんなゑらいお方の。御屋敷でございますか。道理で立派な事だと思ひましたア。

□精養軒　今日は爰の旦那の御誕生日で。貴顯の。イヤ高位高官の方々を。御招きに成て。宴會が有ので。其お料理方をいひつかッて。私共は。けふ此お邸へ來たのサ。

○百姓　そんならあなた方は。そのお料理方でございますか。

☒精養軒　そうサ。それにけふはお客樣が大勢だから。柳橋の藝妓と。新橋の藝妓をお呼に成て。當時名うての俳優では。團十郎さんや菊五郎さんも。晩には爰へござるだろう。

△百姓　それはマア。大した事でございますナ。國へ還て噺の種が。一ッ殖ましたワイ。

○百姓　ドリヤ。ちつとも早く往ませうじやナイカ。

△百姓　これは大きにお喧しうございました。

○百姓　あなた大きに有難うございました。

ト巡査へ挨拶をして。百姓二人捨臺詞いひながら。上手へは入る。是と一處に巡査下手へは入る。

正面の潛り戸明て。家來權平。袴衣裝にて出で來たり。

權平　チ、精養軒か。御苦勞〳〵。大層速かッたチ。

閒話即是下文多少話頭安放處。如此大宴。只是兩個成不得體面所以有是語。

□精養軒　へイ今日はありがたうござります。

⊠精養軒　まだお客様は。お出はござりませぬか。

櫨平　まだ〳〵御揃には。余ッ程時間も有う。アノ臺所の脇の處に。お前方の居所はきめて有から。ゆッくり一服やるがいゝヤ。

□精養軒　それは有難うござり升。

⊠精養軒　それトやお臺所へ。上ると致しましよう。

櫨平　さうしてお前方二人ぎりかへ。

□精養軒　イヽエ。まだ跡から四五人參りますが。手順は致してござりますから。お間を欠く様な事は致しませぬ。

櫨平　馴れ込で居るからさうで有うヨ。

□精養軒　是から直にお臺所へ往ッて。

⊠精養軒　陣取を致して置きましよう。

□精養軒　左様なら御免くだされまし。

ト若ひ者兩人。御膳籠の荷を擔ひで。溜りの内へは入る。

櫨平　また御客様は間があるから。ゆッくりとするがいひぜ。

ト唄になり。向ふより澑代言二股高袴羽織着流し。好の形り。シャツポ半靴ステッキを持ち出で來り。直に本舞臺へ來り。

二股　イヤ權平君爰に御座ッたか。

權平　コレハ二股君いつも御繁多で。しッかり錢儲けが出來ますチ。

二股　どふして〳〵。軀ばかり奔走して。諺にいふ貧乏隙なし。いつも囊中自から錢なしは殆ど困却の至りでござるテ。夫に引換君杯は。よい御主人に使役てござるから。明ても暮ても伴內で。クスリ〳〵取込とは。實に羨しい事でござる。

權平　外見からはさう見えるか知れチィが。其中へは入て居ると。中々さうは虎の皮の褌で。毎日々々お客の出入で。使役る者はコッハイ。人にばかり羨まれて。こんな埋らない事はないのサ。

二股　それといふのも御主人が。當時政府の通りもよく。貴顯紳士の御交際が。益々廣くなるからの事でゲス。

權平　サアそれ故に。彼此の貴顯方から御依賴が口々ある。其上に。やれ官に周旋してくれの。かういふ建白を採用して呉のと。色々の奴が入込で來て。イヤうるさい〳〵實に飽々してしまうわチ。

二股　何にしろ御主人に。その腕前があるからの事。誠に人間は身體に價直がなけりやアいけチへ。僕は當家へ出入するは昨今だから。委悉ことも知らないが。當家の御主人は全體。御一新前からいふ規摸が

只一句既已見其爲人。

劈頭言博得錢財。人品自見。

伴內譬喩絕妙。又知主人平素。

是亦實情。

漸入主人生活來。

不說其威焰之盛。說其擧之援衆妙。

奇絕妙絕。不

將舊勳實力。爲根柢。用一種不可思議奇策。即是大過人處。

一部院本。從這箇裏面。湧將出來。

此句不必緊要的。只是借此人。說出發財原由耳。

如褒如貶。如嘲如罵。又是一種說法。

有たとか。又は國事に關して頗る盡力なされたとか。云樣の話もさッぱり聞ないが。僅二年ばかりの其内に。箇樣な立派なお身に成とは。實にゑらひものさチィ。

權平 そりや君の云ふ通り。一ッは旦那の腕前だが。まだ其外に是まで例のない事で。俄に財産が出來ので。急に自由がきいて來たといふ譯だ。

二股 是まで例のねい事とは。一體それは何樣ことだ。

權平 實は君にも咄をして。かとうどに來て貰ひたいのだ。マア斯いふ譯だ聞なせへ。

ト合方に成り。

こッちの内の親御は。大坂商右衞門と云て。日本でも屈指の大商人。女の子を二人持て。男の子のない所から。其二人の女子へ養子をしたと思ひなせへ。

二股 夫じやアこッちの御主人ハ。元ハ養子にござッたのかチ。

權平 さうよ惣領の姉さんの方へ。養子に來たのが内の旦那で。妹子の養子といふのが。知ての通り此さきの金尾樣だ。處が二人とも學問が達してござるから。金尾樣は銀行へ勤め。内の旦那は官に就き。追々出世をなさるうち。さういふ利口な人達だから。朝夕やさしく孝行にして。親御の心を十分に。マア取てしまッたといふものだ。夫からそく／＼と。西洋の事情をうまく持込で。あッちでハ財産を一代限り。それ／＼に身うちに配分するといふ咄が。親御にすッぱりはまッて。日本開化の先驅に。人の手本

此ノ種ノ頁藥ノ効驗甚タ速カナリ

如レ此敏才焉ソ得レ不ニ榮達一。

一頓挫起ス下文ヲ。

に成ふといふ處から。一昨年の春商右衞門さんが。何十萬といふ財産を二ッに分て。お二人へすッぱり讓てしまつたのだ。

二股　そいつはゑらひ事をやつたものだチイ成程これまで日本に。こりやア例のねい事だ。

權平　そこが二人の衆が利口なのだ。其財産の出來た處から。ソレ交際が廣くなり。きゝめ〳〵へ藥れまれる、纔の間に此通り。貴顯縉紳と世上の人に尊敬される身にお成なすッたのサ。

二股　ナルホド。そこらが人間の働きといふものだらう。死際に成て財産を分與といふのは。西洋にいくらも有事だが。ピン〳〵して居るうちに。財産を讓らせるとハ。西洋人も跣足といふ仕事だ。さうして親御ハ今何をして居なさるのだ。

權平　其財産を讓る時。親御の身體は是からハ六ケ月交りに。雙方のお內へお留申て。お世話をするといふ約定で。こちらの內と金尾樣と。半年交りに世話をしてきたが。マア今月から又こッちの內で。世話を仕なければならぬ番だから。もうさつッき隱居が出かけて來たが。けふこられちやア大不都合だ。

二股　夫でも約定なら仕方がねい。何にしろ親御は夫ドや本たうの樂隱居だチ。

權平　所が樂隱居になつて居ればいゝがチ。舊弊の頑固の大固りで何から何まで氣に入らず。口喧しくつて仕方がないのサ。

二股　現在夫程の財産を。すつぱり讓ると云ふ樣な。開けた人が頑固な事が有さうもねへものだ。

只是伶悧ノ二字。使得絕妙。做得官是。做得商亦是。

射人先射馬手段。

舌端犀利。罵得絕妙。英國微侯盖讓十步。

檻平 そこが外から見へねへ所だ。永い年月孝行して。すつぱり親御を取込で。たう〳〵底まで仕上げた仕事。隱居が開けた譯じやァねい。こつちの仕事が伶悧なのだナァ。

二股 夫トやァ今の隱居さんが。一ッぱい喰た樣な譯だチ。

檻平 夫が當世の人情だ。隱居ももういい加減に。目鼻を明てちいさくなつて居ればいいに。兎角に開けねへ事をいつて。主人たちの邪魔になるのだ。夫に又重荷に小付で忠助といふ頑固親父が付て居て。隱居を側からたき付るので。實に始末にいけねいから。此頃では。どつちの家でも。構ひ付けずに。居てやるが。未だ中々目が覺ねいから。忠助親父から先へかた付けて。こり〳〵させてやらなけりやァ。到底氣の付くやつトやァねいから。君も共〳〵片棒かついで毒突いてやつてくれ。

二股 そりやァぞうさもねへ事だが。何を云ふにも親と云ふ名が有つちやァ。さう粗末にもなるめへナァ。

檻平 何の財産を讓られて仕舞やァ。いつまでも大事にして置くやつが居るものか。そこが舊弊を一洗する開化世界と云ふものだ。

二股 違へねい夫もさうだナ。夫じやァなんと。今夜の御客に供に座敷の周旋方に。しけ込む譯にはいかねへかチ。

檻平 いくとも〳〵。己が主人に咄しをしていゝ鹽梅にやらうから。己の部屋に待て居るがいゝや。

此句喝破可見。來會者亦此等人物。

孝孫女寫得。只一句極有趣味。

二股　そいつは。有難い。實は夫を當込み。こつちの方へやつて來たのだ。

權平　隨分君もいぢのきたねい方だナ。

二股　ソウ人の事計りいへねいせ。

ト合方に成り。上手より金尾の娘お千代。島田かつら。當世風好の拵へ。駒下駄を穿き出て來る權平見て。

權平　金尾のお孃樣。お供なしお一人りでどちらへ。お出成されますか。

千代　アノ祖爺さんは。お出に成て居りますか。

權平　ヘイ只今しがた。お出に成て居りました。

千代　一寸お目にかゝりに來ました。

權平　ヘエ、何の御用で御座りますか。

トふせう〳〵に云ふ。

千代　何で有らうと宜ではないかネ。

權平　何にもわるいとは申しませぬ。

千代　祖爺さんの事と云ふと。お前達までがツン〳〵と。ほんたうに仕憎つて困り切るよ。

ト是にて權平わきを向て頰を搔く。

孛猾奴。慚愧搔頭。二字活現。

老爺滿腹不平。不敢說破來。摸稜口角妙。

どれお目にかゝつて來ましようか。

ト お千代よろしく潛りの內へは入る。

權平 あれは隱居の秘藏孫女と云ふ者はわからねいものだ。

二股 夫じやア權平君。

權平 サア一所に來なさい。

ト權平先に高盆付て。潛りの內へは入る。此摸樣幕明きの唄にて道具廻る。

本舞臺。正面二間常足の二重家體。庇椽側付。向ふ床の間茶壁三尺のかとう口。太鼓張の唐紙物好の拵へ。よろしくずつと上へ寄て。二間折り廻して西洋造りの建物硝子窓の摸樣よろしく。正面の家體より。三尺の渡り屋根付。出は入りわる。此向ふ建仁寺垣。舞臺前履ぬぎの石飛び石のあしらひ。諸處に庭木を植込。下の方船板の塀。下手同じく船板の塀にて見切り。總て高井邸宅小座敷の體。爰に二重の上の方に。隱居大坂商右衛門。ふけたる拵へ。羽織着流し烟草盆を扣へて居る。下手に家來忠助。同じくふけたる僕の拵へ。羽織着流し粗末なる形りにて住ひ居る。

此摸樣木琴入り。誂への合方にて道具とまる。

商右衛門 昨日までは。金尾方に永く居つたる樣なれど月日の立は早いもので。早や六月の期も滿て。今日からしては當家の住居世に氣散しな身の上なれど。何か心の浮ぬ事じやわい。

忠僕カ朴魯ノ性質無顧忌處。此一句便チ見

把翻手反覆ノ光景ヲ。索性寫出。

忠助雖モ朴魯ト自有氣概處極テ好シ。

忠助　御隱居樣。改めて此親父があなたにお願ひが御座ります。

商右衛門　ナニ、改めて願ひか有るとは。

忠助　あなた樣には。私をば別に不足に思召す事は御座りますまいな。

商右衛門　妙な事を申出したな。律義一方に勤めて呉れ。其上に才覺もある其方。頼もしくこそ思つて居れ。何しに不足に思ふぞ。

忠助　夫程に思召て下さるあなた樣を。振捨て參り度は御座りませぬが。どうも私には御奉公が勤まりませぬ。

商右衛門　そんなら暇を呉れと申すのか。

忠助　ヘイ左樣に御座ります。

商右衛門　故も云はずに不意に。何故そんな事を申すのじや。

忠助　是から何方へ參りたとて。お情け深ひあなた樣の。お側に居る樣なわけには迚も參りませぬのは。よう知て居りますれど。金尾樣といひ御當家といひ。世にも非道な成れ方、改め申にも及びませぬが。あなた樣が財產をお讓り成されぬ其前は。あなた樣をば大切に。私共もお目を掛け。有難い御方〳〵で御座りましたが。一昨年の春。財產を御讓りなされて夫からは。打つて變つた御心入れあなた樣を邪魔に成さる事は。夫は〳〵はきついもの。朝夕の事誰一人り御世話を申す者も無く。何から何まで御一人

無レ金則威不レ行極名言

紳商項門一針。

りで。御身の始末を成さるのを。御側に見て居る御いたはしさ。私はモウ箸の上げ下しに。横着ものよ頑固親父。流行後れのごくどうと。毛虫の如くいやがられ。口ぎたなく云はれましても。ナアニあなた様さへ大事に成さるゝ様なら。私はいとひは致しませぬが。大事に思ふあなた様が。金圓は申すに及ばず。地券株券。公債證書。家具。家産から貸金まで。御譲り成されて着のみ着のまゝ金が無ければ威光もたたず。下女下男まであなたをば。粗略にするも其原は。お二人りのお婿様が。そでないからで御座ります る。

商右衛門　イヤ其方がつらひ事は。随分察しないでは無けれども思ふやうにならぬ世の中。まさか其方が今申す程では有るまい。

忠助　夫はあなたがお心好しで。何事も御存ないからの事。一體二人りのお婿様が。體能く財産を譲らせたは。實に欺騙同様の悪法と云ふもの。

商右衛門　アヽコレ〳〵そりや。餘り其方が申し過ではないか。

忠助　イエ〳〵言ひ過で御座りませぬ。今朝まで居りました金尾の旦那様抔は。イヤハヤ吝嗇と云ふか。剛欲と云ふか。實に情けないお方で御座ります。

商右衛門　誰れしも欲は有るものじや。まさかさうでも有るまい。彼の爲平は大の慈善家。しかも慈善會の社長をして救濟院の委員もする施療院育児院抔の取締りをも務め。平素難澁人の救助法抔を考へて。

奇絶妙絶。

博取名譽以固私利世間自有此等人。

一味嘲罵反出於老實僕故妙。

政府へ建白を致したり。新聞へ投書抔をして慈善の事を頻りに催す程の事。隨分人を助すくる志しのない者で無いと思ふて。

忠助　所が夫が口先と筆先計りで。成さる事只の一度も實際に金錢と云つては。一錢もお出し成された事は御座りませぬ。

商右衛門　今其咄しを聞て見れば。平常爲平の振廻ひに。チョイ／＼思ひ當る事も有るが。新聞抔では大分賞られるではないか。

忠助　夫が那のお方の名聞心。何でも世間へは無闇に慈善の事を觸散かして。人望を取ること計りにかゝつてお出で成されますゆえ。新聞には隨分賞て出しますが。其內實は大違ひ。召仕はれる者は。湯粥も十分には啜れませぬ。今度那の旦那が。一生の智惠を振つて考へ出した。新發明が御座ります。

商右衛門　夫は又どう云ふ發明じやナ。

忠助　饑饉年の豫防と云ふ新發明で。減食の法と云ふので御座ります。マア六ケ月位は生延び樣と思ひます。

商右衛門　さうして。夫はどういふ仕法じやナ。

忠助　ナンノたわひも無い事で。毎日／＼おもゆ計りを啜らせて。飯を喰ずに居るので御座ります。私が。第一に試者にされました。

豈唯慈善者。
凡口唱文明者。
而行野蠻者。
非無其人。
問挿一女子。
點綴得不寂寞。
自謂安心。不
知變轉在目
前。

商右衛門　そんな事は少しも知らなんだが。餘りと云へば無慈悲な事だ。

忠助　イヤモウ。那の慈善者が。善根を行ふので。忠助は餓孚に成りかゝりました。慈善者の野蠻には實に困りますよ。

商右衛門　イヤハヤ。あきれたものだ。シカシアノ娘のお千代は。能く出來たものぢや。

忠助　アノ親御樣にどうして。アンナよいお子が出來ましたか。鳶が鷹と云ふので。アンナ優い方は御座りませぬ。

商右衛門　己も日々箸の上げ下しに。氣に叶はぬ事計りあれど。マアアノお千代が。せめてもの心ゆかせ。死んだ娘の寫眞に生寫しぢや。

忠助　あなたの事を大切に。能くお世話は成されますが。あなたに似てお柔和な御氣質で御座りますから。どふも御威光は無くてはいけませぬ。

商右衛門　夫は未だ年がゆかぬからじや。

忠助　イエ〳〵。夫れ計りでは御座りませぬ。お氣立がよすぎます。

商右衛門　何はともあれ六ケ月づゝは。双方の婿の家へ住ふ事の約束ゆゑ。案事た事はない。今日からは又爰の家に六ケ月居る事ぢや。其方も不肖して辛抱して。居つたがよい。

忠助　あなたは御勘辨づよい御氣性ゆゑ。色にもお出し成されませぬ。又私も。旦那方の驕慢は。どんな事も

主人慳吝。自然能移其風婢僕輩。此等事。非經歷世故不可知也。

五倫之外。不可不知。是戾語極痛快。近世以論五倫五常爲陳腐。欲排去之不知彼輩不學無實無識五常五倫爲何物。只以其不新奇厭棄之。

辛抱致しますが。下女や下男までが。押柄に私をこき廻しますのは。どうも辛抱が出來ませぬ。二タ口めには。馬鹿のたはけの。ごくだうのと。ぬかしまして私斗りを追ひ仕ひますのがどうもいま〳〵しくつて成りわせぬわい。

商右衞門　そちの腹立は無理ではないが。下男がそんな不埓を申したら娘に云ふて。小言を言はせたらよからうが。

忠助　あなたのおつしやる事さへ。通りませぬもの私の申すことが通りますものか。當家の奥樣も悪ひお方では御座りませぬが。血に交れば赤くなると。只だ衣裳や首飾に身をやつし。今日は芝居明日は舞踏と。そんなお交際計りが。お忙しく。親御の事抔は。丸で忘れて御座りまする。マア試に奥樣のお部屋へ往つて御覧じませ。何時も舞踏の足拍子か鸚鵡石の諳誦。時の流行とはいひながら。五倫の道の其外は何でも知らねばならぬ世の中。此間あなたの御誕生日に無據用が有ると云つて。お出が御座りませなんだが。那の日は芝居へお出で成されたとの事。昔を知て居る私共はあきれて物が云へませぬ。

商右衞門　其位な事のある事は。遠うから己も察して居る。揃ひも揃つた不實者に。財産殘らず渡したは。己が一生の不覺じや。此上に又如何やうな目に逢ふとも。己は自業自得で諦て居れば。少しも苦とは思はねば。其方にまで其相伴をさせるは。氣の毒じや。望み通り暇をやるから何れへなりと行たがよい。

此翟遂不棄絕君臣父子之義不止也。舉財產歸之二婿。且恐爲其所困苦。噫翁亦好人也哉。

下段伏案。

ト是にて忠助ぢつと思入り有て。

忠助　あなたにさうおつしやられて見ますと。前後見ずにお暇を願ひましたのは恥かしく。十五年以來私のやうな者を。お目を下されました大恩のあるあなた樣が。今の御難義を外に見て。身を退きましては濟ませぬ。もう此上は如何やうあ。つらい憂めに逢ひましても。もうお暇は願ひませぬ。只今のやうに申しました事。どうぞ御免成されて下されませ。

商右衛門　其方がさう云ふ氣に成て吳れば。又己も左程憂目を見せぬやう。どうか思案をしようわい。

忠助　イエモウ。どう致しまえて。私の身は搆ひませぬ。只皆樣があなた樣を。大切に成さりさへすれば。夫て宜しいので御座ります。

商右衛門　實は己も此頃は。心鬱々樂まぬゆゑ。どうか工風をする積り。兼て懇意の伊勢屋津左衛門殿へ郵便を出して置たから。いづれどうにか成らうわい。

忠助　那の御方と御相談を成されましたら。大方よい事が御座りましよう。

商右衛門　何は兎もあれ其方ハ。金尾へ往て己が居間を片付けて。荷物を此處へ運んで吳れ。

忠助　へイ承りました。僅か一丁計りの處。直に此處へ運びます。

商右衛門　そんあら早よう往て來て吳りやれ。

忠助　へイ直に往て參ります

只是一句見孝順氣象。

老翁溺愛情。亦見此一句。妙。

ト早目たる合方にて。忠助宜しく庭傳に下手へは入る。

商右衞門　彼も年來召仕ふたよしみを忘れず。頼母しい奴では有る。

ト合方に成り。後ろの門口より。以前のお千代出で來り。よろしく下手へ手をつき。

千代　お祖父さん。今日は愈お引移りに成りまするか。

商右衞門　チヽ今其事の案内に。出て來たのじや。

千代　つい此間。内へ御出でのやうに御座りましたが。もう六ケ月立ちますとは。早いもので御座ります。

商右衞門　誠に光陰は矢の如くじや。左右してお前は何で出て來たのじや。

千代　お引移りに成りますなら。お手傳を致しましようと存じまして。

商右衞門　チヽさうか。克く來て呉れた。然しお前が己の世話をようして呉れるが。どうか親の爲平が氣に入らぬ樣に見受けるが。己の方はどうでも宜いから。成丈ケ親の氣に障ぬやうにするがよいぞ。

千代　夫はモウ。よう知て居ります。決してお案事なされますな。

商右衞門　お前の事ゆゑ如才は有るまい。今日から當家に住居はしても。折〳〵お前の顏を見に往きますぞ。

千代　毎日どうぞ來て下だされまし。お顏が見たうて成りませぬ。

商右衛門　親には似ぬ。可愛イやつじや。コレお千代今己の顔が見たいと云ふが。此顔よりまだ外に見たい顔が有る筈じやが。

千代　夫は大方團十郎の事を。おからかい成さるので御座りましようが。末松さんや依田さんが。大層お賞なさるゝゆゑ。一所に賞ては居りますが。實は眞底すきなのでは御座りませぬ。

商右衛門　イヤ〱。俳優の事ではない。まだ其外に有筈じや。

千代　さうして。誰の事で御座りまするへ。

商右衛門　今銀行へ勤めて居る。舊い縁者の半次郎。

千代　エヽ

商右衛門　なんと判斷は違ふまいな。

千代　イエ〱。ソリヤお祖父さんが違ひました。何で私が半次郎さんの顔が。見たいなんぞと思ひましやう。

商右衛門　夫なら大方さうでも有う。夫は夫にして置て。是は咄しゝやが。己もあの半次郎は。賴母しく思ふて居れば。ヒヨット又お前が那の半次郎に心が有る○とした所が。現在親の爲平の心に入らぬ半次郎。所詮一ツには成られぬ譯。殊に彼には株家督と云ふものも無く。僅か銀行の月給で。其日を送つて居る事ゆゑ。第一身代か釣合ぬで。

又伏ス後段。

此女子愛慕ノ情。不多言自妙。以見其人品。
從翁口中補出其標致。

千代　夫でも那のお人は。大きな銀行へお務めで。可なり給金も取ておいでとの事。夫計りで無く。行状も正しく發明なお方では御座りませぬか。

商右衛門　そりやハヤ。隨分一ト器量ある事は。己も始から見拔て居るし男ぶりもよし。お前とは好釣合とは思へども。所詮是は調ふまいフツリと諦るがよい。

千代　エヽ

商右衛門　トサア。お前に心の有る事あら。かう云ふ異見をするのじやが。只コリヤほんの咄しじやわい。

トお千代。はいなき思入よろしく。合方變つて後の火燈口より。坂田半次郎。斬髮かつら。羽織着流し。銀行手代好の拵へにて。出で來り下手へひかへ。

半次郎　只今金尾樣へ出ましたら。お引移りと申すこと。夫故此處へ參りました。

商右衛門　ナヽ半次郎か。噂をすれば影とやら。今噂をして居た處ぢや。マア〳〵變る事も無つて重疊々々。

半次郎　時にお爺さん困た事が出來ました。

商右衛門　ナニ困た事が出來たとは。

半次郎　私が是迄務めて居りました銀行は。此度破産しました。

商右衛門　エヽ夫は又思ひも寄らぬ。如何してさう云ふ事に成つたナ。

破産人家ノ事情。可レ憫ム處數ラレ語寫出。自是當時ノ狀體。

一線ノ情縁斷絶了レ如何不二驚愕一。

反テ觀後面ノ失望一。

半次身分。從ヒ不下與二高金二人一相合上處。寫シ出チシ好。

半次郎　ツヒニ是迄世間の人に。信用を失ふた事もなく。那の銀行は手固いものドや。大丈夫ぢやと云はれもし。又銘々もさう思つて居りました處。誠に思ひ設けぬ不意の變事。一統案外の事にて。頭取も實に當惑致し。私へ申されますには。定めしお前も差當り困難な事で有うが。吾とても同ぢ事。今日からしては手ぶり網笠。さして行べき處も無く。是非なく女房の里方へ。當時食客と成る身の上。心の中を推して呉れと。ゑは〲として立退きましたが。府下では屈指と云はれたる銀行の主人なれど。時節至れば是非も無し。右の始末に私も生活の種を失ひ。少々ヅヽ預け置ました貯金も戻らず。こんな困つた事は御坐りませぬ。

千代　そんならあなたの銀行は〇飛んだ事に成りましたナア。

ト憂いのこなしよろしく。商右衛門ぢつと思入り。

半次郎　お爺さん私の運も盡ましたかしらん。

商右衛門　イヤ〲。さう氣を落す事は無い。當家の主人も要職に居るし。金尾とても慥な身代。咄しをしたら何れにか力に成つて呉るで有う。マア身のありつき位は。必ず出來やう。アマリ力を落ぬがよい。

半次郎　難有う御座りまするが、御當家の御主人と云ひ又金尾様にも。私は平素よりお氣に入りませぬゆゑ。あなたがお咄し下されましてもお聞入れわ。どう御座りましようか。

商右衛門　イヤ何を云ふも親戚の事。よも否とは云ふまいて。

不レ失レ禮自有ニ情致一。

此一項蹶ニ後文一。

老翁猶且不ニ曉一得。

浮薄女子摸様妙絶。

半次郎　何分ともに。お爺さんを偏へにお頼み申します。

商右衛門　頼れずとも身内の事。己が萬端咄しましよう○コレお千代。お前は奥へ往て。お驕を一寸呼で呉れ。

千代　畏りまして御座りまする。そんなら伯母さんを爰へおよこし申しましよう。

商右衛門　さうして呉れ。

千代　半次郎様御緩りと。

トよろしく半次郎に色合有て。お千代奥へは入る。

半次郎　どうか御承知が有ればよいが。

商右衛門　マア己に任せて置がよい。

ト合方になり。かとう口より。務の妻お驕。束髪かづら日本風立派なる女房好の拵へにて。出で來り上手へ住ひ。

驕　チヤお父様。ようお出に成りました。只今私はあなたの處へ參らうと。思ふた所で御座りました。

商右衛門　チヽさうか。併し今日からは此家へ引移るのだから。見舞に來るには及ばぬわい。

驕　ほんにさうで御座りました。アノ今日からで御座りましたッケチへ。マア月日の立は早いもので。最う半年立ましたかチイ。モウ此頃では芝居やら音樂やら。又は夜會の舞踏やら。お客を招ひたり招か

冷語。

一句一言舌端有レ刺。

極口枳世間浮薄的人物。罵詈一番。一燕會自有數個主眼。或借以迎寵顧。或借以釣聲譽。或借以媒情慾。或借以騙錢財。被這箇老吏一言喝破來何等痛快。

れたり。忙がはしうて〳〵。あなたのお引移りの日の來るのも。丸で忘れて居りました。チホヽ。

商右衛門　イヤモウ。演戯の舞蹈のと。噪ぎたてゝ。上ケ句の果が身代限りか。嫌な事が流行て來たナア。

驕　今日はチ。宅で誕生の祝ひをしますよ、

商右衛門　夫では定めし大客で有う。餘り感心しない事トやわい。

驕　さうあなたの様に。おつしやらずと。マア私の言ふ事も聞て下されまし。マア今日のお客は縉紳で

其お名前は。

商右衛門　イヤ夫も聞ずと譯つて居る。先づ當節上等社會とか言て宴會に集る輩は。先づ第一が立身の楷梯となる朝貴權家。其次は外國から來て。殊更に交際を需め通人ぶる貴族。又其次は諸處の宴會を嗅付け豪奢人の家を喰倒し歩き。やたらに人の非を語り笑話抔をする者。其次はまた諂諛猥褻の咄しをして。貴人の玩弄となる徒。其外媒商相場師の如きおべつかもの。或は權妻の媒身借金の世話。何でも金にさへ成れば、恥も外聞も搆わず走けまわり。社會に醜名の高き奴つら。マア今夜集る者達は。大概こんな者で有う。こんな者を相手にして。酒もりをしたとて。何が樂しみ。心ある人達は眉をしわめて嫌う事。此己抔も好まぬ事トや。

驕　そりやもふあなたの。昔固氣なお心からは。さふ思召も御尤もの樣では御座りますが。夫がやつぱり舊弊と云ふもの。此宴會で互に親睦を結ぶが。西洋の開明國の風俗で一トロに云へば。マア當世に從

熟字妙。

東閣已非去。反說別人。

鳩尋人材。亦必有此等關係。

ふと云ふもので御座りまする。

商右衛門　成程是は當世で有う。當世の人は皆開化の二字に熱せ上つて居るのトやわい。ハヽ。夫はさうと。チトお前に咄さにや成らぬ事が有る。半次郎の務めて居る銀行が。此度圖らず破産をしたわい。

驕　チヤマア。さうで御座りますかへ。大方アンマリ贅澤が過たので御座りましよう。

商右衛門　是もヤッハリ當世で有う。そんな事は如何でもよいが。差當つて半次郎の身の落付。どうかお前から旦那へ頼んで呉れ。

驕　ソリヤもう云ふては見ましようが。私抔の云ふ事は中々聽ては呉れませぬが。精々咄しはして見ましよう。

商右衛門　一寸は承知しまいナア。

驕　サア詰らぬ人の世話をしますと。肝心の爲になる權門から。頼れた方が遲くなるから。ヤタラに世話は出來ぬと。平常云ふて居りますゆゑ。六ヶ敷いとは思ひますが。マアあなたと二人りで。ヤッテ見ましよう。

商右衛門　そんなら共々に頼んで呉れ。

半次郎　お二人樣何分宜しく願ひます。私も共々にお願ひ申しましようか。

商右衛門　イヤこなたは一旦爰を歸つて。又夕方に出直して。樣子を聞に來るがよい。

一味傲慢眼中無阿舅。

不敢說而心裏不快的摸樣一句便見。

半次郎　左樣なら私は。一旦お暇致しますで御座りましよう。
商右衞門　又夕方に來るがよい。
半次郎　左樣なら御二人樣。又後程上るで御座りましよう。
ト半次郎。よろしく挨拶をして。かどう口へは入る、合方に成り。上手の西洋造りの家より。高井務羽織袴立派なる。好の拵へにて出で來る。玆にてお驕は二重の下手へ扣へる。高井は眞中よき處へ住ふ。
高井　コレお驕。來客待受の支度は大抵よいかナ。知つての通りの今日の趣向。此位立派な饗應は。マア是迄に無からうと思ふナ。
驕　ほんにさうで御座ります。今日のやうな趣向は。未だ聞た事が御座りませぬ。定めしうけるで御座りましよう。
高井　是は舅どの。大きに失禮を致しました。
商右衞門　今日から又此方の家へ住ひます。
高井　モウ六月立ましたかナ。イヤ早いもので御座るわい。イヤ何お驕今夜は余程大勢ぢや〇〇公はお斷りだが〇〇の娘が來る。是はチト嫌で有うナ。
驕　チヤマア。あんな人をお呼び成さるの。

眞ニ是レ耐ヘ不レ得的ノ光景。

此ノ語可レ知ル主人爲スル那箇所ニ推擧。

高井　マアノ\。そんなに云ふなよ。

驕　夫でも評判の悪い人ですから。

高井　評判は悪るくつても。美しいので方〳〵で呼ぶは。さうして彼を好して置けば。良人も悪くは思はぬは。

驕　オヤ〳〵最う片付ましたのかへ。少とも知りませなんだよ。遠に出來て居たのでも。御座りましようかねい。

高井　ナニさう云ふ怪しい事は無いので。那の女の周旋で或る縣へ往て居るのトや。

商右衛門　ハテ扨て。嫌な風俗〇イヤナニ務那の半次郎の身に付て。急に頼みたい事が御座る。

高井　夫は亦どんな事で御座りますな。

驕　アヽもしお父樣。少しお待成されて下さいませ。まだ大事な咄しが御座りますから。さうして那の〇〇さん。夫から〇〇さんは。

高井　ナヽさう〳〵。那の人も心切な人だから。是非呼ねば成らぬ事情柄だが。抗直なお多辨だから。會食の席へは招きにくいナ。

驕　夫でもよく周旋をして呉れた人ですからねい。

高井　どふも義理にも呼ねば成らぬわけ。イヤ今日は都合がわるいから此頃に一人り前に呼ふよ。

眞ニ是耐不レ得。
不レ問ヘ其ノ人物品行ヲ先ツ問フ紹价ヲ。
翁只管説ク其人物。高井只管説ク其ノ紹价人ヲ。
老翁一個ノ紹价。宜レク其不レ聽也。
冷淡如レ此。
驕傲情如レ見。

商右衛門　最そちらの咄しは濟ましたかな。

高井　イヤモウ。あなたの仰せらるゝ事ならば。何成りとも承りましようが。シテ其お頼みは誰殿の紹介で御座りますな。

商右衛門　隨分怜悧で品行の正しい人物で御座る。

高井　イヤ當人はどふでも。宜しう御座りますが。紹介人は誰で御座りまする。

商右衛門　紹介人は吾獨りトや。どふぞ少しの有り付を。世話をして遣て下だされ。

高井　兼々申す通り。何分左樣な詰らぬ事に。周旋をしては居られませぬ。併し外ならぬあなた樣のお頼み。其内どうとか致しましょう。履歴書を持參して置くやう。當人に仰しやて下されませ。未だ客來の事に付種々支度も御座れば。僕は是にて御免を蒙ります。お驕にも云ひ付る用が有る。早く參れよ舅殿御免下され。

　トヅヽト立て上手の西洋造りへは入る。

商右衛門　イヤ是は嚴しい挨拶トやわい。

驕　お父樣お腹をお立なさいますなよ。私が呑込で居りますから。遲くもどうか致しますからネ。○今用が有ると云はれましたから。一寸往て參りますよ。ヤレ〳〵忙しい事。千手觀音樣でも頼んで來たいネへ。

ト急ひで上手の奥へは入る。

商右衞門　現在親の此吾に。よくもあんな挨拶が出來たものだ。半次郎の身のありつき。どうでも是は六ケ敷しい。

トよろしく思入。合方にあり。後ろのかどう口より。金尾爲平銀行頭取羽織着流し立派なる。好の拵へにて出で來り。

金尾　イヤ舅どの。爰にお出なされたか。

トよろしく下手へ住ふ。

商右衞門　爲平見へられたか。

金尾　當家の主人は居られますかな。

商右衞門　在宅で御座るが。今座敷の方へ行れました。

金尾　左樣で御座りますか。些と風聽したい事が有て參りました。マアお聽下され。此程から僕が晝夜眠らずと。考へを凝しました建白が。採用に成りました。

商右衞門　ハヽア左樣で御座るか。イヤ夫はマア目出たい事で御座るな。

金尾　其上其建白を某大臣が。自費を以て出版して下さるとの事。私に於ても名譽な事。あなたもお悦び下されませ。

又是如減食法耳。

把貴人做箇媒价。其人可知。其書可知。

口氣輕薄。一言便見。

又是冷淡。

把世上輕薄ノ人物極口喝破妙。

商右衛門　さうして其建白が行はれると。どういふ利益の有る事で御座るな。

金尾　されば。アノ建白が行れまするど。班白の者道路に負戴せず。內に怨女なく外に曠夫なく。廐に肥馬あり野に餓孚なし。地震雷火事大風。如何なる天災も恐るゝに足らず。先づ第一に難澁者が世になくなります。

商右衛門　夫は何寄構結なる事。イヤナニ爲平。其難澁者を無くする刷毛序に。救ふて貰ひたい者が御座る。

金尾　人の難澁と聞たらば。捨置れぬは僕の氣質。シテ夫はどのやうな者で御座りますな。

商右衛門　吾も。以前は隨分困る者は救ひましたが。今の身では力及ばず。そこで此方を賴むのぢやが。今度親類の內に。不仕合者が一人り出來ましたが。どうか救つて遣つて下され。

金尾　イヤ夫ははや殘念至極。さう云ふ事が御座つたら。ナゼ昨日御咄し下されませぬ。今と成てはどうもはや。〇實は昨夜の事で御座りますが。函館の類燒人救助の爲に。去年中からの貯蓄をば。一錢殘らず搔き集めて。悉な出して仕舞ました。今日に成りましては。どうも致し方が御座りませぬ。

商右衛門　ハテ扨て。此方は深切な事。此廣ひ東京に目に突く程ある難澁者が救ひ足らず。遙かに遠ひ函館まで尋廻るとは。世に珍しい慈善者ど。サア何と識ぬ馬鹿者は賞もしやうが。未だ此吾は其樣なこけ驚の虛喝を。眞に受る程毫毛は仕ませぬぞ。握飯一ッ施すにも。人の目に付き賞られたがる今の世の中。拾錢つゞ施せば新聞に載られる。昔の施は秘密で仕たもの。今は態〻面目にする。何を爲も能得づ

翁是最近最親之人。

言々輕侮。窒是耐不レ得

く。大抵は皆此方の仲間。名聞慈善で表を張り。我が吝嗇をおほひ隠す。扨〻苦〻しい事じやわい。

金尾　イヤサさう一概には申されますまひ。何でも人の爲に成る事をしたら。よいでは御座りませぬか。

商右衛門　イヤ是は聞所じや。此方の御蔭で仕合に成た者が何所に御座る。新聞では此計り見たなれど。現在親類や朋友に。世話に成た者が有るなら聞きましやう。名聞利欲で建白や投書をするより。身に近い家來の一人りも。滿足に喰せる方が増で御座るは。

金尾　イヤ何とでも仰しやるがよい。舅殿の悪口位で名の卑る僕では御座らぬ。夫共又僕の身に何ぞ不平な事でも御座りますかな。

商右衛門　澤山も御座らぬが。マア少し計り無いでもないて。

金尾　然らば。夫をお聞申しましようかナ。

商右衛門　お望ならば。申さうと云つた所が。解るまい。イヤ永く大きに世話に成りました。今日から此處へ引越します。ハイ左様なら。

ト商右衛門よろしく有て。後のかとう口へは入る。

金尾　イヤ年寄の口囂しいには。實に困り切るはい。併しいつも心よしのアノ爺さんに。誰があんなに腹を立させたか。イヤどうで有うと。今日からは此處の厄介。吾の方は先づ肩拔。何しろ主人に早く逢たいものだ。

推委脫卸。小人情態如見。

自己說自己。

ト合方に成り奥より。以前のお千代出で來り。

千代　ヲヤれ祖爺さんは。

ト あたりを見て。金尾と顏見合せ。

あなたはお父樣お出で成されましたか。

金尾　今日此處へ來るなと申て置たのに。何しに來た。

千代　今日はお爺さんのお引移り。お搆ひ申す者がないゆゑ。餘りお氣の毒に思ひまして。お手傳ひを申て。今お部屋を片付て居りました。

金尾　其事ならばよすがよい。今日此處では。どう有てもお祖爺さんの宿はせぬつもりトや。

千代　ソリヤ。又なぜで御座ります。

金尾　今日當家では宴會で。大勢の客を招く催し。就ては隱居が泊つて居ては主人の爲に邪魔に成るゆゑ。明日の朝まで吾の方へ。預つて呉と云ふ事なれども。吾はもう片時も預るのは否だわい。

千代　夫ではお祖爺さんが。さぞお困りで御座りましよう。

金尾　舅の世話は婿の義務。吾は隱居を一生でも。內に居て世話を仕る氣だが。此處の主人も同ド相婿。其氣で無ければ成らぬ所。兎角隱居を邪魔にして。吾の方へ計かりおつゝけたがる。妙な者でさう成ると。吾も嫌に成るわ。一體當家の主人が。隱居を酷く邪魔にするは。了簡が低ので。少し身分がよくな

孝孫女不以議論事理折其親以情動其心。眞是高尙的人物。

冷語刺骨。

ると。直に心の變るのが。今當世の人情。吾が來ても逢もせず。取次杯を出して。横柄な顔をするが。一體己が氣に喰ぬのだ。

千代　夫はさうでも御座りましようが。差當てお祖爺さんを。如何か仕て上げなければ。

金尾　エヽ己れが知つた事では無い。打捨て置け。

千代　夫でもどうも。

金尾　エヽ捨て置けと云ふに。

ト屹といふ。お千代困たものと云ふ思入。下手の入口より以前の忠助。大きな革嚢を提げ出で來る。

イヤ。忠助引越カナ。

忠助　只今お部屋を片付て。お荷物を持て參りました。

金尾　ナヽ能く早く手廻しが出來たナ。

忠助　ヘイ私はあなたのお氣性を。能く知つて居りますから。暦を見ずに。實は先月の廿三日から。最う期月の一日ゆゑ。早う高井樣へお引越し成されましと。申しましたが。ナント お氣に入りましようがナ。

金尾　此ぢやイめ。おつな事を云ひ居るナ。

忠助　ナニアノ私が。

金尾　此横着ものめ。

罵詈往復。以見其鄙猥人物。

是一言耳心情全見。此等婦女身分。若嘵々多言。便反索然。演技者所宜用意。

忠助　ナンノあなたこそ。

金尾　大喰のごくだうめが。

忠助　ヘエ、湯粥を三杯ヅヽ啜つたのが。大喰で御座りまするかナ。

金尾　エヽ又そんな減ず口をきヽ居る。貴樣達と問答して居る暇はない。イヤ大事の用を忘れて置つた。一寸是から歸宅して。出直して參らうわい。お千代一所に參れ。

千代　おき跡から參りまする。

金尾　エヽ又ぐず／＼し居るか。エヽ一所に來イトいふに。

ト手を取て引立る。

千代　コレ忠助便りないお祖爺さんの事頼みましたよ。

忠助　決して御案事なされますな。

金尾　エヽむだを言はずに來ィといふに。

ト早目たる合方にて金尾はお千代を引立て。奥のかとう口へは入る。

忠助　世の中が移り變ると。斯うも薄情に成るものか。夫に付けても御隱居樣の。御勘辨克いには恐入るわい。是から又六ヶ月の間此方の內でどんな目に逢ふか。又此先が思ひやられるわい。

ト合方に成り。下手より以前の權平。高益出で來り。

絕倒。

與老爺言相映。

主客鬪口。並浸分曉奇絕。

権平　忠助いつの間にヤッテ來たな。
忠助　チヽ權平か。今日は御隱居様のお引移りだ。
權平　又食ひ潰しにうせたのだナ。
忠助　ソリヤ始つた。案の通り大分受けがいゝわい。
二股　成程大飯を喰さうな親父に見へるわい。
忠助　餘り見受けぬ男だが貴様はどこの者だ。
二股　僕は今日の宴會に。御招きに預つたのだ。
忠助　ハヽア。夫トやお髯の塵取トやナ。
二股　失敬な事を申すお御客だぞ。
忠助　ナンダ御客だ餘り禮を知らねいので。あきれて物が言われぬハ。
權平　能く手前はべら〳〵〳〵〳〵。口をたゝくが。今日は爰へ置けねいのだからチッとも早く出て行け。
忠助　出て往けなら出ても往ふが。又直に來てやるぞ。コレ貴様も暦位は讀るだらう。今日は十六ヶ月目の一日だぞ。
權平　ナンダ一日だ嘘を云ふな。今日はまだ三十日だ。
忠助　コイツハ妙だ。退出す方トやア。廿三日を一日だと云ふし。受る方じやア一日を三十日だと云ふ。

聽音精養軒。那樣瑣細事。亦要照應。

忠助正論。然那箇開化的人物到底是不解五倫五常爲何物曉々多言。實屬無用。

種〻な暦を持て居るとは。開化の世界は便利なものだナ。

權平 何にしろ。今日はいけねいから。一旦歸て明日來ひョ。

忠助 ナゼ今日はいけねいのだ。

權平 今日は旦那の誕生日。舞踏の催しが有るのだから。貴樣等が居ては邪魔に成るのだ。夫計りじやァ子へ。隱居の部屋は獻立場に仕ふのだから。金尾樣でもう一日預る約束だ。

忠助 先刻まで金尾樣に居たけれど。何の咄しも無かつたが。

權平 咄しが有うと無らうが。此處はすつぱり極て居るのだ。隱居を連て早く往け。

忠助 二タ言めには出て往け〳〵と。御隱居樣は何だと思ふ。此方の主人の親御樣だぞ家來の分際で横柄ナ。貴樣等の指圖は受けぬヱい。

權平 豪氣にゑばつた事をぬかすが。コリヤ旦那の言付だ。

二股 置ねへと云ふのは。仕方がねいじやァねいか。往生をして出て往くがいゝヤ。

忠助 大きに御世話だ。御前の出懸る場處ではない。默て引込で居るがいい。

二股 イヽヤ默つちやァ。引込まねい。己も旦那に言ひ付かつたのだ。

忠助 旦那〳〵と笠に着て追ひ出さうと仕掛ケても。往まいと思つたら。金輪際愛の內は動くものか。

ト きつと云ふ此時商右衞門奥より出で來り。

老翁不﹅知二婿是一樣薄心腸。寧是可﹅憫。

一言有﹅多少不平氣。

商右衛門　コリヤ忠助何も申すな。只今奥で娘から承はつた。今日はもう一日金尾の方へ參らうとしようが。

忠助　夫でも彼方で何の御咄しも無いものを。

權平　咄しが有うが有るまいが。御隱居樣が仰しやるのに。何もいふには及ばねい御隱居樣お早く御出かけ成されませ。

商右衛門　主が主なら家來まで。差出た事を云ふ徒だ。

權平　でもあなたが今出懸ると仰しやたゆゑ。

商右衛門　エヽ。貴樣等の指圖は受けぬ引込で居れ。

權平　ヘーイ。

トうづくまる。

忠助　イヤ妙〳〵。サッサットそつちへ御引込み〳〵。

權平　エヽ隱居が來たと思つて〇覺て居ろ。

商右衛門　長坐をするも心苦しい。徐々と出懸けやう。

忠助　夫じやア。どうもいらつしやいますか。

商右衛門　又明日出直して來ようわへ。

下婢是主婦替身。不敢多言。以居動示不遜。與前文多舌。相對成趣。更妙。

忠助　エヽ。いめへいましいナア。

ト下手より下女一人。商右衛門の駒下駄を持て出で。

下女　へイ御はきもの持て參りました。

ト駒下駄を直す。

忠助　寄てたかつておんだしやがる。

商右衛門　ハテ何もいふなよ。

ト商右衛門立上り。駒下駄をはく。忠助も履物をはき。革嚢を持て付て下る。

權平　明日は成丈け。ごゆるりと入らつしりやませ。

忠助　又そんな口をたゝきおる。

ト寄ふとする。

商右衛門　ハテ。扨て來いといふに。

ト唄に成り商右衛門忠助よろしく有て。下手へは入る。

權平　やう／＼の事で。邪魔を拂つた是で一方がよいと云ふもの。

二股　僕は是から臺所へ往て。獻立場の拵へに掛りましよう。

下女　私もいろ／＼用がある。

此等ノ言語。在ニ事情ニ不レ可レ發ニ之己口ニ。然本戯不レ用ニ淨瑠璃曲言ニ其心事ヘ故不レ得レ已也。

櫨平 大きに御苦勞で御座ります。
二股 そんなら一所に往きましよう。
ト二股下女兩人下手へは入る。
櫨平 頑固な隱居も仕方なし出て往たは往たもの丶。金尾樣でも斷られ定めし困る事だろう。
ト上手の西洋造りより。以前の高井出で來り。
櫨平 只今お出かけに成りました。
高井 剛情に居られたらどうしやうかと思つたが。先づ是で安心した。
櫨平 今晩のお催しに。御隱居樣がお出で成さつては。困つたものだと。內々お案事申て居りました。
高井 チ丶さうで有う／＼。
櫨平 併し御隱居樣は。嘸お困りで御座りましよう。
高井 ナニサ／＼兼々其方にも申す通り。今開明の大氣を呼吸する者は。內輪の者はどうでも搆はぬ。兎角世間の人氣を取り。先づ表向の品行を正しくし。高尙の言語を吐て道德慈善を表と爲し。人望を取る事が何より簡要。
櫨平 あなた樣も是迄の御苦心が顯れまして。新聞紙へお名前が出る度／＼に。あなた樣の必ず榮譽に成る事計り。貴顯縉紳を始めとして。新聞記者は云ふに及ばず。當時有名の豪商達も大抵今の人望はあお

外莊内荏的摸樣。發揮無遺。
奉承得妙。
自負不淺反不道破。
歷數這箇人物。罵詈痛快。
只欠不孝親爺的人物一箇。絶倒。
細心商量毫釐不失。

たの御身に歸して居りまする。

高井　去れば斯く人望を取るまでには。中々己も骨を折た。ソコデ今度全權公使と内國の副大臣が一人缺員に成つたが。誰が是に出るで有うと。己もいろ〳〵考へて居るのじや。

櫂平　夫は指詰あなたの處へ。コリヤ屹度參るに違ひ御座りませぬ。

高井　己も實はさう思つて居るのだ。先づ見渡した所が。だうも外には人は無い。村木氏は細君の尻に敷るゝ人物ゆゑ。大臣の器量でなし。竹本氏は放蕩家で長官たるべきものでない。平氏は才能あれど威儀足らず。世間の評の好ない人。さうして見ると。出るものは己を除ては外にない。そこで己もさつ急に。パットの目に付やうな事を世の中に知らせたいと。頻りに考へて居るのドやて。

櫂平　夫が何より第一で御座ります。

高井　今夜來客の人々にも。十分人望を取るやうに。其方も注意して呉れ。

櫂平　そこにぬかりは御座りませぬ。

高井　又供の車夫の心付抔も。成丈け物の入らぬやう。又しみつたれドやと云はれぬやう。何分其方計つて呉れ。

櫂平　夫も承知で御座りまする。

高井　先づ其事もよし。那の事もよし。夫からお驕に咄して。ムヽアレモよし。エヽト夫から。

左思右想前望後顧腦裏運用何等忽劇。

百萬家産做他兩婿所有了。前日大富豪老祖宗忽然今日變一箇沒家沒室沒一文銅乞丐了。

トいろ／＼指を折て考へる事有て。

なんだか事がごつちやに成て。頓と輕氣球に。

ト兩人顏を見合るを。道具かわるの知らせ。

乘つたやうじやわい。

ト此摸樣早き合方にて道具廻る。

本舞臺正面一間白木の門形の入口。小割の開き戸。上の方低き石垣の草土手。此上一面の生垣下の方同斷總て低き道具。此內上下とも梅の立樹。向ふへ靖國神社本社の後ろを見たる書割。上の方樹木の張物にて見切り。下手藪だゝみの見切。總て九段坂上靖國神社裏門前の體。爰に以前の商右衛門。忠助立かゝり居る。時の鐘風の音にて道具とまる。

忠助　御隱居樣是からどちらへ參りましよう。金尾樣では約束ゆゑ。最う今日からはお宿はせぬと。不人情にもお斷り。

商右衛門　高井の方は宴會に。うつゝをぬかして夫婦とも。身内の難義は見向もせず。二人りの婿が非道なあしらひ。—

忠助　立派なお家か二軒まで。現在近くに有りながら。入る事ならず道端にあなたと二人り。コリヤ立すくみで御座りますわい。

憂憤慚恚。使ミ人且ツ歎ジ且ツ憫ミ且ツ笑ヒ且ツ泣カ。

半次再ヒ至ル高井ノ家ニ事。此一句補出來ル

半次カ身分此處一點。

商右衞門　なんにもろ。コリヤ困つたものじや。

ト水の音合方に成り。下手より以前の半次郎出で來り。

半次郎　伯父さん爰にお出成されましたか。

商右衞門　ナヽ半次郎か。先刻の返事を聞に來たのか。

半次郎　只今高井樣へ上りました所。けんもほろゝのお扱ひにて。無法極る御挨拶。アノやうな浮薄な人に何程お頼み申たとて。所詮お世話は下されまいと。心を決して歸る所。圖らずお目に懸りましたが。承ればあなたをも。今夜のお宿を斷りしとは。言語に耐たる不人情。あきれた者で御座りまするナア。

商右衞門　高井方で斷られ金尾方へ參つた所。是も昨日までの約束ゆゑ。最早內へは入れられぬと。イヤ嚴しい斷り。何れへ是からゆかうかと。實は今考へ中ドや。

半次郎　夫は何しろ。お氣の毒な事で御座りまする。彼處此處と申さうより。今宵一夜は私方で。一ト夜をお明し成されませ。

商右衞門　今に始ぬ此方の深切。忝のう御座る。夫では是から同道して。

半次郎　サア一所にお出成されませ。

ト三人立かゝる。此時正面の木戸の內より。伊勢屋津左衞門。羽織着流し。大商人の拵へよろしく出て來り。

津右不レ說レ救ニ危難一。反テ說レ述ニ意見一妙。

此一句見ニ半次ノ人物一。代テ伯父ニ請ニ津右ノ說一處好。

津左衛門　アヽ商右衛門さん津左衛門で御座る一寸お待ち下され。

ト舞臺よき處へ來る。

商右衛門　是は津左衛門殿よい所へお出下された。

津左衛門　此間の郵便にて樣子はすつぱり譯りましたゆゑ。此方に異見を申さうと。夫で今日出かけて來ました。

商右衛門　ナニ此吾に異見とは。

津左衛門　されば只今あすこで聞て居れば。兩家で宿を斷はられ是に御座るお若いお方。如何なる御緣家か存ぜねど。宿を賴んで御座るとは。どうした譯で御座るな。

商右衛門　是成るは古ひ親類。坂田半次郎と申すもの。やさしく致し呉れますゆゑ。只今同道致す所。

半次郎　私事は半次郎と申す。是成る商右衛門が甥に御座りまする。以來御心安う願ひます。

津左衛門　私は伊勢屋津左衛門と申す。廻船渡世で御座りまする。以後御別懇に願ひまする。

半次郎　差當りました今夜の難儀。見るに忍びず手前方へ。同道致し參る所。只今承りますれば。商右衛門に何か御異見が御座りまするとの事。どうかお聞かせ成されて下さりませ。

津左衛門　イヤ其爲に態々出懸けて參つた此津左衛門。所存の程を申述べましよう。商右衛門殿より聞つしやれ。

津右が議論。不獨救老翁危急。祇濟度二婿過誤罪惡處。與刻薄人情大異。原書此段直以責二婿爲主。雖云痛快殊難了句。今改如此可以見筆力可以見用意。

ト合方に成り。皆〳〵捨石に腰を懸けて。

二人りが婿の身へ不孝。是程までに至たものを。親の身として責もせず。只ちいさく成て居斗りが。人の道とも申されぬ。子供の不孝の行ひ有るは。畢竟親の甘ひから起る事。何拾萬といふ貯蓄をば。末期分配なさるゝこそ。開化の事情とも申さうか。餘り早く讓られたは。コリャ此方の不覺と申すもの。併し濟た事ゆゑ夫は夫として置て。婿達二人りが不孝の行跡。此方が默て居やるとも。天道如何で免るし給ん。遠からぬ内天罰の。婿達二人りの身に報ひ。必す不時の災難にて。憂目を見らるゝことは。コリャ鏡に懸けて見る如し。夫をうか〳〵見て御座るは。親の無慈悲と申すもの。ソコデ此津左衞門が思ふには。此方が今迄の氣を改め。心を鬼に持直し。二人りの婿の不孝を責め。改心させる工風が御座るが。異見に就て一ト狂言やつて見る氣は御座らぬかナ。

商右衞門　御異見一々御尤。實に一言も御座りませぬ。仰の通り財産を一時に殘らず讓りましたは。二人りの婿が狡黠にて。日頃孝行に致されますのを。僞りごとゝはつゆ知らず。やさしい心にほだされて。だまされたのは私の不覺。假令何程孝行に致さうとも。末期まで財産を讓らずに置ばよかつたが。今更云とも返らぬ事。思案に餘り此方まで郵便を出した位の事。此方の異見は何ん成りと。必ず背きは仕ませぬ程に。何分共に好きやうにどうぞ御頼み申します。

牛次郎　私共が何程に氣をもみましても屆かぬ事。

伏後段。

滑稽妙。

忠助　心計りは。己れやれと見ても上と下。

牛次郎　御頼み申すは津左衛門様。

忠助　よろしく御願ひ

三人　申します。

津左衛門　さう了簡が極つたら。吾も一番肌を脱て。無い智恵を振ひましやう。

商右衛門　さうして此方の了簡は。

津左衛門　立ながら咄しも成るまい。マア私の宅へ御座らつしやれ。

商右衛門　左様なら御一所に参りましよう。今日は如何なる吉日か。

忠助　立すくみに成た主従が。

牛次郎　よい方に御目に懸り。

津左衛門　是から不實な者共を。

商右衛門　見反す事に成るといふは。

忠助　どふやら。改良演戯で有りさうな。

牛次郎　作者と頼むは津左衛門様。

忠助　御隠居様の御威光を。

津左衛門　出すのは屹度。

立上るを木のかしら。

受合ひました。

ト皆〳〵立上り此もやうよろしく。

水の音ににぎやかなる

はやり唄にて幕

引付ると調練太鼓ラッパのつなぎて

ちきに引きかへす

本舞臺通し平舞臺正面美麗なるペンキ塗。上の方一間ペンキ塗りの家體。正面戸張を半分卷て。此内に美麗ある寐臺を見せ。硝子戸出入口抔よろしく。下の方ペンキ塗の續き道具。爰に開き口有り。處々硝子窓の摸樣よろしく。正面へ大いなる机へ花瓶を置く。色々花美なる飾物。好き處へ大なる務の寫眞の額を懸け。平舞臺一面緞を引詰め。處々へ椅子を列べ。西洋座敷の摸樣よろしく。總て高井務居間の體。爰に前幕の務。通常禮服好の拵へにて。椅子に掛り卷烟草をくわへ呑で居る。下手に前幕のお驕。派出なる西洋禮服にて。同じく椅子に掛り。寫眞ブックを觀て居る。此摸樣

西洋音樂にて幕明く。

滿面ノ春色裝ヲ得テ絶佳リ

一頓更ニ妙。

極力描出。筆力橫絶。只是一言阿諛諂佞。傲慢尊大。各人ノ摸樣活現。是不罵詈的罵詈。不嘲謔的嘲謔。

腦漿ノ裏ニ畫キ出ス一副ノ蜃氣樓來ル。先ツ說ク陪從。

驕　ト矢張此鳴物にて

今お囃しの拜命の事が。どうかさう成ればよう御座りますナイ。

高井　外に副大臣に成程の人が無ゆゑ。是非とも吾の所へ來るより外は有るまいと思ふ。

驕　さうして。內々の御沙汰でも有たので御座りますかへ。

高井　イヤ／＼斯いふ事は官衙でも發するまでは。ふせて有るゆゑ中々洩る事では無い。

驕　夫れでそなたがさうお仰しやるには。何ぞお目的でも御座りますのですかへ。

高井　別に目的と云ふても無いが。今言ふ通り差當り人の無いのと。又官衙にての人の目付で。あら方は知れるものじや是まで己と交際の惡かつた者も。昨今の所では吾の顏さへ見ると。笑顏を作て愛想を言ひ。彼方此方から吾の側へ寄て來て。式禮の仕樣までが。一ト際叮嚀に成て。何分引立を願ひますと。云はぬ計りの樣子じやて。そこらから考へて視ると。只今副大臣に出る者は。大抵吾と目はしの付て居るものと見へるわい。

驕　さうで御座りますかねへ。ほんたうに嬉しい事で御座りますねへ。もしさう成ると。供廻りの人數も無ければ成らず。人も大勢抱へなければ成りませぬが。家來と名を付るものが。十二三人も置ねば見つともなう御座りますナ。さうして御者も馬丁も。二人りヅヽは無くては成りませぬ。

高井　どの道其位な人數は殖さねば成らぬナ。

次説車輿。

次説衣服。

次従説衣服。及婢僕裝束。

次従説車輿。及外人賛歎。

次従外人賛歎。説遊歩快心。

驕　さうしてあの何で御座りますねい。私の乗る馬車も別に無つては成りませぬねい。

高井　何れ女の乗るのは。別に箱馬車を一輛。拵へらへやうよ。

驕　さう成ると私の服も。此一組ぎりでは外へ出る度に。アノおく様はいつも同ド形りで。おし繪の姉さんだと云れては。外聞がわるう御座りますから。五組位は無くてはいけませぬチイ。

高井　廣く高尚な交際を爲るには。其位は無ては成らぬナ。そりやア拵へても遣らうわい。

驕　さうしてアノ私が連て出る女の形りも。今迄の形りでは見つとも無なりますねい。

高井　さうよ。夫も一ッ奢てやらずば成るまいナ。

驕　さうしたら私の馬車を見て。アレハ何處の貴婦人で有らう抔と。大方人が振り反つて見ますだらうねへ。

高井　さう成ッたら嘸ぞ嬉しからうな。

驕　よい心持で御座りましようねい。

高井　又劇場抔へ行く時は洋服にて一所にナア。

驕　夫と那の公園へ遊びに行て。ヅヽト入口へ馬車を立て。皆なが見て居る處で。あなたと二人りで。ズットコウ生氣な洋服で馬車から降りて。手を組合て遊歩する所を人に見せてやりたう御座りますねい。

最後說飲食。拉々雜々如語無倫次。而自有格法。此等文字。非老手決不能。

粉飾驕誇。如此口吻。多見其人。

更把前段一番鋪張。罵詈他人處。得意狀活寫。

高井 中々愉快な事で有うテ。人は此愉快と云ふ事が。衞生の第一じや。衞生といへば。常食も洋食と極て。コックを抱へずと成まいて。

驕 私も西洋料理は好で御座りますがネ。三度〳〵ではどうも。私にはたべおふせますまいから。私はマア洋食は日に一度として。跡は日本料理のおいしいものと。極て置ましうよ。

高井 夫はもふお前の好にしたがよい。何でも口で甘いと思ふのが。直に幾分かの養ひに成る事故。ナンデモ自分の好た物をたべるがよいわい。

驕 ほんとうにマア。おいしいものをたべて。樂みを仕て夫で養生に成て。面白ひ思ひが出來るとははんたうに世界は開けましたねい。

高井 こんな世界に生れながら。世間にはまだ世が詰つたの。不景氣だのと愚痴を云ふ徒が有るが。實に下等社會の愚物には仕方の無いものだナ。

驕 夫はまた野蠻の風が。脫ないので御座りますよ。

高井 マア何にしろ。早くさうして見たいものだ。

驕 ほんに明日が待れませぬよ。

ト合方變つて。下手の開きを明けて。前幕の金尾爲平。洋服にてシヤッポを手に持ち。出て來り式禮し。

贊稱獻媚ノ狀如レ見ル。

單刀直入ル亦是阿諛家ノ妙手法。

虛遜ノ處愈見ユ得意ノ狀ヲ。

假意做ニ不レ知摸ノ樣ヲ虛僞滿腹。毒極リ惡極ル。驚者至テ此癡モ不レ知ニ癡處ヲ。悶絕煩絕。

金尾　イヤお姉へ樣お支度が出來ましたナ。

　　　先刻から御待申て居りました。

金尾　先刻一寸出ましたが。お忙しい御樣子ゆゑ。お目に懸らず立歸り。服を着替て出直しました。

高井　荒方來客も集りて居れば。直に座敷へお出下され。

金尾　夫はさうと貴兄にお歡びを申さねば成りませぬ。

高井　ナニ歡を仰しやるとは。

金尾　愈貴兄は今度內國の副大臣と極りましたナ。

高井　夫は大方お聽違ひで御座らう。そんな事が有てよいもので。

金尾　否々十目の視る所。貴兄を除けて外に無ければ。斷然極つた事で御座る。

高井　どうして〳〵僕等が如き淺學短才な者が左樣な大任に堪へる者では御座らぬ。夫に素より出世は好ぬ氣性亢龍有レ悔の言も有り。萬一左樣な事が有た所が。平に辭するまでの事で御坐る。

金尾　へエ甘くいつて。

高井　エ

金尾　イヤナニ。うまく君をば出したいと。誰れ彼れなしに冀望して居れば。卽ち社會の輿論と申すもの。いくら御辭退成されても。第一社會で除しませぬ。

慈善家ノ表面蓋シ如レ此。

婦女了ノ傲慢ナル言語。不レ顧ニ高低ヲ眞ニ如レ此。

人不レ知三字使ニ人ヲ噴ニ飯ヲ。

高井　夫ではどうでも。受けずば成るまいかナ。

金尾　明日は必ず大臣に昇進成さるに相違御座らぬ。

高井　是は迷惑な事が出來たものだわい。

金尾　頓て御覽じろ。立身出世を望む者は。貴兄の取立に預りたいと。當家へわい〳〵詰懸て。御門前は市を爲すで御坐りましよう。

高井　愈夫は迷惑千萬で御座る。

金尾　さう成は時は。僕抔も繁々參上致しますが。決して御拔擢を願ふ抔と云ふ心底は毛頭御座らぬ。窮民救助の儀に就て。お力をお借り申したいので御座る。何卒幾重にも御盡力願ひまするて。

驕　我程口は調法なもので御座りまするナア。

金尾　ソリヤ又なぜて御座りまするな。

驕　窮民〳〵と口でおつしやいますが。實はあなたと御自分樣の御出世がお望で御座りませうがナ。

金尾　是はけしからぬ。僕は常々慈善の事には心を盡せど。此身の出世は好ませぬ。只人知れぞ陰德を施す事がすきで御座る。

驕　へイ甘く仰つしやる。ナンノあなたが。

高井　是〳〵なんぼ近い近類でも。笑談も事に寄る。左樣な失敬は申さぬものじや。イヤハヤ。女と申すも

高君誤矣。對客高談多舌。即是開明的淑女。聞之出入貴紳家者。主人致敬禮的人物。是疎的。遭慢罵的人物。是親熱的。即知愈見罵愈喜愈見嘲愈樂
冷語奇絕。
一副熱腸。按捺不住。然猶左右枝梧。寄言公道。掩飾陰私面目。可惡。

のは兎角口が過て成りませぬ。必らず氣にさへて下さるな。

金尾　どう致して。互に惡口を言ひ合は。コリヤ親いからの事で御座れば。氣にさへる杯と言ふ。左様な事は毛頭御座りませぬ。

高井　僕は又君の御氣性を能く存して居れば。既に此程君に重任を托すべしと申た者も。御座つたが僕が一言の下に拒みましたて。

と是にて金尾眞顔に成て。

金尾　そりや又何故で御座りますな。

高井　尋常の人ならば。左様な撰擧に逢ひますれば。上なき榮譽を歡びましようが。君は素より名聞を好まず。榮華を御望み成されねば。君に官途の事を申たとて。到底御承諾は有るまいて。夫故僕が斷つて御座る。

金尾　是はけしからぬ。僕が所存は大に相違いたして居りまするて。

高井　ハヽア。僕の推量が違ひましたかな。

金尾　聊か思召の違ふ所が御座る。ソリヤハヤ仰の通り僕に於ては素より虚名は好ませぬが。國の爲社會の爲には。身を犠牲にして盡す所存。其望を遂度も位置が無ければ。十分に志を遂げられる事も御座れば。以來僕をば撰擧さるゝやうな儀も御座つたなら。決してお斷りには及びませぬ。

愈欲工愈拙。愈欲掩愈著。

冷語妙。

至是馬脚盡露。

偏是成怪

高井　左樣な思召あら。早くお咄し下されば好たに殘念な事を致しました。イヤよろしう御座る。其心を承われば何れ御推擧申で御座らう。

金尾　何分貴兄をお賴み申す。斯う申と何だか官途に望が有るやうに聞へますが。決してさう云ふ了簡で申す譯では御座らぬから。コリヤ呉〻も申上げ置ます。

驕　ヘエヽ。あなたの事で御座りますから定めしさうでお出なさいましようよ。

金尾　何にせよ。さう成らば。互ひの志を貫くと申すものこんな欣ばしい事は御座らぬ。

高井　早くさうして。見たいもので御座る。

金尾　そりやこそ本直が出ましたな。

高井　イヤ是は君に釣込れたので御座る。

兩人　ハヽヽヽヽ

ト三人欣合ふ事よろしく。下手の開きの內より家僕一人書翰を持出で來り。

僕　只今此御手紙が參りまして御座ります。

ト差出す。高井受取て。

高井　名前は此方の名前トやが。何れから參たのトや。

僕　何處からで御座りますか。差置てお歸り成されました。

切迫レ得レ妙。

更妙。

一層妙二於一層一。一迫奇二於一迫一。

妙極。奇極。

又進二一層一。又重二一迫一。

ト云捨て家僕は下手へは入る。

金尾　ソリヤ。來ましたぞ〳〵。何でも貴兄の撰擧狀で御座らうナ。

ト此内高井封を切り。讀み乍ら驚ひて。段〻と讀下し頻に心配の思入よろしく有る。

僕の鑑定は違ひますまいが。恐悅な趣で御座らうナ。○コレサ聲を出してお讀なされ。早く文言が承りたう御座るナ。

ト高井頻りに考へて居る。

コレサどうしたもので御座る。早く僕にもお聞せ成されな。

高井　中々左樣な譯では御座らぬ。コリヤ案外な事で御座る。

金尾　何も其樣にトらすものでは御座らぬ。ほんとうに讀でお聞せ成され。先づお目出たう御座ります。

イヤ恐悅な事で御座りまする。

高井　イヱサ。中々恐悅所か。大變な事が出來致しました。

金尾　まだ其程におとぼけなさるぞ。お明し成されてもよいでは御座らぬか。

高井　何にいたせ。コリヤ容易ならぬ事で御座る。

ト是にて金尾少し不審の思入り。

金尾　夫では貴兄の選擧狀では御座らぬかナ。

喫一驚。

插口宛モ是レ婦女ノ態。

前面蜃氣樓。忽然打壞了。

歡喜快樂之室。變テ爲慘憺悲哀之場。

高井　舅殿が出奔致されました。

金尾　エヽ。ナニ那の老人が。

高井　此手紙を御覽なされ。

ト出す。金尾讀みながら段々心配の思入りよろしく有り。お驕も少し氣の挍めるこなしにて。少し喘て。

驕　アノお父つさんが出奔しましたとへ。

高井　サア。今宵此方の宿を斷り。又金尾氏でも斷られ。往所がないから出奔すると云ふ文體。夫も只出奔して呉ればよいが。是まで舅を麁末にした事や。表に慈善を言ひ立て內實人望を求むる事。我等兩人の內證の事を。諸新聞へ出してあばくとの事。さうなる時は是迄に大骨折て取た人望も。一時に落て仕舞ふ譯け。

金尾　親を不孝にした廉が。世間へ發としたるには。名譽を害するは勿論の事。是まで慈善々々と言つたのが。みんな嘘に成て仕舞ひ。狡黠手段と下すまれ。

高井　上への通りが惡く成れば。官位昇進は迚も叶はず殊に寄たら現職も免の字に成らうも知れず。

金尾　コリヤマア。大變な事が出來ましたナア。

驕　若しさう成たら。どうしたらよう御座りましようねへ。私しは氣が挍て來ましたよ。

掩己過揭人非。忽脫去假面現出眞相。

女菩薩忽然爲女夜叉。

世間婦女子項門一針。

彼推我讓醜態皆露。

高井　ナニ。氣が挍て來た馬鹿め。吾は交際で隙が無から。舅に鬪つては居られないが。夫に代て舅殿の機嫌を取るのは。女房の役だ。其上さゝまの爲には實の親ではないか。さゝまが親を麁末に仕たから。こんな事が出來のだ。

驕　ソリヤ。あなた餘まりで御座りますよ。私は實の親で御座りますもの。何で麁末に仕てよいもので御座りますか。あなたこそお父さんに些とも拘ひ付けず。嫌といふ程愛想づかしを成さるのを。餘りたと思ひますけれど。現在夫の成さるゝ事だから。今迄默て居りましたが。コリヤみんなあなたが惡いので御座ります。

高井　何の吾が惡いものか。吾は男だから外の用が多いは。さゝまは女だから内に居る。幾らでも機嫌が取れるのに。ヤレ芝居だの。ヤレ夜會だのと。女のくせに遊び步き計りして。コレ皆なさゝまが仕樣が惡いから起つた事だ。

驕　あなたが往けと仰しやらなければ。私は何處へだつて往き度は御座りませぬ。さんざあなたのお附合ひを仕た上ケ句の果に。私し一人のせいにされて。ほんたうにこんな引合ない事は。有りやアしないや。

ト少し振ひ聲で泣きながら言ふ。

金尾　コリヤア。姉さんの云ふのが尤も。强ち女房ばかり責る事は無い。皆な貴兄の仕方が惡いからで御

推到金尾勢當然。

法律世界悪弊至此。世間此等錯讀法律者何衆也。

不止同浴笑裸體。正是糞坑裏搏鬪滿身汚穢。一淡一倒。益見其可悪可笑。

前文叙來。何等謙遜辭讓。忽一變爲侮慢罵詈。小人情態寫得無遁形。

座る。

高井　是は怪しからぬ。ナニモ僕計り左樣に責任を受る理は御座らぬ。一體今夜足た一晩の事。君が止てさへ下されば此な事には成りはせぬに。因劫に斷るとは何事で御座る。君の爲にも舅では御座らぬか。

金尾　飛だ處へ飛散の來るものだ。僕の方は昨夜までの堅い約定で御座るから。其約定通りに計ひましたが。どこが悪う御座る。僕の方は條理が立て居りますぞ。

高井　夫が君の不實で御座る。親子兄弟の情は德義上の事。コリヤ德義と約束とは違ひます。僕の方には來客の有る事御存では御座らぬか。僕が情實を斟量有たなら。一ト晩位はお引受け下すつてよい譯で御座る。此變事は全く君の不實から起た事で御座る。

金尾　是は迷惑な事。來客が有うが何が有うが。君の爲には舅では御座らぬか。舅が內に居るのは通常の事。夫を邪魔にして一旦引越して來たものを。態ゝ退出すなぞといふ君の不實さはどうで御座る。此一ツを以て平常が思ひ遣られます。君が平素の不人情が溜り溜つて。斯樣な事が出來たので御座る。

高井　今と成て僕一人りに塗附て。好子に成らうとしたとて。さうはゆきませぬ。君が老人を麁末に仕た事はどれ程の事か。能く存ドて居りますぞ。殊に僕の方では今夜唯た一晩宿を斷た計りの事。既に今朝まで六ケ月の間は君の方に居た老人。居候同樣に取扱ひを成さるゝ故。夫でかやうな事が出來たの

兩個忿爭。殆ド不レ知ニ所底止一。有ニ此一閃。忽チ移ル至ニ阿驕處一。又絶到。又奇絕。

同レ舟。遭レ風。相救ヒ如ニ左右ノ手一。又是這般光景。

で。此責は君一人に在る事で御座る。

金尾　何で僕がそんな取扱ひを致たさうぞ。朝夕大切に機嫌を取た其上。左様な汚名を蒙て引合ふもので御座るか。

ト此時お驕泣ながら

驕　ナアニ。皆な私どものが悪いので御座りますよ。

高井　又しても差出た事をぬかし居る。其分には置かぬぞ。

驕　其分に置けなければ。どうともしてくんなさい。

高井　仕なくつてどうするものか。

ト寫眞ブックを取上て立かゝる。

金尾　アヽコレ〳〵。互にこんな事を言ふて居たとて。到底役に立ぬ事。夫よりは舅殿の在家を尋ね。一生懸命に機嫌を取て。新聞へ出されぬ様に。早く手を廻さねば。實に取て反しが出來ませぬ。

高井　如何にも仰の通り。夫が只今の急務で御座る。アヽコレ僅か一日か二日で撰擧に遇ふ際に至て。飛だ魔がさしたものだ。

金尾　互に爰は胸を摩つて。今迄の事を謝し何な理屈を言はれやうとも。たゞ唯ゝと老人の機嫌を取り。終せるが肝心で御座る。お姉さんも共ゝに誤なければいけませぬぞ。

又是爲婦人所奴視的人物。忽喜忽怒。忽勇忽怯。腦血如湧眞是奇絕。

驕　何の私が誤る事が有ものか。

金尾　サ丶丶丶。さう意地張て計り居ましては。此場の一分は立ても。肝心の用を爲さぬからいけませぬ。

高井　金尾氏の言る丶通り。今言つた事は。皆な吾が惡かつたどうぞ誤るから機嫌を直して。共〻に舅に誤て呉れ。若し新聞へ出された日には。二人の身分に關る事。か丶りや連るお前の身も。矢張不仕合に成る事だ。爰の所を聽分て。どうぞ其氣に成て呉りやれ。是おがむから〱。

驕　夫程に仰しやる事なら。私はどうでも仰やる通りに成りましようよ。

高井　夫で己も一ト安心だ。何にしろ是からは。舅の居處を探のが肝心。コリヤ夜會どころでは。無くなつて來たわい。

金尾　ほんに來客が待て居られやう。

金尾　お驕お前往て何とか繋いで置て呉れ。

驕　私も夫所ではなく成て來ました。

高井　マアサ。さう言ずに往て呉れ。吾も直に跡から往くから。何しろ客を招て置て打遣ても置かれぬ。

金尾　どうかい丶鹽梅にお頼み申ます。

驕　夫でも私一人りじやァ困りますから。夫トや早くきて下さいよ。

陡接消息來ノ過度處何等敏妙。

是レ閤極ノ語。

先ッ喫ス二一驚ヲ一。

前猶是虛叙此反テ是實話。兩個ノ女婿禍事自レ天降リ來ル。

高井　直に往から何分賴む。

驕　何とか往てお愛想を言て居ましようよ。

　ト　お驕不性〳〵に上手の口へは入る。

高井　どうか早く老人の居處を。

金尾　甘く突當たいものだ。

　ト　此時下手の開より前幕の權平出で來り。

權平　旦那樣解ぬ事が御座りましたが。一體どうしたので御座りましよう。

高井　藪から棒にそんな事を言て。吾には倘ほ解らぬは。

權平　只今一寸買物が御座りまして。表へ出ましたら向から立派なる車が參りましたから。若しお客のお方かと一寸のぞいて見ましたら。忠助親父が乘て居まして。私を招きますから能〻見ると。奥の方に御隱居ともう一人り老人が乘て居まして。馬車を一寸止て。御隱居樣がお出懸けなすつて。ヤイ權平の不埒者奴能く聞け。吾は今迄隱して置た財產が。まだ五萬圓あるぞ。今日からは獨立して不實婿奴の世話には成らぬ。今迄よくも吾を麁末にした。明日は新聞に吹聽して。內證の始末を書立て世間中へ觸れて遣ると。還つたら不實婿等に能くさう云へ。此馬鹿野郎奴と。突然私の橫頰をポかりとお張り成されて。颯々と往てお仕舞成されました何だかさつパり譯が分りません。

譬ニ唯恐ルル其去之不ルヲ速。今唯恐ル其不ルヲ能ハ見之。頃刻變化情態可レ畏。唯此一周旋。極テ好便宜。好箇ノ伴當。

反覆轉變。妙不レ可レ言。

更ニ加ニ一句ヲ其意中如ク見ユ。

高井　そりや惜い事を仕た。其馬車の往先を突止て置たかつた。權平最う一ッペン跡を追驅て。其往先を突止て來ィ。

權平　何だかさつぱり。解りませぬから。代言人の高益を立つけて。馬車の跡を付けさせましたから。今に突止て來るで御座りましよう。

高井　夫は出かした能く氣が付た。

金尾　どうか早く聞たいものだ。

ト下手の口より家僕出で。

僕　又〻先刻の半次郎樣がお出に成りました。

高井　隱居の秘藏男子が又見へたか。

權平　御用多だと言て反しましようか。

高井　アヽコレ〳〵。返し所か丁度よいのトや。われも往て直に玆へ通せ。

權平　ヘヱ左樣なら是へと申ましよう。

ト往ふとする。

高井　アヽコレ〳〵。能く叮嚀に大切に取扱へよ。

權平　ヘイ畏りました。何だか解らぬ事だらけだ。

欲依擩所蔑視一箇小生做箇帮助。以拾收敗局小人沒廉恥如此。

滿口奉承。醜態活現。

冷語。

　　　權平家僕兩人下手の口へは入る。

高井　彼が來たらば隱居の居所も。又樣子柄も分るで御座らう。口を添て貰ひましよう。

金尾　何でもおもいれ機嫌を取て。品に寄つたら半次郎から。

　　　ト合方に成り。下手の口より前幕の半次郎。袴羽織にて出で來る。

イヤコレハ〳〵。半次郎殿。サア〳〵夫へお掛成され。

半次郎　然らば御免下されませ。

　　　ト半次郎下手の椅子へかゝる。

高井　何は扨て置き半次郎殿。先刻は意外の笑談を申て失敬を致しました。まだお出かと思ふ內いつの間にか。お歸りに成たと聞。イヤ夫は飛だ事と早速。お迎ひを出しましたが。行違ゐに成たと相見へます。先刻のはあれは皆一時の戲れで御座れば。必ずお氣に障られな。御身のありつきは僕が屹と周旋を致します。身に引受て御周旋申せば。必ず御安心成さるゝがよう御座る。

半次郎　夫は有難う存じます。私も定めし御笑談と存じましたゆゑ。又候伺ひに出ましたので御座ります。夫に付て御隱居にお目に懸りたう御座りますが。どちらにお出で御座ります。

　　　ト是にて高井そんなら半次郎は。知らぬかといふ思入れにて。

高井　ムヽ隱居か。アノ隱居は。アノ今一寸そこへ出られた。

四面遮蔽以爲得計。不知藏頭露尾。

好厚面皮

好笑。

金尾　歸りは多分遲くなりましよう。

高井　來客も追々集つた樣子。兎もあれ座敷へお通り成され。

半次郎　お招きもないお坐敷へ。押て出ますも何とやら。

高井　イヤ〳〵申上た筈で御坐るが。

半次郎　イヤ。一向に存じませぬ。

高井　夫では。使の者が落しましたか知らん。第一番に君の名前は書た筈で御座る。どうかお搆ひなくお通り下され。

半次郎　左樣なら仰に隨ひ。お座敷へ罷出るで御座りましよう。

金尾　サア〳〵。お搆ひなくお出に成され。

ト半次郎立上り。

半次郎　まんまと首尾よく。

高井　エ。

半次郎　首尾能く仕官に。有付たいもので御座ります。

ト矢張り西洋音樂にて。半次郎よろしく上手の口へは入る。引違へて下手の口より權平高益出で來り。

只是説其人ノ語氣已恭。

有箇ノ大帮手ニ。知ニ老翁膽大ニ。喫驚不レ小。

哭面蜂剌的ノ摸様。

權平　只今二股氏が。歸られまして御座ります。

高井　夫を待兼て居つた。さうして隱居の乘て居た馬車はいづれへ參たナ。

二股　權平殿と申合せ。跡を付て參りましたる所。根岸でしかも立派な一ト構へ日本風の居造りで。滊船問屋金滿家の伊勢屋津左衞門と云ふ人の別莊と申す事。

高井　ム丶夫ならば先づ居處は相別つた。アノ津左衞門は大身上。扨は二人りで合併して。何か一ト商法やると見へる。さうなる時はなほ〳〵以て我輩が顏は丸潰れ。是から直に向へ仕懸け。平に誤るが一番近道。コレ權平馬車の支度を致たせ。

權平　ヘイ。畏りまして御座ります。

高井　ヱ丶コレ早く致せと云ふに。

權平　ヘイ〳〵。畏りまして御座ります。

ト權平急で下手の口へ入る。上手の口より半次郎あわたゝしく出て來り。

半次郎　お二人樣大變が出來ました。早くお出下されませ。

高井　ナニ大變が出來ましたとは。

半次郎　今奥樣が。俄かに倒れて苦しんで御坐るやうす。御急病と見へまする。

高井　ナニ妻が急病で御座るとか。

利害所在。雖妻子不顧得。

益甚。

急殺忙殺禍事至了。

胸悸腦痛眼花。身顫。

妻是可副娶的官祿容易不可得的。安願得妻子。安舍得官祿。

金尾　イヤ生憎な處で。さま〳〵な事が出來まする。

高井　そんな事に關ては居られぬ。僕は直に出懸けます。何分跡を御賴み申す。

金尾　夫でも妻君が急病とあれば。

牛次郎　一寸お顔を。

高井　夫どころか新聞へ出された日には。取て反しの成らぬ理。僕は一ト走りいつて參る。

ト此時下手の口より權平出で。

權平　旦那樣只今大臣樣から。御使が參り即刻お出で有るやうとの事。何か至急の御用の樣子。

金尾　扨は貴兄の拜命の事か。

高井　夫ならばよけれども。早此事が知れたので有るまいか。

金尾　何は兎もあれ。早く御座つて。

高井　夫も氣かゝりこつちも大事。

牛次郎　スリヤ。奥樣の御介抱は。

高井　エヽ。夫所では。

シヤポを手に受るを木のかしら。

御座らぬわい

主人精細於テ間處ニ寫出ス。點綴光景處。自ヲ有間致。

高井急いで下手の口へは入る。皆〻是を見送る。此摸樣早めたる合方にて幕

二幕目大切　根岸伊勢屋津左衞門別莊の場

本舞臺正面二間常足の二重庇椽側付。向ふ誂の唐紙床の間の摸樣よろしく。上の方一間高足の二重家體。折廻して障子を立て。是より眞中の家體へ下る事。好の段梯子誂への腰したみ。下の方一間玄關のかゝり。舞臺前履ぬぎの石。處〻庭木のあしらい。何れも物好きたる立派ある住居の摸樣。總て伊勢屋津左衞門別莊の體。爰に二重好き處に前幕の忠助。烟草盆を扣へ座して居る。伊勢屋の下男一人尻端折にて。椽側を雜巾がけを仕て居る。

トかみがた唄に蒸汽車の笛にて幕明く

忠助 イヤ。若ィ衆御苦勞で御座ります。そんなに叮嚀に拭掃除をせずと。始めから奇麗で御座りますわい。

○ 内の旦那は奇麗好で。掃除は餘程叮嚀に仕ないと。氣に入りませぬので。毎日の掃除には。隨分こたへますよ。

忠助 さうで御座りましよう。道理でどこからどこまで。イヤ奇麗な事で。能く御掃除が届いて居ると思ひました。さうして今汽車の音が聞へましたが。アレハ一番の汽車で御座りまするか。

冒頭先安頓老僕了。
補出高井來話一節好。
老翁不平的心腸。反不自說老翁口裏去借別人話說來是留身分處。
櫃平罵詈老翁。有一箇帮手。忠助擯斥高井。亦有一箇帮手。兩々相對是文法。

○　あれは二番汽車で。一番は遠ふに通て仕舞ひました。

忠助　さうで御座りますか。前の汽車はチットモ知らずに仕舞つた。夕べはもふ今までにない。よい心地でぐつすりと寐ましたゆゑ。今朝は思の外寐ぼうを仕ましたわい。

○　夫はさうと。夕べ高井様が御出に成りましたが。御隠居様には御逢ひも成さらず。其儘御歸りに成りましたが。餘程御隠居様は御立腹だと見へますゐ。

忠助　イヤモウ今までは。アノ御二人りの婿さんたちに。嫌と云ふ程邪魔にされ。咄しに成ら無い酷い扱ひ。其御相伴に私まで。イヤもふ酷い目に逢ましたが。御隠居は勘辨強く我慢に我慢をして御座つたが。今度といふ今度は。アノ御二人りの婿達に。困り〳〵させて遣ねば跡の爲めに成らぬと。きばつて御座るし。夫には此方の旦那が味方をして下さるから。何でも今までのいしゆ返へし。爰は思入れきばり込で。困らせて遣ねばなりませぬ。

○　何とも先様では餘程御困りの様子で夕べも頻りに誤て御座つたが。今朝も大方早く御出で有らう。決して奥へ通すな。玄關切りで斷りて返すやうに。旦那から言付つて居りまする。

忠助　何度來ても斷つて。御隠居様に逢せないやうに仕るのが肝心。御前さんも其氣で遣て御くんなさい。

○　そりやァ。旦那から呉々言付て居りますから。承知して居りますわい。

不啻俯首主人。且草已屈膝僕隸。想個人物當容媚權門時節慣目的手段

冷語妙。

忠助 もう徐々。やつて御座る時分だとい。

ト幕明きの唄になり。向ふより前幕の高井。羽織袴立派なる拵へ。高帽ステッキを持出で來り。花道にて。

高井 夕べの立腹の樣子では。一ト通りでは逢てれ呉まい。今朝は何でも忠助から。平に賴んで詫入て見ようが。コリヤ度々足を運ばずは成るまいわい。

ト本舞臺へ來り。玄關よりづか／＼と上り二重へ通る。

忠助 コレハ高井樣。案内もせずづか／＼と。コリヤチト。御無禮で御座りましよう。

ト高井。上の方へ座しながら。

高井 コレサ。其やうに言ぬものじや。長ひ間の懇ろみがひ。好みと云ふものも有らうでないか。

忠助 イヤモウ。長い事那處では邪魔にされ。此處では否がられ。出て往けがしの取扱ひ。大層な好みか御座るわい。

高井 コレサ／＼。さう貴樣のやうに頭からあびせ懸られては。此方で云ふ事も言へぬといふもの。ソリヤモウ。長い間實に僕が惡かつた。惡るかつたと思へはこそ。斯して詫に參たのじや。コレ忠助どうぞ。隱居に取成て逢て呉るやうに誤て呉れ。コレ此通り手を付て賴むわい。

トよろしく詫る。

卑屈極矣。傲氣盡矣。

老翁爲二婿一所レ逐。豈唯些子利害。反看傲尋常事故。至二自己身上一乃如レ此張皇。

老僕亦善レ辭。

如レ見二其肺肝一。

忠助　折角のお頼で御座りますが。どうも是はいけませぬチ。

高井　貴樣も定めし腹も立うが。そこをどうぞ勘辨してどうか隱居に誤て呉れ。

ソリヤア。昨晩も御隱居樣へ私から色々申ましたが。中々極いお腹立で。二度びあいつらの顔は見ぬから。幾度來ても斷つて返して仕舞へと。嚴ひ言付け幾らいつても無益で御座ります。

高井　サヽさうでも有ふが。そこを貴樣の働きで。隱居の機嫌を直して呉れ。隱居が機嫌を直して呉れぬと。實に吾の身の上に關る事トや。頼みと思ふは貴樣斗りトや。どうぞ往て頼て呉れ。

忠助　あなたの御身分に關る事は。そりやあなたのお心柄で。忠助が知つた事では御座りませぬわい。

高井　さう無一酷な事を言ずと。此程困て居る吾の腹の中も。少しは察して呉れたがよいではないか。

忠助　能くお察し申て居りますから夫でいけないと申ので御座ります。

高井　夫は又ナぜな。

忠助　あなた樣の仰しやる事は。ほんの當坐の間に合せ。口先計り誤つた〳〵と幾ら上手に仰しやつても。心から底から惡かつたと思召所は少しも見へませぬ。御隱居樣が御立腹で。お二人り樣の惡い事を。吹聽されては堪らぬと。夫で斯して御座つたので御座りましよふ。爰さへ首尾能く濟して仕舞へば。跡はどうでも好と云ふ表面計りの誤り口上。そんな虚言を眞實にして。お取次を仕る樣な。耄碌は致しませぬわい。

謝過豈有眞偽。其自云眞。其偽可知。

首俯膝屈醜態盡露。

此是此人慣用手段。嘗用得甚有効驗。奈何不出此計乎。

末一句最刺入這箇腦裏來。

高井將云予嘗抵貴人家。絕不見這箇般不通事務的漢子。

高井　夫は貴樣の鑒違ひといふもの。今度といふ今度は心から底から。實に惡いと氣が付て。斯して詫に参つたのぢや。モウ〳〵。眞實に誤るから。どうぞ隱居へ取持て呉れ。

忠助　イエ〳〵いけませぬ。私計りでは御座りませぬ。ノウ若ィ衆。此方も云ひ付つて御座るノウ。

○決してお通し申すなと。主人より申付て居ります。

高井　此方までが同じ樣に。夫では只吾を困らせると云ふものぢや。此程に申に聞て呉ぬとは。餘りといへは情なひ。コレ忠助○コレ忠助○どうぞ頼む○コレ。

ト忠助。知らぬ顏で脇を向ひて居る。高井色々氣を揉む事よろしく有て。懷中より金包を出して。

コレ忠助。どうぞ頼む〳〵。

トいひながら。この金包を忠助の袂へ押込む。

どうぞ聞て呉れ。此通り〳〵。

ト手をついて頭を下げる。忠助袂より金包を出して。

忠助　此お金をお貰ひ申て。嬉しがつて取次やうな忠助だと思つて御座りますか。あなたでは有まいし。そんな鄙劣根生は持ませぬ。コリヤお返し申します。トツトヽ持てお返りなされませ。

高井　コレサそんなに言はずに。そこをどうぞ。

忠助　幾らなんと仰しやつても。是ばつかりは聽れませぬ。私も用か多ふ御座ります。あなたに關て居ら

凌辱侮慢極。矣。至此老僕大是吐氣。

左鍔右宰ノ術計已窮。

れませぬ。ドレ奥へ往きましよう。

ト立上る。高井袖を捕へて。

高井 そんならどうでも。

忠助 エヽ存じませぬわい。

ト早めたる合方にて。忠助ヅット奥へは入る。

高井 イヤ一酷お親父だわへ。コレそこに御座る若い衆。お前どうか奥へ取次で下され。

○主人から言ひ付かつて居りますからどうもお取次は出來ませぬ。

高井 夫でハ矢張忠助同樣。

○誠にお氣の毒樣で御座ります。

高井 餘程根強く搆へたものドやナア。

○早くお返りが宜しう御座ります。ドレ私は御免を蒙ります。

ト ヅット奥へは入る。

高井 コイツハ。一番困たわい。

ト腕組をしてじつと思入る。唄に成り。向ふより前幕の金尾。羽織着流し立派なる拵へ帽子杖を持出で來り花道にて。

亦是同病的人物。絶不見一箇救星。

不是金尾欲聞消息者不堪技癢。

金尾　高井が此處へ來て居ると云ふ事。逢て樣子が聞たいものだ。

ト本舞臺へ來り玄關より。

お頼み申す〳〵。

ト是にて高井下手を見て。

高井　ナヽ金尾氏か。

金尾　イヤ高井氏お出で御座るか。

高井　お構ひなくお通り成され。

金尾　御免下され。

ト玄關より上り二重下手へ住ひ。

シテ隱居の樣子は如何で御座るナ。

高井　イヤモウ。昨夜からして色〳〵と。言葉を盡して詫びましたが。中々の立腹で。未だに逢ふて呉ませぬ。

金尾　さりとては剛情な事。夫はさうと。昨夜大臣殿へお出に成て。其お摸樣は如何で御座つたナ。

高井　さればお聞下され。大臣にも早此事が耳に入て御座るゆゑ。昨夜僕に申さるゝには。御身と舅殿との間に不和を生じたる由。噂によれば其原因は。御身が舅より財産を讓られて體面を起されたるに。怠

大臣言語ノ中間。挿ム金尾ノ言ヲ。錯綜得タリ奇絶。高井述フ大臣ノ言ヲ。一直說キ至ル下。中間處々。將ス金尾ノ言ヲ錯叙ス。此處俳優最モ當シ注意ス。情態呈露。極ム言外之妙ヲ。

百思千慮只爭フ此一線ニ。

此老耄翁實ニ壞リ此局ヲ了ル。

若シ受ケ他ノ尊敬ヲ去ル。然後放擲ム老耄翁ヲ去ル亦可ナリ矣。

を仇に不法の扱方を致されしゆゑ。舅が大に立腹し。御身の家を立退かれしとの事。

金尾　ソリヤ此事が早。大臣殿の耳に入て御座りますか。

高井　尚亦大臣殿が言るゝに。併し拙者は是を虚傳と勘考致せども。讒言の爲に徳義を汚さるゝは。往々ある事で御座る。殊に官吏と申者は稍すれば他人に妬まれやすきもので御座れば。能々御注意成されぬと。惡評は世間へ廣まりまするゆゑ。早く明白をお立なされ。御身は不日顯職に乘らるゝ身で御座れば。御忠告申す。

金尾　ヤレ〳〵夫は殘念至極。

高井　大臣の詞つゞき御身も知らるゝ如く。現に今一省に缺員御座れば。差詰め其補缺は御身で御座る。

金尾　ヱヽ那の老耄翁。

高井　大臣の詞つゞき併し此度の嫌疑晴れざる内は。拜命と申す事は到底出來ませぬぞ。惡評高き人物を撰擧致しては。輿論が六ッかしふ御座る。素より官吏は賢良なる者でなければ。成ませぬ譯。然ば世人の尊敬を受るが大切で御座ると」。イヤハヤ眞綿て首をしめるやうにいはれました。拙者は右の風評は全く虚傳にて左樣な事は決して御座らぬと。辯解いたして御座る。

金尾　夫は至極御尤。

高井　扨て右の辯解にて。大臣殿も大に滿足致され。尚又申されたるには。然らば忽ち嫌疑氷解して。御

一宴會豈是等閑事。毀譽利害並決於此。

談何容易。

忽輪到金尾身上了。

倒絕。

冷罵妙。

燒眉之急。願不得他。

身の寃罪も。サラリと公衆へ知れ申たで御座らう。併し悪評が一旦廣まりし上は。是を止るにも明白で無ては成りませぬが。恰好今夜拙者方え朝野の紳士來會の筈で御座れば。此集會をば御身の爲利用致たさん。舅殿御同道にて今晩お出成され。是が肝心で御座ると。

金尾　シテ君には。何と御答成されました。

高井　夫は何寄り仕合なる儀。少しも差支御座りませぬ。必ず同道致しまするど答へ置ました。夫故只今隱居へ談を致し同道致し貰はんと。手に手を盡して居る所で御座る。

金尾　夫にて思ひ當りました。昨朝福田會に於て。棄子に關する報告書を。僕が朗讀致せし所。來會の人より悉く喝采を得ましたが。其會員中只一人僕へ申せし口上が。ヶ樣で御座る。世間には無慈悲にも。子供を棄る親も有れば。又大切ある親を棄る不孝者も。有るでは御座らぬか。然らば棄子計りで無く。棄親の爲にも救助法を設けたらどふで御座らふと。云れましたゆゑ。はテ妙な事を云ふとは存ドましたが。一向平氣に取合ず。挨拶もせず居りましたが今のお咄しを聞て見ますと。二人りが親を邪魔にした事を大體世間の人が知て居ると見へまするぞい。

高井　さすれバ何々猶豫は出來ませぬ。ヶ樣致さう取次も何も拘ず。舅の居間へ押掛て平めに成て詫入り。直談をするのが一番近道。

金尾　如何樣夫がよう御座りましよう。

平時聞此等語。反不覺恐怖。今日耳底。如聞霹靂。心鬼爲悸。兩個膽怯狀。罵得活現。

急遽辯得阿諛的言語。想是平常講究得慣。

高井 夫では是から二人り一所に。

金尾 拘はず奥へ踏込みましよう。

ト兩人立懸る。此時奥より前幕の津左衛門。羽織着流し好の形りにて出で來り。

津左衛門 二人りの衆。那處へお出成さる。

高井 此方は當家の。

金尾 御主人で御座りましたナ。

津左衛門 案内も無く人の内へ。づか〳〵と通るは。コリヤ失敬で御座りますぞ。

高井 イヤ。決して左樣な譯では御座らぬ。今お取次をお頼み申さうとした所で御座る。

金尾 何は兎もあれ御主人には。誠に久〻にてお目に懸りまする。

高井 いつもながら。御壯健で重疊な事で御座る。

津左衛門 さうしてお二人りの衆は。何の御用でお出成されましたナ。

高井 其儀は。昨夜も忠助より申入れました通り。是まで段〻所爲し事。皆一〻此方の惡い事を初めて心付しゆゑ。其事を隱居に詫入ん爲。態々御當家へ參て御座りまする。

金尾 今高井の申す通り承はれば隱居には。御當家のお世話に成て居るとの事。不孝の謝罪を致さんと。夫故參りましたので御座りまする。

主人意趣所向。僮僕即從之。固其理。何必命令使之然。

一々切中其要實。

表面諂諛。裏面計較。判然自別。一言破的。

津左衛門　イヤ其事ならば止に成され。是まで永ひ其間。隠居を邪魔に成された事は。一ト通りの事でなく。朝夕氣無味事だらけ。其上に召仕の者まで。隠居が何を言付ても。いつも唯と立て。其言ふ事を聴た事が無いとは。怪ぬ事。

高井　夫は召仕の者の不行屆僕は一向に存しませぬ。

金尾　夫まで我輩の咎と來ては。チト迷惑な事で御座りまするて。

津左衛門　否〻さうで御座らぬ、主人身を扱ふ事。何の樣にも大切に事へべきを。食客同樣に思つて分附る用さへ。給ぬとはコリヤ主人の申し付が惡いからの事。此責任は除れませぬぞ。

高井　成程さうお諭れば。那處も僕等が惡う御座つた。只何事も。只管に佗を致せば。どうか隠居の心の解るやう。

金尾　御主人から。御説得を何分宜しう願ひまする。

津左衛門　否〻假令何やうにお言つても。御兩人の心の內には。悔悟なされた譯でも無く謝罪。爲でも御座らねば。左樣な取次は出來ませぬ。

高井　ナニ悔悟謝罪の。

金尾　爲でないとは。

津左衛門　世間の人の口の葉に。輕薄不實と聲言さるゝが苦しさに。語を飾り頭を低け。俄に作る追從輕

把道徳慈善假面極力剝去。然後施治療是療人奇術。

此是鐵案斷不可動。入室執戈。無言可遁。

二婿逐去老翁。此在昨日。二婿爲他人所逐去。此在今日。

薄。是迄世間の人達へ。道徳慈善を口實とし。賢人めかして居られたのが。一度に兀ては大變だと。悸〻して御座るので有らうが。其汚穢心腸を博覽會に陳列して。世の中へ披露する時節が。到來致したので御座るわい。

高井　サ、、、、如何やう仰られても。今更一言も御座りませぬ重々僕等の不調法。

金尾　悔悟致して此通り。兩人共に手をついて。謝罪を致せば津左衛門殿。

高井　何卒お執成を。

兩人　お頼み申す。

津左衛門　今度の隱居の腹立は。一ト通りでは御座らねば。もふ誤つても無益な事。隱居が家出を仕たのでなく。御身達が追出して置て。今更そんなに詫られては。醜では御座らぬか。諦てお歸り成され。

高井　是は亦情ない。隱居こそ腹をも立ましよが。何も貴殿に夫程に恨を受る覺へもなし。

金尾　今我〻が心裡をお察し有て。どうか偏にお調停を。

津左衛門　幾重にもお斷り申す。爰は手前の宅で御座れば。長居は甚だ迷惑致す。サア早くお歸り下され。

高井　そんなに酷く追出さずと。爰に居る位は。よいでは御座らぬか。

津左衛門　イヤ。片時も迷惑なれば。早くお歸り下され。

小人自恕心情。不レ不レ得レ至レ此。

如下別思二一計一者上。不レ知。仍是循レ舊風レ膝。

是老二於世事一的人物。

ト岐度と云ふ。是にて兩人むつとしたる思入にて。

高井　此方が惡ひと思へばこそ。手をついて下から出れば。餘りと云へば酷ひ扱ひ。

金尾　左程執成が出來ぬとあれば。是非が御坐らぬ。外に工夫を付ると致さう。

高井　我〻の人望。隨分世に高く成て居れば。まさか一時に衰へも致すまい。

金尾　朋友知己の其中では辯解して呉る者もあらう。

高井　殊に實の親と云ふではなし。

金尾　一刻も早く立歸りましよう。

高井　夫がよふ御座る。イヤナニ津左衞門殿。お邪魔に成る我〻は早くお暇仕る。

津左衞門　再びお出には及びませぬぞ。

高井　餘りといへば。

金尾　ハテ扨てお構ひなさるな。僕が取存が御座れば先〻爰をお歸り成され。

高井　如何にも。左樣致さう。イヤ是は大きにお世話で御座つた。

ト唄に成り。兩人困り切たる。思入よろしく。向ふへは入る。奥より忠助出で來り。

忠助　大層嚴しく呵責ので。仕方なしに歸つて往れましたが。然しどうやら憤た樣で御座りましたな。

津左衞門　否〻決して憤たのでは御座らぬ。先づ段々狂言が面白く成て來るで。是からが此方の仕事。

此沒甚麼關係。只撤二個去。

小人狡黠手段。所謂狠相食者。

將一擔罪惡。盡推委別人身上去。

忠助　さうして是れからの御工夫は。

津左衛門　少し内々咄しも有れば。奥へ來て下され。

忠助　そんならあなたと御一所に。

津左衛門　サア御座れ。

ト合方にて。兩人はよろしく奥へは入る。合方變て向ふより以前の金尾出で來り。花道にて。

金尾　今の高井の樣子では。吾を出し拔き一人りして隱居ゟ取入る了簡と見て取たゆゑ。用をかたつけ。道を變て途中から先へ廻て爰へ來たが。どうか高井を出し拔て遣りたいものだ。

ト本舞臺へ來り。とつと玄關より上り。眞中の二重へ來る。奥より忠助出て。

忠助　チヤ金尾樣。又お出成されましたか。

金尾　今に高井が來るで有らうから。吾が居ると云ふ事を。決して云ふて呉れるな。どうぞ隱して居て呉れ。

忠助　夫れは亦ナゼで御座りまする。

金尾　一體舅を麁末に仕たは。皆高井の所業で。那の男の惡いお庇で。吾までが隱居に憎れたのは。實に迷惑な咄しだ。夫故高井と一所では。どうでも詫は叶わぬ理。ソコデ高井に拘ず。吾は吾で。一人りで隱居に詫入れて。吾の赤心を見せる心ドや。

或問。騙拐者何以能騙人。答曰。唯是一味誠實。殆類此。兩々相欺。眞是好敵乎。

爭先的工夫。蓋從爭仕途邊得來。

又字。實是耐不得。

忠助　夫は承知致しましたが。御隱居樣が御聞成されればよう御座りますが。

金尾　そこは一生懸命に。誠を以て誤つたら。貫かぬ事は有るまい。

　ト此內忠助向ふを見て。

忠助　向ふから高井樣がお出成されます。

金尾　果してさうで有らうと思つた。何か吾を隱して呉れ。

忠助　然んなら那處の小座敷へ。隱れて在しつやいませ。

金尾　夫では忍んで居やう。必ず默つて居て呉れ。

忠助　承知致しました。

金尾　認得ぬ內ムヽ。

　ト思入れ有て。上手の二重家體へ忍ぶ。向ふより以前の高井出て來り花道にて。

高井　まんまと金尾を出し拔いて。是から此方の仕事だが。どうか甘く遣りたいものだ。

　ト本舞臺へ來り。玄關から內をのぞし〳〵

忠助〳〵。

忠助　ヲヤ高井樣。又お出で御座りますか。

高井　先刻ハ。チト差合ひが有たゆゑ。十分咄しも出來なんだから。今途中から引き返して來た。當家の

益罵益喜的即是。

此一言極緊要的。次第入殼中來。

又字。更是耐不得。

味爽馳車。請見大官的一様喜氣。

主人津左衞門殿に一寸お目に懸りたいと云ふて呉れ。

忠助　先程那の通りにお強云りましたから。最う無効で御座りましよう。

高井　さうでも有らふが。唯た一ト言申上たい事が有ると。どうぞ左様言て呉れ。

忠助　夫程に仰やる事なら。マア申上けて見ましようわい。

高井　どうぞ左様して呉れ。

忠助　暫く是にお待成されませ。

　ト忠助奥へは入る。高井色々考へるこなしよろしく有り。奥より以前の津左衞門出で來り。

津左衞門　高井氏又わせられたか。

高井　是は〳〵御主人早速のお逢ひ。誠に難有仕合。足た一ト言申上けたい事が御座つて。御面會を願ました理で御座る。

津左衞門　此津左衞門も忙しい體。御用が有るなら早く言て下され。

高井　其理は斯様で御座る。

　ト合方に成り。

高井　先刻は金尾が居りましたゆゑ。僕が赤心を申上る事も成らず。夫故一旦立歸りて。出直しましたる次第。少の事では御座らぬが。僕と金尾と兩人して。隱居を麁末に仕たと云ふ立腹を蒙りては。實は僕

舌端有花煥燦喜耳。

言中有刺隱痛徹身。

滿口奉承欲聞免罪之策。

故爲此語以釣出後段文字。津左解事的人物。

は埋らぬ理。尤も僕の方に隱居を居きましても。隱居へ對して。チヤホヤと饗待を致さ無かつたには違ひ御座りませぬか。故意とした譯ではなく。諸方の交際に隙を得ず。實に出來なかつたので御座ります。中〳〵以て僕に於ては。素より隱居を麁末に仕る樣な左樣な。心は毛頭御座らぬ。どうぞして慰めたい。どうかして樂ませたいと。夫のみ心に思わぬ時とてはない程の事。夫には引替へ。那の金尾抔は。ヤレ慈善の陰徳のと人前計り飾て居れど。貧民救助は口の先と筆の先で。自分から金を出して。實際に施すと云ふ事は。只の一度もない大欲張りの取籠み家。隱居を邪魔に仕た事は實に見るに忍びぬ有樣。折り〳〵異見も加へましたが。一向聽ぬ馬耳東風。朝夕隱居に苛く當り。居たゝまれぬ樣に仕懸ける抔と。實に不孝極た仕方。僕とは丸で反對なれど。同ド相婿の事ゆゑ。遂には僕も不孝不實の係累に汚名は受けましたが。素より心に無い事ゆゑ。もう何事も隱居次第。言はるゝ言葉を背ぬのが。僞りならぬ僕が赤心。どう致したら那の隱居が。機嫌を直して呉れましうか。あなたのお智惠を拜借致したい者で御座ります。

ト此內。上手の二重家體の障子を少し明て。金尾窺ひ居る。

津左衛門　そんなら親御を粗末に仕たのは。金尾氏の不實意にて。君には左樣な事は。無かつたので御座りまするか。

高井　無かつたとも〳〵。大事〳〵と心に懸て居りました。殊に金尾へも異見を致した位の事。何分お察

輸産一事不容說出來。使其自得之妙。

自謂如是足矣。豈圖有後文。

初讀之謂事成矣。不謂反是計中之計。

し下されて思召の程をお聞かせ成れて下さりませ。

津左衛門　其儀は。御親子の間柄の事。私抔が關る可き儀で御座らぬ。此儀は御身の胸一ッで御思案を成されたがよう御座ります。

ト是にて高井ギツト思入り有て。

高井　先づ僕が存じますには。口でまた〳〵申さうより。悔悟謝罪の赤心をば。表して見せる肝要と存トますゆゑ。先年譲り呉れましたる。財産貳拾萬圓を一錢残らずそつくり其儘。隠居へ還すが心の潔白。サア是程に存トまする胸の内を。隠居が知て呉れましよう。どうかお執成を願ひまする。

津左衛門　成程是は好い所へお氣が付かれました。其お詞を承て見れば。是迄扱ひの粗畧なのは。全く金尾氏の罪にて。御身の業とは思われぬ宜しう御座る。隠居殿が何と申さるゝか存トませぬが一ッ咄して見ましようから。其書面を認てお出し成さるがよう御座る。

高井　早速の御承知。先づは千萬忝ひ。然らば是より立歸り書面を認め。愚妻から詫入る事に致しましよう。

津左衛門　夫もよろしう御座らう。併し隠居殿が夫で承知すればよいが。

高井　そこは。何分あなたよりもお言葉添へを願ひます。

津左衛門　精々咄しは仕て見ましよう。

如成如不成語氣妙。

出婦人來一點綴。亦不可少光景。此是根岸別業又出温泉一點綴。

高井　何分よろしうお願ひ申す。

津左衛門　善は急げと少しも早く。

高井　左様なら是でお暇致しまする。

ト合方に成り。高井よろしく。挨拶を仕て玄關より出る。津左衛門も挨拶して立上り。奥へは入る。高井花道へ懸る。向ふより高井の妻お驕。好みの形り人力車に乗て出て來る。花道好き處にて行合ひ。

お驕出懸て來たか。

驕　内に居ても氣が揉て成りませぬゆゑ。樣子を聞に出て來ました。

高井　丁度よかつた段々骨を折て。少し咄しが好い方に成て來た。夫に付て咄しも有り。亦認めねば成らぬ物もあるから。一寸磯部の温泉の二階を借て咄さうか。

驕　夫がよう御座りましよう。一所に乗てお出で成さいましナ。

高井　夫じやァ。吾も乗て往かふか。

ト是にて車夫車を振向る。高井一所に乗る事有て。

サア磯部の温泉まで遣て呉れ。

車夫　畏りまして御座りまする。

不レ待ニ天知地知ヲ。那ノ敵手在リ此處ニ。久シク等ツレ之ヲ。擲テ二十萬ヲ買フ人望ヲ。亦是レ可レ人。

車夫ゝの車を牽て向ふへは入る。合方しつとりとして。上手の二重の内より金尾出で來り。

金尾　吾が聞て居るとも知らず。惡い事は皆な吾一人りに塗付て。自分一人りで好ひ子の顔をするとは。卑劣極る了簡方。いま〳〵しい奴だ。併し那の吝嗇坊が廿萬圓を還すとは能〳〵困たと見へるわい。好し〳〵書面を認て吾の方から先を超し。讓れた廿萬圓悉皆還して是迄の罪は高井に塗付て。誤て仕舞が勝だわい。廿萬圓も惜いものだが。人望には替へられぬ。高井に鼻を明してやらう。

ト又上手の二重へ上り。障子を明けると。向ふ誂への唐紙上手へ寄て机に硯筆紙抔載せ。椅子を立ある。金尾此椅子に懸り。机にて書面を認る事よろしく有り。唄に成り。向ふより前幕の半次郎。羽織着流し帽子蝙蝠傘をつき。出で來る。少し後より前幕のお千代。好みの扱へにて。人力車に乘り出で來り。花道にて。

千代　アヽもし。そこへお出成されますのは。半次郎さんでは御座りませぬか。

ト是にて半次郎振かへり。

半次郎　あなたは。金尾のお千代さん。那處へお出で成されまする。

千代　伊勢屋津左衞門さんの御別莊へ。參りますので御座りますが。何處の方でありますか。あなた御存じて御座りまするか。

半次郎　アノ直に向ふで御座ります。私も今參る處ゆゑ。御一所に參りましよう。

是等ノ光景在リ俳優當ニ多少ノ用意處。

一語一句自然ノ溫藉然。不ニ是猥褻的。

事出ニ意外ニ最モ妙。

胸中各有ニ所ニ蓄。並ニ未ダ道破セ。

半次郎先に立ち。お千代の車よろしく本舞臺へ來り。お千代車より降りて。

千代　那處で暫く待て居てお吳れよ。

車夫　畏りました。

ト車夫。車を牽て下手へは入る。此內半次郎玄關より上り。

半次郎　サア此處へお上り成されませ。

是にてお千代二重へ上り。兩人眞中の二重へ來り。

誰ぞ取次を賴みたいものじや。

トあたりを見廻し。上手の方を見て金尾と顏見合せ。

ヤ金尾樣。

金尾　半次郎殿。

千代　オヤお父さん。どうして爰に。

ト驚愕間の惡きこなし。

金尾　お千代好ひ所へ來て吳れた。實は迎ひを出さうかと思て居た所。

千代　夫はよう御座りました。私は又呵れるかと思つて。胸が悸々しました。

ト此內金尾眞中の二重へ來り。

冷煖俄ニ變ズ。親踈忽チ換。

前面許多ノ撫猫ノ聲音。全ク爲ニ此ノ一句ノ。

又喜又懼。

父子情愛。理ニ當ニ如ク此。

金尾 何の吾が呵るもので。定めしお祖父さんに。逢ひに來たので有らう。吾の爲にも大事の親。其親を大切にお前の優い志。賞てこそすれ何の呵らう。

千代 さうして。私に何ぞ御用が御座りますか。

金尾 用と云ふのは。此書面お前の手から。お祖父さんに上げて呉れ。

ト渡すお千代手に取て。

千代 上げる事は上げましようが。悪い事でも書ては御座りませぬかへ。

金尾 決して案じる事ではない。讓受た財産を。殘らず隱居へ返納して。是迄の不孝を誤るのじや。

千代 エヽ。そんなら。アノ本當で御座りますかへ。

金尾 何の娘に嘘を付う。そこで讀で見れば。解るのじや。

千代 さう云ふ事なら。お祖父さんに私が御屆け申ましよう。

金尾 さうして。今迄ハ惡う御座りましたと。お前からもお詫をして呉れ。

千代 アイ。承知しました。

金尾 半次郎殿も共ゝに。どうぞ執成をして下され。

半次郎 宜しうお咄し申で御座りましよう。さうしてあなた樣にハ。

金尾 今更直にも逢ひにくゝ思ふにより。矢張此座敷に隱れて娘の安否を聽た上。樣子に寄て出懸けます

老翁口氣宛女溺愛光景極好。如眞。見其悔過謝罪者。亦是護父過孝女。老翁之怒不是因苦兩婿而望其改過耳。

る。

千代　そんならお父さんは此お座敷に。

金尾　何分うまく遣つて呉れよ。

ト早き合方にて。金尾よろしく上手の二重へ上り。障子を立切る。引違へて奥より。前幕の商右衛門。羽織着流し。好の拵へにて出で來り。

商右衛門　ナヽ。半次郎か。お千代も一所に。よう來て呉れたな。

半次郎　昨日お別れ申た切りゆゑ。一寸御機嫌を伺ひに參りました。

商右衛門　ナヽ。さうかさうして。お千代はよく內が出られたな。

千代　何日に無い。お父さんが御機嫌で。其上是迄はお祖父さんを麁末にして。濟ぬ事を致しましたと。能くお詫を申て呉れと。申遣つて參りました。

商右衛門　そんなら。那の爲平が吾に誤つて呉れと申たか。

千代　さうして。此書付をあなたにお渡し申すようと。言ひ遣つて參りました。どうぞ御覧下されませ。

ト金尾の證書を出す。商右衛門受取て。思入り有て。證書を開き讀む事有て。

商右衛門　コリヤ。爲平も餘程困つたと見へるわい。併しまだ了簡は相成らぬ。

千代　そんなら。まだ御機嫌は直りませぬか。

言辭溫和自有相愛之情。

宜見其與女孫人品不同處。

滑稽語左妙。

商右衛門　畢竟あれが身の爲ゆゑ。容易な事でハ免されぬ。

千代　コリヤマア。困つた事に成りましたナア。

ト お千代當惑の思入り。

半次郎　何れ私が雙方のお心持をお聽申し。又計ひ方も御座りましよう。餘りお氣をお揉成されぬがよう御座ります。

千代　半次郎さん。何分あなたをお頼み申しまする。

ト 唄に成り。向ふより高井お驕二人り出で來り。直に本舞臺へ來り。玄關より内を覗いて。

高井　隱居が那處に居るからハ。吾が直に逢てハ。どうも無味い。吾ハ爰に隱れて居て。樣子に寄て出懸るから。お前一人りで遣て見て呉れ。

驕　夫じやア。一人りてやつて見ましようが。何だか極りが惡いねい。

高井　極りが惡いといつて。今更どうも仕方がない。どうぞやつて見て呉れ〳〵。

驕　清水の舞臺から飛下る積りで。出懸けましようよ。

高井　どうで。皮切りといふものハ。つらいものだ。辛抱してやツて呉れ。

驕　アヽ。何だかどうも間が惡いねい。

ト 誂の合方に成り。お驕おろ〳〵と玄關より上り。間の惡きこなしよろしく。二重の下手に少く成

豈夫人即有此等不得已時。

一喝妙。

仍有侮慢氣。

若出凡手老翁得此書忽喜許之。今即不然。所以爲妙。

欲排去同黨獨居其功利嘴怜舌毒極刻極。

て蹲る。

商右衛門　そちハ。お驕ドやナ。何しに參つた。

驕　今日ハ。やどの名代にあなたへ。お詫に上りまして御座ります。

商右衛門　何じや詫に來た。口先き斗りでチヤホヤと。吾を喝に來おつたか。其手ハ食ぬぞ。

驕　イエ〱口先き計りでは御座りませぬ。心から底から本當にお詫を申す其證據は。是を御覽成されて下されませ。

ト懷より證書を出して。商右衛門の前へ出し商右衛門取て開き見て。

商右衛門　コリヤ讓渡した財產を。殘らず返却するといふ文體。今お千代が持參せし金尾が詫書も此通り。財產を戾すと有るが。コリヤ二人り言會せて。こんな事を致し居つたナ。

驕　イエ〱。決して言合では。御座りませぬ。此事は金尾さんに。御相談を致したとて。慾の深ひお方ゆゑ。どうて心は合ひませぬ。やどゝ二人り切て。相談をして極た事。何で金尾さんがそんな氣にお成りなさるもので御座りましよう。お察し成つて下さりませ。

商右衛門　夫でも。現在此千代が今持參した此證書。其上兩人は顏も出さず。女二人り同ド樣に。同じ證書を持て來るは。コリヤ拵へ事に違ひあいわい。

驕　言合さねど二人りが二人り。同じやうに揃つて見れば。さう仰しやるも御尤。其言合せの無いと云

極口分疏。猶將貴紳交際為解。野性未改。

饒舌婦人分疏得繁煩。面目可惡。

ふ。慥な證據は金尾さんはお出は御座りますまいが。やどでは此處へ參て居りまする。

商右衛門　何に高井が此處へ來て居るとは。

ト此時下手の玄關前にて。

高井　先刻より是に居りまする。

ト高井ツカ〳〵と上り。お驕の下手へ宜しく住ひ。

扨是迄は段々と。あなたを粗略に致しました段は。何とも申分けも無き次第。去りながら僕に於ては心底から。舅を粗末に致す抔と。毛頭左樣な心は御座らぬ。貴顯紳士の交際が。追々廣く成るに付。何分此身に寸暇を得ず。お拘ひ申て居られぬゆゑ。ソコハ女の役なれば。吾に代て。舅殿のお世話を申す樣と。兼てお驕に申付け置ましたに。何か親子の心安立とか。申すので御座りましよう。是もあなたをお拘ひ申さなんだとは。イヤ實に濟ぬ事で御座りました。

驕　假令。やどから言ひ付らずとも。お父樣の事ゆゑ。どんなにもお世話が仕たいと。思は無い時は御座りませぬが。やどでは兎角留主勝で。奥から座敷から臺處の事まで。私一人りで致す事。お客樣が來れば。挨拶もせねば成らず。其應對斗りでも。實に留主番の一ト役で御座ります。夫にモウ女の用と云ふものは。是が斯といふしつ立つた用もなけれど。朝から晩まで何や蚊や。少しも身體に隙は無く。一人りであくせくして居りますので。あなたの方はつい後廻しに成て。濟ぬ事では有るけれど。他人でハ

不是謝過悔
罪反是叙勞
説功。
委罪他人。圖
自居無過之
地。
把自己十分
釐畢然後欲
獨占其利。
故作詐語。
更進一層益
深其毒。

無し實のお父樣の事。大目に見て下さるで有らう杯と。手前勝手の了簡違ひから。ほんにもう心にも無いお麁末を致しました。どうぞマア御免成されて下されませ。

高井　只今お驕が申通り毛頭あなたを疎略に致す心底は御座りませぬ。是と申すも。爲平が無性にあなたを邪魔にして。朝夕つらく當り。言語同斷の不孝を爲し。あれの了簡が惡いばつかり。僕までも同じやうな了簡かとあなたに思はれましたのも。皆爲平のお庇にて。實にいま〱しい奴で御座ります。是からしては爲平に拘はず。あなたのお世話は。僕一人りで引受けまして。何樣にも致しまする。どうぞ御機嫌をお直し成されて下さりませ。

商右衛門　夫では。今迄の愛想づかしは全く爲平が惡いので有たか。

ト是にてお千代さうでは無いと。言はふか言ふまいかと。色々氣を揉む事宜しく有り。

高井　イヤモウ。惡いの何のとあんな剛欲な。不實な者は世間にたんとは御座りますまい。

ト此時上手の屋體より。爲平づか〱と出で來り。

金尾　人が聞て居るとも知らずいゝ加減な嘘を言ふがよいわい。

高井　こなたは爲平。

驕　いつの間に。

金尾　先刻から那の座敷に居て。こなた衆二人りの口先の卑劣極る。嘘八百を殘らず那處で聞て居ました。

兩個各自摘發。益分疎。益醜惡。
一紙證書。欲籠絡老翁。
恐爭至此。醜不可言。
大聲喝破。豈惟罵兩箇夫婿。世或有不忍聞其言者矣。
極力剝奪。極厚鐵面皮去。

○イヤ隱居殿今の高井の申事は皆僞り。僕に於ては始めから。あなたを大事に思ふ計り。ナンノ粗畧に存ドましよう。夫なる證書を御覽下され。僕が赤心御賢察を願ひます。

高井　イヤ〳〵。夫こそ噓八百。此六ケ月彼が方に御逗留中の扱ひは。御存ド知らるゝ通り。此が何より實地の證據僕が心中御推察を願ひます。

金尾　イヤ何卒僕が申す事を。

高井　イヤ〳〵此方の其證書。

金尾　得と御賢慮。

高井　イヤ〳〵さうは。

ト兩人爭ふ。

商右衛門　エヽ。喧しい靜に致せ。當時社會に其名を知られ。立派な身分に成りながら。腹の中は塵溜同樣。イヤ鼻持もならぬ汚穢根生。今財産を還すと云ふが心底詫る心では無く。口と心の裡腹を社會へ吹聽されるが否さ。苦しまきれに此やうな。證書を吾に出したとて。こんな甘口な才覺に。一杯食う吾では無いぞ。コレ財産を讓りてから。此方今は頓て倍增の。立派な身分に成て居やう。夫見ろ二十万圓づゝ還したとて。明が日困る氣遣ひない。まだ其上に己れ一人り好子に成らうと。現に相婿の間柄で己れの罪を塗付け合ふて。我が非を隱す。輕薄追從聽く耳は持ぬ。二通の證書は双方へ返す。どつとゝ持

末向最妙。

商右至此似不解慈愛者殊不知末段一着有多少意味。

冷不說至冷絕熱不說至熱極未可言眞冷熱也說至眞冷熱。然後忽然變一路來便妙。

て早く歸れ。吾は是から部屋へ往て。諸新聞へ出す投書の草稿に取懸らう。昨日に易る今日の身と。日本晴れがしたやうだわい。

ト證書を投げ出して立上る。

驕　そんなら。どうでもお父樣は。

千代　御機嫌は直りませぬか。

商右衞門　惡い夫や親を持たと。兩人共に諦めろ。

驕　そんなら。

千代　どうでも。

商右衞門　再び顏は合さぬぞ。

ト屹度いふ。是を唄に成り。商右衞門よろしく思入り有て奥へは入る。

コリヤ願の繩も。

千代　切れ果たか。

ト兩人じつと思入り。高井金尾は腕組をして。沈と思案して居る。合方きつぱりと成り。高井金尾後悔の思入りよろしく。

高井　ア、惡かつた濟ぬ事をした。廿萬圓還したとて。明日困ると云ふでは無し。心底詫る心でないか

是實不可如何光景。遂極路盤勢不得不出此也。

此論極有至理。若待為人所摘發然後改之是不為摘發則不改也。其為害深矣為禍大矣。

金尾是一個商紳。自有商紳摸樣。所云為人所厭棄等句。便是。

高井是一個官人自有官

ら。隱居がきかぬも無理ではない。

金尾　どう考へても。一々皆な此方が惡るかつた。イヤナニ高井殿。廿萬圓の其外に。是迄殖した財産から。家庫殘らず隱居に還し。僕は是から家出致せば。貴兄は跡にて僕の事を。どんなに惡く仰られても。少しも恨みとは存じませぬ。是迄の罪は僕が身一ッに引受けますから。隱居にお詫を成され。僕は決心致して御座る。

高井　さうして此方は。どうする了簡。

金尾　是迄社會の人望を。取て來たのは皆僞り。此身に積だ徳がなければ。所詮身に付く事は無いと。心付て見ますれば。假令隱居が此事を。世間へ吹聽されずとも。何日か一度は世の人に。見捨られるに違ひは御坐らぬ。夫ゆゑ僕は決心して。今日限り家出なし。何れへ成りとも有付いて。實際此身に徳を付け。新規修行の功を積で。再び眞の人望を。此身に付る所存で御坐る。

高井　僕とても其通り。只今決心致した所。是まで虚名を世に賣つて。よいと思つて居た事に。氣が付て見れば。何として。罪をそなたに塗付て。一人りおめ／＼詫をして。假令隱居が聞くにもせよ。僕の心がゆるしませぬ。是より直に辭表を出し。一生懸命修行して。眞實社會の爲に成る。眞の人に成る心。何卒御身は跡へ殘り。舅の世話をお頼み申す。

金尾　今更何と此儘に。おめ／＼好い子に成て居られましよう。跡へ殘て舅の世話は。是非とも貴兄へお

人ノ摸樣。所レ云其心不レ許等ノ句。便チ是。此段文字沒ナル甚麼ノ趣味。只是レ與前面反應ス。

阿驕ノ言語自ラ年長的婦人。不下與二阿千代一同上。

阿千代ノ語。如下不レ出二於口一者。是閨女摸樣。

前面ノ狡譎點計。俄然一變。現ニ出箇悲愴慘澹光景チ此

頼み申す。

高井　イヤ〳〵夫は御身の役。僕は决心致して御坐る。

ト兩人爭ふ事。よろしく有り。お驕つく〳〵後悔の思入有て。

驕　お二人樣の今のお詞。お聞き申て私も。惡い事を仕たと氣が付ました。是までの事は。あなた方斗りで無く。皆私が惡いから。起つた事で御坐ります。是から私も共々に身を粉にしても。眞實の眞の人と成た上。ほんまにお詫を仕ましやうから。一所に連て行て下さりませ。

高井　イヤ〳〵家出をすれば。一文なしお前を連れては迚も往かれぬ。跡に殘る親の世話をするのが夫が女の役。

驕　イエ〳〵お前樣が後悔して。一人りて難儀を成さるのを。どう外に見て居られましやう。

千代　お父さん。どうぞ私も御一所に。連て往て下されませ。

金尾　高井さんの言る丶通り。殊にお前はお祖父さんの氣に入りで。是まで少しも惡い事のない優しい氣性。態〻患難するには及ばぬ。お祖父さんにお願ひ申て。半次郎殿と夫婦と成り。親に代て孝行するがお前の役じや。何分是は親が頼みじや。

高井　お驕もどうぞ。其氣に成て親御を大事にお世話をしろ。

驕　夫では一所に往れませぬか。

等結搆不可必無之也。

前段層々過來、終至此。滿幅愁雲不見一線日光。以襯出後文。

此段或嫌於冗長、然不如

千代　さうして何日頃。お歸り成されまする。

金尾　何日と云つて當は無い。生れ變て一ト修行辛抱をする事なれば。

高井　五年立て歸られるか。十年立ても歸られぬか。長ひ分れと成らねばならぬ。

驕　エヽ。そんなら是からお別れ申して。

千代　いつ又御顔が見られるか。

高井　世に無い者と。

金尾　思て呉れろ。

ト兩人ホロリとする。

驕　コリヤマア情ない事に。

千驕　成りましたナア。

ト兩人なき落す。

高井　夫も是も今までの。吾の心が惡かつたゆゑだ。どうぞ諦て免して呉れ。

金尾　惡い親を持たが不運と。コレお千代どうぞ堪忍して呉れ。

高井　長居を仕るは未憐の至り。直に是から出懸るぞよ。

金尾　僕も一所に往ましよう。

此抹殺去後文無力。

一面是夫婦。一面是父子。兩雙淚涙。四箇面容。又是異樣光景。

驕　さうして是からお二人りは。

千代　何れへお出で成されまする。

高井　何處と云つて當はない。

金尾　內を出てから考へるのだ。

驕　夫ではどうでも。

千代　此まゝに。

ト兩人すがり付き。高井金尾ぶつと引寄て。顏を見せ。名殘りの摸樣よろしく。トヾ高井金尾思ひ切りたる心にて。

高井　お父さんを賴んだぞよ。

金尾　さらばだ。

ト兩人振り離して。ぶはく〱と花道へかゝる。お驕お千代泣伏す。此時奧より商右衞門津左衞門出で來り。

津左衞門　アヽコレ。お二人りとも暫くまつた。

商右衞門　言ひ聽せる事が有る。一ト先づ是へ立歸れ。

ト是にて。高井金尾づか〱と戻り。元の處へ住ふ。

滿場悲風忽化爲一幅慈雲。言語亦溫藉和融。使看者自然平其氣處妙。

二人りの者の心得違ひ。此儘に置く時は。何日か其身の破滅と成り。社會へ恥を曝さにや成らぬ。今の心をば直したいと。心にも無い愛想づかし。親子の緣を切ると言ふたも。亦新聞へ出すと言ふたも。實は僞り。二人りの者に心底から。其身の非をば知らせん爲。よくぞ改心致したぞ。

津左衞門　商右衞門殿に。五萬圓の資本が。有ると言つたも嘘御身達二人りの身の爲を。思つたゆゑの拵へ事。

商右衞門　今の心に成つたなら。本の通りの婿舅。もう出で行には及ばぬぞ。

高井　そんなら。今迄のお腹立は。我〻二人りの爲を思ひ。

金尾　成された事で御座りましたか。難有う。

兩人　御座りまする。

驕　さうとは知らず。最前から餘り氣強いお父さんと。お恨み申した勿體ない。

千代　御堪忍成されて下さりませ。

高井　仇を恩ある舅殿が此計らひ。

金尾　津左衞門殿の御深切。何と御禮を申さうか。

高井　謝するに詞は。

兩人　御座りませぬ。

兩個財産。老翁收去。殊欠體面。無箇下落。若兩個循舊領收。一篇結搆。全歸無用。作者一片苦心。如此始結。始得妥貼。

凡演戯小説不叙男女情事。殊嫌於寂寞。此編元係

津左衛門 斯互ひに打解れば。作者も鼻が高いと云ふもの。

驕 一時に心が晴〳〵と。

千代 こんな嬉しい事は御座りませぬ。

高井 此上は私方の財産。殘らず返却なし。舅殿を始め我〻共の共有物となし。尚ほ此上に蓄貯を增加し。御國の爲を計りましよう。

金尾 僕とても矢張御同意。誰彼なしの共有物に備へますれば。舅殿宜しき様にお計らひ下され。就ては銀行破産して身分の定らぬ半次郎殿。僕が娘の此千代がどうか婿に貰ひ度。舅殿のお計らひにて。此儀調ひまする様。偏にお願ひ申します。

商右衛門 ソリヤ此方より願ふ所。半次郎も來て居れば。是へ呼出し申聞かせるで有らう。コレ半次郎を是へ呼で參いれ。

奥にて半次郎 只今夫へ參りまする。

ト奥より半次郎忠助付て出で來り。よろしく住ふ。

商右衛門 そなたを。今日から金尾方の養子として。お千代と夫婦にする積り。別に否やは有るまいナ。

半次郎 何しに否やが御座りましよう。只何事も伯父様次第。宜しう御願ひ申します。

商右衛門 夫で萬〳〵調ふたと云ふもの。お千代は定めし嬉しからうの。

財產予奪事。不輸到間情。作者故現出兩個佳人才子以點綴之。亦何妙也。半二阿千情事。濃致纏綿。不將正筆寫出。將側筆淡々寫來反覺多少趣味。結了老僕。

婦人好學問。如此說去便好。

千代 ハイ。
ト恥かしさうに顏を隱す。
高井 忠助にも。是まではつらい憂目をさせましたが。
金尾 是からは粗末にせぬから。どうぞ勘忍して呉れよ。
忠助 どう致しまして。私はどうでも宜しう御座りますが。御隱居様とあなた方のお心が解まして。こんな嬉しい事は御座りませぬ。
高井 雨降つて地固ると。斯して心が解あへば。
金尾 親子夫婦の其中も。名のみあらぬ親睦會。
商右衛門 開化の二字を誤解して。不實不孝を好い事として世を渡る。
津左衛門 人には何より好い手本。
半次郎 外國人に聞れても。片身が廣いと申すもの。
驕 是からしては身を愼み。出過ぎた女と云はれぬやう。
千代 習ひ覺へた學問も。夫と見せぬが女の道。
忠助 是でこそ。日本の自慢に言た君子國。
高井 廣く社會の交際も。

各人有各人的言語以作總結。本篇以佛人演戯爲根據。然我人情自然不同。若一直寫去。殊無趣味。且不適我人情。結構雖妙。不可以爲演戯。作者意匠最苦處。在能運用變化換骨奪胎。覽者其留意於此。

耕雨小史評

金尾　卑屈を脱し眞實に。

商右衞門　舊習頑固を一洗して。

津左衞門　浮薄に流れし人情を。

半次郎　恢復するも御國の爲。

驕　眞を盡せば自から。

千代　世に人鬼は無いものを。

忠助　そこで三千餘萬人。

高井　虚飾にあらぬ文明國。

金尾　進む開化の。

ト木のかしら。

皆〻　いさはしやナア。

ト皆々ひつぱりよろしく賑やかなる誂への鳴物にて

幕

短編小説明治文庫第六編終

明治廿六年八月三十日內務省許可
明治廿七年一月二十日印刷發行

明治文庫

定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十二册前金	壹圓六拾錢
廿四册前金	參圓拾錢

郵稅一册六錢

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　杉原次郎
京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

印刷所　杉原活版所
京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

版權所有

大賣捌所

東京	東京堂
仝	水野慶次郎
仝	東海堂
仝	嚴々堂
仝	信文堂
仝	石川商店
仝	上田屋本店
大坂	盛文館
仝	吉岡平助
仝	柳原喜兵衛
仝	梅原亀七
仝	岡島新聞舗
仝	平井新聞舗
仝	中村峯雄
京都	東枝律書房
仝	田中治兵衛
名古屋	川瀬代助
仝	新文舍
仝	片野東四郎
神戸	熊谷久榮堂
神戸	舟井新聞舗
仝	吉岡支店
仝	船山堂
熊本	長崎次郎
鹿兒島	吉田幸兵衛
長野	西澤喜太郎
松本	水琴堂
仝	高美書店
四日市	伊藤善太郎
津	河島九右衛門
岡崎	愛友舍
濵松	谷島屋源三郎
仝	林新聞舗
沼津	蘭契社
甲府	柳正堂
横濵	丸屋書店
仝	里見亭太郎
鴻ノ巣	長島為一郎
東金	多田屋本店
千葉	仝支店
佐倉	吉田德兵衛
佐原	朝野利兵衛
水戸	川又銀藏
大津	澤一二郎
仝	太田支店
上諏訪	宮坂日新堂
小諸	廣文堂
飯田	皆川文星堂
前橋	煥乎堂
宇都宮	內山港三郎
枥木	宮川庸三郎
平	清光堂
白河	奧村書店
福島	上野屋彥太郎
仙臺	木村文助
仝	佐勘書店
石ノ巻	山口德之勳
盛岡	佐藤庄兵衛
仝	便益堂
弘前	野崎九兵衛
青森	鎌田商店
山形	八文字屋書店
仝	牧野德太郎
米澤	素月長平
秋田	成見清兵衛
仝	鈴木秋穗堂
横手	大澤忠四郎
増田	東海林書店
酒田	鈴木喜八
福井	品川太右衛門
武生	安立庄三郎
金澤	雲根堂
小松	宇都宮源平
富山	清明堂
高岡	學海堂
新瀉	櫻井產作
長岡	覺張治平
仝	目黑十郎
高田	室直三郎
仝	高橋書店
水原	西村六平
松江	川岡清助
岡山	武內彌三郎
姫路	朝榮社
廣島	松村善助
山口	宮川臣吉
和歌山	平井文助
德島	阪井萬吉
博多	積善館支店
仝	森岡商店
久留米	菊竹儀平
大分	山川正三郎
長崎	虎與號書店
仝	鶴野書店
佐賀	河內汲古堂
函館	魁文堂
札幌	聚文堂
仝	野前長發
仝	小鹽白治堂
仝	萱間左右太

短篇小說

明治文庫

◉第壹編

巖谷漣山人著　武内桂舟密畫

◎辻占餡　◎けなげさ　◎白面鬼　◎山時鳥　◎花の旅

◎秋の蝶　◎黒衣魔　◎梢上月　◎京自慢

◉第貳編

富岡永洗密畫

◎川上眉山著　雪折竹

◎村井弦齋著　福の神

◎廣津柳浪著　佛魔一紙

◎嵯峨の屋著　薄命の鈴子

◎石橋思案著　姥櫻

◎江見水蔭著　驚く鷗

◉第參編

江見水蔭著　武内桂舟密畫

◎劍客　◎痴癖太守　◎畫師　◎信天翁

◎初嵐　◎骨武者　◎斷弦　◎初楓

◎故家水　◎わかれ霜　◎一夜の宿

◎漁郎　◎畫師の妻　◎雲烟過眼

◉第四編

小林永興密畫

◎幸田露伴著　縁外縁

◎巖谷漣著　媒介人

◎多田漁山著　新學士

◎川上眉山著　風流狂言記

◎田山花袋著　隅田川の秋

◎嵯峨の屋著　庭の敎子

◎渡部乙羽著　都の土産

◉第五編

山田美妙齋著　三島蕉窓密畫

◎みみずばれ　◎月花目立て　◎頼朝の墓　◎大龍王　◎古切手　◎ゐなか娘　◎春の花鳥　◎戸隱山紀行

◎曙の春　◎紅墻記　◎雪折れ竹　◎田舍聖者　◎くされ縁　◎母のなさけ　◎鴉の道行　◎都門雜興

美妙齋
新脚本

村上義光錦旗風

全一冊

洋裝頗美本
富岡永洗密書入

番組

壹番目　玉堂恨話美人禪（三幕）……悲劇
中幕　村上義光錦旗風（壹幕）……悲劇
貳番目　忠烈百錬鐵（六幕）……悲劇
大切　通達磨（常盤津連中）……所作

當る新年一月一日より惣幕出揃賣初仕候

或る方様の御勸めならで、自ら名乘る彌次馬が、賣出す時も午の年、駈出者の名も緣と、尾筒にあらぬ筆筒を、硯の海に驟や、横紙破りの拙案は、地乘の足らぬ初鞍と、御許し爲されて孰れも方、先一鞭を中てゝ給べ。中てると云ふも亦吉兆、一昨年からの修業にて、稍劇道の内幕を、知つたと云ふは手前味噌、附の打方木の入方、幕は斯して斯切ると、唯其位を知つただけ、素面では爲らぬと景清擬き、翻り附たる鐙皿、趣向の手綱捲繰て、孰れも御覽ハイどう〳〵。梨園の馬場の乘初に物せし作は前後四種、是を一座の一日分、御評を願ひ揚幕と、初見參の御挨拶、筋の次第は此後の博文館の口上看板……作者

◎各様益御機嫌克恭悦賀候扨今回美妙齋氏の新脚本御覽の外題にて出版仕候間何卒電覽被遊度奉願候右脚本草稿のためには同氏自身一昨年來劇道の内部に身を投じ諸種の經驗を經し次第尋常脚本外新機軸を出し俳優の所作振事臺詞述方大小道具鳴物衣裳切物等一切其脚本必要の事件即ち脚本より演劇に移る迄の順序の心得は一一幕毎に示候物にて決て尋常脚本の比に非ず充分完全なる脚本の模範、劇道局外者の夢想の無之事實を擧候へば其面白きは譬ふる方無之と奉存候特に一座一日分を一冊とせしは空前の工風にて三樣の悲劇三樣の特色有り美人禪村上義光の時代物共に正史の事實を枉げず百錬鐵の世話物巧に今日の時弊を穿ち加之大切通達磨は同氏得意の新作歌曲况哉又挿畫及表紙は同氏久く工風を凝せし物錦上の花花外の月甲午第一の壯觀に有之候段前以而御披露如此御座候恐恐謹言……發兌元

春夏秋冬

毎編讀切　上等洋紙（一冊數百六十頁）　密畫挿入　雅裝美本

四季壹回發兌　正價一冊拾五錢　郵税一冊四錢

春の花、夏の山、江月、暮雪、天地の美を鍾め、宇宙の妙を極むるに擬し茲に**春夏秋冬**と題し、四季毎に各家の新作數篇を綴れる、小説を發刊せんとす。羅する所は偏に當代知名の大家のみに非らず、後進の才子、未顯の俊髦に及び、時に懸賞の方法を以て、普く傑作を募り、之を江湖に紹介すべし、此等秀才の錦心繡腸より織成す文辭の美は、天地宇宙の妙と相對して、特に精華絢爛たらん、抑も又後進を誘掖して、深山幽谿を拓き、名花美玉を世に出さば、斯文進歩上の一功德たるべきかな。

◎第壹回

競馬（くらべうま）

（桂舟、永洗、永興、丹陵、廣業、年方、國松、柳塢諸氏密畫）

廿七年一月二日發賣

本篇は夙に文壇の一方に雄視して、梁山泊と呼ばる硯友社の尾崎紅葉、川上眉山、巖谷漣、石橋思案、江見水蔭、中村花痩、渡部乙羽の七氏が**午の年**に因みて、結構意匠を馬に寓し、各妙想奇文を闘はしたる新作七篇を聚めたり。

松濤軒長秋先生編　長谷川雪旦密畫

江戸名所圖繪

（製本既成）即日送本

全部廿册　木版和装大本 上等日本紙摺
正價金五圓　通運料 金五十錢
豫約實價金四圓

岡山鳥先生編　長谷川雪旦密畫

江戸名所花暦

（製本既成）即日送本

全部四册　木版和装大本 上等日本紙摺
正價金四拾錢　郵税 六錢
豫約實價參拾錢

齋藤月岑先生編　長谷川雪旦密畫

東都歳事記

（製本既成）即日送本

全部五册　木版和装大本 上等日本紙摺
正價金五拾錢　郵税 八錢
豫約實價四拾錢

●豫約期限は三月廿八日限り●御注文は總て前金とす●着金即日送本す●期限後は正價に復す

名所圖繪は齋藤氏三世の刻力に成り、花暦は岡山鳥の編輯する所、歳事記も亦齋藤月岑の選に係かれり、齋藤氏は世々神田の里正にして篤學精研、殊に江戸の地理風物の事に至ては、精博其右に出づるものなし、岡山鳥亦往時の一董孤たり、而して三書共に書は當時の名手、長谷川雪旦の筆に成り、精緻詳密、最も心血を注ぎし所、傍ら以て絶好の書帖に充つべし、地理風俗歴史の資料たるは論なく、名所舊跡を探らんとするもの、亦此書を措て他に津梁を問ふべからざるなり、而して名所圖繪の如き希世の珍書なるに拘らず、版刻久しく絶ゆ、特に江湖の遺憾とせし所なるを、此度弊館原版を購入して、印刷することゝしたれば、續々購讀の榮を賜へ、

圖書出版
東京博文館

6